万木沢B遺跡

上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

万木沢B遺跡

上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

1　上信自動車道吾妻西バイパス遺跡遠景　空中写真(中央を流れる吾妻川と左岸の調査された主な遺跡)

口絵 2

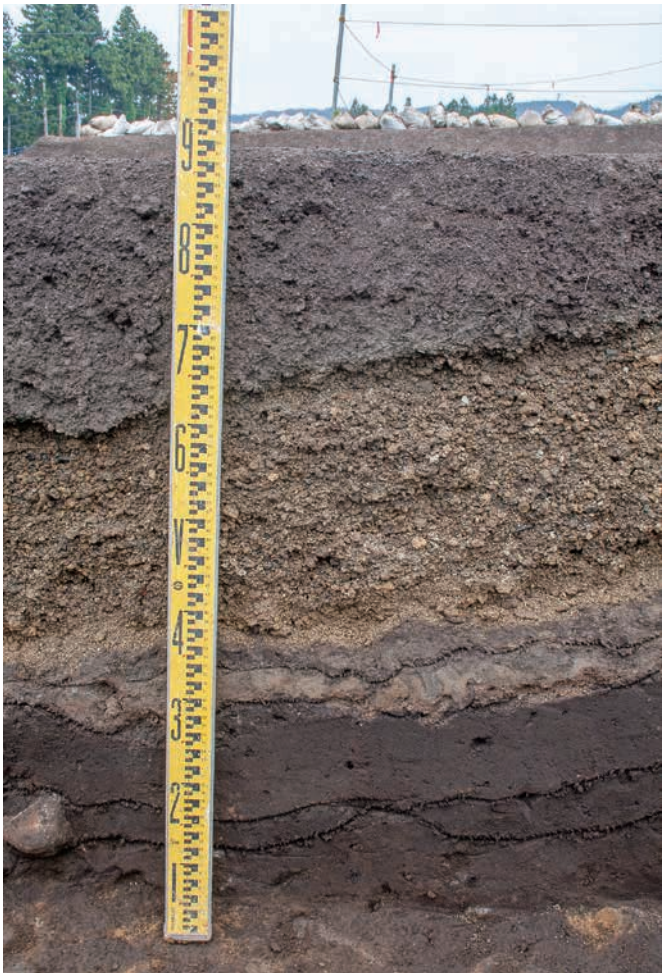
1　発掘調査前の万木沢Ｂ遺跡　空中写真　（右側は調査中の唐堀遺跡）

2　遺跡全景　空中写真　東上空から

1　As-Kkに覆われた古代畠と竪穴建物内に堆積したAs-B・As-Kkの各火山灰

2　遺構確認時の２号竪穴建物

3　４号竪穴建物土層断面



4　竪穴建物内に堆積したAs-Kk(上)とAs-B(下)

口絵 4

1　1 号配石　検出状況　全景　南から

2　1 号配石　上部の大型礫と下部の埋設土器　南から

3　1 号配石　下部の埋設土器出土状況　南から

1　10号配石　検出状況　全景　西から

2　12号配石（右上）と13号配石（中央から手前）　検出状況　全景　東から

序

上信自動車道は、群馬県渋川市の関越自動車道渋川伊香保インターチェンジと長野県東御市の上信越自動車道東部湯の丸インターチェンジとを結ぶ総延長約80㎞に及ぶ自動車専用の地域高規格道路です。この事業は、群馬県の「はばたけ群馬・県土整備プラン」で示された「７つの交通軸構想」のうちの「吾妻軸」に属し、関越自動車道と上信越自動車道とを結ぶ新たな交通体系として、吾妻地域の活性化に寄与することが期待されています。そして、この上信自動車道の整備区間の一つである吾妻西バイパスは、東吾妻町大字厚田から東吾妻町大字松谷に至る約７㎞の区間で、現在、事業完了を目指して鋭意進められているところです。

本書で報告します万木沢Ｂ遺跡は、先に刊行された四戸遺跡の隣接地で平成29年から30年にかけて当事業団が発掘調査を実施しました。その結果、縄文時代から古代にかけての竪穴建物や掘立柱建物、土坑、そして畠といった多くの遺構が発見されました。また、中世の土坑や畠も見つかっています。中でも、縄文時代末葉から弥生時代初頭にかけての遺物が多量に出土し、県内でこれまで出土の少なかった資料が補完されることとなりました。まさに、岩櫃山を正面に望む地に、時代を越えて人々が営々と暮らした跡が明らかとなったのです。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、群馬県上信自動車道建設事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、東吾妻町教育委員会をはじめ、関係する機関や地元関係者の皆様には、多大なご指導とご協力を賜りました。本報告書の上梓にあたり、関係者の皆様に心から感謝申し上げると共に、本書が地域における歴史の解明に広く役立てられますことを願いまして、序といたします。

令和４年３月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　向　田　忠　正

例　言

1．本書は、上信自動車道吾妻西バイパス建設工事に伴い発掘調査された、万木沢Ｂ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．万木沢Ｂ遺跡は、群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島字万木沢3327-1、Ｂ3338-1、Ｂ甲3342、Ｂ3343、Ｂ3344-1、Ｄ3344-1、3344-5、Ｂ3345-1、Ｂ3346-4、Ｂ3347-1、Ｂ3348-1、Ｂ3349、Ｂ3353-1、Ｂ3354-1、Ｂ3355-1、Ｂ3365-1、3366-1番地に所在する。

3．事業主体は、群馬県上信自動車道建設事務所である。

4．調査主体は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

5．遺跡の発掘調査期間と調査面積、調査体制は、次の通りである。

調査委託契約履行期間	平成29年度	平成29年４月１日～平成30年３月31日
	平成30年度	平成30年４月１日～平成31年３月31日
発掘調査期間	平成29年度	平成29年４月１日～平成29年11月30日
	平成30年度	平成30年11月７日
発掘調査面積	8,666.48㎡(総調査表面積)	
	平成29年度	8,615.55㎡(調査表面積)
	平成30年度	50.93㎡
発掘調査担当	平成29年度	関口博幸(主任調査研究員)、佐藤賢一(主任調査研究員)、黒田　晃(主任調査研究員)
	平成30年度	関口博幸(主任調査研究員)、佐藤賢一(主任調査研究員)
遺跡掘削工事請負	飯塚・高澤・宮下吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体	
地上測量委託	株式会社 測研	

6．整理事業の期間と体制は、次の通りである。

整理委託契約履行期間	令和２年度	令和２年３月31日～令和３年３月31日
	令和３年度	令和３年３月31日～令和４年３月31日
整理期間	令和２年度	令和２年５月１日～令和３年３月31日
	令和３年度	令和３年４月１日～令和４年２月28日
整理担当	谷藤保彦(専門調査役)	

7．本書作成の担当者は、次の通りである。

編集担当	谷藤保彦
本文執筆	第５章第２節以外は谷藤が執筆した。
遺物観察・観察表	石器・石製品：松村和男(上席調査研究員)、岩崎泰一(専門調査役)
	縄文土器・弥生土器：関口博幸(上席調査研究員)、山口逸弘(専門調査役)
	土師器・須恵器：神谷佳明(専門調査役)、
遺物写真	土師器・須恵器の遺物写真撮影については谷藤が行い、それ以外の撮影は遺物観察者が行った。
デジタル編集	齋田智彦(主任調査研究員)
保存処理	板垣泰之(専門員)、関　邦一(専門調査役)

8．石材の同定は、飯島静男(地質学者・群馬地質研究会)に依頼した。

9．発掘調査および報告書の作成にあたり、群馬県地域創生部文化財保護課、東吾妻町教育委員会のご指導とご助言を得た。

10. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡　例

1．本書で使用した座標値および方位は、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第Ⅸ系)を用い、座標北で示した。調査対象範囲は、Ｘ＝61360～61520、Ｙ＝－93950～－94115の範囲に収まる。

2．等高線・遺構断面図等に記した数値は、海抜標高を示す。

3．遺構名については、発掘調査時の名称を踏襲し、遺構種別に通し番号で標記した。

4．各遺構の土層断面に記した色調は、農林水産省水産技術事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修1988「新版標準土色帖」に依っている。

5．遺構図・遺物図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。また、遺物写真の縮尺は、実測図と同一の縮尺を原則とした。

遺構図：　遺構全体図1/500　1/1000　　竪穴建物1/60　　カマド1/30　　掘立柱建物1/60　　集石1/60
配石1/10　1/20　　土坑1/40　1/60　　溝1/100　1/200　1/250　　畠1/100　1/500

遺物図：　縄文・弥生土器1/3　1/4　　土師・須恵器1/3　　土製品1/1　1/2　　石器・石製品1/1　1/2　1/3　1/4

6．遺物の掲載は、種別に限らず遺構毎に通し番号とした。

7．本書の図版に使用したスクリーントーンを以下に示す。

遺構図：　焼土　　硬化面　　炭　　粘土　　カクラン

遺物図：　黒色　　燻

8．遺構の計測は、全容が計測できない遺構について残存値(　)で表記してある。

9．降下火山灰については、以下の略号を使用した。

As-B：天仁元年(1108年)の浅間山噴出軽石(浅間－Ｂ軽石)

As-Kk：浅間山噴出軽石(浅間－粕川軽石)

10. 遺物観察表は遺構毎に掲載した。また、土師器・須恵器等観察表の凡例は以下の通りである。

1．種類

文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器(奈良三彩、灰釉陶器、緑釉陶器)、土製品等に種別している。

なお、古墳時代に黒色処理を施された土器については、その成整形から土師器とした。

その後の奈良時代中頃から出現する内面及び内外面を黒色処理された土器については、成整形から黒色土器として種別してある。

2．器種

文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて杯、椀、高杯、盤、皿、鉢、坩、器台、壺･瓶(長頸壺、短頸壺、平瓶、横瓶、提瓶、瞿)、甕、硯等の名称を使用している。なお、杯と椀の区分は、器高/口径比が大きいものを椀としているが、明確に数値化できていない。壺と甕との区分は、頸部/胴部最大径比によって区分しているが、例外として胴部最大径より頸部系径の大きい形態である広口壺と呼称しているものも存在する。

3．残存率

概ね全体の比率で「完形」、「3/4」、「1/2」等で表示している。なお、1/4以下については、「口縁部片」、「底部片」等の部位片で表示している。

4．計測値

計測箇所は、以下のように省略している。

口：口径、底：底径、高：器高、台：高台径、摘：摘径、カ：杯蓋等のカエリ径、頸：頸部径、胴：胴部最大径、孔：甑・有孔鉢などの底部に設けられた孔径等である。この他の略称についてはそれぞれ備考等に表示した。

なお、単位は㎝である。

5．胎土

記載中の表現にある細砂粒は、径２㎜以下、粗砂粒は２～５㎜のものを表す。５㎜以上は、礫と表示した。

6．焼成

土師器は、比較的硬質に焼成されているものを「良好」、軟質や脆い状態のものを「軟質」、「不良」で表示してある。須恵器は、「還元焔」、「酸化焔」で表示してある。

7．色調

農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色調帖』に準拠している。

8．特徴

成整形を中心に記載している。

11. 本書で使用した地形図は下記の通りである。

国土地理院：地勢図　1:200,000「長野」（平成24年５月１日発行）

国土地理院：地形図　1:50,000「草津」（平成11年１月１日発行）、「中之条」（平成11年８月１日発行）

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次・表目次
写真目次

第１章　調査に至る経緯、方法と経過 …… 1
　第１節　上信自動車道
　　吾妻西バイパスについて …… 1
　第２節　調査に至る経緯 …… 2
　第３節　調査の方法 …… 4
　　第１項　調査区とグリッドの設定
　　第２項　発掘調査の方法
　第４節　調査の経過 …… 6
　　第１項　発掘調査の経過
　　第２項　整理事業の経過

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 11
　第１節　地理的環境 …… 11
　第２節　歴史的環境 …… 13

第３章　基本層序 …… 19

第４章　検出された遺構と遺物 …… 22
　第１節　調査の概要 …… 22
　第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 23
　　第１項　概要
　　第２項　土坑
　　第３項　配石
　　第４項　炭化物集中
　　第５項　溝
　　第６項　遺構外出土遺物
　第３節　古墳時代から古代の遺構と遺物 …… 229
　　第１項　概要
　　第２項　竪穴建物
　　第３項　掘立柱建物
　　第４項　柱穴列
　　第５項　ピット
　　第６項　集石
　　第７項　溝
　　第８項　畠
　　第９項　遺構外出土遺物
　第４節　中世以降の遺構と遺物 …… 283
　　第１項　概要
　　第２項　土坑
　　第３項　溝
　　第４項　畠

第５章　自然科学分析 …… 303
　第１節　分析の経緯と結果 …… 303
　第２節　放射性炭素年代測定報告(AMS測定) …… 303

第６章　調査の成果(総括) …… 309
　第１節　縄文時代終末から弥生時代にかかる土器について …… 309
　第２節　土偶について …… 309
　第３節　まとめ …… 310

遺構一覧表
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　上信自動車道計画路線図
第２図　遺跡の位置
第３図　上信自動車道吾妻西バイパスの路線と各遺跡位置図
第４図　調査範囲図と調査区割図及びグリッド配置図
第５図　万木沢Ｂ遺跡全体図　第１面・第２面
第６図　万木沢Ｂ遺跡全体図　第３面
第７図　周辺地形分類図
第８図　周辺遺跡分布図
第９図　各地点の基本層序
第10図　縄文時代遺構配置図
第11図　１～４・６号土坑　平・断面図
第12図　５・７・８・17・18号土坑　平・断面図
第13図　９～12号土坑　平・断面図
第14図　13～16・19・20号土坑　平・断面図
第15図　21～24号土坑　平・断面図
第16図　土坑出土遺物（１）
第17図　土坑出土遺物（２）
第18図　土坑出土遺物（３）
第19図　土坑出土遺物（４）
第20図　土坑出土遺物（５）
第21図　１～４号配石　平・断面図
第22図　５～８号配石　平・断面図
第23図　９～13号配石　平・断面図
第24図　１号配石出土遺物（１）
第25図　９号配石出土遺物（２）
第26図　４・５号溝　平・断面図
第27図　４・５号溝　出土遺物
第28図　６号溝　平面図
第29図　６号溝　断面図
第30図　６号溝　土器上面出土状態(北)
第31図　６号溝　土器上面出土状態(南)
第32図　６号溝　土器下面出土状態(北)
第33図　６号溝　土器下面出土状態(南)
第34図　６号溝　土偶出土状態(北)
第35図　６号溝　土偶出土状態(南)
第36図　６号溝　出土土器（１）
第37図　６号溝　出土土器（２）
第38図　６号溝　出土土器（３）
第39図　６号溝　出土土器（４）
第40図　６号溝　出土土器（５）
第41図　６号溝　出土土器（６）
第42図　６号溝　出土土器（７）
第43図　６号溝　出土土器（８）
第44図　６号溝　出土土器（９）
第45図　６号溝　出土土器(10)
第46図　６号溝　出土土器(11)
第47図　６号溝　出土土器(12)
第48図　６号溝　出土土器(13)
第49図　６号溝　出土土器(14)
第50図　６号溝　出土土器(15)
第51図　６号溝　出土土器(16)
第52図　６号溝　出土土器(17)
第53図　６号溝　出土土器(18)
第54図　６号溝　出土土器(19)
第55図　６号溝　出土土器(20)
第56図　６号溝　出土土器(21)
第57図　６号溝　出土土器(22)
第58図　６号溝　出土土器(23)
第59図　６号溝　出土土器(24)
第60図　６号溝　出土土器(25)
第61図　６号溝　出土土器(26)
第62図　６号溝　出土土器(27)
第63図　６号溝　出土土器(28)
第64図　６号溝　出土土器(29)
第65図　６号溝　出土土器(30)
第66図　６号溝　出土土器(31)
第67図　６号溝　出土土器(32)
第68図　６号溝　出土土器(33)
第69図　６号溝　出土土器(34)
第70図　６号溝　出土土器(35)
第71図　６号溝　出土土器(36)
第72図　６号溝　出土土器(37)
第73図　６号溝　出土土器(38)
第74図　６号溝　出土土器(39)
第75図　６号溝　出土土器(40)
第76図　６号溝　出土土器(41)
第77図　６号溝　出土土器(42)
第78図　６号溝　出土土器(43)
第79図　６号溝　出土土器(44)
第80図　６号溝　出土土器(45)
第81図　６号溝　出土土器(46)
第82図　６号溝　出土土器(47)
第83図　６号溝　出土土器(48)
第84図　６号溝　出土土器(49)
第85図　６号溝　出土土器(50)
第86図　６号溝　出土土器(51)
第87図　６号溝　出土土器(52)
第88図　６号溝　出土土偶（１）
第89図　６号溝　出土土偶（２）
第90図　６号溝　出土土偶（３）
第91図　６号溝　出土鯨面土偶
第92図　６号溝　出土人面(鯨面)付土偶
第93図　６号溝　出土土製品・不明遺物
第94図　石鏃分類模式図
第95図　６号溝　出土石器　石鏃（１）
第96図　６号溝　出土石器　石鏃（２）
第97図　６号溝　出土石器　石鏃（３）、石匙、石錐（１）
第98図　６号溝　出土石器　石錐（２）
第99図　６号溝　出土石器　石錐（３）、楔形石器、打製石斧（１）
第100図　６号溝　出土石器 打製石斧（２）、石鍬、磨製石斧
第101図　６号溝　出土石器　凹石
第102図　６号溝　出土石器　磨石（１）
第103図　６号溝　出土石器　磨石（２）、敲石、砥石（１）
第104図　６号溝　出土石器　台石
第105図　６号溝　出土石器　砥石（２）、石皿（１）
第106図　６号溝　出土石器　石皿（２）、石棒（１）
第107図　６号溝　出土石器　石棒（２）、石剣、石刀、石冠
第108図　６号溝　出土石器　玉類、未製品、その他
第109図　遺構外出土遺物（１）
第110図　遺構外出土遺物（２）
第111図　遺構外出土遺物（３）
第112図　古墳時代から古代の遺構配置図
第113図　１号竪穴建物　平・断面図、出土遺物（１）
第114図　１号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物（２）
第115図　２号竪穴建物　平・断面図
第116図　２号竪穴建物　カマド平・断面図
第117図　３号竪穴建物　平・断面図
第118図　３号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物
第119図　４号竪穴建物　平・断面図
第120図　４号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物
第121図　５号竪穴建物　平・断面図
第122図　５号竪穴建物　カマド平・断面図
第123図　５号竪穴建物　床面下平面図
第124図　５号竪穴建物　出土遺物
第125図　６号竪穴建物　平・断面図
第126図　６号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物

第127図　７号竪穴建物　平・断面図
第128図　７号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物
第129図　７号竪穴建物　床面下平面図
第130図　８号竪穴建物　平・断面図
第131図　９号竪穴建物　平・断面図
第132図　９号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物
第133図　10号竪穴建物　カマド平・断面図
第134図　10号竪穴建物　出土遺物
第135図　11号竪穴建物　平・断面図
第136図　11号竪穴建物　カマド平・断面図
第137図　11号竪穴建物　床面下平面図
第138図　11号竪穴建物　出土遺物
第139図　12号竪穴建物　遺物出土状態・床面・床面下　平・断面図
第140図　12号竪穴建物　カマド１・２平・断面図
第141図　12号竪穴建物　出土遺物１
第142図　12号竪穴建物　出土遺物２
第143図　13号竪穴建物　平・断面図、出土遺物
第144図　１～３号掘立柱建物　平・断面図
第145図　１号集石　平・断面図、出土遺物
第146図　２号集石　平・断面図、出土遺物
第147図　３号集石　平・断面図、出土遺物
第148図　４号集石　平・断面図、出土遺物
第149図　１号溝　平・断面図
第150図　遺構外出土遺物
第151図　２・３号畠　平面図
第152図　中世以降の遺構配置図
第153図　２・３号溝　平・断面図
第154図　７号溝　平・断面図
第155図　１号畠　平面図

表　目　次

第１表　上信自動車道吾妻西バイパス調査遺跡一覧
第２表　周辺遺跡一覧
第３表　区別遺構数量
第４表　１号土坑遺物観察表
第５表　２号土坑遺物観察表
第６表　３号土坑遺物観察表
第７表　７号土坑遺物観察表
第８表　10号土坑遺物観察表
第９表　12号土坑遺物観察表
第10表　16号土坑遺物観察表
第11表　19号土坑遺物観察表
第12表　20号土坑遺物観察表
第13表　24号土坑遺物観察表
第14表　１号配石遺物観察表
第15表　９号配石遺物観察表
第16表　４・５号溝遺物観察表
第17表　６号溝出土土器観察表
第18表　６号溝出土土偶観察表
第19表　６号溝出土鯨面土偶観察表
第20表　６号溝出土人面(鯨面)付土器観察表
第21表　６号溝出土土製品、不明遺物観察表
第22表　６号溝出土石器・石製品観察表
第23表　遺構外出土遺物観察表
第24表　１号竪穴建物遺物観察表
第25表　３号竪穴建物遺物観察表
第26表　４号竪穴建物遺物観察表
第27表　５号竪穴建物遺物観察表
第28表　６号竪穴建物遺物観察表
第29表　７号竪穴建物遺物観察表
第30表　９号竪穴建物遺物観察表
第31表　10号竪穴建物遺物観察表
第32表　11号竪穴建物遺物観察表
第33表　12号竪穴建物遺物観察表
第34表　13号竪穴建物遺物観察表
第35表　１号集石遺物観察表
第36表　２号集石遺物観察表
第37表　３号集石遺物観察表
第38表　４号集石遺物観察表
第39表　遺構外出土遺物観察表
第40表　竪穴建物一覧
第41表　掘立柱建物一覧
第42表　柱穴列一覧
第43表　土坑一覧
第44表　ピット一覧
第45表　配石一覧
第46表　集石一覧
第47表　溝位一覧
第48表　畠一覧

写真目次

ＰＬ．１　１　調査範囲全景　空中写真(上方が北)
　　２　１区および２区東半　第１面(古代畠)調査全景　空中写真(上方が北)
ＰＬ．２　１　１区　第３面(縄文時代)調査全景　空中写真(上方が北)
　　２　２区東半　第２面(古墳時代～古代)および第３面(縄文時代)調査全景　空中写真(上方が北)
ＰＬ．３　１　２区西半および３区　第１面(古代畠)調査全景　空中写真(上方が北)
　　２　４区　第１面(古代畠)および第２面(古墳時代～古代)調査全景　空中写真(上方が北)
ＰＬ．４　１　１号竪穴建物　遺物出土状態　西から
　　２　１号竪穴建物　カマド検出状況　西から
　　３　１号竪穴建物　カマド全景　西から
　　４　１号竪穴建物　貯蔵穴　西から
　　５　２号竪穴建物　遺構検出状況　南西から
　　６　２号竪穴建物　全景　南西から
　　７　２号竪穴建物　土層断面Ａ-Ａ′南西から
　　８　２号竪穴建物　土層断面Ａ-Ａ′西半　南西から
ＰＬ．５　１　２号竪穴建物　土層断面Ｂ-Ｂ′北西から
　　２　２号竪穴建物　土層断面Ｂ-Ｂ′南半　北西から
　　３　２号竪穴建物　カマド検出状況　西から
　　４　２号竪穴建物　貯蔵穴　西から
　　５　３号竪穴建物　全景　南西から
　　６　３号竪穴建物　遺物出土状態　西から
　　７　３号竪穴建物　カマド全景　南西から
　　８　３号竪穴建物　カマド煙道部　南西から
ＰＬ．６　１　３号竪穴建物　貯蔵穴　南東から
　　２　３号竪穴建物　床下全景　南西から
　　３　４号竪穴建物　遺構検出状況　北東から
　　４　４号竪穴建物　遺構検出状況　南西から
　　５　４号竪穴建物　カマド煙道部検出状況　東から
　　６　４号竪穴建物　カマド検出状況　北東から
　　７　４号竪穴建物　カマド全景　北から
　　８　４号竪穴建物　遺物出土状態　北から
ＰＬ．７　１　５号竪穴建物　全景　北から
　　２　５号竪穴建物　土層断面Ａ-Ａ′東から
　　３　５号竪穴建物　火山灰の埋没状況　東から
　　４　５号竪穴建物　カマド全景　北から
　　５　５号竪穴建物　煙道部天井石除去状況　北から
　　６　５号竪穴建物　カマド左側壁石　西から
　　７　５号竪穴建物　カマド右側壁石　東から
ＰＬ．８　１　６号竪穴建物　全景　南東から
　　２　６号竪穴建物　カマド全景　南から
　　３　７号竪穴建物と建物外部の柱穴　検出状況　南東から
　　４　７号竪穴建物　全景　南東から
　　５　７号竪穴建物　遺物出土状態　南東から
　　６　７号竪穴建物　カマド全景　南東から
　　７　７号竪穴建物　貯蔵穴　南東から
　　８　７号竪穴建物　床下全景　南東から
ＰＬ．９　１　８号竪穴建物　全景　南西から
　　２　８号竪穴建物　土層断面Ａ-Ａ′北東から
　　３　９号竪穴建物　全景　南西から
　　４　９号竪穴建物　土層断面Ｃ-Ｃ′北東から
　　５　９号竪穴建物　カマド全景　南西から
　　６　９号竪穴建物　カマド前集石状況　東から
　　７　10号竪穴建物　全景　南西から
　　８　10号竪穴建物　カマド全景と遺物出土状態　南西から
ＰＬ．10　１　11号竪穴建物　全景　南西から
　　２　11号竪穴建物　礫集石状況　北東から
　　３　11号竪穴建物　カマド全景　南西から
　　４　11号竪穴建物　床下全景　南西から
　　５　12号竪穴建物　全景　南東から
　　６　12号竪穴建物　全景　南西から
　　７　12号竪穴建物　遺物出土状態　南東から
　　８　12号竪穴建物　遺物出土状態　南東から
ＰＬ．11　１　12号竪穴建物　遺物出土状態　南西から
　　２　12号竪穴建物　遺物出土状態　西から
　　３　12号竪穴建物　カマド１検出状況　南東から
　　４　12号竪穴建物　カマド１全景　南東から
　　５　12号竪穴建物　カマド２全景　南西から
　　６　12号竪穴建物　床下全景　南東から
　　７　13号竪穴建物　全景　南西から
　　８　13号竪穴建物　遺物出土状態　北から
ＰＬ．12　１　１号土坑　全景　北東から
　　２　２号土坑　全景　東から
　　３　２号土坑　炭化物出土状況　南から
　　４　３号土坑　全景　西から
　　５　４号土坑　全景　南から
　　６　５(中央)・17(右)・18(左)号土坑　全景　西から
　　７　６号土坑　全景　北西から
　　８　７号土坑　全景　南から
ＰＬ．13　１　８号土坑　全景　南から
　　２　９号土坑　全景　南から
　　３　10号土坑　全景　南から
　　４　11号土坑　全景　南から
　　５　12号土坑　全景　南から
　　６　12号土坑　遺物出土状態　南から
　　７　12号土坑　遺物(土製品)出土状態　北西から
　　８　12号土坑　遺物(石製品)出土状態　北東から
ＰＬ．14　１　13号土坑　全景　南から
　　２　14号土坑　全景　西から
　　３　15号土坑　全景　南から
　　４　16号土坑　全景　南から
　　５　19号土坑　全景　西から
　　６　20号土坑　全景　南から
　　７　21号土坑　全景　西から
　　８　22号土坑　全景　西から
ＰＬ．15　１　23号土坑　全景　西から
　　２　24号土坑　全景　北から
　　３　６号溝上位に検出した１号配石　南から
　　４　１号配石　全景　北から
　　５　１号配石　下部埋設土器出土状況　東から
　　６　１号配石　下部埋設土器出土状況　西から
　　７　９号配石　全景　西から
　　８　９号配石　埋設土器出土状況　北西から
ＰＬ．16　１　10号配石　全景　北から
　　２　10号配石　全景　北東から
　　３　10号配石　全景　南から
　　４　10号配石　遺物(石剣)出土状態　南から
　　５　11号配石　全景　空中写真
　　６　11号配石と遺物出土状況　西から
　　７　12・13号配石　検出状況　西から
　　８　12・13号配石　検出状況　北西から
ＰＬ．17　１　12号配石　全景　西から
　　２　12号配石　周辺遺物出土状態　南東から
　　３　12号配石　遺物(石棒)出土状態　南西から
　　４　13号配石　全景　南から
　　５　13号配石　全景　南から
　　６　13号配石　周辺遺物出土状態　西から
　　７　13号配石　周辺遺物出土状態　北から
　　８　13号配石　周辺出土の土偶　南から
ＰＬ．18　１　１号炭化物集中　南から
　　２　２号炭化物集中　南から
　　３　３号炭化物集中　南から
　　４　４号炭化物集中　南から
　　５　５号炭化物集中　南から

6　1号集石　西から
7　5号集石　東から
8　手前から順に２・３・４号集石　東から

ＰＬ．19　1　1号溝　北から
2　1号溝　南東から
3　3号溝　北から
4　2号溝　北から
5　4号溝　南から（４・５溝は、調査区を跨ぐ同一溝）
6　5号溝　北西から（４・５溝は、調査区を跨ぐ同一溝）

ＰＬ．20　1　6号溝(上面)　遺物出土状態　南から
2　6号溝(上面)　遺物出土状態　北から
3　6号溝(上位)　遺物出土状態　南から
4　6号溝(上位)　遺物出土状態　北から
5　6号溝北端(上位) 1号配石・遺物出土状態　北東から
6　6号溝北端(上位) 1号配石・遺物出土状態　東から
7　6号溝南端(上位)10号配石・遺物出土状態　南から
8　6号溝南端(上位)10号配石・遺物出土状態　東から

ＰＬ．21　1　6号溝(上位)　遺物出土状態　空中写真
2　6号溝(下位)　遺物出土状態　空中写真

ＰＬ．22　1　6号溝(下位)　遺物出土状態　北から
2　6号溝(下位)12・13号配石・遺物出土状態　北から
3　6号溝(下位)　遺物出土状態　南から
4　6号溝(下位)　遺物出土状態　南から
5　6号溝南側(下位)　遺物出土状態　西から
6　6号溝南側(下位)　遺物出土状態　西から
7　6号溝北端(下位)12・13号配石と遺物出土状態　西から
8　6号溝南端(底面)　北から

ＰＬ．23　1　6号溝(1D・E-10・11グリッド)遺物出土状態　南から
2　6号溝(1D-11・12グリッド)遺物出土状態　西から
3　6号溝(1E-10・11グリッド)遺物出土状態　北から
4　6号溝(1F-9グリッド)遺物出土状態　西から
5　6号溝(1F-7・8グリッド)遺物出土状態　西から
6　6号溝(1F-6グリッド)遺物出土状態　西から
7　6号溝(1E・F-6グリッド)遺物出土状態　南から
8　6号溝(1E・F-4・5グリッド)遺物出土状態　南から

ＰＬ．24　1　6号溝(1D-12グリッド)土器出土状態(土器494)　東から
2　6号溝(1D-12グリッド)土器出土状態(土器517)　南から
3　6号溝(1D-12グリッド)土器出土状態(土器16)　北から
4　6号溝(1D-12グリッド)土器出土状態(土器550)　北から
5　6号溝(1D-12グリッド)土器出土状態(土器25)　北東から
6　6号溝(1D-12グリッド)土器出土状態(土器267)　北東から
7　6号溝(1D-12グリッド)土器出土状態(土器589)　南西から
8　6号溝(1D-12グリッド)土器出土状態(土器573)　南東から

ＰＬ．25　1　6号溝(1D-11・12グリッド)土器出土状態(土器289) 北から
2　6号溝(1D-12グリッド)土器出土状態(土器289)　西から
3　6号溝(1D-11グリッド)土器出土状態(土器28)　東から
4　6号溝(1D-11グリッド)土器出土状態(土器31)　西から
5　6号溝(1D-11グリッド)土器出土状態(土器476)　南から
6　6号溝(1D-11グリッド)土器出土状態(土器476)　南から
7　6号溝(1E-11グリッド)土器出土状態(土器139)　北から
8　6号溝(1E-11グリッド)土器出土状態(土器139)　北から

ＰＬ．26　1　6号溝(1E-11グリッド)土器出土状態(土器277)　東から
2　6号溝(1E-11グリッド)土器出土状態(土器43)　北から
3　6号溝(1E-10グリッド)土器出土状態(土器387)　北から
4　6号溝(1E-10グリッド)土器出土状態(土器387)　北から
5　6号溝(1E-10グリッド)土器出土状態(土器425)　北から
6　6号溝(1E-10グリッド)土器出土状態(土器20)　北から
7　6号溝(1E-10グリッド)土器出土状態(土器571)　南から
8　6号溝(1E-10グリッド)土器出土状態(土器22)　南から

ＰＬ．27　1　6号溝(1E-10グリッド)土器出土状態(土器491)　東から
2　6号溝(1E-6グリッド)土器出土状態(土器648)　西から
3　6号溝(1E-5グリッド)土器出土状態(土器39)　西から
4　6号溝(1E-5グリッド)土器出土状態(土器530)　西から
5　6号溝(1E-5グリッド)土器出土状態(土器570)　西から
6　6号溝(1E-4グリッド)土器出土状態(土器27)　北から
7　6号溝(1F-9グリッド)土器出土状態(土器10)　西から
8　6号溝(1F-8グリッド)土器出土状態(土器655)　西から

ＰＬ．28　1　6号溝(1F-8グリッド)土器出土状態(土器298)　西から
2　6号溝(1F-8グリッド)土器出土状態(土器298)　東から
3　6号溝(1F-7グリッド)土器出土状態(土器522)　北から
4　6号溝(1F-7グリッド)土器出土状態(土器278)　北から
5　6号溝(1F-7グリッド)土器出土状態(土器278)　北から
6　6号溝(1F-7グリッド)土器出土状態(土器29)　東から
7　6号溝(1F-7グリッド)土器出土状態(土器260)　北から
8　6号溝(1F-7グリッド)土器出土状態(土器４)　北から

ＰＬ．29　1　6号溝(1F-7グリッド)土器出土状態(土器４)　東から
2　6号溝(1F-6グリッド)土器出土状態(土器18)　東から
3　6号溝(1F-5グリッド)土器出土状態(土器556)　南から
4　6号溝(1F-5グリッド)土器出土状態(土器26)　西から
5　6号溝(1F-5グリッド)土器出土状態(土器26)　北から
6　6号溝(1F-5グリッド)土器出土状態(土器26)　東から
7　6号溝(1F-4グリッド)土器出土状態(土器300)　北から
8　6号溝(1F-4グリッド)土器出土状態(土器300)　北から

ＰＬ．30　1　6号溝(1F-4グリッド)土器出土状態(土器528)　北から
2　6号溝(1F-4グリッド)土器出土状態(土器528)　北から
3　6号溝(1F-4グリッド)土器出土状態　北から
4　6号溝(1F-4グリッド)土器出土状態　北から
5　6号溝(1F-4グリッド)土器出土状態(土器484)　北から
6　6号溝(1F-4グリッド)土器出土状態(土器480)　北から
7　6号溝(1G-9グリッド)土器出土状態(土器540)　西から
8　6号溝(1G-8グリッド)土器出土状態(土器274)　西から

ＰＬ．31　1　6号溝　土偶出土状態(土偶２)北から
2　6号溝　土偶出土状態(土偶２)西から
3　6号溝　土偶出土状態(土偶４)北から
4　6号溝　土偶出土状態(土偶４)真上から
5　6号溝　土偶出土状態(土偶３)南から
6　6号溝　土偶出土状態(土偶３)南から

ＰＬ．32　1　6号溝　土偶出土状態(土偶７)南から
2　6号溝　土偶出土状態(土偶15)北から
3　6号溝　土偶出土状態(土偶９)東から
4　6号溝　土偶出土状態(土偶１)南から
5　6号溝　土偶出土状態(土偶３)西から
6　6号溝　土偶出土状態(土偶８)南から
7　6号溝　土偶出土状態(土偶10)西から
8　6号溝　打製石斧出土状態(石器296)西から
9　6号溝　打製石斧出土状態　西から
10　6号溝　打製石斧出土状態(石器295)　南から
11　6号溝　磨製石斧出土状態(石器305)　南から
12　6号溝　磨製石斧出土状態(石器303)　西から
13　6号溝　磨製石斧出土状態　西から
14　6号溝　石皿出土状態(石器446)　西から
15　6号溝　台石出土状態(石器430)　西から

ＰＬ．33　1　6号溝　石棒出土状態(石器459)　西から
2　6号溝　石棒出土状態(石器458)　西から
3　6号溝　石棒出土状態(石器464)　西から
4　6号溝　石棒出土状態(石器462)　南から
5　6号溝　石棒出土状態(石器463)　西から
6　6号溝　石剣出土状態(石器467)　北から
7　6号溝　石剣出土状態(石器472)　南から
8　6号溝　石剣出土状態(石器469)　南から
9　6号溝　石刀出土状態(石器474)　南から
10　6号溝　石製品出土状態(石器483)　西から
11　6号溝　石製品出土状態(石器512)　南から
12　6号溝　石製品出土状態　西から
13　6号溝　石製品出土状態(石器498)　西から
14　6号溝　石製品出土状態(石器509)　西から
15　6号溝　石製品出土状態(石器521)　南から

ＰＬ．34　1　1号畠　全景　西から
2　3区に検出された1号畠　南から
3　1号畠　空中写真
4　2号畠　(1区西半)南から
5　2号畠　(1区西半)南から

ＰＬ．35　1　２号畠　（１区西半と２区東半)西から
2　２号畠　（１区西半と２区東半)南から
3　２号畠　（２区東半)南から
4　２号畠　（２区西半)北から
5　２号畠　（２区西半と３区)東から
6　２号畠　（２区西半と３区)南から
7　２号畠　（３区)北から
8　２号畠　（４区東半)南から
ＰＬ．36　1　３号畠　（１号溝東側)検出状況　北から
2　３号畠　（１号溝東側)検出状況　南から
3　３号畠　（１号溝東側)検出状況　西から
ＰＬ．37　１号土坑出土遺物
２号土坑出土遺物
３号土坑出土遺物
７号土坑出土遺物
10号土坑出土遺物
ＰＬ．38　12号土坑出土遺物
16号土坑出土遺物
19号土坑出土遺物
ＰＬ．39　20号土坑出土遺物
24号土坑出土遺物
ＰＬ．40　１号配石出土遺物
９号配石出土遺物
４・５号溝出土遺物
ＰＬ．41　６号溝出土土器(１)
ＰＬ．42　６号溝出土土器(２)
ＰＬ．43　６号溝出土土器(３)
ＰＬ．44　６号溝出土土器(４)
ＰＬ．45　６号溝出土土器(５)
ＰＬ．46　６号溝出土土器(６)
ＰＬ．47　６号溝出土土器(７)
ＰＬ．48　６号溝出土土器(８)
ＰＬ．49　６号溝出土土器(９)
ＰＬ．50　６号溝出土土器(10)
ＰＬ．51　６号溝出土土器(11)
ＰＬ．52　６号溝出土土器(12)
ＰＬ．53　６号溝出土土器(13)
ＰＬ．54　６号溝出土土器(14)
ＰＬ．55　６号溝出土土器(15)
ＰＬ．56　６号溝出土土器(16)
ＰＬ．57　６号溝出土土器(17)
ＰＬ．58　６号溝出土土器(18)
ＰＬ．59　６号溝出土土器(19)
ＰＬ．60　６号溝出土土器(20)
ＰＬ．61　６号溝出土土器(21)
ＰＬ．62　６号溝出土土器(22)
ＰＬ．63　６号溝出土土器(23)
ＰＬ．64　６号溝出土土器(24)
ＰＬ．65　６号溝出土土器(25)
ＰＬ．66　６号溝出土土器(26)
ＰＬ．67　６号溝出土土器(27)
ＰＬ．68　６号溝出土土器(28)
ＰＬ．69　６号溝出土土器(29)
ＰＬ．70　６号溝出土土器(30)
ＰＬ．71　６号溝出土土器(31)
ＰＬ．72　６号溝出土土器(32)
ＰＬ．73　６号溝出土土器(33)
ＰＬ．74　６号溝出土土器(34)
ＰＬ．75　６号溝出土土器(35)
ＰＬ．76　６号溝出土土器(36)
ＰＬ．77　６号溝出土土偶(１)
ＰＬ．78　６号溝出土土偶(２)
ＰＬ．79　６号溝出土土偶(３)
ＰＬ．80　６号溝出土鯨面土偶
６号溝出土人面(鯨面)付土器
ＰＬ．81　６号溝出土土製品、不明遺物
ＰＬ．82　６号溝石鏃(１)
ＰＬ．83　６号溝石鏃(２)
ＰＬ．84　６号溝石鏃(３)、石匙、石錐(１)
ＰＬ．85　６号溝石錐(２)、楔形石器、打製石斧(１)
ＰＬ．86　６号溝打製石斧(２)、石鏃
ＰＬ．87　６号溝磨製石斧、礫器、石核、凹石(１)
ＰＬ．88　６号溝凹石(２)
ＰＬ．89　６号溝凹石(３)、磨石(１)
ＰＬ．90　６号溝磨石(２)
ＰＬ．91　６号溝敲石、台石(１)
ＰＬ．92　６号溝台石(２)
ＰＬ．93　６号溝台石(３)、砥石、石皿(１)
ＰＬ．94　６号溝石皿(２)
ＰＬ．95　６号溝石皿(３)、多孔石、石棒、石剣、石刀、石冠
ＰＬ．96　６号溝玉類、未製品、その他
ＰＬ．97　縄文遺構外出土遺物(１)
ＰＬ．98　縄文遺構外出土遺物(２)
ＰＬ．99　１号竪穴建物出土遺物
３号竪穴建物出土遺物
４号竪穴建物出土遺物
ＰＬ．100　５号竪穴建物出土遺物
６号竪穴建物出土遺物
７号竪穴建物出土遺物
ＰＬ．101　９号竪穴建物出土遺物
10号竪穴建物出土遺物
11号竪穴建物出土遺物
12号竪穴建物出土遺物(１)
ＰＬ．102　12号竪穴建物出土遺物(２)
ＰＬ．103　12号竪穴建物出土遺物(３)
ＰＬ．104　13号竪穴建物出土遺物
１号集石出土遺物
ＰＬ．105　２号集石出土遺物
３号集石出土遺物
４号集石出土遺物
遺構外出土遺物

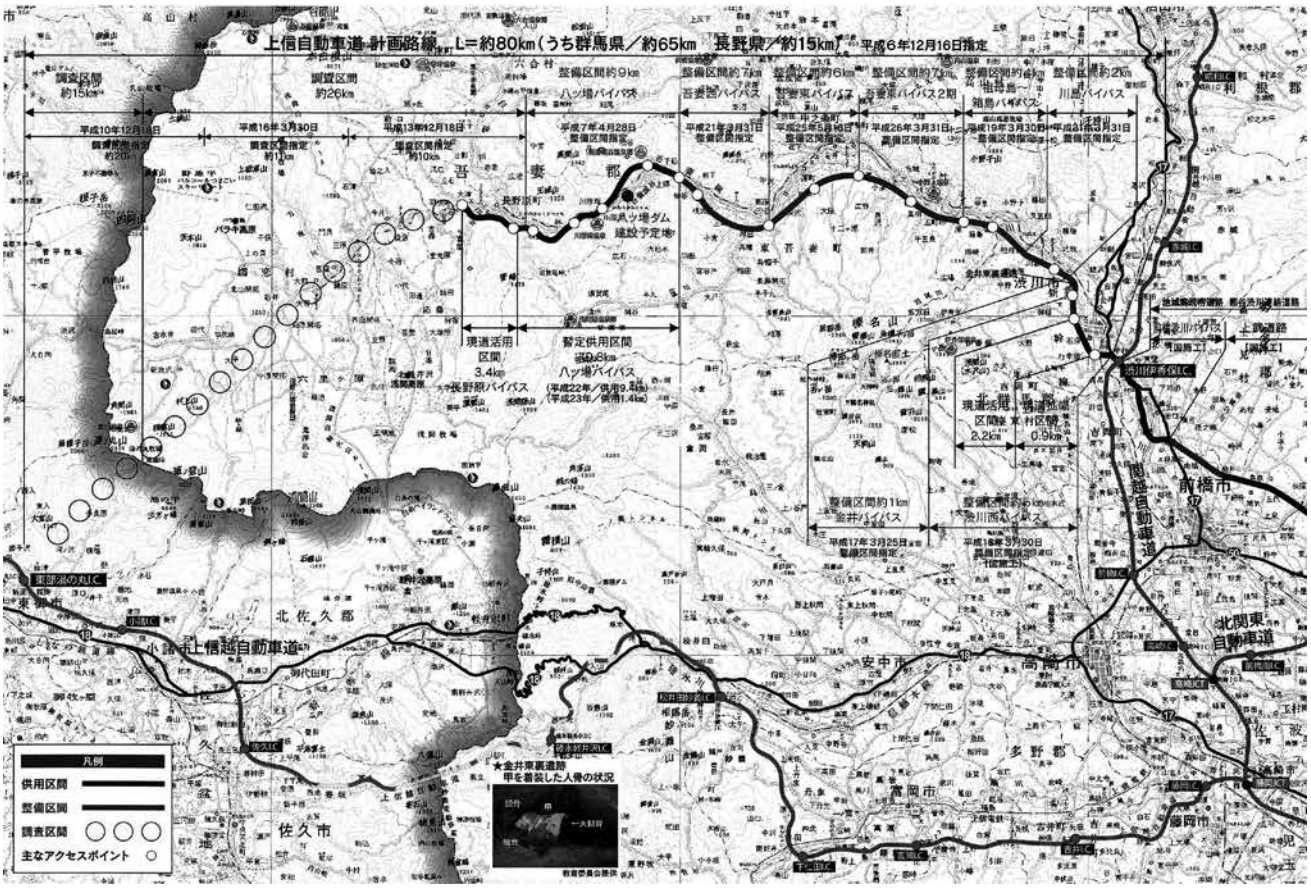
第１章　調査に至る経緯、方法と経過

第１節　上信自動車道吾妻西バイパスについて

上信自動車道(国道145・353号バイパス)は、群馬県渋川市の関越自動車道渋川伊香保インターチェンジを起点に、長野県東御市の上信越自動車道東部湯の丸インターチェンジへと至る総延長約80km(群馬県約65km、長野県約15km)の地域高規格道路として、平成６年12月16日に計画路線の指定を受けた。この道路は、群馬県の「群馬がはばたくための７つの交通軸構想」における「吾妻軸」として位置づけられ、関越自動車道と上信越自動車道を連携し、吾妻地域の活性化支援に大きく寄与することが期待され、起点となる関越自動車道渋川伊香保インターチェンジの東側に続く前橋渋川バイパスや上武道路を含めた地域高規格道路「熊谷渋川連絡道路」とともに、本県の広域的ネットワークを形成する重要路線である。

この上信自動車道は、起点から県境までを、渋川西バイパス(国施工区間　約５km)、金井バイパス(約１km)、川島バイパス(約２km)、祖母島～箱島バイパス(約４km)、吾妻東バイパス２期(約７km)、吾妻東バイパス(約６km)、吾妻西バイパス(約７km)、八ッ場バイパス(約９km)の各整備区間と、さらに調査区間(約26km)とに分かれている。この中には、既に現道活用や暫定供用されている区間もある。

吾妻西バイパスは、国道145号バイパスの一部となる整備区間の一つで、東吾妻町大字厚田(吾妻東バイパスとの接続地点)から東吾妻町大字松谷(供用が開始されている八ッ場バイパスとの接続地点)までの区間であり、途中には吾妻川を渡る橋梁も含まれる。また、この整備



第１図　上信自動車道計画路線図(群馬県HP「上信自動車道」より引用　http://www.pref.gunma.jp/contents/100010158.pdf)

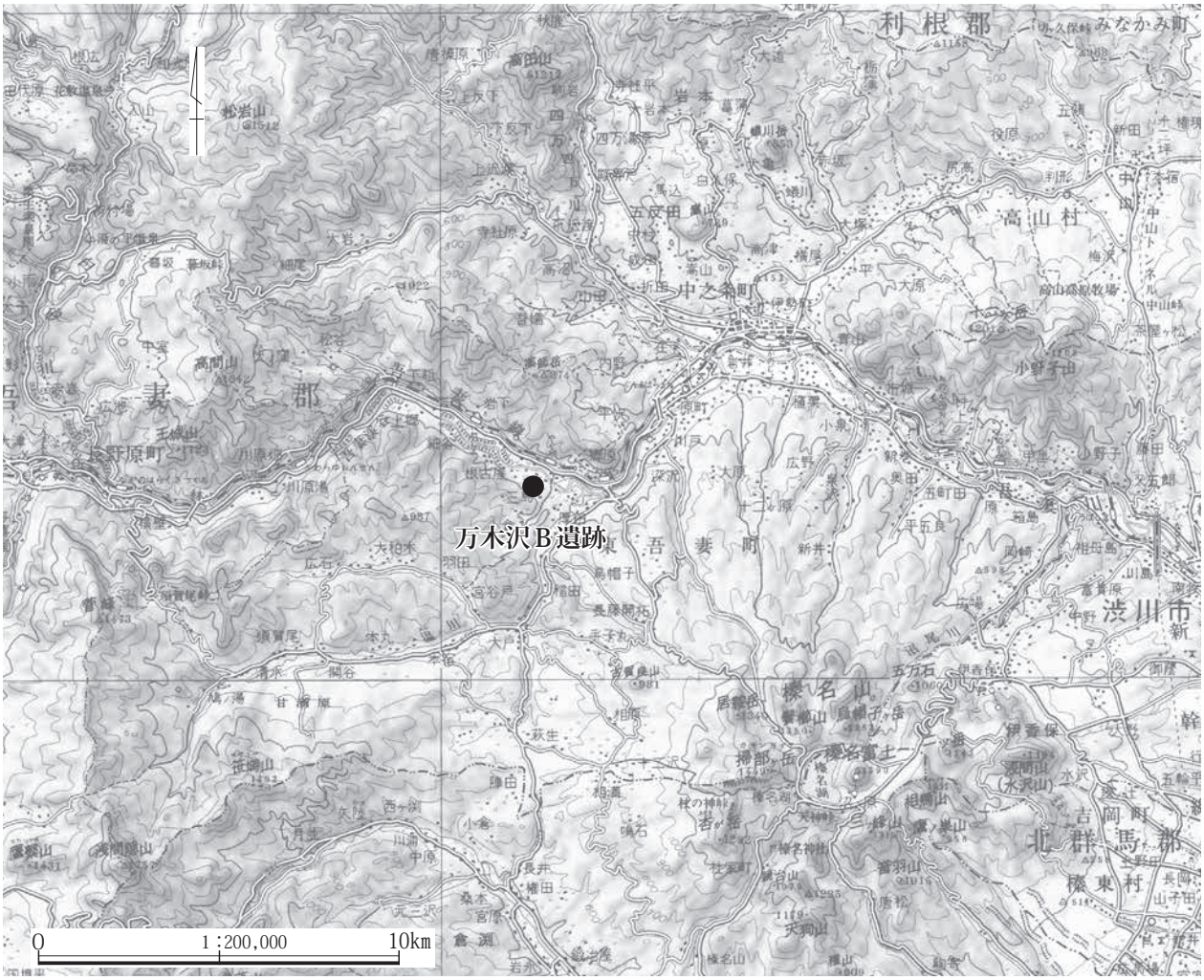
区間は東吾妻町大字厚田、三島、岩下、松谷に位置し、特に三島地区は吾妻川を挟んだ対岸に標高802.6ｍの奇岩・怪岩に覆われた岩櫃山を望み、さらには四戸古墳群（町指定史跡　昭和47年指定）や唐堀遺跡（昭和55年調査縄文時代晩期）、三島根古屋城（中世城郭）といった埋蔵文化財があることでも知られている地区である。

第２節　調査に至る経緯

吾妻西バイパスは、平成21年３月31日に整備区間の指定を受け、その後に路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地取得等の工事着工準備が進められた。工事の着工に先立ち、平成23年５月13日付けで工事を監理する群馬県中之条土木事務所から、当該区間における埋蔵文化財の有無と取扱について、群馬県教育委員会と協議がなされた。これを受けた群馬県教育委員会文化財保護課では、調査範囲と調査面積の確定、調査期間や経費算定のため、用地取得の終わった箇所ごとに試掘調査を行い、その結果を中之条土木事務所に通知し、協議の結果工事の変更が不可能なことから、発掘調査による記録保存の措置が講じられることとなった。

発掘調査は、群馬県教育委員会の指導のもと、群馬県中之条土木事務所を委託者、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を受託者として委託契約を締結し、発掘調査事業が実施されることになった。吾妻西バイパスの最初の発掘調査は、平成25年８月からの厚田中村遺跡、同年９月からの四戸遺跡で、その後、各遺跡の発掘調査が断続的に進められた。

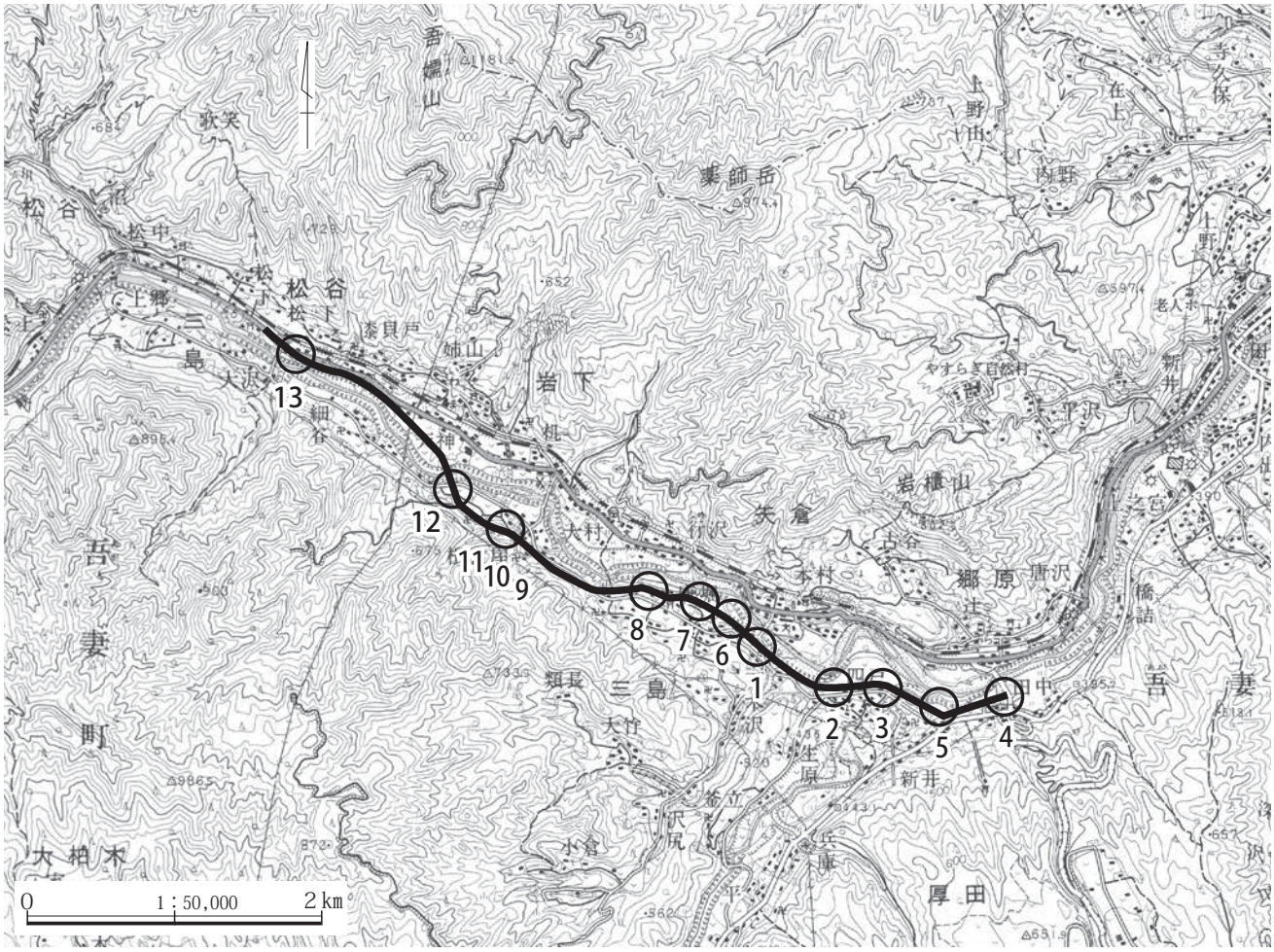
万木沢Ｂ遺跡の試掘調査は、平成28年１月と同年８月に行われ、その結果から用地内に浅間粕川テフラ（As-Kk：1128年降下）に覆われた古代の畠跡、その下層に竪穴建物が検出され、さらに縄文時代から弥生時代初頭の遺物



第２図　遺跡の位置（国土地理院１/ 200,000地勢図「長野」平成24年５月１日を使用）

が出土したことから、他時期にわたる集落の存在が明らかとなり、発掘調査が必要と判定された。

この試掘調査の結果を受けて、発掘調査は平成29年４月から同年11月までの８ヶ月間の予定で行われ、さらに翌平成30年11月7日に追加調査を行った。



第３図　上信自動車道吾妻西バイパスの路線と各遺跡位置図（国土地理院１/50,000地形図「草津」「中之条」を使用）

第１表　上信自動車道吾妻西バイパス調査遺跡一覧

	遺跡名	調査年度						
		平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度
1	万木沢Ｂ遺跡					○		
2	四戸遺跡	○	○	○	○		○	
3	四戸の古墳群						○	
4	厚田中村遺跡	○	○		○			
5	新井遺跡		○	○	○		○	
6	唐堀Ｂ遺跡		○	○				
7	唐堀遺跡			○	○	○	○	
8	唐堀Ｃ遺跡				○		○	
9	根小屋城跡				○			
10	根小屋Ｂ遺跡				○			
11	根小屋城跡				○		○	○
12	細谷Ｅ遺跡				○			
13	松谷松下遺跡							○

（令和元年12月現在）

第３節　調査の方法

第１項　調査区とグリッドの設定

本遺跡の発掘調査は、事業地内の現道および地堺を境として、１～４の各区を設定した。万木沢川寄りの東側を１区とし、西側へ順次２区、３区、４区として調査を行った。２区については調査の進行上、東半と西半とに分割した。なお、平成30年11月7日に行った追加調査箇所は、平成29年度調査対象範囲内の町道法面に接した１区北側部分に当たり、切回し道路の設置により安全性が確保できたことにより調査を実施した。

この１～４区の調査区は、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第Ⅸ系)のＸ＝61,364～61,516、Ｙ＝－93,950～－94,113の範囲に収まり、各年度の調査表面積は平成29年度は8,615.55㎡、平成30年度は50.93㎡で、総調査表面積は8,666.48㎡となる。

グリッドの設定は、調査対象地全域をカバーできるように、東の万木沢川西岸付近となる世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第Ⅸ系)のＸ＝61,350、Ｙ＝－93,940を基点として、１区画５ｍ四方のグリッドを割り付けることとした。基点から、Ｘ軸となる南から北へ０～37、Ｙ軸となる東から西へ１Ａ～１Ｚ・２Ａ～２Ｔを付した。グリッドの呼称に当たっては、便宜的にＹ軸－Ｘ軸とした(各グリッドの呼称例：１Ｅ-11、１Ｓ-18、２Ｃ-26・・・)。(第４図参照)

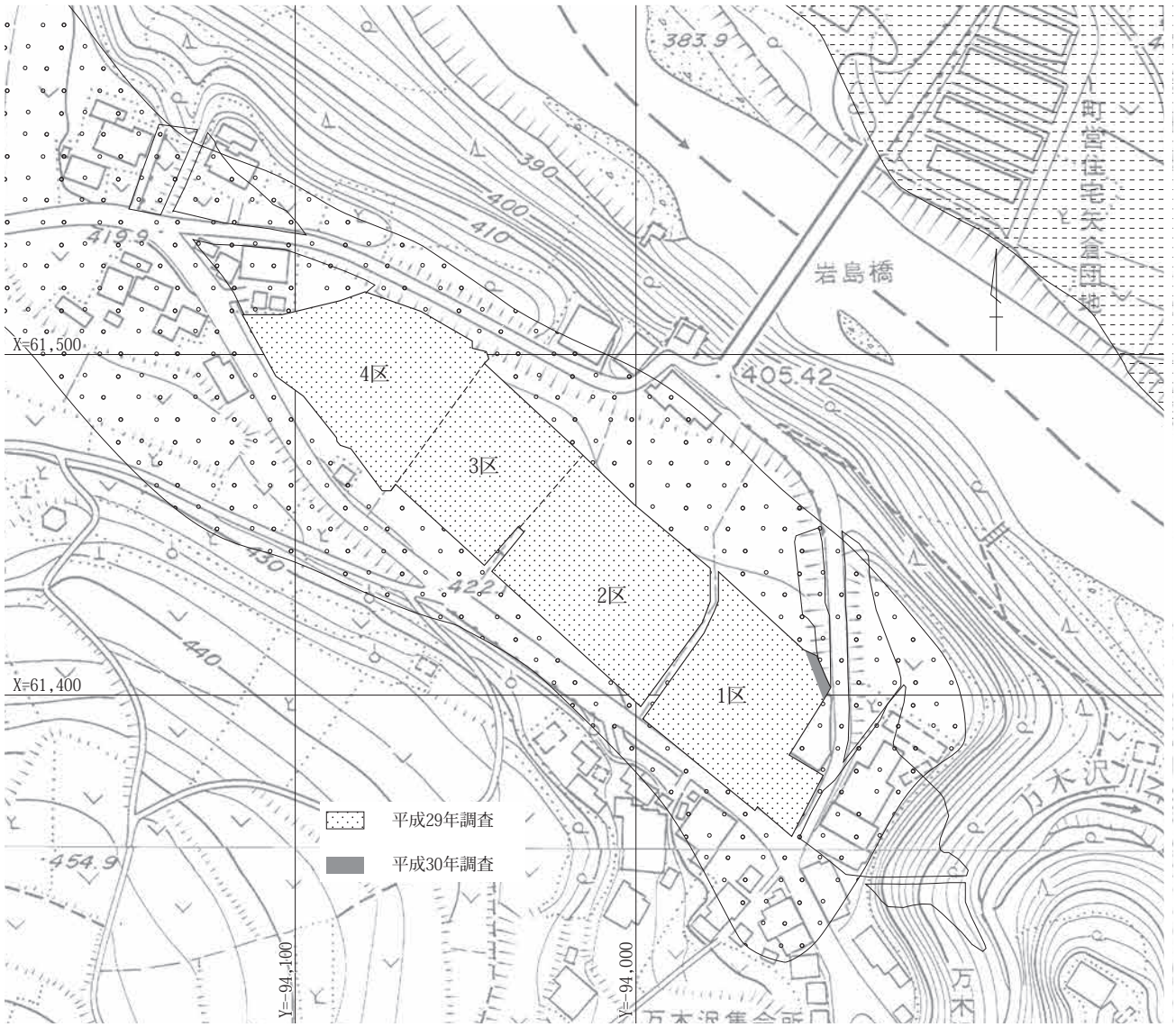
第２項　発掘調査の方法

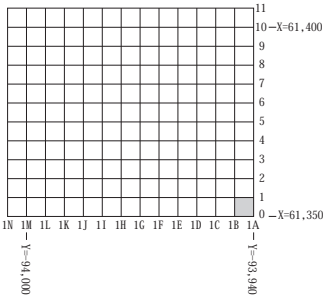
発掘調査は、各調査区における土層確認のためのトレンチを先行させ、表土除去に重機を使用し、表土除去後の各作業は発掘作業員により実施した。遺構確認作業はジョレンを用いて行い、面的な遺構の把握に努めた。遺構確認は調査区により若干異なるが、基本土層Ⅲ層となる浅間-粕川テフラ(As-Kk)痕土層下面ないし基本土層Ⅳ層(As-Kkの一次堆積層)下面を確認面とし、第１面調査となる中・近世から平安時代後半までの遺構を検出した。この第１面で検出された遺構の種類には、中・近世の数多くの土坑および畠、溝、そして平安時代後半の畠がある。その後、基本土層Ⅵ層下面ないし基本土層Ⅶ層上位を確認面とした第２面調査において、古墳時代から平安時代の遺構を数多く検出した。遺構の種類には、古墳時代から平安時代前半期の竪穴建物･掘立柱建物･ピットがある。さらに、先行して行われた試掘調査およびトレンチでの確認において、第２面の遺構確認面より下層から縄文・弥生時代の土器や石器が出土していることから、基本土層Ⅶ層下面ないしローム漸移層上面を確認面とした縄文時代の遺構を対象とする第３面調査を実施した。なお、この第３面調査は、１区と２区東半を主体としている。

各遺構の調査は、竪穴建物では土層確認のための十字のベルトを設定し、土坑、ピットは半裁して土層観察を行う等、それぞれに適した方法を用いた。但し、中世以降の土坑については、上面での遺構確認と埋土の土質観察にとどめ､半裁観察および完掘は行っていない。また、各遺構名は、遺構種別に通し番号で標記した(本書で記述した第○竪穴建物については、調査時は第○住居として扱った)。

遺構等の測量は、土層断面図を作業員による手実測とし、平面図と一部の断面図を測量業者に委託して調査期間の短縮を図った。縮尺は、竪穴建物や土坑、配石、遺物集中等については1/10、1/20、畠や水田といった生産遺構については1/40を基本とし、それぞれの遺構の性格に合わせて適宜使用した。また、各調査区における各調査面毎の全体図は1/100を基本に、1/200を作成し、さらに各調査面の全体図を1/500で作成した。

写真撮影は、中判カメラでの白黒フィルム、デジタル撮影データの２種類を基本とした。調査区の全景写真等は、調査の進展にあわせて行い、併せてラジコンヘリおよびドローンによる空中写真撮影を業者に委託して実施した。なお、撮影した写真のデジタルデータは、HDやDVD－ROM等のメディアに保存し､データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。





第４図　調査範囲図と調査区割図及びグリッド配置図１/2,500吾妻町都市計画図(東吾妻町提供)を一部加工

第４節　調査の経過

第１項　発掘調査の経過

発掘調査は、平成29年４月１日から同年11月30日までの８ヶ月間(平成29年度調査)が予定され、その後の平成30年11月７日に行った追加調査との２ヵ年度に跨がる。

平成29年

４月４日　調査準備を開始する。

４月12日　現地調査事務所の設営開始。

４月17日　調査区の設定を行う。併せて、重機による土層確認トレンチの掘削、そして１区東半第１面調査のための表土掘削を開始する。

４月18日　作業員による１区東半第１面の遺構検出作業を開始する。

４月20日　作業員による１区東半第１面の遺構調査(古代畠、溝)を開始する。

４月21日　１区東半第１面調査は継続し、併せて２区東半第１面調査のための重機による表土掘削を開始する。

４月24日　１区東半第２面調査のためのトレンチの設定後、作業員による掘削を行い第２面以下の状況を確認し、作業員による第２面調査のための表土掘削へと作業を移行する。

４月26日　作業員による１区東半の第２面調査のための表土掘削を継続する中、重機による２区東半の表土掘削を中断し、１区西半第１面調査のための表土掘削を開始する。

５月２日　重機による１区西半第１面の表土掘削終了後、２区東半第１面の表土掘削を再開する。１区西半第１面の表土掘削後は、遺構検出作業を開始し、順次、古代畠や溝等の遺構調査へと移行する。

５月９日　重機による２区東半第１面の表土掘削を終え、作業員による遺構検出作業および古代畠や溝等の遺構調査を開始する。

５月12日　１区第１面と２区東半第１面を対象に、ラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を行う。その後、古代畠の断面確認のためのトレンチの設定後、作業員による掘削を行い、検出された遺構の図化を図った。併せて、１区東半については作業員による第２面調査となる作業員による表土掘削を継続する。

５月22日　１区東半については、縄文時代の遺物が多く出土することから作業員による掘削を継続し、遺物の出土の少ない西半は第２面調査のための重機による表土掘削を開始した。

５月24日　１区東半の作業員による掘削を継続する中、２区東半の第２面調査への重機による表土掘削を開始する。

５月31日　重機による２区東半の表土掘削の終了に伴い、同区第２面の遺構確認を始める。また、１区では第２面の遺構確認および遺構調査を進める。

６月５日　１区東半での縄文遺物集中部については、各グリット毎の調査へと移行させる。この後、１区と２区東半の調査は、調査の進行に合わせて作業の比重を変更させながら進捗を図った。

６月12日　２区東半の遺構調査および縄文時代のトレンチによる確認を再開する。

６月22日　２区東半の遺構調査を継続する。

７月３日　２区東半第２面の全景写真およびドローンによる空中写真撮影を行う。その後、旧石器確認トレンチの設定を行い、作業員によるトレンチ掘削を開始する。

７月５日　２区東半の旧石器確認トレンチ掘削を継続し、併せて１区での縄文時代遺物集中部の調査を再開する。

７月14日　２区東半の旧石器確認トレンチ掘削を終了し、土層記録等を行う。

７月20日　２区東半の調査終了に伴い重機による埋め戻しを開始する。１区での縄文時代遺物集中部の調査は継続中。

７月20日　２区東半の埋め戻し終了。その後は、現地調査事務所の移設場所として整備を進める。

８月３日　１区での縄文時代遺物集中部の調査は継続。新たに４区の調査区設定を行い、翌日より第１面調査のための重機による表土掘削を開始する。

８月９日　１区での縄文時代遺物集中部の調査は継続。４区の重機による表土掘削、併せて第１面の遺構確認を開始する。

８月24日　１区の縄文時代遺物集中部の調査は継続。４区の重機による表土掘削を終了し、第１面の遺構精査(As-Kk下畠)を始める。

８月30日　１区の縄文時代遺物集中部の調査は継続。４区第１面のAs-Kk下畠の全景写真撮影を行う。

９月１日　１区の縄文時代遺物集中部の調査は継続。４区第２面調査に向けたトレンチ設定および作業員による掘削を開始し、併せて古代の竪穴建物調査を始める。

９月13日　１区第２面と４区第１・２面の全景写真およびドローンによる空中写真撮影を行う。

９月21日　１区の縄文時代遺物集中部の調査は継続。４区の旧石器確認トレンチの設定を行い、作業員によるトレンチ掘削を開始する。

９月26日　１区の縄文時代遺物集中部の調査は継続。４区の調査終了に伴い重機による埋め戻しを開始する。

10月１日　１区第２面の古代遺構の調査を終了し、第３面に関わる縄文時代遺物集中部の調査へと移行する。

10月10日　新たに、３区第１面調査のための重機による表土掘削を開始する。

10月11日　１区第２面を対象に、ドローンによる空中写真撮影を行う。その後、１区の旧石器確認トレンチの設定を行い、作業員によるトレンチ掘削を開始する。

10月23日　１区の縄文時代遺物集中部の調査、旧石器確認トレンチ掘削は継続。３区第１面の遺構精査(As-Kk下畠)を始める。

10月24日　１区西側の調査終了に伴い、重機による埋め戻しを開始する。

10月26日　埋め戻しを中断し、２区西半の第１面調査のための表土掘削を開始する。

10月31日　１区南東隅の拡張箇所の設定、その後に第１面調査のための表土掘削を行う。併せて２区西半・３区の第１面の遺構精査(As-Kk下畠)を始める。

11月１日　１区南東隅拡張部の第１面遺構精査(As-Kk下畠)、併せて２区西半・３区の第１面の遺構精査(As-Kk下畠)を継続する。

11月２日　２区西半と３区の第１面を対象に、ドローンによる空中写真撮影を行う。

11月４日　１区北東部･南東隅拡張部の第２面への掘削、２区西半と３区第２面調査に向けたトレンチ設定および作業員による掘削を開始する。

11月８日　１区北東部・南東隅拡張部の第２面への掘削は継続。２区西半と３区第２面調査では、古代の竪穴建物の調査を始めるとともに、重機による表土掘削をも併行する。

11月10日　１区北東部分(町道法面付近)の調査を中断し、保護養生を施す。２区西半と３区第２面調査における古代の竪穴建物調査は継続。

11月13日　１区南東隅拡張部の調査、２区西半と３区第２面調査における古代の竪穴建物調査は継続。

11月20日　２区西半と３区第２面の竪穴建物調査は継続するが、支障のない箇所から重機による埋め戻しを開始する。

11月24日　２区西半と３区の調査が終了し、本格的に重機による埋め戻しへと移行する。１区南東隅拡張部の調査は継続。

11月28日　１区南東隅拡張部の調査が終了し、埋め戻しを開始する。その後、撤収作業に入る。

11月30日　重機による調査区全体の埋め戻し、現地調査事務所の撤収作業を完了させ、現地調査を終了する。

平成30年(追加調査)

11月７日　追加調査は、調査対象範囲内の町道法面に接した１区北側部分に当たり、切回し道路の設置により安全性が確保できたことにより縄文時代の遺物の回収を目的とした調査を実施し、同日に調査を終えた。

第２項　整理事業の経過

整理事業は、平成29年から平成30年度に跨がって発掘調査した出土資料を対象に、令和２年５月１日から令和

４年２月28日までの２ヵ年度に跨り、計22ヵ月間を予定し整理作業を行った。

令和２年度

整理作業を進めるにあたり、遺構測量図の確認、各種遺構数の確認、各遺構の計測、遺構台帳の作成といった基礎作業を先行させ、その後に竪穴建物、掘立柱建物、土坑等の遺構種別に図面修正を進めた。また、遺構写真については、各区・各遺構毎に撮影内容等の確認を済ませ、掲載写真の選定準備を行った後、仮レイアウトを作成した。

出土遺物については、時期別・遺物種別の基礎分類を行った上で、縄文・弥生土器の細時期別・機種別といった土器分類を先行し、その後に接合・復元の作業へと進めた。古墳時代から平安時代の土師器・須恵器についても接合・復元の作業を進め、報告書への掲載遺物と非掲載遺物の選別を行った。また、石器・石製品についても器種別分類を行い、台帳作成を経て、報告書への掲載遺物と非掲載遺物の選別、掲載遺物の写真撮影までを進行させた。さらに、骨片類についても残存状態の確認を行った上で部位別の分類、金属製品は錆落とし等の処理までを行った。

原稿の執筆については、第１章と第２章を先行させ、各遺構の執筆についても適宜行った。

令和３年度

前年度の整理作業を継続し、報告書掲載遺物の実測作業を先行させ、併せて報告書刊行に向けた執筆および編集作業を進め、遺物や資料類の収納作業を行い、整理業務の完了に努めた。

出土遺物については、縄文・弥生土器の報告書掲載遺物の選別を行った上で、掲載遺物の写真撮影、実測・拓本、トレース作業を進めた。土師器・須恵器についても実測、トレース作業、石器・石製品も同様に実測、トレース作業を進めた。錆落としを先行させていた金属製品についても掲載遺物の写真撮影、実測、トレース作業を進めた。そして、これら各掲載遺物の観察記録と観察表の作製をそれぞれ終了させた。

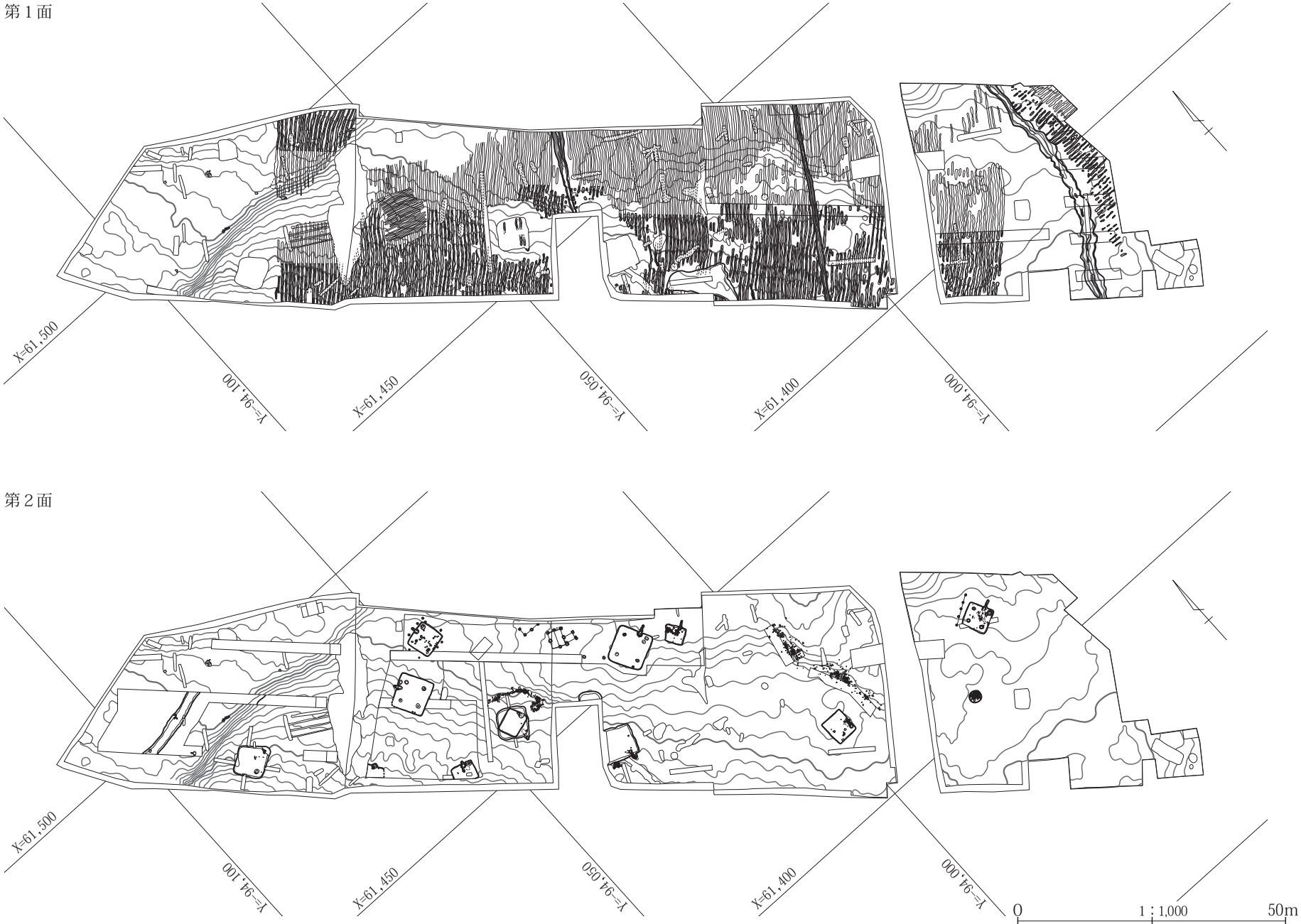
遺構測量図については、前年度からの整理作業の継続として、竪穴建物・掘立柱建物・土坑等の遺構種別に図面修正、各遺構図版の仮レイアウトの作成、それらの作業終了後にデジタル編集をそれぞれ進めた。併せて、遺構台帳の整備をその都度行った。

本文原稿の執筆にあたっては、各個別遺構の原稿執筆と共に掲載遺物図との整合性を図りつつ進め、併せて各種表の作成等を行った。

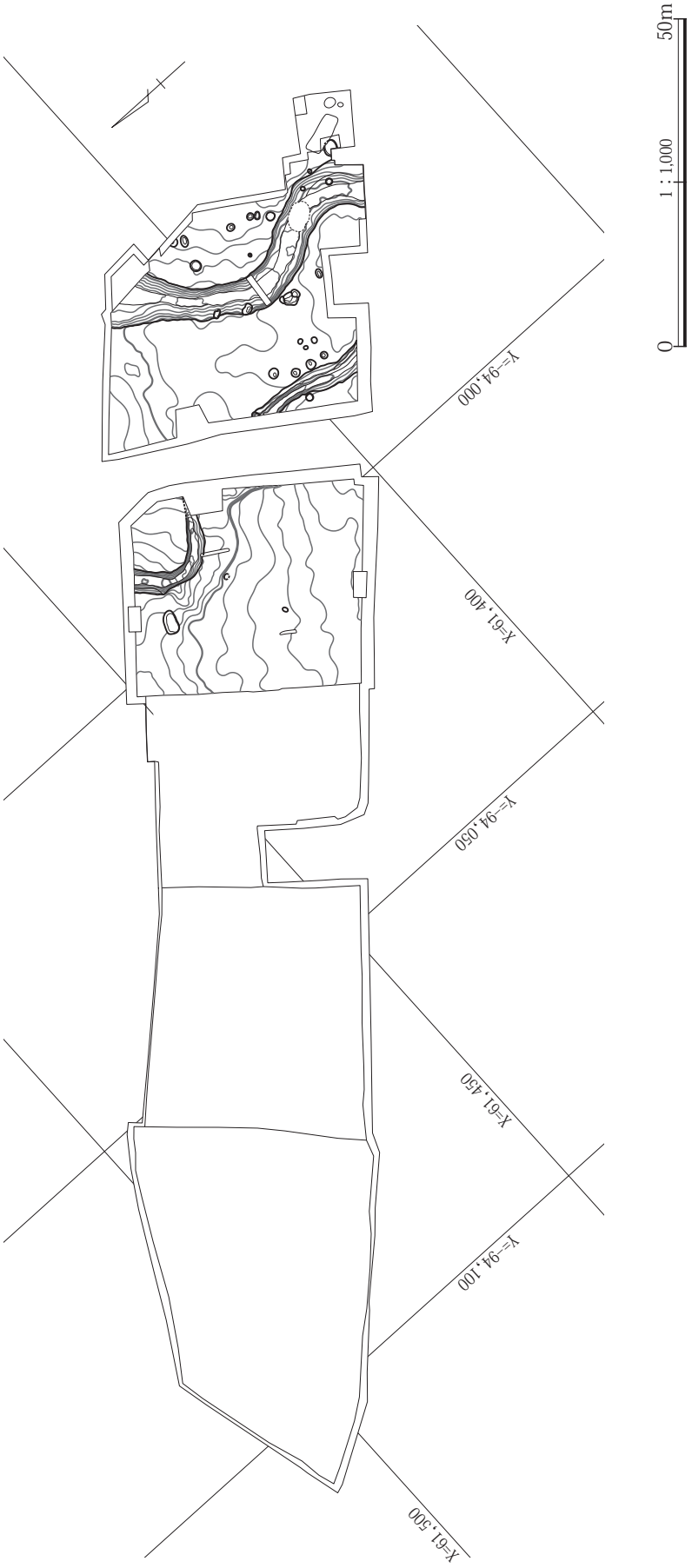
その後、本文原稿および遺構・遺物図、遺構・遺物写真を合わせた報告書版下のレイアウト作成、そして全体のデジタル編集作業およびデジタル組版を行った。その上で、印刷・製本を業者委託して発掘調査報告書を刊行した。

一方、整理した測量図や遺物、写真等といった資料については、管理台帳を作成し、活用に備えた遺物や資料類の収納作業を行った。

以上の整理経過を経て、すべての整理業務を完了した。



第５図　万木沢Ｂ遺跡全体図　第１面・第２面



第６図　万木沢Ｂ遺跡全体図　第３面

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

万木沢Ｂ遺跡は、群馬県北西部となる吾妻郡東吾妻町の西部に位置し、ＪＲ吾妻線矢倉駅から南に約0.5㎞の距離にあり、吾妻郡東吾妻町大字三島字万木沢に所在する。東流する吾妻川の右岸段丘上に位置し、遺跡の東側は万木沢川が北流して吾妻川に注ぎ、その万木沢川を挟んだ東側の吾妻川に突出した広い平坦面となる河岸段丘上に四戸遺跡や四戸の古墳群が展開する。標高は410m前後を測る。また、遺跡の西側には唐沢Ｂ遺跡があり、同一の段丘面や一段低い段丘面が続く。さらに、もう一段低い段丘面に唐堀遺跡が展開する。

調査対象地周辺の作物栽培は、こんにゃく畑が中心となっている。

吾妻郡東吾妻町は、平成18(2006)年３月27日に吾妻郡吾妻町と東村が合併して成立した。榛名山の北側に位置し、町域の北・西・南には標高1000m級の嶺が連なり、吾妻川を挟んだ南側に榛名山や浅間隠山、北側には岩櫃山や吾嬬山などが聳え、町域内を吾妻川・温川・深沢川などの河川が流れている。周辺の山地は、急峻な地形を呈している。なお、本遺跡から北東側に望む岩櫃山は標高802mの岩山で、奇岩・怪石からなる山容は吾妻八景を代表する景勝地としても知られ、本遺跡からの眺望も素晴らしい。

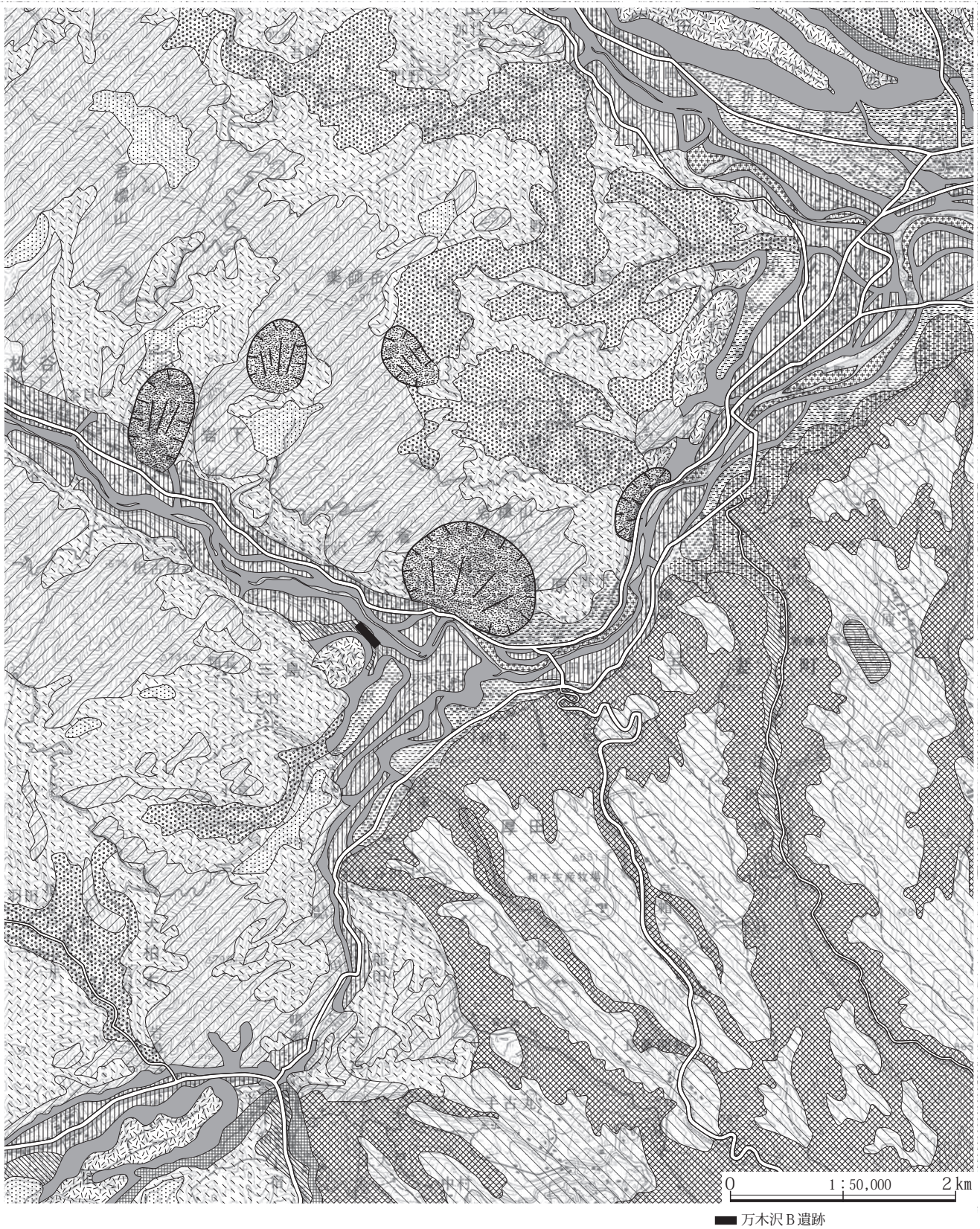
吾妻川は､長野県との県境である鳥居峠付近を源とし、吾妻郡内を西から東へと流れている。川沿いには河岸段丘が発達しており、上位段丘面群である蓑原面・成田原面、中位段丘面である新巻面、下位段丘面である中之条面、最下位段丘面群である伊勢町面群に分類される。これら段丘面のうち、上位段丘面群に下部～上部ローム層が、中位段丘面に中部～上部ローム層が、下位段丘面に上部ローム層が堆積している。最下位段丘面群にはローム層が堆積していない。なお、先に刊行された四戸遺跡の調査報告(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第668集『四戸遺跡』2020)には、本遺跡地を含めた地質の詳細が掲載されている。その相京建史・山口一俊によると、中之条面下位にあたる伊勢町面群は３面に分けられ、伊勢町Ⅰ(Is-Ⅰ)面は調査地域の上流から下流にかけ連続して幅広い平坦な段丘面を形成し、本遺跡や本遺跡東側の四戸遺跡・四戸の古墳群、西側の唐堀Ｃ遺跡が該当するとしている。また、Is-Ⅰ面は露頭の観察やボーリングデータから見る限り、ローム層の堆積はなく、四戸遺跡でのローム層に類似した褐色砂礫層は吾妻川の段丘礫層で、厚さ８mの褐色砂礫層の最上部の堆積物であるともしている。

本遺跡の西約6.5㎞に位置する国指定名勝吾妻峡も、この吾妻川によって形成された峡谷である。吾妻郡東吾妻町大字松谷の雁ヶ沢川との合流地点付近から吾妻郡長野原町大字川原湯の八ッ場ダム建設予定地の東側付近にかけての約４㎞に亘っている。

榛名山は、標高1449mの掃部ヶ岳を最高峰とする複式成層火山であり、山頂部にはカルデラ、火口原湖、中央火口丘等が、山体斜面には熔岩ドームや爆裂火口が存在し、古墳時代６世紀の初頭と前半とされる二度の噴火が発生している。榛名山北側山麓の大部分は火山麓扇状地であり、大谷沢川・深沢川・寺沢川・大泉寺川・泉沢川・奥田川などの放射谷が山体を抉っている。泉沢川以西では、火山麓扇状地原面の一部が保存されている。周辺の山地は、急峻な地形を呈している。

また、本遺跡の南西約30㎞に位置する浅間山は、現在でも活発な火山活動を続けており、地域にさまざまな影響を与えている。

本遺跡が所在する東吾妻町は、戦国期城郭である岩櫃城跡や、ＪＲ吾妻線郷原駅付近に位置する郷原遺跡から1941(昭和16)年に出土した国指定重要文化財「ハート形土偶」(個人蔵、東京国立博物館寄託)などが文化・観光資源として注目を集めている。



第７図　周辺地形分類図(国土交通省国土政策局国土情報課５万分の１都道府県土地分類基本調査(中之条)を一部改変)

第２節　歴史的環境

遺跡のある東吾妻町は、吾妻郡の東南に位置し、名勝地「吾妻渓谷」を有する吾妻川が町内を東へと流下する。古代にあっては「吾妻郡」の一角をなし、戦国武将「真田氏」の岩櫃城、近世の大戸関はよく知られているところである。特に、郷原遺跡から出土した縄文時代後期の国指定重要文化財「ハート形土偶」、岩櫃山の山頂付近には弥生時代中期の「鷹の巣岩陰遺跡」といった著名な遺跡がある。また、近年の上信自動車道吾妻西バイパスおよび吾妻東バイパス建設に伴う発掘調査が進行し、その調査件数が増えてきている状況にある。

ここでは、歴史的環境として各時代を通じた概要を記すこととする。

１．旧石器時代

吾妻郡内での旧石器時代の遺跡調査事例は極めて少なく、高山村に所在する新田西沢遺跡が知られているのみで、東吾妻町での調査例はない。

２．縄文時代

縄文時代後期のハート形土偶で知られる郷原遺跡や、中期の新巻類型土器の標識遺跡である新巻遺跡、晩期の唐堀遺跡、八ツ場ダム関連調査での上郷岡原遺跡が知られているものの、東吾妻町内での縄文時代遺跡の発掘調査例は少なく、現状では不明な点が多い。近年の上信道吾妻西バイパス調査において、本遺跡をはじめとし、新井遺跡、四戸遺跡、唐堀遺跡、唐堀Ｃ遺跡において縄文時代の遺構が検出され、それ以外にも縄文時代の遺物を出土させている遺跡は多くある。

前期の遺構が検出された遺跡として、本報告の四戸遺跡と新井遺跡、唐堀Ｃ遺跡がある。本遺跡では前葉の竪穴建物や土坑、新井遺跡では中葉の竪穴建物と土坑、唐堀Ｃ遺跡では後葉の竪穴建物と土坑が検出されている。

中期の遺構が検出された遺跡として、郷原遺跡がある。郷原遺跡はハート形土偶で知られた後、昭和59(1984)年と平成６(1994)年に発掘調査が行われ、中期後半の竪穴建物が検出されている。

後期の遺構が検出された遺跡として、郷原遺跡、新井遺跡、上郷岡原遺跡がある。郷原遺跡のハート形土偶もそうであるが、昭和59年と平成６年に調査において後期初頭の敷石建物や配石土坑が検出されている。新井遺跡では後期初頭の敷石建物が検出されている。上郷岡原遺跡でも後期初頭から後期前半にかけての敷石建物や竪穴建物が多く検出されている。また、遺構は検出されていないが、後期から晩期の多量の遺物を出土させた昭和55年に調査された唐堀遺跡が知られている。

晩期の遺構が検出された遺跡として、本遺跡と唐堀遺跡がある。唐堀遺跡からは後期後半から晩期の竪穴建物や土坑、配石遺構、水場遺構等が検出され、東北地方から搬入されたと考えられる遮光器土偶の頭部をはじめとする多量の遺物が出土している。本遺跡では、土坑と共に晩期終末期の遺物が多量に出土している。

３．弥生時代

中期の遺跡としては、「岩櫃山式土器」の標式遺跡である岩櫃山鷹の巣遺跡、再葬墓が検出された前畑遺跡が知られている。前畑遺跡は吾妻川の河岸段丘の最下位段丘面群上に立地する一次埋葬地であり、また、岩櫃山鷹の巣遺跡は岩櫃山の岸壁に立地する二次埋葬地と考えられている。他に、新井遺跡では土坑や遺物、四戸遺跡においても竪穴建物が検出されている。

後期の遺構が検出された遺跡として、四戸遺跡および四戸の古墳群、新井遺跡、唐堀Ｂ遺跡がある。四戸遺跡４区から四戸の古墳群に跨る地点には、多くの竪穴建物が検出され、同一集落であることが明らかとなっている。また、この四戸遺跡での後期の集落は、吾妻川流域にあって最も西側に位置する大規模な集落でもある。新井遺跡からは、竪穴建物、円形周溝墓、大型の方形土坑等が検出されている。さらに、唐堀Ｂ遺跡においても竪穴建物を含む集落が確認されている。

４．古墳時代

当該地域は、本県における古墳所在地の最北西端の地として知られてきた。四戸遺跡のある段丘上の東縁には昭和47(1972)年３月１日に町指定となった四戸古墳群がある。この四戸古墳群は、昭和13(1938)年の『上毛古墳総覧』に20基を超える記載があり、その内の四戸１号墳(総覧　岩島村19号)、四戸２号墳(総覧　岩島村16号)、

四戸３号墳(総覧　岩島村13号)、四戸４号墳については、昭和39・42(1964・1967)年に群馬大学による調査が行われている。他にも『上毛古墳総覧』に記載されている古墳として、上古墳(総覧　岩島村43号)、玉科遺跡(総覧　川戸42～51号)、下郷古墳群(総覧　川戸62～69号)、原町下ノ町古墳群(総覧　川原１～16号)、町指定史跡の金井廃寺遺跡(総覧　川戸75号)、岩井寺沢古墳(総覧　大田村17号)、岩井西古墳群(総覧　大田村１～14号)、白山神社遺跡(総覧　大田村21号)等が東吾妻町内にある。

これまで同地域における古墳時代の集落については不明な点が多かった。本遺跡から北西に約３㎞に位置する「姉山の石組カマド」は、緩斜面に立地する竪穴建物に構築された山石利用の石組カマドが知られていた。近年の吾妻西バイパス建設事業に伴う発掘調査の進展によって、古墳時代前期から後期に至る集落も検出され、古墳時代の居住域の展開も次第に判明しつつある。

まず、本遺跡の東側で万木沢川対岸の四戸遺跡からは、古墳時代前期から後期までの多くの竪穴建物が検出されており、５世紀後半に急増した竪穴建物は、その後も安定した棟数を保ちながら継続した集落が展開している。この集落展開の状況は、段丘東縁の四戸の古墳群の造営に大きくかかわったであろうことは明らかで、古墳群の時期と集落の規模・変遷が物語っている。特に６世紀以降の竪穴建物には、古墳の石室を彷彿とさせる石組カマドを有する例が数多く、併せてカマド方向を変える建て替えを行った竪穴建物も数多く検出されている。

新井遺跡からは、中期から後期の集落、方形周溝墓４基、古墳３基も検出されている。検出された一辺約27m程度の方墳は『上毛古墳総覧』に記載された「遠見塚古墳」に相当するとみられる。唐堀遺跡からは、６世紀後半の円墳1基が検出されている。また、唐堀遺跡の西側に隣接する唐堀Ｃ遺跡でも、後期の竪穴建物が検出されている。本遺跡においても数軒の竪穴建物が検出されている。

一方、厚田中村遺跡では６世紀初頭に降下したと考えられている榛名山二ツ岳火山灰(Hr-FA)によって埋没した古墳時代の極小区画水田が部分的に検出され、当該地域における古墳時代の極小区画水田の初めての検出事例となった。

５．奈良・平安時代

律令制下における群馬県域はほぼ上野国の領域に当たり、国内には「碓氷・片岡・甘楽・多胡・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽」の14郡が置かれた(当初13郡、和銅４(711)年に多胡郡設置で14郡)。吾妻郡には「長田」、「伊参」、「大田」の３郷があったとされ、吾妻郡中之条町大字市城付近は官牧である「市代牧」の所在地に比定されている。また、本遺跡の北東約5.5㎞に位置する白鳳期寺院跡の金井廃寺は、７世紀後半から９世紀前半にかけての寺院跡として知られ、上野国佐位郡家に隣接し、佐位郡の郡領層が建立した寺院と考えられる伊勢崎市上植木廃寺と同笵の軒丸瓦が採取されている。県内では前橋市の山王廃寺(放光寺跡)、伊勢崎市の上植木廃寺、太田市の寺井廃寺とこの金井廃寺以外に、本格的な白鳳期寺院の遺跡は発見されていない。「長元３(1030)年上野国不与解由状案」(所謂「上野国交替実録帳」)定額寺項には、「放光寺」、「法林寺」、「弘輪寺」、「慈廣寺」の４寺の名称が記載されており、「放光寺」が前橋市に所在する山王廃寺に当たることは出土した文字瓦によって明らかで、他の「法林寺」、「弘輪寺」、「慈廣寺」の三箇寺が、伊勢崎市上植木廃寺、太田市寺井廃寺、東吾妻町金井廃寺の何れかに当たるのではないかと考えられている。因みに、金井廃寺の存在は、吾妻地域にいち早く本格的な寺院を建立できるような強い経済基盤を有する在地首長が存在していた証でもある。

本遺跡周辺における奈良・平安時代の遺跡は、これまでは、前畑遺跡などで集落が検出されていたことと、本遺跡の北東約５㎞に位置する白鳳期寺院跡である金井廃寺の存在が知られるに止まっていた。そうした状況下、近年の吾妻西バイパス建設に伴う発掘調査の進展により、奈良・平安時代の遺跡の検出事例は格段に多くなり、新たな注目をよんでいる。

奈良・平安時代の集落では、温川の東側に位置する新井遺跡に平安時代(９世紀)の集落が検出されている。東の温川と西の万木沢川に挟まれ、北の吾妻川に突出した平坦台地上に展開する四戸遺跡では、前代から続く７世紀後半から10世紀前半までの数多くの竪穴建物と掘立柱建物から成る集落が検出されてる。この時期の竪穴建物にも、前代の竪穴建物と同様な石組みカマドが構築され

る例も多く存在し、石組カマドが長期に渡って継続的に造られていたことが明らかとなっている。また、出土遺物には墨書・刻書土器もみられ、「寺」、「吾」、「牧」、「丈」、「石」の文字が含まれ、金井廃寺や金井廃寺の近隣に存在したであろう吾妻評・郡家との密接な関連性が示唆されている。さらに、９世紀後半の竪穴建物からは、ほぼ完形の状態に復元できる大型の奈良三彩短頸壺が出土し、その希少性および特異性も含め、大きく注目される発見となった。そして、万木沢川の西側となる本遺跡や唐堀Ｃ遺跡、根小屋遺跡においても、平安時代の竪穴建物が調査されている。

一方、生産遺構として古代の畠や水田も検出されている。厚田中村遺跡では、天仁元(1108)年降下の浅間山火山灰As-Bによって埋没した水田が部分的に検出されている。四戸遺跡では、１区および２区西半においてAs-B火山灰である黄灰色土が大ブロック状に多量に混在した状態で畝間を埋め、その畝間が溝状に幾筋も連なるように検出された。この古代畠の検出は、吾妻地域での初例でもある。また、２区東側では、不明瞭ではあるが同火山灰下に小規模な水田を検出している。本遺跡においては、As-B直上に小規模な畠、その上位となる12世紀前半の降下とされる浅間-粕川テフラ(As-Kk)層の直下に畠を検出している。唐堀Ｃ遺跡では、As-Bで埋没した畠が検出されている。こうした古代の畠や水田は、本遺跡を含めた何れの遺跡においても、平安時代の集落の上に検出されており、集落廃絶後に大きな土地利用の変換がなされたことを物語っている。

６．中・近世

天仁元(1108)年の浅間山噴火後、上野国内では荘園開発への動きが活発になる。吾妻郡域においては、12世紀末頃に秀郷流藤原氏である吾妻氏(前吾妻氏)が台頭する。『吾妻鏡』には、吾妻八郎、吾妻太郎助亮、吾妻四郎助光の名が見え、承久３(1221)年に勃発した承久の乱において吾妻助光が戦死したことにより前吾妻氏は滅亡したと言われている。その後、嘉禎年間(1235～38年)に、前吾妻氏と同様、秀郷流藤原氏を称する吾妻(下河辺)行家が鎌倉幕府より吾妻郡を賜った。これを学界では、便宜的に後吾妻氏と称している。貞和５(1349)年に吾妻行盛が里見義侯との争いで戦死し、後吾妻氏は滅亡したとの伝承がある。東吾妻町大字岩井の長福寺五輪塔に刻まれた「藤原行盛」がこの吾妻行盛であるとされるが、戦死の一件については疑問視もされている。

14世紀末になると、この地域では秀郷流藤原氏の齊藤氏が台頭してくる。永禄４(1561)年の上杉輝虎の関東出兵時の「関東幕注文」には、「岩下衆　齊藤越前守　六葉柏」とあり、齊藤氏が、本遺跡の北西約３㎞に位置する岩下城を中心に勢力を張ったことが窺える。

16世紀前半には温川上流の手子丸城(大戸城)に拠った大戸氏が勢力を伸ばし、本遺跡の西約2.5㎞に位置する根小屋城に入っている。この根小屋城跡は、吾妻西バイパス建設に伴い発掘調査され、竪穴状遺構、土坑、ピットなどが検出された。同時に根小屋川を挟んだ対岸の根小屋Ｂ遺跡や、根小屋城跡の東側に位置する根小屋遺跡も調査されている。

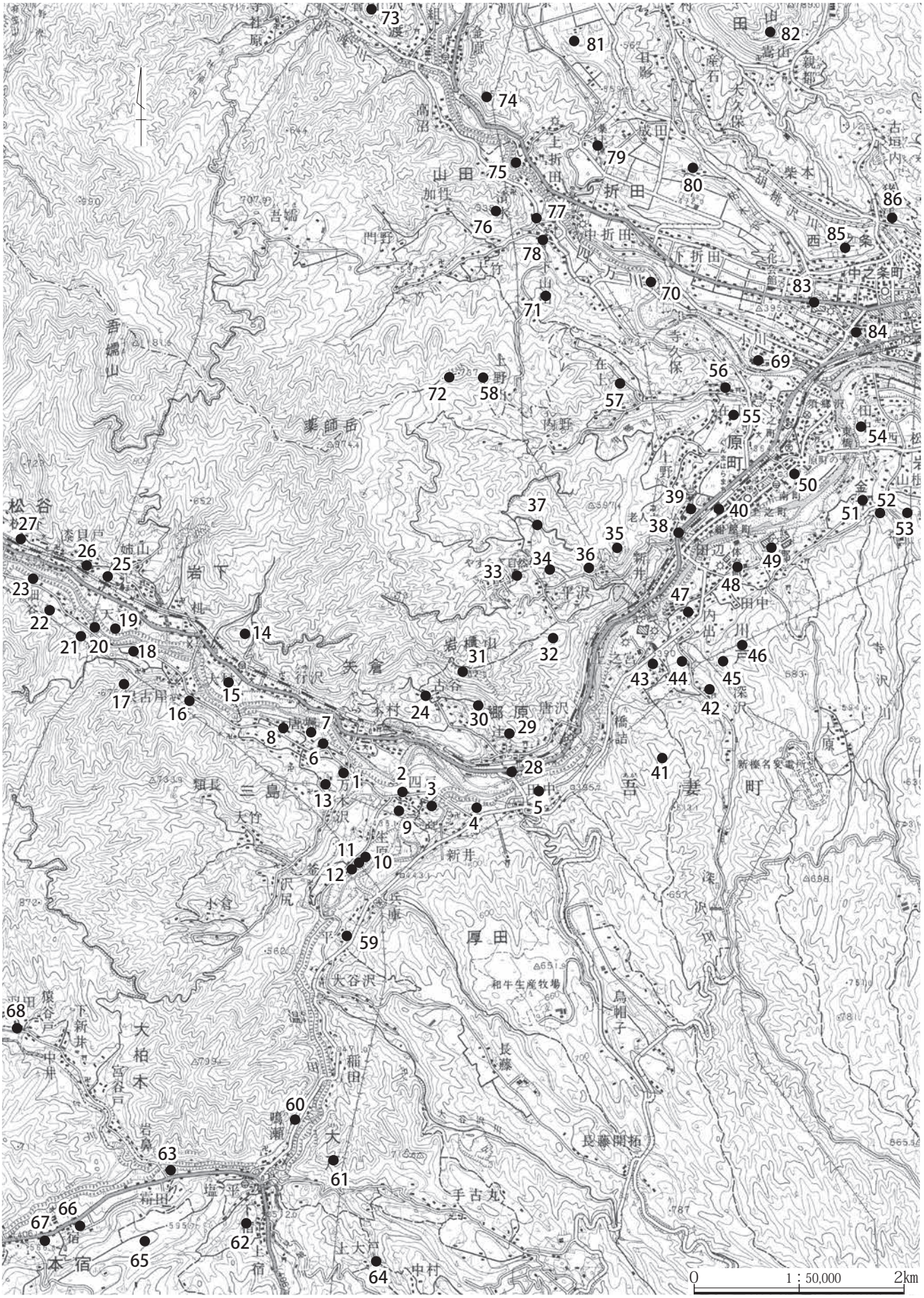
永禄６(1563)年、甲斐・信濃を領した武田信玄の上野国西部への侵攻により、大戸氏は武田氏に従属し、武田氏の部将真田幸隆により齊藤氏の居城であった岩下城が落城し、岩櫃城が武田氏の拠点となった。これによって吾妻郡域は武田氏の支配下となる。その後、岩櫃城は天正10(1582)年の武田氏滅亡後に独立した真田氏の支配下となり、元和元(1615)年に江戸幕府によって発せられた「一国一城令」により破却されるまで存続した。この岩櫃城は、令和元年10月16日に国指定史跡となった。

徳川家康の江戸入府後、本遺跡のある三島村は引き続き真田氏の支配下にあった。そして天和２(1682)年に天領となり、文政７(1824)年には御三卿清水徳川家の支配下となるが、その後の安政２(1855)年には、再度、天領となった。

この間、天明３(1783)年には浅間山が大噴火して火山灰(As-A)を降下させ、吾妻川流域では噴火に伴う泥流被害が知られている。八ッ場ダム建設予定地を中心に、数多くの泥流下の遺跡が確認されている。

中・近世の遺構を検出した遺跡には本遺跡を含め、先述の根小屋城跡や根小屋Ｂ遺跡、根小屋遺跡、他に厚田中村遺跡、新井遺跡、四戸遺跡、唐堀遺跡、唐堀Ｂ遺跡、唐堀Ｃ遺跡、細谷Ｅ遺跡があり、掘立柱建物、墓壙、土坑、溝等が検出されている。

一方、天明泥流によって埋没した畑や水田が検出されている遺跡には、厚田中村遺跡、新井遺跡、唐堀遺跡があり、いずれも一段低い段丘面で検出されている。



第８図　周辺遺跡分布図（国土地理院１/50,000地形図「中之条」平成10年８月１日発行を使用）

第２表　周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	調査歴・備考
1	万木沢Ｂ遺跡				本遺跡
2	四戸遺跡	東吾妻町大字三島字四戸	縄・弥・古・奈・平・中	集落、その他	平成25～28・30年調査(埋文事業団)
3	四戸の古墳群	東吾妻町大字三島字四戸	弥・古	集落、古墳	平成30年調査(埋文事業団)
4	新井遺跡	東吾妻町大字厚田字新井	縄・弥・古・奈・平	集落、その他	平成26～28・30年調査(埋文事業団)
5	厚田中村遺跡	東吾妻町大字厚田字中村	古・奈・平・中	その他	平成25・26・28年調査(埋文事業団)
6	唐堀Ｂ遺跡	東吾妻町大字三島字唐堀	縄・弥・古・奈・平・近	集落、その他	平成26・27年調査(埋文事業団)
7	唐堀遺跡	東吾妻町大字三島字唐堀	縄・古・奈・平・近	集落、その他	昭和55年調査(吾妻町教育委員会) 平成27～30年調査(埋文事業団)
8	唐堀Ｃ遺跡	東吾妻町大字三島字唐堀	縄・奈・平	集落、その他	平成28・30年調査(埋文事業団)
9	峰遺跡	東吾妻町三島四戸388	古	散布地	
10	生原遺跡	東吾妻町三島生原620	古	古墳	
11	石村下古墳	東吾妻町三島生原620	古	古墳	
12	上古墳	東吾妻町三島生原580-1	古	古墳	古墳総覧　岩島村43
13	上反遺跡	東吾妻町大字三島3203	縄	散布地	岩島村誌
14	岩下城跡	東吾妻町岩下	中	城館	中世城館跡779
15	前畑遺跡	東吾妻町岩下76	縄・弥・古・奈・平・中	散布地、集落、墓、他	昭和62年調査(吾妻町教育委員会)
16	根古屋遺跡	東吾妻町三島根古屋	縄・奈・平	その他、不明	根小屋遺跡・根小屋Ｂ遺跡　平成28年調査(埋文事業団)
17	根小屋城跡	東吾妻町三島	中世	城館	中世城館跡780　平成28・30・31年調査(埋文事業団)
18	細谷Ｅ遺跡	東吾妻町三島細谷	弥	散布地	平成28年調査(埋文事業団)
19	弁天淵遺跡	東吾妻町岩下前畑	縄	散布地	
20	細谷Ｄ遺跡	東吾妻町三島細谷5128	縄	散布地	
21	細谷Ｃ遺跡	東吾妻町三島細谷5092他	縄・平	散布地	
22	細谷Ｂ遺跡	東吾妻町三島細谷5542	縄・平	散布地	
23	細谷Ａ遺跡	東吾妻町三島細谷5625	縄	散布地	
24	古谷遺跡	東吾妻町郷原古谷	弥	散布地	
25	天神遺跡	東吾妻町岩下天神873他	弥・古・平	散布地	
26	漆貝戸遺跡	東吾妻町岩下漆貝戸1172他	縄・古	散布地	
27	松谷松下遺跡	東吾妻町大字松谷109他	縄・古・奈・平・中・近	集落	令和元年
28	郷原遺跡	東吾妻町郷原592-1	縄・平・中	散布地、その他	昭和59年・平成６年調査(吾妻町教育委員会)
29	郷原城跡	東吾妻町郷原	中	城館	中世城館跡
30	潜龍院跡(古屋館)	東吾妻町郷原	中	社寺	中世城館跡778　10
31	岩櫃山鷹の巣	東吾妻町原町岩櫃山	弥	墓その他	弥生時代の墓址(明治大学)
32	岩櫃城跡	東吾妻町原町在下	中	城館	中世城館跡781　国指定史跡(令和元年10月16日指定)
33	岩櫃城跡北側遺跡群	東吾妻町原町	縄・中	集落・城館	平成４年調査(吾妻町教育委員会)
34	念仏塚遺跡	東吾妻町原町念仏塚1768	縄・弥	集落	平成３・４年調査(吾妻町教育委員会)
35	柳沢城跡	東吾妻町平沢	中	城跡	中世城館跡783
36	道心穴遺跡	東吾妻町原町4159	弥	散布地	
37	蝦夷穴遺跡	東吾妻町原町雁陳山	弥	墓その他	
38	善導寺前遺跡	東吾妻町原町1091-1	弥・平・中	散布地・墓その他	平成７年調査(吾妻町教育委員会)
39	諏訪前遺跡	東吾妻町原町1018-1	弥・古・平・近世	集落・古墳・生産遺跡	平成６・７年調査(吾妻町教育委員会)
40	原町駅遺跡	東吾妻町原町上之町	平	散布地	
41	川戸楮原遺跡	東吾妻町川戸1364-2他	縄	その他	陥し穴
42	玉科遺跡	東吾妻町川戸1602-1	縄・弥	散布地	古墳総覧　川戸42～51
43	上ノ宮遺跡	東吾妻町川戸上ノ宮	古	散布地	
44	深沢遺跡	東吾妻町川戸深沢	縄・古	集落	
45	水上遺跡	東吾妻町川戸水上	縄・古	集落	
46	城峯城跡	東吾妻町川戸	中	城館	中世城館跡789
47	内出城跡	東吾妻町川戸	中	城館	中世城館跡788
48	下郷Ａ遺跡	東吾妻町川戸下郷284	縄・古	散布地	
49	下郷古墳群	東吾妻町川戸甲271	古	古墳	古墳総覧　川戸62～69
50	原町下ノ町古墳群	東吾妻町原町460	古	古墳	古墳総覧　川原１～16
51	金井廃寺跡	東吾妻町金井472-1	奈	社寺	町指定史跡(昭和47年３月１日指定)　昭和53年発掘調査(吾妻町教育委員会)　古墳総覧　川戸75、
52	岩井寺沢古墳	東吾妻町岩井字寺沢庚1693	古	古墳	古墳総覧　大田村17
53	先陣峠の砦跡	東吾妻町岩井	中	城館	中世城館跡794
54	岩井西古墳群	東吾妻町岩井字西135	古	古墳	古墳総覧　大田村１～14
55	東上野遺跡	東吾妻町原町上野2662-1他	縄・弥・古・奈・平	散布地・集落	
56	稲荷城跡	東吾妻町原町在下	中	城館	中世城館跡787
57	上須郷遺跡	東吾妻町原町上須郷3295-1	古	集落	平成２年(吾妻町教育委員会)
58	高野平城跡	東吾妻町原町	中	城館	中世城館跡
59	平遺跡	東吾妻町大戸1361-1	古	散布地	
60	千人窟陣城跡	東吾妻町大戸	中	城館	中世城館跡774
61	手子丸城跡	東吾妻町大戸	中	城館	中世城館跡775
62	大戸平城跡	東吾妻町大戸	中	城館	中世城館跡773
63	下田遺跡	東吾妻町大字大戸150-1	弥	散布地	平成14～17年試掘(吾妻町教育委員会)
64	上大戸遺跡	東吾妻町大戸3850	縄	散布地	

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	調査歴・備考
65	上ノ原遺跡	東吾妻町本宿175-1	縄	散布地	
66	下宿遺跡	東吾妻町本宿364-1	古	散布地	
67	宿遺跡	東吾妻町大字本宿字宿524他	古	集落	平成３年試掘(吾妻町教育委員会)
68	下中遺跡	東吾妻町大柏木下中	縄	散布地	
69	小川古墳群	中之条町小川362	古	古墳	古墳総覧・中之条町25～28・31～34 町指定史跡(昭和63年３月26日指定)
70	山田勝負瀬古墳群	中之条町山田119-3	古	古墳	古墳総覧・澤田村１～４　町指定史跡(苗吹塚　昭和63年３月26日指定)
71	山田城址(古城)	中之条町山田696	中	城館	中世城館跡750山田古城 町指定史跡(平成６年12月１日指定)
72	高野平城跡	中之条町山田	中	城館	中世城館跡751　吾妻町境に位置する
73	天狗山城址	中之条町下沢渡	中	城館	中世城館跡746
74	内山城址	中之条町折田2070-1	中	城館	中世城館跡753仙蔵城 町指定史跡(平成６年12月１日指定)
75	折田屋敷跡	中之条町折田	中	城館	中世城館跡754
76	桑田城址(寺山)	中之条町山田2181-1	中	城館	中世城館跡748 町指定史跡(平成６年12月１日指定)
77	清水敷石住居跡	中之条町山田清水2289-3	縄	集落	遺跡台帳3065
78	吉城址	中之条町山田	中	城館	中世城館跡749
79	成田遺跡	中之条町折田成田原2344	弥	集落	遺跡台帳3062
80	成田原千貫遺跡	中之条町折田千貫2859	縄・弥	散布地	遺跡台帳3066　中世城館跡752
81	蓑原遺跡	中之条町五反田4373-1	縄・奈・平	散布地、その他	平成17年立会調査
82	嵩山城址	中之条町五反田	中	城館	中世城館跡760 町指定史跡(昭和63年３月26日指定)
83	永田原遺跡	中之条町西中之条永田原119	古	古墳	遺跡台帳3078　古墳総覧・中之条町38
84	中条城址	中之条町中之条	中	城館	中世城館跡755
85	城峯城跡	中之条町西中之条	中	城館	中世城館跡756 町指定史跡(昭和63年３月26日指定)
86	法満寺遺跡	中之条町中之条町法満寺2268	弥	散布地	遺跡台帳3076

文　献

1『年報37　―万木沢Ｂ遺跡―』2018　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報38　―唐堀遺跡―』2019　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
2『年報33　―四戸遺跡―』2014　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報34　―四戸遺跡―』2015　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報35　―四戸遺跡―』2016　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報36　―四戸遺跡―』2017　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報38　―四戸遺跡―』2019　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『四戸遺跡』2020　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
3『年報38　―四戸の古墳群―』2019　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『四戸の古墳群』2020　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
4『年報34　―新井遺跡―』2015　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報35　―新井遺跡―』2016　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報36　―新井遺跡―』2017　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報38　―新井遺跡―』2019　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
5『年報33　―厚田中村遺跡―』2014　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報34　―厚田中村遺跡―』2015　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報36　―厚田中村遺跡―』2017　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『厚田中村遺跡』2018　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
6『年報34　―唐堀Ｂ遺跡―』2015　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報35　―唐堀Ｂ遺跡―』2016　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『唐堀Ｂ遺跡』2017　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
7『唐堀遺跡』1983　吾妻町教育委員会
『年報35　―唐堀遺跡―』2016　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報36　―唐堀遺跡―』2017　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報37　―唐堀遺跡―』2018　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報38　―唐堀遺跡―』2019　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『唐堀遺跡(１)』2021　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
8『年報36　―唐堀Ｃ遺跡―』2017　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報38　―唐堀Ｃ遺跡―』2019　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『唐堀Ｃ遺跡』2021　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
15『前畑遺跡』1998　吾妻町教育委員会
16『年報36　―根小屋遺跡―』2017　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報36　―根小屋Ｂ遺跡―』2017　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
17『年報36　―根小屋城跡―』2017　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『年報38　―根小屋城跡―』2019　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
18『年報36　―細谷Ｅ遺跡―』2017　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
27『松谷松下遺跡』2014　東吾妻町教育委員会
28『郷原遺跡』1985　吾妻町教育委員会
『郷原遺跡』1998　吾妻町教育委員会
32『吾妻町指定史跡　岩櫃城跡』1993　吾妻町教育委員会
『岩櫃城跡北側遺構群遺跡』1994　吾妻町教育委員会
『東吾妻町指定史跡　岩櫃城跡』2016　東吾妻町教育委員会
『東吾妻町指定史跡　岩櫃城跡総合調査報告書』2018　東吾妻町教育委員会
34『念仏塚遺跡』1994　吾妻町教育委員会
38『善導寺前遺跡』1996　吾妻町教育委員会
39『諏訪前遺跡Ⅰ』2004　吾妻町教育委員会
51『金井廃寺遺跡』1979　吾妻町教育委員会
57『上須郷遺跡』1992　吾妻町教育委員会
67『宿遺跡発掘調査報告書』1993　吾妻町教育委員会

第３章　基本層序

本遺跡は吾妻川右岸にあり、四戸遺跡や四戸の古墳群を有する北側の吾妻川に突出した温川と万木沢川に挟まれた広い河岸段丘上(最下位段丘面群)の西側で、万木沢川の対岸となる幅狭な河岸段丘上に立地する。天明三(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流が吾妻川を流下した際の痕跡は、調査地内に確認できなかった。近隣では、温川を遡上した記録はあり、温川東側の新井遺跡調査においては、温川沿いの一段低い部分に泥流堆積物が確認されている。また、本遺跡の北西に位置する唐堀遺跡調査においても、一段低い河岸段丘面に泥流堆積物に覆われた棚田状の水田が検出されている。

万木沢川を挟んだ東側の四戸遺跡と同一段丘面となる本遺跡の調査地内には、四戸遺跡や西側の唐堀Ｂ遺跡と同様にAs-Kk(浅間－粕川軽石)の堆積が確認され、さらにAs-Ｂ(浅間－Ｂ軽石)の火山灰も確認されている。また、先述したように、本遺跡の位置する河岸段丘面は伊勢町Ⅰ(Is-Ⅰ)面であり、調査時にローム層としていたのは、四戸遺跡と同様なローム層に類似した褐色砂礫層の最上部堆積物である。しかも、四戸遺跡でもあったように、礫層頂部が地点により褐色砂礫層上面付近にまで露出している箇所も確認できる(２区での５号溝底面付近や１区で検出された２号土坑底面など)。

調査地内の５カ所の地点での層序をみると、最上位のⅠ層に表土(現耕作土)となる黒褐色土、Ⅱ層とした赤色を帯びた暗赤褐色土は調査地の南西側を沿うようにみられる。Ⅲ層はAs-Kkを主体とした黒褐色土で、１区東端付近の一段低い部分にはⅡ・Ⅲ層が確認できなかった。Ⅳ層がAs-Kk一次堆積の鈍い黄褐色軽石層となり、調査地全体を覆っている。そして、この軽石層下面に古代の畠が検出されることから、Ⅳ層下面を第１面調査の確認面とし、併せて中世以降の調査も行った。さらに、下位となるⅤ層としたAs-B一次堆積の褐灰色火山灰層には、下面に粗粒火山灰を薄く伴うことも確認されている。Ⅵ層は非常に極め細かい黒褐色土で古代畠の耕土となるが、部分的にⅥa層となる褐灰色土が確認されている。古墳時代から古代を対象とした第２面調査の遺構確認面としたのは、この第Ⅵ層下位ないしⅦ層上面である。第２面調査の下位にはⅦ層とした縄文・弥生時代の遺構と遺物が出土する暗褐色土となるが、地点によって土色の明暗により分層することができた。また、Ⅶ層の堆積は、段丘の北面ほど薄い状況であることも確認できた。本調査で最も多くの遺物出土があったのが、このⅦ層であり、第３面調査の要因ともなった。第３面調査は、Ⅶ層下面および漸移層となるＡ・Ｃ地点での１層上位を遺構確認面とし、１区と２区東半を主に展開することとなった。

漸移層を含めたⅦ層より下位の層序については、地点により状況が異なる。また、礫層の位置もまちまちである。

以下、調査地内の各地点の層序を第９図に示し、それぞれの堆積層について、調査時の記録を基に記す。

基本土層Ａ地点(１区東壁中央)

Ⅰ　褐灰色土　As-Kkを多量に含む表土。
Ⅳ　灰黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。
Ⅴ　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。
Ⅵ　黒褐色土　非常に極め細かく、極僅かに小礫を含む。
Ⅶa　暗褐色土　土質はⅥ層と同じ。
Ⅶb　暗褐色土　Ⅶa層よりやや暗色で、ローム粒子・白色粒子を含む。
１　灰黄褐色土　漸移層で、２層とⅦb層の混土。
２　黄褐色土　やや砂質のローム土で、白色粒子を僅かに含む。
３　黒褐色土　粘質ローム土で、黒色土が強く、締まっている。
４　礫層　小～大型の円礫で構成され、礫間に３層が入る。

基本土層Ｂ地点(２区南西壁)

Ⅰ　黒褐色土　表土(現耕作土)。As-Kkを多量に含む。
Ⅰb　黒褐色土　Ⅰ層より明るい。
Ⅱ　暗赤褐色土　As-Kkを多量に含み、赤色を帯びる。
Ⅲ　黒褐色土　As-Kkを主体とする。

Ⅳ　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。下面に安山岩岩片を伴う。
Ⅴ　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。下面に粗粒火山灰が薄く堆積。
Ⅵ　黒褐色土　非常に極め細かく、極僅かに小礫を含む。
Ⅵa　褐灰色土　Ⅵ層を主体にⅤ層を含む混土。
Ⅶ　暗褐色土　土質はⅥ層と同じ。
Ⅶb　暗褐色土　Ⅶ層と同じだが明るい。
Ⅷ　黒褐色土　やや砂質で、非常に極め細かく、黒色を帯びる。
Ⅸ　鈍い黄褐色土　砂質を帯びるローム土で、非常に極め細かい粒子より成る。
Ⅹ　礫層　　小・中型の円礫を主体とし、礫間にⅨ層が入る。

基本土層Ｃ地点（２区北東壁）

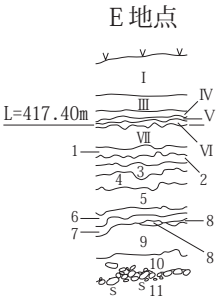
Ⅰ　黒褐色土　表土（現耕作土）。As-Kkを多量に含む。
Ⅰb　黒褐色土　Ⅰ層より明る。
Ⅲ　黒褐色土　As-Kkを主体とする。
Ⅳ　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。下面に安山岩岩片を伴う。
Ⅴ　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。下面に粗粒火山灰が薄く堆積。
Ⅵ　黒褐色土　非常に極め細かく、極僅かに小礫を含む。
Ⅵa　褐灰色土　Ⅵ層を主体にⅤ層を含む混土。
Ⅶ　暗褐色土　土質はⅥ層と同じ。
1　暗褐色土　漸移層で、粘性強く、締まっている。
2　褐色ローム土　粘性強く、締まっている。
3　明褐色ローム土　ややシルト質で、粘性強く、締まっている。
4　橙色ローム土　ややシルト質。
5　褐色ローム土　暗褐色の鉄分沈殿凝集ブロックを斑状に含む。下半部は砂質ぎみ。
6　褐色ローム土　シルト質ローム。
Ⅹ　礫層　　小・中型の円礫を主体とし、礫間にⅨ層が入る。

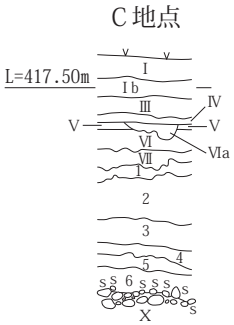
基本土層Ｄ地点（３区南西壁）

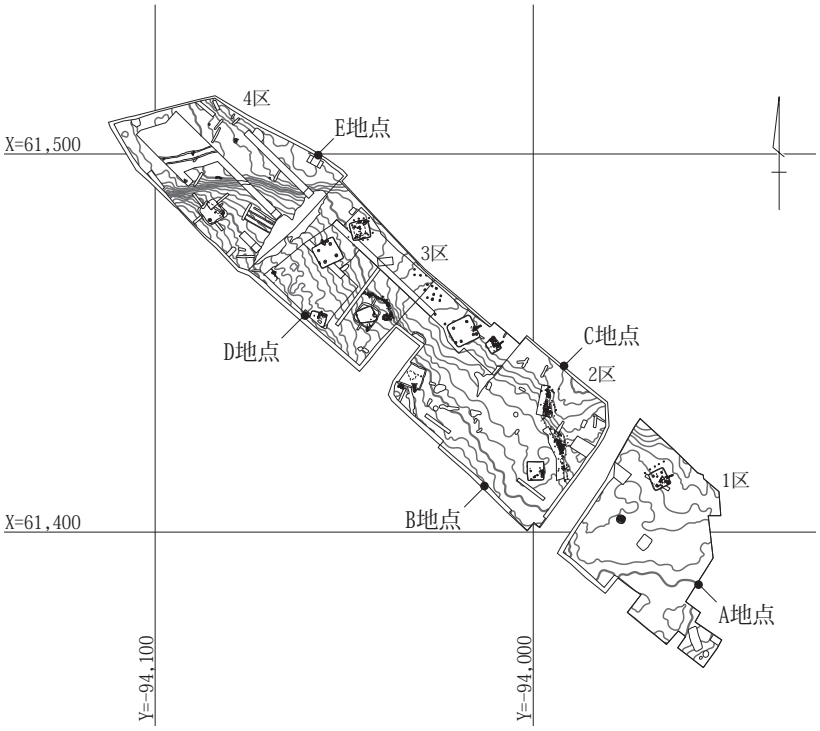
Ⅰ　黒褐色土　表土（現耕作土）。As-Kkを多量に含む。
Ⅱ　暗赤褐色土　As-Kkを多量に含み、赤色を帯びる。
Ⅲ　黒褐色土　As-Kkを主体とする。
Ⅳ　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。下面に安山岩岩片を伴う。
Ⅴ　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。下面に粗粒火山灰が薄く堆積。
Ⅵ　黒褐色土　非常に極め細かく、極僅かに小礫を含む。
Ⅶ　暗褐色土　土質はⅥ層と同じ。
Ⅷ　黒褐色土　やや砂質で、非常に極め細かく、黒色を帯びる。
Ⅸ　鈍い黄褐色土　砂質を帯びるローム土で、非常に極め細かい粒子より成る。
Ⅸb　鈍い黄褐色砂質ローム　Ⅸ層よりも砂質が強く、極細粒の砂を主体とする。
Ⅹ　礫層　　小・中型の円礫を主体とし、礫間にⅨb Ⅸ層が入る。

基本土層Ｅ地点（４区北東壁）

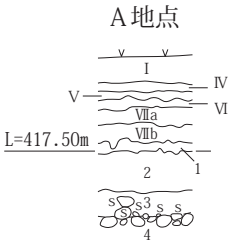
Ⅰ　黒褐色土　表土（現耕作土）。As-Kkを多量に含む。
Ⅲ　黒褐色土　As-Kkを主体とする。
Ⅳ　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。下面に安山岩岩片を伴う。
Ⅴ　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。下面に粗粒火山灰が薄く堆積。
Ⅵ　黒褐色土　非常に極め細かく、極僅かに小礫を含む。
Ⅶ　暗褐色土　土質はⅥ層と同じ。
1　褐色ローム　ローム粒子を僅かに含む。
2　灰褐色ローム　ローム粒子を少量含む。
3　灰褐色砂質ローム　細砂粒を主とし、ややシルト質。
4　灰褐色砂質ローム　３層よりやや明るく、シルト質。
5　明褐灰色シルト質ローム
6　明褐灰色シルト質ローム　５層より粘質。
7　褐灰色シルト質ローム　細かな砂礫を少量含む。
8　明褐灰色粘質ローム　６層と同じ。
9　灰褐色。シルト質ローム
10　橙色砂質ローム
11　橙色砂礫層　小・中型の円礫を主体に、小さな砂礫を含む。

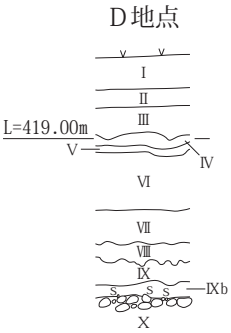


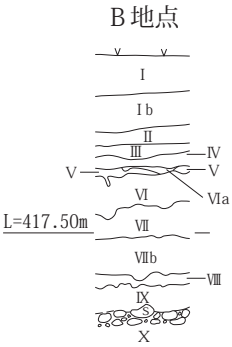




平面図
0　1：2,000　100m







セクション図
0　1：80　2m

第９図　各地点の基本層序

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　調査の概要

試掘調査の結果、浅間粕川テフラ(As-Kk:1128年降下)に覆われた古代の畠跡、その下層に竪穴建物、さらに縄文時代から弥生時代初頭の遺物が出土したことから、平成29年４月から同年11月までの８ヶ月間の予定で本格的な発掘調査が行われるに至った。また、翌平成30年11月７日には、切回し道路の設置により安全性が確保できた町道法面に接する１区北側部分に対し、縄文時代の遺物回収を目的とした追加調査を行った。

調査の開始にあたり、対象地の最も万木沢川に寄った道路東側の区画を１区とし、順次西側へ４区までを設定した。調査は、１区および２区東半を先行する形で進められ、まず中・近世および古代の畠(As-Kk下)を対象とした第１面調査、その後に古墳時代～古代を対象とした第２面調査、さらに縄文時代を対象とした第３面調査へと順次進行させた。その結果、第１面調査では中世から近世の畠や土坑・溝等が中心に検出され、第２面調査では古墳時代から奈良・平安時代に至る各時代の竪穴建物や土坑、溝、集石等といった遺構と遺物が検出された。さらに、１区の第２面調査時に基本土層Ⅶ層中より縄文土器が出土したことから、縄文時代を対象とした第３面調査を行うこととなった。この第３面調査は、１区を主に２区東半までを対象とし、縄文時代の遺物がほとんど出土しない２区西半以西では行っていない。１区における縄文時代の遺物の出土量は極めて多量で、併せて巨礫や大・中型礫も多数出土し、配石遺構の存在も視野に入れざるを得ない状況となっていた。特に、遺物の出土状況は、当初は数カ所の集中箇所の点在かと思われたが、最終的には幅広な溝内に集中している状況で、溝内の上位と下位に配石や埋設土器を伴うことが明らかとなった。また、溝の周囲に土坑が点在して検出されたが、竪穴建物は検出されていない。この第３面調査の続く１区に併行し、２区東半の調査終了後は、４区の調査に着手した。さらに、４区調査終了後には、２区西半と３区の調査へと移行し、各面の調査を終了させた。結局のところ、１区の調査は最後まで継続する結果となった。

なお、各調査区の調査終了段階には、ローム層への旧石器時代の確認調査を行ったが、旧石器時代の遺構・遺物は出土していない。

以上の結果、検出された遺構には、縄文時代の土坑24基、配石遺構13基、炭化物集中５ヵ所、溝２条、古墳時代から平安時代の竪穴建物13軒、掘立柱建物３棟、集石６基、柱穴列１基、溝１条、畠２区画、中世以降の土坑61基、溝３条、畠１区画、他に縄文時代以降のピット15基である。出土した遺物には、縄文時代の土器をはじめとして、土偶や土製品、石器には石鏃や石匙、打製・磨製石斧、凹石、磨石、石皿、台石、砥石、さらには石棒・石剣、玉、管玉といった石製品類もある。そして、古墳時代以降の遺物として、竪穴建物から出土した土師器や須恵器、石製品等がある。その量は、遺物収納箱で160箱を数える。

以下、各時代ごとに記述する。

第３表　区別遺構数量

	第３面調査				第２面調査						第１面調査		
	縄文時代				古墳～古代						中世以降		
	土坑	配石	炭化物集中	溝	竪穴建物	掘立柱建物	集石	柱穴列	溝	畠	土坑	溝	畠
１区	23	13	5	2	1		1	1	1	2	7		
２区	1			1	5	2	4			(1)	28	3	
３区					6	1	1			(1)	10		1
４区					1					(1)	16		

第２節　縄文時代の遺構と遺物

第１項　概要

本調査での１区および２区東半における第３面調査において、縄文時代の遺構と多量の土器・石器の出土があった。遺構の種類としては、竪穴建物は検出されていないが、土坑が24基、配石が13基、炭化物集中が５か所、溝は１区と２区に跨る４・５号溝(同一溝)と６号溝の２条で、土坑や配石の多くが溝の内外を含む周辺に集中している(第10図参照)。遺物の出土のあり方は、その多くが１区の東側を蛇行する６号溝内に集中しており、極めて特徴的とも言える。これら遺物の種類には、土器はもちろんであるが、土偶や土製品、垂飾りの土玉も含まれる。石器もかなり多く、700点を超える石鏃をはじめ、石鏃の未製品、石錐や石匙、スクレイパー、打製・磨製石斧、二次加工剥片、石核、凹石、磨石、敲石、石皿、台石等々の各種の器種が揃い、他に石棒、石剣、石刀、石製品の垂飾りとしては小玉や平玉、管玉といった数種類の玉類､その未製品および粗割段階のものも含まれる。また、これら遺物と共に、動物のものと考えられる細かな牙歯や骨片も多く出土している。しかし、牙歯や骨片が纏まって出土するような遺構は検出されていない。

こうした６号溝の状況を考えるにあたり、６号溝内に19～22号土坑、１～13号配石があり、６号溝とこれら遺構との関連性を考える手掛かりを暗示している。

一方、６号溝内における配石遺構や遺物の出土状況からは、溝の埋没には時間的推移が垣間見られる。溝の北側に位置する１号配石の大型礫検出層位は、６号溝内の比較的上位にあり、周囲の同一面上にも大型礫や土器が多く出土している。これに対し、同じ溝北側に位置する12・13号配石は、１号配石大型礫より下位の面で検出されている。まして、１号配石の大型礫直下には、完形の大型深鉢土器と深鉢土器の胴下半の２個体が埋設されていた。このことからも、６号溝埋没には２段階の時間的な所作が想定されよう。

さらに別な視点として、検出された遺構について考えてみると、遺物包含層のみで構成される遺跡はなく、遺物を多く伴う遺跡は集落、あるいは集落(遺構群)に極めて近い位置であることが多い。本調査で検出された遺構には竪穴建物はなく、土坑や配石、溝、炭化物集中箇所といったもので構成されている。仮に廃棄の場であったとしても、その周囲には居住域が想定される。つまり、調査での出土遺物量からすれば、これらの遺物を使用したであろう縄文人の居住域が不明な点は何故かということにある。むしろ、居住遺構として、竪穴建物以外の構造物の可能性を考える必要性があろう。

第２項　土坑

検出された縄文時代の土坑は、１区と２区東半における第３面調査において検出された。その数は計24基で、１区に23基、２区東半に１基である。

以下､各土坑ごとに記載する｡(第43表　土坑一覧を参照)

１号土坑(第11・16図、第４・43表、PL.12・37)

位置：２区東半の北側に位置し、東側に５号溝がある。

グリッド：１Ｌ－17・18

座標値：X=61,437～61,440　Y=-93,995～93,998

検出状況：第２面調査時に検出された。壁は南壁が垂直ぎみに、他はやや緩く立ち上がる。底面は概ね平坦となる。遺物の出土は２層中に多く、土器や石器、中でも黒曜石製の剥片が多い。

形状：楕円形

規模：長軸3.54m　短軸2.06m　深さ66㎝

長軸方向：Ｎ－72°－Ｗ

埋没土：１・２層の黒褐色土を主体とし、下位に３層の褐灰色土、４層の暗褐色土を埋土とする。

遺物：出土した遺物には、土器と石器(スクレイパー１点、二次加工ある剥片１点、石核１点、凹石１点、磨石３点、黒曜石製の剥片が22点)ある。

図示した遺物は、土器片５点と石器４点(他に写真掲載２点あり)である。

土器の１は平口縁の口縁部に横位の沈線を廻らせ、２は平口縁の口縁以下に斜位の細密沈線を施す。３は胴部に細く短いＬＲの縄文で縦位回転による斜縄文を施し、４は胴部に斜位の細密沈線を浅く施している。５は平底となる底部で、底部付近にまで細密沈線を施し、底面に網代痕をもつ。

石器の６は粗粒輝石安山岩製の凹石で、粗い研磨と表面中央に凹みをもつ。７～９は粗粒輝石安山岩製の

第10図　縄文時代遺構配置図

磨石で、７・８は中型で全体に丁寧な研磨が施される。９は全体に丁寧な研磨が施され、小型で滑らかである。

所見・時期：検出面と出土した土器から、時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

２号土坑(第11・16・17図、第５・43表、PL.12・37)

位置：１区の南東側に位置し、西側には蛇行する６号溝、北東側に３・４号土坑が近接する。

グリッド：１Ｅ－７

座標値：X=61,385・61,386　Y=-93,960・93,961

検出状況：第３面調査時に検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は礫層面に達する。また、３層中に炭化物を多く含むのが特徴的である。土坑上部および埋土中からは多くの遺物が出土したが、特に石器の出土量が多い。

形状：円形

規模：長軸1.35m　短軸1.30m　深さ52cm

埋没土：１層の黒褐色土と２層の暗褐色土を主体とし、下位に３層の炭化物を多く含み黒味の強い黒褐色土、さらに礫層との間の充填土となる４層の暗褐色粘質土を埋土とする。なお、３層および４層は、人為的な堆積の可能性が高い。

遺物：出土した遺物には、土器と石器(石鏃の未製品１点、凹石４点、石製研磨具１点、磨石４点、台石４点、黒曜石製の剥片)がある。

図示した遺物は、土器片４点と石器５点である。

土器の10は平口縁の口縁直下に横位沈線が巡り、頸部無文帯となる括れ部を２条の横位沈線で区画し、以下の胴部に細い縄文を施し、胴部最大径部分にも横位沈線を巡らせる。11・12は胴部に斜位の細密沈線を施す。13は壺の口縁部片で、口縁下に４条の横位沈線が巡る。

石器の14は粗粒輝石安山岩製の凹石で、表裏面に凹みをもつ。15は石英閃緑岩製の小型の石製研磨具で、研磨痕・線条痕は明瞭ではないが、礫面に光沢差が認められる。16・17は粗粒輝石安山岩製の磨石で、全体に丁寧な研磨が施される。18は粗粒輝石安山岩製の台石で、全体に研磨が施され、表面に敲打痕を伴う摩耗痕が認められる。

所見・時期：検出面と出土した土器から、時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

３号土坑(第11・17図、第６・43表、PL.12・37)

位置：１区の南東側に位置し、南西側に４号土坑が近接、さらに２号土坑があり、北側に７号土坑がある。

グリッド：１Ｄ－７

座標値：X=61,387・61,388　Y=-93,958・93,959

検出状況：第３面調査時に検出された。１層上位には炭化物を多く含み、遺構確認の指標となった。壁は斜位に立ち上がり、底面はやや狭い。遺物の出土は多くない。

形状：楕円形

規模：長軸1.08m　短軸1.00m　深さ42cm

長軸方向：Ｎ－19°－Ｅ

埋没土：１層の黒褐色土と２層の暗褐色土を主体とし、下位に３層の鈍い黄褐色土を埋土とする。

遺物：出土した遺物は少なく、石器(石鏃１点、黒曜石製の剥片数点)がある。

石器１点を図示した。19は黒曜石製の両面加工の小型な平基有茎鏃である。

所見・時期：検出面と周囲の状況から、時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

４号土坑(第11図、第43表、PL.12)

位置：１区の南東側に位置し、南西側に２号土坑、北東側に３号土坑が近接する。

グリッド：１Ｄ・１Ｅ－７

座標値：X=61,386～61,388　Y=-93,959・93,960

検出状況：第３面調査時に検出された。壁は斜位に立ち上がり、底面はやや狭く平坦。遺物は１層中から出土している。

形状：楕円形

規模：長軸1.20m　短軸0.82m　深さ26cm

長軸方向：Ｎ－41°－Ｗ

埋没土：１層の暗褐色土を主体に、２層の鈍い黄褐色土を埋土とする。

遺物：出土した遺物は、僅かに石器(台石)１点のみである。

所見・時期：検出面と周囲の状況から、時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

５号土坑(第12図、第43表、PL.12)

位置：１区中央の南寄りに位置し、本土坑の南端に17号土坑、北端に18号土坑が重複する。東側には蛇行する

６号溝が近接し、南側の壁際には６号土坑がある。

グリッド：１Ｇ－８

座標値：X=61,391～61,393　Y=-93,971～93,973

検出状況：第３面調査時に検出された。本土坑の掘削後に重複する２基の土坑を確認したため、その新旧は不明。１層上位には炭化物を多く含み、遺構確認の指標となった。壁は斜位に立ち上がり、西壁には段を有する。底面は狭く、擂鉢状を呈する。遺物は土坑上面からの出土のみで、土坑内からの出土はない。

形状：楕円形か

規模：長軸(2.33)m　短軸2.09m　深さ99cm

長軸方向：Ｎ－19°－Ｅ

埋没土：１・２層および３層の黒褐色土を主体とし、壁際と底面には４層の鈍い黄褐色土を埋土とする。

遺物:出土した遺物は少なく、石器(凹石１点、台石１点)のみである。

所見・時期：検出面と周囲の状況から、時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

６号土坑(第11図、第43表、PL.12)

位置：１区南壁の中央壁際に位置し、北東側に６号溝が近接、北側に５・17・18号土坑がある。

グリッド：１Ｇ－７

座標値：X=61,385・61,386　Y=-93,971～93,973

検出状況：第３面調査時に検出された。壁は斜位に立ち上がり、底面はやや狭く平坦ぎみ。遺物は１層中から出土している。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸1.37m　短軸0.90m　深さ32cm

長軸方向：Ｎ－68°－Ｗ

埋没土：１層の黒褐色土を主体とし、下位に２層の鈍い黄褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

７号土坑(第12・17図、第７・43表、PL.12・37)

位置：１区東側の中央付近に位置し、南側に３号土坑、さらに２号土坑があり、西側に15号土坑がある。

グリッド：１Ｄ－８

座標値：X=61,391・61,392　Y=-93,957・93,958

検出状況：第３面調査時に検出された。壁はやや斜位ぎみに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。遺物は上位層中から出土している。

形状：楕円形

規模：長軸1.22m　短軸1.06m　深さ53cm

長軸方向：Ｎ－11°－Ｅ

埋没土：１・２層の黒褐色土、３・４層の暗褐色土を主体とし、下位の５・６層とした褐色土および暗褐色土に分層できる。

遺物：出土した遺物には、土器と石器(黒曜石製の剥片)がある。

図示した遺物は、土器片６点である。

20は小波状突起をもつ平口縁の口縁直下に４条の横位沈線を添わせ、口縁下となる頸部無文帯下に４条の横位沈線を巡らせて胴部と区画する。21・22は口端部が有段状となり、21の口縁下には横位沈線が施される。23は平口縁の口縁下は無文。24は口縁下に８条の横位沈線を施す。25は胴部に斜位の細密沈線を施している。

所見・時期：検出面と出土した土器から、時期は縄文時代晩期末葉ないし弥生時代前期と考えられる。

８号土坑(第12図、第43表、PL.13)

位置：１区西側の南寄りに位置し、北側に９号土坑、南側に11号土坑があり、西側には４号溝が近接する。

グリッド：１Ｉ－９

座標値：X=61,395～61,397　Y=-93,981・61,982

検出状況：第３面調査時に検出された。壁は緩く斜位に立ち上がり、底面は擂鉢状を呈する。遺物の出土はない。

形状：円形

規模：長軸1.45m　短軸1.42m　深さ29cm

埋没土：１層の黒褐色土を主体とし、下位に２層の鈍い黄褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

９号土坑(第13図、第43表、PL.13)

位置：１区西側の南寄りに位置し、北側に10号土坑、南側に９号土坑があり、西側には４号溝が近接する。また、４号溝を挟んだ西側に16号土坑がある。

グリッド：１Ｉ－９

座標値：X=61,398・61,399　Y=-93,980～93,982
検出状況：第３面調査時に検出された。壁は斜位に立ち上がり、底面は狭く擂鉢状を呈する。遺物の出土はない。
形状：円形
規模：長軸1.38m　短軸1.31m　深さ35cm
埋没土：１層の黒褐色土を主体とし、下位に２層の鈍い黄褐色土を薄く埋土とする。
所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

10号土坑(第13・17図、第８・43表、PL.13・37)
位置：１区西側の中央付近に位置し、南側に９号、８号、11号土坑の順で、４号溝の東縁に土坑が連なる。
グリッド：１Ⅰ－10
座標値：X=61,400～61,402　Y=-93,978～93,980
検出状況：第３面調査時に検出された。掘り込み面は基本土層Ⅶ層内にあることが、土層断面で確認されている。壁は東側ほど緩く斜位に立ち上がり、底面は狭く西側に寄る。また、１層より上位のⅦ層中に完形土器が出土しているものの本土坑には伴わず、本土坑に伴う遺物としては土器１点がある。
形状：楕円形
規模：長軸1.58m　短軸1.43m　深さ56cm
長軸方向：Ｎ－51°－Ｗ
埋没土：１・２層の黒褐色土を主体とし、下位に３層の鈍い黄褐色土を薄く埋土とする。
遺物：土器片１点が出土した。26は細い数条の沈線で横位連弧状の文様と横位沈線を巡らせる。
所見・時期：検出面と出土した土器から、時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

11号土坑(第13図、第43表、PL.13)
位置：１区西側の南寄りに位置し、北側に８号、９号、10号土坑の順で、４号溝の東縁に土坑が連なる。
グリッド：１Ⅰ－8
座標値：X=61,393・61,394　Y=-93,981・93,982
検出状況：第３面調査時に検出された。壁は緩く斜位に立ち上がり、底面は擂鉢状を呈する。遺物の出土はない。
形状：円形
規模：長軸1.07m　短軸1.03m　深さ25cm
埋没土：１層の黒褐色土を主体とし、下位に２層の鈍い黄褐色土を埋土とする。
所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

12号土坑(第13・17・18図、第９・43表、PL.13・38)
位置：１区東側の中央やや北寄りに位置し、東側に13・14号土坑、西側に大きく蛇行する６号溝がある。
グリッド：１Ｄ－９・10
座標値：X=61,398～61,400　Y=-93,958～93,960
検出状況：第３面調査時に検出された。壁はやや垂直ぎみに立ち上がり、底面は平坦となる。遺物には土器と多くの石器、さらに土・石製品があり、これら土器・石器は上層の１層からの出土である。
形状：円形
規模：長軸1.69m　短軸1.62m　深さ71cm
埋没土：１層の黒褐色土中に遺物を多く含み、２・３層の灰黄褐色土と暗褐色土とで上位土の主体をなす。４層は三角堆積状の暗褐色土、５層は２号土坑４層に近似する暗褐色粘質土となる。
遺物：出土した遺物には、土器と土製品１点、石器(石鏃６点、スクレイパー１点、石核２点、凹石３点、磨石２点、台石３点黒曜石製の剥片40点)、そして石製品１点がある。

図示した遺物は、土器８点と土製品１点、石器８点、石製品１点である。

27は平口縁の小型の鉢で、口縁部がやや内反ぎみとなり、口縁下に１条の横位沈線が巡る。28は口縁直下に横位回転のＬＲの狭い縄文帯と２条の横位沈線を巡らせ、その下を無文帯とする。29は無文帯と横位沈線が施される。30は胴部に浅く細密沈線が施されている。31～33は平底の底部で、31・32は底部付近にまで胴部に細密沈線が施され、31の底面には網代痕をもつ。33の底部付近は無文で、底面に木葉痕をもつ。

土製品の34は土玉である。長さ2.3cm、幅2.1cmを測り、中央に細い孔が貫通する。表面全体に曲線文様を沈線で施し、赤彩の痕跡が残る。

石器は35・36が両面加工の石鏃で、35は赤碧玉製の小型の凹基有茎鏃で、36は黒曜石製の凹基有茎鏃である。37のスクレイパーは黒曜石製。38は粗粒輝石安山

岩製の凹石で、全体に研磨と、表裏面に凹みをもつ。39・40は粗粒輝石安山岩製の磨石で、39は小型で丁寧な研磨が施され、さらに端部に敲打痕をもつ。40は全体に研磨が施されている。41・42は粗粒輝石安山岩製の欠損する台石で、41は表裏面に平坦な磨面が認められ、42は表面中央に平坦な磨面が認められる。

石製品の43はヒスイ製の垂飾りで、緑白色をなし、丁寧な研磨が施されて光沢がある。

所見・時期：検出面と出土した土器から、時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

13号土坑(第14図、第43表、PL.14)

位置：１区東壁の中央やや北寄りの壁際近くに位置し、北東側に14号土坑が近接、西側に12号土坑がある。

グリッド：１Ｃ・１Ｄ－９

座標値：X=61,397・61,398　Y=-93,954～93,956

検出状況：第３面調査時に検出された。壁はやや斜位に立ち上がり、底面は概ね平坦。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸1.76m　短軸1.10m　深さ34cm

長軸方向：Ｎ－62°－Ｗ

埋没土：１層の黒褐色土を主体とし、下位に２層の鈍い黄褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

14号土坑(第14図、第43表、PL.14)

位置：１区東壁の中央北寄りの壁際に位置し、南西側に13号土坑が近接、西側に12号土坑がある。

グリッド：１Ｃ－９・10

座標値：X=61,399・61,400　Y=-93,954

検出状況：第３面調査時に検出された。土坑の東側は、調査範囲外へと続く。掘り込み面は基本土層Ⅶ層内にあることが、土層断面で確認されている。壁は南西側ほど緩く斜位に立ち上がり、底面を僅かに確認した。遺物の出土はない。

形状：不明

規模：長軸1.30m　短軸0.57m　深さ50cm

埋没土：３層となる基本土層Ⅶ層との分層は明確でないが、その下位の４・５層とした黒褐色土と鈍い黄褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

15号土坑(第14図、第43表、PL.14)

位置：１区東側の中央付近に位置し、東側に３号土坑があり、西側に６号溝が近接する。

グリッド：１Ｅ－８

座標値：X=61,392　Y=-93,963

検出状況：第３面調査時に検出された。径も小さく柱穴状を呈する。ほぼ垂直な掘り込みで、底面も深い。遺物は僅かであるが出土している。

形状：楕円形

規模：長軸0.56m　短軸0.48m　深さ90cm

長軸方向：Ｎ－85°－Ｗ

埋没土：１層の黒褐色土を埋土とする。

遺物：出土した遺物は黒曜石製の剥片が１点であり、図示していない。

所見・時期：出土遺物が少なく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

16号土坑(第14・19図、第10・43表、PL.14・38)

位置：１区の最も西端に位置し、東側に４号溝が近接する。また、４号溝を挟んだ東側に９号土坑がある。

グリッド：１Ｊ－９・10

座標値：X=61,399・61,400　Y=-93,985・93,986

検出状況：第３面調査時に検出された。壁はやや垂直ぎみに立ち上がり、底面は概ね平坦。土器が僅かに出土している。

形状：円形

規模：長軸1.12m　短軸1.12m　深さ20cm

埋没土：１層の黒褐色土を主体とし、下位に２層の鈍い黄褐色土を埋土とする。

遺物：図示した44の１点が出土した。平口縁となる無文の口縁部片である。

所見・時期：検出面と出土した土器から、時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

17号土坑(第12図、第43表、PL.12)

位置：１区中央の南寄りに位置し、５号土坑の南端に重

複する。５号土坑の北端には18号土坑があり、東側には蛇行する６号溝が近接する。
グリッド：１Ｇ－８
座標値：X=61,390・61,391　Y=-93,971～93,973
検出状況：第３面調査時に検出された。５号土坑の掘削後に本土坑を確認したため、その新旧は不明。壁はやや斜位に立ち上がり、底面もやや狭い。遺物の出土はない。
形状：楕円形
規模：長軸1.42m　短軸1.07m　深さ75cm
長軸方向：Ｎ－77°－Ｅ
埋没土：１層の黒褐色土を主体とし、下位に２層の鈍い黄褐色土を埋土とする。
所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

18号土坑(第12図、第43表、PL.12)
位置：１区中央の南寄りに位置し、５号土坑の北端に重複する。５号土坑の南端には17号土坑があり、東側には蛇行する６号溝が近接する。
グリッド：１Ｇ－８
座標値：X=61,392・61,393　Y=-93,971・93,972
検出状況：第３面調査時に検出された。５号土坑の掘削後に本土坑を確認したため、その新旧は不明。壁は斜位に立ち上がり､底面は深く狭い。遺物の出土はない。
形状：不明
規模：長軸1.07m　短軸(0.70)m　深さ79cm
長軸方向：Ｎ－62°－Ｗ
埋没土：１層の黒褐色土を主体とし、２層の鈍い黄褐色土、３層の褐色土とに分層できる。
所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

19号土坑(第14・19図、第11・43表、PL.14・38)
位置：１区のほぼ中央で、蛇行する６号溝の西側斜面に重複して位置する。北北東側には、本土坑と同様に６号溝と重複する20号土坑がある。
グリッド：１Ｆ－９
座標値：X=61,397～61,399　Y=-93,968・93,969
検出状況：第３面調査時に検出された。６号溝の掘削後に本土坑を確認したため、その新旧は不明。壁は西側ほど残りが良く、やや垂直ぎみに立ち上がる。底面は概ね平坦。土器が僅かに出土している。
形状：楕円形
規模：長軸1.80m　短軸1.11m　深さ65cm
長軸方向：Ｎ－16°－Ｗ
埋没土：１層の黒褐色土を主体とし、下位に２層の灰黄褐色土を埋土とする。
遺物：出土した土器２点を図示した。同一個体の可能性もあるが、45は僅かな小突起をもつ平口縁片で、口縁直下に幅狭な縄文帯をもち、小突起下に縦位短沈線、そして横位沈線を巡らせて口縁部文様を区画し、以下の頸部を無文帯とする。46では頸部無文帯下に浅く細密沈線が施される。
所見・時期：検出面と出土した土器から、時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

20号土坑(第14・19図、第12・43表、PL.14・39)
位置：１区中央のやや北寄りで、蛇行する６号溝の西側斜面に重複して位置する。南南西側には、本土坑と同様な19号土坑がある。
グリッド：１Ｆ－10
座標値：X=61,401・61,402　Y=-93,966・93,967
検出状況：第３面調査時に検出された。６号溝の掘削後に本土坑を確認したため、その新旧は不明。また、東側は重複のために不明。壁は西側ほど残りが良く、やや垂直ぎみに立ち上がるが、東側は不明。底面はほぼ平坦。出土遺物は少ないが、土器と石器がある。
形状：楕円形
規模：長軸1.40m　短軸0.88m　深さ19cm
長軸方向：Ｎ－24°－Ｗ
埋没土：１層の黒褐色土を主体とし、２層の褐灰色土を埋土とする。
遺物：出土した遺物には、土器と石器(石皿１点、黒曜石製の剥片)がある。
　図示した遺物は、土器片４点と凹石１点である。
　47は胴部に縄文と横位沈線が施され、48は無文部と縄文施文。49は無文地に浅く横位沈線が巡る。50は底部で、底部付近にまで縄文が施され、底面に網代痕をもつ。
　51は粗粒輝石安山岩製の石皿で、表裏全面に摩耗痕が認められ、表面中央に凹みをもつ。

所見・時期：検出面と出土した土器から、時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

21号土坑(第15図、第43表、PL.14)

位置：１区の南東側で、蛇行する６号溝の底面付近東寄りに重複して位置する。南西側には、本土坑と同様な22号土坑がある。また、南東側となる６号溝縁には23号土坑がある。

グリッド：１Ｅ－5

座標値：X=61,379　Y=-93,960・93,961

検出状況：第３面調査時に検出された。６号溝の底面で確認したため、その新旧は不明。やや小型の土坑で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は礫層面に達する。遺物ではないが、土坑内には大型の面の平らな亜角礫が、立つように出土している。

形状：円形

規模：長軸0.68m　短軸0.64m　深さ42cm

埋没土：１層の褐灰色粘質土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

22号土坑(第15図、第43表、PL.14)

位置：１区の南東側で、蛇行する６号溝の底面付近東寄りにに重複して位置する。北東側には、本土坑と同様な21号土坑がある。また、東側となる６号溝縁には23号土坑がある。

グリッド：１Ｅ－５

座標値：X=61,375・61,376　Y=-93,962・93,963

検出状況：第３面調査時に検出された。６号溝の底面で確認したため、その新旧は不明。壁は垂直ぎみに立ち上がり、底面は礫層面に達する。遺物の出土はない。

形状：円形

規模：長軸1.00m　短軸0.97m　深さ83cm

埋没土：上位となる１～３層の褐灰色砂質土と灰黄褐色土を主体とし､下位に４層の褐灰色粘質土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

23号土坑(第15図、第43表、PL.15)

位置：１区の南東側となる６号溝縁の上面に位置し、北西側の６号溝底面付近に21号土坑、西側となる６号溝底面付近に22号土坑がある。また、南側に24号土坑がある。

グリッド：１Ｄ・１Ｅ－５

座標値：X=61,376・61,377　Y=-93,959・93,960

検出状況：第３面調査時に検出された。やや小型の土坑で、壁は斜位に立ち上がり、底面は狭く擂鉢状を呈する。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸0.64m　短軸0.55m　深さ42cm

長軸方向：Ｎ－70°－Ｗ

埋没土：１層の黒褐色土を主体とし、２層の灰黄褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は検出面から縄文時代と考えられる。

24号土坑(第15・19・20図、第13・43表、PL.15・39)

位置:１区の南東隅付近に位置し､北側に23号土坑がある。

グリッド：１Ｄ・１Ｅ－４

座標値：X=61,371～61,373　Y=-93,958～93,960

検出状況：第３面調査時に検出された。土坑の東端の一部は攪乱によって壊され、西側の一部も調査できなかった。壁はやや垂直ぎみに立ち上がり、底面はほぼ平坦。出土遺物は少ないが、土器と石器がある。

形状：楕円形

規模：長軸(2.46)m　短軸(1.99)m　深さ58cm

長軸方向：Ｎ－52°－Ｗ

埋没土：１～６層は１区基本土層と同様で、遺構確認面の上位に堆積する。７～９層が本土坑の埋没土で、７層の黒褐色土を主体とし、８・９層の暗褐色土および鈍い黄褐色土を埋土とする。

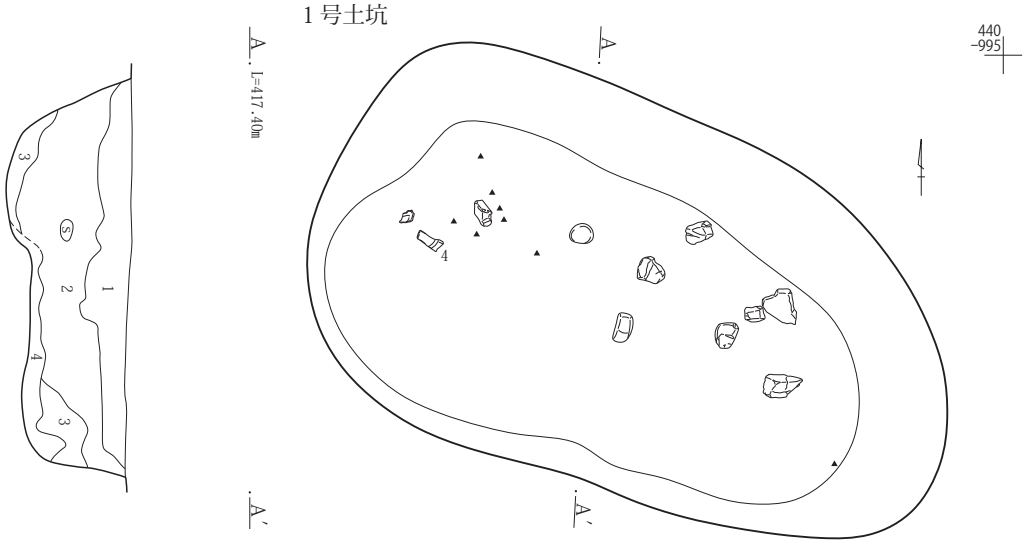
遺物：出土した遺物には、僅かな土器と石器(石鏃２点、二次加工ある剥片１点、石核１点、台石３点)がある。

図示した遺物は、土器片２点と石器３点である。

52は、平口縁の口縁下にＬＲの縄文を地文とし、横位沈線で幅狭な無文帯を区画する。53は平口縁の口縁下が無文となる口縁部片。

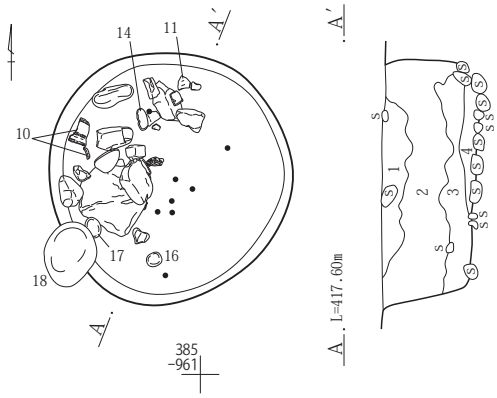
54は流紋岩製の石鏃で､茎部を欠損する凹基有茎鏃。55は粗粒輝石安山岩製の台石で、表面中央に摩耗痕と敲打痕が集中し、平坦な裏面に摩耗痕が広がる。56は石英閃緑岩製の台石で、平坦な表面に敲打痕と摩耗痕

１号土坑



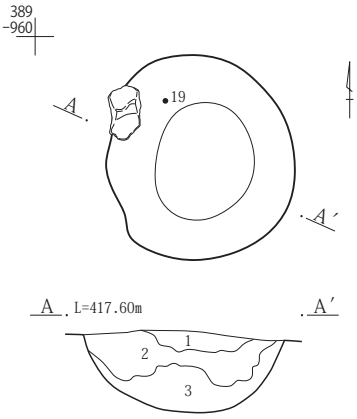
１号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を僅かに含む。
2　黒褐色土　ローム粒を僅かに含み、黒曜石片が比較的多く出土。
3　褐灰色土　やや砂質がかる。
4　暗褐色土　ロームブロックと２層の混土。

２号土坑



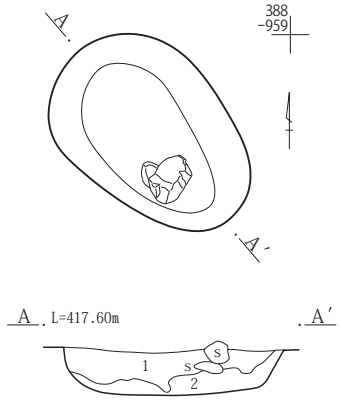
２号土坑
1　黒褐色土　ローム粒・白色粒を僅かに含む。
2　暗褐色土　ローム小ブロックを斑状に、炭化物を僅かに含む。
3　黒褐色土　炭化物を多量に含み、黒色度が強い。
4　暗褐色粘質土　礫層との間の充填土で、粘性が強い。

３号土坑



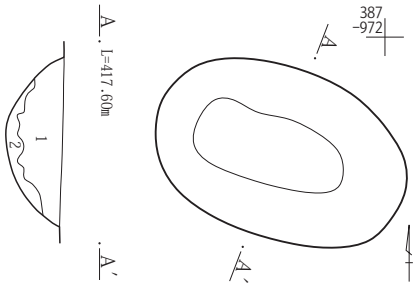
３号土坑
1　黒褐色土　ローム粒と炭化物を僅かに含む。
2　暗褐色土　１層に近似するが明るく、炭化物は含まない。
3　鈍い黄褐色土　ロームと２層の混土。

４号土坑



４号土坑
1　暗褐色土　ローム粒を僅かに含む。
2　鈍い黄褐色土　ロームと２層の混土。

６号土坑

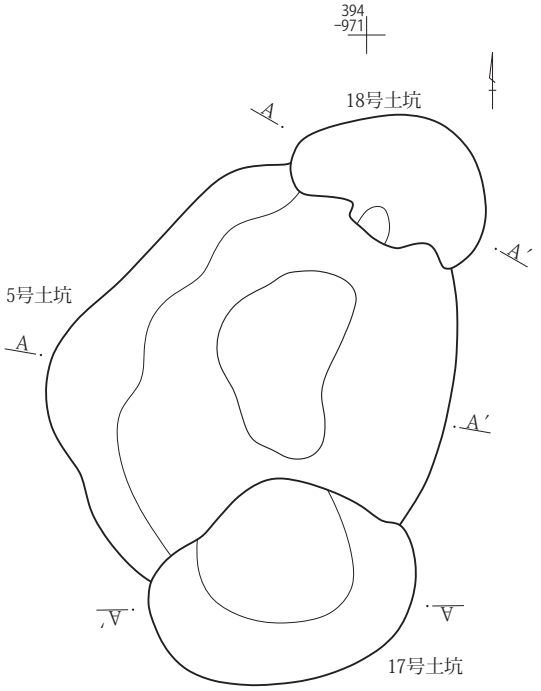


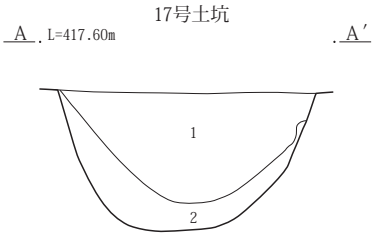
６号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　鈍い黄褐色土　ロームを主体とし、１層を混入する。

第11図　１～４・６号土坑　平・断面図

0　1：40　1m

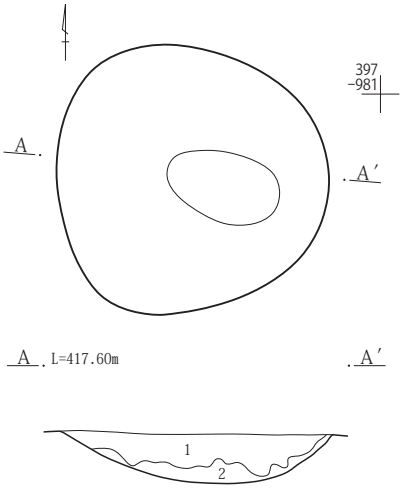
５・17・18号土坑





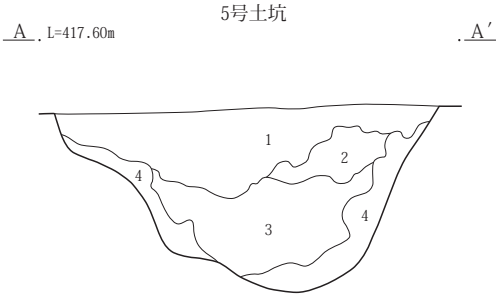
17号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を僅かに含む。
2　鈍い黄褐色土　ロームブロックを主体とした１層との混土。

８号土坑



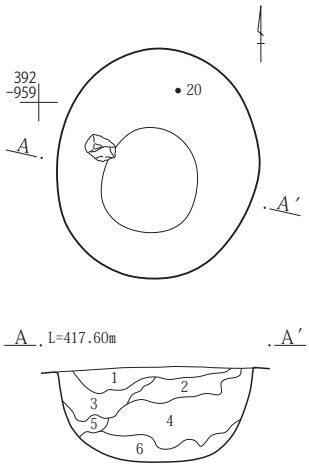
８号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　鈍い黄褐色土　ロームを主体とし、１層を混入する。

18号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を僅かに含み、ローム大ブロックが点在。
2　鈍い黄褐色土　ローム粒と１層との混土。
3　褐色土　ロームと３層との混土で、粘性が強い。



５号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を僅かに含む。
2　黒褐色土　硬く締まった黒褐色土ブロックを斑状に含む。
3　黒褐色土　ローム粒を若干含む。
4　鈍い黄褐色土　ロームブロックを主体とした３層との混土。

７号土坑

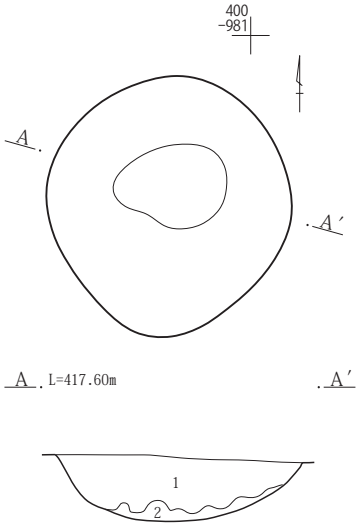


７号土坑
1　黒褐色土　ローム粒と炭化物を僅かに含む。
2　黒褐色土　１層と近似するが、締まりが弱い。
3　暗褐色土　ローム粒を僅かに含む。
4　暗褐色土　小礫と焼土粒を含む。
5　褐色土　ロームブロック。
6　暗褐色土　ロームブロックを僅かに含む。

0　1：40　1m

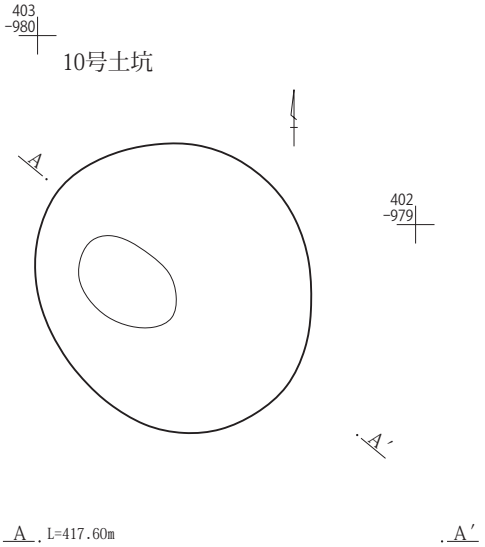
第12図　５・７・８・17・18号土坑　平・断面図

９号土坑



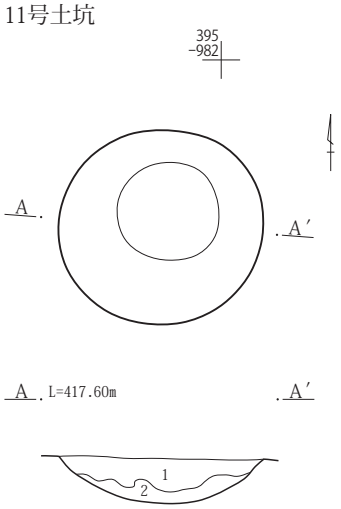
９号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　鈍い黄褐色土　ロームを主体とし、1層を混入する。

10号土坑



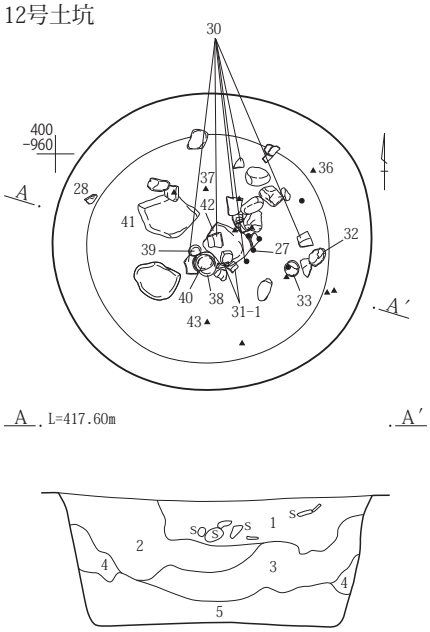
10号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　黒褐色土　1層に近似するが、ローム粒は含まない。
3　鈍い黄褐色土　ロームを主体とし、1層を混入する。

11号土坑



11号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　鈍い黄褐色土　ロームを主体とし、1層を混入する。

12号土坑

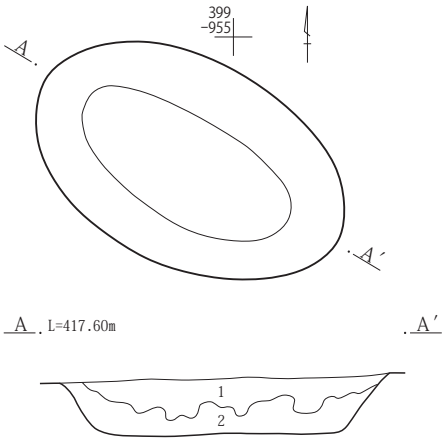


12号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を僅かに、炭化物、細かな骨片を含む。
2　灰黄褐色土　ローム粒を僅かに、鉄分による褐色土を斑状に含む。
3　暗褐色土　粗粒のローム粒を少量含む。
4　暗褐色土　ロームブロックと５層の混土。
5　暗褐色粘質土　２号土坑４層に近似し、粘性が強く均質。

0　1：40　1m

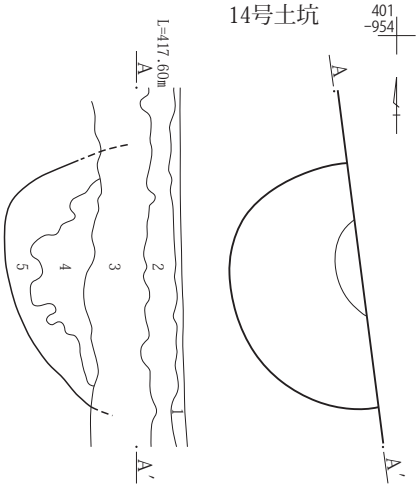
第13図　９～12号土坑　平・断面図

13号土坑



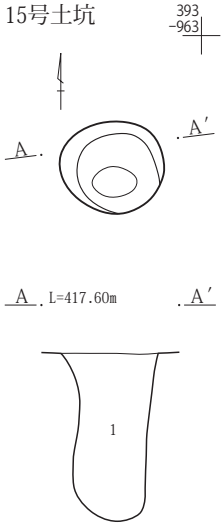
13号土坑
1　暗褐色土　ローム粒を僅かに含む。
2　鈍い黄褐色土　ロームと２層の混土。

14号土坑



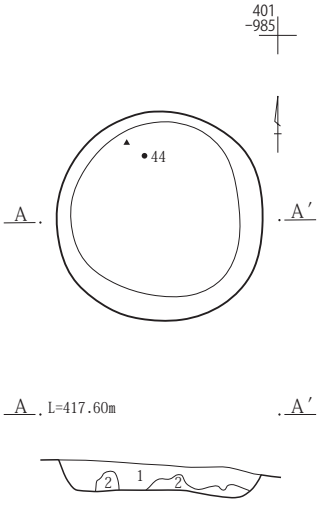
14号土坑
1　褐灰色火山灰　１区基本土層Ⅴ層と同一(As-Bの一次堆積層)。
2　黒褐色土　１区基本土層Ⅵ層と同一。
3　暗褐色土　１区基本土層Ⅶ層と同一(縄文包含層)。
4　暗褐色土　ローム粒を僅かに含む。
5　鈍い黄褐色土　ロームと２層の混土。

15号土坑



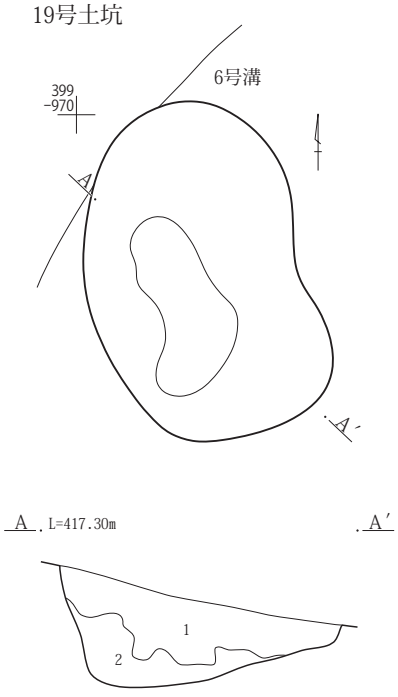
15号土坑
1　黒褐色土　ローム粒と炭化物を僅かに含む。

16号土坑



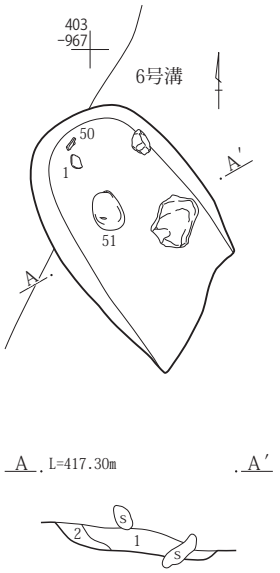
16号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　鈍い黄褐色土　ロームを主体とし、１層を混入する。

19号土坑



19号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を僅かに含む。
2　灰黄褐色土　１層と地山粘質土との混土。

20号土坑

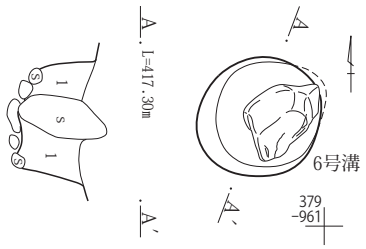


20号土坑
1　黒褐色土　ローム粒と炭化物を微量に含む。
2　褐灰色土　ローム粒を僅かに含む。

0　1：40　1m

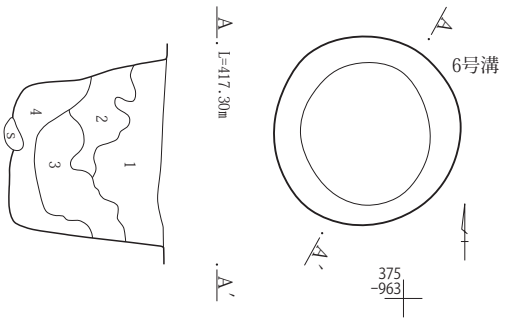
第14図　13～16・19・20号土坑　平・断面図

21号土坑



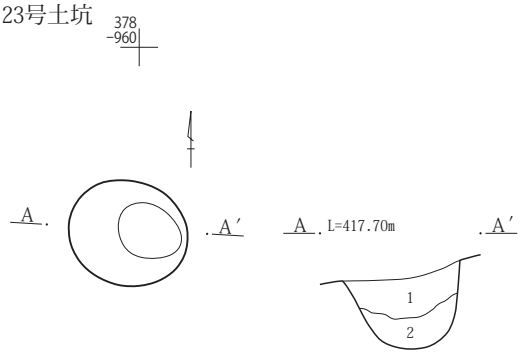
21号土坑
1　褐灰色粘質土　白色粒を少量、炭化物を微量に含む。

22号土坑



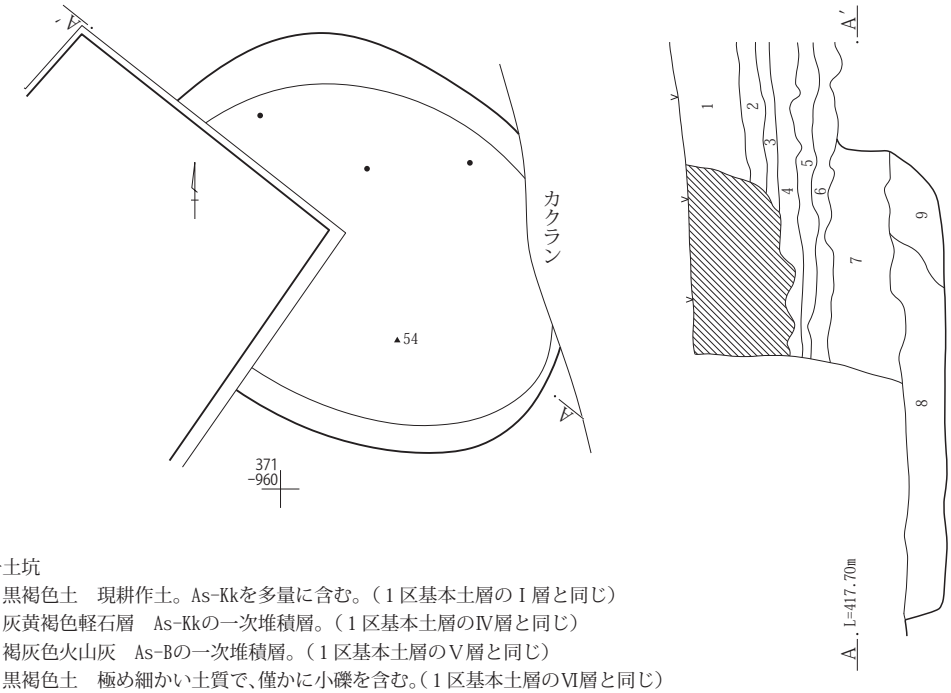
22号土坑
1　褐灰色砂質土　砂質が強い。
2　灰黄褐色土　小礫を僅かに含み、砂質が強い。
3　褐灰色砂質土　極細粒の砂で構成される質土。
4　褐灰色粘質土　３層と黒褐色粘土(地山)との混土。

23号土坑



23号土坑
1　黒褐色土　ローム粒と小礫、炭化物を含む。
2　灰黄褐色土　１層とロームブロックの混土。

24号土坑

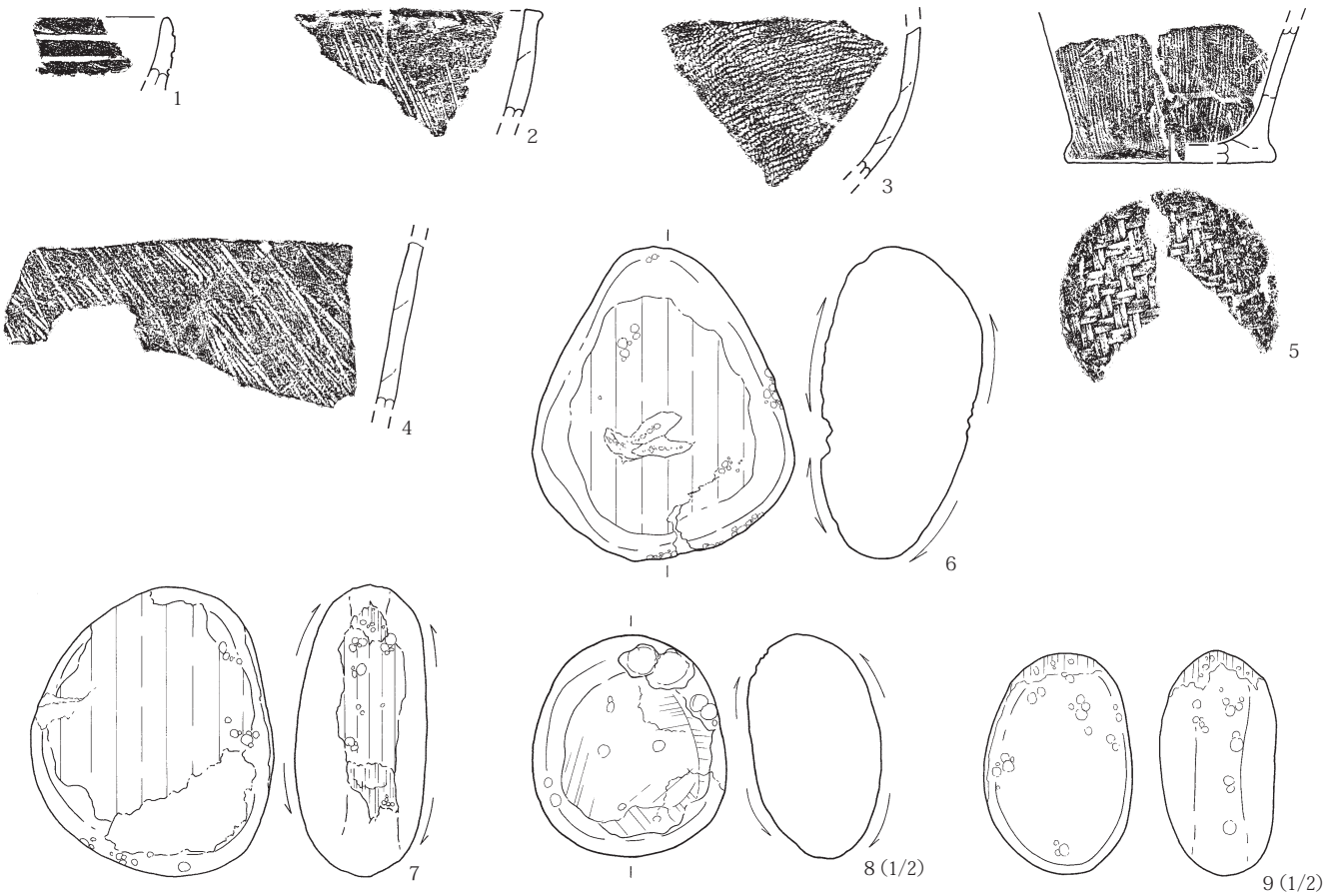


24号土坑
1　黒褐色土　現耕作土。As-Kkを多量に含む。(１区基本土層のⅠ層と同じ)
2　灰黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。(１区基本土層のⅣ層と同じ)
3　褐灰色火山灰　As-Bの一次堆積層。(１区基本土層のⅤ層と同じ)
4　黒褐色土　極め細かい土質で、僅かに小礫を含む。(１区基本土層のⅥ層と同じ)
5　暗褐色土　土質はⅥ層と同じ。(１区基本土層のⅦa層と同じ)
6　暗褐色土　Ⅶ層と近似するが、やや暗色。(１区基本土層のⅦb層と同じ)
7　黒褐色土　ローム粒と小礫、炭化物を含む。粘性は強い。
8　暗褐色土　ローム粒と炭化物を僅かに含み、１層よりやや赤色。
9　鈍い黄褐色土　ローム粒を僅かに含み、２層よりやや明るい。

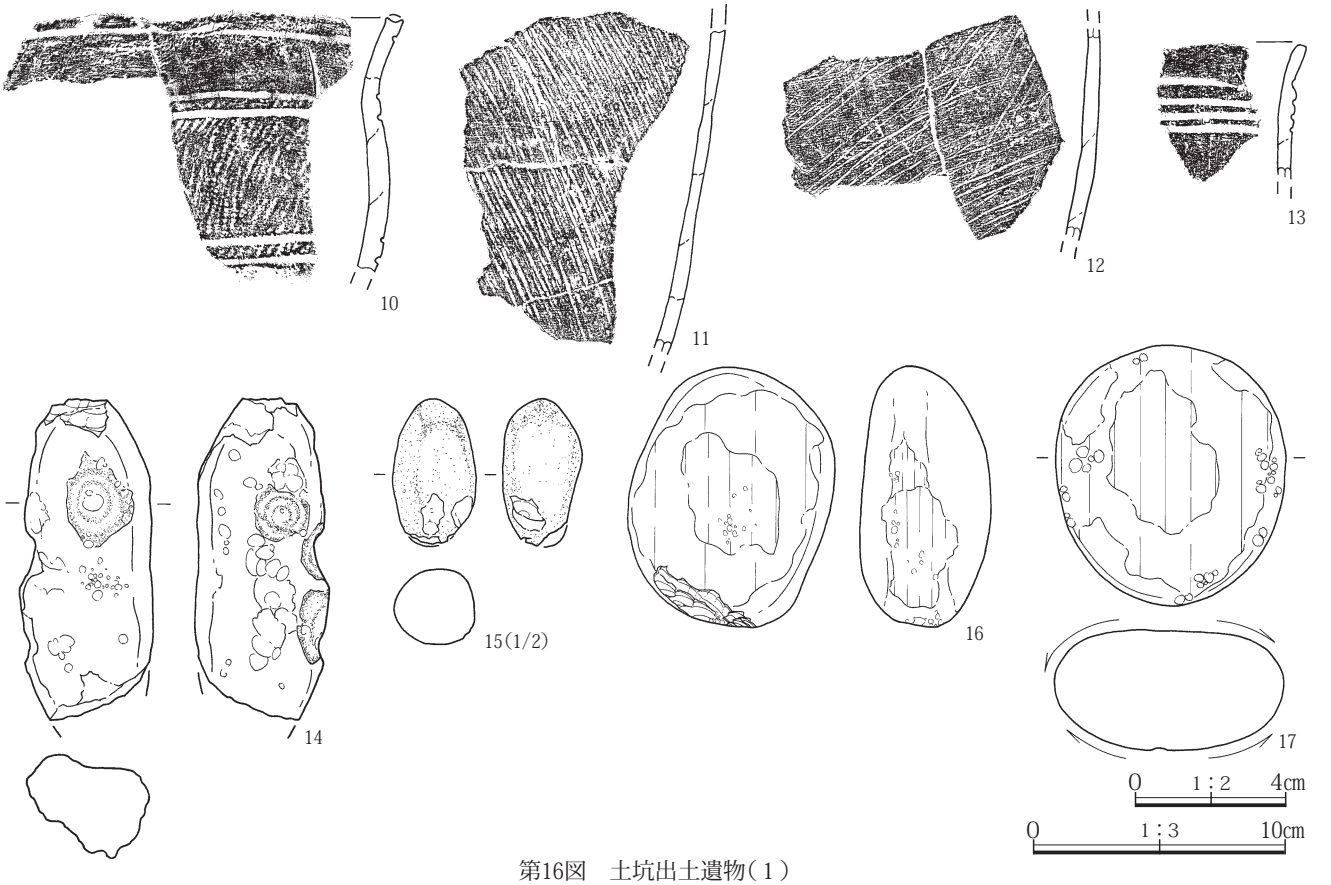
0　1：40　1m

第15図　21～24号土坑　平・断面図

１号土坑

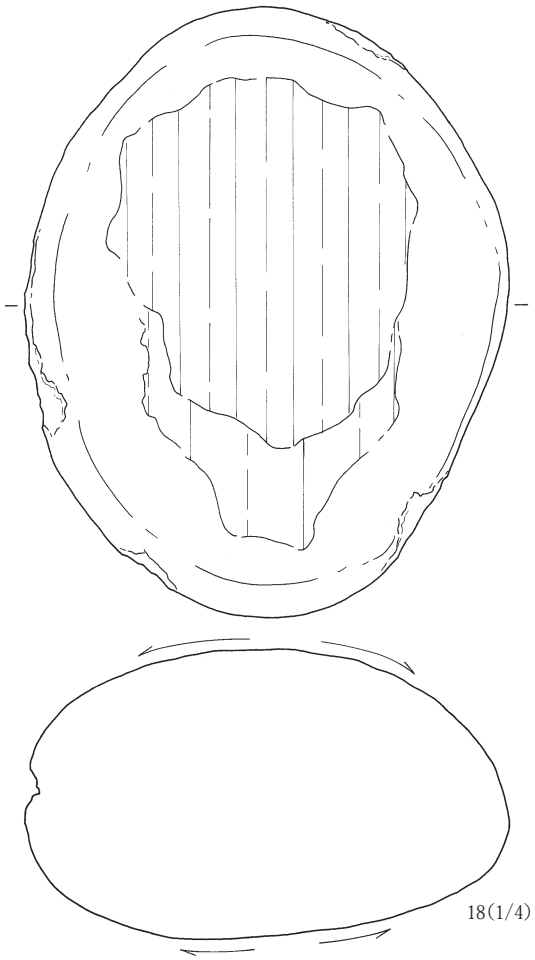


２号土坑

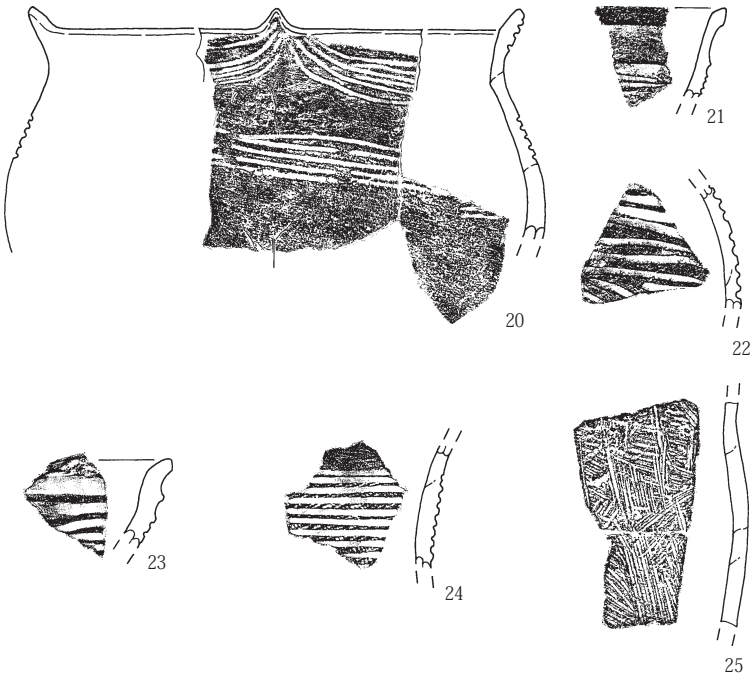


第16図　土坑出土遺物（１）

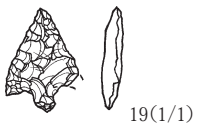
２号土坑



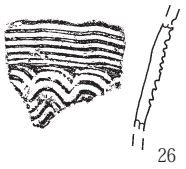
７号土坑



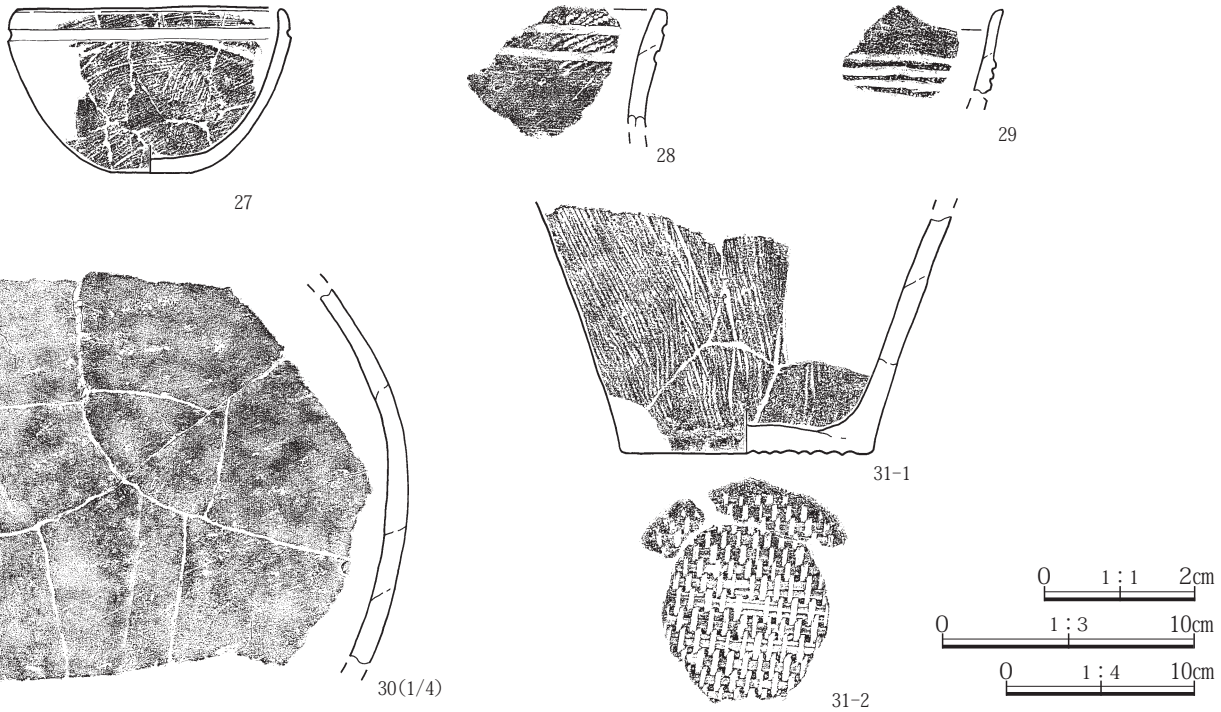
３号土坑



10号土坑

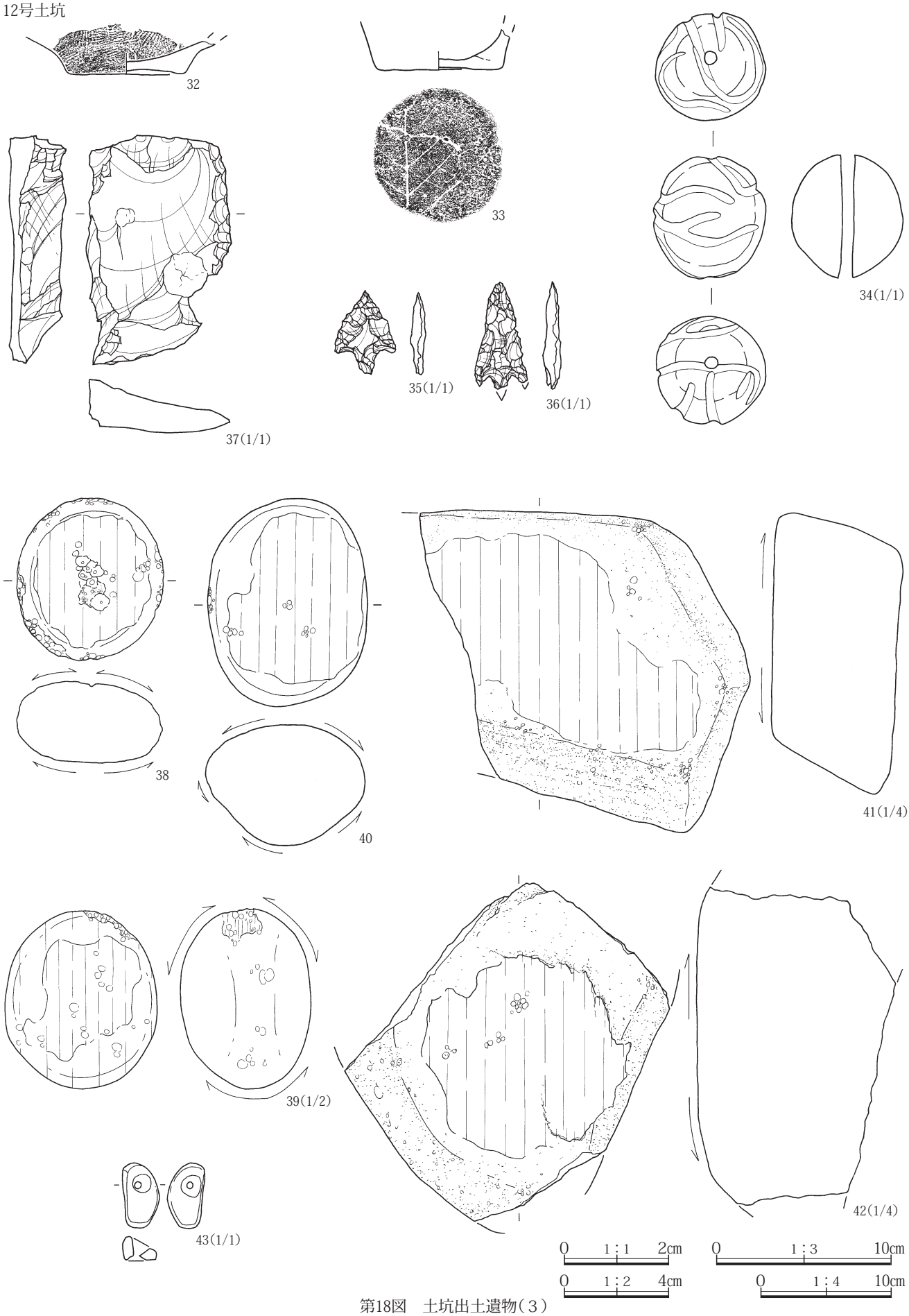


12号土坑



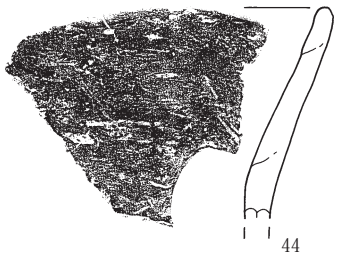
第17図　土坑出土遺物（２）

12号土坑

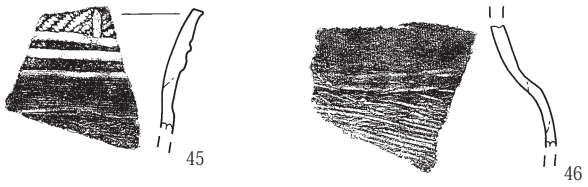


第18図　土坑出土遺物（３）

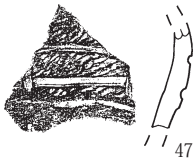
16号土坑

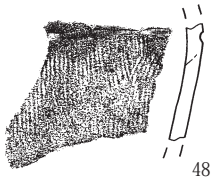


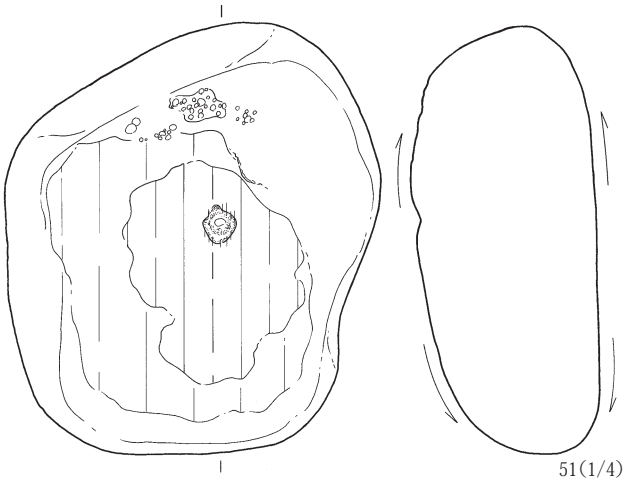
19号土坑

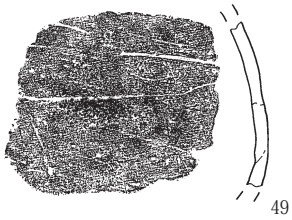


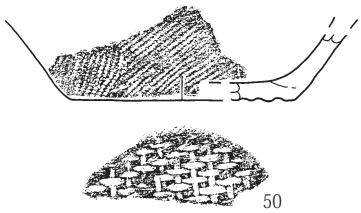
20号土坑



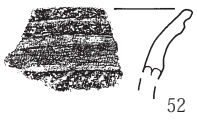


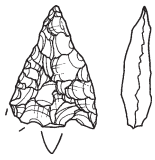


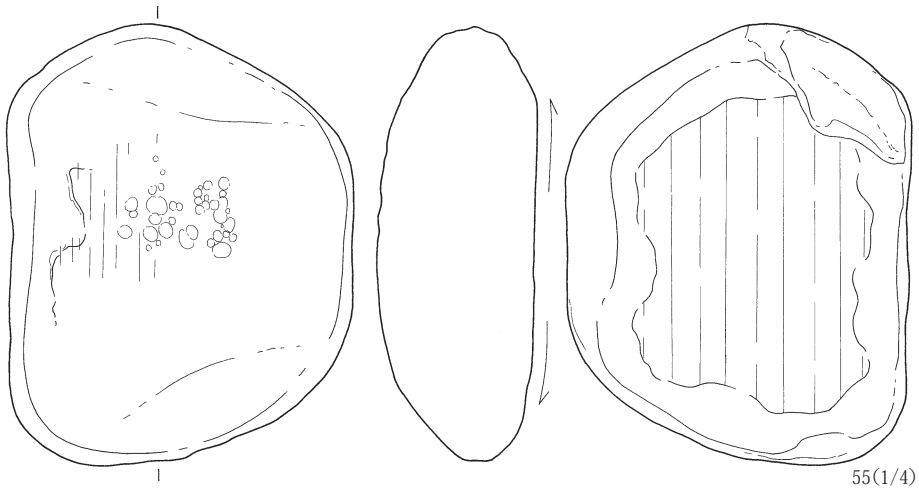


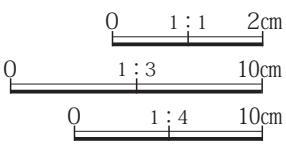


24号土坑



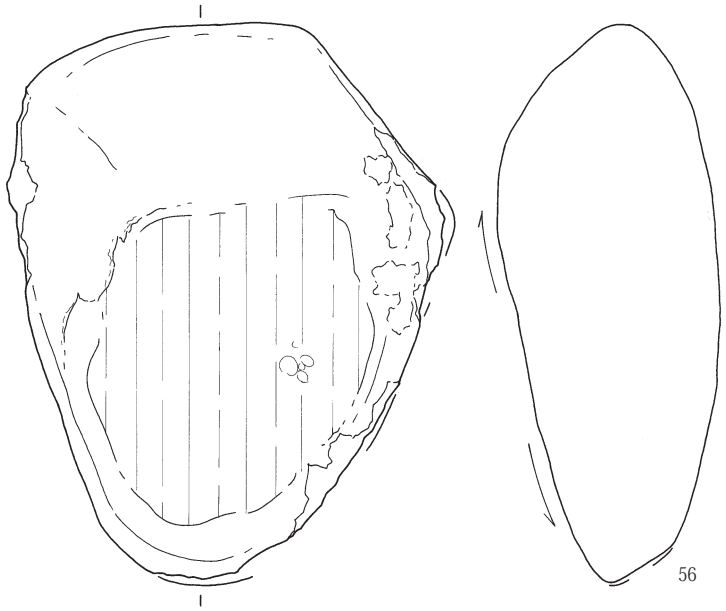






第19図　土坑出土遺物（４）

24号土坑



第20図　土坑出土遺物（５）

第４表　１号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第16図 PL.37	1	縄文・弥生 鉢	1土坑 口縁部破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/黒色	小破片。口縁部に横位沈線を数条を配す。外面に赤彩痕残る。内面研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第16図 PL.37	2	縄文・弥生 甕・深鉢	1土坑 口縁部破片					細:輝石・褐色粒・白色粒/良好/にぶい橙色	平縁。口唇部直下より斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第16図 PL.37	3	縄文・弥生 甕・深鉢	1土坑 体部破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/明褐色	内湾する体部。ＬＲが覆う。少量の煤が付着する。内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第16図 PL.37	4	弥生土器 甕・深鉢	1土坑 体部破片					粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/にぶい橙色	斜位条痕文が施される。施文具は貝殻腹縁か。内面横位撫で調整	弥生前期併行 東海系
第16図 PL.37	5	縄文・弥生 甕・深鉢	1土坑 体部下半～底部 1/2残存			底	8.2	細:石英・輝石・雲母・白色粒/良好/にぶい黄褐色	体部下半は外反気味に開き、底端部は張り出す。縦位条痕文を施す。内面弱い研磨を加え煤が付着する。	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第16図 PL.37	6	礫石器 凹石	完形	長 12.5 幅 10.4		厚 6.3 重 912.8		粗粒輝石安山岩	掌サイズよりやや大形で、三角形状を呈す楕円礫。表裏面とも摩耗、中央付近に敲打痕。敲打痕は表面側が列状、裏面側がアバタ状になる。	
第16図 PL.37	7	礫石器 磨石	完形	長 11.4 幅 9.6		厚 5.2 重 849.3		粗粒輝石安山岩	掌サイズよりやや大型の楕円礫。表裏面とも摩耗、左側縁は敲打痕、右側縁は敲打・摩耗痕が広がる。被熱して礫面が薄く剥落する。	
第16図 PL.37	8	礫石器 磨石	完形	長 5.9 幅 5.1		厚 3.5 重 139.0		粗粒輝石安山岩	偏平楕円礫。表面側は摩耗して礫面が平坦化、裏面側は全面が摩耗。被熱してヒビ割れ、礫面が剥落する。	
第16図 PL.37	9	礫石器 磨石	完形	長 5.9 幅 3.9		厚 3.1 重 100.8		粗粒輝石安山岩	楕円礫。上端側小口部・側縁に打痕。先端部は著しく摩耗、弱い稜が形成されている。	

第５表　２号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第16図 PL.37	10	縄文・弥生 甕・深鉢	2土坑 口縁～体部上半 破片					粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/黒色	口唇部に押圧を連続した平縁を呈す。口縁部沈線を設け頸部と体部中位に２条の横位沈線を配す。地文はＬＲを施す。内面平滑な撫で調整。	縄文晩期末葉～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第16図 PL.37	11	縄文・弥生 甕・深鉢	2土坑 体部破片						粗:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/にぶい橙色	薄手の器厚を呈す。縦位条痕文を施す。内面は平滑な撫で調整。内外面とも煤が付着する。	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第16図 PL.37	12	縄文土器 深鉢	2土坑 体部破片						細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	斜位沈線群が施される。施文は浅い。内面は研磨を加える	縄文後期中葉
第16図 PL.37	13	縄文・弥生 壺	2土坑 口縁部破片						粗:石英多・褐色粒・白色粒/良好/橙色	小径で直立気味の頸部。僅かな段差で頸部を画し横位沈線３条を設ける。内面撫で。内外面器面摩滅	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第16図 PL.37	14	礫石器 凹石	完形	長	(12.7)	厚	4.2		粗粒輝石安山岩	断面三角形状を呈す棒状礫。表裏面とも漏斗状の窪み穴１。石材は多孔質で摩耗痕は不明瞭だが、窪み穴は礫面を直接敲打、意図的なものか。	
				幅	5.3	重	317.0				
第16図 PL.37	15	礫石器 石製研磨具	完形	長	3.9	厚	2.1		石英閃緑岩	研磨痕・線条痕は確認できていないが礫面には光沢差があり、礫形状から石製研磨具とすべきかもしれない。小口部両端は自然剥落。	
				幅	2.2	重	24.4				
第16図 PL.37	16	礫石器 磨石	完形	長	10.2	厚	5.2		粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表面側が著しく摩耗、光沢面が形成されている。側縁等には打痕、礫の小口部分の剥落は被熱によるもの。	
				幅	8.2	重	626.2				
第16図 PL.37	17	礫石器 磨石	ほぼ完形	長	10.4	厚	4.8		粗粒輝石安山岩	掌サイズの偏平楕円礫。表裏面とも摩耗、裏面側にはアバタ状の敲打痕。礫面が被熱してヒビ割れる。	
				幅	9.1	重	673.8				
第17図 PL.37	18	礫石器 台石	完形	長	32.4	厚	15.3		粗粒輝石安山岩	大形の楕円礫を用いたもの。表面側に敲打痕を伴う摩耗痕、裏面側に敲打痕、光沢を帯びた摩耗痕が広がる。石皿的に使用されたものか。	
				幅	25.8	重	17480.0				

第６表　３号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第17図 PL.37	19	剥片石器 石鏃	完形	長	1.3	厚	(0.3)		黒曜石	未製品。表裏面とも全面押圧剥離。右辺の返し部は欠損して不明瞭だが、形状は平基鏃に近い。	Ⅲa2
				幅	(1.0)	重	0.24				

第７表　７号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第17図 PL.37	20	縄文土器 甕・深鉢	7土坑 口縁～体部上半 1/4残存						細:石英多・褐色粒・白色粒/やや軟質/黒褐色	波状突起を付す。突起及び口唇部に沿って横位沈線群を配す。体部上半にも横位沈線５条を施すが途切れを見る。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第17図 PL.37	21	縄文土器 鉢	7土坑 口縁部破片						細:石英粒・白色粒/良好/灰黄褐色	小破片。口縁部下の僅かな段差で頸部と画す。体部は浮線による網目状意匠が配される。内面研磨	縄文晩期末葉
第17図 PL.37	22	縄文土器 甕・深鉢	7土坑 体部破片						細:石英粒・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	体部上半か。横位沈線と斜位沈線による横位矢羽状意匠が配される。内面研磨	縄文晩期末葉
第17図 PL.37	23	縄文土器 浅鉢	7土坑 口縁部破片						細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/橙色	口縁部外反し無文。体部にやや太い浮線による弧状意匠が配される。内面研磨	縄文晩期末葉
第17図 PL.37	24	縄文・弥生 甕・深鉢	7土坑 口頸部破片						細:石英粒・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	口唇部欠損か。横位沈線群を配す。地文は横位ＬＲを施す。内面研磨を加える。	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第17図 PL.37	25	縄文・弥生 甕・深鉢	7土坑 体部破片						細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい褐色	体部上半の括れ部か。上半は縦位条痕文、下半は斜位条痕文が施される。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行

第８表　10号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第17図 PL.37	26	弥生土器 甕？	10土坑 体部破片						粗:石英多・片岩粒・白色粒/良好/橙色	体部上半か。櫛描き波状文と横位条線文が配される。内面は器壁剥落著しい	弥生中期

第９表　12号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第17図 PL.37	27	縄文土器 鉢	12土坑 口縁～底部1/2 残存	口 高	10.6 6.4	底	3.0	細:石英･白色粒/ 良好/灰白色	全体に雑な作り。口縁部横位沈線を設け口縁部は横位、体部は斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第17図 PL.38	28	縄文土器 甕･深鉢	12土坑 口縁部破片					細:石英･片岩粒･ 褐色粒･白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部に横位沈線２条を設け、地文に横位ＬＲを施す。内面平滑な横位撫で調整	縄文晩期末葉
第17図 PL.38	29	縄文土器 甕･深鉢	12土坑 口縁部破片					細:石英･輝石･片岩粒/良好/黄灰色	波状突起を付す。横位浮線３条を配す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第17図 PL.38	30	縄文土器 甕･深鉢	12土坑 体部破片					細:石英多･雲母末 ･褐色粒･白色粒/ 良好/にぶい黄橙色	大型深鉢の内湾する体部。無文で平滑な撫でが覆う。外面に少量の煤付着。内面弱い撫で調整で被熱のため器面摩滅	縄文晩期末葉
第17図 PL.38	31	縄文土器 甕･深鉢	12土坑 体部下半～底部 1/2残存			底	9.8	細:石英･片岩粒･ 白色粒/良好/橙色	直線的に開く体部下半。縦位条痕文を施す。底面に網代痕。内面平滑な横位撫で調整	縄文晩期末葉
第18図 PL.38	32	縄文土器 壺	12土坑 底部のみ残存			底	6.6	細:石英･輝石･褐 色粒･白色粒/良好 /にぶい黄橙色	体部下半は強く外反気味に開く。ＬＲを施す。内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第18図 PL.38	33	縄文土器 甕･深鉢	12土坑 底部のみ残存			底	6.8	細:石英･輝石･白 色粒/良好/浅黄色	直立気味に開く体部下半。無文。底面に木葉痕残す。内面削り調整後弱い撫で。外面被熱痕跡で変色	縄文晩期末葉
第18図 PL.38	34	縄文･弥生 土製品 小玉	12土坑 完形	長 幅	2.3 2.1	厚 重	2.0 9.1	細:白色粒/良好/ 灰褐色	ほぼ円形の断面形で球形を呈す。中央長軸方向に小孔を穿つ。小孔を中心に弧状･直線状に沈線が深く施されるが規則性や単位は見られない。赤彩痕が残る。弾み車等の性格ではなく装飾要素が高い例と考えた。	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第18図 PL.38	35	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.6 1.2	厚 重	0.3 0.35	赤碧玉	完成状態。表裏面とも周縁加工、素材面を大きく残す。基部形状は茎の両脇をノッチ状に加工、三角形状の返し部を作出する。	Ⅲa2
第18図 PL.38	36	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(2.1) (1.0)	厚 重	0.3 0.46	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。側縁中位はノッチ状に剥離。剥離法は錯向的で、まずは両側縁を大きく剥離、ついでこの剥離面からノッチ状に剥離するというものである。	Ⅲb2
第18図 PL.38	37	剥片石器 スクレイパー	完形	長 幅	4.4 2.8	厚 重	1.1 10.35	黒曜石	小形幅広剥片を用い、打面側に近い右辺を弧状に加工。素材には大きな斑晶を含む。被熱して剥離面が荒れる。剥片端部に微細な刃こぼれ。	
第18図 PL.38	38	礫石器 凹石	完形	長 幅	9.3 8.3	厚 重	4.7 506.2	粗粒輝石安山岩	掌サイズの偏平楕円礫。表裏面とも中央付近にアバタ状の敲打痕２、摩耗痕。	
第18図 PL.38	39	礫石器 磨石	完形	長 幅	6.8 5.8	厚 重	5 280.7	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも摩耗するほか、上端側小口部に敲打・摩耗痕が広がる。	
第18図 PL.38	40	礫石器 磨石	完形	長 幅	11.8 9.1	厚 重	6.8 1025.3	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも摩耗､側縁に敲打痕がある。	
第18図 PL.38	41	礫石器 台石	2/3	長 幅	24.6 (25.4)	厚 重	10.5 10320.0	粗粒輝石安山岩	厚い盤状礫を用いたもの。表面側平坦面に摩耗面がある。特に、左辺側の摩耗が著しく、わずか窪んでいる。石皿として使用したものか。	
第18図 PL.38	42	礫石器 台石	1/2	長 幅	25.8 24.8	厚 重	15.3 11020.0	粗粒輝石安山岩	大形礫の平坦面に摩耗面がある。摩耗面は部分的に光沢を帯びる。楕円礫は1/3程度の破片で、破損面に打痕は見られない。	
第18図 PL.38	43	石製品 玉	完形	長 幅	1.2 0.7	厚 重	0.5 0.70	ひすい	断面三角形状を呈し、上端側に孔を穿つ。良く研磨され強い光沢を放つ。石材感は透明感の強い緑色で、白濁部分を斑状に含む。	

第10表　16号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19図 PL.38	44	縄文土器 甕・深鉢	16土坑 口縁部破片					粗:石英・輝石・角安・白色粒/良好/にぶい黄橙色	緩やかな波状縁。無文で下端に弧状の貼付痕跡を見るが詳細は不明である。内面横位撫で調整後弱い研磨を加える	縄文晩期末葉

第11表　19号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19図 PL.38	45	縄文・弥生 甕・深鉢	19土坑 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/褐灰色	波状突起を付し波頂部に縦位刺突文を施す。地文は横位ＬＲ。以下横位沈線２条を設ける頸部は僅かな段差で画され無文。体部は横位条痕文を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第19図 PL.38	46	縄文土器 鉢	19土坑 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/褐灰色	頸部は直立気味で僅かな段差で体部と画し研磨を加える。体部は斜位条痕文を施す。内面は丁寧な研磨	縄文晩期末葉

第12表　20号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19図 PL.39	47	縄文・弥生 甕・深鉢	20土坑 体部破片					細:石英・白色粒/良好/褐灰色	体部上半。横位沈線２条と縦位刺突文を施す。地文は横位無節Ｌ。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第19図 PL.39	48	縄文土器 甕・深鉢	20土坑 体部破片					細:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/褐灰色	体部上半に横位沈線を設け以下斜位ＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第19図 PL.39	49	縄文土器 甕・深鉢	20土坑 体部破片					細:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/褐灰色	緩やかな内湾を示す。無文で平滑な撫でを施し煤が付着する。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉
第19図 PL.39	50	縄文土器 壺？	20土坑 底部1/4残存			底	(8.8)	細:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/橙色	体部下半は強く開きＬＲを施す。底面網代痕を残す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第19図 PL.39	51	礫石器 石皿	完形	長 22.8 幅 20.0		厚 10.7 重 7220.0		粗粒輝石安山岩	大形の河床礫を用いる。表面側中央に漏斗状を呈する窪み穴１、上端側に敲打痕、礫面全面に摩耗痕。裏面側にも摩耗痕、石皿的な使用か。	

第13表　24号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19図 PL.39	52	縄文・弥生 甕・深鉢	24土坑 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黄灰色	口縁部横位沈線を設ける。頸部は僅かな段差で画し口縁部と体部とも地文ＬＲを施す。内面研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第19図 PL.39	53	縄文・弥生 甕・深鉢	24土坑 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	外反する口縁部。無文である。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第19図 PL.39	54	剥片石器 石鏃	4/5	長 (1.7) 幅 (1.2)		厚 0.4 重 0.54		流紋岩	未製品。表裏面とも全面押圧剥離。返し部は三角形状を呈す。側縁を絞り尖り気味に先端部を作出する。	Ⅲa2
第19図 PL.39	55	礫石器 台石	完形	長 23.4 幅 18.4		厚 8.7 重 5782.5		粗粒輝石安山岩	表面側の礫面中央付近に敲打痕、裏面側礫面に摩耗痕が広がる。礫形状は裏面側が平坦。	
第20図 PL.39	56	礫石器 台石	完形	長 (29.4) 幅 (23.2)		厚 12 重 10500.0		石英閃緑岩	表面側の平坦な礫面に敲打痕を伴い摩耗痕が広がる。礫周縁は劣化して欠けているが、被熱している可能性も残る。	

が広がる。

所見・時期：検出面と出土した土器から、時期は縄文時代晩期末葉と考えられる。

第３項　配石

検出された縄文時代の配石は、１区の第３面調査において検出されている。特に、巨礫および大・中型礫が６号溝周囲および内部から多量に出土しており、遺構認定には苦慮した。調査時においては、１～９号配石までの番号を付していたが、整理段階での図面および写真の検討の結果、配石としがたいものや、逆に配石として扱うべき10～13号配石までを追加認定するに至った。なお、ここで扱う配石とした遺構は、以下の要件を満たす遺構を追加認定した。

１)大型礫１石のみで構成されるのではなく、１石ないし複数礫で構成され、その下部に埋設土器等の施設を有する場合。

２)複数の大型礫が同一面上に配される場合や、立石を伴う場合。

３)大型礫と共に、その周囲から土偶や石棒、完形の土器等が出土している場合。

以下、各配石ごとに記載する。また、調査時に配石として扱った､上記要件に類さないものも併せて掲載した。

１号配石(第21・24図、第14・45表、PL.15・40)

位置：１区の蛇行する６号溝の北東端付近に位置し、平面的には周辺に２号配石や12・13号配石と共に６号溝内にある。

グリッド：１Ｄ－11

座標値：X=61,406　Y=-93,957

検出状況:第３面調査時の６号溝調査の際に検出された。長さのある大型礫(長さ48㎝、幅28㎝、厚さ23㎝、重さ32.6kg)１石が、横倒しの状態で最初に確認された。この大型礫下面の６号溝内における出土位置は、６号溝の埋没土２層のかなり上位にあり、周囲の同一面上にも大型礫や土器が多く出土している。また、最も近接する２号配石とほぼ同一面にある。なお、北側にある12・13号配石は、本大型礫より下位の面で検出されている。本配石の大型礫の直下には、完形の大型深鉢土器と深鉢土器の胴下半の２個体が埋設されていた。この埋設土器２個体は、共に東側へ傾きながらも正位の状態で出土し、６号溝２層の黒褐色土中にある。なお、この大型礫下の埋設土器の存在から、埋設に伴う土坑の存在が想定されるが、確認されていない。

遺物：出土した遺物は、上部の大型礫と、下部の埋設土器１・２の２個体である。

図示した遺物は、埋設土器２点である。

１は平口縁となる口縁部が短く僅かに外反し、最大径となる胴部上半の上位肩部が張り、最大径以下が徐々に窄まる器形を呈する深鉢(甕形)のほぼ完形品である。口縁直下に幅狭な縄文帯と区画する１条の横位沈線が巡り、そして無文となる頸部がやや括れ、肩部を含む胴部上半には細いＬＲによる横位回転の斜縄文が、胴部下半には細密条線が縦位に施される。底面には細かな網代痕をもつ。なお、この土器は後述の年代測定対象土器(測定番号：IAAA-210471)で、^{14}C年代は2460±20yrBP、暦年較正年代(1σ)は748～484cal BCの間に４つの範囲で示される測定値が得られた。２は深鉢土器の胴部下半で、縦位の条線が施され、底面に木葉痕をもつ。

図示しなかった大型礫は、横倒しとなった下面が平坦となっており、その平坦面は研磨されていることが観察されている。

所見・時期：上部の大型礫１石と、下部の埋設土器で構成される遺構で、埋設土器に伴うであろう土坑については不明である。また、６号溝内における各配石の検出面から、６号溝の埋没過程において12・13号配石よりも新しい段階に設置された配石と考えられる。さらに、立石を伴う10号配石の例を考えると、本配石の上部大型礫も立石であった可能性をもつ。一方、埋設土器については、土器内に人骨等の遺物は検出されなかったものの、再葬のための土器とも考えられ、遺構自体が再葬墓である可能性をもつ。時期は、埋設土器から縄文時代晩期終末期から弥生時代初頭と考えられ、その出土状況から６号溝出土遺物の中でも比較的新しい時期の土器であるものと考えられる。

２号配石(第21図、第45表)

位置：蛇行する６号溝の北東端付近に位置し、平面的には

周辺に１号配石や12・13号配石と共に６号溝内にある。
グリッド：１Ｄ－11
座標値：X=61,407　Y=-93,958
検出状況：第３面調査時の６号溝調査の際に検出された。平石状の大型礫（長さ50cm、幅40cm、厚さ10cm）１石が、横倒しの状態で１号配石と同一面上に確認された。この大型礫下面の出土位置は、６号溝の埋没土２層のかなり上位にあり、１号配石と同様に北側の12・13号配石より上位の面で検出されている。本配石の大型礫の直下には、埋設遺物や土坑等は検出されていない。
所見・時期：検出された大型礫１石のみでは配石としがたいが、仮に配石とするならば、時期は検出面からして１号土坑と同時期となろうか。

３号配石（第21図、第45表）
位置：蛇行する６号溝の東側で、１区の東壁付近に位置し、西側の12号土坑と東側の14号土坑の中間にある。
グリッド：１Ｄ－９
座標値：X=61,399　Y=-93,956
検出状況：第３面調査時に検出された。大型礫（長さ45cm、幅40cm、厚さ23cm）１石が、基本層序Ⅶ層中に確認された。１石のみで構成された本配石の直下には、埋設遺物や土坑等は検出されていない。
所見・時期：検出された大型礫１石のみでは配石としがたいが、仮に配石とするならば、時期は周囲の状況から縄文時代晩期終末期となろうか。

４号配石（第21図、第45表）
位置：蛇行する６号溝の東側で、１区の東寄りに位置し、7号土坑と12号土坑の中間付近にある。
グリッド：１Ｅ－８
座標値：X=61,394　Y=-93,960
検出状況：第３面調査時に検出された。大型の扁平礫（長さ37cm、幅30cm、厚さ10cm）１石が、基本層序Ⅶ層中に確認された。１石のみで構成された本配石の直下には、埋設遺物や土坑等は検出されていない。
所見・時期：検出された大型礫１石のみでは配石としがたいが、仮に配石とするならば、時期は周囲の状況から縄文時代晩期終末期となろうか。

５号配石（第22図、第45表）
位置：蛇行する６号溝の西際で、１区の南東部に位置し、西側に６号配石が近接する。
グリッド：１Ｆ－６
座標値：X=61,382　Y=-93,967
検出状況：第３面調査時に検出された。平石状とやや厚みのある大型礫３石が、共に６号溝西壁の傾斜に沿うように斜位に確認され、基本層序Ⅶ層中にある。本配石の直下には、埋設遺物や土坑等は検出されていない。
所見・時期：検出された大型礫３石からなるものの、配石としがたい。仮に配石とするならば、時期は周囲の状況から縄文時代晩期終末期となろうか。

６号配石（第22図、第45表）
位置：蛇行する６号溝の西側で、１区の南東部に位置し、東側に５号配石が近接する。
グリッド：１Ｆ－６
座標値：X=61,383　Y=-93,968・93,969
検出状況：第３面調査時に検出された。長さのある巨礫（長さ55cm、幅32cm、重さ72,530ｇ）１石が、横倒しの状態で基本層序Ⅶ層中に確認された。１石のみで構成された本配石の直下には、埋設遺物や土坑等は検出されていない。
所見・時期：検出された大型礫１石のみでは配石としがたいが、仮に配石とするならば、時期は周囲の状況から縄文時代晩期終末期となろうか。

７号配石（第22図、第45表）
位置：蛇行する６号溝の西際で、１区の中央北寄りに位置する。
グリッド：１Ｅ－11
座標値：X=61,407　Y=-93,963・93,964
検出状況：第３面調査時に検出された。大型の扁平礫（長さ35cm、幅30cm、重さ11,820ｇ）１石が、６号溝西壁の傾斜に沿うように斜位に確認され、基本層序Ⅶ層中にある。本配石の直下には、埋設遺物や土坑等は検出されていない。
所見・時期：検出された大型礫１石のみでは配石としがたいが、仮に配石とするならば、時期は周囲の状況から縄文時代晩期終末期となろうか。

８号配石(第22図、第45表)

位置：蛇行する６号溝の西際で、１区のほぼ中央に位置する。

グリッド：１Ｇ－９

座標値：X=61,399　Y=-93,970

検出状況：第３面調査時に検出された。大型の扁平礫(長さ35㎝、幅30㎝、厚さ10㎝、重さ17,520ｇ)１石が、基本層序Ⅶ層中にかなり斜位な状態で確認された。本配石の直下には、埋設遺物や土坑等は検出されていない。

所見・時期：検出された大型礫１石のみでは配石としがたいが、仮に配石とするならば、時期は周囲の状況から縄文時代晩期終末期となろうか。

９号配石(第21・25図、第15・45表、PL.15・40)

位置：蛇行する６号溝の底面近くで、１区の中央北東寄りに位置する。

グリッド：１Ｅ－10

座標値：X=61,400～61,402　Y=-93,963・93,964

検出状況：６号溝の底面付近に検出された。配石中央には、斜位に落ち込んだ扁平な大型礫と南側に３の壺型土器の胴下半が横倒しの状態で最初に確認された。埋設土器かと考えられる。その周囲には、扁平な大型礫や中型礫が同一面上に点在するように残存する。出土した土器に、掘り込みをもつかは不明。

遺物：出土した埋設土器以外にも、周囲に多くの土器の出土をみる。

図示したのは、埋設土器１点である。３は口縁部から頸部を欠いた壺形土器で、細身となる胴部以下に浅く細い縄文が施されるが磨消している部分も多い。

所見・時期：数石の扁平な大・中型礫と中央に横倒し状態の土器で構成される配石で、６号溝底面に構築され、時期は土器から縄文時代晩期終末期と考えられる。また、その出土状況から、１号配石の埋設土器１より古い時期の土器と考えられる。

10号配石(第21図、第45表、PL.16)

位置：１区の南東隅付近で、６号溝内に位置する。南東側となる６号溝東壁に21号土坑、西側の６号溝際には５号配石がある。

グリッド：１Ｅ－６

座標値：X=61,381・61,382　Y=-93,963～93,965

検出状況：蛇行する６号溝南側の溝中央で、やや下位の位置に検出された。配石中央には、横倒し気味のやや斜位となる長い巨礫が南東方向を向くように確認された。その周囲には、多くの小・中・大型礫が同一面上に残存する。出土した土器は少ないものの、周囲からは石剣(第107図472)が出土している。

遺物：出土土器については、小破片であることから図示していない。また、周囲から出土した石剣１点(緑色片岩製で、断面がレンズ状を呈し、両面ともに丁寧な研磨を施すが、両端は欠損する)は、後述の６号溝出土遺物として扱う。

所見・時期：横倒し気味となる中央の長い大型礫は立石であった可能性が高く、その周囲に残存する多くの礫で構成される。６号溝の比較的下位に構築されていることや周囲の状況から、時期は縄文時代晩期終末期と考えられる。

11号配石(第21図、第45表、PL.16)

位置：６号溝内中央のやや北寄りに位置し、底面付近の東壁際にある。

グリッド：１Ｆ－９

座標値：X=61,398・61,399　Y=-93,965

検出状況：蛇行する６号溝中央北寄りで、下位となる底面付近に検出された。中央に扁平な大型礫、その周囲に中・大型礫を配する計５石が残存する。なお、本配石の上位となる北側からは、大型の土器が潰れた状態で出土している。

所見・時期：中央の大型扁平礫を含む５石で構成され、６号溝の底面付近の検出であることと、周囲の状況から、時期は縄文時代晩期終末期と考えられる。

12号配石(第21図、第45表、PL.16・17)

位置：１区の北東隅付近で、６号溝内に位置する。溝内の南東側には13号配石が近接する。

グリッド：１Ｄ－11・12

座標値：X=61,409・61,410　Y=-93,957・93,958

検出状況：６号溝北東端の下位となる底面付近で、溝の西壁寄りに検出された。長さのある大型礫(長さ67㎝、幅28㎝)１石が、横倒しの状態で確認され、その周囲

に第80図573の大型深鉢の底部や第61図289の鉢形土器といった多くの土器や土偶、石器が出土している。また、１石のみの構成となるが、礫の形状から立石の可能性が高く、周囲の遺物の多さや土偶等が出土していることから､配石として扱った。この土偶第90図16は、破片が散乱した状態にあった。なお、検出された溝底面付近は、溝埋没土３層の灰黄褐色土中にあり、同一面の13号配石と共に、先述の１号配石の出土層位とは異なり、低い位置となる。

遺物：遺物は、本配石の周辺および13号配石にかけて極めて多く出土しており、どちらに伴うかは判断に難しい。そのため、後述の６号溝出土遺物(１Ｄ-11・12グリッド)として扱った。

所見・時期：横倒しとなる長い大型礫は立石であった可能性が高く、その周囲に多くの遺物を伴う。底面付近の検出であることと、周囲の状況から、時期は縄文時代晩期終末期と考えられ、先述の１号配石埋設土器より古い時期の遺構と考えられる。

13号配石(第21図、第45表、PL.16・17)

位置：１区の北東隅付近で、６号溝内に位置する。北西側に12号配石が近接し、上位となる南側には１号配石がある。

グリッド：１Ｄ－11

座標値：X=61,408・61,409　Y=-93,956・93,957

検出状況：６号溝北東端の下位となる底面付近で、溝底面中央に検出された。12号配石と同一面にある。中・大型礫11石が残存し、積み重なる石もあるが、下部の各石の上面は平坦となる。そして、その周囲には多くの土器や土偶の第90図16・第88図３(１Ｄ-11グリッドと１Ｅ-５グリッドからの出土物が接合)、石器が出土し、大型礫も散乱している。なお、検出された溝底面付近は、溝埋没３層ないし３ｂ層の灰黄褐色土中にあり、先述の１号配石の出土層位とは明らかに異なる。

遺物：遺物は、本配石の周辺および12号配石にかけて極めて多く出土しており、どちらに伴うかは判断に難しい。そのため、後述の６号溝出土遺物(１Ｄ-11・12グリッド)として扱った。

所見・時期：11石の中・大型礫からなり、周囲の状況や多くの遺物を伴うこと、溝底面付近の検出であることから、時期は縄文時代晩期終末期と考えられる。併せて、先述の１号配石埋設土器より古い時期の遺構と考えられる。

第４項　炭化物集中

検出された縄文時代の炭化物集中は、１区の第３面調査における第２面と第３面の中間で確認され、２区東半では第３面の遺構確認で検出された。土坑上面に炭化物が集中するのとは異なり、炭化物の集中範囲の下部に浅い掘込みをもつのが特徴である。その数は計５ヵ所で、１区に３ヵ所、２区東半に２ヵ所である。

以下、各炭化物集中ごとに記載する。

１号炭化物集中(PL.18)

位置：１区西側の南寄りに位置し、１号土坑の東側で、北側に２・３号炭化物集中が近接する。

グリッド：１Ｈ－８

座標値：X=61,393・61,394　Y=-93,979・93,980

検出状況：第２面と第３面の中間で確認された。確認面に大小の炭化物が集中し､浅い擂鉢状の掘込みをもつ。遺物の出土はない。

形状：円形

規模：長軸0.93m　短軸0.82m

埋没土：１層の黒褐色土を主体とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、検出面から時期は縄文時代と考えられる。

２号炭化物集中(PL.18)

位置：１区西側の南寄りに位置し、南側に１号炭化物集中、西側に３号炭化物集中が近接する。

グリッド：１Ｈ－９

座標値：X=61,395　Y=-93,978

検出状況：第２面と第３面の中間で確認された。確認面に大小の炭化物が多く集中し、浅い擂鉢状の掘込みをもつ。遺物の出土はない。

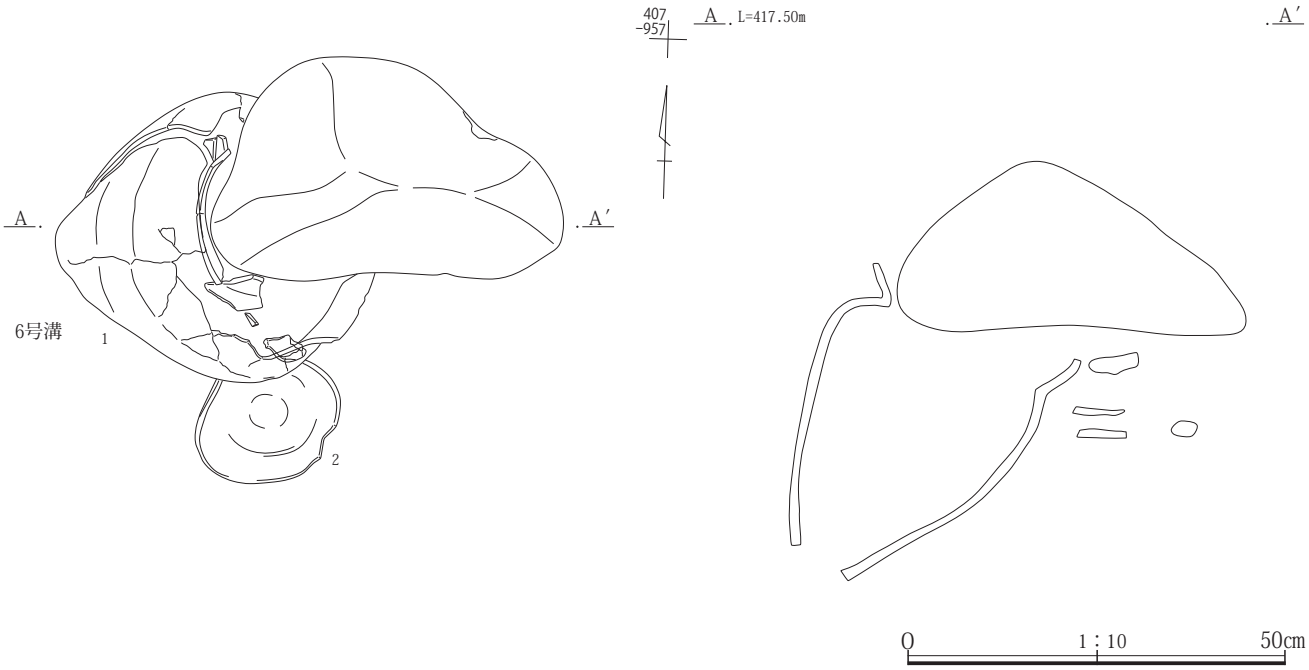
形状：楕円形

規模：長軸0.78m　短軸0.66m

埋没土：１層の黒褐色土を主体とする。

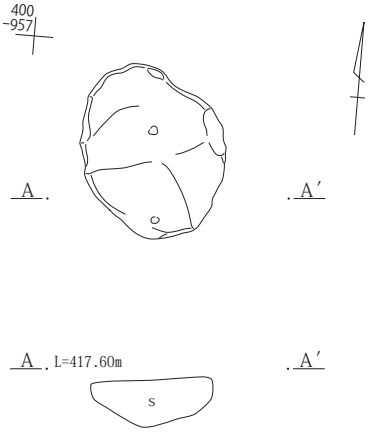
所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、検出面から時期は縄文時代と考えられる。

１号配石

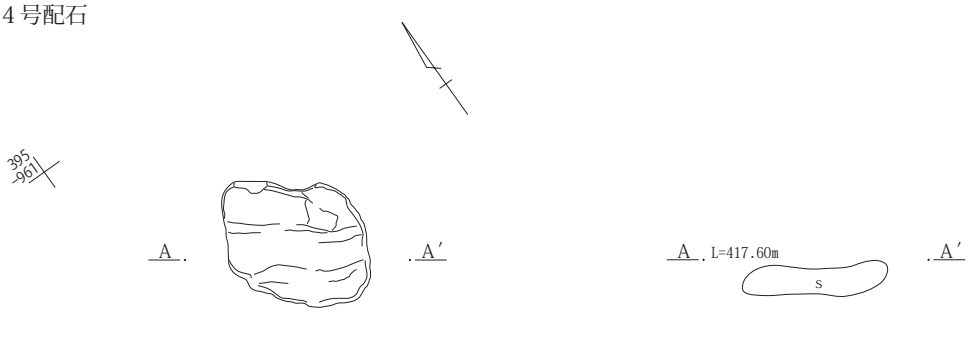


２号配石

３号配石

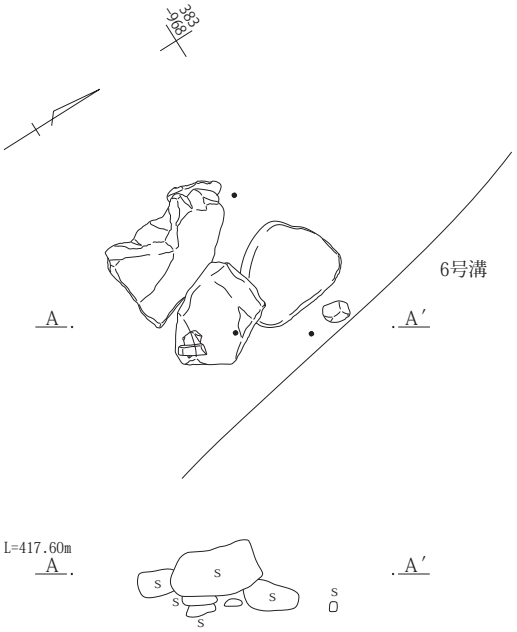


４号配石

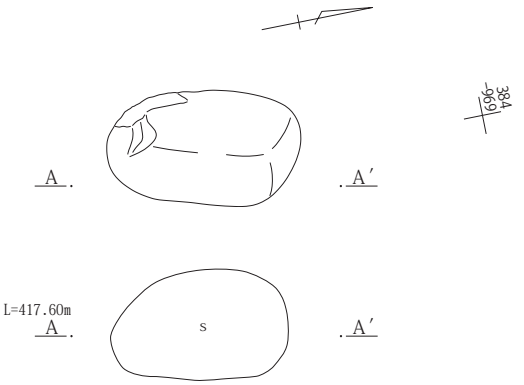


第21図　１～４号配石　平・断面図

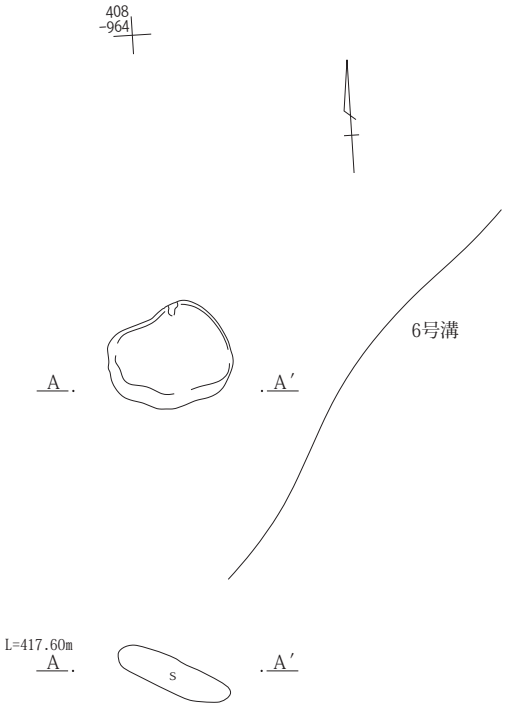
５号配石



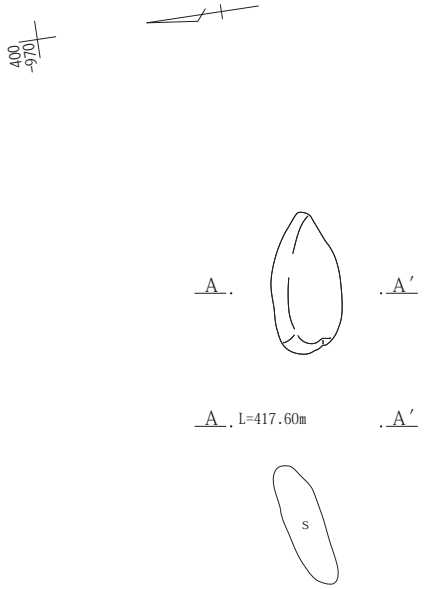
６号配石



７号配石



８号配石

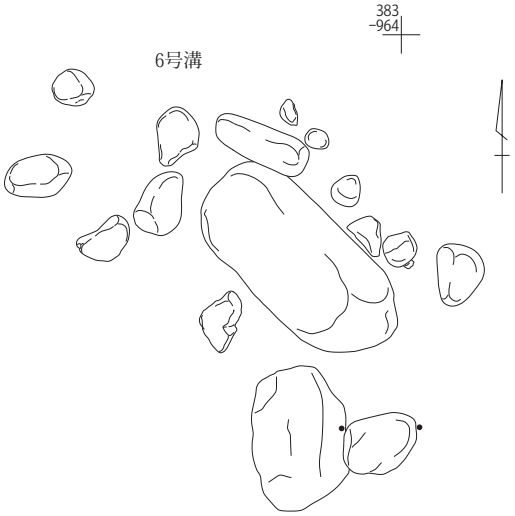


0　1：20　50cm

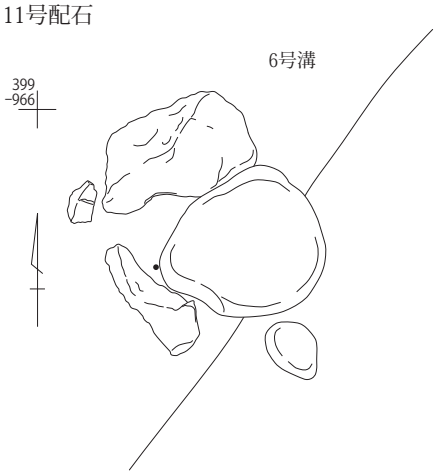
第22図　５～８号配石　平・断面図

９号配石

10号配石



11号配石

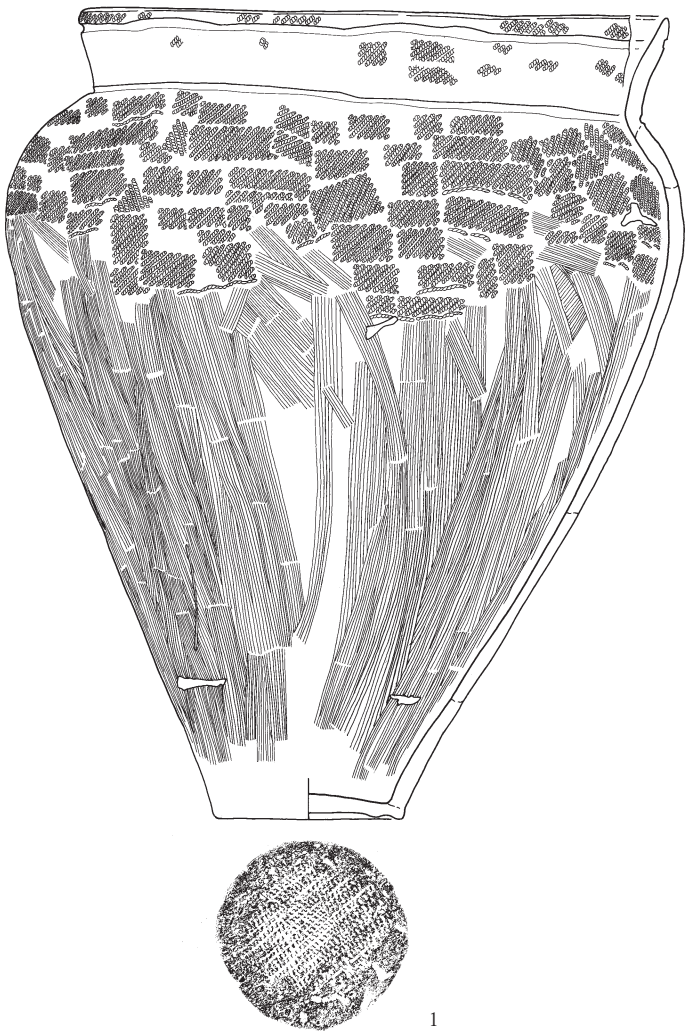


12号配石

13号配石

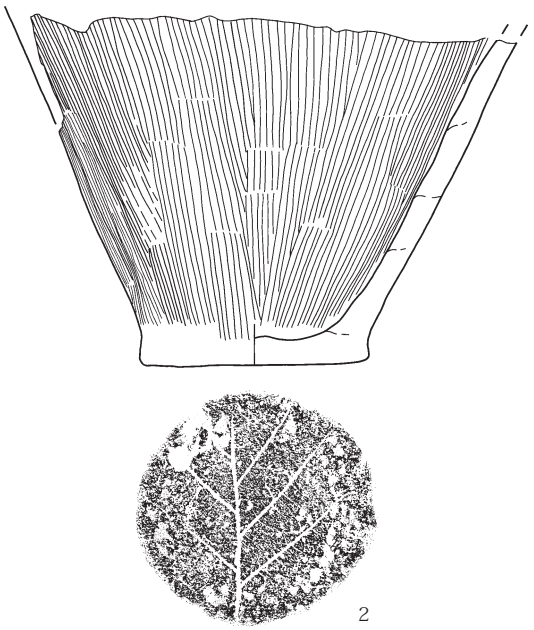
第23図　９～13号配石　平・断面図

１号配石



1

0　1：4　10cm

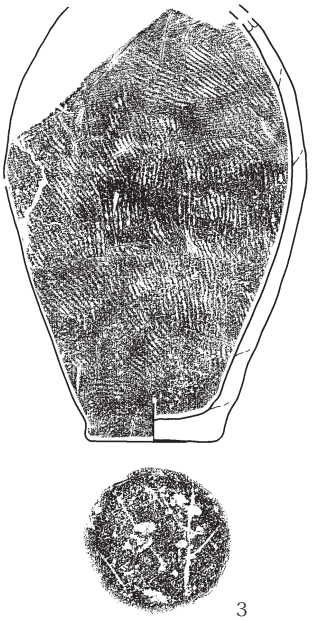


2

0　1：3　10cm

第24図　１号配石出土遺物（１）

９号配石



第25図　９号配石出土遺物（２）

第14表　１号配石遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24図 PL.40	1	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁部一部欠損	口	31.2	底	9.9	細:石英・雲母・白色粒/良好/褐灰色	口縁部は短く頸部で屈曲する。体部上半に最大径を持つ。口縁部と頸部屈曲部に横位沈線を設ける。口縁～体部上半は横位・斜位ＬＲ。結節部を施す。体部下半は縦位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整。外面体部下半は被熱のため変色する(にぶい黄橙色)。内外面に煤付着	縄文晩期末葉
				高	42.7					
第24図 PL.40	2	縄文土器 甕・深鉢	1D11 体部下半～底部残存			底	14.2	粗:石英・白色粒/良好/明褐色	直線的に開く体部下半。縦位条痕文が施される。被熱のため器面磨滅する。内面撫で調整。煤付着	縄文晩期末葉

第15表　９号配石遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第25図 PL.40	3	弥生土器 壺	9配石 体部上半1/2～底部残存			底	5.2	細:石英・輝石・チャート・白色粒/良好/灰黄褐色	肩部内湾し細身の体部器形を示す。無節Ｌが外器面を覆う。底面木葉痕。内面弱い撫で調整に止まる。外面中位及び下半に煤が付着する	弥生前期併行

３号炭化物集中(PL.18)

位置：１区西側の南寄りに位置し、南側に１号炭化物集中、東側に２号炭化物集中が近接する。

グリッド：１Ｈ－９

座標値：X=61,395　Y=-93,979

検出状況：第２面と第３面の中間で確認された。確認面に炭化物が集中し、浅い擂鉢状の掘込みをもつ。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸0.65m　短軸0.53m

埋没土：１層の黒褐色土を主体とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、検出面から時期は縄文時代と考えられる。

４号炭化物集中(PL.18)

位置：２区東半の中央南西寄りに位置し、北東側にやや離れて５号炭化物集中がある。

グリッド：１Ｎ－14

座標値：X=61,424～61,440　Y=-94,006・94,007

検出状況：第２面と第３面の中間で確認された。確認面に炭化物が集中し、浅い擂鉢状の掘込みをもつ。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸0.86m　短軸0.60m

埋没土：１層の黒褐色土を主体とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、検出面から時期は縄文時代と考えられる。

５号炭化物集中(PL.18)

位置：２区東半の中央付近に位置し、北側に１号土坑、北東側に大きく蛇行する５号溝がある。

グリッド：１Ｌ－15

座標値：X=61,427・61,428　Y=-93,997

検出状況：第２面と第３面の中間で確認された。確認面に炭化物が集中し、浅い擂鉢状の掘込みをもつ。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸0.90m　短軸(0.71)m　深さ-cm

埋没土：１層の黒褐色土を主体とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、検出面から時期は縄文時代と考えられる。

第５項　溝

１区と２区東半での第３面調査において検出された縄文時代の溝は、１区と２区に跨る４・５号溝、そして遺物を多量に出土させた１区東側に位置する６号溝の２条である。両溝は､南側から北方向へと傾斜をもつことと、大きく蛇行を繰り返す点で共通している。しかし、これらの溝が人為的に造られた溝であるかは判別し難く、遺物の出土があることから便宜的に溝番号を付して扱った。特に、６号溝およびその周辺からの遺物出土量は多く、本調査の縄文時代遺物の大半を占める。

以下、各溝ごとに記載する。

４・５号溝(第26・27図、第16・47表、PL.19・40)

調査時は、１区で検出された部分を４号溝、２区で検出された部分を５号溝として扱ったが、区を跨ぐ同一溝である。

位置：１区西隅付近を南側から北側に延びた溝を４号溝、２区東半の北東隅付近南側の東壁から大きく蛇行して北東壁中央に延びた溝を５号溝として調査されたが、調査地内を南側から蛇行しながら北側へ延びる溝状を呈する。溝の西側には１・16号土坑、東側には８～11号土坑が近接する。

グリッド：１Ｉ～Ｌ－７～17

座標値：X=61,390～61,439　Y=-93,981～93,997

検出状況：４・５号溝共に、第３面調査時に検出された。南側から蛇行しながら北側へ延びる本溝は、両面の壁は緩く斜位に立ち上がり、底面は平坦に近い。底面の勾配は、南側が高く北側ほど低くなる。また、２区での５号溝の底面の一部には、自然礫層が露出する。溝内からは、後述の６号溝ほどではないが土器や石器といった縄文時代の遺物が出土している。

規模：長さ16.0～19.3m　上面幅1.6～3.4m
　　深さ35～49cm

延伸方向：４号溝　Ｎ－11°－Ｅ
　　５号溝　北Ｎ－45°－Ｅ、南Ｎ－38°－Ｗ

埋没土：溝の検出は基本層序Ⅶ層下となるが、北端の５号溝北東壁では１～３層とした暗褐色土を主に、４層の褐灰色砂礫土が最下層となる。中央部および南端と

なる４号溝では、１層とした黒褐色土を最上層に、２層の褐灰色土が主体となり、下位に３層の灰黄褐色砂質土、４層の鈍い黄褐色土、最下層に褐灰色砂礫土を埋土とする。

遺物：出土した遺物には、僅かな土器と石器(石鏃５点、石鏃未製品２点、スクレイパー１点、打製石斧４点、礫器２点、石核２点、凹石５点、磨石10点、台石１点)がある。

図示した遺物は土器３点と石器11点である。

土器の１は、小突起をもつ平口縁の口縁下に数条の沈線を巡らせる。２は胴部上半に刺突が充填された鋸歯状および横位方向の文様が描かれる。３は平底となる底部で、底部付近に横位沈線が数条巡る。他に、無文の胴部片が出土している。

石器には４～８の黒曜石製の石鏃があり、４～６は凹基有茎鏃、７・８は凹基無茎鏃で、４は小型石鏃となる。９・10は打製石斧であり、９は黒色頁岩製で刃部側を欠損する。10は珪質頁岩製で、大型でほぼ完形であるが､未製品か。11は粗粒輝石安山岩製の礫器で、下端の刃部は両面から剥離が加えられ、側縁に敲打痕をもつ。12・13は粗粒輝石安山岩製の凹石で、研磨と凹みをもち、13の側縁には打痕が著しい。14は粗粒輝石安山岩製の磨石で、中型で全体に丁寧な研磨が施され、側縁中央付近には敲打・摩耗痕が集中する。

因みに、図示した４・７・12～14は４号溝部分から出土し、他の５・６・８～11は５号溝から出土した石器である。

図示していないが、石鏃未製品は黒曜石製、打製石斧の欠損品は珪質頁岩製、二次加工剥片は細粒輝石安山岩、そして凹石や磨石、台石は粗粒輝石安山岩製である。

所見・時期：溝の蛇行状況および地形の状況等からすると、人為的な造作による溝とは考え難く、突発的な自然流路である可能性があり、その埋没過程において遺物が混入したものと考えられる。また、出土遺物および周囲の状況から、埋没時期は縄文時代晩期終末期と考えられ､東側の６号溝と概ね同時期の可能性が高い。

６号溝(第28～108図、第17～22・47表、PL.20～33・41～96)

調査時当初は、遺物の集中する纏まりが点在する状況であったことから、１～５号遺物集中として調査を進行した。しかし、調査途中で幅広い溝であることと、遺物が溝内全体に多量に出土している状況を踏まえ、遺物集中とした扱いから６号溝出土遺物としての扱いに変更し、同時にグリッド別の遺物取り上げを行った。また、大型礫の出土も多く、先述した１号配石のような下部に埋設土器を伴う大型礫の存在から、検出された大型礫１石のみの場合でも配石として扱った経緯がある。

なお、整理時において、調査での写真や遺構・遺物出土図の検討から、本溝の埋没過程には上位と下位の時間差の存在があった可能性が見い出されるに至り、その時間差が出土遺物に如何に現れているかが整理作業の大きな問題となった。

位置：１区の東半を南側から北側へと大きく蛇行しながら延びる幅広の溝状を呈し、本溝の西側には４・５号溝が並走する。溝内には１・９・10・11～13号配石が存在し、19・20・21・22号土坑と重複する。また、溝の両側には、多くの土坑が近接しながら点在する。

グリッド：１Ｄ～Ｇ－４～13

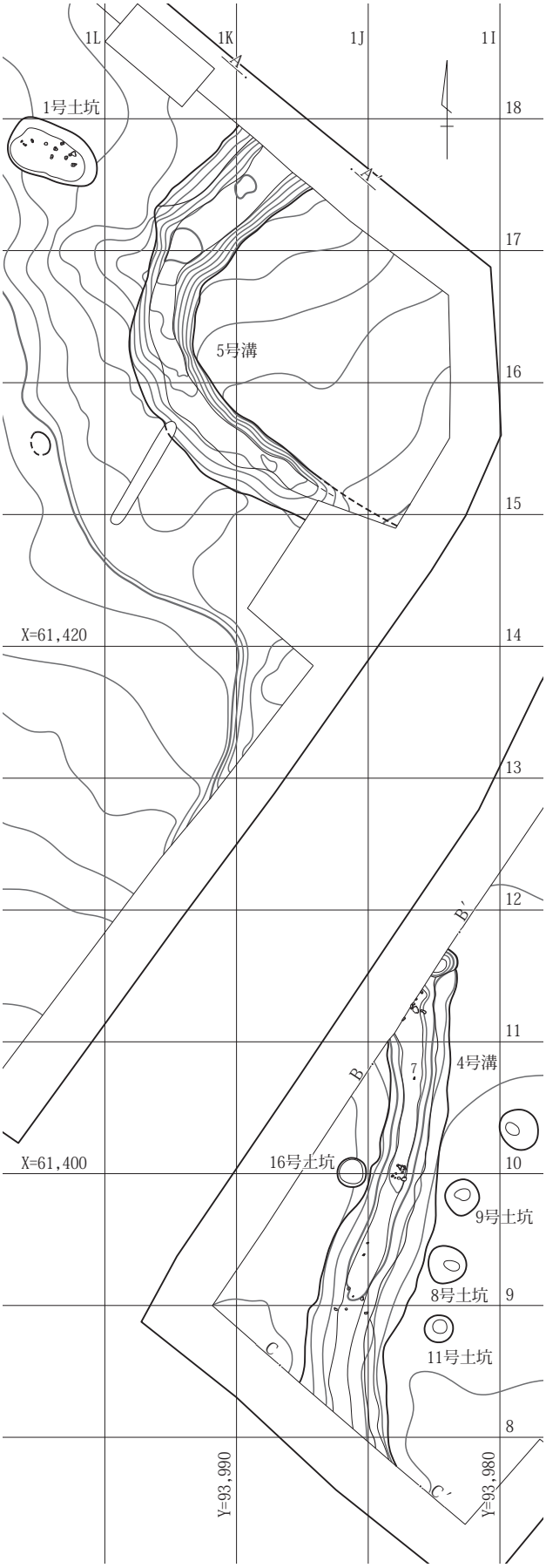
座標値：X=61,371～61,415　Y=-93,955～93,971

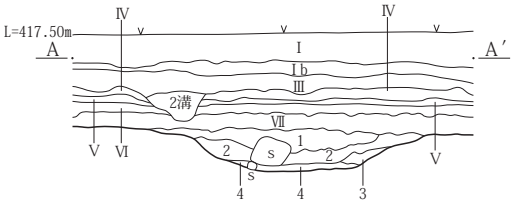
検出状況：第３面調査時に検出された。南側から蛇行しながら北側へ延びる本溝は、第３面調査当初より出土する遺物が多く、その量は本調査の遺物量の大多数を占める。最終段階で判明した本溝の形状は、溝幅は５～８ｍと広く、底面までの深さは50～70㎝を測り、両面の壁は緩く斜位に立ち上がり、底面は1.5～3.0ｍとやや幅広で平坦に近い。底面の勾配は、南側が高く北側ほど低くなる。土器の出土状況や配石の検出位置・状況から、本溝の埋没過程には上位と下位の時間差の可能性が指摘できる。

規模：長さ38.5m　上面幅4.8～7.6m　深さ45～60㎝

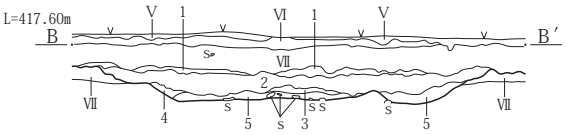
延伸方向：北Ｎ－35°－Ｅ・南Ｎ－16°－Ｗ

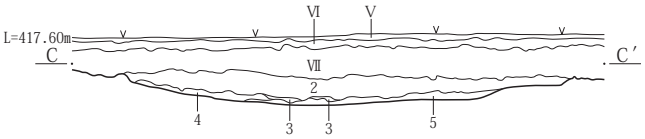
埋没土：溝の検出は基本層序Ⅶ層下となるが、北端の北東壁では２層とした黒褐色土を上位層に、その下位に３層の灰黄褐色土、底面付近に５層の褐灰色土が埋没する。この２層中と３層中から、多くの遺物が出土している。一方、南側となる南西壁や南東壁での土層断





５号溝
Ⅰ　黒褐色土　表土(現耕作土)。As-Kkを多量に含む。
Ⅰb　黒褐色土　Ⅰ層より明るい。
Ⅲ　黒褐色土　As-Kkを主体とする。
Ⅳ　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。下面に安山岩岩片を伴う。
Ⅴ　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。下面に粗粒火山灰が薄く堆積。
Ⅵ　黒褐色土　非常に極め細かい土で、極僅かに小礫を含む。
Ⅶ　暗褐色土　土質はⅥ層と同じ。
1　暗褐色土　ローム粒子を微量に含む。
2　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒子をやや多く含む。
4　褐灰色砂礫土　細砂を主体に小礫を多量に含み、大型礫もまれに含む。



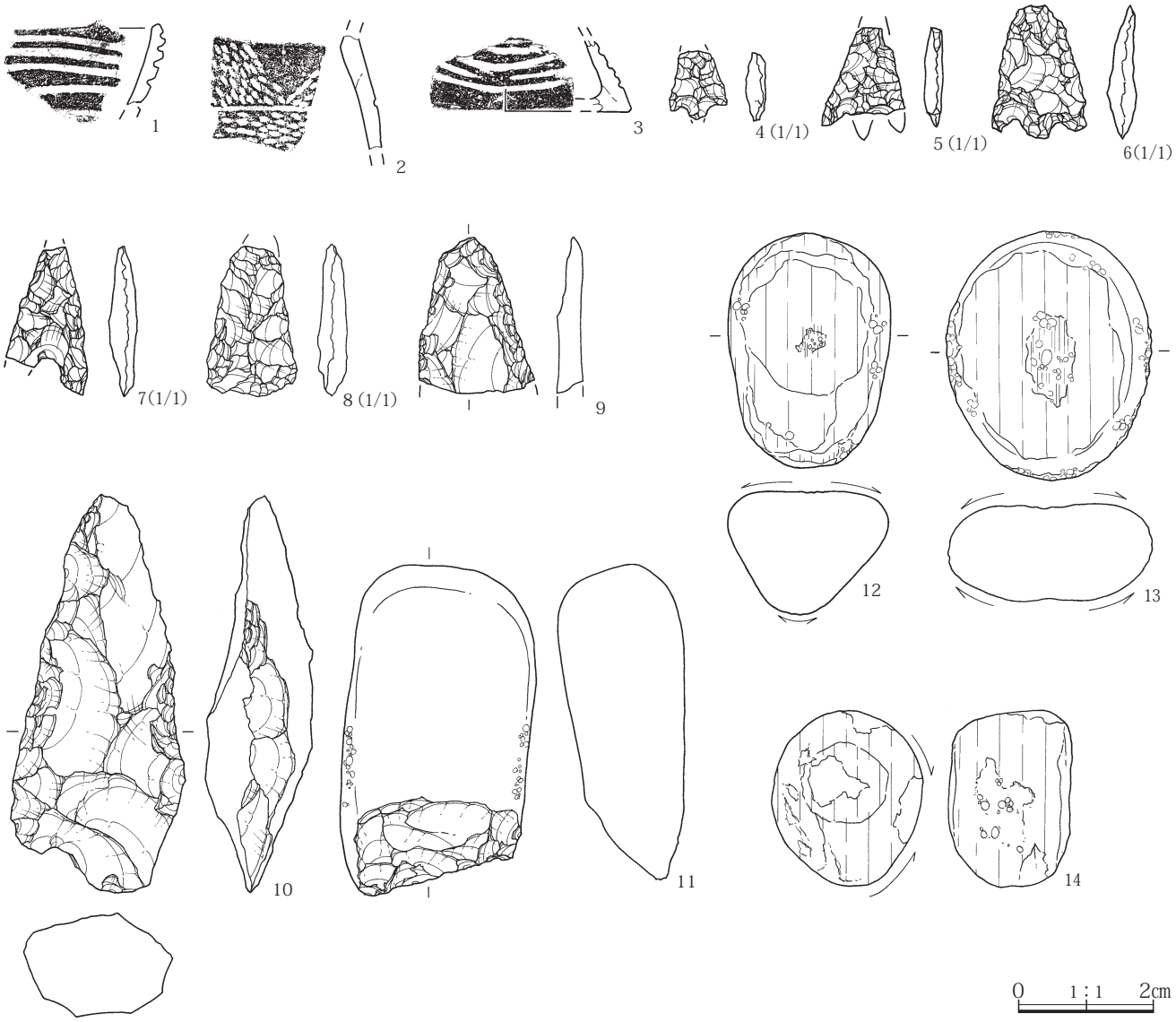


４号溝
Ⅴ　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。
Ⅵ　黒褐色土　非常に極め細かく、極僅かに小礫を含む。
Ⅶ　暗褐色土　土質はⅥ層と同じ。
1　黒褐色土　ローム粒子を微量に含む。
2　褐灰色土　ローム粒子を微量に含み、粘性あり。
3　灰黄褐色砂質土　５層と２層の混土。
4　鈍い黄褐色土　ローム粒子を少量含む。
5　褐灰色砂礫土　細粒の砂を主体に、底面付近に小礫を少量含む。

平面図
0　1：250　10m
セクション図
0　1：100　5m

第26図　４・５号溝　平・断面図

４・５号溝



第27図　４・５号溝　出土遺物

第16表　４・５号溝遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第27図 PL.40	1	縄文土器 甕･深鉢	5溝 口縁部破片					細:石英･片岩･白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部小突起を付し､以下横位沈線３条や弧状沈線を配す。施文は深い。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第27図 PL.40	2	縄文土器 深鉢	4溝 体部破片					細:石英･輝石･白色粒/やや軟質/淡黄橙色	体部上半か。横位細沈線１条を設け上位は連続刺突文による鋸歯状意匠を配し、下位は連続刺突を横位に施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期中葉か
第27図 PL.40	3	縄文土器 深鉢	4溝 底部破片			底	(11.0)	細:石英･褐色粒･白色粒/やや軟質/灰黄色	底端部張り出し体部下半は内傾する。横位沈線を多段に配し短沈線や三叉文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期後葉か
第27図 PL.40	4	剥片石器 石鏃	3/4	長 (1.0) 幅 0.9	厚 0.3 重 0.21			黒曜石	完成状態？表裏面とも全面押圧剥離。先端部・茎を欠損する。極小タイプの石鏃。	Ⅲb2
第27図 PL.40	5	剥片石器 石鏃	2/3	長 (1.5) 幅 (1.3)	厚 0.3 重 0.38			黒曜石	未製品？表面側は全面押圧剥離。裏面側は周辺剥離、素材面を残す。基部や右辺の返し部を欠損。先端部は通常破損以外、側縁が樋状剥離。	Ⅴ
第27図 PL.40	6	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長 2.0 幅 1.4	厚 0.4 重 0.97			黒曜石	未製品。表面側は全面押圧剥離。裏面側は浅く平坦剥離、平坦面を残す。先端部・基部・返し部の作出は不充分。	Ⅴ
第27図 PL.40	7	剥片石器 石鏃	3/4	長 (2.2) 幅 (1.2)	厚 0.4 重 0.71			黒曜石	完成状態？表裏面とも全面押圧剥離。先端部は裏面側から折れているが、左辺の返し部も破損しており、製作段階で破損した可能性もある。	Ⅰb
第27図 PL.40	8	剥片石器 石鏃	1/5	長 (2.2) 幅 1.4	厚 0.4 重 1.06			黒曜石	未製品。表裏面とも全面押圧剥離。先端部を破損。基部側は剥離途中で、平基鏃になるとも有茎鏃になるとも不明。被熱して透明感を欠く。	Ⅴ
第27図 PL.40	9	剥片石器 打製石斧	1/2	長 (6.9) 幅 (5.1)	厚 (1.1) 重 43.3			黒色頁岩	表裏面とも側縁を錯向剥離、右辺側に細部加工を施す。このため両側縁で加工状態が異なり、石斧的加工か検討を要す。	不明
第27図 PL.40	10	剥片石器 打製石斧	ほぼ完形	長 17.6 幅 7.8	厚 4.7 重 523.4			珪質頁岩	未製品。厚い甲高の大形剥片を素材に用い、側縁加工したもの。側縁加工は初期段階で、石斧製作を諦めたもの。	不明
第27図 PL.40	11	礫石器 礫器	完形	長 14.5 幅 8.6	厚 5.8 重 1069.6			粗粒輝石安山岩	盤状礫端部を裏面側→表面側の順に剥離､刃部を作出する。両側縁に敲打痕があり、多目的使用か器種転用の可能性。	
第27図 PL.40	12	礫石器 凹石	完形	長 10.4 幅 7.1	厚 5.4 重 511.0			粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫、断面三角形状を呈す。中央付近にアバタ状の敲打痕、これを覆う摩耗痕が全面に広がる。側縁や礫稜部には打痕が著しい。	
第27図 PL.40	13	礫石器 凹石	完形	長 11 幅 9.1	厚 4.3 重 658.8			粗粒輝石安山岩	掌サイズの偏平楕円礫。表裏面とも礫中央付近にアバタ状の打痕、摩耗痕。上下両端の小口部・両側縁に敲打痕。	
第27図 PL.40	14	礫石器 磨石	完形	長 7.7 幅 6.7	厚 5.5 重 410.9			粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも礫面は比較的平坦、摩耗面が広がる。側縁中央付近は左右とも敲打・摩耗痕が集中する。	
PL.40	15	剥片石器 スクレイパー	完形	長 4.4 幅 5.5	厚 1.4 重 31.0			黒色頁岩	横長剥片端部に浅く連続剥離して、弧状刃部を作出する。左辺側刃部を欠損する。	
PL.40	16	剥片石器 二次加工ある剥片	1/2	長 6.9 幅 9.2	厚 3.4 重 216.1			細粒輝石安山岩	板状剥片素材の石核を転用したもの｡加工部は石核端部で、石核形状に即して細部加工を加え、弧状刃部を作出。	

面では、１層となる黒褐色土および１ｂ層の褐灰色粘質土が最上位にあり、続いて２層の黒褐色土が厚く堆積し、この２層中に多量の遺物が出土する。さらに下位には６層とした褐灰色粘質土となるが、遺物の出土量は減少する。そして、７層の鈍い黄褐色土、８層の褐灰色砂層、９層の灰黄褐色シルト質砂層、10層の灰黄褐色砂層、11層の褐灰色砂層が最下層となるが、８～11層は自然堆積層との調査所見がある。

遺物：出土した遺物は、実に多種多様にわたり、その量も極めて多い。先述した溝内の上位と下位に分別できる遺物は多くはないが、判断が付く遺物については分別を試みたので以下に記す。なお、石器類についての分別はできなかった(第30～35図参照)。

〈溝上位出土の土器〉

溝上位から出土したとすることのできる土器は、先述の１号配石に伴う埋設土器(第24図１)がその代表である。その１号配石周辺の同一面から出土した土器として、土器の出土状況写真および標高値を勘案すると、１号配石北側の１Ｄ-12グリッド内に16・302・492・494・517の各土器が出土している。何れも第３面調査の初期段階に出土し、494は口・頸部を欠く壺形土器(PL.24-１)、517は壺形土器の口縁部片(PL.24-２)、16は甕の口縁部で^{14}C測定年代(測定番号：IAAA-210472)では2,495±21 yrBPとなっている(PL.24-３)。さらに、302は鉢形土器の完形、492は口・頸部を欠く壺形土器も同様に溝の上部から出土している。１号配石の南側となる１Ｅ-10グリッド内には387の台付浅鉢形土器の完形(PL.26-３・４)と、22の鉢形土器の大型片が第３面調査の初期段階に出土している。さらに南側となる１Ｆ-９グリッド内では10の鉢形土器(PL.27-７)、１Ｅ-７グリッド内からは504の壺形土器の上半が比較的上位から出土している。１号配石からやや離れた南側に位置する１Ｆ-７グリッド内では、29と278の甕形土器が同一面で隣りあうように、278が正位で潰れ、29が横転して潰れた状態で出土している(PL.28-４～６)。なお、この278が^{14}C測定(測定番号：IAAA-210470)で2,478±21 yrBPという年代を示している。同様に離れた１Ｆ-６グリッド内に305の甕形土器、１Ｆ-５グリッド内に419の浅鉢形土器と26の甕形土器(PL.29-６)、１Ｆ-４グリッド内に300の鉢形土器(PL.29-７・８)がそれぞれ出土している。しかも、１Ｆ-５グリッド内の26は^{14}C測定(測定番号：IAAA-210477)で2,460±21yrBPという年代を示している。

この溝上位出土土器の^{14}C測定の年代値をみると、2,456±21yrBPの年代値を示した１号配石の埋設土器(第24図１、^{14}C測定番号：IAAA-210471)と26・278の年代値がほぼ同年代であることが解る。

〈溝下位出土の土器〉

溝下位から出土したとすることのできる土器は、先述の１号配石に伴う埋設土器(第24図１)よりも下位に出土したもので、土器の出土状況写真および標高値を勘案すると、９号配石出土の土器、12・13号配石周辺の配石と同一面から出土した土器、そして溝の底面付近に出土した土器が一連となる。まず、12・13号配石周辺となる１Ｄ-11・12グリッド内からは、476の壺形土器(PL.25-６)、25の甕形土器(PL.24-５)、550の甕形土器の底部(PL.24-４)、289の鉢形土器(PL.25-２)をはじめとする多くの土器が出土している。これらの土器は、やはり溝底面付近に出土している。同様に南側となる溝底面付近から出土している土器には、１Ｅ-10グリッド内からの139の甕形土器の口縁部大型片(PL.25-７・８)、１Ｆ-７・８グリッド内からの298の胴部上半が大きく膨れる甕形土器(PL.28-１・２)、１Ｆ-７グリッド内からは４の甕形土器(PL.28-８・29-１)がある。この４は、^{14}C測定(測定番号：IAAA-210476)で2,522±22 yrBPという年代を示している。さらに、１Ｆ-６グリッド内では18の甕形土器の口縁部大型片(PL.29-２)が出土し、^{14}C測定(測定番号：IAAA-210474)で2,515±21yrBPという年代を示している。最も南側の溝底面となる１Ｅ-４グリッド内からは、282の球胴状の甕形土器が出土している。

この溝下位出土土器の^{14}C測定の年代値をみると、４の年代値が最も古く2,522±22yrBPで、18の年代値もほぼ同年代であると言えよう。

以上、溝上位出土と下位出土の代表的な土器を挙げてみたが、そこには際立った文様の差異は見当たらない。しかし、出土土器全体からみれば、ここに上げた504や517の様な異質な(東海系)壺形土器は、上位から

の出土がほとんどを占め、下位からの出土はみあたらない。このことは、上位出土土器と下位出土土器に時間差が生じていることを意味し、１号配石と12・13号配石の出土層位の差、^{14}C測定年代値の差として捉えることができよう。

以下、出土した土器、土製品類、石器、石製品類に分けて記述する。

〈土器〉

６号溝から出土した土器量は極めて多く、その内容は先述したように縄文時代晩期末葉から弥生時代前期前半にかけての土器群であり、短いながらも時期幅をもつ。吾妻地域における縄文時代晩期末葉から弥生時代前期前半にかけての土器群の良好な出土例は本遺跡例が初めてであり、その実態は知られていないことから時期的な分別は難しく、また、器種についても深鉢形や甕形、鉢形等、明確な分別が難しい。そこで本書での土器説明については、大まかな器種分類を主に扱うこととする。

１.甕・深鉢形土器（第36～58図、第17表、PL.41～58）

器形的にも幾つかのバリエーションをもつ甕や深鉢形土器であるが、口縁部以下に施文される文様についても様々な文様が施されている。ここでは、口縁部文様を主にＡ～Ｄ類、胴部をＥ・Ｆ類として、以下のように分類した。

Ａ類

口縁部直下に文様帯をもつ類で、１～９に代表される。その口縁部文様によって、さらに以下のように分類し、記述する。

Ａ－１：　数条の沈線を巡らせて口縁部沈線文帯を形成する一群である。１は小突起をもつ平口縁の口縁部直下に７条の沈線を巡らせ、やや括れる頸部を無文帯とし、以下の胴部に細い条痕を施す。４は双頂波状様の小突起をもち、口縁下に３条の沈線を巡らせ、頸部を無文とし、胴部上位に横位沈線と三叉文による変形工字文を描き、下位に条痕文を施す。５は口唇に刻みを有する小波状口縁の口縁下に３条の沈線を巡らせ、頸部を無文とし、最大径となる胴部境以下に太い条痕を施す。口縁形状は異なるが、７・８は口縁下に２条の沈線を巡らせ、頸部を無文とし、最大径をもつ胴部に条痕を施す。９は小波状口縁の口縁下に３条の沈線を巡らせ、頸部を無文とし、最大径をもつ胴部上位に横位条痕、胴部下半に縦位条痕を施す。口縁形状は異なるが、11・12は口縁下に３ないし４条の沈線を巡らせ、頸部を無文とし、最大径をもつ胴部に条痕を施す。15は無文地の口縁下と胴部上位に数条の沈線を巡らせる例で、16・17もこれに類する。また、41は波状口縁の口縁下に３条の沈線を巡らせ、頸部無文帯を挟んだ胴部上位に３条の横位沈線と棒状突起を配し、如何に沈線で意匠文を描く。

さらに、この一群には45～108が含まれ、45～73のように縄文地となる口縁下を沈線帯とするＡ－２類に準じるものも多くみられ、頸部無文帯を挟んだ胴部も縄文を施す例も多い。これらの中にも、53～55・61・65・92のように口縁形状に沿った沈線を描くものもある。また、72・73のように頸部無文帯下の胴部上位に横位矢羽根状沈線を施すものや、75のように胴部の区画内に沈線による先端が蕨手状となる文様を描く例もある。

Ａ－２：　縄文ないし条痕による口縁部文様帯を形成する一群である。３は小波状口縁の口縁下に縄文を施して口縁部文様帯とし、僅かに括れる頸部を無文帯とし、以下の胴部に細い条痕を施す。111・112・114・126～133も口縁部文様を縄文帯とするもので、113・115・116・118～122・134は条痕帯となるものである。これらの胴部に施される文様も、口縁部文様と同じ施文具であることが多い。また、112では頸部無文帯を挟んだ胴部上位に、３条の横位沈線で文様帯を区画し、区画内に３条沈線で鋸歯文を描くと共に、胴部にも縄文が施される。

Ａ－３：　肥厚様に、段差をもって無文の口縁部文様帯を形成する一群である。２は波状口縁の口縁下に段差で文様帯区画し、頸部を無文帯とし、以下の胴部に条痕を施す。10は連続する小波状口縁の口縁下を段差で文様帯区画し、頸部を無文帯とし、胴部上位には短い横位沈線を３段単位に巡らせ、胴部全体に条痕を施す。18は連続する小波状口縁の口縁下に

段差で狭い無文の口縁部帯を形成し、頸部無文帯を挟んで、最大径となる胴部上位に縄文を胴部下半に条痕を施す。19は双頂突起をもつ口縁下に太い凹線条の幅狭な頸部をもち、以下の胴部に粗い条痕を施している。なお、Ａ－２類の中にも口縁部が肥厚様となるものが含まれている。

Ａ－４：　沈線等による文様を描く口縁部文様帯を形成する一群である。６は連続する小波状口縁の口縁下に、波状口縁に沿う弧状沈線と波頂下に縦位沈線、そして口縁部文様帯を区画する１条の沈線を巡らせ、頸部を無文とし、大きく張る胴部に条痕を施す。なお、口縁部文様帯内にも条痕が地文としてあることから、頸部無文帯は条痕地の磨消による。小型深鉢となる42の口縁部文様には、横位沈線で区画された連続する横位三角状の浮線文が描かれ、頸部無文帯下の胴部境に瘤状小突起と横位細沈線を交互に巡らせ、以下に横位沈線と三角陰刻文による網目状意匠を多段に描く。43は横位沈線で区画された幅広な縄文地文の口縁部文様帯内に変形工字文様の文様を描き、頸部無文帯下を横位沈線で区画し、以下の縄文地文の胴部に２条沈線で波頂が長い波状文を施している。

Ｂ類

Ａ類のような口縁部文様帯が形成されず、頸部と一体化した無文帯をもつ類で、20・21・28・29に代表される。その器形に左右されるが、口頸部の形状によって、さらに以下のように分類し、記述する。

Ｂ－１：　口縁から頸部までが長い一群である。20は連続する小波状口縁の口縁下から頸部が広い無文帯となり、頸部下と胴部最大径位置に４条の横位沈線を巡らせ、地文に条痕を施す。21は緩く連続する小波状口縁の口縁下から頸部が広い無文帯となり、胴部上位に横位沈線と陰刻文を施し、地文に縄文を施す。22も先と同様な器形で、無文帯となる口頸部下を１条の横位沈線で区画し、以下の胴部に条痕を施す。24はやや細身となる深鉢形で、口頸部の広い無文帯下に条痕文を施す。

さらに、これらの一群には135・139・140・145・146・148～150・153が含まれ、縄文や条痕を地文とするほかに、146の胴部には２条の沈線文様が描かれている。

Ｂ－２：　口縁から頸部までが短い一群である。26は連続する小波状縁の口縁から頸部が短い無文帯となり、胴部は上下２段の膨らみをもち、その境となる屈曲部を太い凹線で区画し、上下各段に太い斜位沈線を描き、地文に縄文を施す。27も連続する小波状縁の口縁から頸部が短い無文帯となり、以下の胴部に条痕（貝殻？）を施す。28は双頂波状様の小突起をもち、口縁から頸部が短い無文帯となり、以下の胴部に条痕を施す。29は波状口縁の口縁から頸部が短い無文帯となり、以下の胴部に細い縄文を施す。30は双頂様な波状口縁の口縁から頸部が短い無文帯となり、以下の胴部に太い条痕（貝殻？）を施す。

さらに、これらの一群には137・141～144・147・151～157が含まれ、157の胴部には２条の沈線で意匠文が描かれる。また、155･156は貝殻条痕である。

Ｃ類

口縁以下に地文を施す類で、31～33に代表される。口縁下の状態から、以下のように分類し、記述する。

Ｃ－１：　口縁直下以下に条痕ないし縄文の地文のみを施す一群である。31は小突起をもつ平口縁の口縁下に条痕を施すもので、32～36も口縁形状は異なるが同様である。ただし、32は貝殻条痕である。37・38は小型土器で、口縁下に37は条痕を、38は細い縄文を施す。

さらに、これらの一群には173・174・177・184～188・197～200が含まれる。

Ｃ－２：　口縁直下に１条の沈線が巡る一群である。172・175は平口縁直下に１条の沈線を巡らせ、以下の胴部に縄文を施す。

Ｃ－３：　口縁を僅かに無文とする一群である。181・182･189～193･196等がこの一群に含まれる。また、201の口縁下を僅かに無文とし、以下に左右方向の斜位の条痕を施す例があるが、とりあえず本類にとどめておく。

Ｃ－４：　口唇部に押圧を巡らせる一群である。39は小型土器であるが、平口縁の口唇に押圧を巡らせ、以下の胴部に縄文を施す。178・202～206も同類だ

が、202は短沈線を巡らせ、205は貝殻条痕を施す。

D類

口縁以下を無文とする類で、40に代表され、207～210もこの一群に含まれる。

E類

胴部に沈線等による文様を描く胴部片をまとめた。

E－１：　胴部上位に横位沈線以外の文様を描くものである。215・216は頸部無文帯下の体部上半の上下を横位沈線３条で文様帯区画し、その区画内に斜位と縦位沈線による菱形連繋文を描き、地文に体部上位は縄文、下半は条痕を施す。217は横位沈線で多段区画し、さらに縦位沈線による小区画内に２条の斜位沈線を連続させて鋸歯状のも運用を描く。218は２条の横位沈線で区画し、縦位短沈線や菱形状の文様が描かれ、地文に条痕を施す。219・220は72と近似し、横位沈線で区画された区画内に横位矢羽根状の文様を描き、地文に条痕を施す。223・224は数条の沈線で縦位に波状文を描く。225は６条単位の沈線で縦位・横位に区画し、区画内に縦位矢羽状の文様を描く。226は２条の横位沈線で区画し、さらに区画内を縦位沈線で小区画し、小区画内に対向する弧状の文様を描き、地文に縄文を施す。227は数条の沈線による横位連弧状の文様を描き、下半は無文。228沈線で横位長楕円状の文様が描かれ、地文に縄文を施す。

E－２：　胴部に横位沈線を描くものである。229は４条の横位沈線と縦位刺突を巡らせ、地文に縄文を施す。230～232は多段の横位沈線と地文の縄文を施し、233・234は横位沈線と地文に条痕を施す。235は横位沈線と太い条痕を弧状に施し、内面にも条痕を施す。

F類

胴部に縄文ないし条痕を施した胴部片である。

F－１：　頸部無文帯をもつＡ・Ｂ類に分類できない胴部片である。236～242・は縄文を施したもので、250～255は条痕を施す。

F－２：　縄文ないし条痕を施した胴部片である。243～247は縄文を施したもので、256～262は条痕を施している。また、248・249は胴部上位に縄文、胴下半に条痕の両者を施している。

２.鉢形土器(第59～64図、第17表、PL.58～62)

先の甕とした器形と区別し難いものも含まれるが、器形的に幾つかのバリエーションをもつことから、ここではＡ～Ｅ類として、以下のように分類した。

Ａ類

甕Ａ類とした器形に近いが、小型で胴部の張りが緩い器形を呈する類で、264～266・278～281に代表される。さらに、施文される文様によって以下のように分類し、記述する。

Ａ－１：　口縁部に文様帯をもつ一群である。264は連続する波状口縁下に、口縁形状に沿う沈線で縄文を施した口縁部文様帯を区画し、頸部無文帯を挟み、大きく膨らむ胴部上位に４条の横位沈線と縦位刺突文を巡らせ、下半に縄文を施す。265は双頂突起をもち、肥厚する口縁部文様帯に縄文を施し、頸部無文帯を挟んだ胴部上位に３条の横位沈線３条を巡らせ、下半に縄文を施す。266は口縁に小突起をもち、口縁下に２条の横位沈線を巡らせ、頸部無文帯を挟んだ胴部上位に横位沈線と陰刻による変形工字文を多段に巡らせ、下半は無文となる。267は胴部上位に横位沈線と縦位刺突を巡らせ､下半に縄文を施す。278は平口縁の大きく開く口縁部文様に縦位の瘤と２条の沈線で７単位の楕円状文様を配し、口縁部内面にも４条の横位沈線を巡らせる。頸部無文帯下に７単位の小瘤を貼付し、その間に２条の横位沈線と斜位刻みを巡らせて境とする。胴部には小瘤下に縦位に対向する矢羽状沈線、或いは縦位鋸歯状の文様を描き、それらの間に縦位沈線を充填する。279は平口縁の口唇端部に沈線をもち、口縁部に小突起と横位沈線を巡らせる。頸部無文帯を挟んで胴部上半に横位沈線と陰刻による楕円状の文様が描かれ、下半は無文となる。外面は赤彩。280は平口縁となる口縁部文様に横位沈線と陰刻による変形工字文が描かれ、頸部無文帯を挟んだ胴部上位に横位沈線とクランク文が巡り、以下に縄文を施す。外面は赤彩。281は双頂突起をもち、口頸部に沈線で変形工字文様の文様を巡らせ、胴部上半にも横位沈線で区画さ

れた区画内に楕円等の文様が描かれ、以下に条痕文を施す。317も同様な口縁部文様をもつ。また、316も地文縄文の口縁部を横位沈線で区画し、区画内に長楕円等の文様を描く。

なお、器形が大きく異なる263であるが、ここで記述する。直線的に開く器形からは、台付鉢ないし浅鉢を連想する。口縁下を２条の横位沈線で文様帯区画し、区画内に数条の沈線で鋸歯状ないし三角状の文様を巡らせ、以下を無文とするが、破片下端に横位沈線をもつ。内外面とも赤彩。311も口縁部文様に同様な三角文様が描かれ、以下が無文となる。

Ａ－２：　口縁部と頸部が一体化し、無文帯となる一群である。268・269は波状口縁の口頸部が無文となり、胴部に条痕を施す。270は平口縁の口頸部が無文となり、頸部下に横位沈線と三叉文による変形工字文が巡り、以下の胴部に縄文を施す。271・272は平口縁の口頸部が無文となり、胴部上位に沈線と三角陰刻による変形工字文および細刺突が巡り、271の胴部下半には縄文が施される。また、305は双頂突起をもち、口頸部は無文で短く、以下の胴部に縄文を施す。306は胴部上位に縄文、下半に条痕を施す。347では無文の口頸部下に条痕文を施す。

Ｂ類

甕Ｂ類とした器形に近いが、胴部の張りが屈曲する器形を呈する類で、273～277に代表される。

273は平口縁の口縁部は無文で、口縁部内面に１条の横位沈線が巡る。頸部屈曲部と胴部屈曲部に横位沈線と三叉文による変形工字文を巡らせて胴部上半の文様帯を区画し、区画内に先端蕨手状の沈線を配し、胴部下半に縄文を施す。274も同様に、平口縁の口縁部は無文で、頸部屈曲部と胴部屈曲部に横位沈線を巡らせて胴部上半の文様帯を区画し、区画内に幅広沈線と陰刻による文様を描き、胴部下半に縄文を施す。275は平口縁の口頸部は広く無文で、口縁部内面に１条の横位沈線が巡る。胴部屈曲部上位の狭い間に横位沈線と三叉文による変形工字文が巡り、胴部下半に縄文を施す。276は胴部屈曲部上位の狭い間に横位沈線と三叉文による変形工字文が巡り、胴部上位と下半には縄文が施され、底面に２条の沈線で十字を描く。277は小型で、平口縁の口縁部は無文となり、頸部屈曲下に横位細沈線と三叉文による変形工字文が巡り、以下の胴部上半にも同様な変形工字文が２段巡り、胴部地文に縄文を施す。また、胴部屈曲部下には底面で交差した十字の沈線が４方向に延びる。外面に赤彩痕あり。他に、371・372も含まれる。

Ｃ類

口縁から頸部が短く、球胴状を呈する類で、282・286・289～293に代表される。さらに、施文される文様によって以下のように分類し、記述する。

Ｃ－１：　胴部上半に文様が集中する一群である。器高の高いものと、低いものとの二者がある。282は双頂状の波状口縁の口縁部が無文となり、頸部屈曲下と胴部上半に２ないし３条の横位沈線を巡らせ、地文に縄文を施す。284は連続する小波状口縁の口縁部が無文となり、頸部屈曲下に沈線による工字文や三角文が描かれ、地文に条痕を施す。285は小波状口縁の口縁部が無文となり、頸部屈曲下となる胴部上半に横位・弧状の沈線と三叉状陰刻による変形工字文が描かれ、下半に縄文を施す。286は連続する小波状口縁の口縁部下に横位沈線を巡らせて区画し、短い頸部無文帯をなす。胴部は287と同様の変形工字文を胴部上半に、下半には縄文を施す。外面は赤彩。287同様で、無文となる平口縁の胴部上半に変形工字文を多段に描く。また、291は口縁部に小突起をもつ口縁が内反する器形で、口縁下となる胴部上半を横位沈線で区画し、区画内に縦位刺突と弧状沈線で文様を描き、下半は無文となる。赤彩痕あり。292も同様な器形を呈し、胴部上半を横位沈線で区画し、区画内に変形工字文を描き、下半は無文。外面は赤彩。口頸部を欠く294～296の胴部上半に、294では瘤状貼付をもつ横位浮線文と横位沈線で区画し、区画内に横位矢羽状の浮線文を描き、下半は条痕を施す。内外面に赤彩。295は３条の横位沈線で入組み状の文様を描き、下半に縄文を施す。内外面に赤彩。296は横位刺突列で区画し、区画内に三叉文と横位沈線で変形工字文を描き、下半は無文。内外面は赤彩。307は双頂波状口縁の口唇に刺

突をもち、僅かな口縁下の胴部上端に４条の横位沈線を巡らせると共に、２列の縦位矢羽状沈線を縦位に区画し、その区画間には周囲に刺突列を伴う環状貼付文と沈線による意匠文を描く。

さらに、この一群には320～331、352～366も含まれる。

なお、304は脚部の短い台付鉢であるが、ここに含めた。平口縁で、口頸部は無文となり、胴部の膨らみ部に２条の横位沈線と刺突を巡らせ、脚部下端に３条の横位沈線が巡る。

C－２：　胴部下半にも文様がおよぶ一群である。289は双頂波状口縁の口縁部が無文となり、頸部屈曲下の胴部上位に横位沈線と三角陰刻で変形工字文とクランク状の文様を描き、胴部下半に先端蕨手状の斜位沈線を配し、下半の地文に縄文を施す。290は連続する波状縁の口縁部が無文となり、胴部に斜位沈線を有し、地文に縄文を施す。赤彩痕あり。

C－３：　胴部に文様をもたない一群である。293は連続する波状縁の口縁部に縄文を施し、頸部は無文で胴部上半は縄文、下半は無文としている。外面は赤彩。343～346も含まれる。

D類

胴部が上下２段となる器形を呈する類で、297～299に代表される。さらに、器形から以下のように分類し、記述する。なお、この器形については、胴部上下の接合が確認できたものを対象とした。

D－１：　上段が鉢Ｃ類的な形状を呈するもので、298と299の２点を確認した。298は連続する小波状口縁の短い口頸部が無文となり、頸部下に横位沈線に挟まれた楕円状沈線が巡り、胴部段堺および胴部下端に２条の横位沈線を巡らせ、胴部全体に縄文を施す。299は口頸部を欠くが、胴部段堺および胴部下端を無文帯とし、胴部全体に縄文を施す。

D－２：　上段が浅鉢的な形状を呈するもので、297の１点を確認した。平口縁の口唇に沈線をもち、口縁下と胴部段堺および胴部下端に１条の凹線が巡り、口縁以下に縄文を施す。

E類

椀型に近い器形を呈する類で、300～302に代表される。器形から２分類し、以下に記述する。

E-１：　椀型器形の体部が緩く湾曲するもので、300は口縁下に１条の凹線を巡らせ、以下に縄文を施す。301は口縁下に短沈線と刺突を挟んだ横位沈線を巡らせ、以下は無文。

E-２：　直線的に立上がるもので、302は口縁下に２個１対の小孔を穿ち、口縁下となる体部上半を横位沈線で文様帯区画し、区画内に沈線と三叉状陰刻による菱形状の文様が描かれ、下半は無文となり、下端に横位沈線は巡る。底部は僅かに上底状で、内外面とも丁寧な研磨と赤彩を施す。

３.浅鉢形土器(第65～69図、第17表、PL.62～66)

施文される文様によって、大きくＡ～Ｃ類に３分類した。

A類

口縁以下に変形工字文等の文様を描くもので、377・381・386～388・395・402・417に代表される。

さらに、施文される文様によって以下のように分類し、記述する。

A－１：　口縁直下に文様帯をもつ一群である。377は器高の低い浅鉢で、口縁下に１条の沈線を巡らせ、以下の体部上半に横位・縦位沈線による変形工字文を描き、体部下半は無文。外面は赤彩。381は口縁下に沈線で変形工字文を描き、接点部が浮線化する。体部下半に縄文を施す。外面は赤彩。384は口縁下に横位沈線と陰刻による変形工字文を多段に描き、体部下半に縄文を施す。外面は赤彩。388は口縁下に沈線で網目状の文様を描き、体部下半に縄文を施す、389は口縁下に横位沈線と陰刻で変形工字文を多段に描き、体部下半に縄文を施す。内外面に赤彩。他に、378～380・382・383・385・390～394がある。

A－２：　口縁下の凹線状の無文帯を挟んで体部文様帯をもつ一群である。386はやや大型の浅鉢で、口縁部文様に小突起と横位沈線を巡らせ、その下に凹線状の幅狭無文帯をもち、体部上半に浮線文による網目状の文様が描かれ、下半は無文。外面は赤彩。395は口唇部に刺突をもつ小突起が配され、口縁下

に凹線状の幅狭無文帯をもち、体部上半に浮線文による網目状の文様が描かれ、下半は無文となる。外面は赤彩。396は口縁部に横位沈線と小突起が巡り、その下に凹線状の幅狭無文帯をもち、体部上半に浮線文による網目状の文様を描き、下半は無文となる。内外面に赤彩。402は口縁部に円形刺突を配し、その下に凹線状の幅狭無文帯をもち、体部上半に浮線文による細かな網目状の文様を描く。外面は赤彩。403は小波状縁下に無文帯をもち、体部上半に浮線文による細かな網目状の文様を描く。外面は赤彩。415は口縁下に無文帯状の凹線と、部分的に浮線文によるレンズ状の文様を描くが、体部は無文となる。内外面は赤彩。417は緩い波状口縁で、口縁下を無文とし、円形刺突と浮線文で弧状の文様を描く。

他に332～342・397～401・404～414・416・418がある。

Ａ－３：　底部に高台をもつ台付浅鉢である。387は内湾する口縁の口縁下に４条の横位沈線と縦位沈線が配され、体部下半から直立ぎみな脚部は無文となる。

Ｂ類

口縁下に横位沈線を主に施す類で、419・425・430・432～441に代表される。さらに、施文される文様によって以下のように分類し、記述する。

Ｂ－１：　口縁下に数条の横位沈線を巡らせ、刺突等を配する一群である。419は小波状口縁の口縁下に２条の横位沈線を巡らせるが、口縁以下に縄文を施す。425は内外面の口縁下に１条の横位沈線が巡り、体部屈曲部に２条の横位沈線を巡らせる。426は口縁下に弧状の貼付文を配し、その下端を凹線が巡り、体部は無文。429は口縁下に三叉文と短沈線を巡らせ、体部は無文で外面は赤彩。

他に、420～422・427・428・430がある。

Ｂ－２：　口縁下に１条の凹線を巡らせる一群である。432はやや小型で、口縁下に１条の凹線を巡らせ、以下の体部に縄文を施す。433は大型で、口縁下に１条の凹線を巡らせ、以下の体部に縄文を施し、内外面を赤彩。434も大型浅鉢で、口縁下に１条の凹線と、以下の体部に縄文を施す。435は器厚が薄く、口縁下に１条の凹線と、以下の体部に縄文を施す。236・438は丸底を呈し、口縁下に１条の凹線と、以下の体部に縄文を施し、326の内外面は赤彩。437・441は同型の大型浅鉢で、口縁下に１条の凹線と、以下の体部に縄文を施し、437の外面は赤彩される。

他に、440・442～452がある。

Ｃ類

口縁以下に横位沈線や意匠文様をもたない類で、無文のものも含まれる。453・454は口縁以下に縄文を施し、455～458は無文となる浅鉢で、458の内面口縁下に沈線が巡る。

４.壺形土器（第70～76図、第17表、PL.66～71）

施文される文様から、ここでは大きくＡ～Ｃ類に分類した。

Ａ類

在地的な器形・文様を施すもので、459・468・475・476・478・484に代表される。短頸と長頸の器形の違いと、頸部形状の不明な胴部に分類し、記述する。

Ａ－１：　短頸のものをまとめた。459は口縁部に刺突をもつ小突起を配し、肩部上位に浮線文で網目状の文様を描き、以下は無文となる。462・466は口頸部が無文となり、以下の肩部に縄文ないし条痕を施す。468は小波状口縁の口頸部は丁寧な研磨による無文となり、肩部に沈線で楕円状の工字文を描く。475は長胴形の壺で、口頸部は無文となり、口縁部外面を赤彩する。胴部には条痕を施す。476は高さ約30㎝を測る長胴形の壺で、口縁部は横位沈線で区画されて縄文を施し、頸部は無文となる。胴部は２ないし３条の横位沈線が多段に巡り、地文に縄文を施す。

この他に、肩部の文様を描く460・461・473、口縁部に沈線等を巡らせる464・469・471・472、頸部が膨れる474、口縁部以下に縄文を施す465等がある。

Ａ－２：　長頸のものをまとめた。477は口唇に浅い押圧、口頸部に縦位の条痕を施し、肩部に２条の沈線で横位区画された区画内に沈線と陰刻による鋸歯状の文様を描く。478は口唇に刻みを有し、口縁部に３条の沈線を巡らせ、頸部下端に４条の沈線を巡らせて頸部を区画し、区画内に１条の縦位沈線を中央に上下３段の矢羽根状沈線を描き、その両側を縦

位沈線で区画する。さらに頸部の縦位区画された間を数条の横位沈線が繋ぐように描かれる。外面は赤彩。479・480は口縁下に貼付状の突起と沈線による区画文をもつもので、479の頸部は斜位の条痕を施す。481・482は口縁下に数条の横位沈線を巡らせるもので、481の口唇には縄文が施される。483は口縁下に棒状貼付を配し、頸部は無文となる。484は口縁部を欠くが、頸部に縦位楕円状の文様を沈線で配し、胴部には３条の沈線でクランク文や渦巻文等が描かれる。485は口頸部を欠くが、肩部に沈線で変形工字文を多段に描き、胴部中位に縄文を施し、その下端に4条の沈線を巡らせる。

Ａ－３：　頸部形状の不明な胴部である。491は頸部が無文となり、肩部に横位区画された区画内に矢羽根状沈線を描き、胴部下半に条痕を密に施す。492も口頸部を欠くが、頸部は無文となり、肩部に数条の横位沈線を２段巡らせ、その段間を無文帯とし、胴部下半に条痕を縦位に施す。493は頸部が無文となり、肩部以下の胴部に粗い条痕を施す。494は頸部が無文となり、肩部に横位の沈線が１条巡る。以下の胴部には縄文が施される。

他に、495～502にみられるように、胴部に縄文や条痕を施すもの、或いは胴部も無文となるものがある。

Ｂ類

他地域からの土器(遠賀川系)である。１点のみ確認できた。

503は口縁が外反し、口唇部に横位細沈線と細かな縦位刻み目を施す。頸部の括れ部に４条の横位隆線を巡らせ、頸部および胴部はハケ目調整と横位撫で調整を施す。

Ｃ類

他地域からの土器(東海系)で、貝殻条痕を施す類である。

Ｃ-1：　口唇下に押圧が巡り、以下に条痕を施す一群である。504は口縁直下に押圧をもつ突帯が巡り、緩く括れる頸部および肩の張る胴部には幅広な貝殻条痕を横位方向に施す。507・517は口縁下に押圧をもつ突帯を巡らせ、以下も頸部に幅広な貝殻条痕を施す。508・509・510は口唇部に貝殻腹縁による連続刺突を施し、口縁下に押圧突帯を巡らせ、頸部に幅広な貝殻条痕を横位に施す。511・512も口縁下に押圧突帯を巡らせ、頸部に横位の条痕を施す。513は口唇に押圧を施し、口縁下に押圧突帯を巡らせ、頸部に条痕を縦位に施す。514は口唇に楕円状の短沈線を施し、口縁下に浮線文に似た楕円状短沈線を連続させた突帯を多段に巡らせ、頸部に太い貝殻条痕を縦位に施す。515は口唇に押圧を施し、口縁以下の頸部に貝殻条痕を縦位に施す。519は薄手の頸部に押圧突帯を巡らせ、その突帯上位には横位、下位は縦位の貝殻条痕文を施す。

Ｃ－２：　口唇下に押圧が巡り、頸部に波状文を施し、以下に条痕を施すものである。505は口縁下に押圧突帯を巡らせ、頸部は貝殻条痕による縦位矢羽根状の文様を巡らせ、その下となる肩部に貝殻条痕で横位波状の文様を２段描く。胴部上位は横位の貝殻条痕、胴部下半は斜位に貝殻条痕を施す。507は口唇に貝殻刺突を施し、口縁直下に押圧突帯を巡らせ、頸部上位は貝殻条痕を横位に、中位以下には１条の沈線で波状の文様を横位多段に描く。

Ｃ－３：　口唇下に隆体が巡り、以下に条痕を施すものである。521は面状となる口唇に条痕を施し、直立する口頸部の口縁部に２条の隆帯を巡らせて幅狭な横位区画をし、頸部から肩部に貝殻条痕を縦位に施す。

Ｃ－４：　口唇以下に条痕を施すものである。520・522は口縁以下に貝殻条痕を横位・斜位に施す。

Ｃ－５：　貝殻条痕を施す胴部片である。523～528は胴部に横位・斜位の貝殻条痕を施し、529では胴部下端まで貝殻条痕が施される。

５.底部(第77～85図、第17表、PL.71～76)

特徴的な底部をまとめた。底部付近となる胴部下端の文様および底部形状によって、Ａ～Ｆ類に６分類した。

Ａ類

胴部下端に沈線等による文様をもつものである。

530は胴部下位に３条の斜位沈線と下端に４条の横位沈線をもち、地文に縄文を施す。531は下端に横位の長・短沈線が巡り、地文に縄文を施す。532は下端付近に２条の横位沈線が巡り、地文に縄文を施す。

533は下端付近に３条の横位沈線が巡り、地文に条痕を施す。534は下端に横位沈線と刺突が巡り、地文に縄文を施し、底面に網代痕をもつ。535は下端付近に横位沈線が巡り、底面に木葉痕をもつ。536は下端付近にまで数条の縦位沈線と縦位矢羽根状沈線が描かれ、底面に木葉痕をもつ。537は下端に横位沈線、底面に３条の円形沈線と中央に十字状の文様を描く。538は底部が屈曲するように出張り、屈曲部と下端に横位沈線を巡らせ、地文に縄文を施す。

Ｂ類

胴部下端に縄文を施すもので、底面の状態によって以下のように分類し、記述する。

Ｂ－１：　胴部下端に縄文を施すが、底面文様のないもので、539～543が該当する。

Ｂ－２：　胴部下端に縄文を施すが、底面に網代痕をもつもので、544～549が該当する。網代痕にも幾つかの種類がある。

Ｂ－３：　胴部下端に縄文を施すが、底面に木葉痕をもつもので、550～554が該当する。

Ｃ類

胴部下端に条痕を施すもので、底面の状態によって以下のように分類し、記述する。

Ｃ－１：　胴部下端に条痕を施すが、底面文様のないもので、555～567が該当する。557は貝殻条痕である。

Ｃ－２：　胴部下端に条痕を施すが、底面に網代痕をもつもので、568～588が該当する。網代痕にも幾つかの種類がある。

Ｃ－３：　胴部下端に条痕を施すが、底面に木葉痕をもつもので、589～596が該当する。

Ｃ－４：　胴部下端に条痕を施すが、底面が上げ底となる597がある。

Ｄ類

胴部下端が無文となるもので、底面の状態によって以下のように分類し、記述する。

Ｄ－１：　胴部下端が無文となり、底面文様のないものに598～606が該当する。

Ｄ－２：　胴部下端が無文となり、底面に網代痕をもつものに607～616が該当し、網代痕にも幾つかの種類がある。

Ｄ－３：　胴部下端が無文となり、底面に木葉痕をもつものに617～625が該当する。

Ｅ類

台付土器の脚部である。脚部の形状により分類し、記述する。

Ｅ－１：　脚部に横位沈線を巡らせ、地文に縄文を施す627、無文の626等がある。また、地文のみで、縄文を施す637、無文の638がある。

Ｅ－２：　脚部に円形の透かし文を有するもので、刺突や沈線等で文様を描く639～641、下端に横位沈線と地文に縄文を施す642、無文の643がある。

Ｅ－３：　やや古い時期の脚部が１点だけ出土している。脚部中位に円孔を３単位有し、周縁を入り組み状沈線文や三叉文と、縄文を施す。

Ｆ類

角底となるもので、645は方形を呈し、体部は直立ぎみ。体部　下端に２条の沈線による横位に弧状の文様を描き、底面には２条沈線で米字状の文様が描かれている。

６.蓋形土器（第86図、第17表、PL.76）

土数は少ないが、形状の異なる蓋形土器が出土している。形状の違いは、摘み部を有する648、摘み部をもたない649に代表され、Ａ・Ｂ類に分けて記述する。

Ａ類

摘み部を有する蓋形土器で、この類の代表とした468は、細長い摘み部の上端平坦面に沈線をもち、摘み部側面から蓋体部に縄文を施す。646は摘み部上面が皿状に窪み、上面下に数条の沈線が巡り、以下の摘み部側面から体部は無文となる。647は摘み部上面が皿状となり、側面に横位・縦位沈線で格子状の文様が描かれ、さらに短沈線が加えられる。

Ｂ類

角底となるもので、645は浅鉢を逆位にした器形で、頂部も丸みを帯び、無文である。特徴的なのは、２個

一対の小孔をもつことである。650・651も同様な器形の蓋形土器である。

７.小型土器(ミニチュア土器)

(第87図、第17表、PL.76)

小型土器(ミニチュア土器)も散見できる。652は口縁下に刺突、胴部に沈線で文様を描く深鉢形。653は小突起をもつ口縁下に縄文帯と頸部無文帯を沈線で区画し、胴部に縄文を施す鉢で、内面赤彩。654は胴部に横位沈線と刺突が巡り、下半は無文となり、外面赤彩。655は頸部が無文となり、胴上半に横位の結節沈線と短沈線が巡り、地文の縄文は底面にまで及ぶ。656は頸部下に沈線をもち、胴部は無文。657は底面が楕円となる底部で、底部付近に４条の沈線が巡る。658・659は縄文が施され、660～662は無文のもので、指頭圧痕が付く。663はミニチュアの蓋形土器である。

〈土製品類〉

６号溝から出土した土製品類には、土偶をはじめとし、鯨面土偶や人面(鯨面)土器、そして耳飾りや腕輪、丸玉や平玉といった玉類、さらに形状の不明なもの等がある。しかし、その量は少ない。

以下、種別ごとに記述する。

１.土偶(第88～90図、第18表、PL.77～79)

出土した土偶には完形品はなく、最も残存するものでも一部が破損し、他は破損した頭部や胴部、腕部、脚部といった土偶の一部が主体を占める。土偶には中実と中空の両タイプがあり、中空タイプは大型土偶となる。中実土偶と中空土偶に分け、記述する。

中実土偶

晩期末葉から弥生前期にかかる時期の土偶としては、あまり例の少ない資料である。また、土偶に施された部分的な強調表現は、極めて特徴的な表現としてこの時期を物語っている。併せて、顔表現が簡略化された土偶も存在する。

１は卵型の平面形を呈する頭部で、顔面描出に眉と鼻を粘土紐による貼付とし、目は浅い刺突、口は浅い沈線で表現する。また、鼻孔に浅い刺突を施し、耳は顔面後ろ側に弧状の粘土貼付と小孔を穿つ。併せて、顔面両脇には３列の細かな刺突が斜めに施され、鯨面的な描出となっている。頭頂部は欠損するが、隆線を巻いた何等かの装飾を施す。裏面の後頭部から首にかけては円柱状となり、中央に縦位に３列ほどの刺突が施される。全体に丁寧に研磨され赤彩を施す。２は細身の土偶で、頭部の一部と左腕を欠く。頭部顔面には顔面表現が簡略化され、中央に円形の凹みのみの表現となっている。腕部・脚部とも短く、腹部付近が僅かに膨らみ、体部の表面中央には逆Ｙ字状の沈線を施し、正中線を描く。また、裏面肩部に横位弧状沈線を施している。なお、この土偶２はPL.31－１・２から、６溝の上位から出土していることが明らかである。３は頭部および腕・脚部を欠く体部で、肩部と腕の付け根部および腰部と僅かに残る膝部を特徴的に大きく肥厚させ、細かな刺突を充填するという強調表現がなされている。また、体部両側縁には凹みを設け、表裏面とも体部中央に幅広の沈線文が正中線状に描かれている。赤彩を施す。なお、この３はPL.31－５・６が体部上半の出土状態で、体部下半の出土状態はPL.32－５であり、６号溝の下位となる北側(13号配石周辺)と南側からの25mほど離れた接合資料である。４は頭部と両脚端を欠く小型土偶で、肩部に突起、腕の付け根部に横位隆帯および棒状工具による刺突で強調表現され、さらに刺突は表裏面の体部中央を縦位１列施し、そして腰部以下にも表裏面に刺突が集中する。赤彩を施す。なお、この土偶２はPL.31－３・４から、６溝の上位から出土していることが明らかである。５は出土した土偶の中で最も小型で、上半と両脚端を欠く。体部の表裏面に縦位の太い沈線、腰部には横位に２列の刺突が表裏面を巡る。赤彩痕が残る。６は無文の腕部片である。７は体部下半で、右脚を欠く。腹部は表面がやや膨らみぎみで、腰部と膝部には隆帯により強く突出した強調表現がなされ、両脚は大きく蟹股となる。表裏面の体部中位には正中線状の縦位沈線が施され、下端は股部で横位に結合する。この縦位沈線の両脇には細かな刺突が２列ずつ施される。赤彩を施す。８は右腕部で、腕の付け根部と肘部に隆帯による突出した強調表現がなされ、細かな刺突を充填する。丁寧な撫で調整で、赤彩痕が残る。６号溝の下位からの出土である。９は体部下半で、左脚を欠く。蟹股となる

脚の膝部に刺突充填の突出した強調表現をもち、体部側面と内股部分が大きく凹む。体部の表裏面中央に逆Ｙ字状の幅広な沈線が施され、裏面に横位沈線が施される。脚先表側にはつま先表現がある。10は体部下半で、左半身を欠く。この左半身との欠損部を観察すると、土偶制作における体部は角棒状の粘土２本を芯材として合わせ、扁平な体部を作り出している。このため、上部破損の際に下部も左右に剥脱したものと考えられる。体部側面は緩く括れるとともに凹み、出張った腰部には刺突充填の突出した強調表現をもち、その下には短い脚が伸び、脚先表側につま先表現がある。全面に赤彩を施す。なお、この10の出土状態はPL.32－７であり、６号溝の上位からである。11～13は無文の脚部片で、11・13は右脚部、12は下端付近に孔を有する左脚である。また、14は刺突を充填した、肩ないし腰・膝部に付く突出した強調表現の剥落片である。

中空土偶

３体分の大型中空土偶が出土している。晩期末葉から弥生前期にかかる時期の土偶としては、あまり例の見ない資料である。

15は大型の中空土偶の左肩部で、首周りの肩部(頸部接合部脇)と肩から腕の付け根を主とした表裏の広い範囲を覆うように肥厚部分を作り出し、肥厚部上に竹管状工具による円形刺突を充填する。体部の脇下には幅広の縦位沈線をもつ。器面は丁寧な作りで研磨され、外面は赤彩である。この15の出土状態はPL.32－２で、６号溝のやや上位からの出土である。16は大型の中空状土偶の左肩から腕部で、15と同様に肩部と肩から腕の付け根を主とした表裏の広い範囲を覆う肥厚部分を作り出し、肥厚部上に円形刺突を充填する。ただし、首との接合部は、15より間が少し長い。また、腕部先端は球状に肥厚し、刺突を充填する。頸部接合部と上腕部が肥厚し手掌部が内湾する。各箇所に竹管状工具による円形刺突文を充填する。器面は丁寧な作りで研磨され、外面は赤彩痕が残る。この16の接合破片は、12号配石と13号配石の間に多くの土器と共に出土しており、PL.24－７にも腕の先端が写っている。よって６号溝の下位からの出土となる。17・18は同一土偶の破片で、17は破片上端に首部が接合する位置で、肩から胸にかけて太い矢印状の沈線がつく。19・20は太い刺突が充填された中空土偶の破片で、15ないし16の一部である。

２.鯨面土偶(第91図、第19表、PL．80)

所謂「鯨面」とされる顔面文様を有する土偶である。図記載できたのは、１個体の破損した頭部２点、顔面および頭部の小破片３点である。

１と２は中実土偶となる同一個体の土偶頭部で、１は頭部右側、２は頭部左側であり、頭部中央を欠き、接合はしていない。１は球形を呈する頭部前面に円形の平坦な顔面が付き、顔面には中央付近から顔面外側に下がる３条単位の斜位沈線、下方には中央側に下がる同様の沈線を描く。頭部側面には耳を突起状に付け、小孔を穿つ。頭頂部は僅かに盛り上がり、脇に無文部を添わせる。頭部全体に竹管状工具による円形刺突が充填し、側面上位に５条の横位短沈線を施す。２は１と同様な顔面に、中央付近から顔面外側に下がる３条単位の斜位沈線が描かれ、頭部側面に小孔をもった突起状の耳が付くことも同じである。また、頭部全体に円形刺突が充填され、側面上位に数条の横位沈線を施す。そして、１・２共に赤彩痕が残る。

なお、１・２から顔面の復元を鯨面土器の顔面を参考に試みると、円形の輪郭となる顔面中央には突起状の鼻が付き、鼻の上方の両側に目、両方の目の上に上方に広がる３本の斜位沈線、鼻の両側にも顔面外側に下がる３条単位の斜位沈線､鼻の下には口が表現され、口の下方両側から輪郭下中央に下がる３条単位の斜位沈線を描くものと考えられる。

３は４条の沈線が施された顔面の小片で、４は小孔と刻みをもつ剥脱した耳部。５は沈線が施された頭部の小片である。

３.人面(鯨面)土器(第92図、第20表、PL．80)

出土土器の中でも､特異な人面付き土器をまとめた。人面の多くは顔面に模様をもつ鯨面で、鯨面以外は１点のみである。

１は径３㎝前後の円板を顔面とし、中央上位に瘤状の鼻、鼻の両脇に目、下に口を刺突で表現する。顔面には口の周囲を中心に菱形状に沈線で区画し、細沈線を充填する。顔面外側にも沈線が施される。赤彩。２は径３㎝の円板を顔面とし、中央上位に瘤状の鼻、鼻

の両脇に目、下に口を刺突で表現する。顔面には、口の周囲を中心とした菱形状の斜位沈線が連続する。顔面の外側にも縦位・斜位の細沈線が施される。外面赤彩。３は径３㎝の円板を顔面とし、中央上位に瘤状の鼻、鼻の両脇に目、下に口を刺突で表現する。顔面には２と同様に沈線が描かれ、顔面の外側は斜格子状に沈線が施される。４は押圧を施した細い隆帯が縦位に貼付され、小孔を有する。隆帯の片側は斜格子状の沈線、もう一方は沈線を横位・斜位に施す。外面赤彩を施す。５～７も４と同様に縦位の隆帯をもち、５・６には沈線で文様が施されている。８は波状口縁の波頂部を人面とした例で、瘤状の鼻と、刺突による目と口が表現され、鼻の脇には刻みを有する。

４.耳飾り(第93図、第21表、PL. 81)

出土した耳飾りは、１の１点のみである。所謂「滑車形耳飾り」と称される形状で、上面(表面)となる内面上半に内縁を廻る１条の沈線と、刻みをもつ装飾部を有する。

５.腕輪(第93図、第21表、PL. 81)

腕輪も２の１点のみの出土である。破片であるが、推定外径８㎝前後、厚さ1.0㎝、幅3.2㎝を測り、無文であるが、表面には僅かに凹凸をもつ。

６.玉類(第93図、第21表、PL. 81)

出土した玉類は少ないが、丸玉と平玉の2種類ある。

丸玉

３は石製の玉を模した土製の玉で、４も同様である。７・８の２点は何れも小さな球体を呈し、中央に貫通する幅狭な孔(孔径１㎜前後)を有し、全面に細い刺突がランダムに施されている。各々の径は、７は長さ1.6㎝、幅1.3㎝、８は長さ2.0㎝、幅1.8㎝を測る。

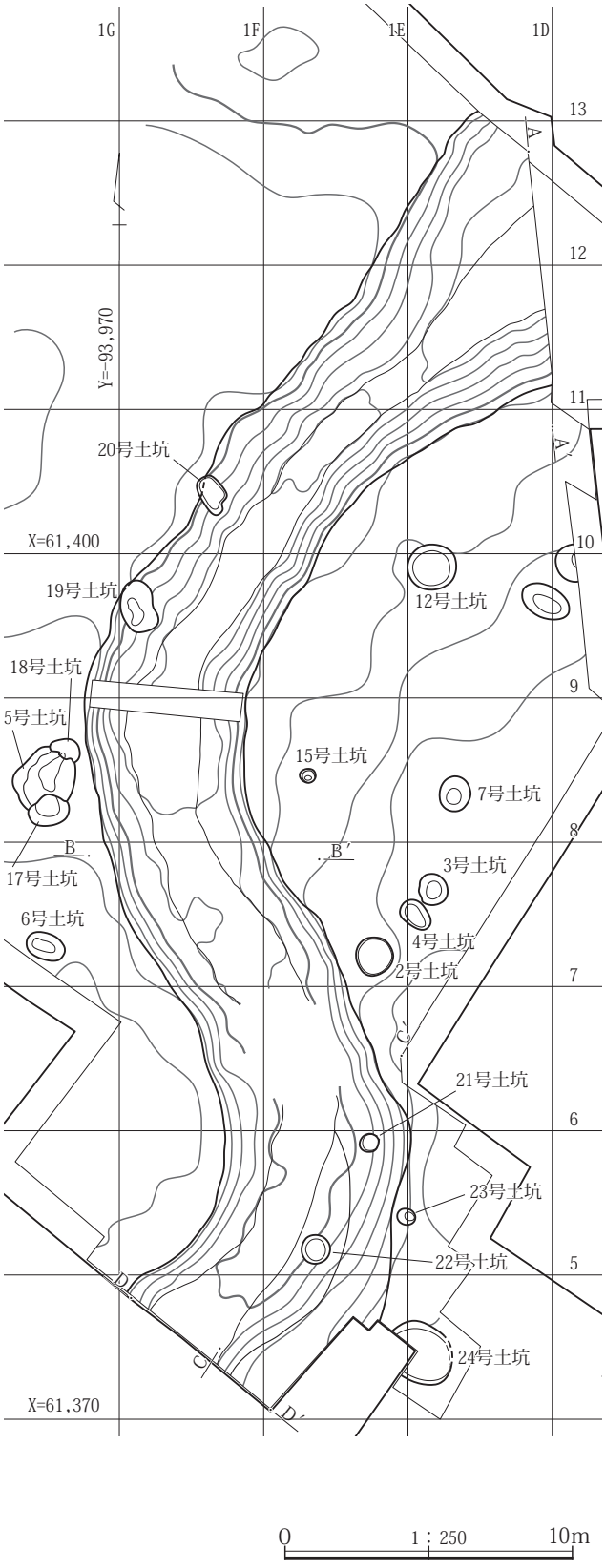
平玉

５の１点のみである。薄く平坦な円盤状を呈し、無文で小型。径1.7㎝、厚さ0.4㎝を測る。

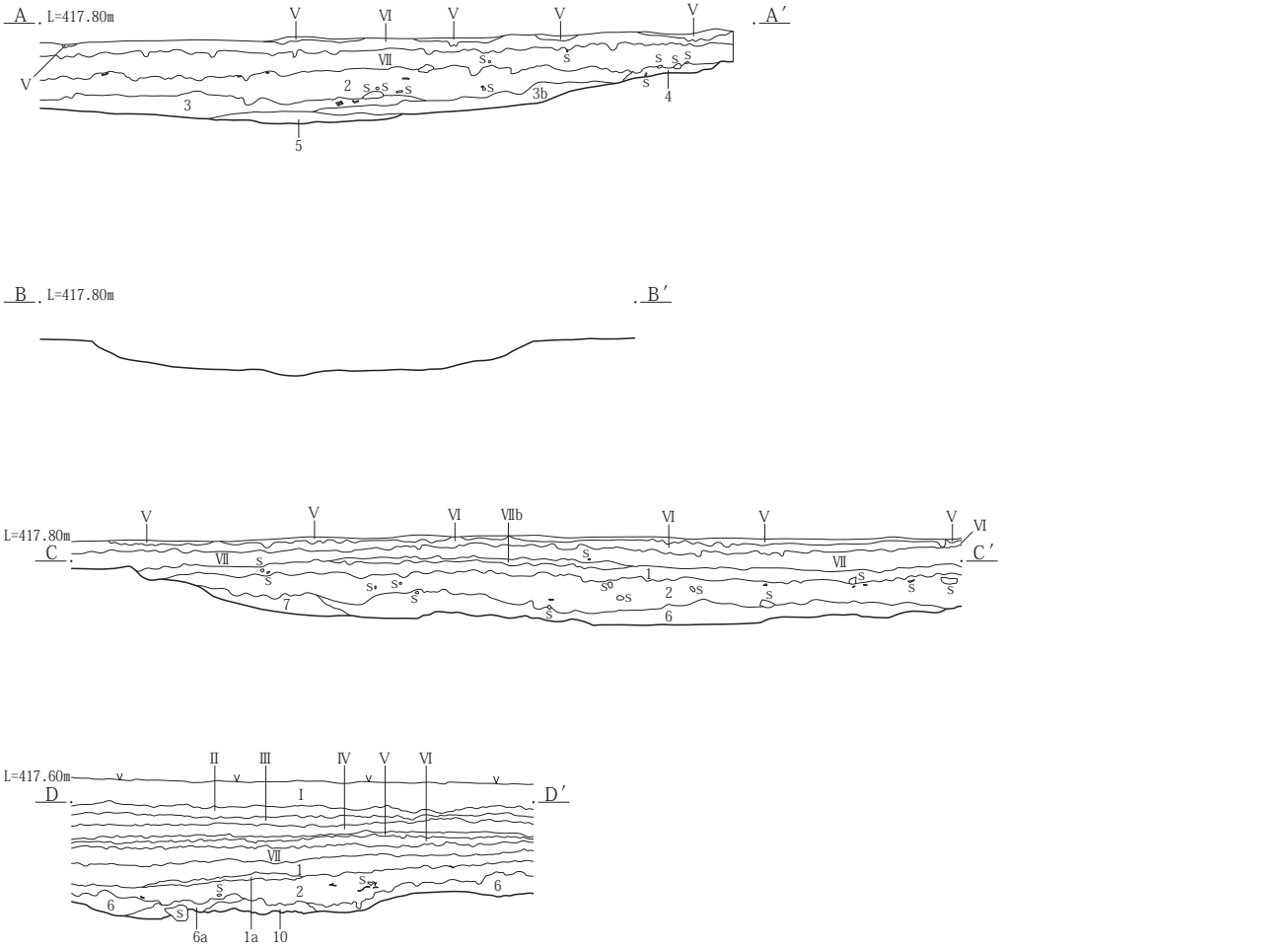
７.不明土製品類(第93図、第21表、PL. 81)

形状の不明なものを、不明土製品類として扱った。

６は小型な壺状の口縁部と思われるが､詳細は不明。９は五角形を呈し、五隅に孔を有する。10は方形状に残存する扁平なもので、孔を有し、表裏面に縄文が施文されている。11は頸部から口縁部にかけて極端に屈曲し、器形が想定できないため不明土製品とした。



第28図　６号溝　平面図

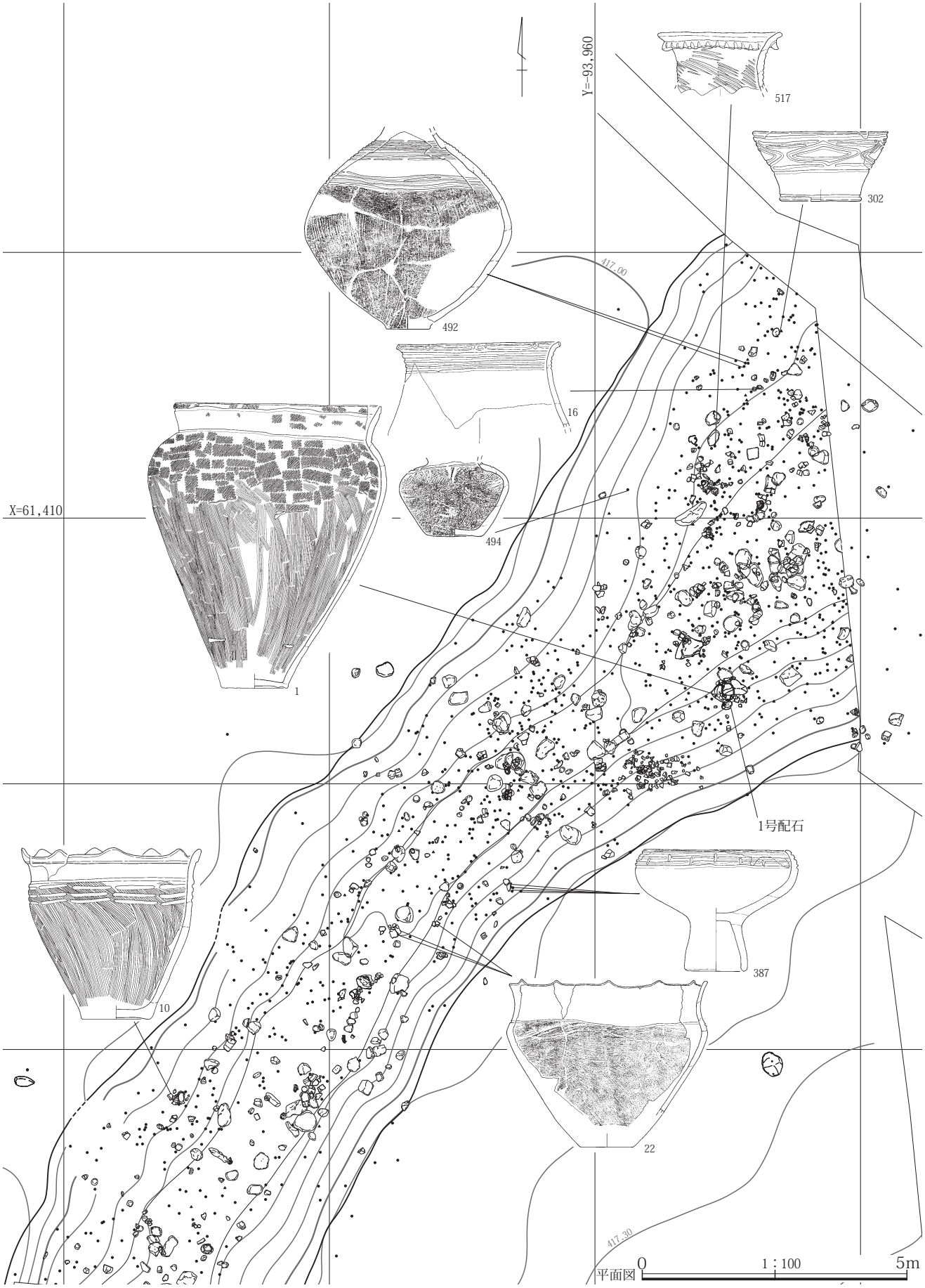


６号溝　共通

Ⅰ　黒褐色土　表土(現耕作土)。As-Kkを多量に含む。
Ⅱ　暗赤褐色土　As-Kkを多量に含み、赤色を帯びる。
Ⅲ　黒褐色土　As-Kkを主体とする。
Ⅳ　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。
Ⅴ　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。下面に粗粒火山灰が薄く堆積。
Ⅵ　黒褐色土　非常に極め細かい土で、極僅かに小礫を含む。
Ⅶ　暗褐色土　土質はⅥ層と同じ。(縄文包含層)
1　黒褐色土　灰色がかり、ローム粒子、小礫を含み、骨片、炭化物をも含む。粘性強い。
1a　褐灰色粘質土　１層より砂質でやや明るい。
2　黒褐色土　暗く、ローム粒子や小礫を含み、骨片、炭化物をも含む。粘性強い。遺物の出土量が多い。
3　灰黄褐色土　粘質で、細粒の砂粒や小礫を多く、炭化物も含む。
3b　灰黄褐色土　３層に比べ灰黄褐色粘土の含有量多く、粘性と砂質に富む。
4　暗褐色土　Ⅶ層と２層の混土層。
5　褐灰色土　褐灰色粘土を主体に、砂粒を含む。
6　褐灰色粘質土　白色粒子を少量、炭化物を僅かに含む。
6a　褐灰色粘質土　６層より砂質で、６層と10層の混土。
7　鈍い黄褐色土　Ⅶ層と２層の混土であるが、明るい。
8　褐灰色砂層　極細粒砂層で、下底部では、粗粒小礫を含む。自然流路の堆積物で、遺物の出土はない。(自然堆積層)
9　灰黄褐色シルト質砂層　極細粒の砂層。(自然堆積層)
10　灰黄褐色砂層　細砂粒を主体に小礫を含み、鉄分作用で部分的に固く締まる。(自然堆積層)
11　褐灰色砂層　10層に類似するが、砂粒は灰色。最下部は鉄分が沈殿し、固く締まる。(自然堆積層)

0　1：100　5m

第29図　６号溝　断面図

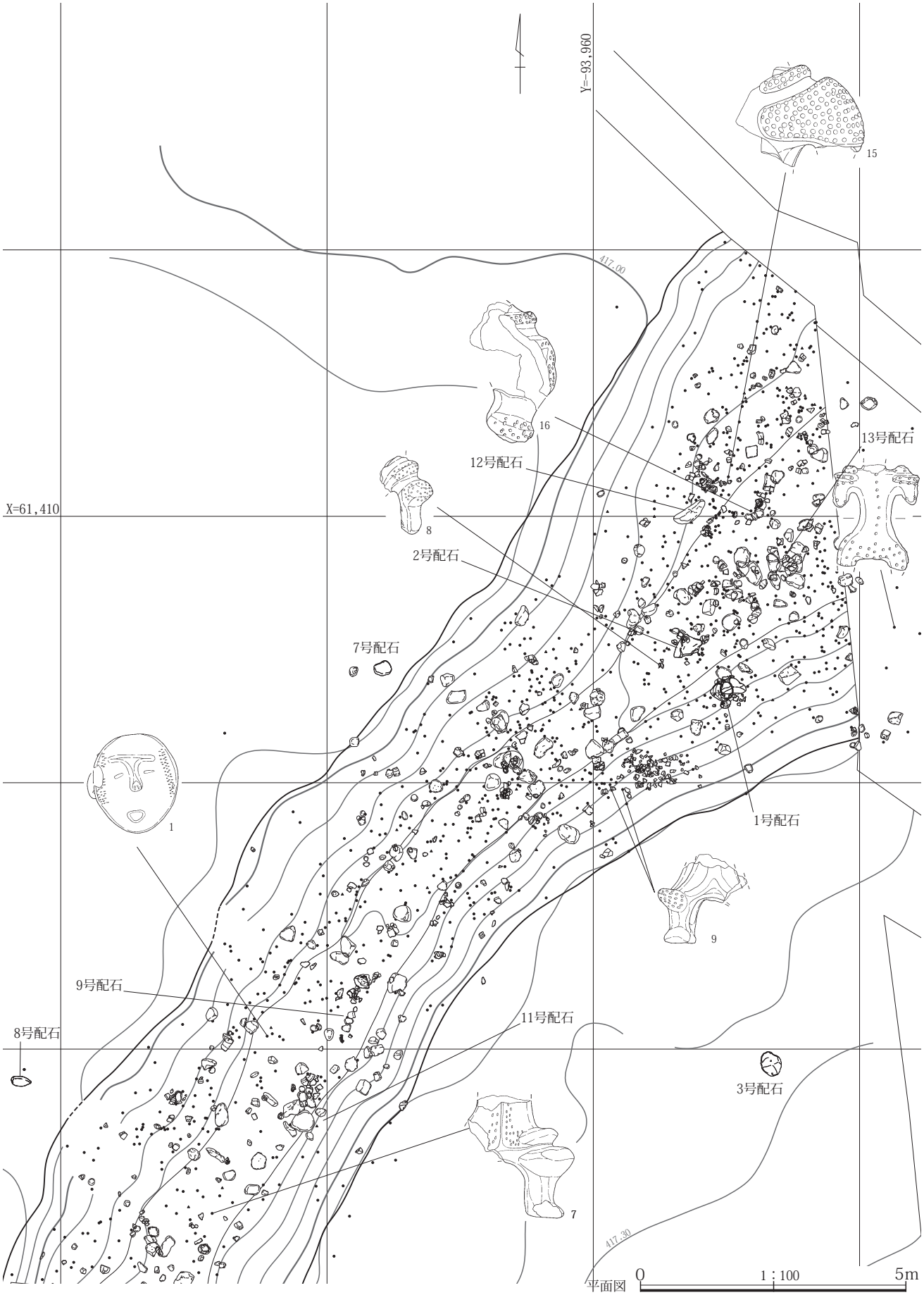


第30図　６号溝　土器上面出土状態(北)

第31図　６号溝　土器上面出土状態(南)

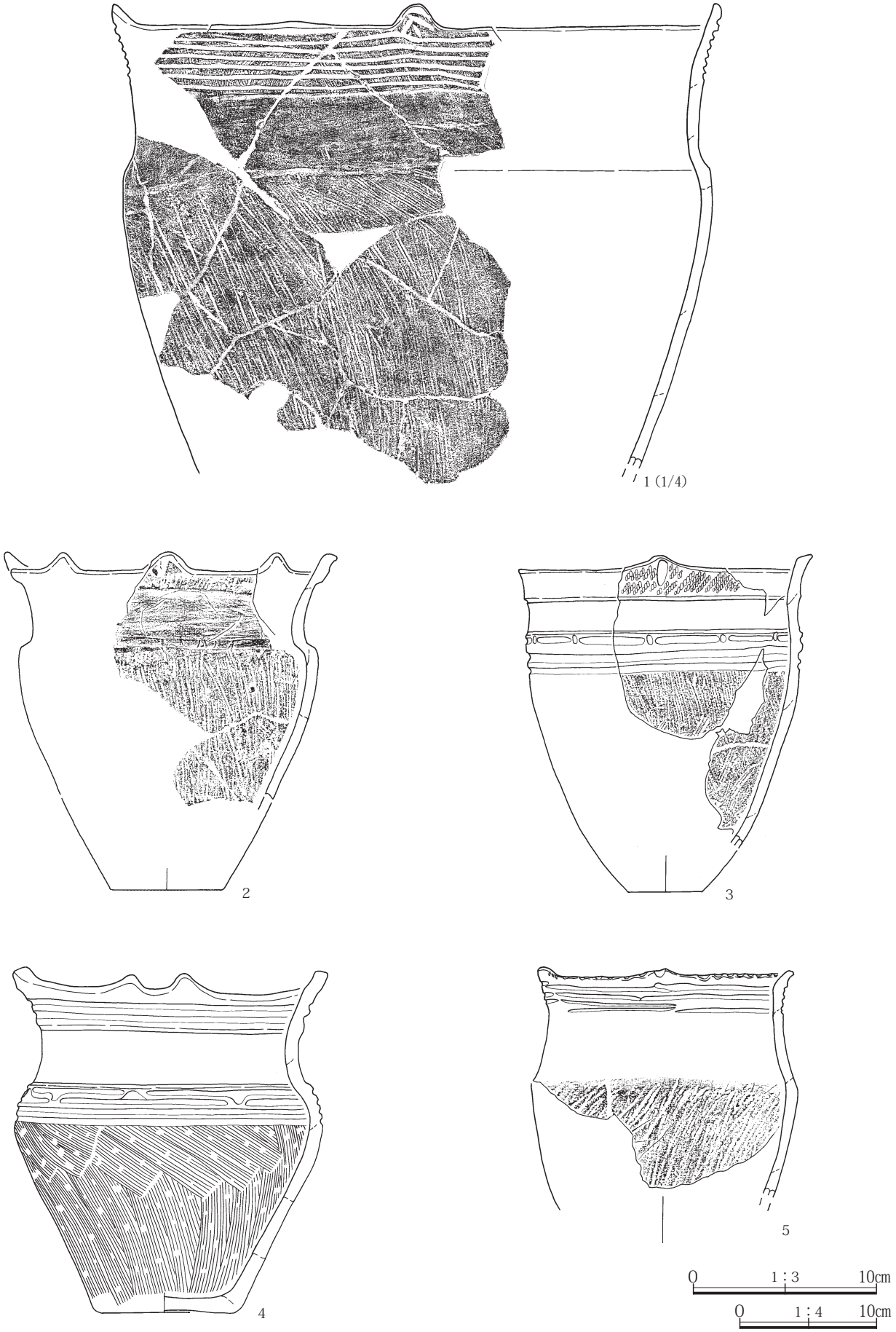
第32図　６号溝　土器下面出土状態(北)

第33図　６号溝　土器下面出土状態(南)

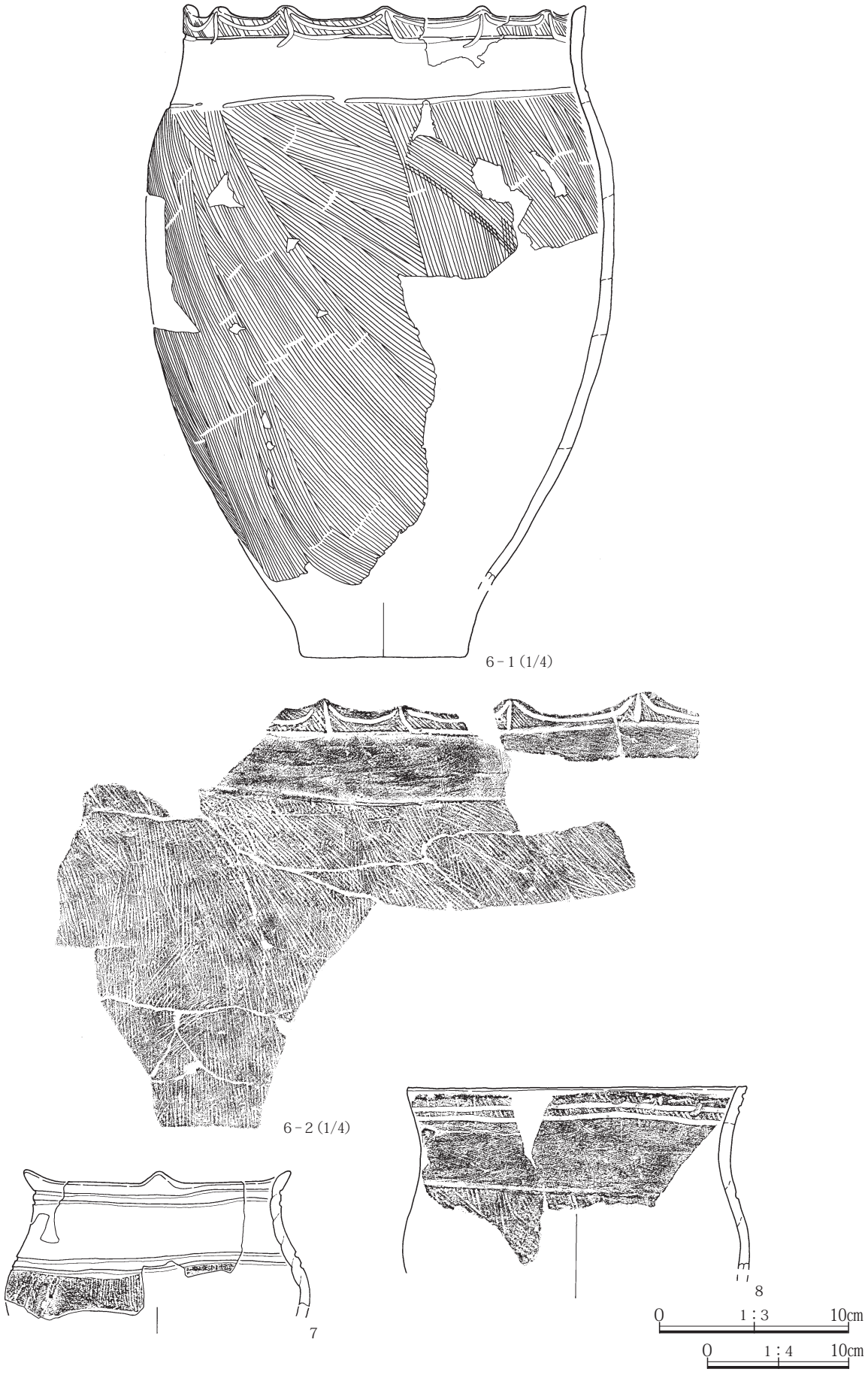


第34図　６号溝　土偶出土状態(北)

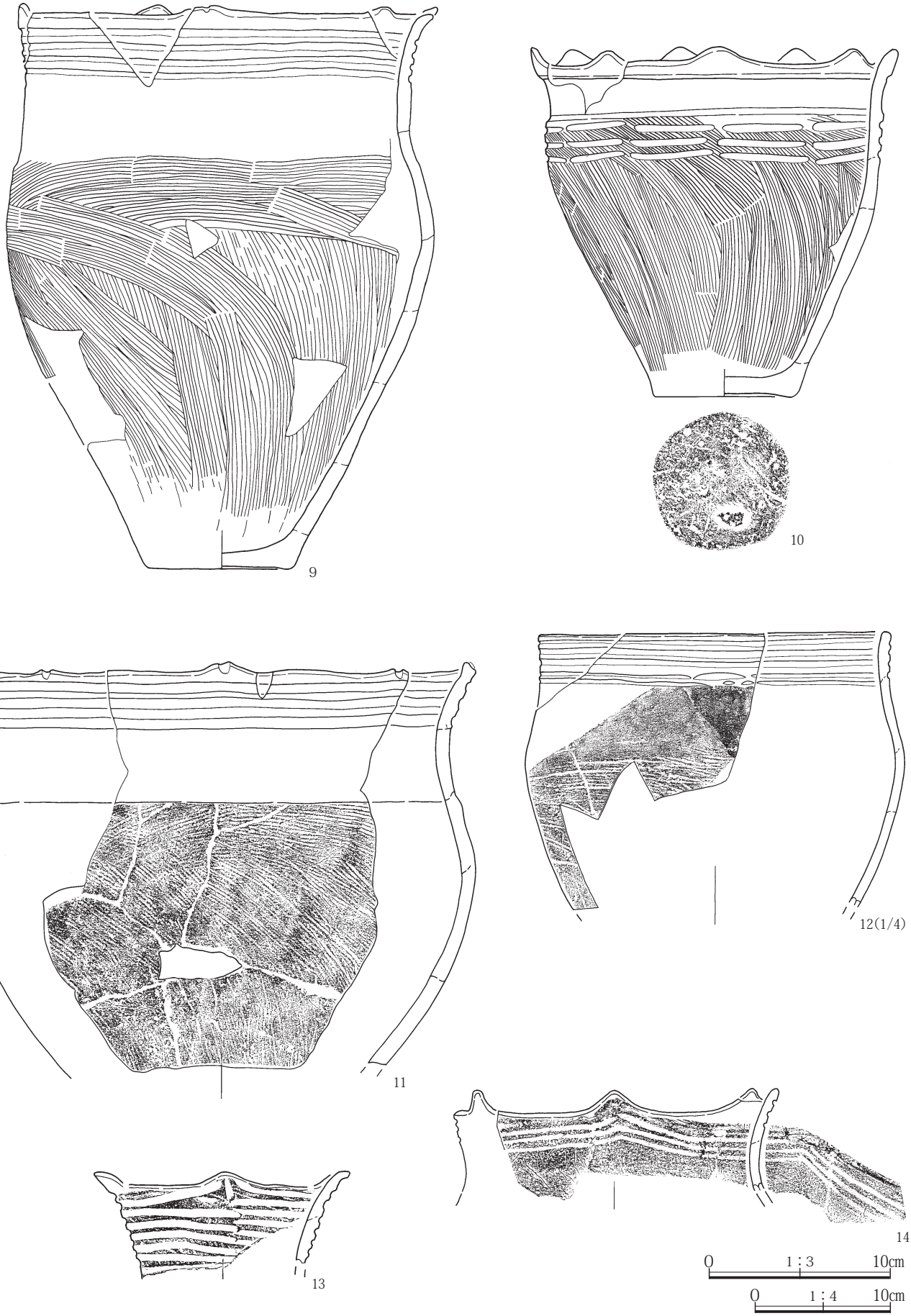
第35図　６号溝　土偶出土状態(南)



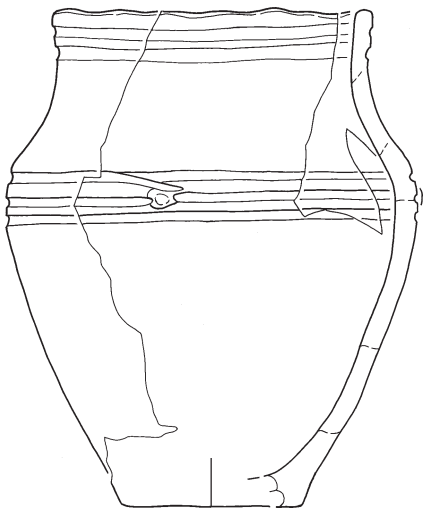
第36図　６号溝　出土土器（１）

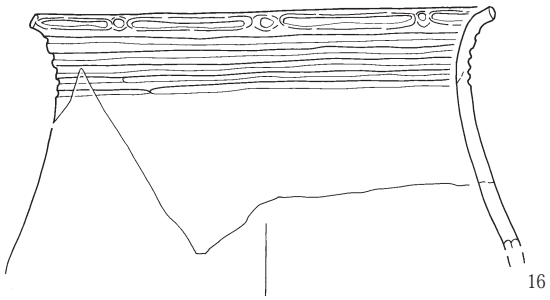


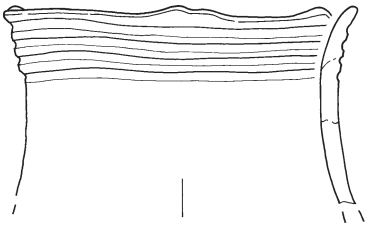
第37図　６号溝　出土土器（２）

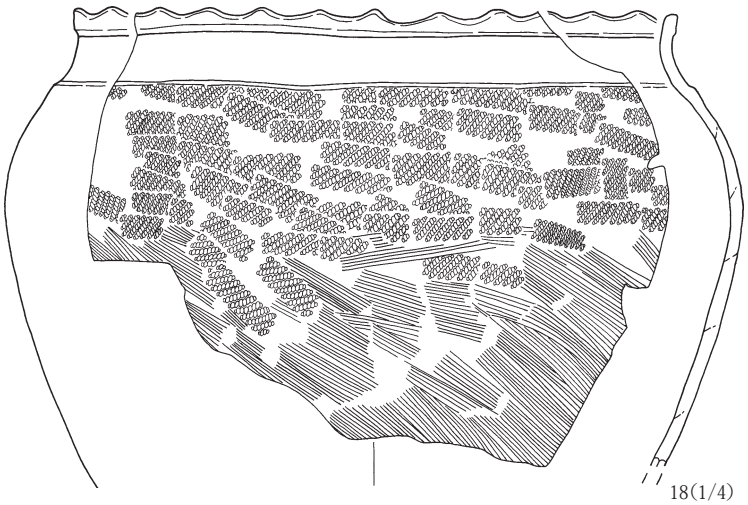


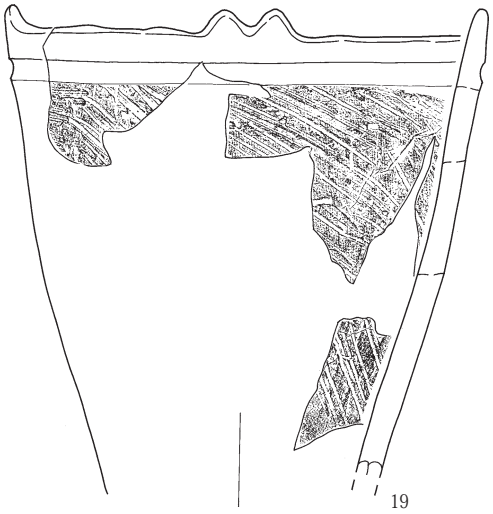
第38図　６号溝　出土土器（３）

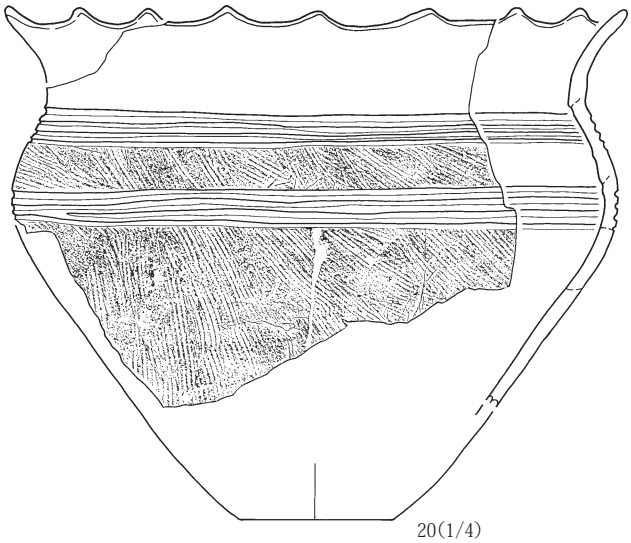

15

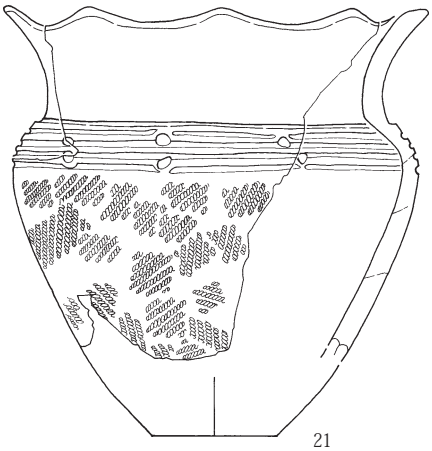

16

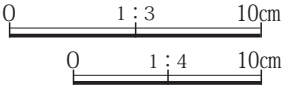

17


18(1/4)

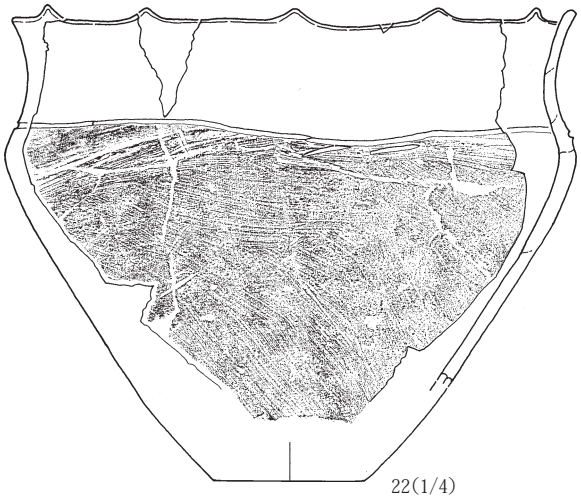

19

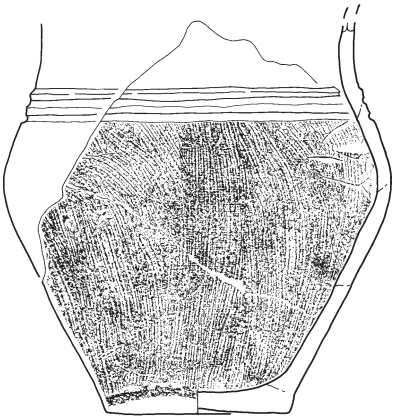

20(1/4)

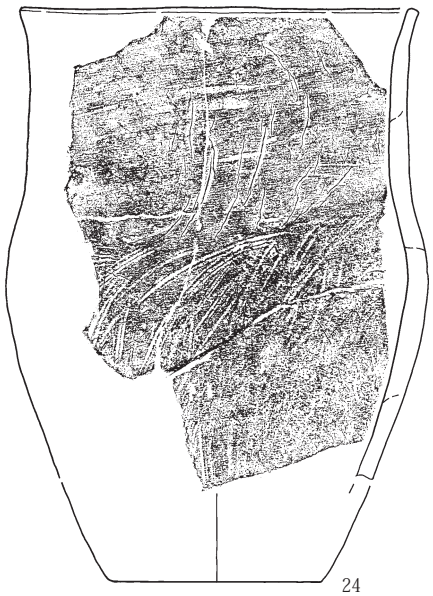

21

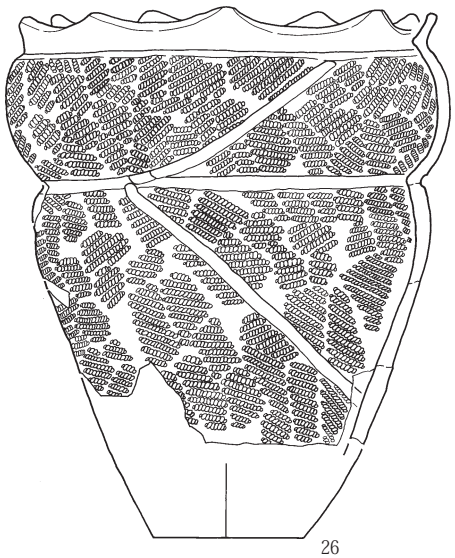


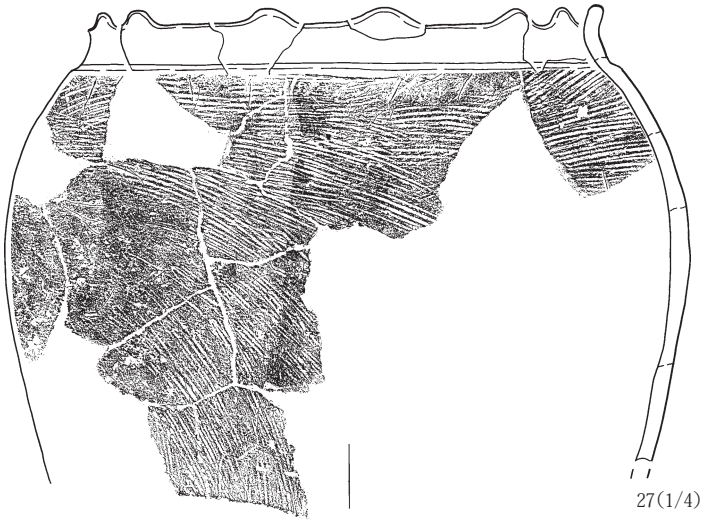
第39図　６号溝　出土土器（４）

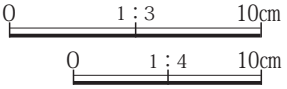




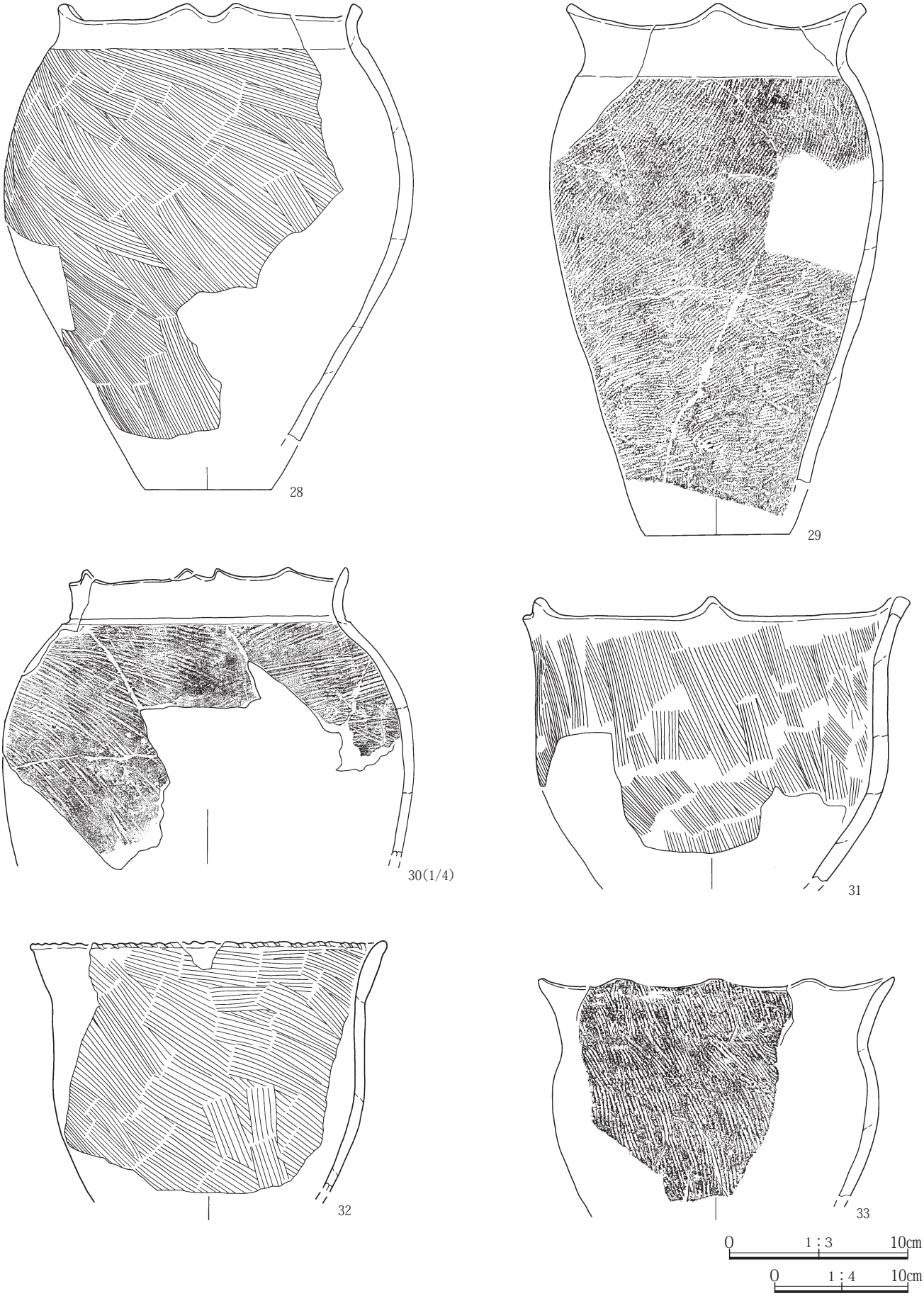




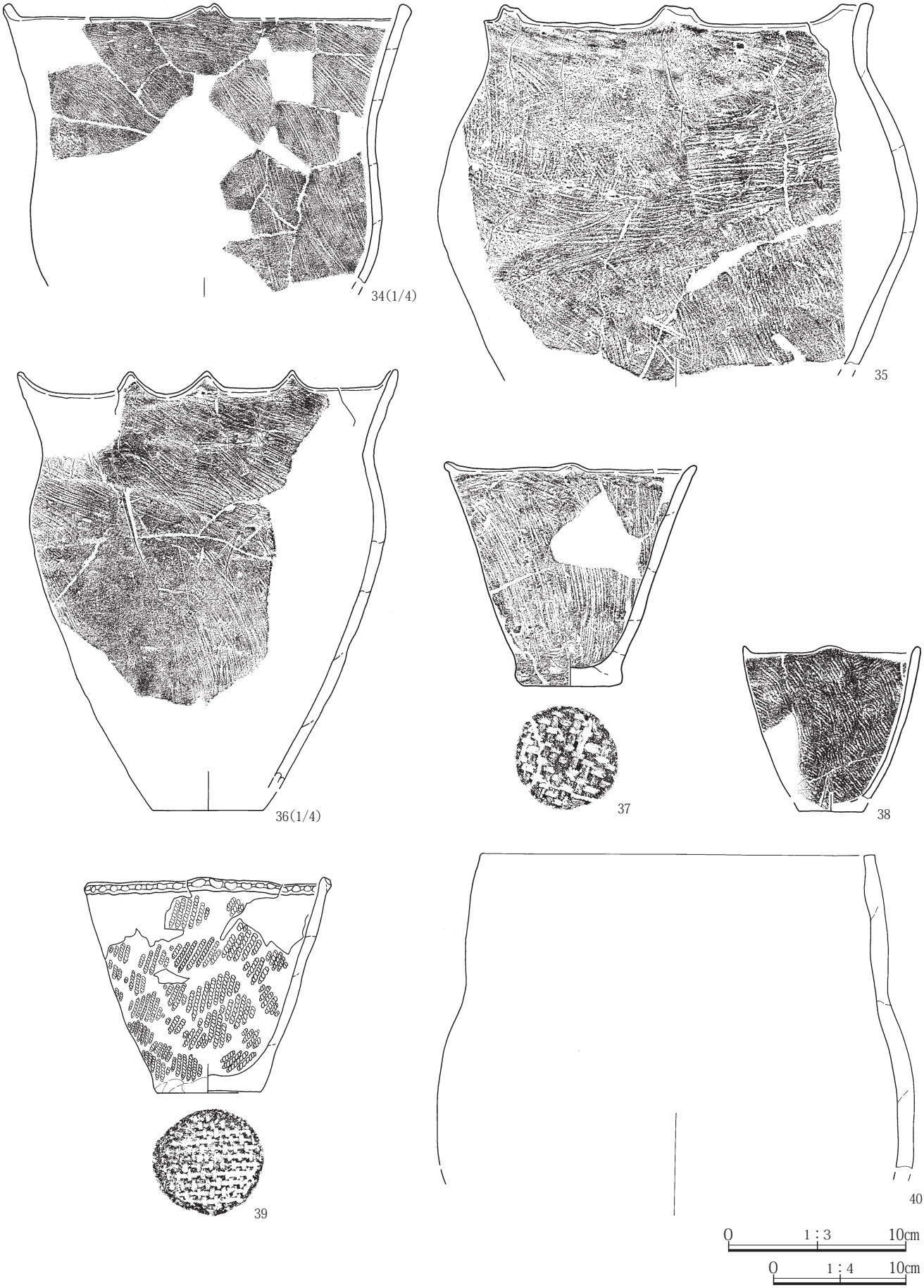




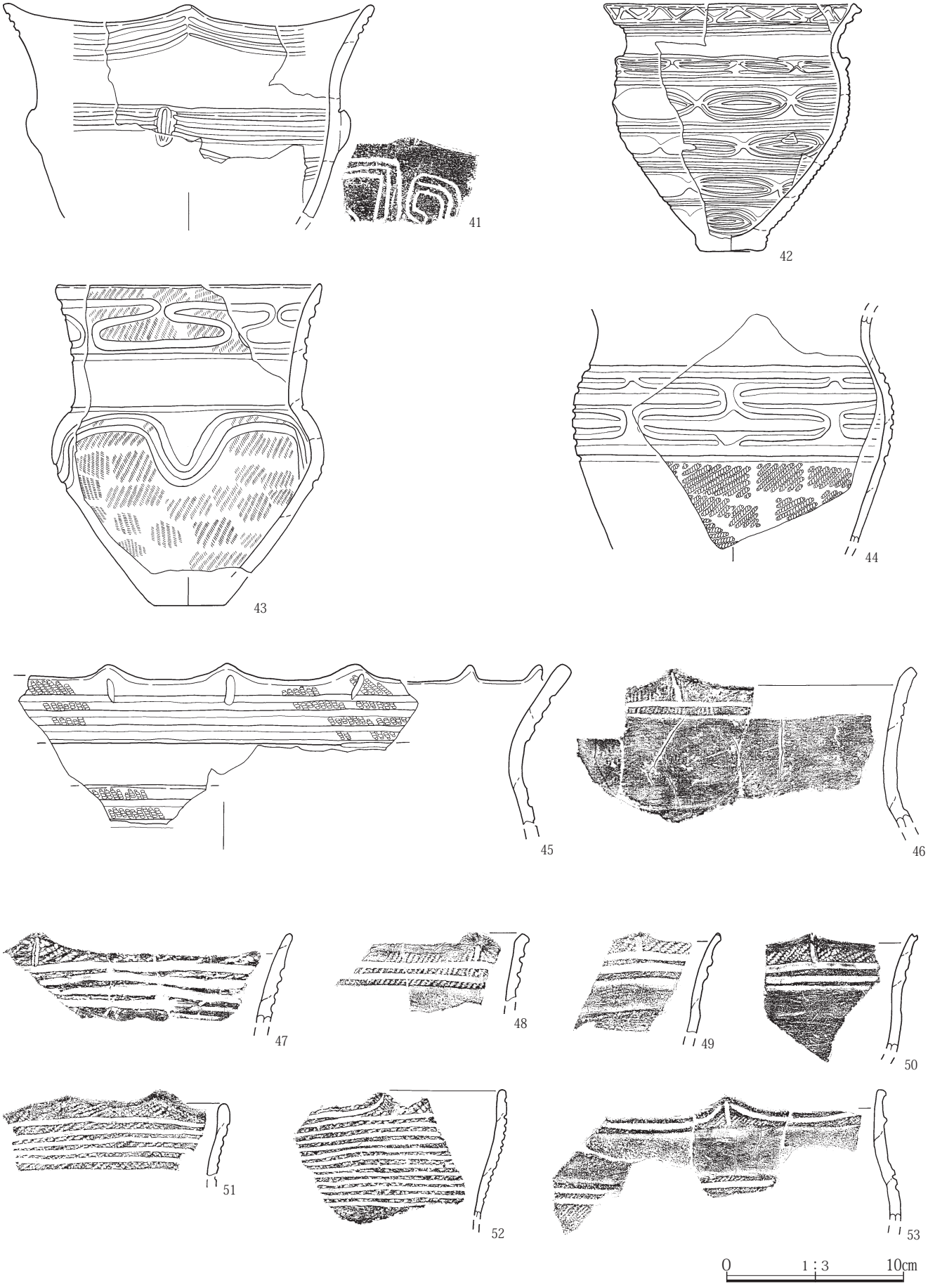
第40図　６号溝　出土土器（５）



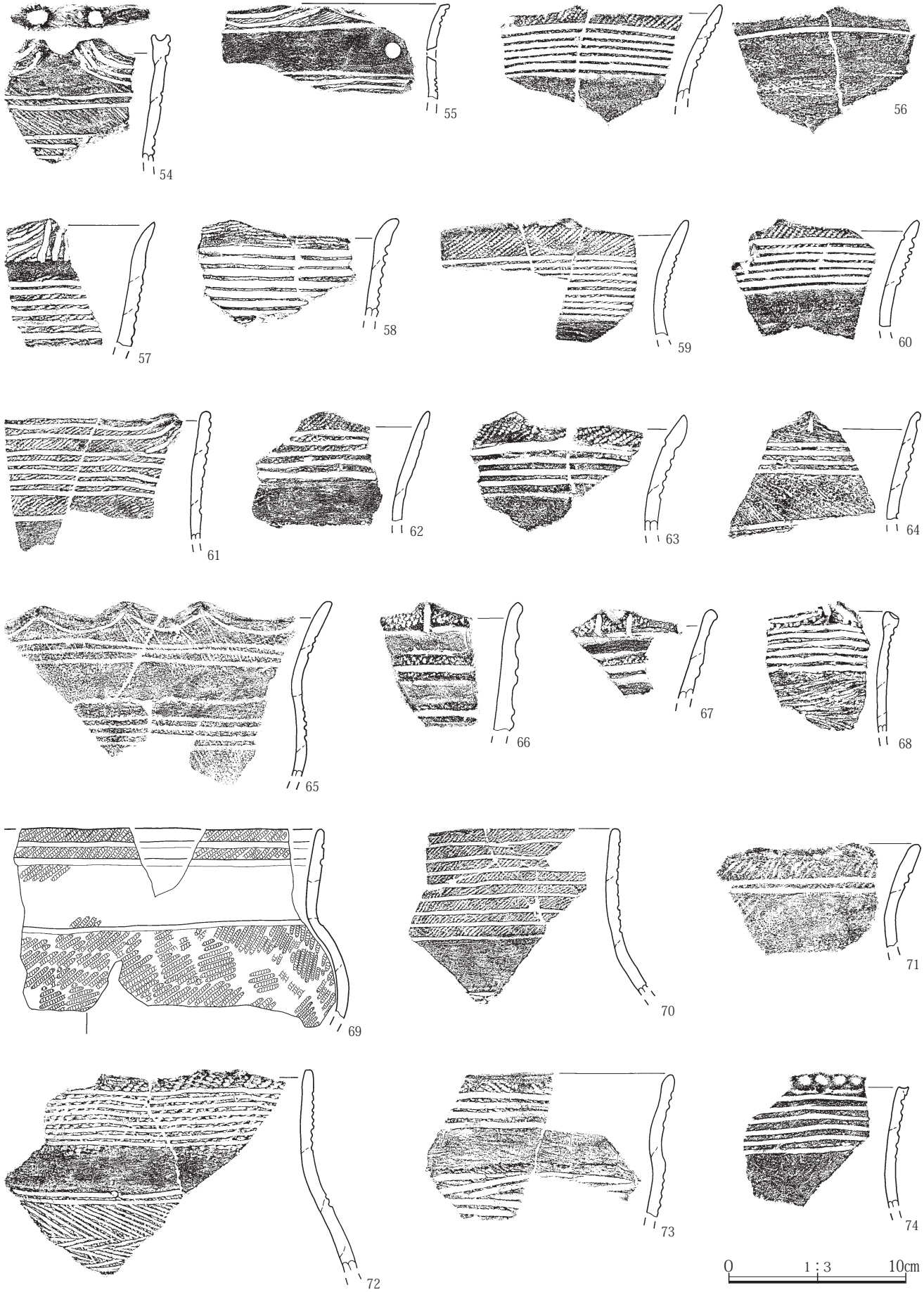
第41図　６号溝　出土土器（６）



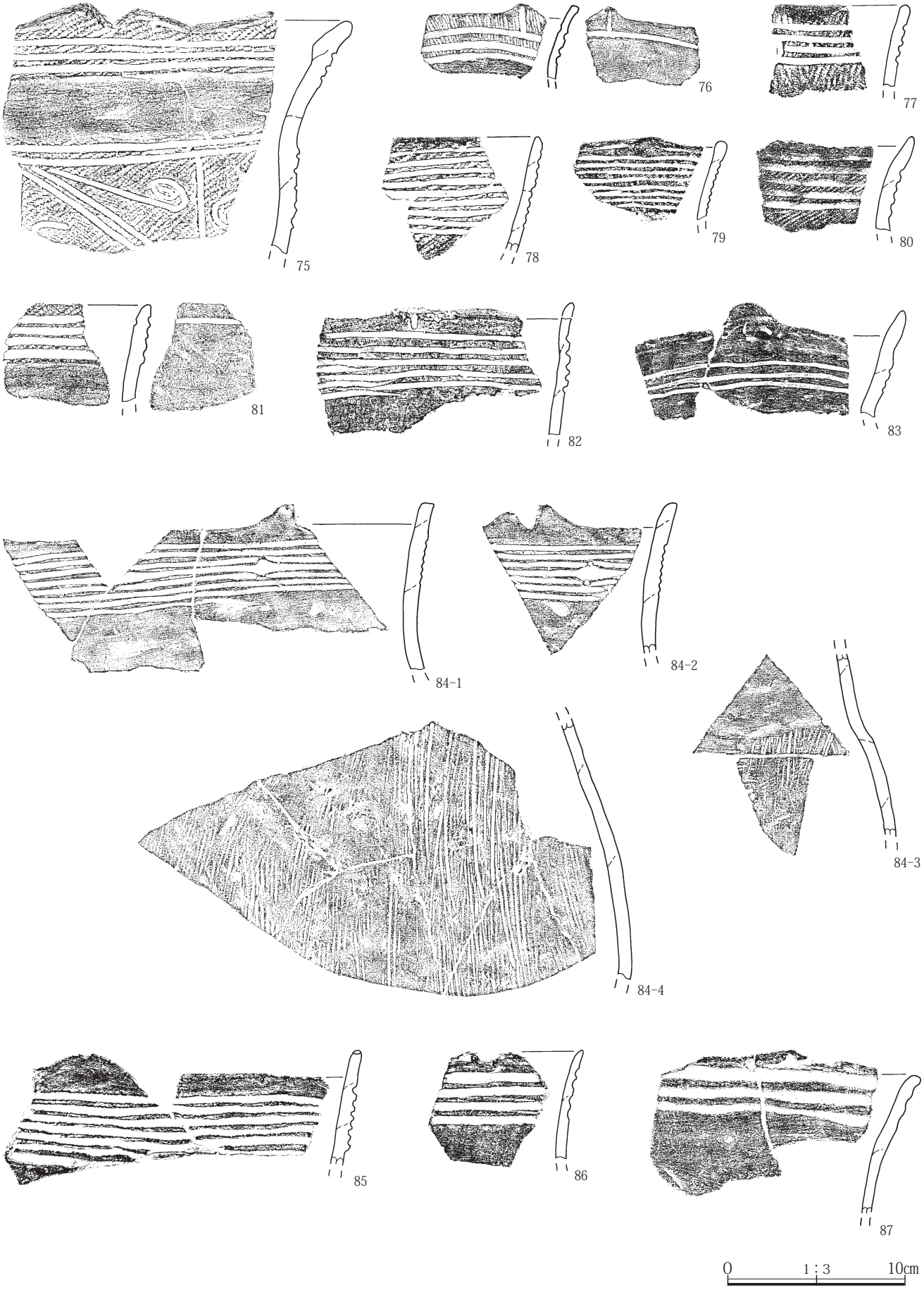
第42図　６号溝　出土土器（７）



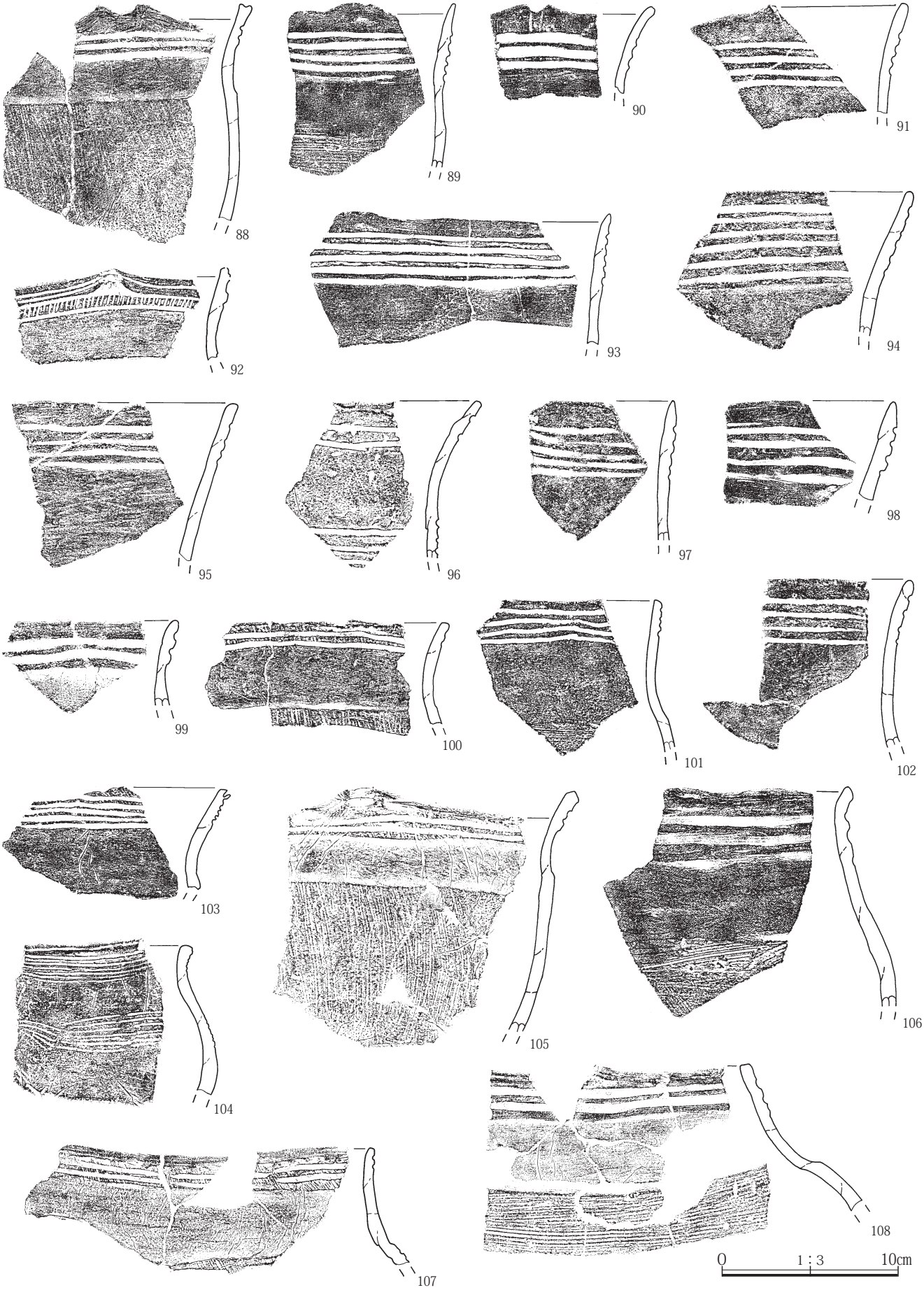
第43図　６号溝　出土土器（８）



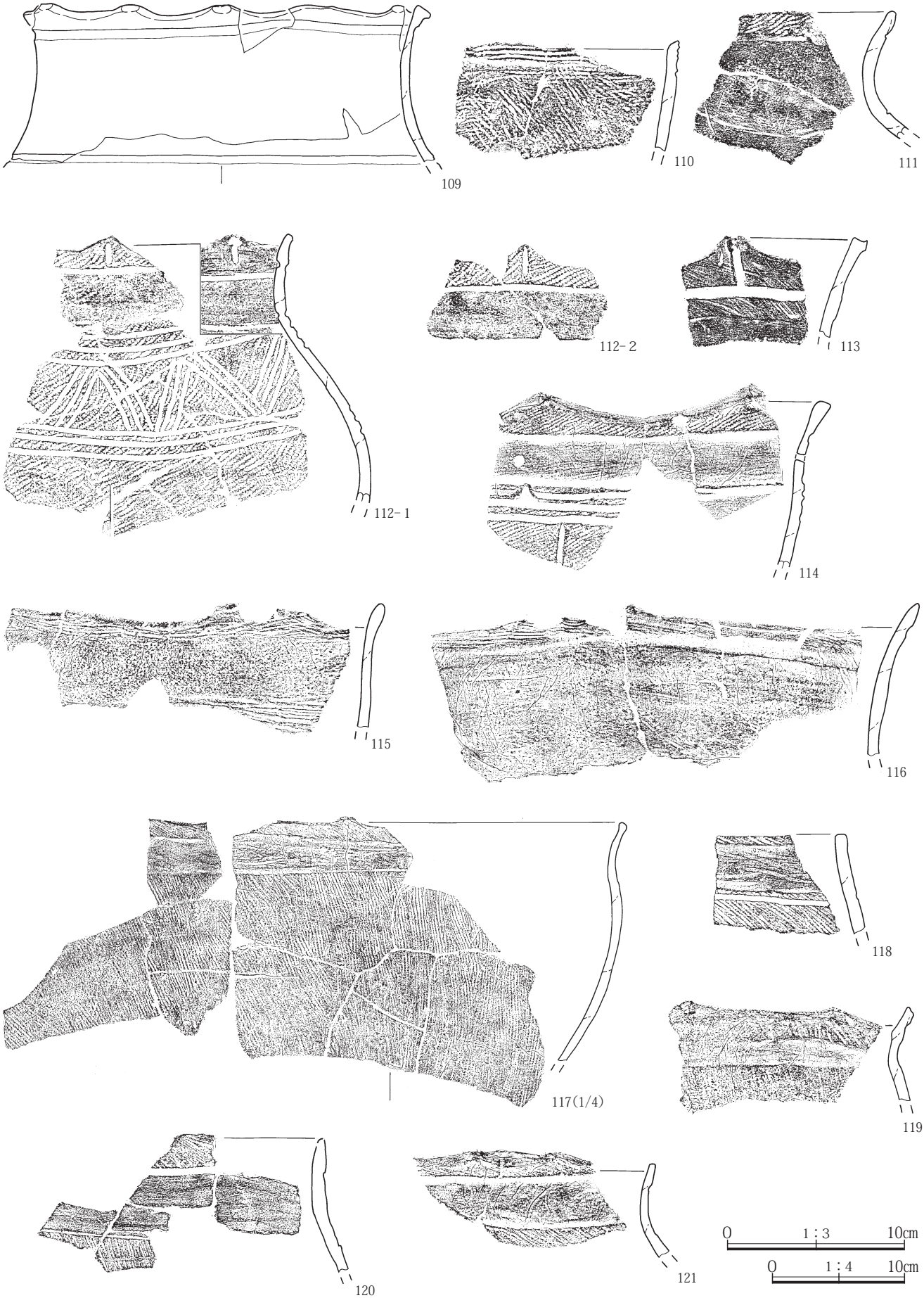
第44図　６号溝　出土土器（９）



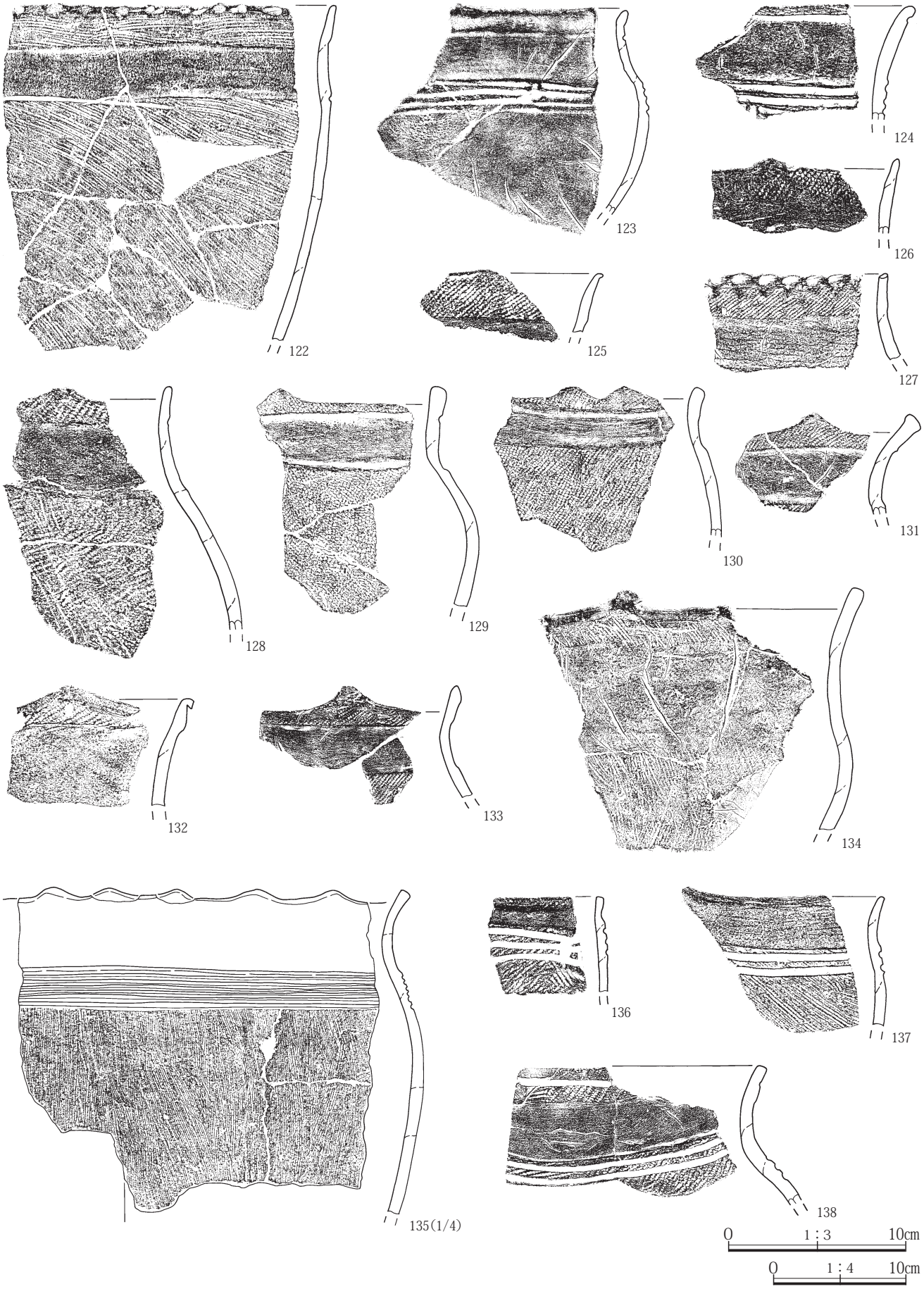
第45図　６号溝　出土土器(10)



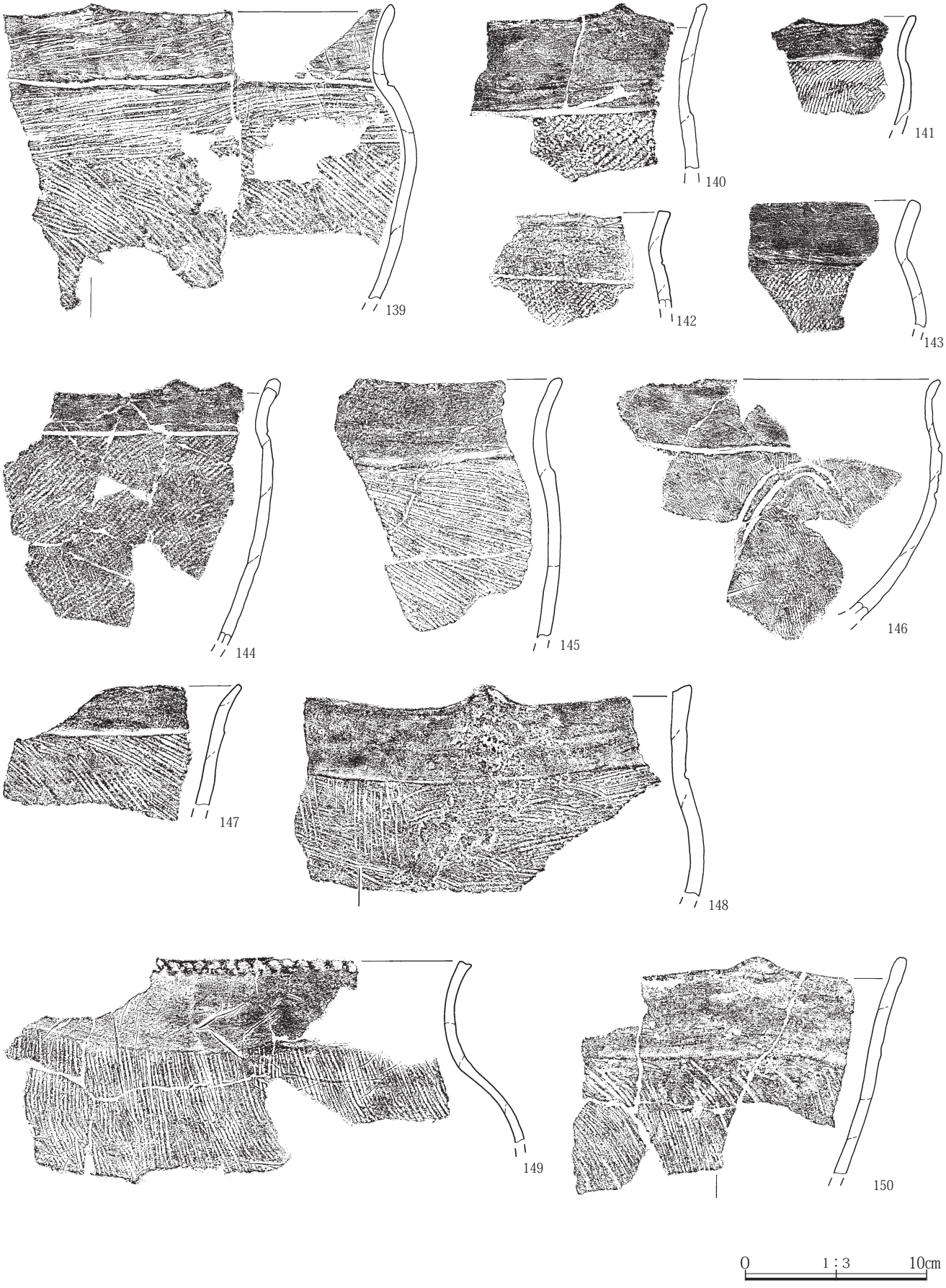
第46図　６号溝　出土土器(11)



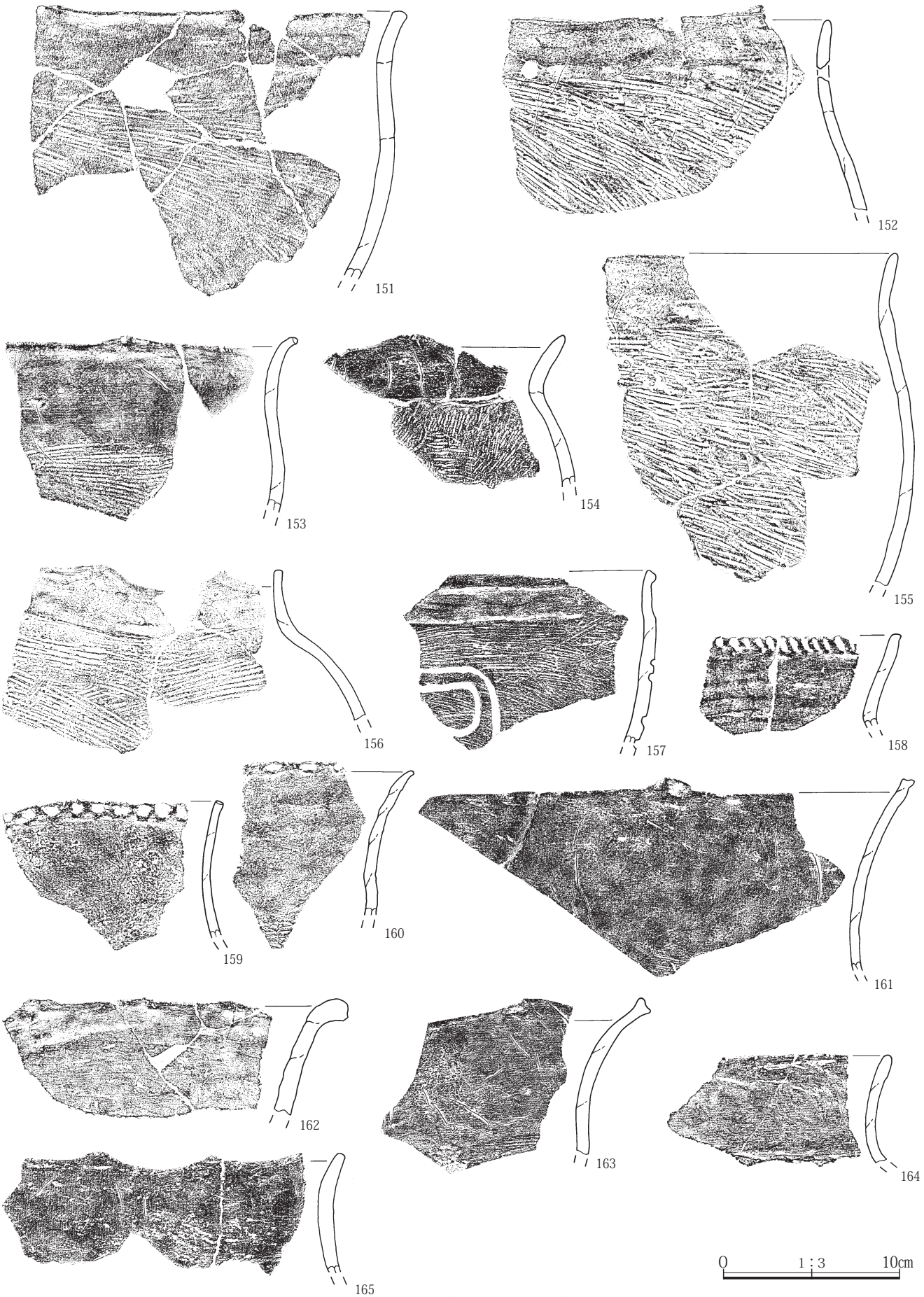
第47図　６号溝　出土土器(12)



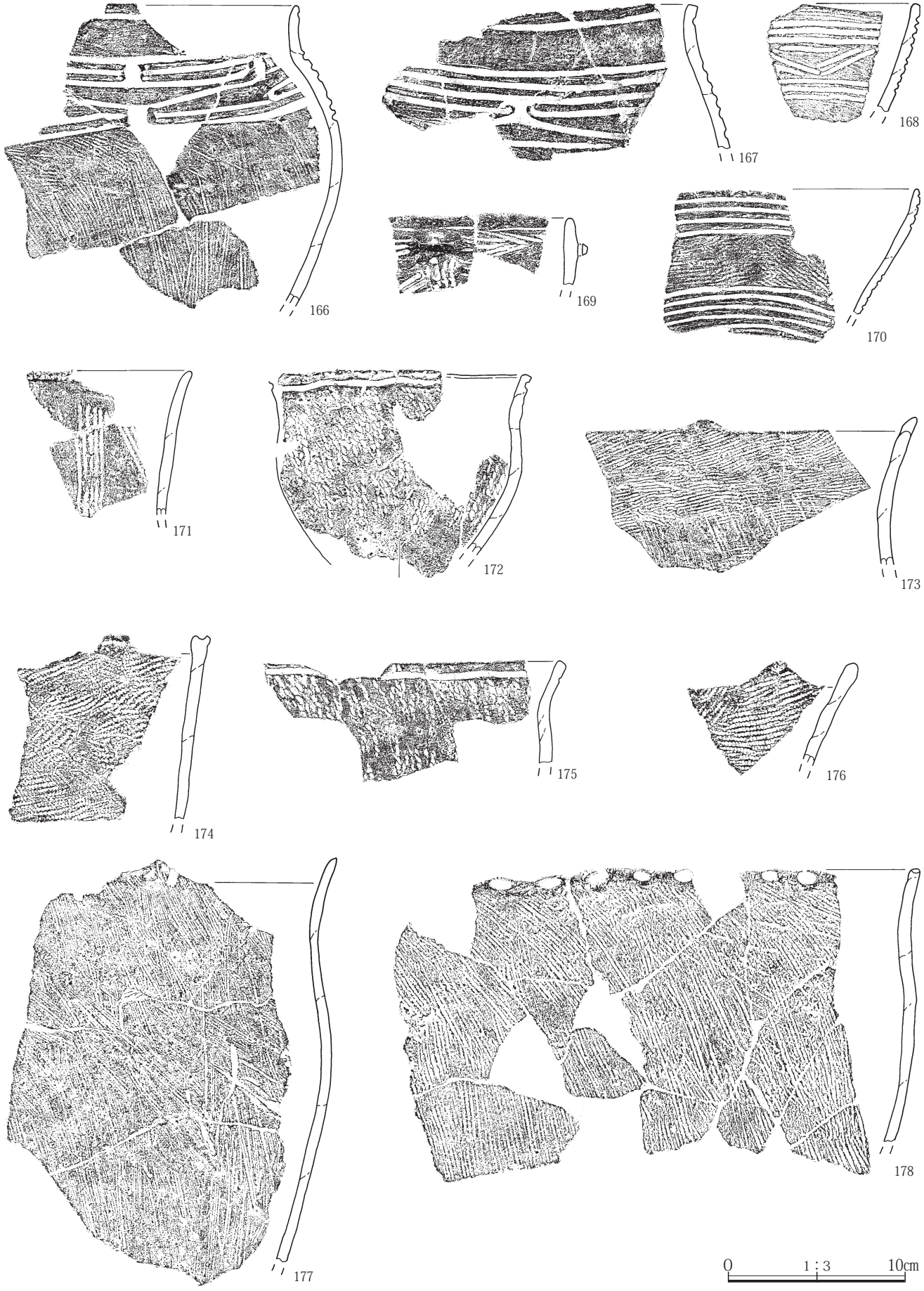
第48図　６号溝　出土土器(13)



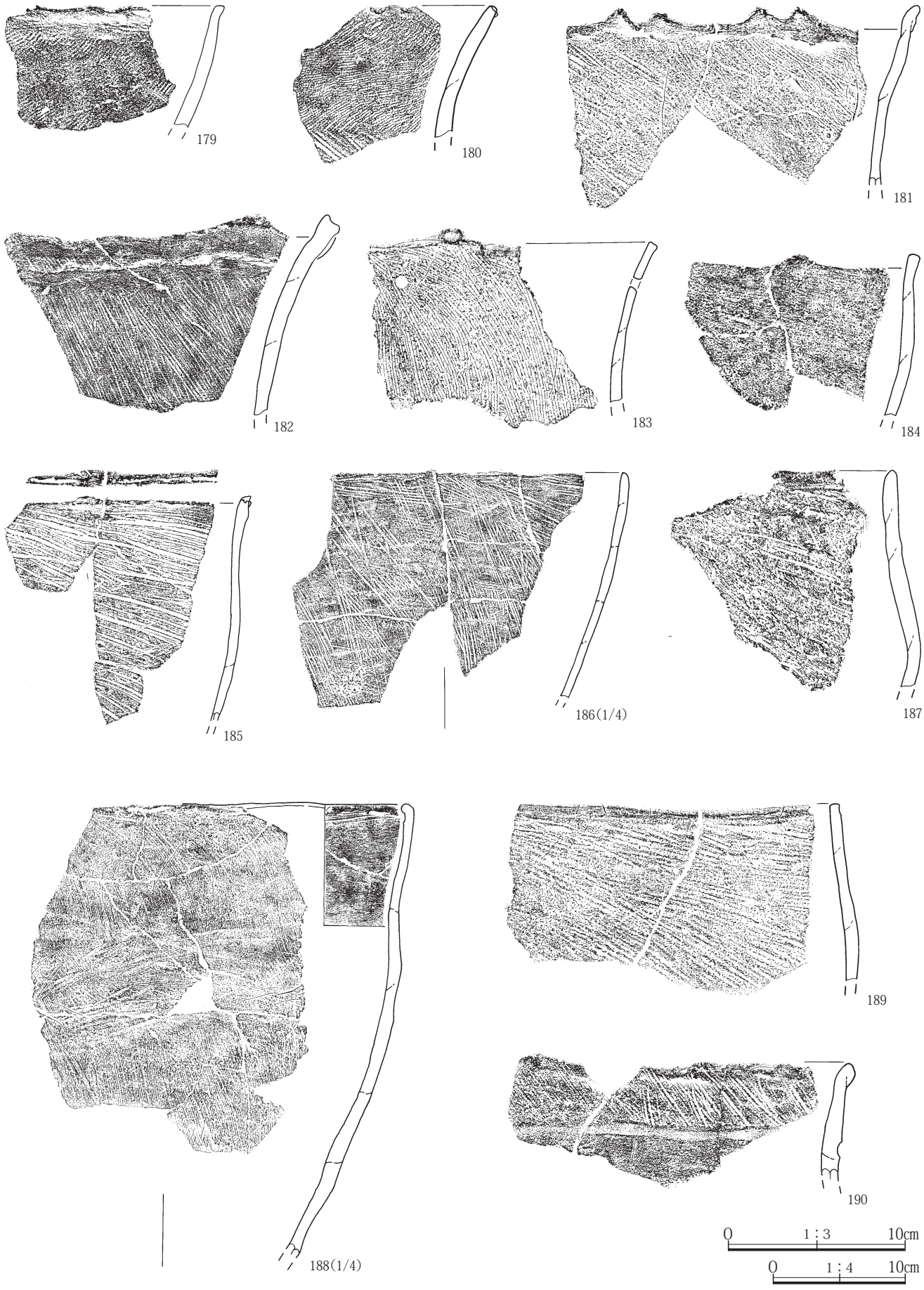
第49図　６号溝　出土土器(14)



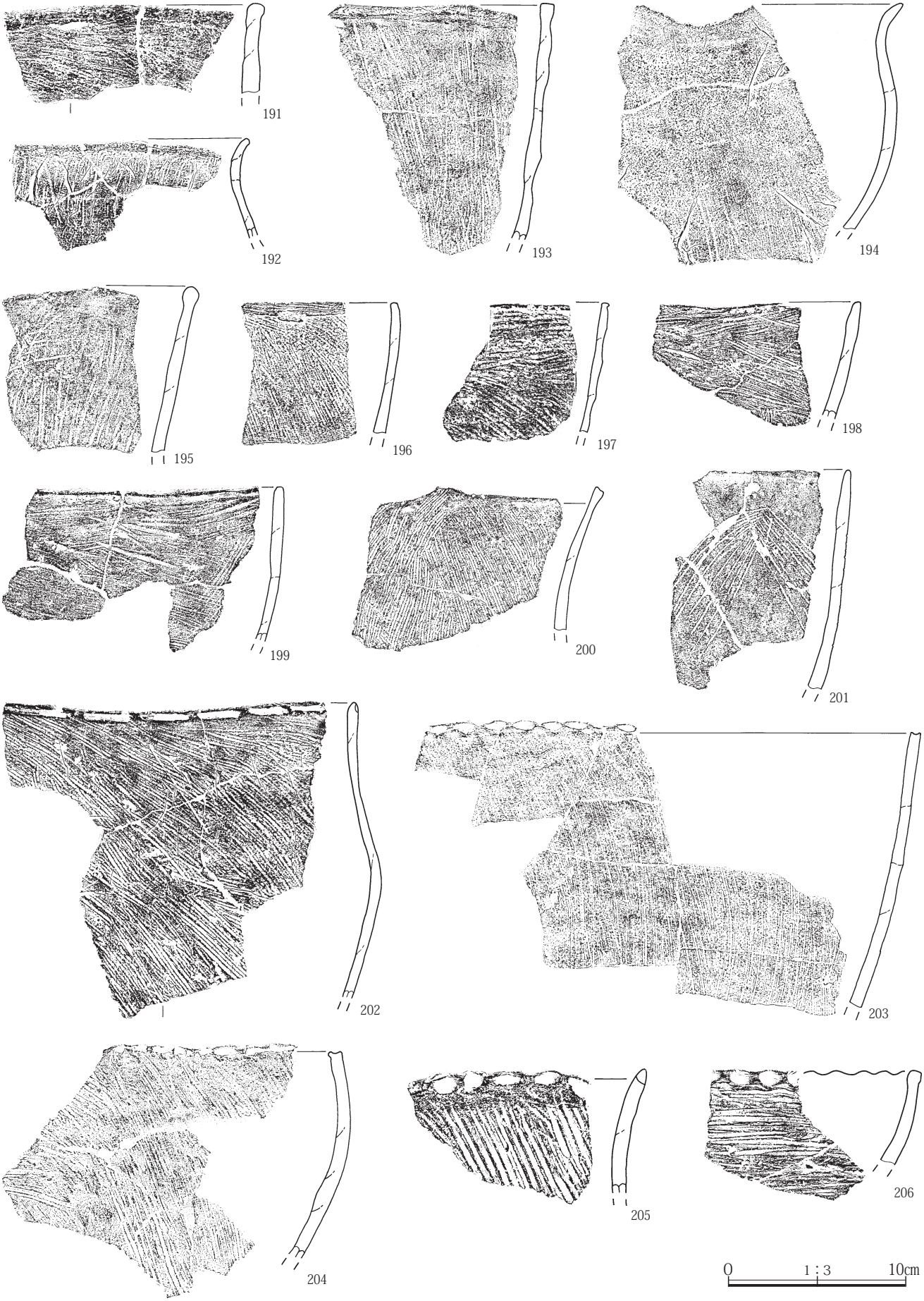
第50図　６号溝　出土土器(15)



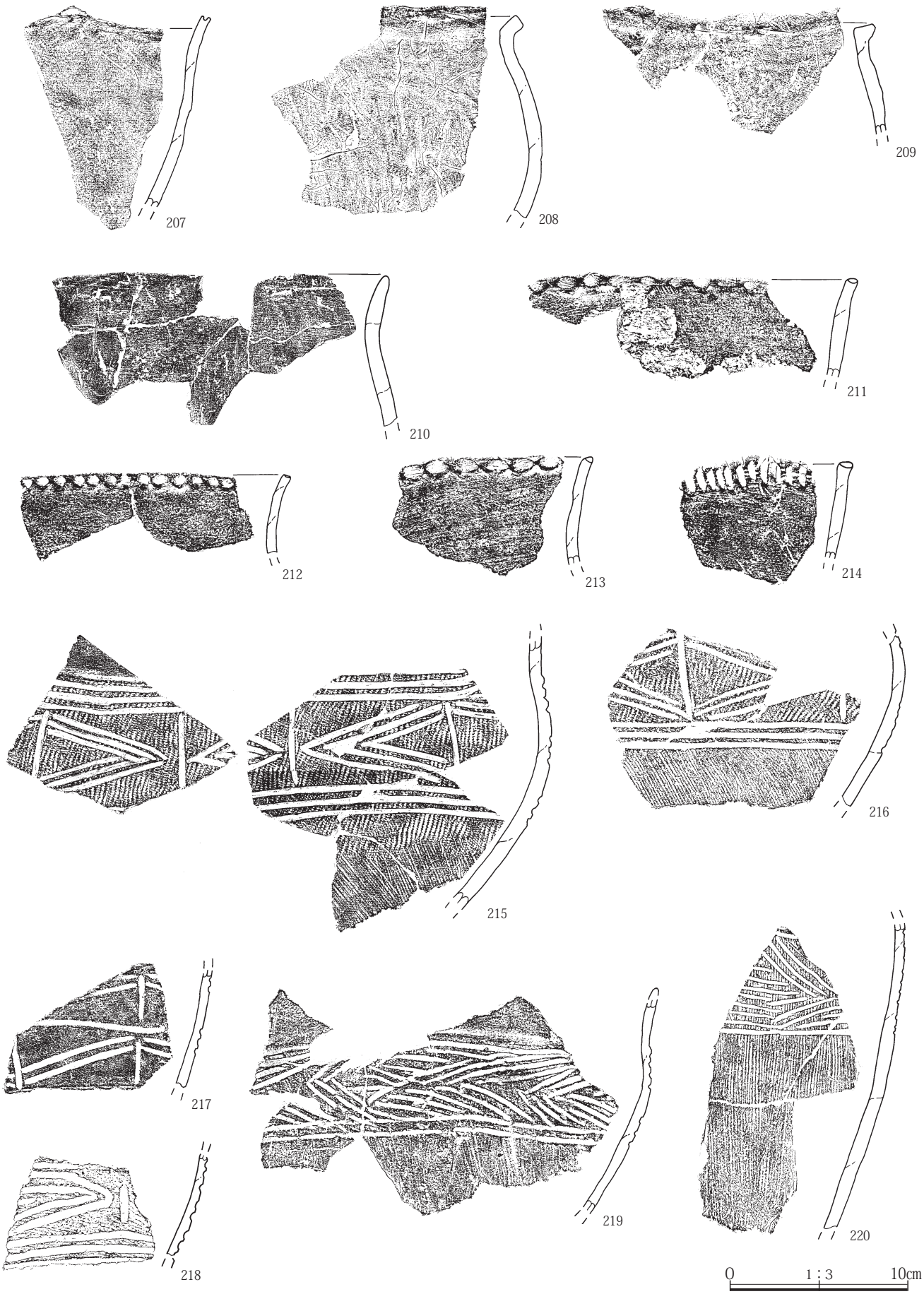
第51図　６号溝　出土土器(16)



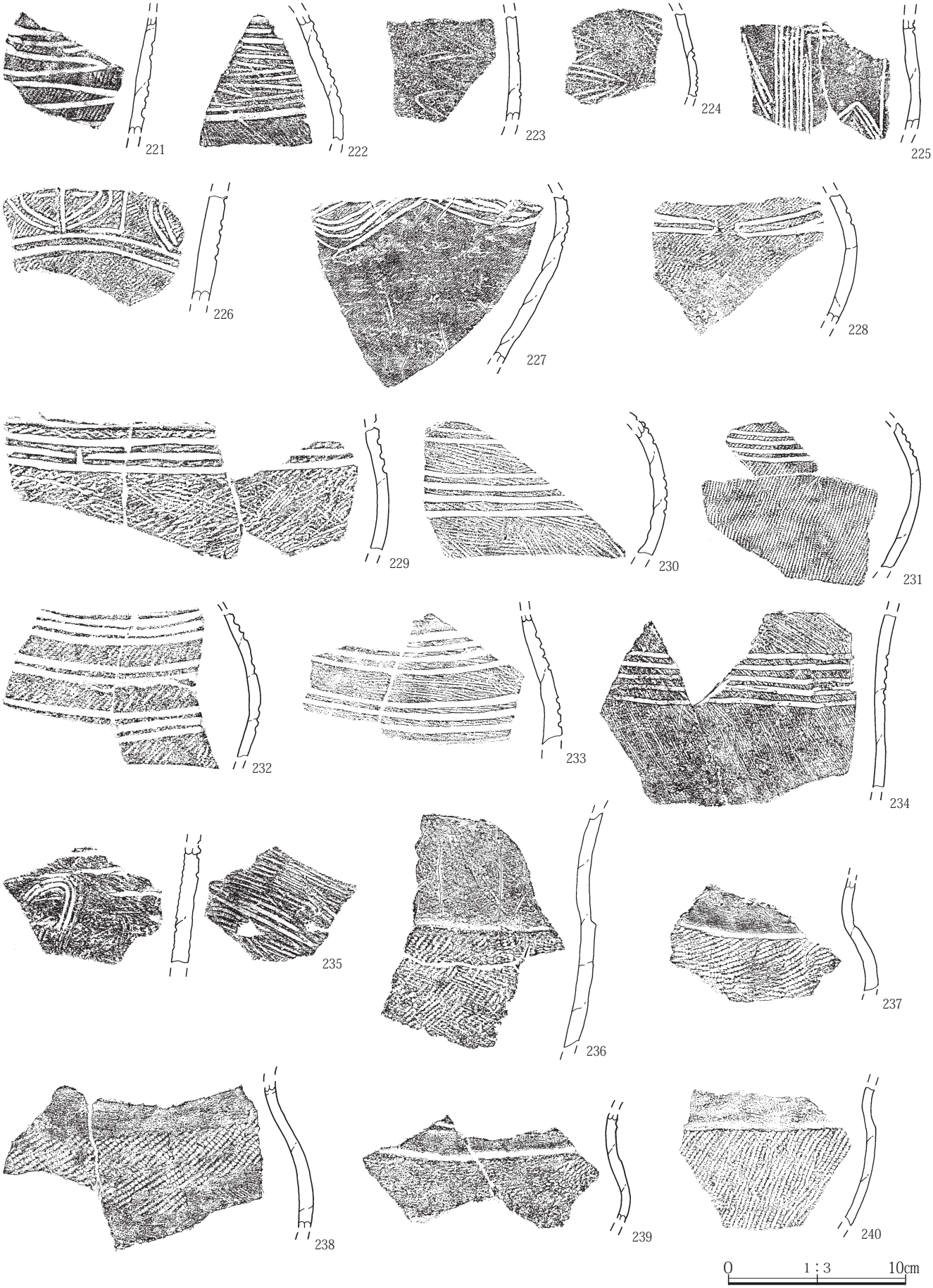
第52図　６号溝　出土土器(17)



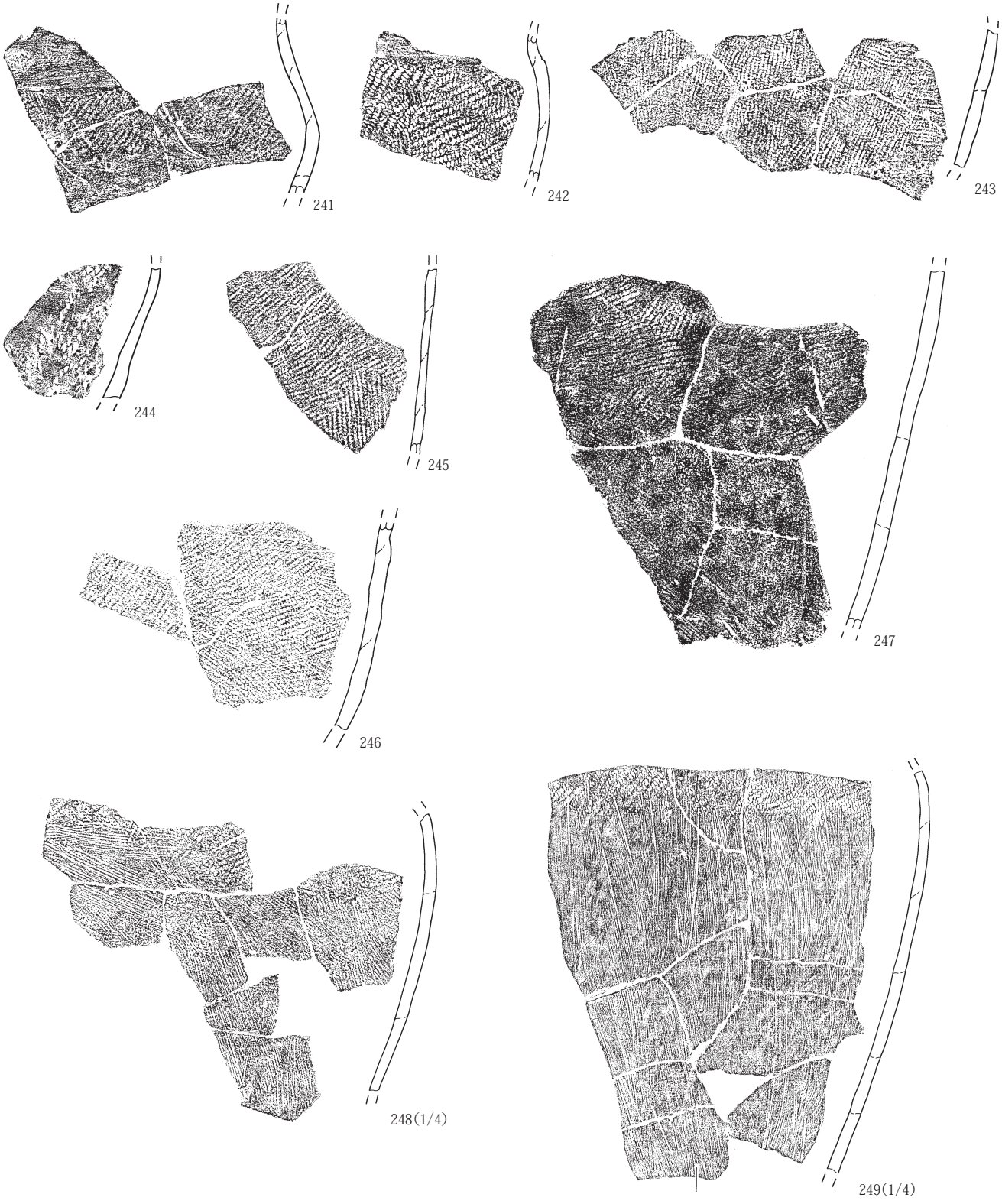
第53図　６号溝　出土土器(18)



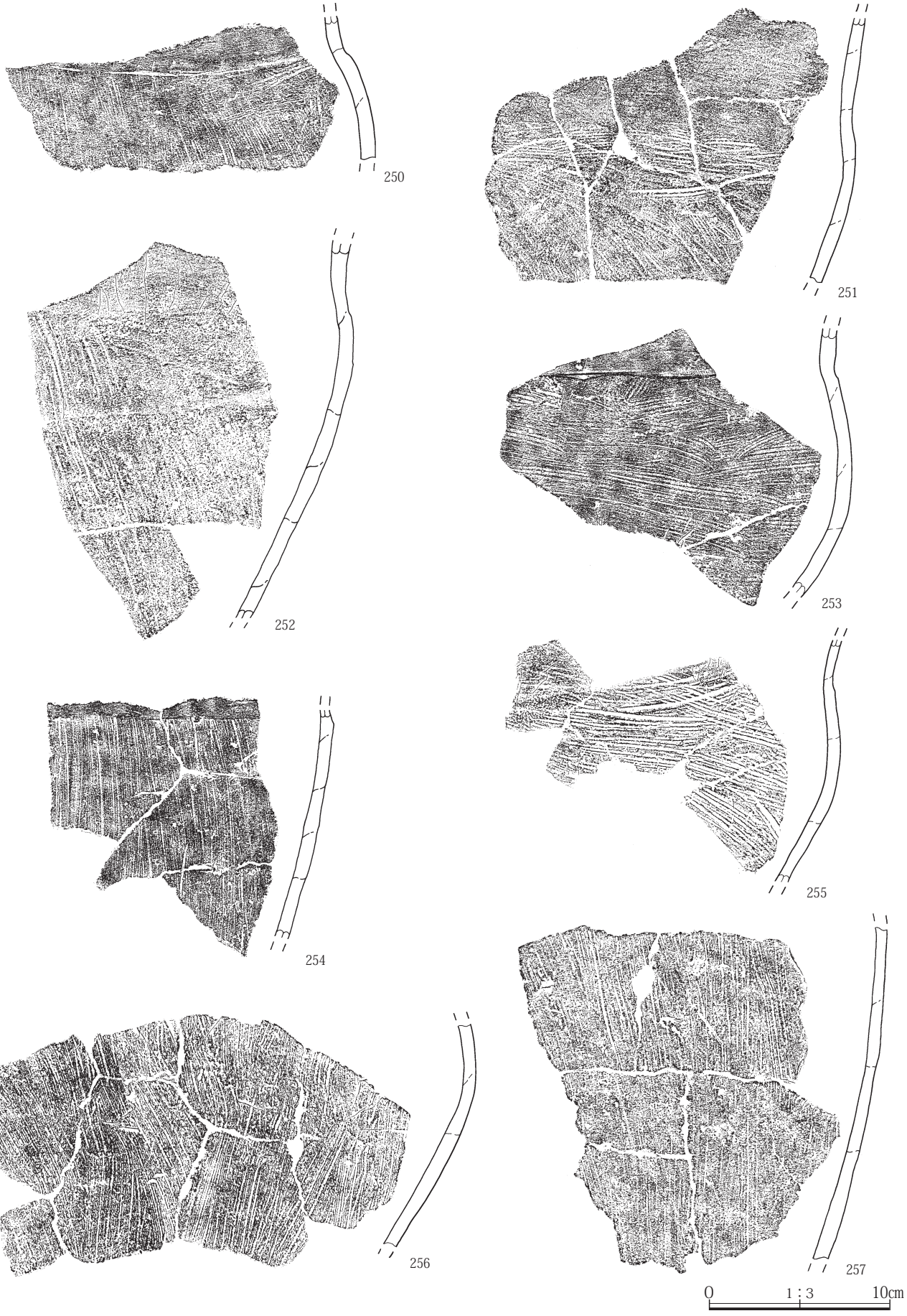
第54図　６号溝　出土土器(19)



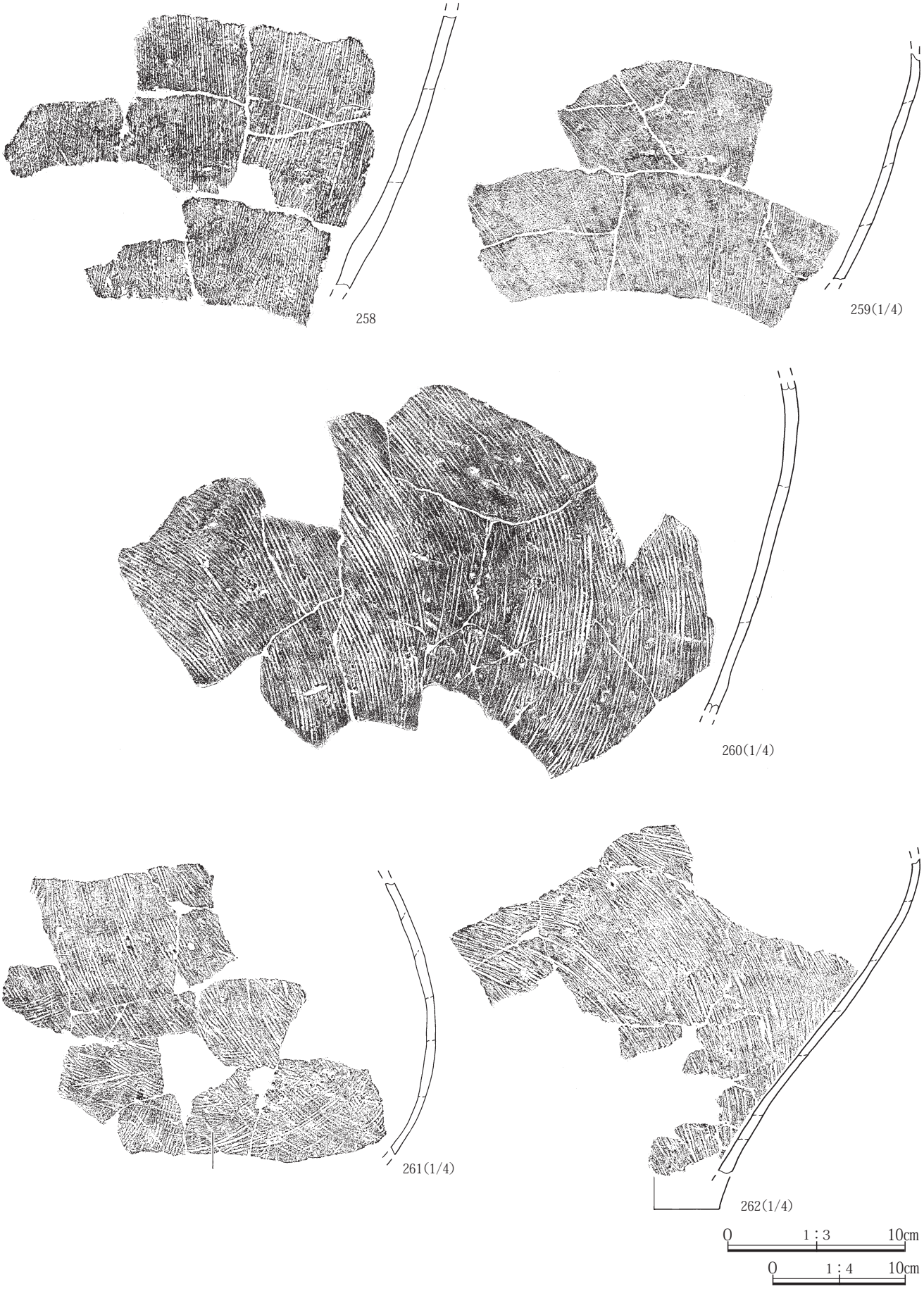
第55図　６号溝　出土土器(20)



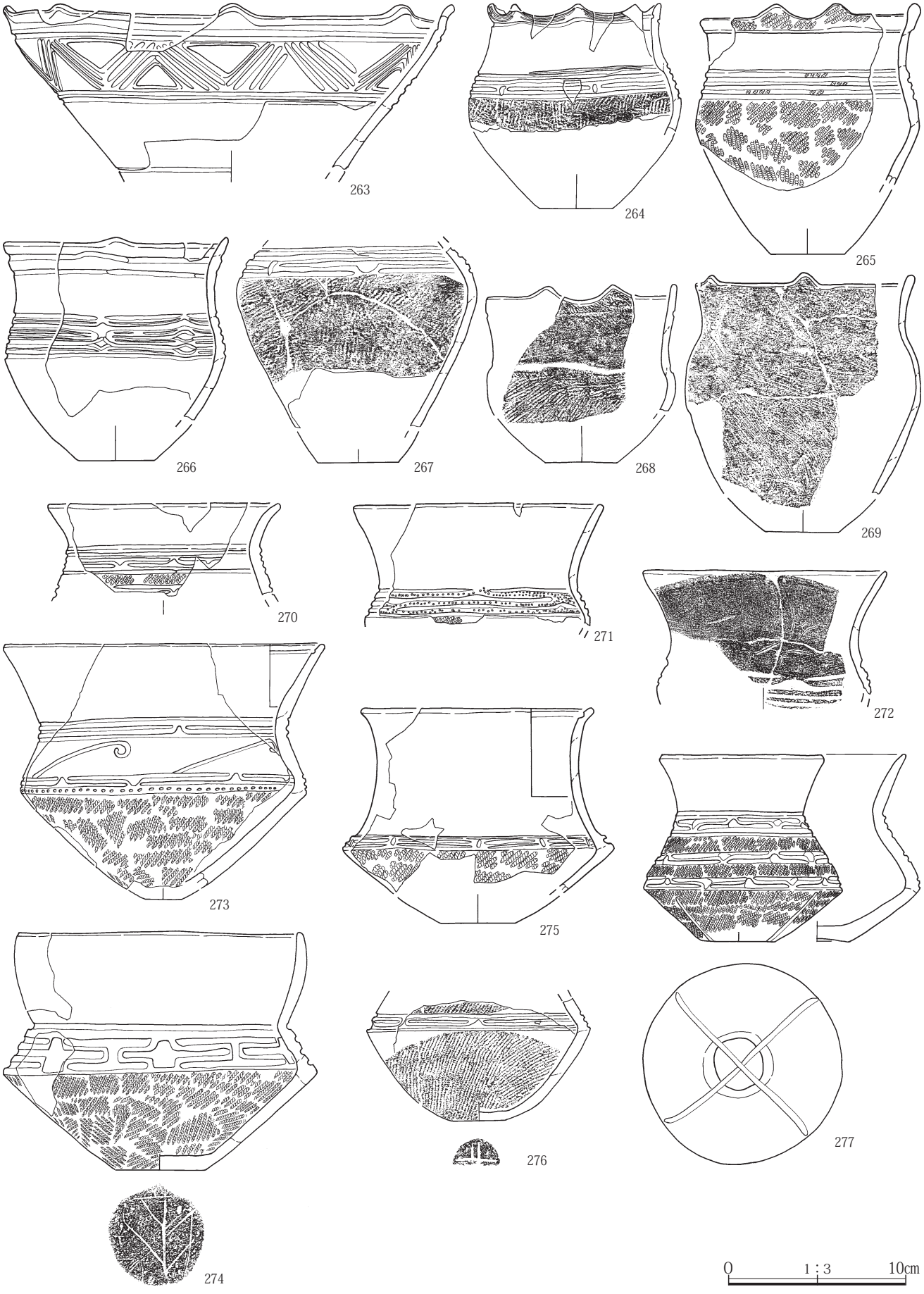
第56図　６号溝　出土土器(21)



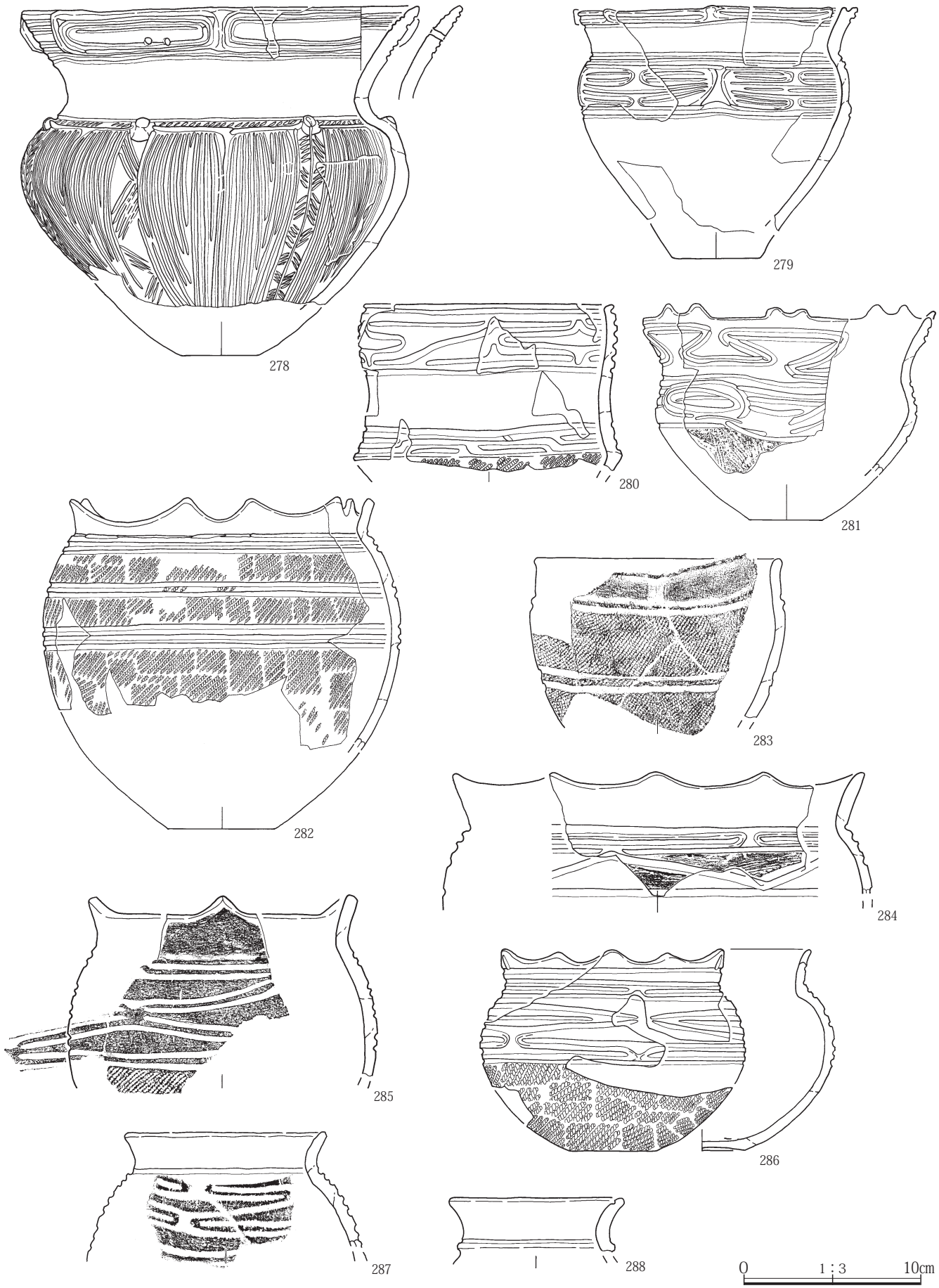
第57図　６号溝　出土土器(22)



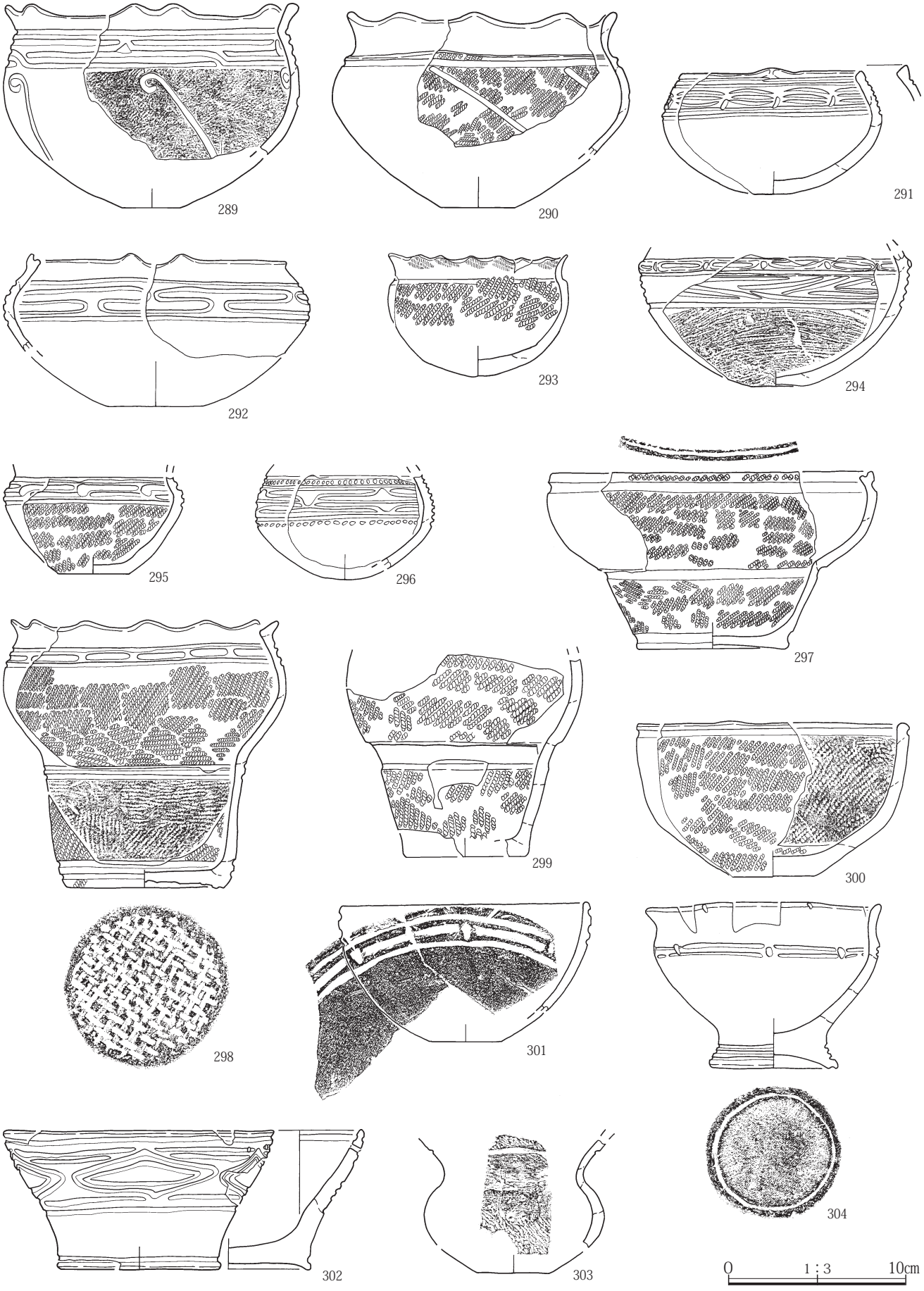
第58図　６号溝　出土土器(23)



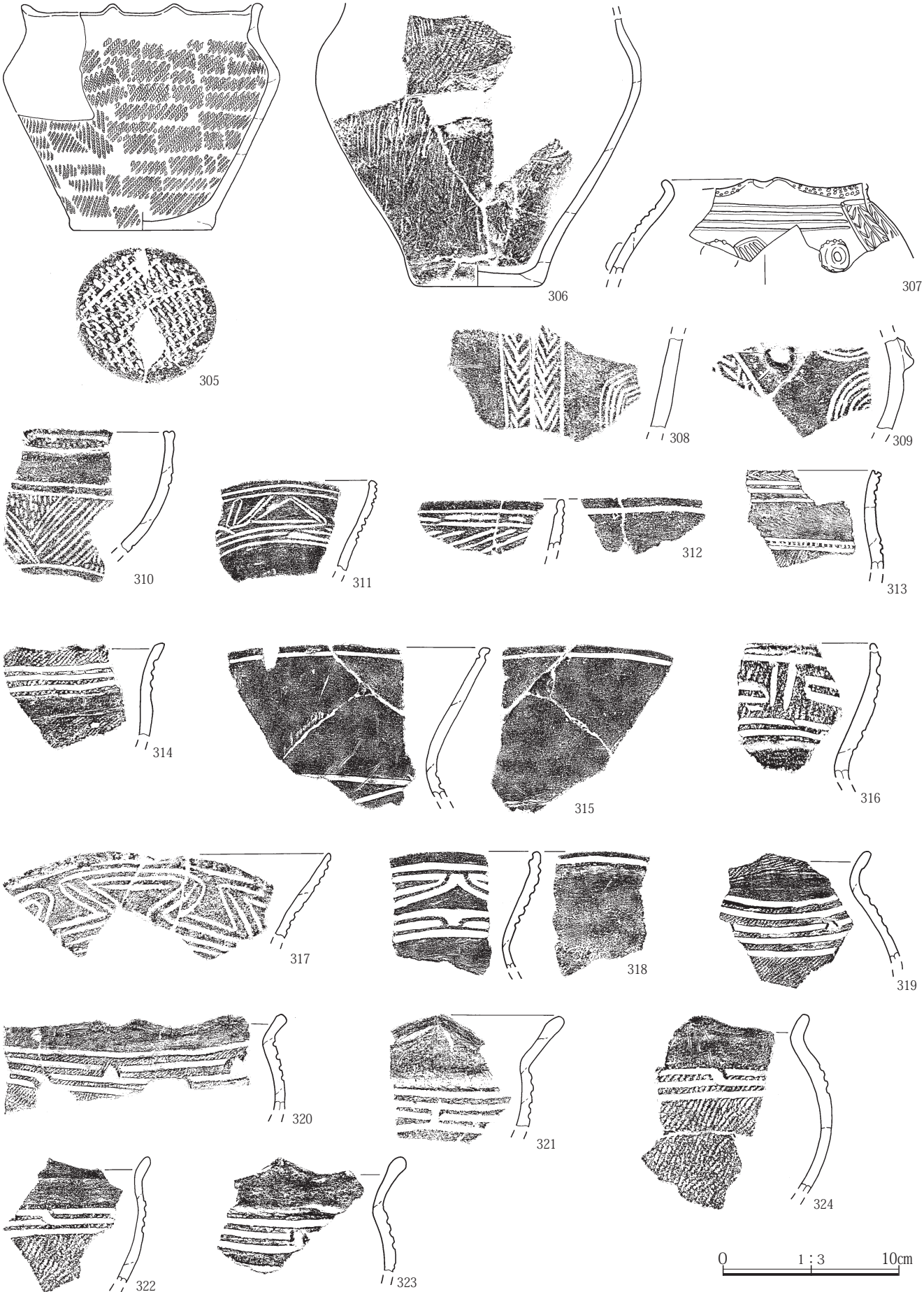
第59図　６号溝　出土土器(24)



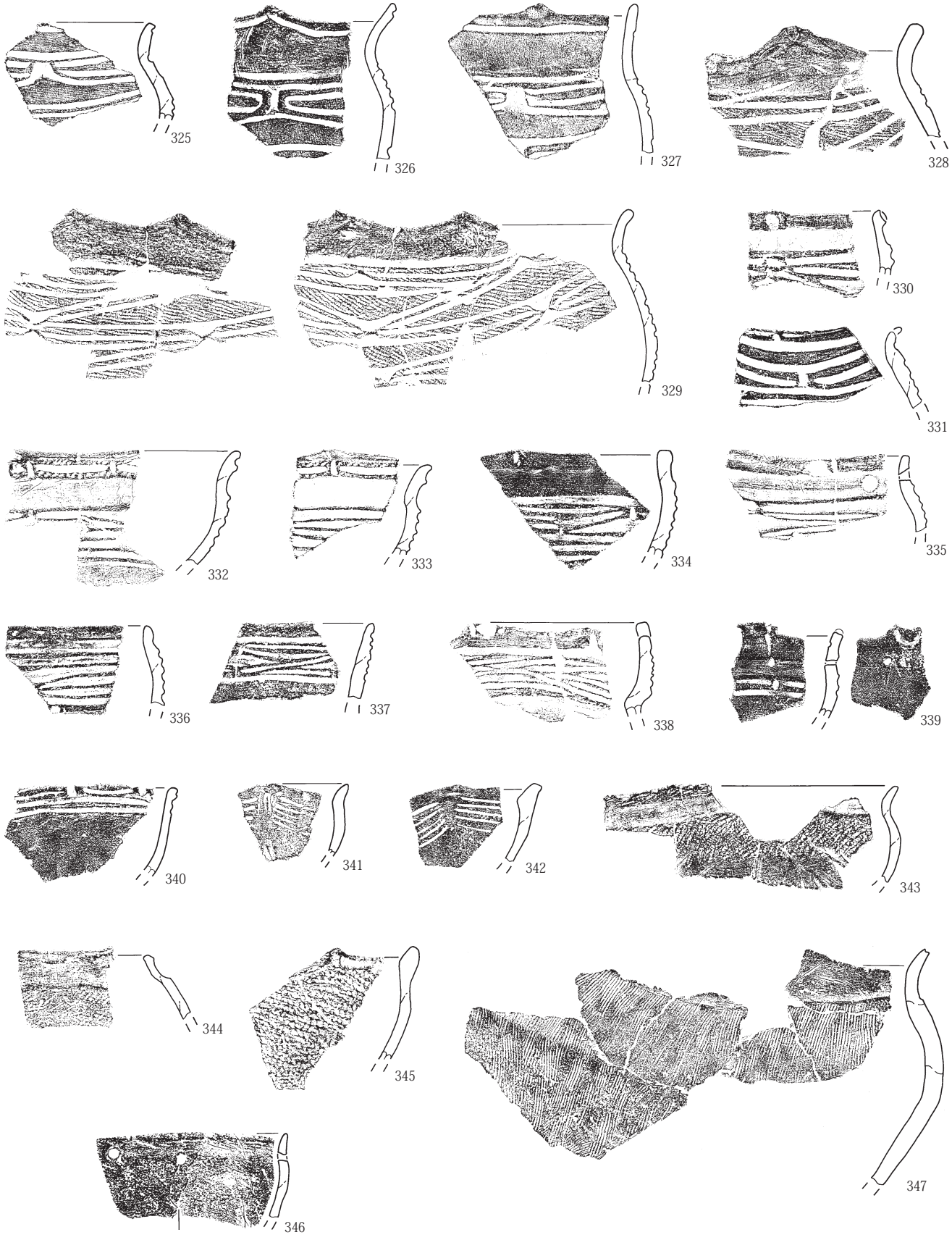
第60図　６号溝　出土土器(25)



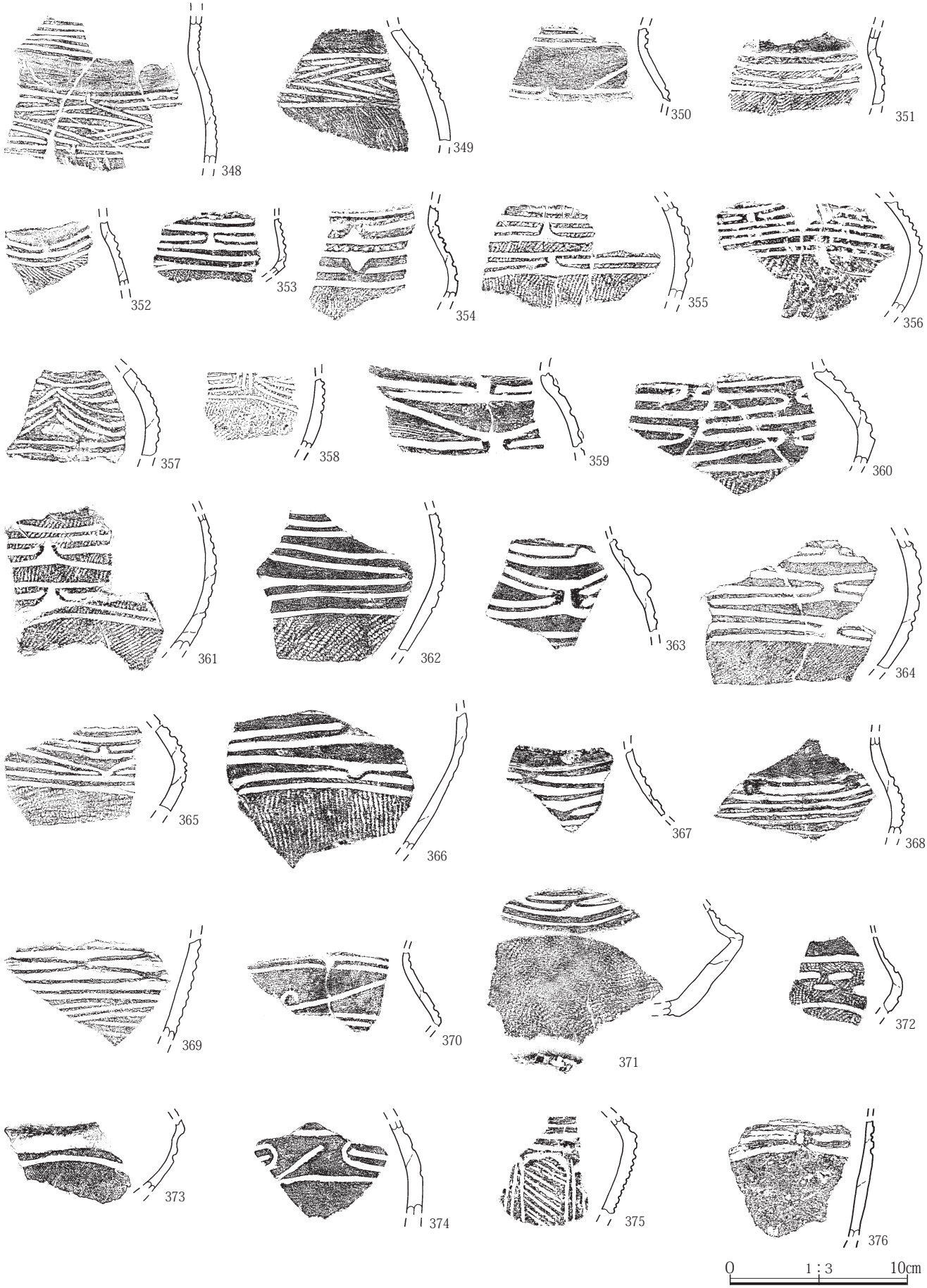
第61図　６号溝　出土土器(26)



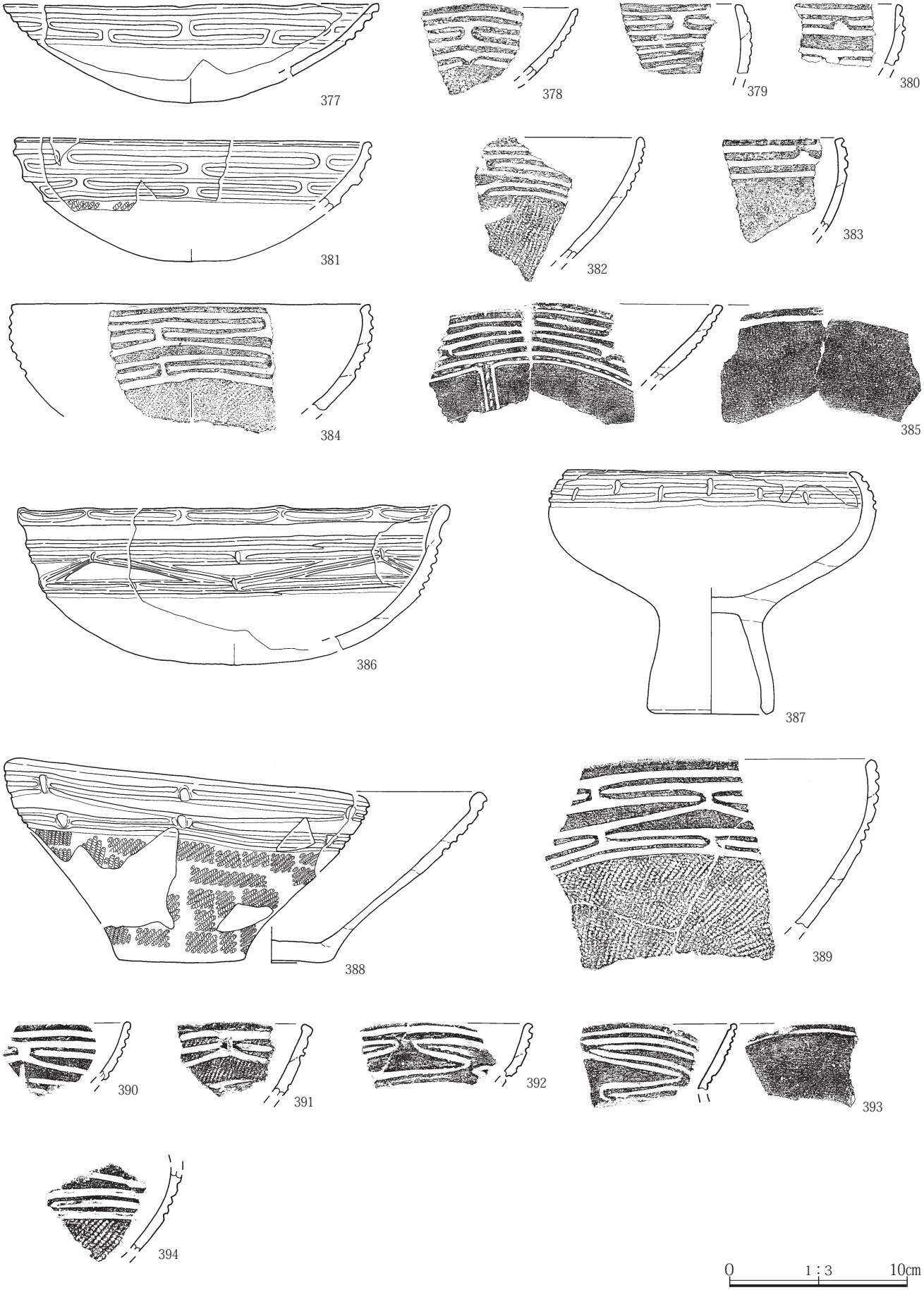
第62図　６号溝　出土土器(27)



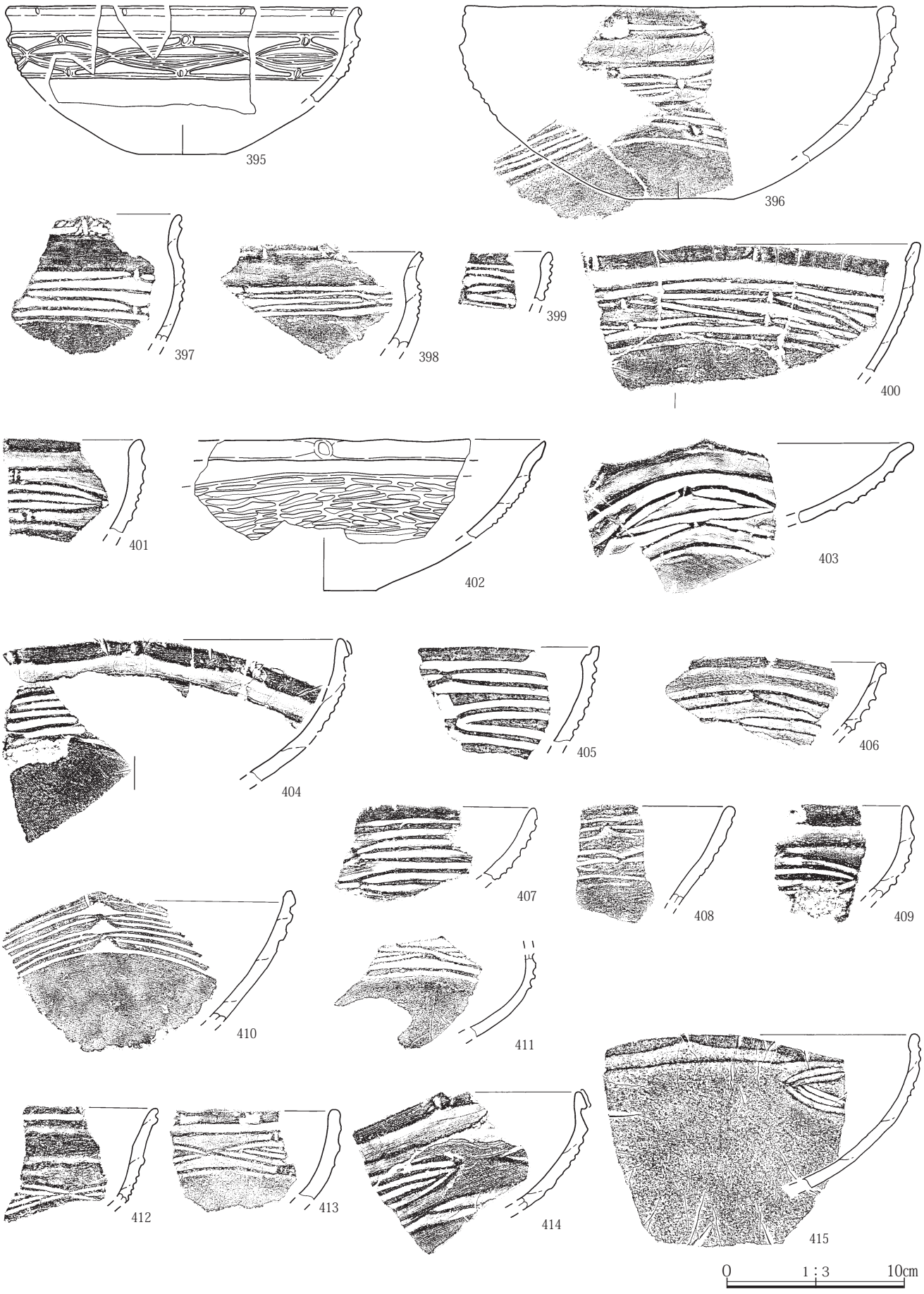
第63図　６号溝　出土土器(28)



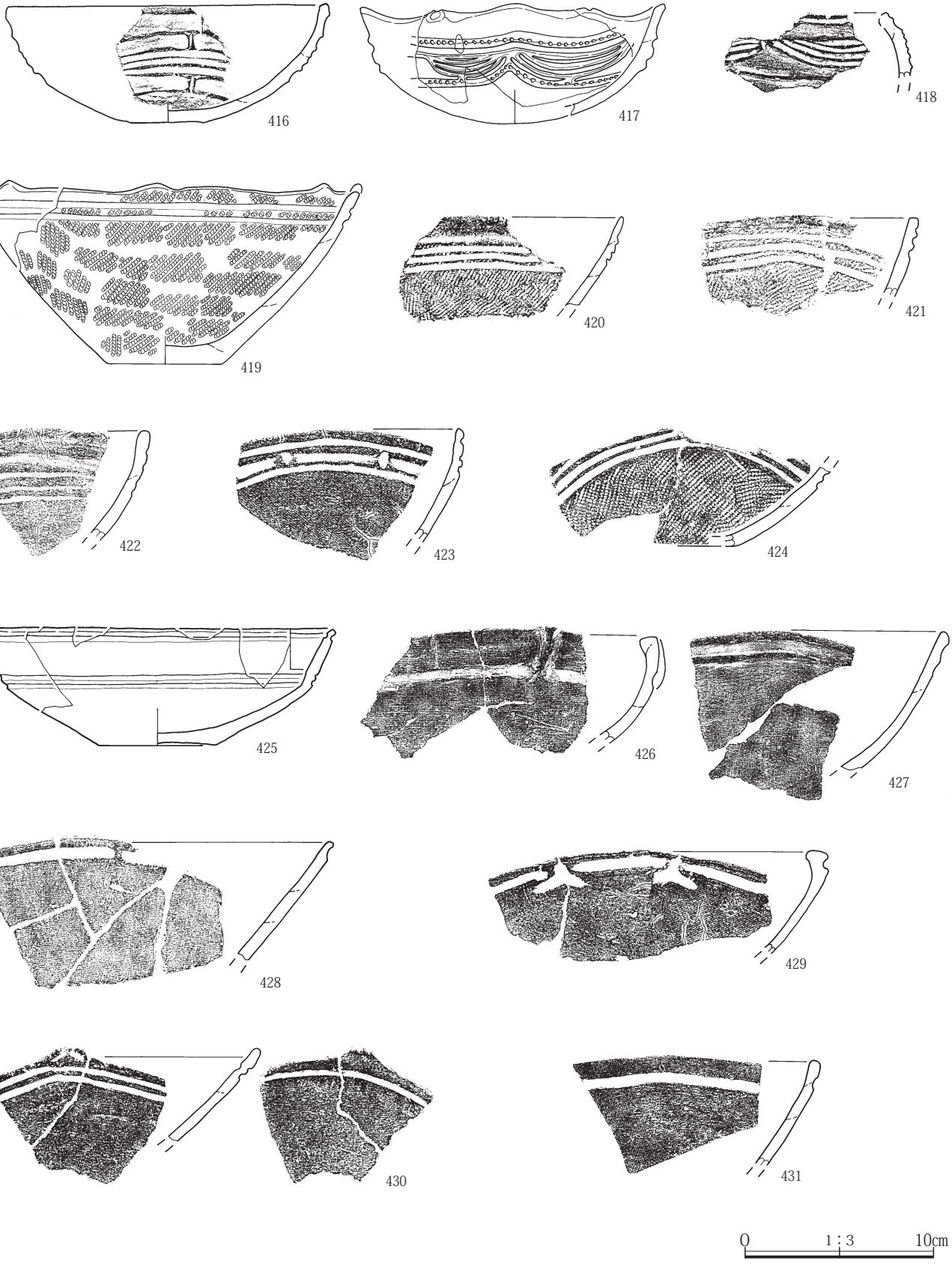
第64図　６号溝　出土土器(29)



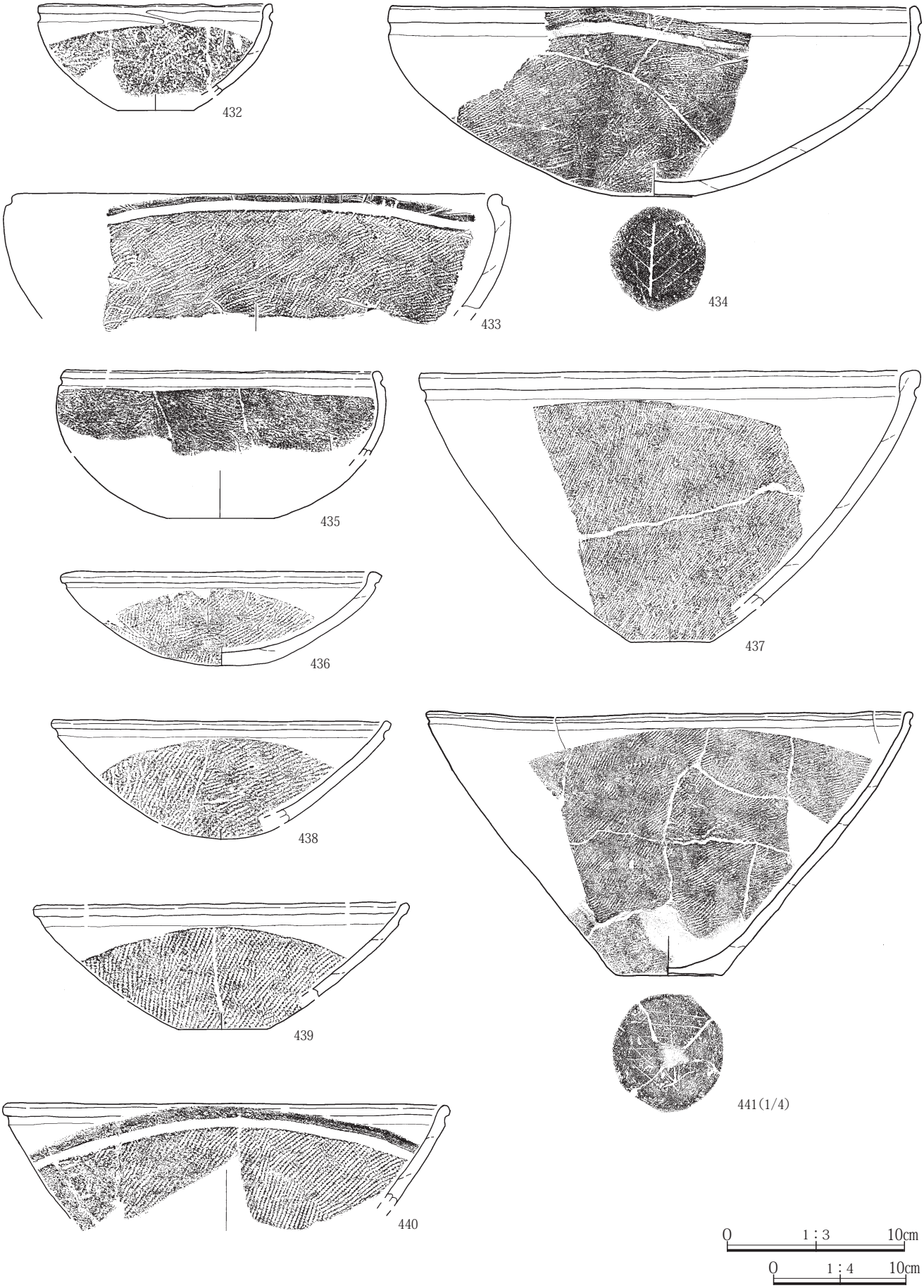
第65図　６号溝　出土土器(30)



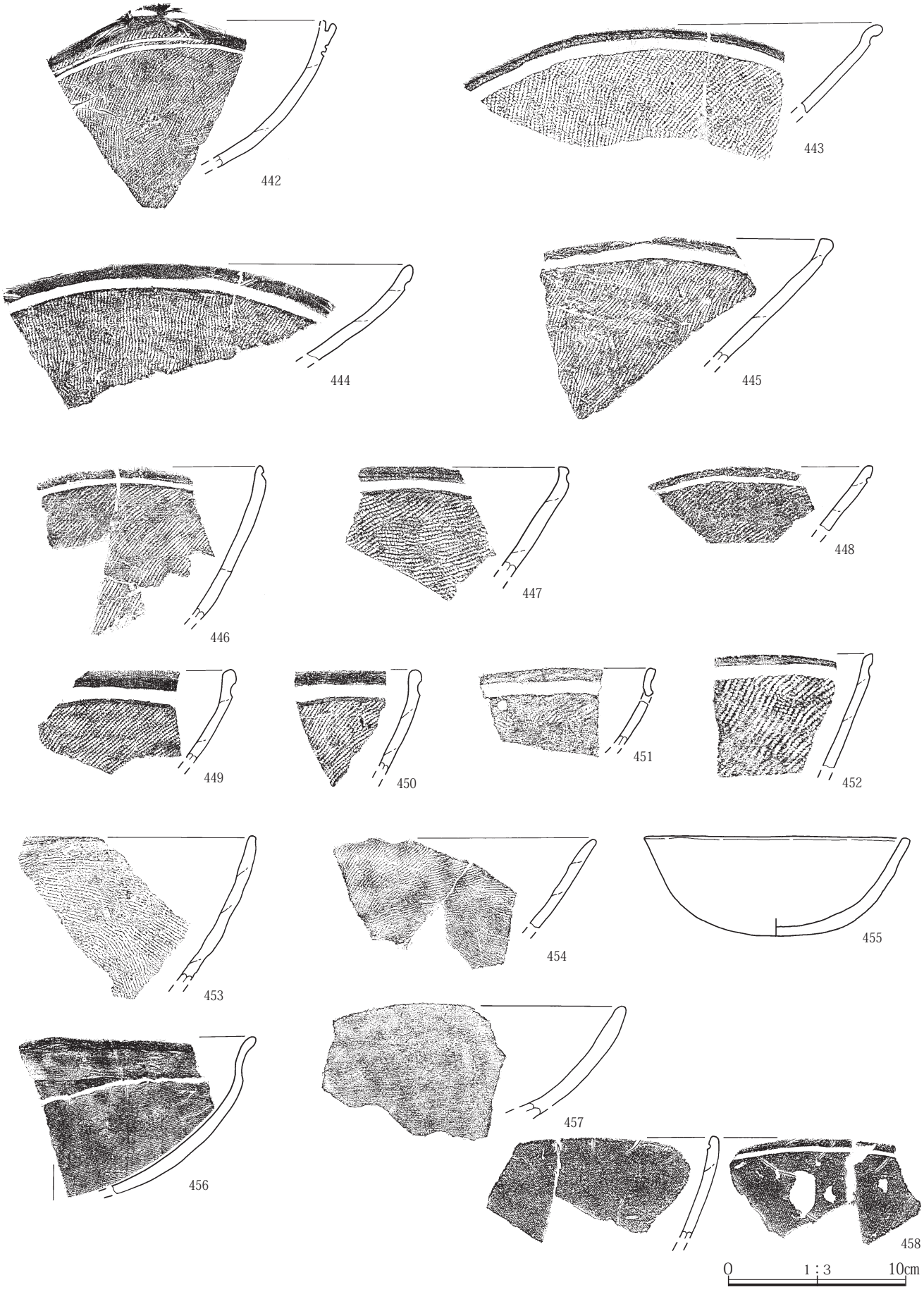
第66図　６号溝　出土土器(31)



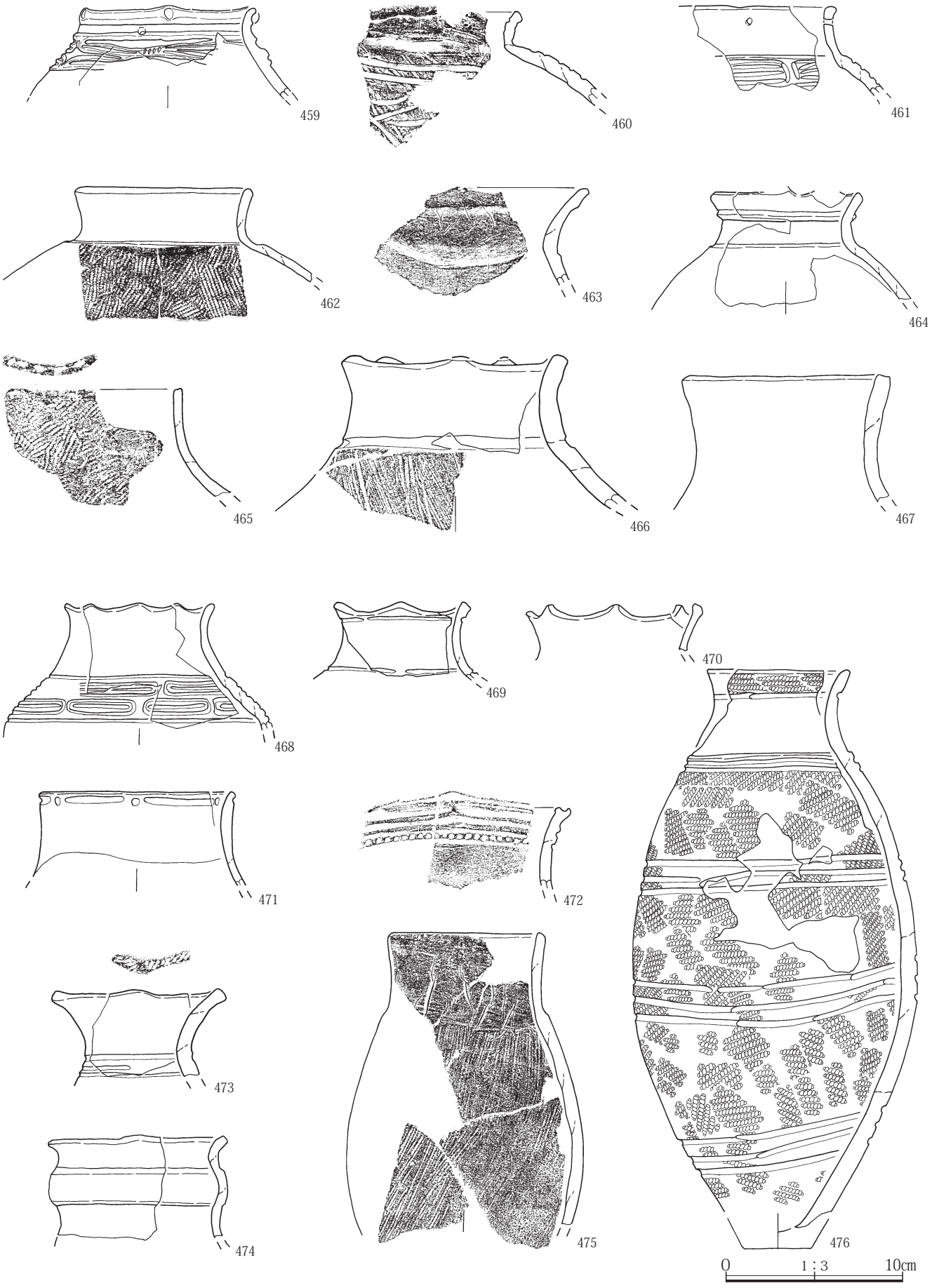
第67図　６号溝　出土土器(32)



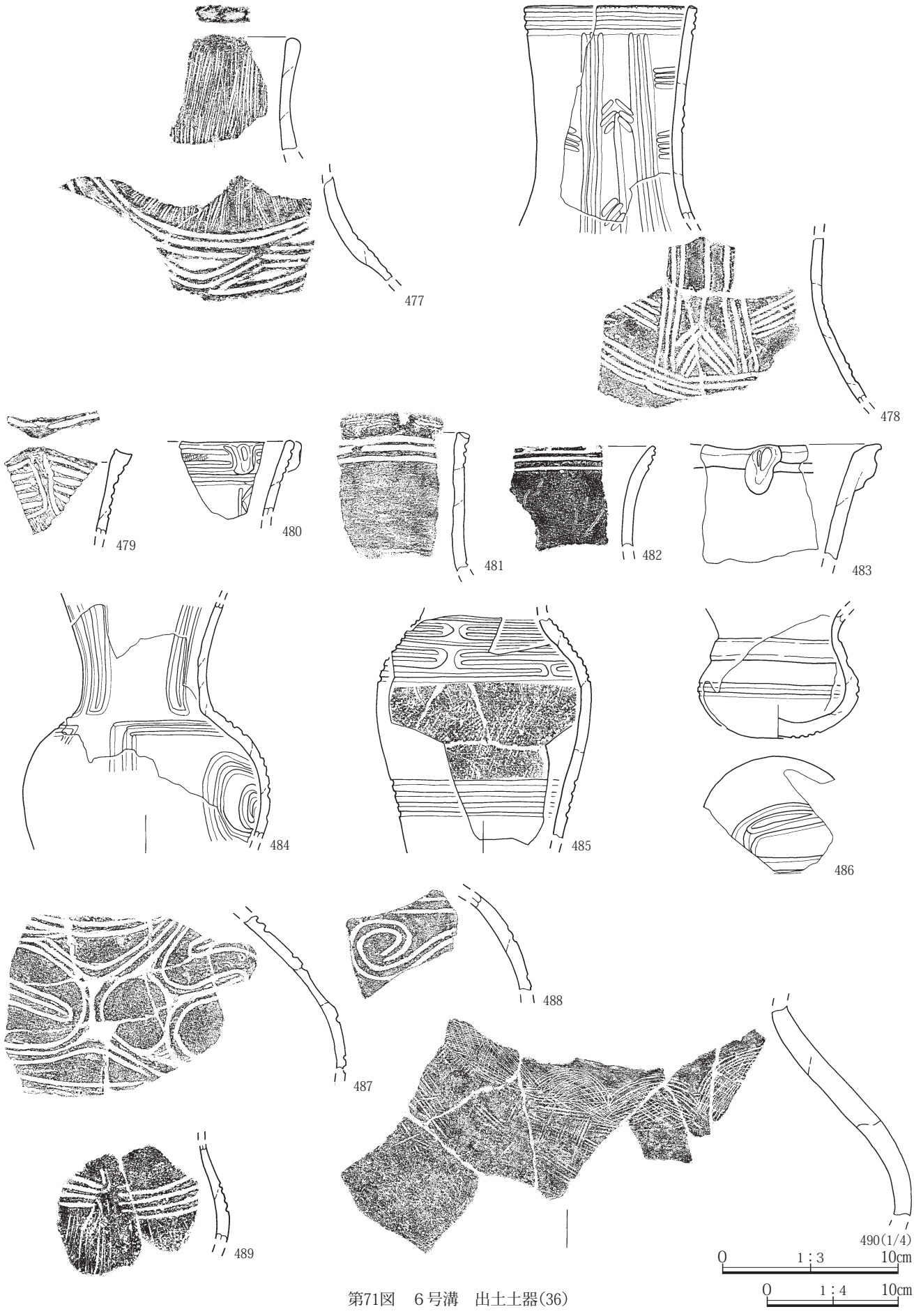
第68図　６号溝　出土土器(33)



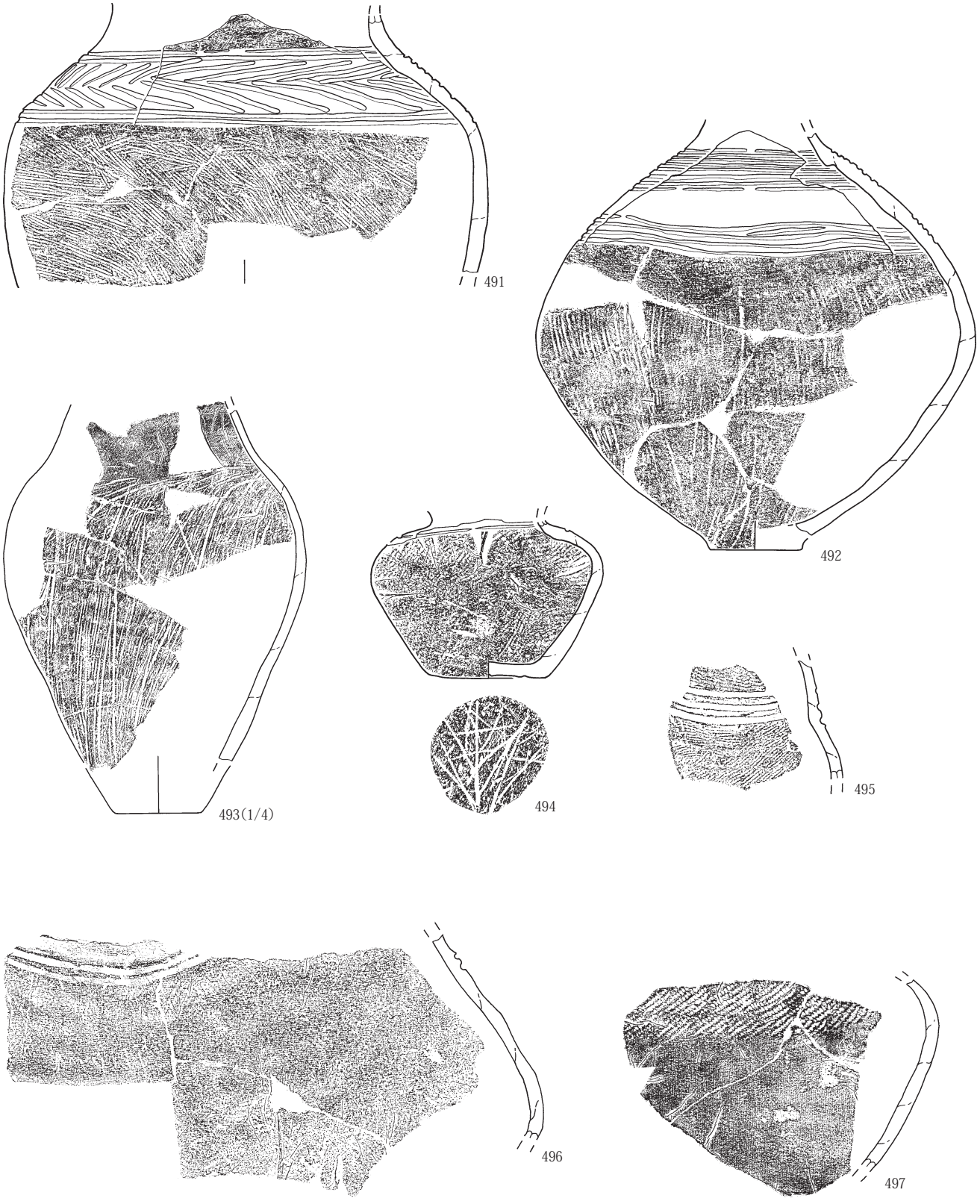
第69図　６号溝　出土土器(34)



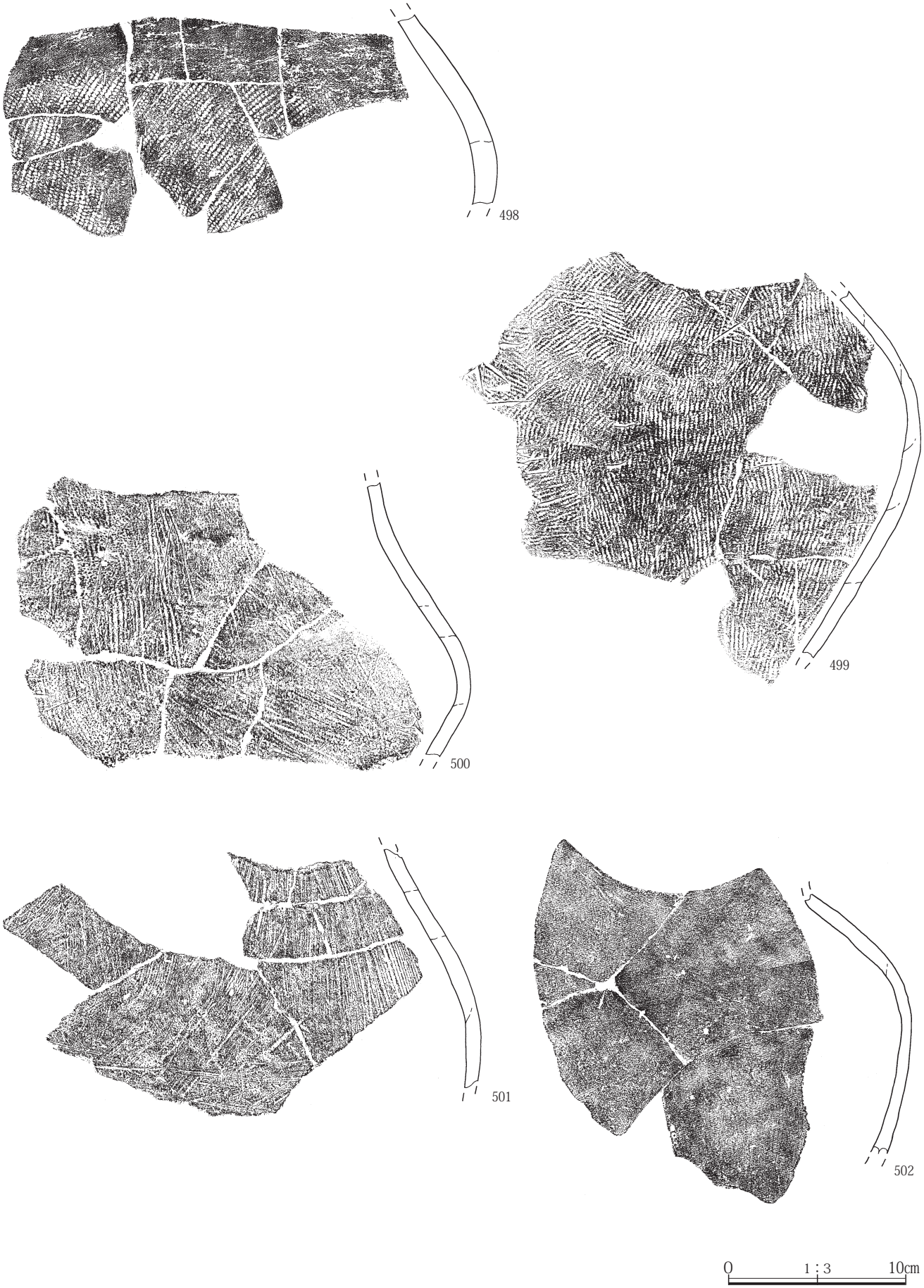
第70図　６号溝　出土土器(35)



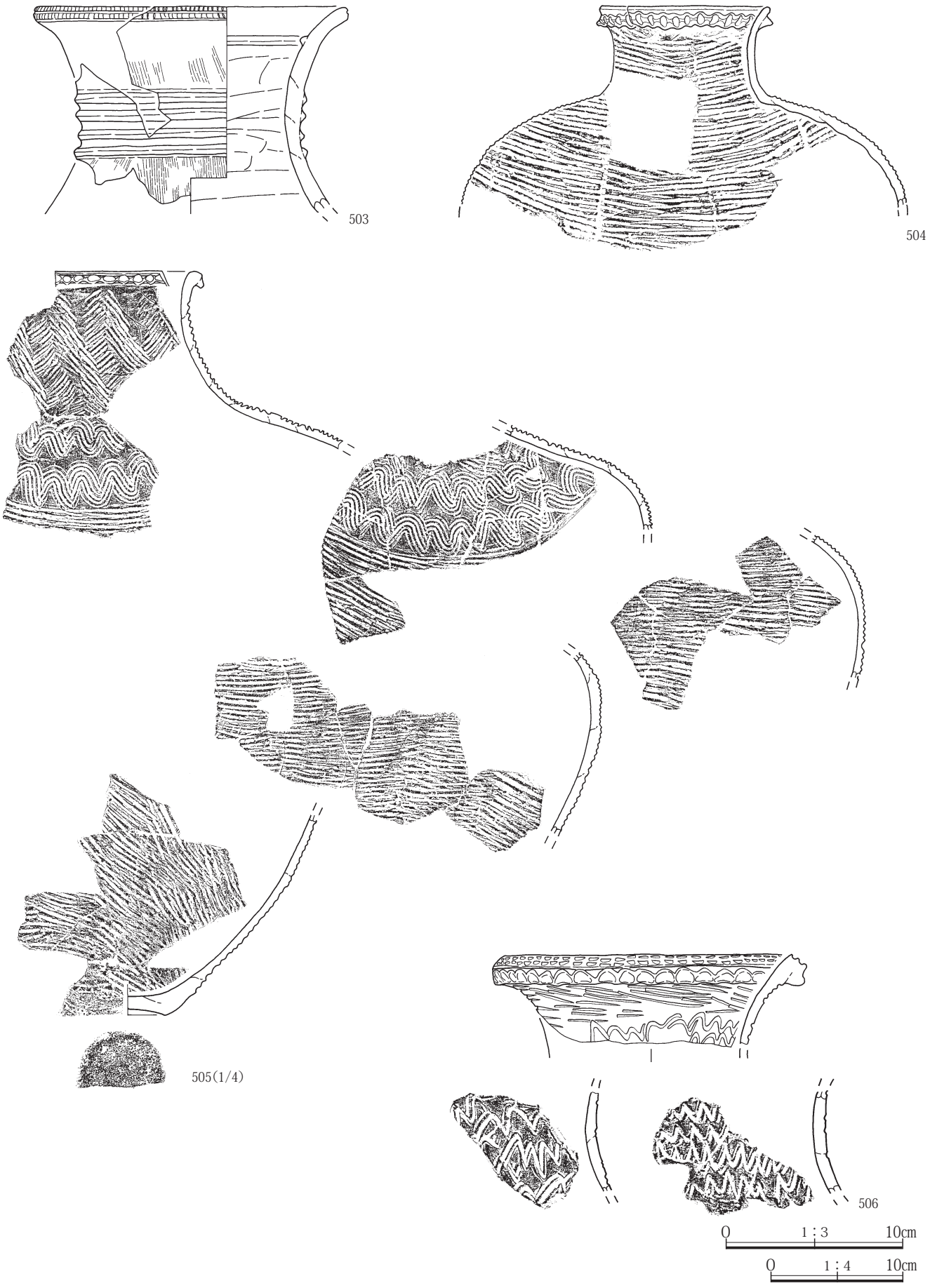
第71図　６号溝　出土土器(36)



第72図　６号溝　出土土器(37)

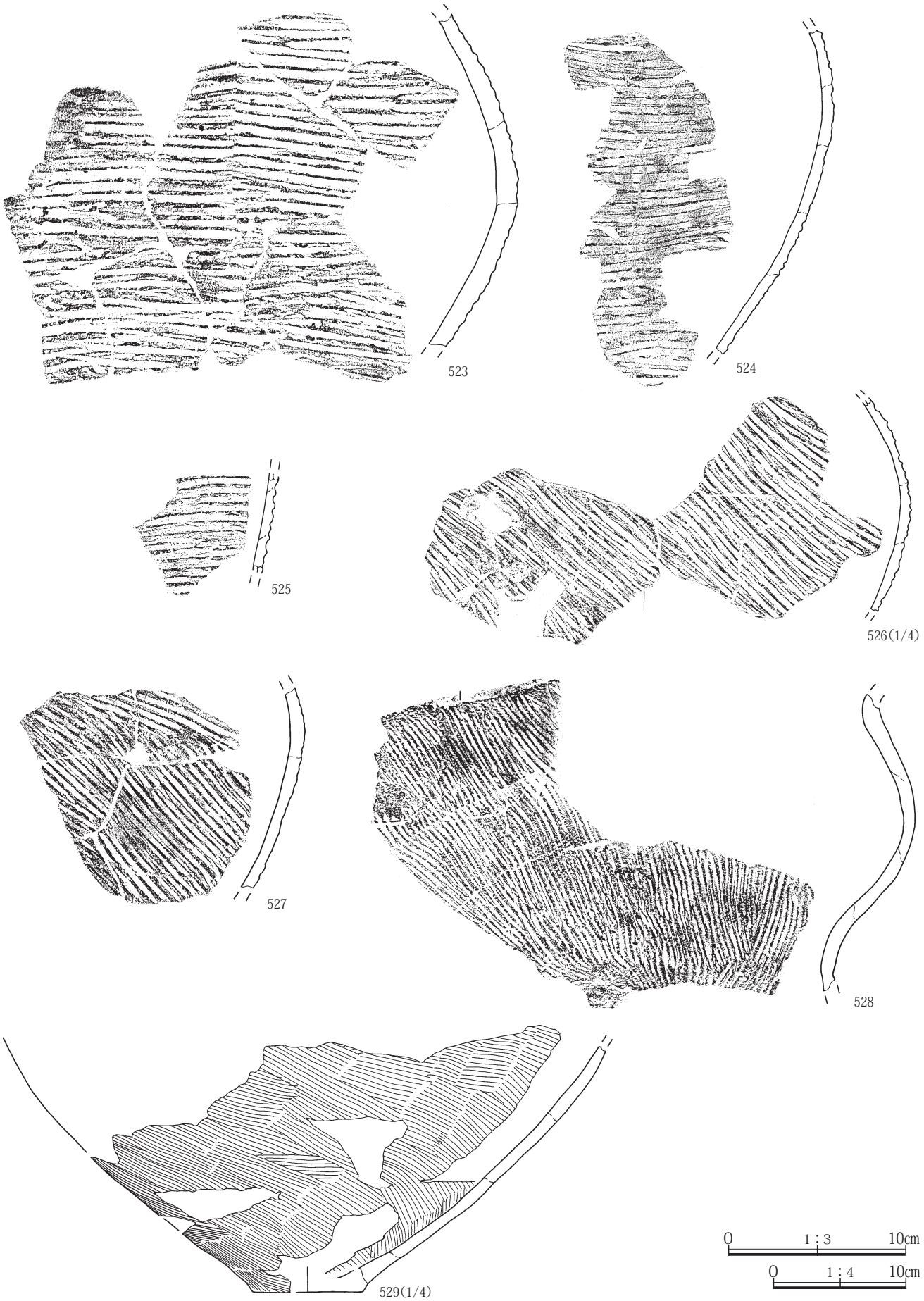


第73図　６号溝　出土土器(38)

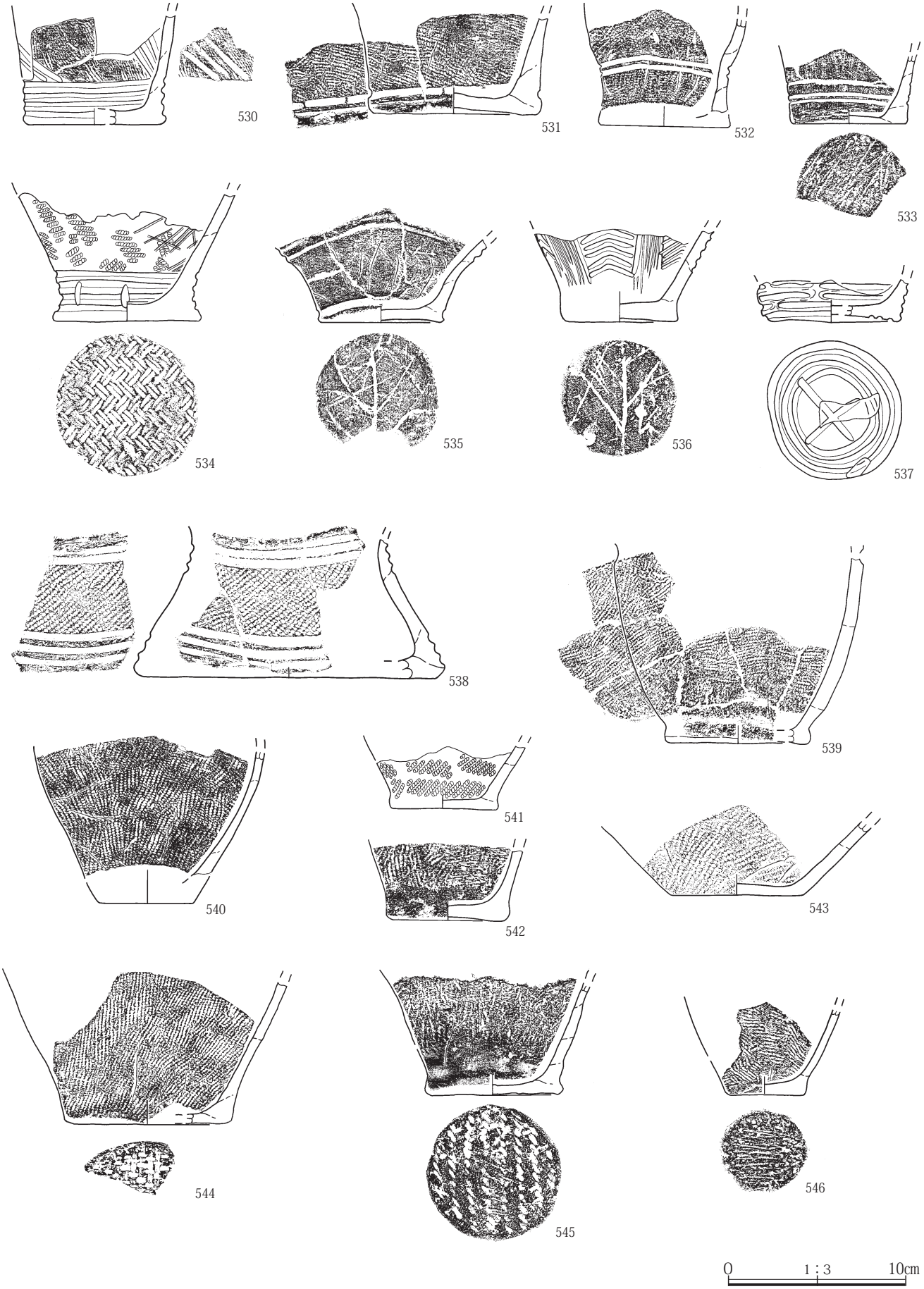


第74図　６号溝　出土土器(39)

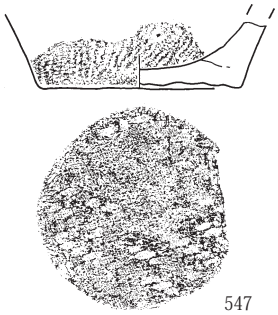
第75図　６号溝　出土土器(40)

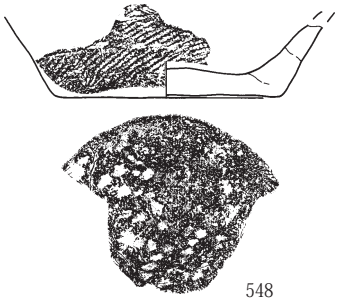


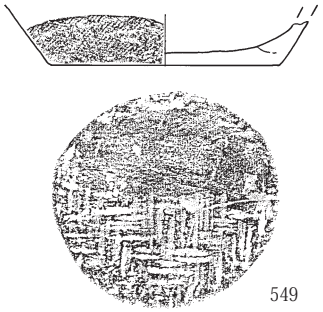
第76図　６号溝　出土土器(41)

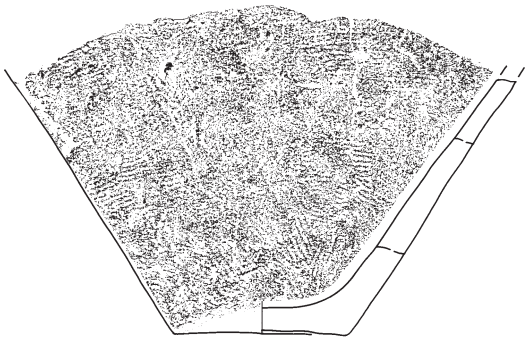


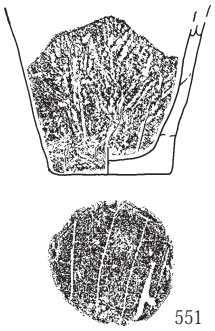
第77図　６号溝　出土土器(42)

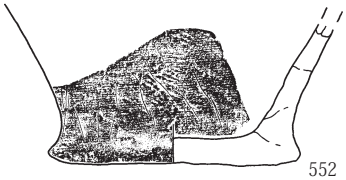

547

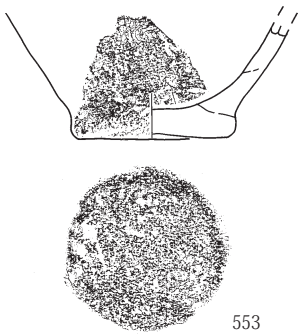

548

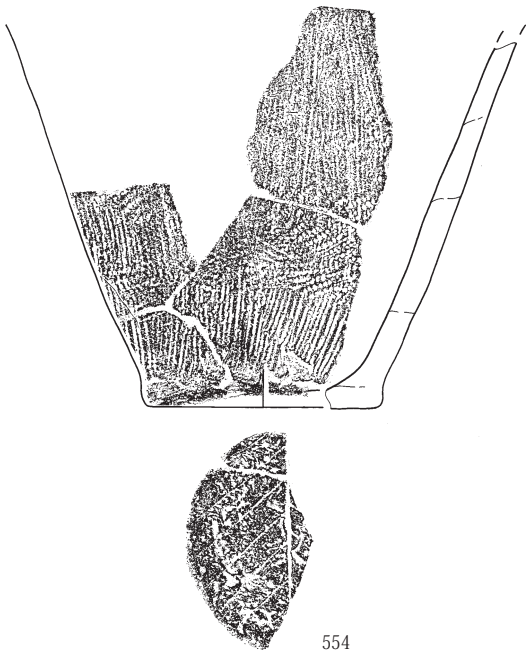

549

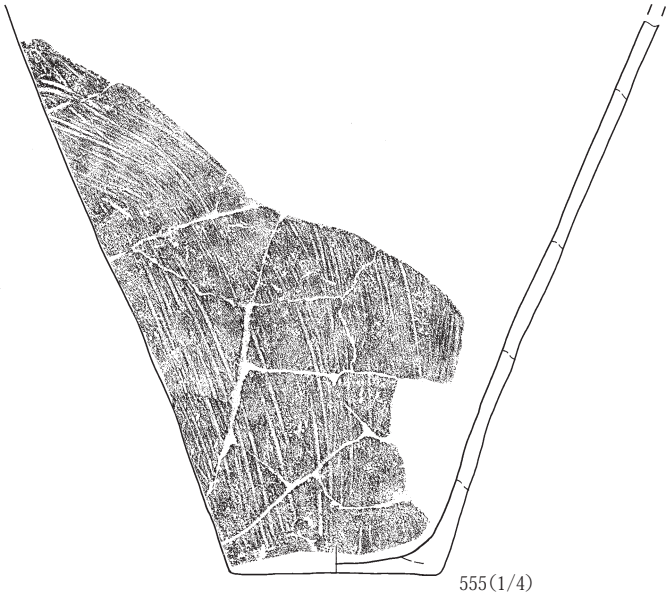

550


551


552


553

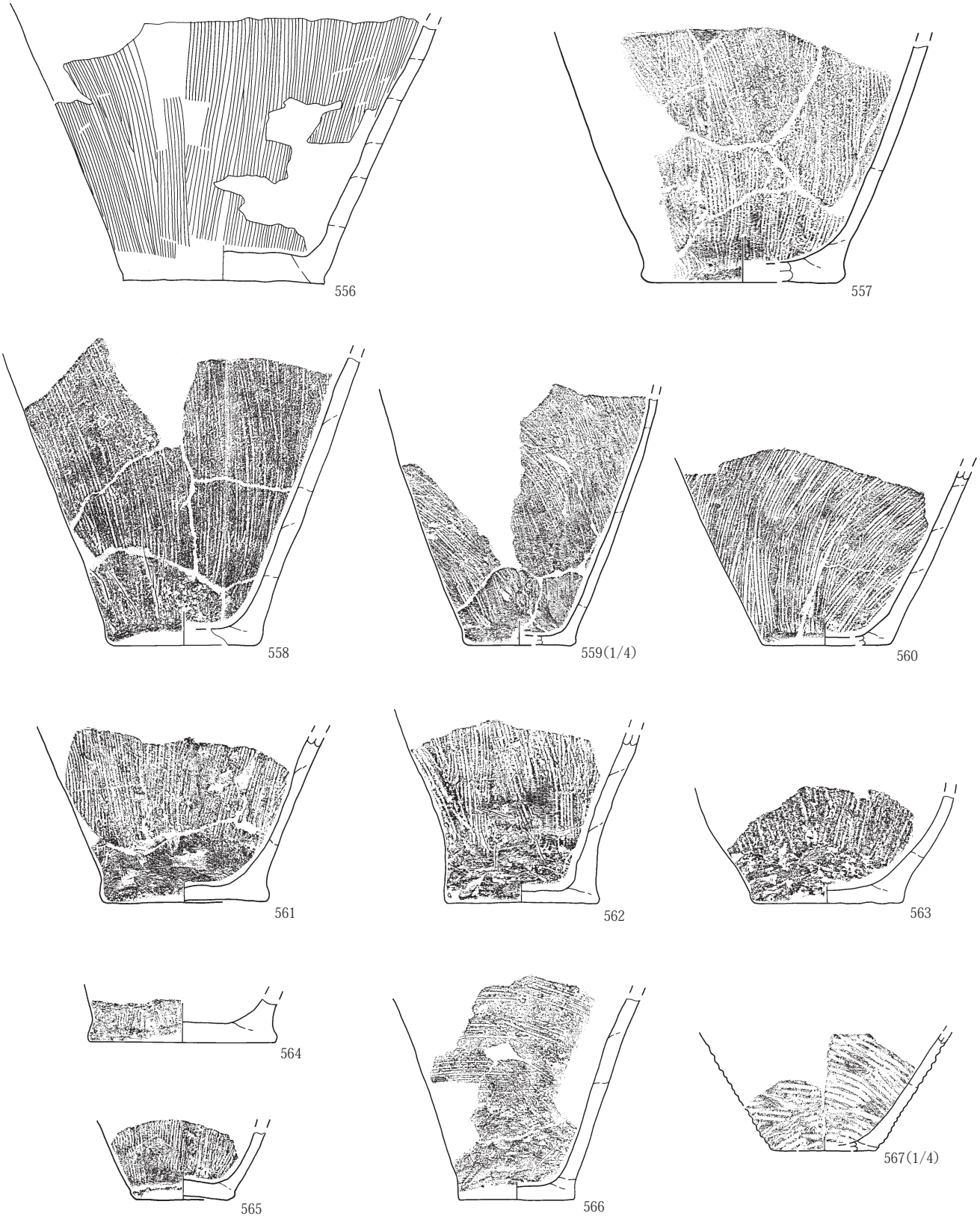

554


555(1/4)

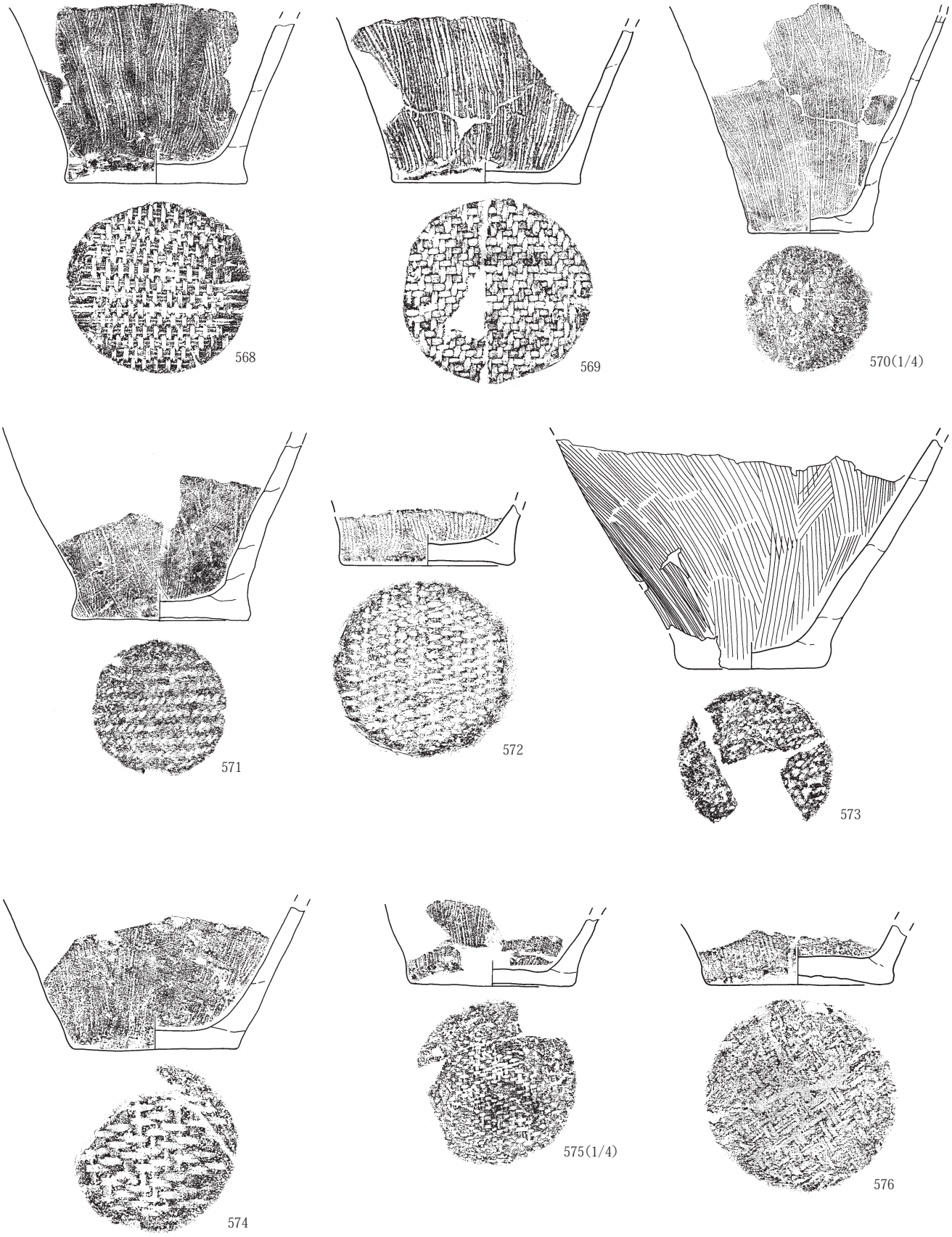
0　1：3　10cm

0　1：4　10cm

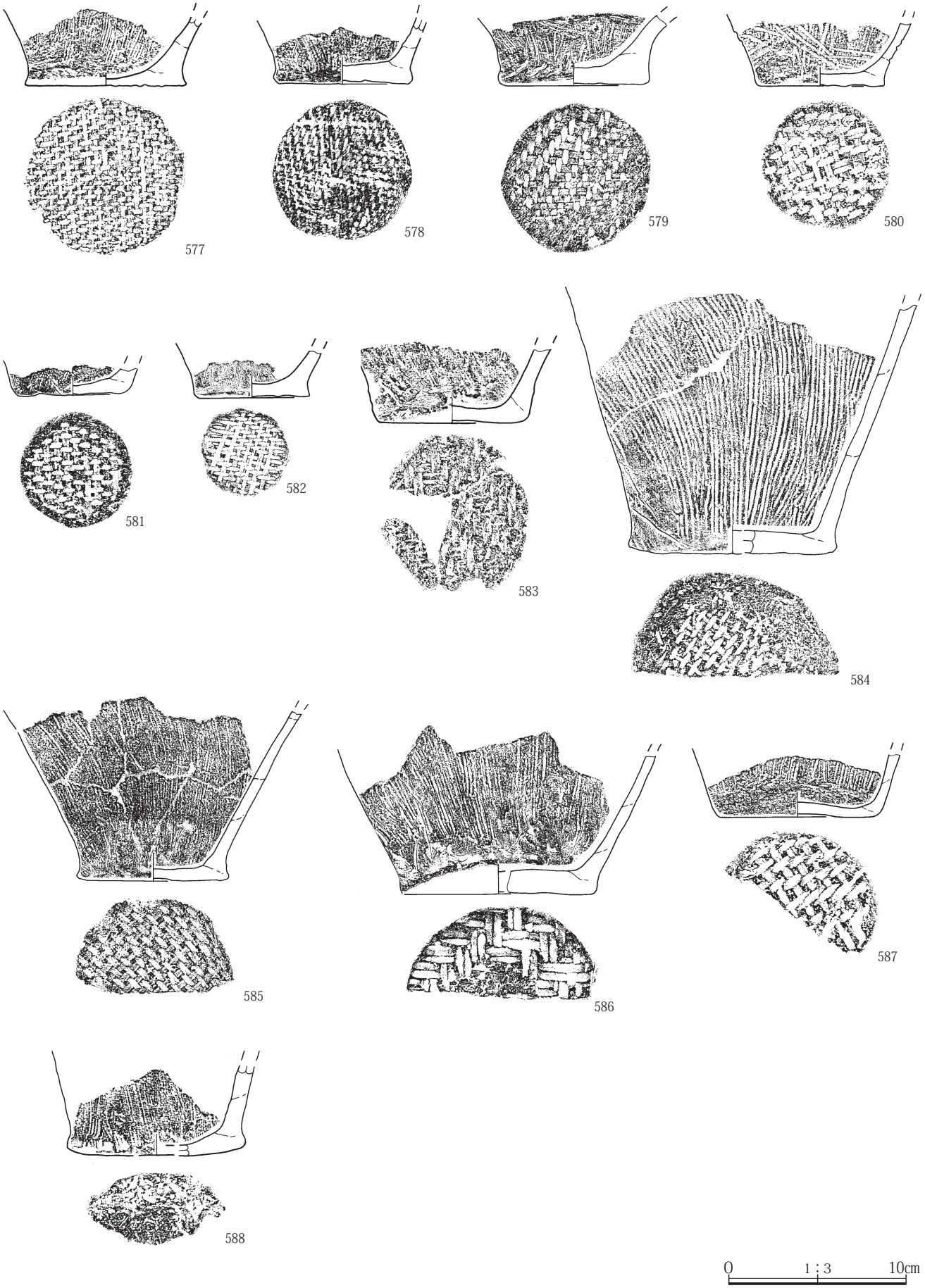
第78図　６号溝　出土土器(43)



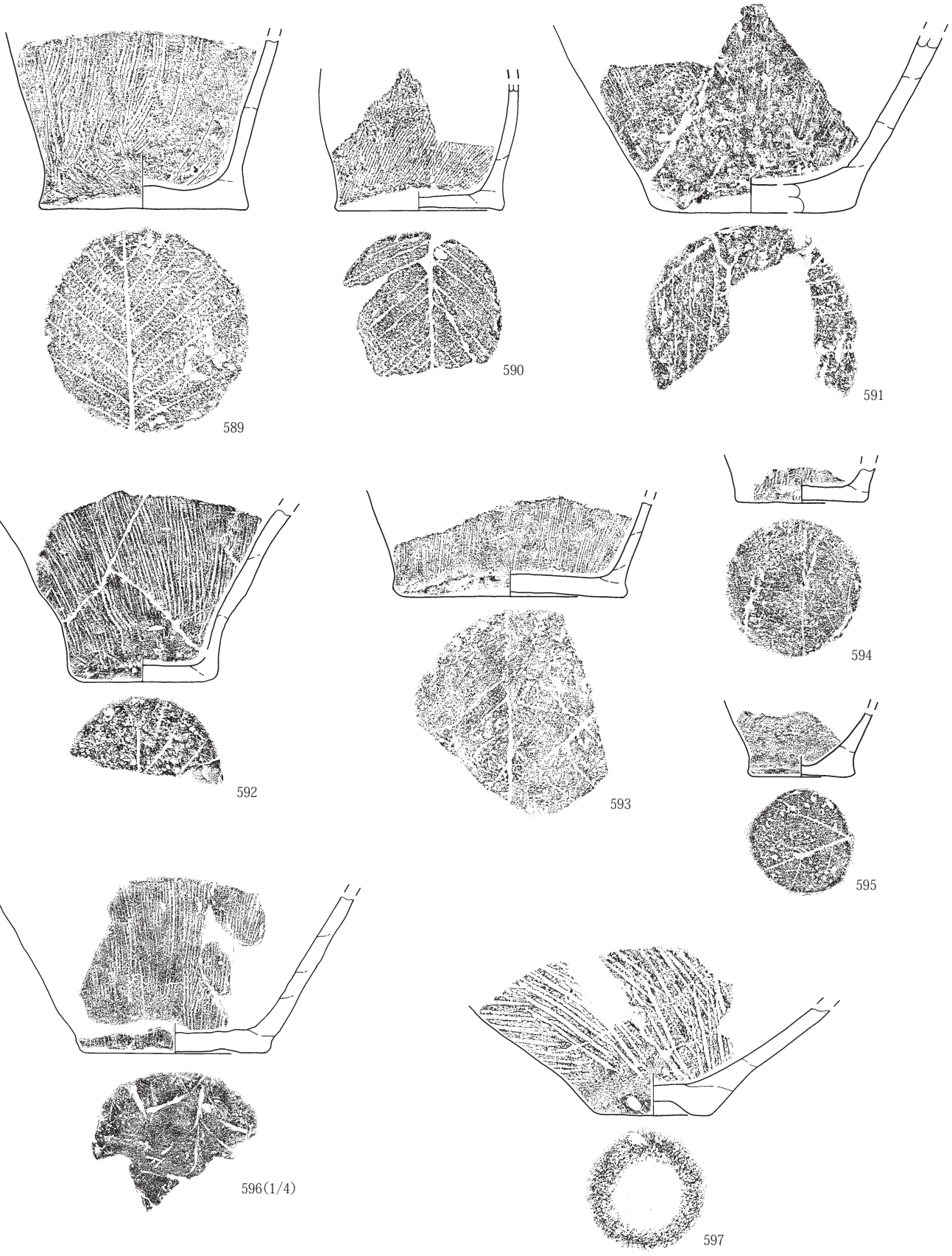
第79図　６号溝　出土土器(44)



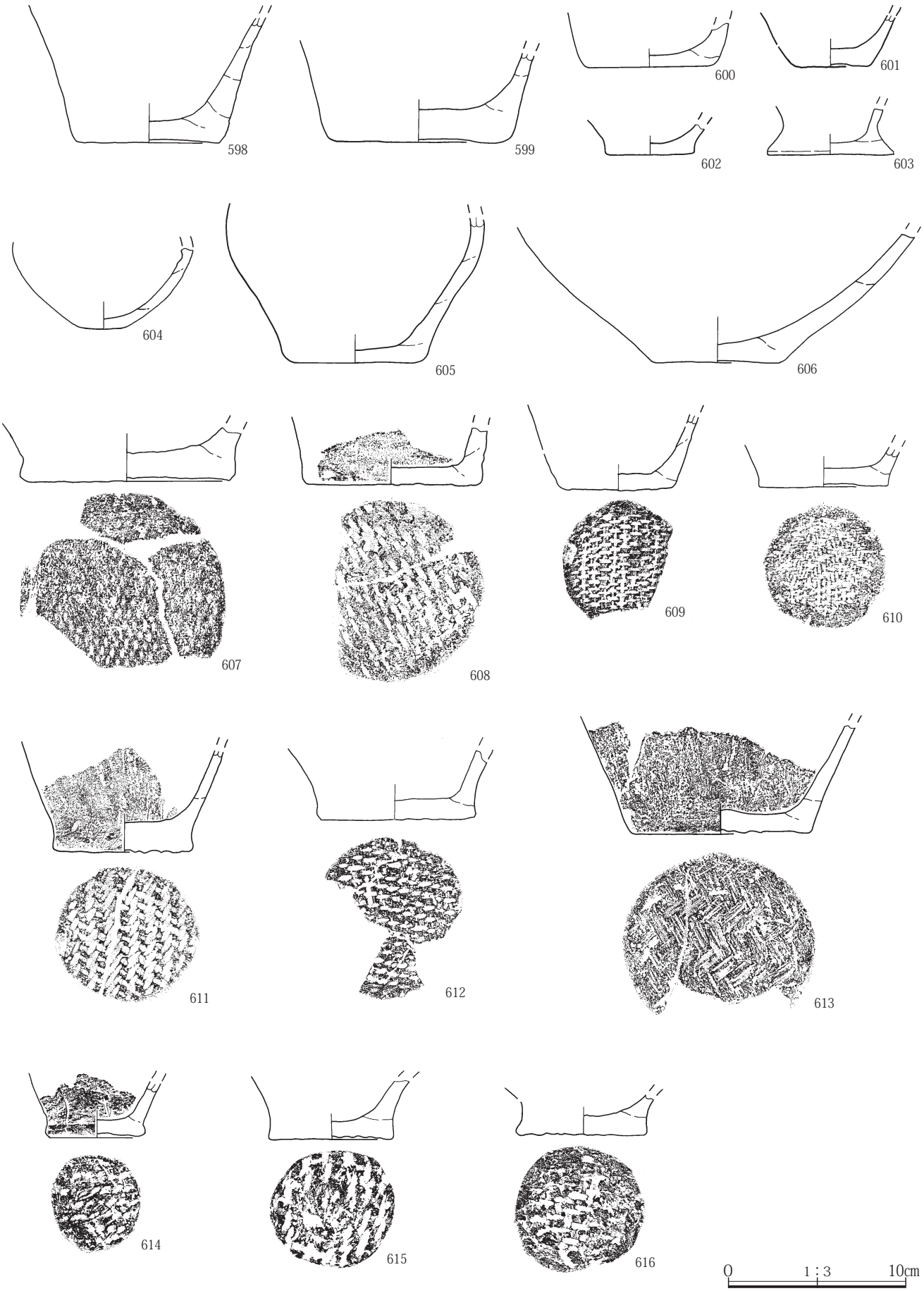
第80図　６号溝　出土土器(45)



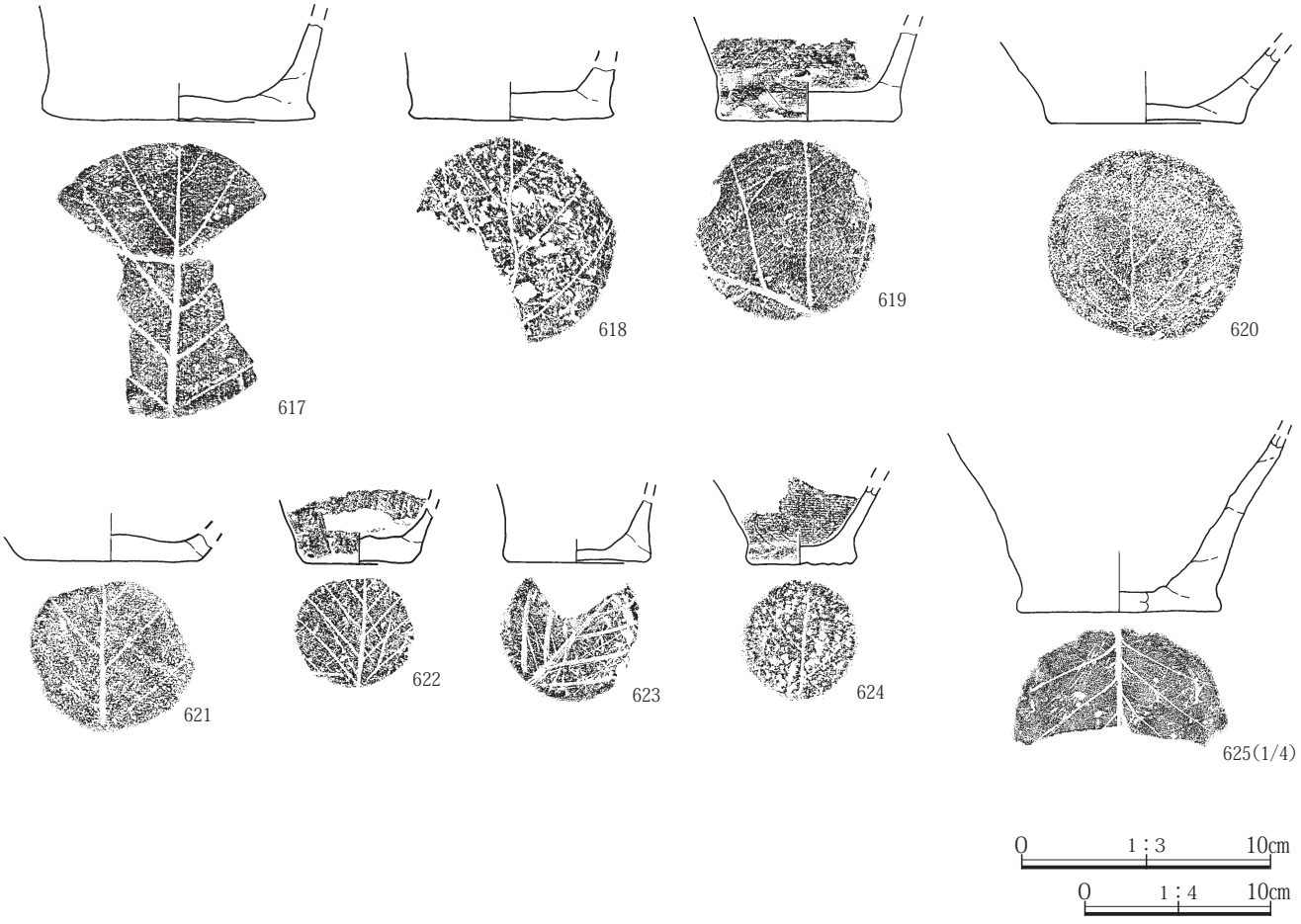
第81図　６号溝　出土土器(46)



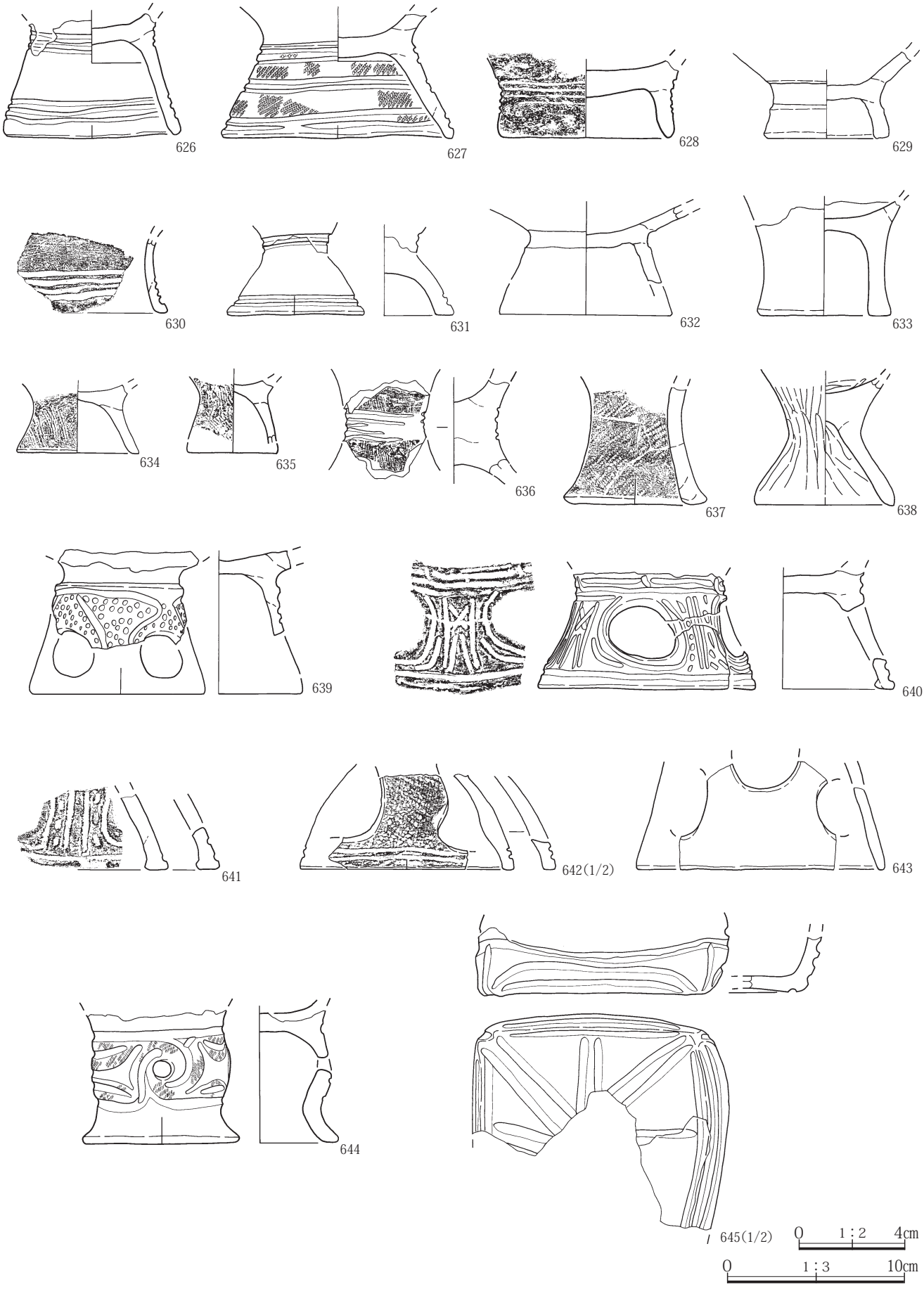
第82図　６号溝　出土土器(47)



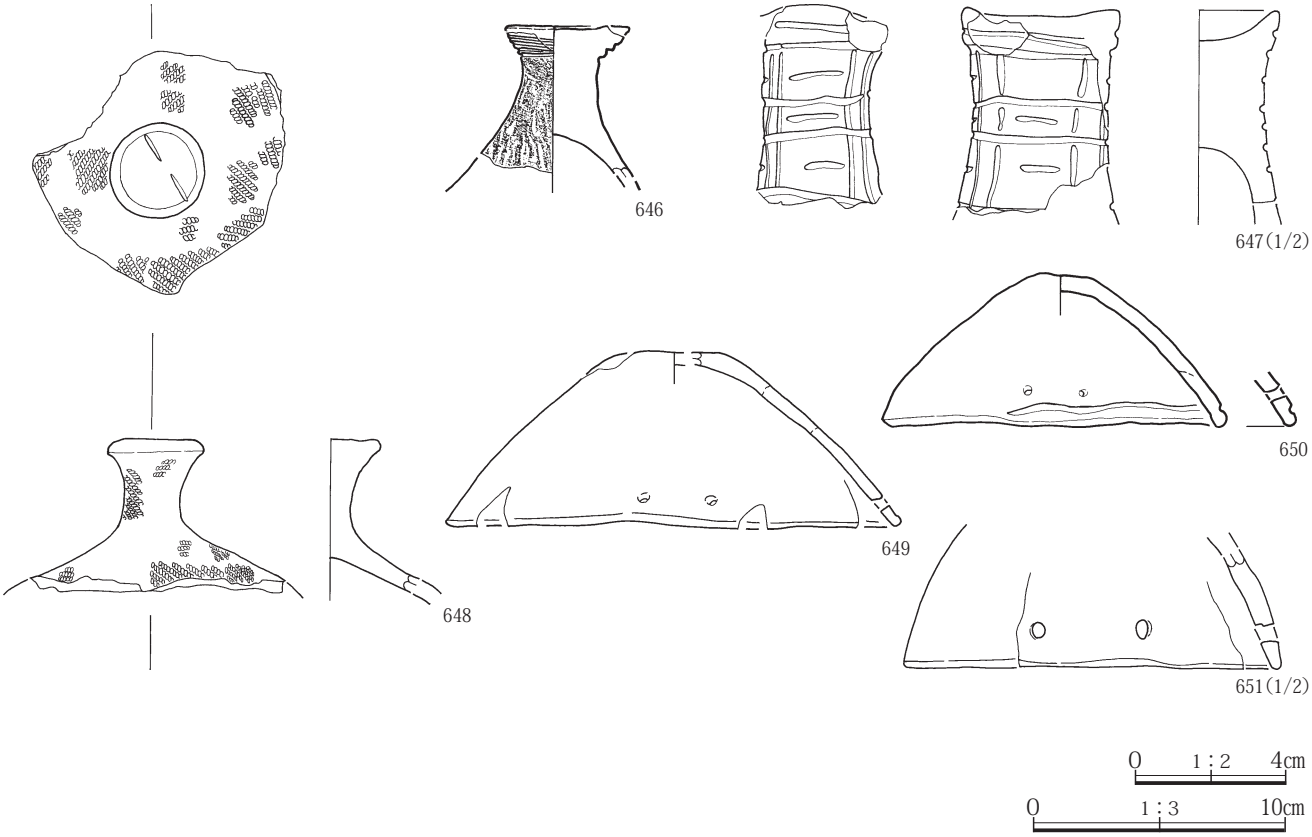
第83図　６号溝　出土土器(48)



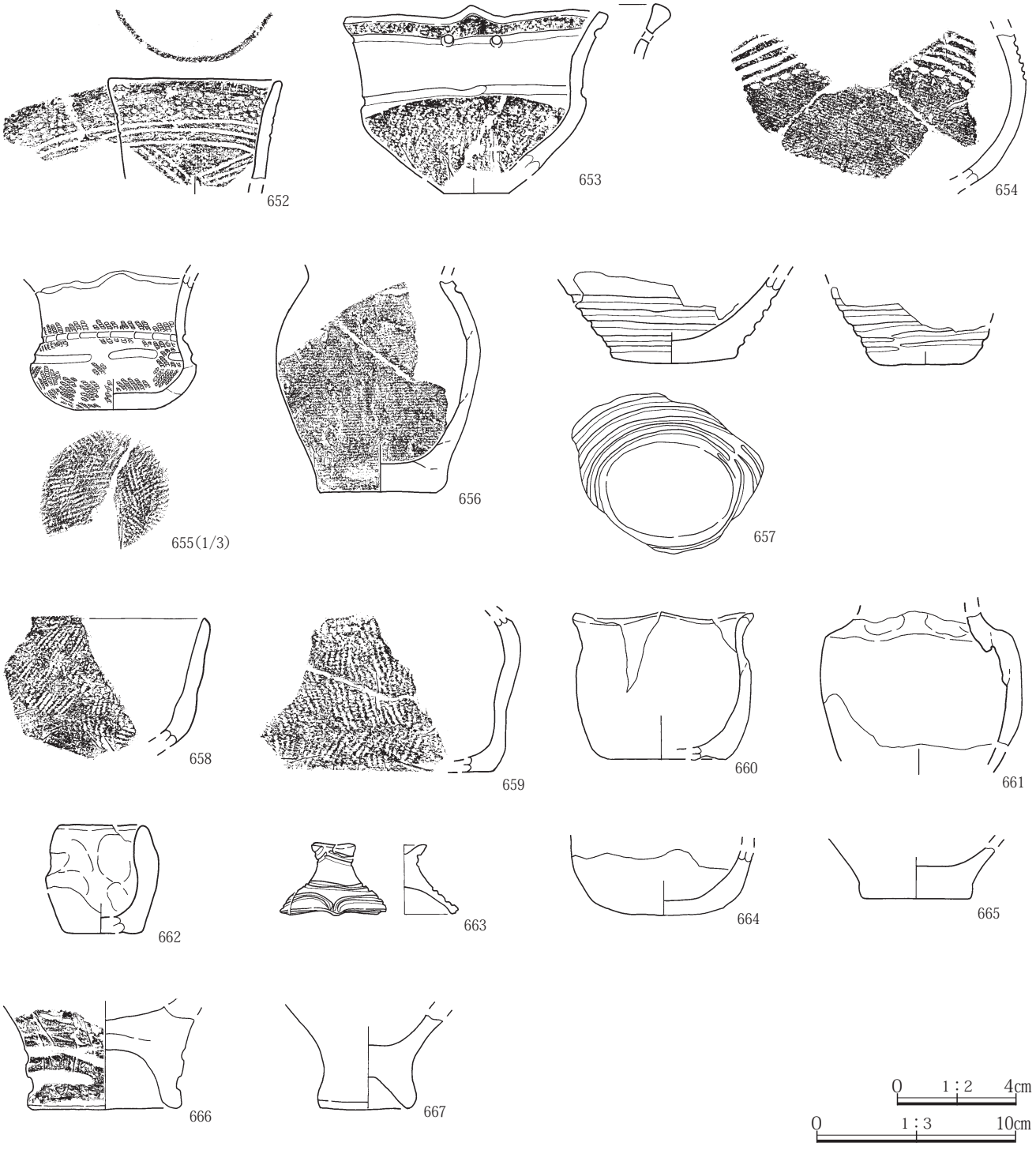
第84図　６号溝　出土土器(49)



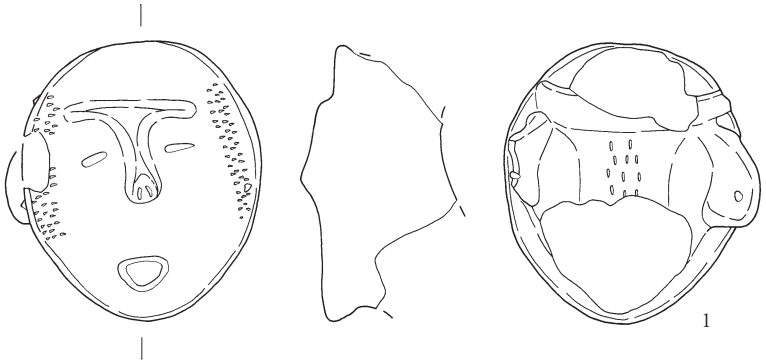
第85図　６号溝　出土土器(50)

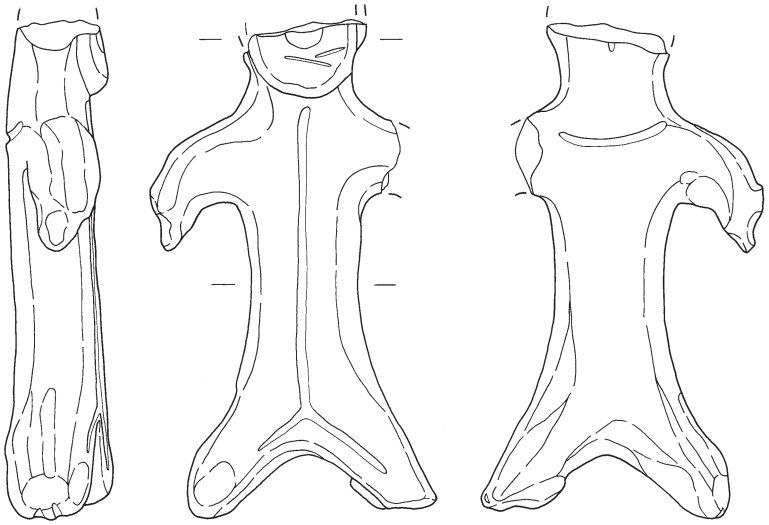


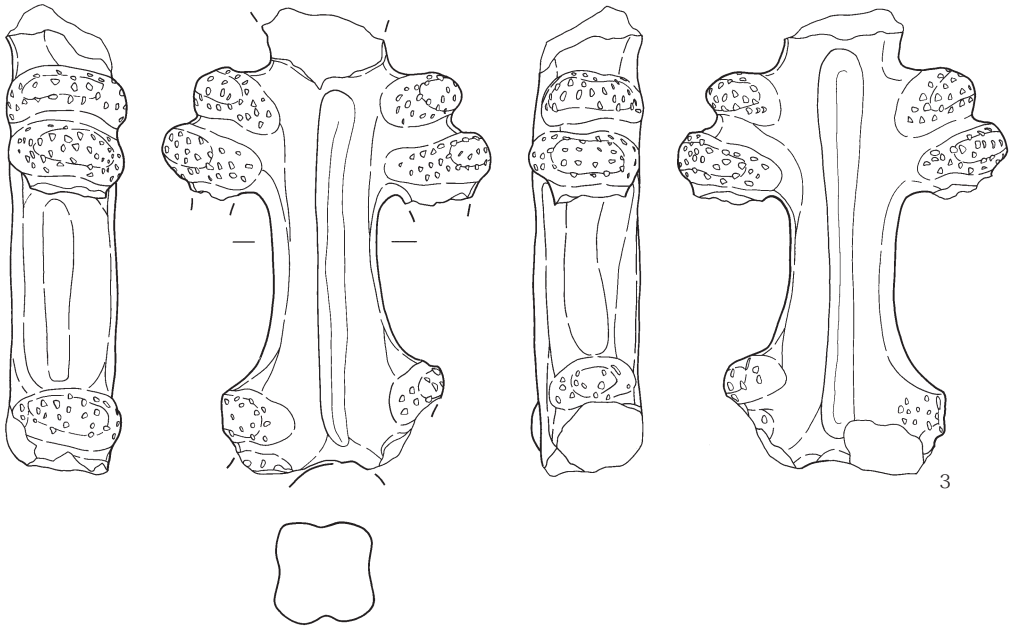
第86図　６号溝　出土土器(51)



第87図　６号溝　出土土器(52)

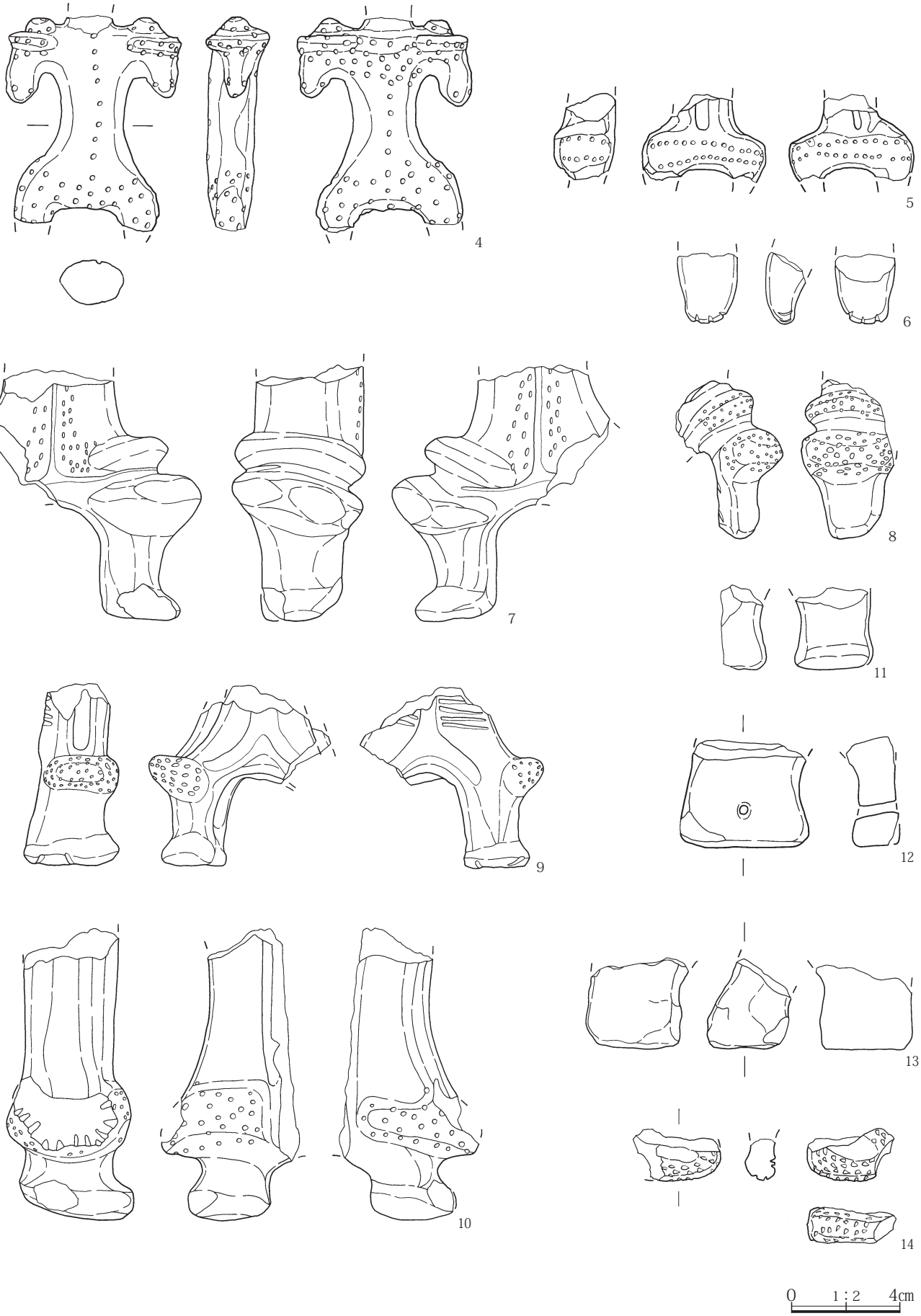




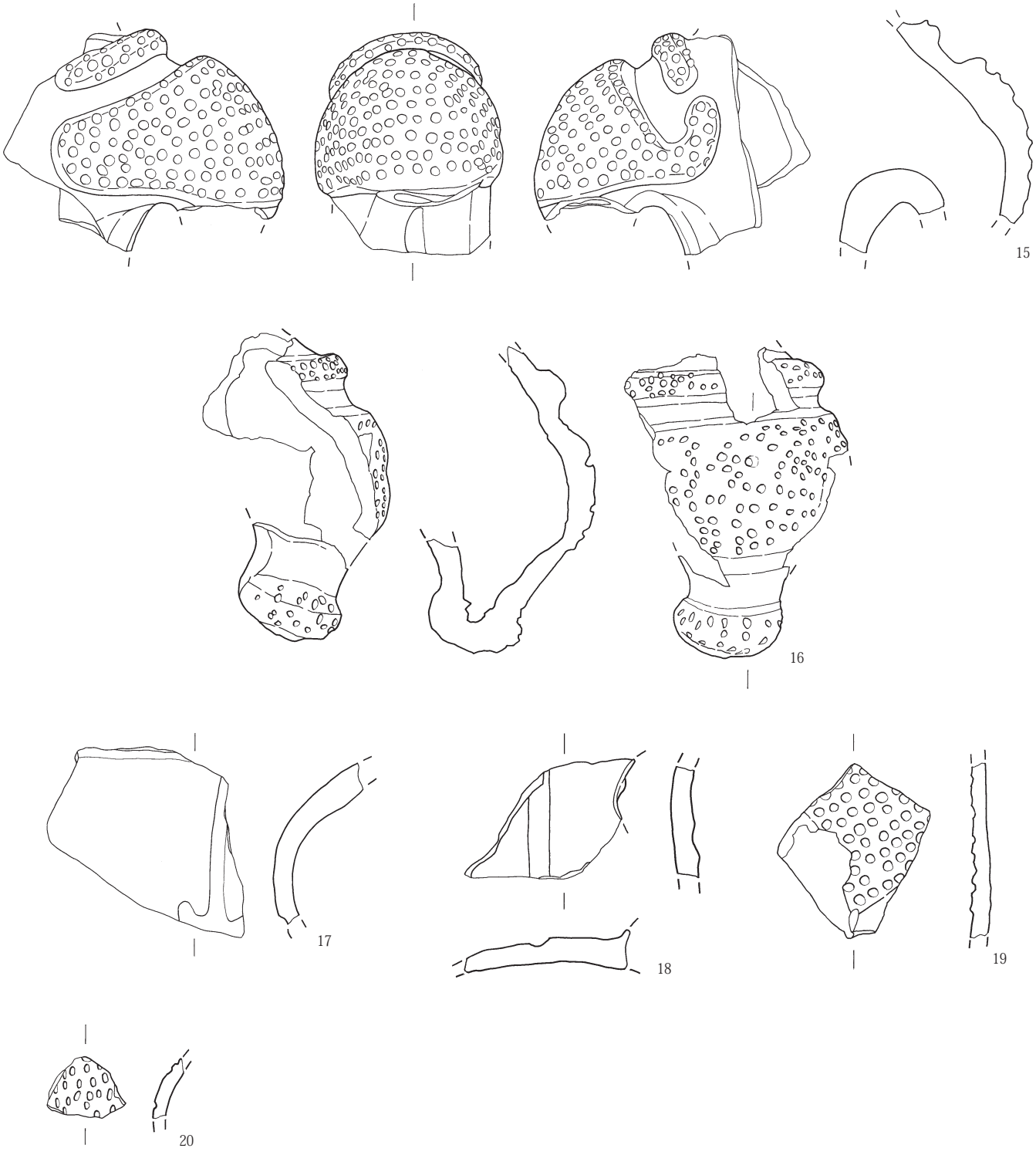


0　1:2　4cm

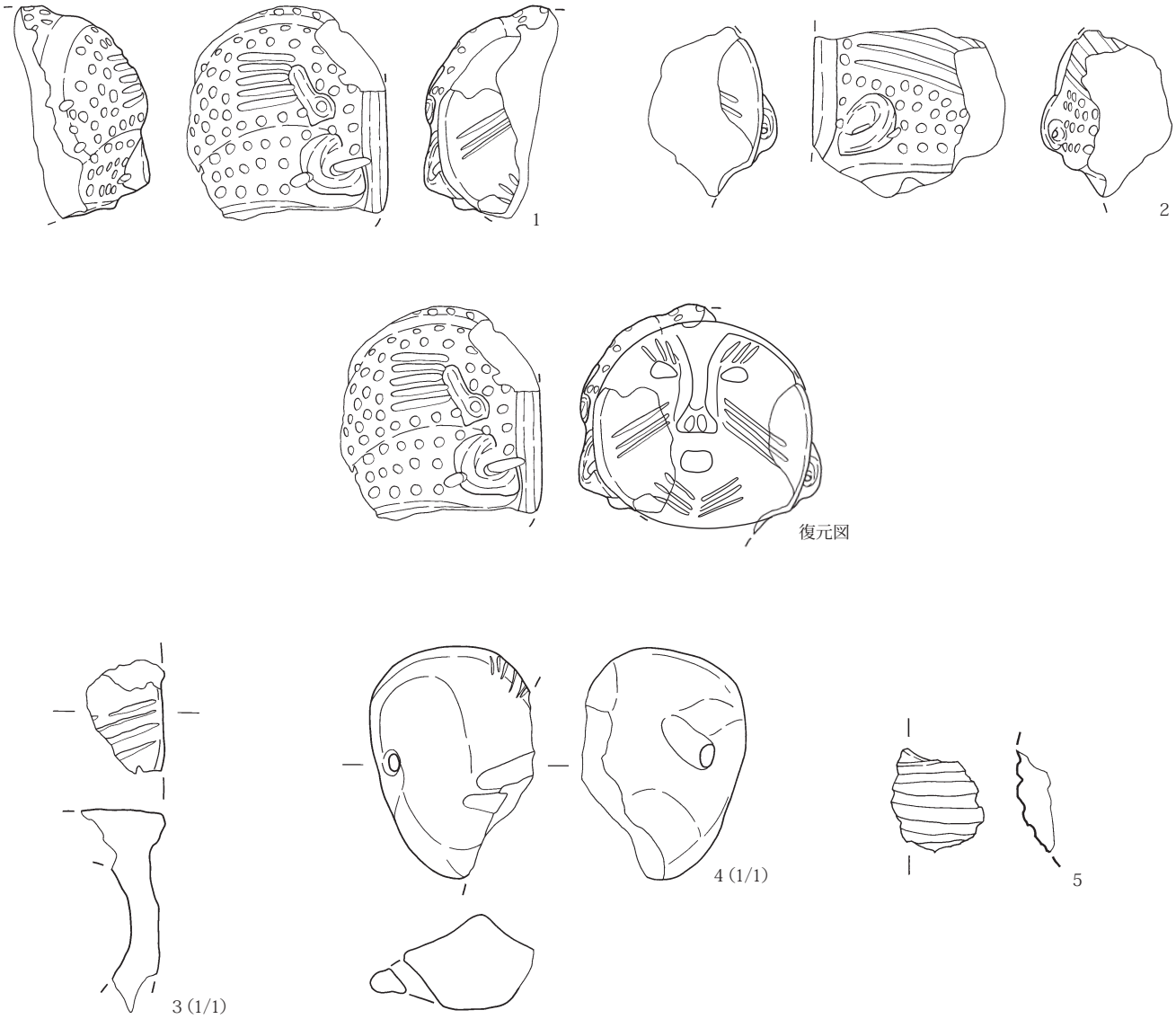
第88図　６号溝　出土土偶（１）



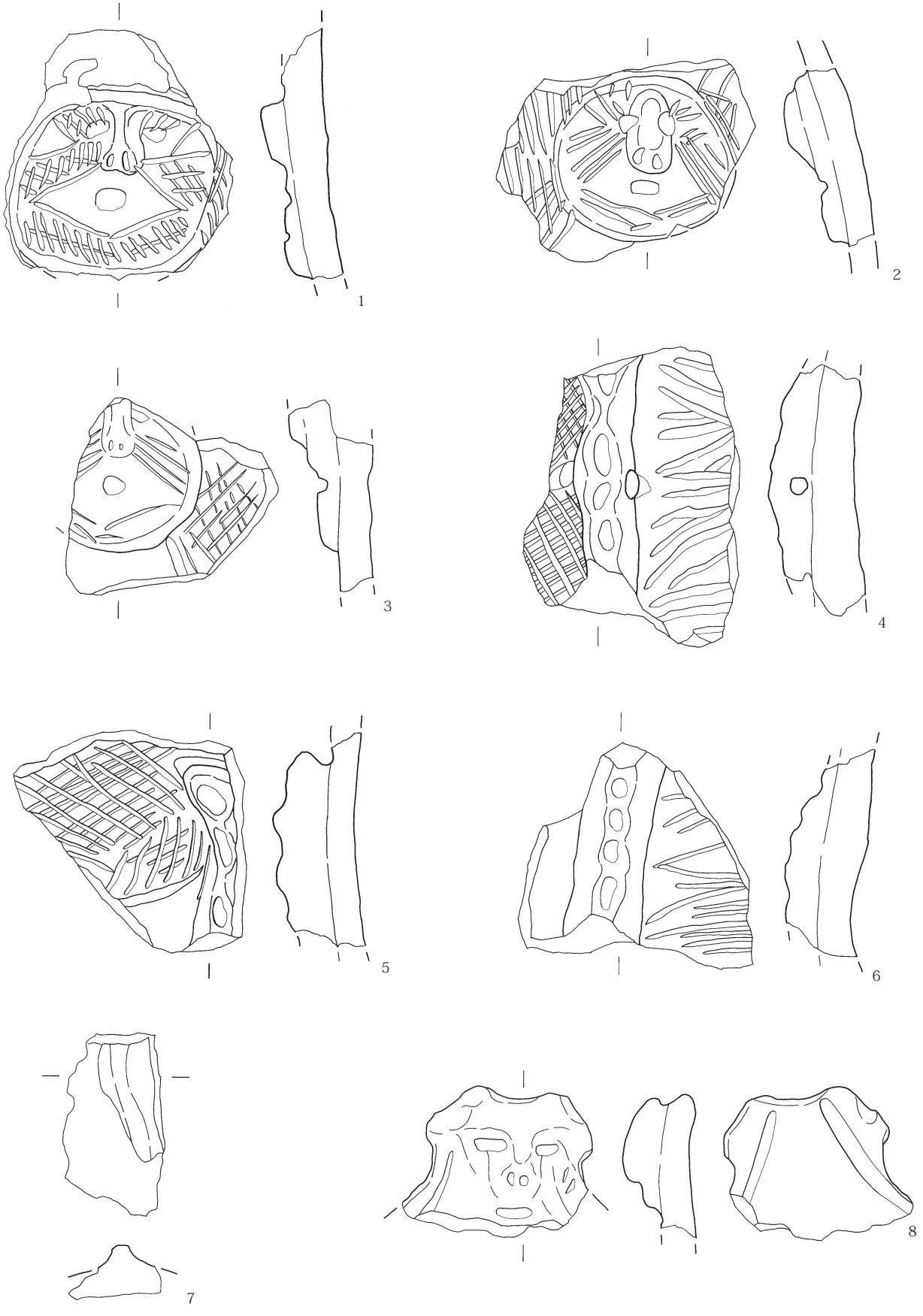
第89図　６号溝　出土土偶（２）



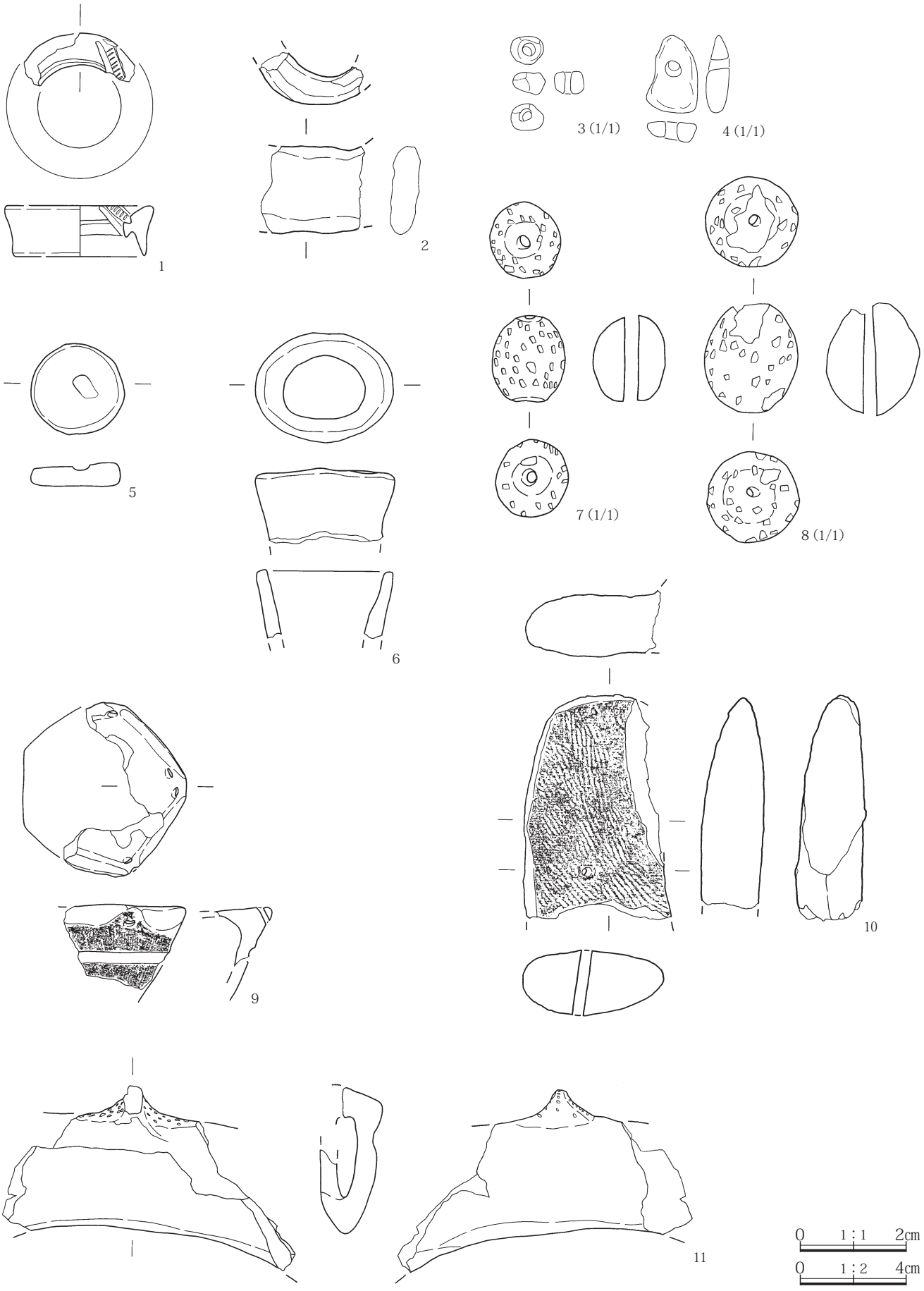
第90図　６号溝　出土土偶（３）



第91図　６号溝　出土鯨面土偶



第92図　６号溝　出土人面(鯨面)付土偶



第93図　６号溝　出土土製品・不明遺物

〈石器〉

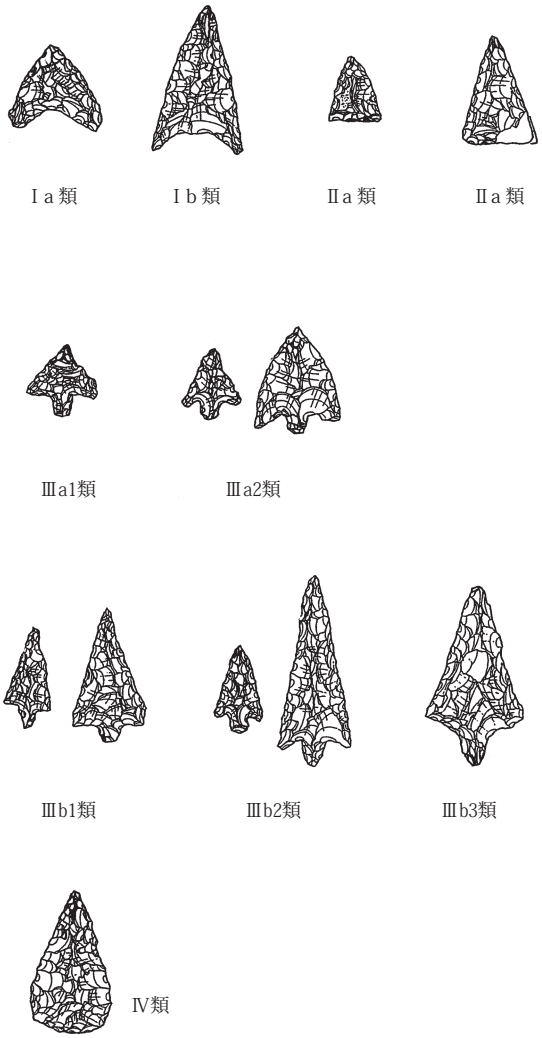
６号溝から出土した石器量は極めて多く、器種としては小型な石鏃をはじめとし、石匙、石錐、不定形なスクレイパー、楔形石器、打製石斧や磨製石斧、礫器、二次加工剥片類、石核等があり、礫石器類には凹石や磨石、敲石、大型石器としては台石や砥石、石皿、多孔石等、そして石棒・石剣・石刀や石冠状石製品、玉類といった各種石製品も多くある。しかも、剥片に至っては、24000点を超す膨大な量が出土している。こうした石器類は、先述の土器と同様の時期と思われるが、縄文時代晩期末葉と弥生時代前期前半との時期的な分別は難しい。ここでは、器種分類を主に説明することとする。

なお、石器の掲載にあたっては、代表的なものを図化し、図化以外にも写真のみでの掲載を行うこととし、その両者を遺物観察表に反映している。

１.石鏃（第95～97図　第22表　PL.82～84）

出土した石鏃は未製品も含め計689点を数え、他の石器に比べてその数は極めて多い。そうした石鏃の形状には、正三角形状に近い三角鏃、二等辺三角形状となる長身鏃とがあり、茎部の形状からは無茎鏃と有茎鏃の両者があり、さらに基部形状からは凹基、平基、凸基、そして円基となるものがある。さらには小型品等も多く目につき、バラエティーに富む。本報告では、これらの特徴的な形状から以下のように形態分類し、記述する。

Ⅰa類	凹基無茎三角鏃
Ⅰb類	凹基無茎長身鏃
Ⅱa類	平基無茎三角鏃
Ⅱb類	平基無茎長身鏃
Ⅲa1類	平基有茎三角鏃
Ⅲa2類	凹基有茎三角鏃
Ⅲa3類	凸基有茎三角鏃
Ⅲb1類	平基有茎長身鏃
Ⅲb2類	凹基有茎長身鏃
Ⅲb3類	凸基有茎長身鏃
Ⅳ類	円茎鏃
Ⅴ類	形態不明・未製品



第94図　石鏃分類模式図

また、石鏃に使用される石材についてみると、10数種類におよぶことが解っている。その中でも黒曜石の使用頻度が群を抜いて最も高く、珪質頁岩や黒色頁岩、流紋岩が多く、次いでチャートといった石材が続く。また、赤碧玉も比較的多く使用され、褐色碧玉、玉髄といった石材も少量ではあるが散見することができる。

Ⅰa類　凹基無茎三角鏃（第95図１～４　PL.82）

基部を抉り込んだ、無茎の凹基となる三角鏃である。計12点とやや少ないが、その内の４点を図掲載し、５点を写真のみの掲載とした。１～３は表裏面とも全面押圧剥離による完成状態にあるが、４は未製品の可能性がある。

使用されている石材は、黒曜石が８点と最も多く、次いで流紋岩の３点、チャートの１点である。

Ⅰb類　凹基無茎長身鏃（第95図10～14　PL.82）

基部を抉り込んだ、無茎の凹基となる長身鏃である。計７点と少ないが、５点を図掲載した。11～14は表裏面とも全面押圧剥離による完成状態にあるが、10は未製品の可能性がある。また、14は両側縁の基部寄りに抉りを入れる形状をとり、本類の中でも極めて特徴的である。

使用されている石材は、黒曜石が４点、チャート・黒色頁岩・流紋岩がそれぞれ１点ずつである。

Ⅱa類　平基無茎三角鏃（第95図15・16　PL.82）

基部が平となる、無茎で平基の三角鏃である。計７点と少ないが、２点を図掲載し、２点を写真のみの掲載とした。15・16は共に表面の一部に礫面を残すが、15は完成状態にある極小石鏃で、16は未製品の可能性がある。

使用されている石材は、黒曜石が６点で、黒色頁岩が１点である。

Ⅱb類　平基無茎長身鏃（第95図19・20　PL.82）

基部が平となる、無茎で平基の長身鏃である。計５点と少ないが、２点を図掲載した。19・20は共に表裏面を全面押圧剥離した完成状態にある。

使用されている石材は、黒曜石と黒色頁岩がそれぞれ２点ずつで、チャートが１点である。

Ⅲa1類　平基有茎三角鏃（第95図21～23　PL.82）

基部が平となる、有茎で平基の三角鏃である。計41点と比較的多く、図掲載しのは３点と少ないが、26点を写真のみの掲載とした。図示した３点共に表裏面とも全面押圧剥離による完成状態で、22・23は特に剥離が丁寧にあり、21・22は極小石鏃となる。また、写真掲載の本類石鏃には、完成状態にあるものや未製品的なものも含まれ、24～27に代表されるように極小石鏃も比較的多い傾向にある。

使用されている石材は、黒曜石が36点と圧倒的に多く、他は珪質頁岩、黒色頁岩、流紋岩、赤碧玉、褐色碧玉がそれぞれ１点ずつである。

Ⅲa2類　凹基有茎三角鏃（第95図50～68　PL.82）

基部を抉り込んだ、有茎の凹基となる三角鏃である。計65点と、Ⅲb2類の凹基有茎長身鏃に次いで多い。その内の19点を図掲載したが、写真のみの掲載はない。図示した多くが完成状態にあるものの、60・61の２点は未製品の可能性をもつ。また、表裏面とも全面押圧剥離が施される中、62・65のように表裏面とも周縁加工を施すものの、素材面を大きく残す例もある。さらに、極小石鏃といえる石鏃には50～53があり、その中でも53は最小の部類となる。

使用されている石材は、黒曜石が49点と最も多く、次いで珪質頁岩の５点、流紋岩の４点、チャートと赤碧玉がそれぞれ３点ずつ、そして黒色安山岩が１点となっている。

Ⅲa3類　凸基有茎三角鏃

基部が凸状となる、有茎で凸基の三角鏃である。僅か２点と最も少ない類である。共に黒曜石製で、先端部が欠損していることから図示および写真掲載はしていない。

Ⅲb1類　平基有茎長身鏃（第95図69～83　PL.82・83）

基部が平となる、有茎で平基の長身鏃である。計39点と比較的多く、15点を図掲載し、９点を写真のみの掲載とした。69～72に代表されるように、長身鏃にあっても極小石鏃は存在する。また、完成状態にあるものが多い中、71・79のように素材面を大きく残す例もあるが、71は未製品の可能性もある。一方で、70・80～83は左右の側縁が直線的にならず、やや屈曲状にある例も存在するが、未製品とするかは一考を有する。

使用されている石材は、黒曜石が25点と最も多く、他は流紋岩が３点、チャート、珪質頁岩、硬質頁岩、黒色頁岩、玉髄がそれぞれ２点ずつ、褐色碧玉が１点となっている。

Ⅲb2類　凹基有茎長身鏃（第96図93～130　PL.83）

基部を抉り込んだ、有茎の凹基となる長身鏃である。計275点と、出土した石鏃の中でも圧倒的に多い類で

ある。その内の38点を図掲載し、53点を写真のみの掲載とした。93～100に代表されるように、長身鏃にあっても極小石鏃は存在する。また、押圧剥離による完成状態にある石鏃が多い中、99・104・108・109・123・124のように素材面を大きく残す例もある。一方で、124・125のように左右の側縁が直線的にならず、側縁上方でやや屈曲するように先端部となる例や、129・130のように側縁中央付近に屈曲部を有する例もあり、先のⅢa2類での例と併せて一考を有する。

使用されている石材は、黒曜石が202点と圧倒的に多く、次いで珪質頁岩と黒色頁岩がそれぞれ20点ずつ、流紋岩が18点、他にチャートが７点、赤碧玉が３点、硬質頁岩、デイサイト、黒色安山岩、褐色碧玉、玉髄がそれぞれ１点ずつとなっている。

Ⅲb3類　凸基有茎長身鏃（第96図184～190　PL.84）

基部が凸状となる、有茎で凸基の長身鏃である。計15点を数え、７点を図掲載し、２点を写真のみの掲載とした。極小石鏃とまでは言えないが小振りな184・185、逆に最も大振りな190が存在する。多くは完成状態にあるが、中には未製品的なものもある。また、押圧剥離を駆使するが、一部に素材面を残す例もある。さらに、189では側縁中央付近に屈曲部を有する例もある。

使用されている石材は、黒曜石の８点、黒色頁岩の４点、流紋岩の２点、珪質頁岩の１点である。

Ⅳ類　円茎鏃（第97図193～197　PL.84）

基部が弧状となる、いわゆる円茎鏃である。計24点を数え、その内の５点を図掲載し、10点を写真のみの掲載とした。図掲載したもののうち、193・195は加工が粗く、197の左側縁は未加工のままの状態にある。なお、写真のみの掲載資料には未製品も含まれている。

使用されている石材は、黒曜石の９点、次いで珪質頁岩が５点、黒色頁岩が３点、流紋岩、赤碧玉、褐色碧玉がそれぞれ２点ずつ、そしてチャートが１点ある。

Ⅴ類　形態不明・未製品

本類は、器体の欠損等により形状分類のできなかったものを形態不明とし、さらに石鏃の未製品をも含めた。図および写真のみ共に、掲載していない。その数は計197点を数え、その内の127点が先端部の欠損等による形態不明品で、70点が未製品である。なお、この類の未製品の状態は、剥片周囲からの押圧剥離が施されるものの、その製作工程の過程において器体の厚み除去を諦めたもの、剥離調整の未発展なもの、器体が整わないもの等々の理由から破棄されたもの。あるいは、製作途中で破損したものと考えられる。

使用されている石材は、やはり黒曜石が圧倒的に多く152点、次いで黒色頁岩が15点、チャート、珪質頁岩、赤碧玉がそれぞれ7点ずつ、流紋岩が４点、他に玉髄が２点、硬質頁岩、石英、褐色碧玉がそれぞれ１点ずつという状況である。

以上、石鏃について記してきたが、極小石鏃が比較的多いことも含め、その形態はバラエティーに富んでいる状態であり、形態分類にも再検討を要する感がある。また、石材の利用度では、Ⅰ～Ⅴ類689点中の内、黒曜石が503点と圧倒的で全体の７割以上を占め、次いで黒色頁岩49点と珪質頁岩42点を合わせた頁岩類、流紋岩の38点、チャートの22点と続き、赤碧玉や褐色碧玉といった碧玉類が計22点となっており、その使用頻度は後述の二次加工剥片や剥片にみる黒曜石の圧倒的な数量と同様な結果となっている。

２.石匙（第97図208・209　第22表　PL.84）

出土した石匙は、僅かに２点を数えるのみである。208はチャート製で、縦長剥片を素材に両側縁を加工し、上端に摘み部を作出しており、形状は縦型石匙に近い。209は黒色頁岩製で、小型な幅広剥片を素材に、上端に摘み部を作出し、刃部は弧状を呈する様に加工する。

３.石錐（第97～99図210～234　第22表　PL.84・85）

出土した石錐は、比較的多く計101点を数える。その内の25点を図掲載し、35点を写真のみの掲載とした。そうした石鏃の形状には、正三角形状に近い三角鏃、二等辺三角形状となる長身鏃とがあり、茎部の形状からは無茎鏃と有茎鏃の両者があり、さらに基部形状からは凹基、平基、凸基、そして円基となるものがある。

さらには小型品等も多く目につき、バラエティーに富む。本報告では、これらの特徴的な形状から以下のように形態分類し、記述する。

２類

摘み部は器体の折断により作出するのみで目立つ加工は無く、先端の機能部を主に加工を加えたもので、２点を図掲載した。210は珪質頁岩製で、剥片稜部を器軸に両側縁を加工するが、先端部は破損。211は黒色頁岩製で、先端部の加工を丁寧に施すが、先端部摩耗痕は確認できない。

３類

器体形状が棒状ないし柳葉形状を呈し、短いものから長いものまであり、18点を図掲載した。212～215は短く小型なタイプで、いずれも黒曜石製で機能部側縁に摩耗痕が確認できる。中型タイプとしては216～222があり、216・217・219は黒曜石製、218は黒色頁岩製、220～222は珪質頁岩製であり、216・219・221・222には側縁摩耗が見られず、218では下端となる先端が著しく摩耗し、217・220の上下両端の側縁・先端部が激しく摩耗痕が認められる。さらに、長いタイプとして223～229がある。石材をみると、223・229は黒曜石製、224・226～228は黒色頁岩製、225は珪質頁岩製である。摩耗の状態は、225・227～229の機能部先端に弱く摩耗が広がり、226は先端部が微妙に摩耗が確認できる。

４類

素材の剥片形状をそのままに、機能部となる先端を作出するもので、５点を図掲載した。石材をみると、230・233・234は黒曜石製で、231は黒色頁岩製、232は赤碧玉製である。摩耗の状態は、231の先端部が弱く摩耗しているのみ。

以上、図掲載の石錐について記してきたが、石錐全体(計101点)からすれば、１類が１点、２類９点、３類40点、４類46点、そして分類不明な未製品が５点となっている。また、石材の利用度では、黒曜石が60点と最も多く、次いで黒色頁岩20点、珪質頁岩９点と続き、他にチャート、赤碧玉、流紋岩、玉髄といった状態でる。傾向としては、小型な石錐に黒曜石が多く使用されている感がある。

４.スクレイパー

素材となる剥片の側縁ないし周縁に、連続的な加工を施すものであるが、図掲載および写真のみの掲載もしていない。その数は、計52点を数える。石材別では、黒曜石が23点と最も多く、次いで黒色頁岩が15点と続き、他に珪質頁岩４点、黒色安山岩３点、流紋岩と細粒輝石安山岩がそれぞれ２点ずつ、そしてチャート、変質安山岩、粗粒輝石安山岩がそれぞれ１ずつとなっている。

５.楔形石器(第99図270　第22表　PL.85)

上下両端からの両極剥離をもつものであるが、270の１点を確認した。黒色頁岩製で、表裏面には縦位の長い剥離痕が並び、断面が紡錘形を呈する。

６.打製石斧

(第99・100図271～290　第22表　PL.85・86)

計67点を数えるが、その内の20点を図掲載し、８点を写真のみでの掲載とした。ここでは打製石斧の形状から、短冊形ないし撥形、杓文字形に大きく分類し、記述する。

短冊形ないし撥形

271～285の15点が本形状をなす。使用される石材をみると、271・280は変質安山岩製、272・277・281・282は黒色頁岩製、273～275・278・279・283・285は細粒輝石安山岩製、276は粗粒輝石安山岩製、284は珪質頁岩製である。刃部の摩耗が認められるのは273～276・279・285であり、283は大振りの石斧である。

杓文字形

286～290の５点が本形状をなす。使用される石材をみると、286・290は細粒輝石安山岩製、287・288は黒色頁岩製、289は粗粒輝石安山岩製である。刃部の摩耗が認められるのは286～288・290であり、289はやや大振りで石鍬の可能性もある。

以上、図掲載の打製石斧について記してきたが、打

製石斧全体(計67点)からすれば、短冊形ないし撥形に類するのが19点、杓文字形類に類するのが７点、そして分類不明な欠損品が41点となっている。また、石材の利用度では、細粒輝石安山岩が26点と最も多く、次いで黒色頁岩13点、粗粒輝石安山岩12点、珪質頁岩４点と続き、他にホルンフェルス、変質安山岩、黒色安山岩、灰色安山岩、頁岩、デイサイトといった石材がある。

７.石鍬(第100図298　第22表　PL.86)

計３点と少ないが、その内の１点を298として図掲載しただけである。細粒輝石安山岩製で、棒状の着柄部に「ハ」字状に開いた機能部を接続させる形状をとり、杓文字に近い。刃部の摩耗等は認められない。他の２点の石材は、黒色頁岩と細粒輝石安山岩である。

８.磨製石斧(第100図300～307　第22表　PL.87)

計27点を数えるが、その内の８点を図掲載し、３点を写真のみ掲載とした。300は最も小型な磨製石斧で、僅かに頭部を欠くが長さ3.6cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。変質蛇紋岩製で、表面刃部側は刃部並行に研磨し、中央付近は斜め縦位方向に研磨。裏面側は斜め横位方向に研磨する。もう１点の小形磨製石斧として、長さ6.4cm、幅4.2cm、厚さ1.2cmを測る304がある。粗粒輝石安山岩製で、全面研磨されているが、被熱して表皮が剥落する。そして、小型品以外では、その多くが欠損品で、完形品は少なく僅か２点のみである。その１点が301であり、変玄武岩製で、敲打後に表裏面とも刃部・体部を研磨するが、頭部には敲打・剥離痕が集中する。敲石とした可能性もある。もう１点が303であり、変輝緑岩製で、刃部の破損後に再生して使用している。また、破損品では、下半部を欠く変質蛇紋岩製の302、頭部を欠く305・307が変玄武岩製、306が変質安山岩製であり、305は被熱している。306の破損面は広く摩耗している。

図掲載以外の使用石材では、変玄武岩製６点、変質安山岩製４点、粗粒輝石安山岩製４点、変輝緑岩製１点、蛇紋岩１点、頁岩１点、デイサイト１点、変はんれい岩１点となっている。

９.礫器(第22表　PL.87)

礫器は計４点出土しているが、図掲載は無く、写真のみの掲載で311とした１点だけである。この311はひん岩製の棒状楕円礫を素材としたものであるが、他の３点の石材は粗粒輝石安山岩製が２点、珪質頁岩製が１点である。

10.二次加工剥片

素材となる小型剥片の側縁ないし周縁に、僅かな加工痕を有するものであるが、図掲載および写真のみの掲載もしていない。しかし、その数は多く計190点を数える。石材別では、圧倒的に黒曜石製が多く168点と９割弱を占め、他に黒色頁岩製７点、珪質頁岩製５点、細粒輝石安山岩製と赤碧玉製がそれぞれ２点ずつ、さらに硬質頁岩、流紋岩、石英閃緑岩、変質安山岩、粗粒輝石安山岩がそれぞれ１ずつとなっている。

11.剥片

出土した剥片は極めて多く、その総数は24204点を数える。図や写真といった資料化は行っていないが、石材分類からは、黒曜石が15178点と最も多く、次いで黒色頁岩が2169点、赤碧玉1765点、粗粒輝石安山岩1521点、珪質頁岩650点、流紋岩522点、細粒輝石安山岩520点、黒色安山岩407点、灰色安山岩386点、チャート344点、褐色碧玉206点、硬質頁岩161点、変質安山岩112点、玉髄78点、泥岩41点、葉蠟石20点、珪質変質岩18点、石英閃緑岩15点、碧玉15点、雲母石英片岩11点、デイサイト10点、頁岩９点、凝灰質砂岩８点、ひん岩７点、赤鉄鉱５点、デイサイト凝灰岩４点、石英４点、緑色片岩４点、砂岩３点、溶結凝灰岩３点、変質デイサイト２点、ホルンフェルス２点、点紋頁岩１点、変玄武岩１点、牛伏砂岩１点、珪化木１点の順となっている。

12.石核(第22表　PL.87)

出土した石核も比較的多く、計130点を数える。しかし、図掲載は無く、15点を写真のみの掲載とした。その内、盤状剥片を素材とする石核に312・313・315・319・324・326、大形剥片を素材とする石核に322、分割礫を素材とする石核には323・325、賽子状

の石核としては314・317・321、厚板状の石核として318、拳程度の原礫を用いた320と、それぞれの石核素材に違いがある。

石材別では、黒曜石が44点と最も多く、次いで赤碧玉20点、細粒輝石安山岩16点、黒色頁岩14点、流紋岩、変質安山岩、粗粒輝石安山岩がそれぞれ７点ずつ、珪質頁岩６点、褐色碧玉５点、チャート３点、黒色安山岩１点となっている。

13.凹石（第101図327～341　第22表　PL.87・88）

出土した凹石は多く、計127点を数える。その内の15点を図掲載し、15点を写真のみ掲載とした。その特徴をみると、大きさ的には拳大前後の礫を素材とするものが多く、凹みの状態は比較的浅いものが多い中、330や331のように深い凹みをもつ例もあるが数的には少ない。片面のみに凹みをもつものや、表裏両面にもつもの、或いは330のように側面にももつ例もある。また、表裏面を研磨するものも多く、329や330・333・334といった側縁にも研磨を施すれいもある。さらに、側面ないし小口部に敲打痕が広がる327や332・333・335・341、敲打による剥離痕をもつものもある。

これら凹石の石材をみてみると、計127点中の121点が粗粒輝石安山岩で、凹石の大方を占める。他には石英閃緑岩が３点、デイサイト、ひん岩、珪質変質岩がそれぞれ１点ずつとなっている。

14.磨石（第102・103図361～411　第22表　PL.89～91）

出土した磨石は礫石器の中では最も多く、計390点を数える。その内の22点を図掲載し、27点を写真のみ掲載とした。その形状や研磨の状態には、幾つかの特徴的な差異が認められる。先ず329であるが、長さ5.2㎝、幅2.1㎝、厚さ1.3㎝、重さ24.2ｇを測り、小形な偏平礫を用いたもので、礫の下端側に線条痕と摩耗痕が広がり、上半部は尖りぎみとなり、変質安山岩製である。先述した２号土坑出土の石製研磨具とした第16図15と同類と考えられ、他の磨石とは区別される。次に小形な偏平礫を用い、円形に全体を研磨した類で、弱い線条痕がある361・363・365・367・369・372・375等がそれにあたり、石製研磨具の可能性をもつ。通常の円礫ないし扁平礫を用いた磨石には、全面を球状に研磨するもの、素材礫の形状に近いままに全面に研磨がおよぶもの、側面ないし小口部に敲打痕を有するものもある。さらに、特異な磨面をもつものとして385と393とがある。385は円礫を分割し、分割面を表面に平坦に研磨されたものである。393は棒状礫を素材に、礫面全面に線条痕を伴い、上端にも打痕と摩耗痕が著しく、下端の折れ面には敲打と研磨・摩耗を確認できる。

これら磨石の石材をみてみると、329を除く計389点中の367点が粗粒輝石安山岩で、他には石英閃緑岩、変質安山岩がそれぞれ６点ずつ、デイサイト３点、細粒輝石安山岩、珪質変質岩２点、チャート、ひん岩、砂岩、溶結凝灰岩、雲母石英片岩がそれぞれ１点ずつとなっている。やはり、先の凹石と同様に、粗粒輝石安山岩が磨石の大方を占めている。

15.敲石（第103図412～417　第22表　PL.91）

出土した敲石も多く、計121点を数える。その内の７点を図掲載し、６点を写真のみ掲載とした。その特徴をみると、大きさ的には拳大前後の礫を素材とし、410や411のように表裏面に研磨を施すもの。413・414のごとく棒状礫を素材にするもの。また、特異な例として412がある。412は大型剥片を素材に、左側縁は形状を整える剥離を要し、右側縁中央に敲打による激しく潰れた痕跡が残っている。

これら凹石の石材をみてみると、計127点中の104点が粗粒輝石安山岩で、敲石の大方を占める。他には変質安山岩６点、石英閃緑岩５点、細粒輝石安山岩２点、珪質頁岩、流紋岩、砂岩、緑色片岩がそれぞれ１点ずつとなっている。

16.台石（第104図425～428　第22表　PL.91・92）

出土した台石も多く、計101点を数える。その内の４点を図掲載し、９点を写真のみ掲載とした。その特徴をみると、大型な扁平礫を素材とするものが多く、中には六角形状をの角礫を使用する426、厚い盤状礫を用いた427もある。台石の表面の平坦面は、程度の差はあるが強く摩耗し、光沢面が広がる。

これらの石材をみると、計101点中の95点が粗粒輝石安山岩で､台石の大方を占める。他には石英閃緑岩、

ひん岩、雲母石英片岩がある。

17.砥石

（第103・105図424・438～444　第22表　PL.91・93）

出土した砥石は計34点を数える。その内の９点を図掲載し、１点を写真のみ掲載とした。その特徴をみると、438は全体を研磨することで薄い二等辺三角形状となるもので、牛伏砂岩を用いたもの。439は珪質変質岩製で、表裏面と両側面を砥面とした例である。441は盤状礫を素材にしたもので、破損品であるが表面は著しく摩耗して光沢面となり、線条痕も観察できる。また、440・443～445は表面中央に浅い溝状の砥面をもつのが特徴的ものである。それら以外にも、大型の楕円礫を用いた、砥石様の平滑面をもつものもある。

これらの石材をみると、粗粒輝石安山岩が22点と多く、他に細粒輝石安山岩、砂岩、凝灰質砂岩がそれぞれ３点ずつ、さらには変質安山岩、牛伏砂岩（438）、珪質変質岩（439）がある。

18.石皿

（第105・106図446～449　第22表　PL.93・94）

出土した石皿は計14点を数える。その内の５点を図掲載し、５点を写真のみ掲載とした。その特徴をみると、446や448は厚い盤状礫を素材にしたもので、大型な偏平楕円礫を用いたものに447・449、そして大型の亜円礫を用いた450等がある。いずれも表面が研磨され、浅く皿状に窪む。

これらの石材は、14点全てが粗粒輝石安山岩を使用している。

19.多孔石（第22表　PL.95）

出土した多孔石は計６点を数える。その内、１点を写真のみ掲載した。456は、表面中央に孔５、側縁に孔２、裏面に孔６を有する。

これらの石材は、６点全てが粗粒輝石安山岩を使用している。

〈石製品類〉

６号溝から出土した石製品類も多く、器種としては石棒類（石棒・石剣・石刀）をはじめとし、石冠、垂飾りとなる各種玉類、そして石製品の未製品および素材剥片がある。時期的には、縄文時代晩期末葉から弥生時代前期前半にかけての資料である。

なお、掲載にあたっては、なるべく製品類を図化し、未製品類については代表的なものに絞って図化と写真のみでの掲載に努めた。

１.石棒類（第106・107図457～475　第22表　PL.95）

出土した石棒類は計26点あるが、石棒、石剣、石刀の各種がある。

ａ.石棒

16点が出土している。この内、457～465の９点を図掲載し、466の１点を写真のみの掲載とした。457～459は頭部である。460～464は断面が円形となる体部で、465・466は先端部である。

16点の使用石材は、順に緑色片岩８点、黒色片岩４点、変玄武岩が３点、頁岩１点である。

ｂ.石剣

８点が出土している。これらは、467～474として図掲載した。467～471は頭部で、467の頭端部表裏面にはＸ字状の刻線文様が施され、体部断面は菱形となる。471の頭部は、体部よりやや幅狭な形状となる。472・474は断面が菱形となる体部で、472は先端に近い部分。473は薄身となる先端部である。

８点の使用石材は、順に変玄武岩４点、緑色片岩３点、層状珪頁岩１点である。

なお、467の出土状態はPL.33－６で、６号溝の上位からの出土である。472はPL.16－４、PL.33－７がその出土状態で、10号配石付近に散乱する石と共に出土した石剣である。

ｃ.石刀

２点が出土している。この内、475として１点を図掲載した。475は先端部で、断面が楔状となり、片刃の形状をとる。石材は珪質準片岩である。掲載していないもう１点は、断面が楔状となる片刃の体部で、石

材は緑色片岩である。

２.石冠(第107図476　第22表　PL.95)

476の１点が出土している。粗粒輝石安山岩製で、長さ4.2㎝の三角柱状を呈し、頂部辺は中央がやや高い弧状となる。被熱して、ヒビ割れが生じている。

３.玉類(垂飾り)(第108図　第22表　PL.96)

器体に孔をもつ所謂垂飾りを、玉類として纏めた。その形状から、大きく１～３類に分別される。

玉１類(第108図477～496)

所謂小玉であるが、その形状から１-Ａと１-Ｂに２細分することができる。

１-Ａ

厚みがなく、上下面が平坦となり、側面が直線的な形状となるもので、その形状は臼玉に近い。477～488の計12点が出土している。大きさも大小あり、径0.6㎝という小さいもの、大きいものでは径1.0㎝のものまである。また、厚みも同様に0.2～0.5㎝を測る。

なお、石材をみると全て蛇紋岩せいであり、径の同様なものの観察からは、穿孔を終え、ある程度の研磨後の長い玉素材を、分割により作製し、最終的な個々の仕上げ研磨（分割した上下面）を施したことが想定される。

１-Ｂ

厚みがあり、側面が膨らんで球胴状をなすもの。489～496の計８点が出土している。先の１-Ａに比べ、全体に大きい。489には貫通した孔の脇に未穿孔の痕跡を有し、この形状の玉が個々に製作されたことを物語っている。また、494の穿孔のあり方は、上下からの両穿孔である。他にも穿孔形状を観察すると、両穿孔のものは多い。

石材をみると、蛇紋岩製には489～492、葉蠟石製には493～496と、２種類の石材である。

なお、先述した第93図３は、この玉１-Ｂ類に形状が近似する土製品であり、その大きさからしても明らかに模倣品であることが解る。

玉２類(第108図498～503)

所謂管玉であり、498～503の計５点が出土している。その中で最も細身なのが498で、長さ0.8㎝、幅0.4㎝を測り、碧玉製で、色調は淡い緑色をなし、全面光沢に富む。孔も細く、径２㎜弱の孔を穿つ。499は、長さ0.8㎝と短く小さいが、498に比べると外径は太く、両面穿孔で孔径も６㎜強と大きい。碧玉製で、色調は緑色をなし、光沢が強い。他の４点はほぼ同様な大きさで、長さ1.6㎝前後、外径も0.7㎝前後を測り、両面穿孔である。502の穿孔内壁には、螺旋状の線条痕が確認できる。

石材をみると、500は変質流紋岩製、501は葉蠟石製、502・503は蛇紋岩製で、いずれも緑色系の色調をなす。

玉３類(第108図504～510)

先述の玉１・２類とは異なる形状で、穿孔を有するものを本類として扱った。そのため形状は様々で、６点を図掲載した。504は葉蠟石製で、灰白色をなし、三角形状を呈した粗い研磨を施すもので、両面穿孔。但し、穿孔面が平行でないことから、孔は「く」字状となる。505と506は、平玉様となる同形状の穿孔を有するもので、いずれも石材は不明。507は葉蠟石製で、両面穿孔の玉であるが、かなり破損して詳細は不明。509は変質蛇紋岩製で、Ｃ字状となる勾玉様を呈し。内径側に刻みを３ヵ所もち、上下両端の刻みが深く、中央の刻みは浅い。径0.6㎝ほどの両側穿孔を施し、孔は著しく紐擦れる。510は葉蠟石製で、上端側に明瞭な括れ部をもつ。上面は平坦面となり、下方は多面構成で、下方中央に両側から径0.5㎝ほどの穿孔を有する。

以上、これら玉類の出土状況は、PL.33－10～14からも解るように、それぞれ単独出土がほとんどであり、単体での使用の可能性が高い。

４.未製品(第108図511～515　PL.96)

玉類の未製品である。所謂加工段階のもので、粗割によって小型の玉素材となるもの、表面の研磨段階にあるもの、穿孔段階にあるもの、最終的な形状整形段階にあるもの等を扱った。計48点を数えるが、５点を

図掲載し、８点を写真のみの掲載とした。

511は葉蠟石製で、「く」字状を呈するが、全体的に角張り、所謂勾玉とは異なる。径0.4㎝の片面穿孔を有するが、裏面側にも貫通していない未穿孔の痕跡がある。512は葉蠟石製で、各面に粗い研磨を施す程度とし、径0.4㎝ほどの孔が穿孔途中状態にある。513はヒスイ製で、透明感のある緑色をなし、方形状を呈して片面穿孔の孔を有する。514は葉蠟石製の剥片で、玉素材加工時の剥片か。515も葉蠟石製で、外縁は研磨され、側縁に細かい３本の刻みを有し、裏面は平坦となる。

なお、写真のみの掲載とした516～523は、研磨加工を進めた段階の素材や大型の素材剥片である。

これら未製品の石材は、その大方を碧玉と葉蠟石が占め、僅かに玉髄、珪質変質岩、雲母石英片岩、そしてヒスイ等がみられる。

５．その他（不明品）（第108図525～531　PL.96）

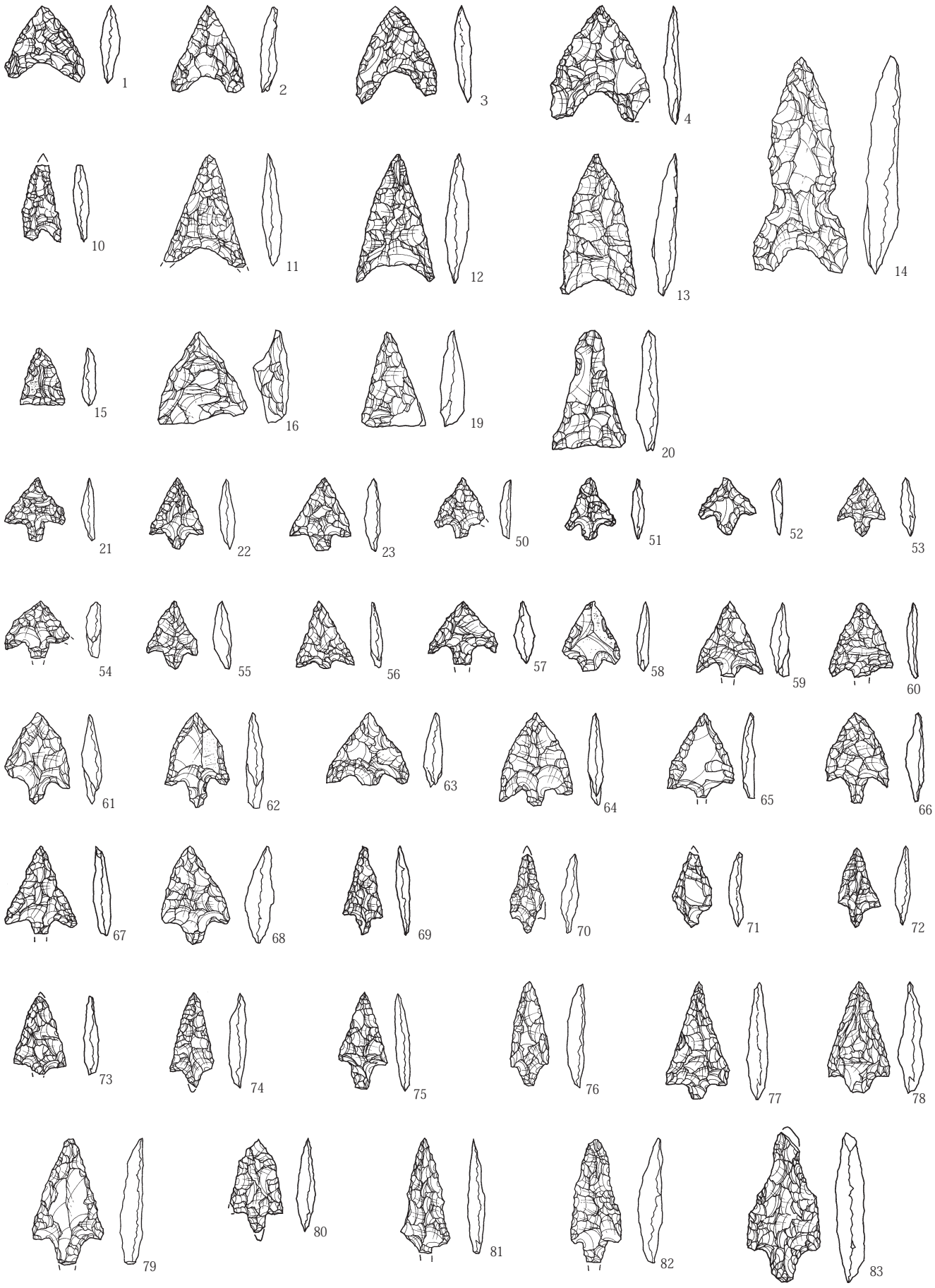
ここで扱ったものは、人工的な加工が加えられたかの判断が難しいものを纏めた。しかし、計18点の内、７点を写真のみの掲載とし、図掲載はしていない。

525は変質蛇紋岩製で、礫面に明瞭な線条痕が残こるもの。526は黒色片岩製の小型な棒状礫で、両端に複数の摩耗面をもつ。また、527・528は六角柱状を呈する薄い乳白色に近い水晶で、遺跡地以外の他地域からもたらされたものと考えられるが、その大きさは小さく、如何なる加工のために持ち込まれたかは疑問である。529は未穿孔の孔を有するもの。530は葉蠟石で、531は珪質頁岩であり、共に表面の光沢が強いものの、加工品であるかは不明。

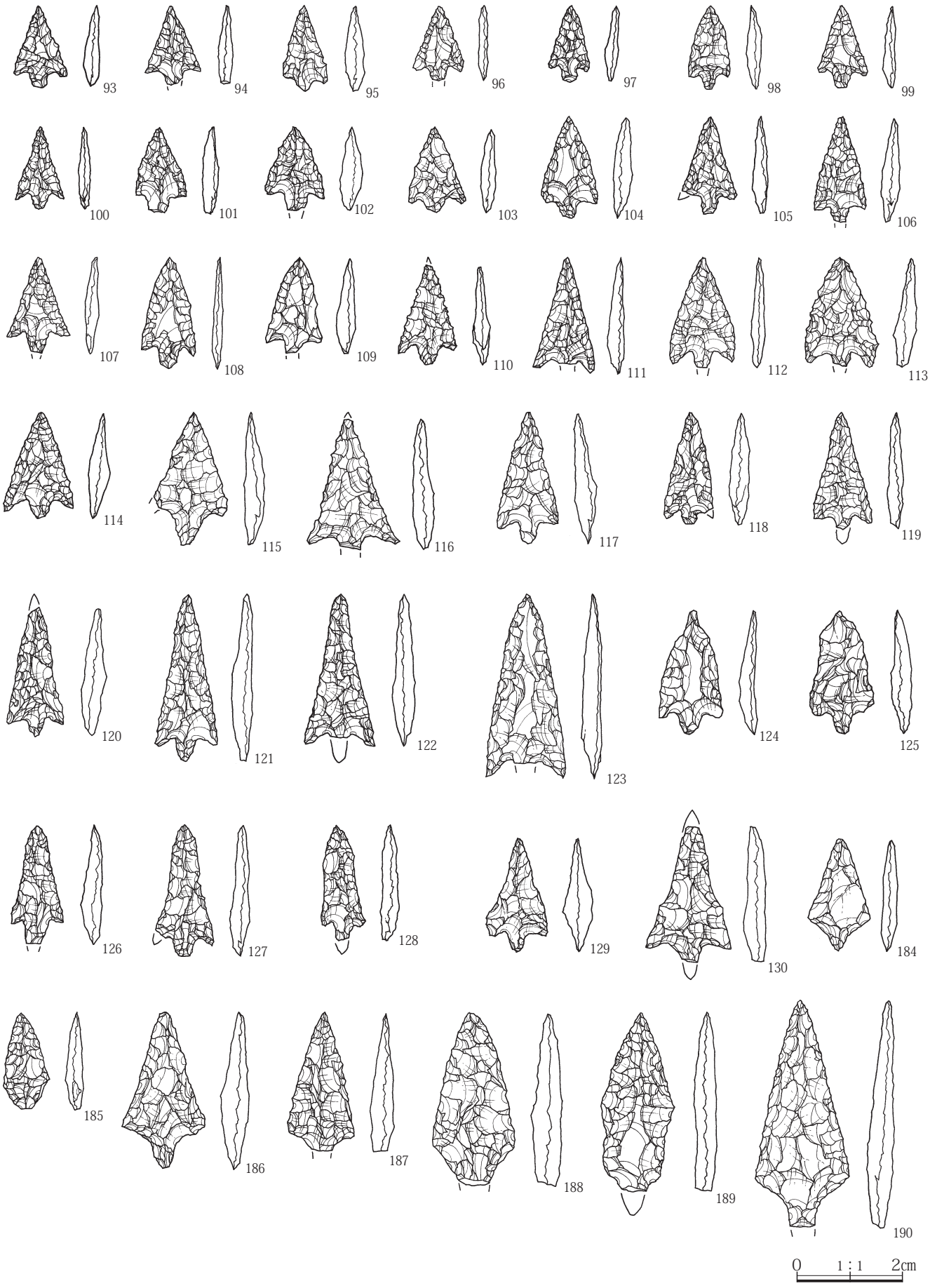
〈原石〉

石器や石製品製作のための素材となる原石は、本遺跡内においても多く持ち込まれている。本書への掲載はしていないが、石材には粗粒輝石安山岩や細粒輝石安山岩は勿論のこと、赤碧玉、流紋岩、チャート、珪質頁岩などがあり、その大きさも大小様々である。特に目に付く赤碧玉では、170ｇを測る拳大ぐらいが最も大きい。また、チャートも300ｇほどの原石が持ち込まれている。

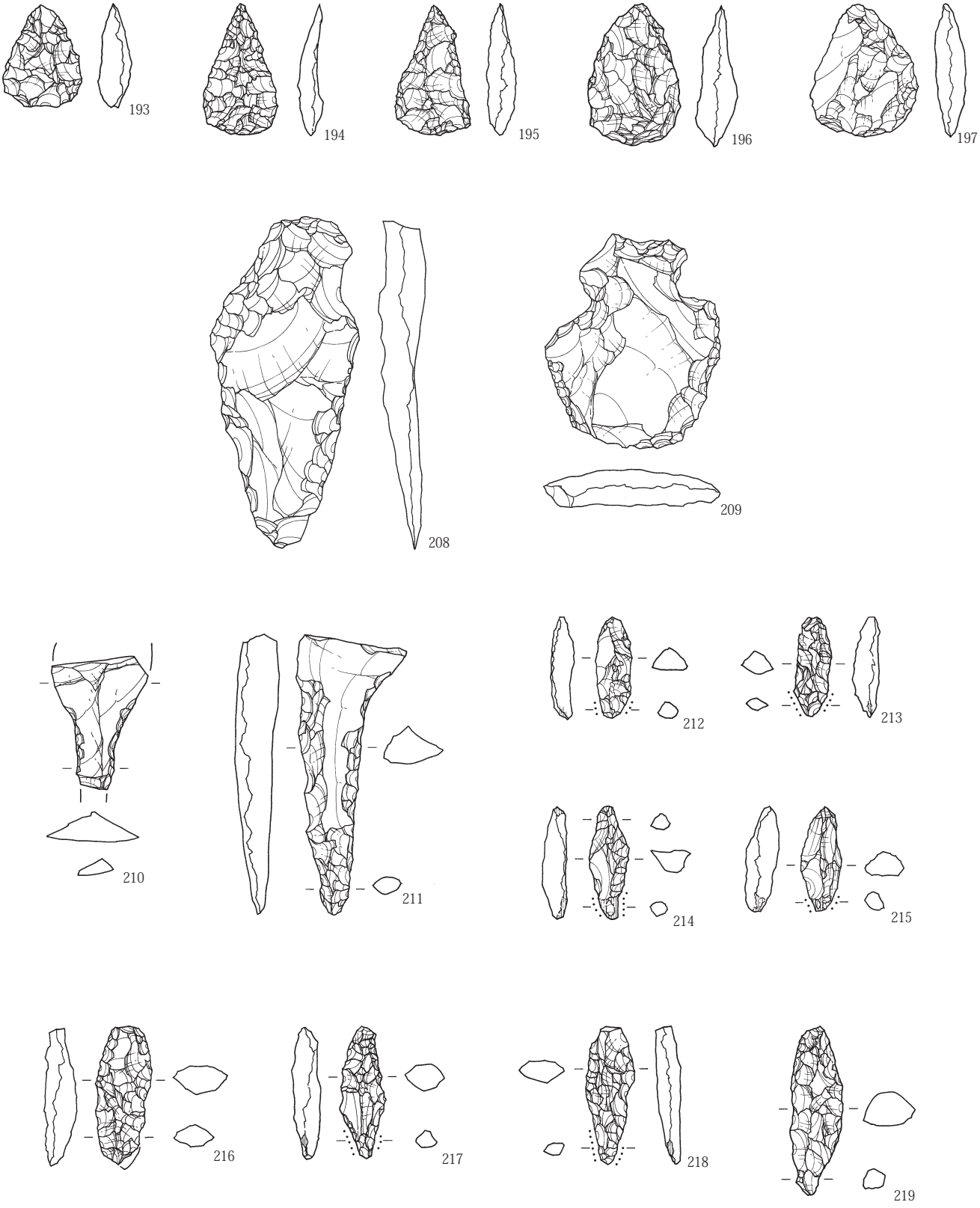
一方、石器石材となる黒曜石については、そのほとんどが製作途上の石核・剥片の状態にあり、原石としては出土していない。



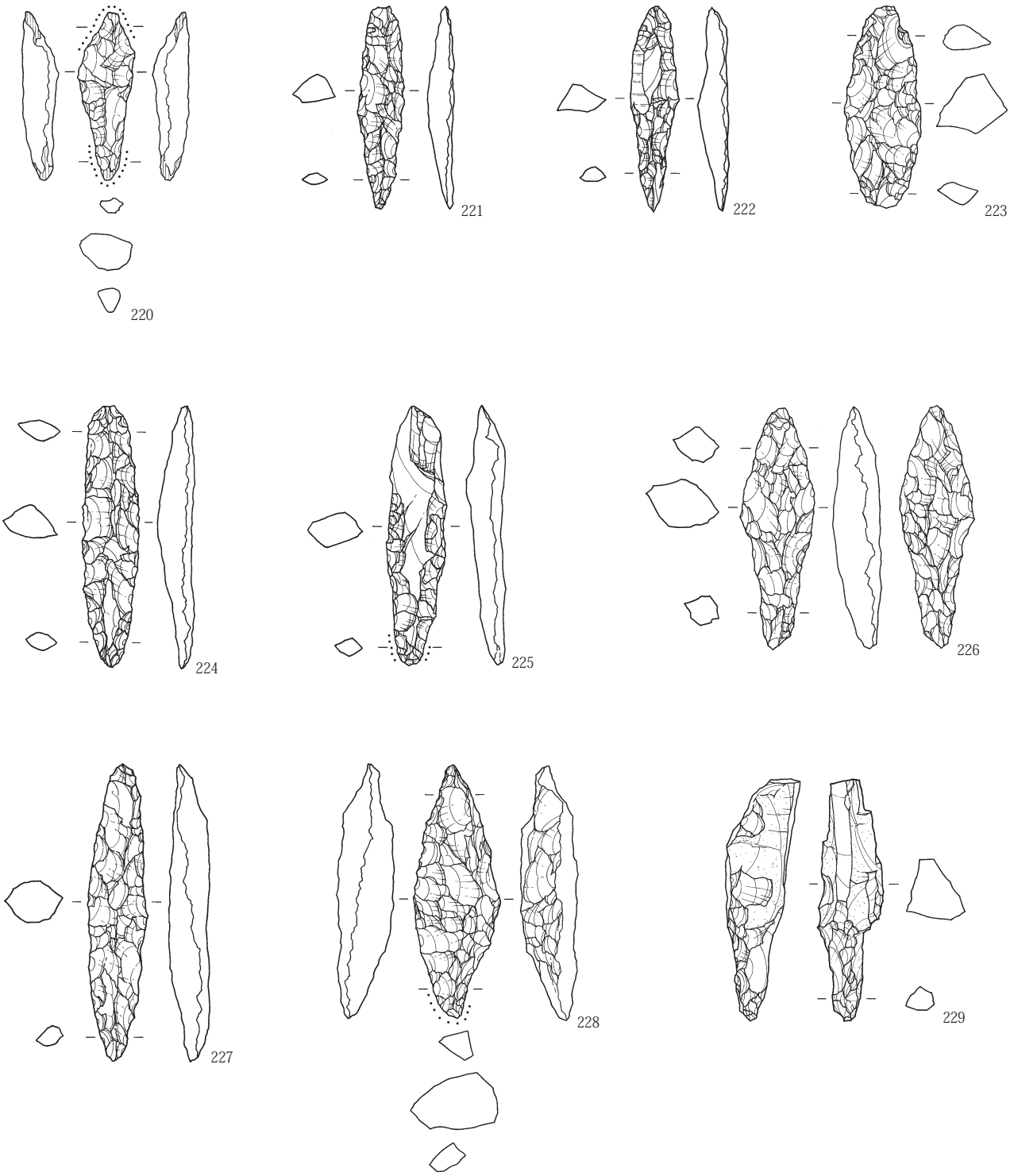
第95図　６号溝　出土石器　石鏃（１）



第96図　６号溝　出土石器　石鏃（２）



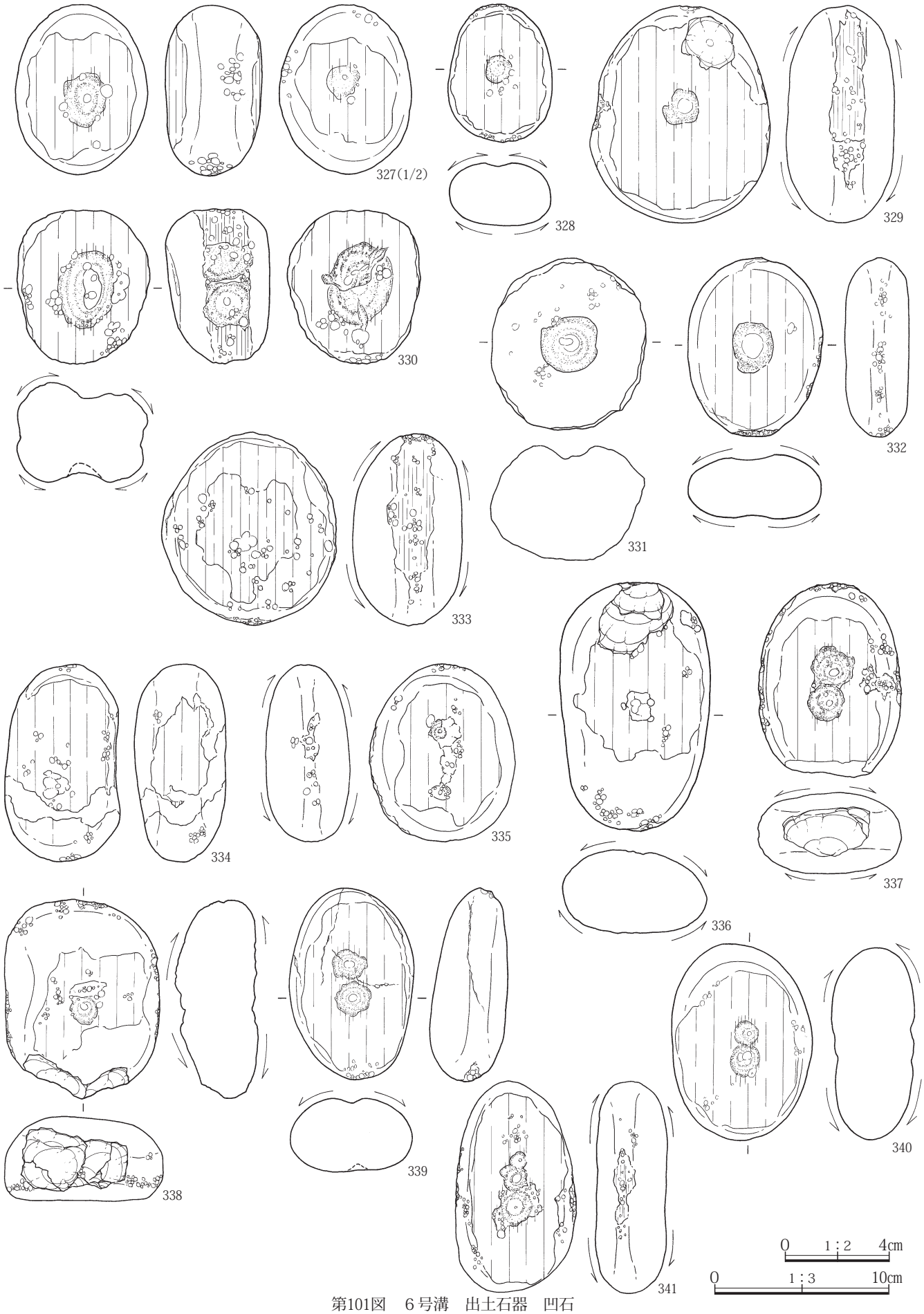
第97図　６号溝　出土石器　石鏃（３）、石匙、石錐（１）



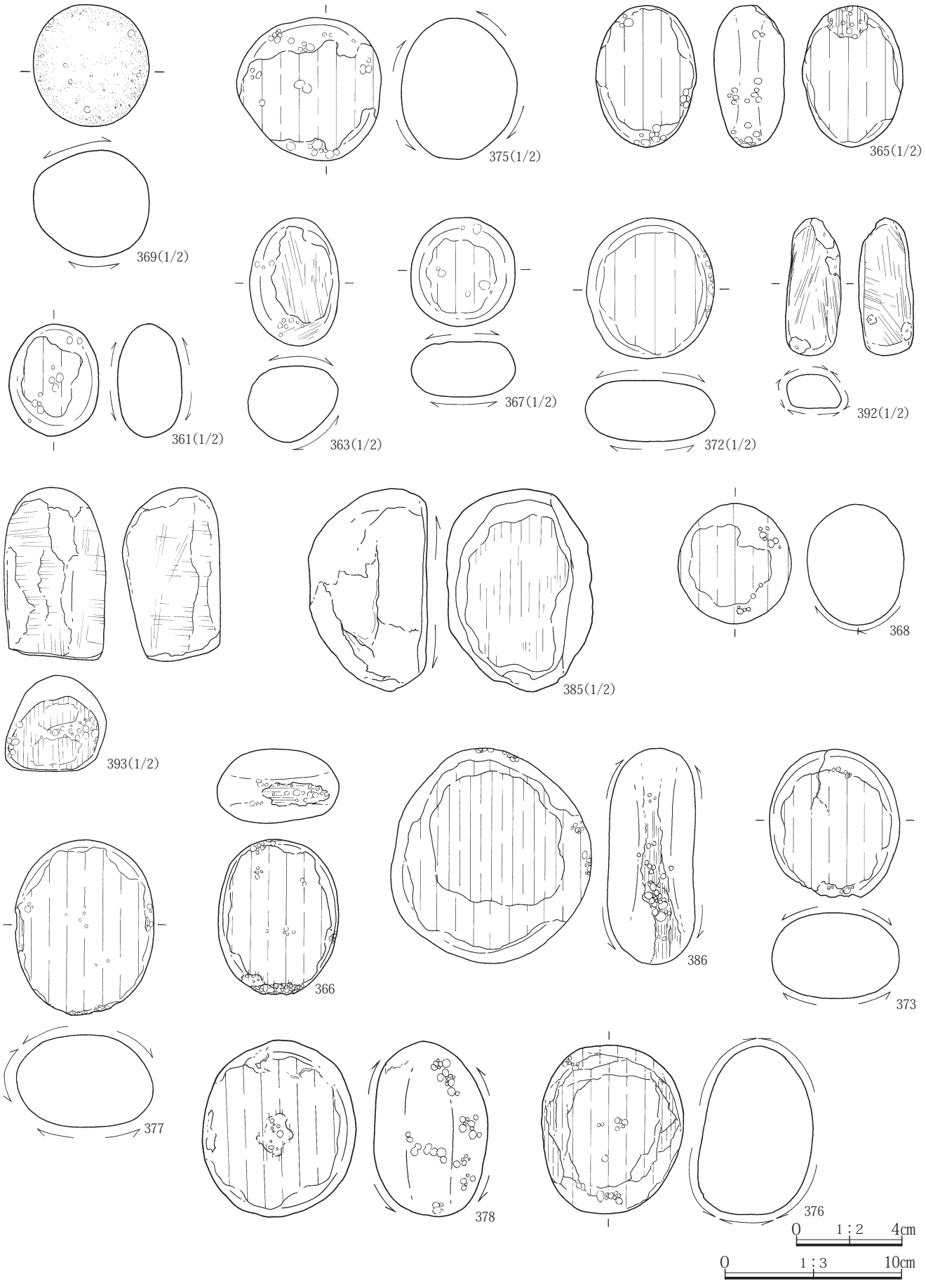
第98図　６号溝　出土石器　石錐（２）

第99図　６号溝　出土石器　石錐（３）、楔形石器、打製石斧（１）

第100図　６号溝　出土石器 打製石斧（２）、石鍬、磨製石斧

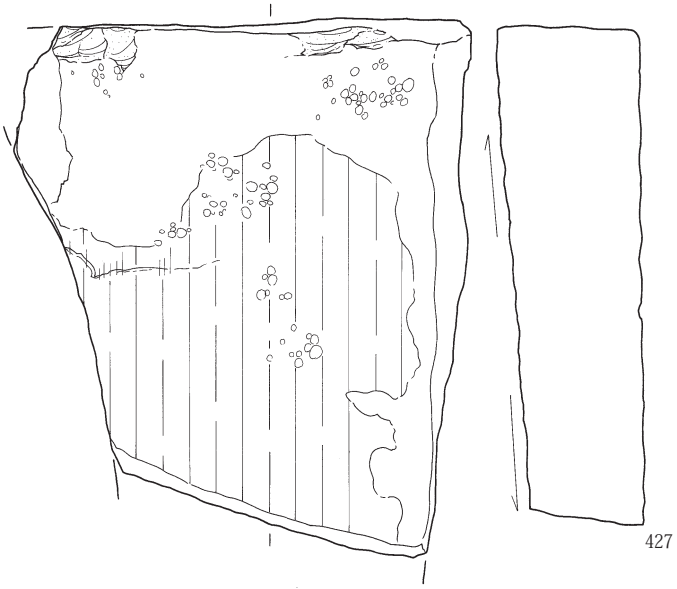


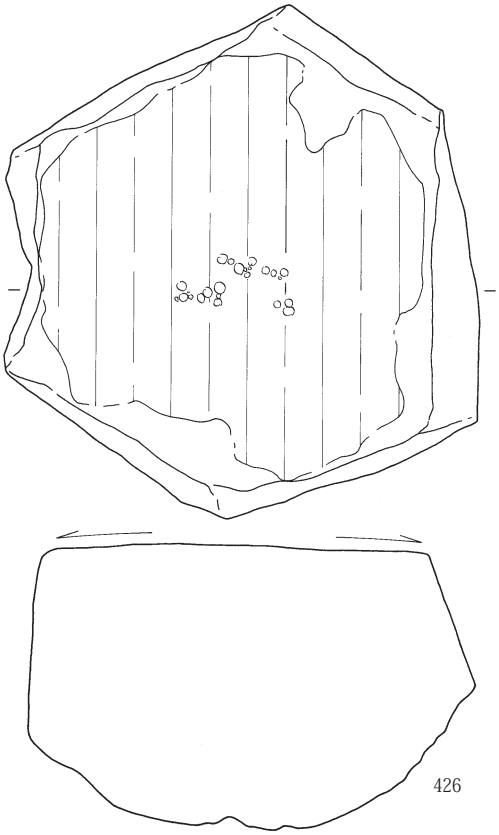
第101図　６号溝　出土石器　凹石

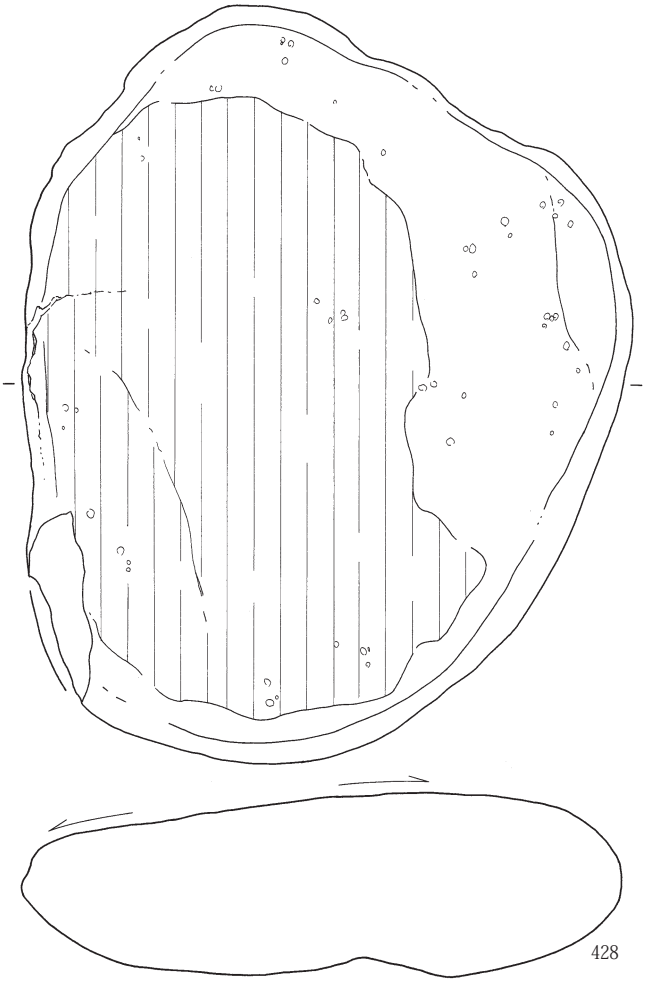


第102図　６号溝　出土石器　磨石（１）

第103図　６号溝　出土石器　磨石（２）、敲石、砥石（１）

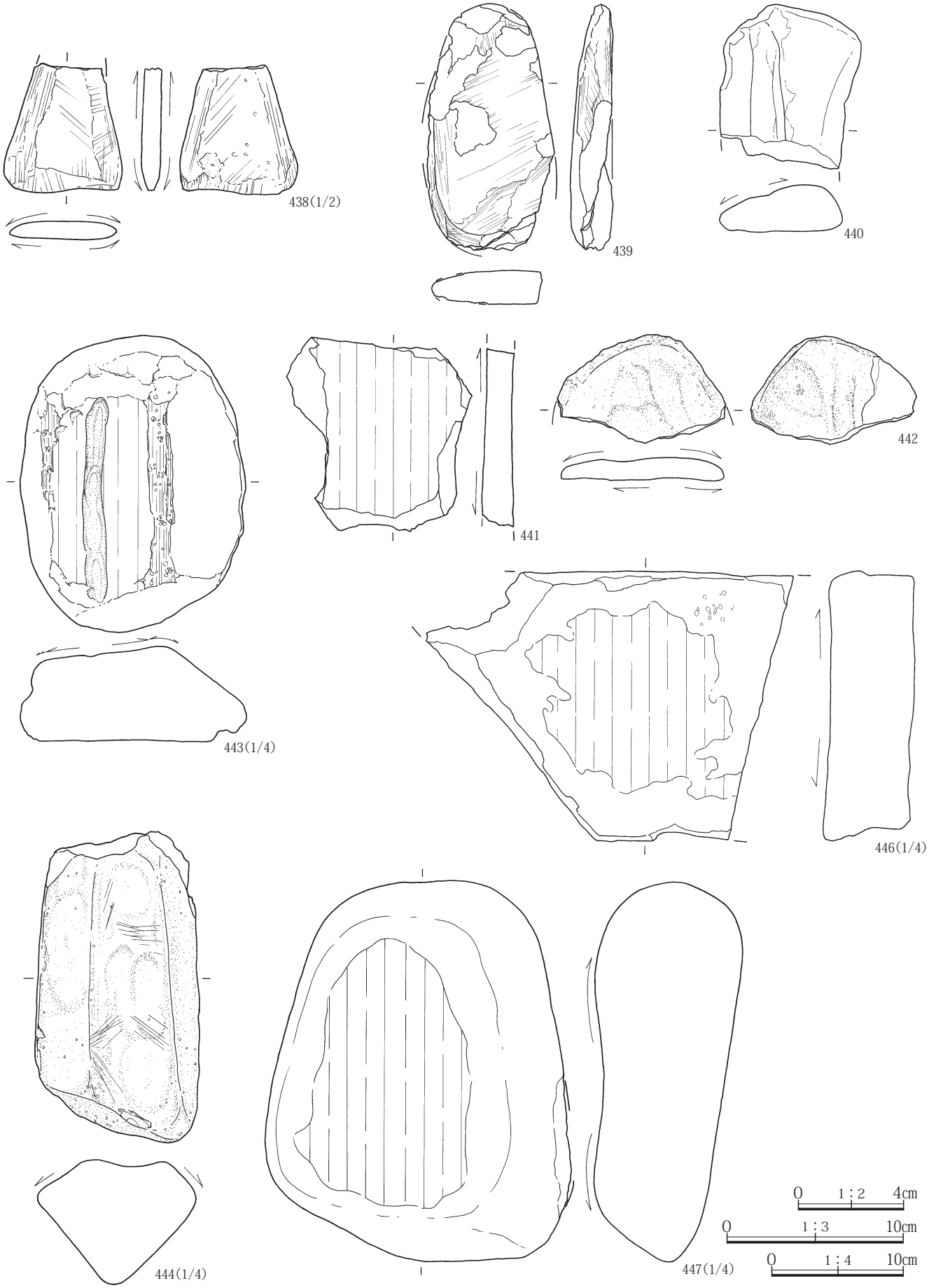




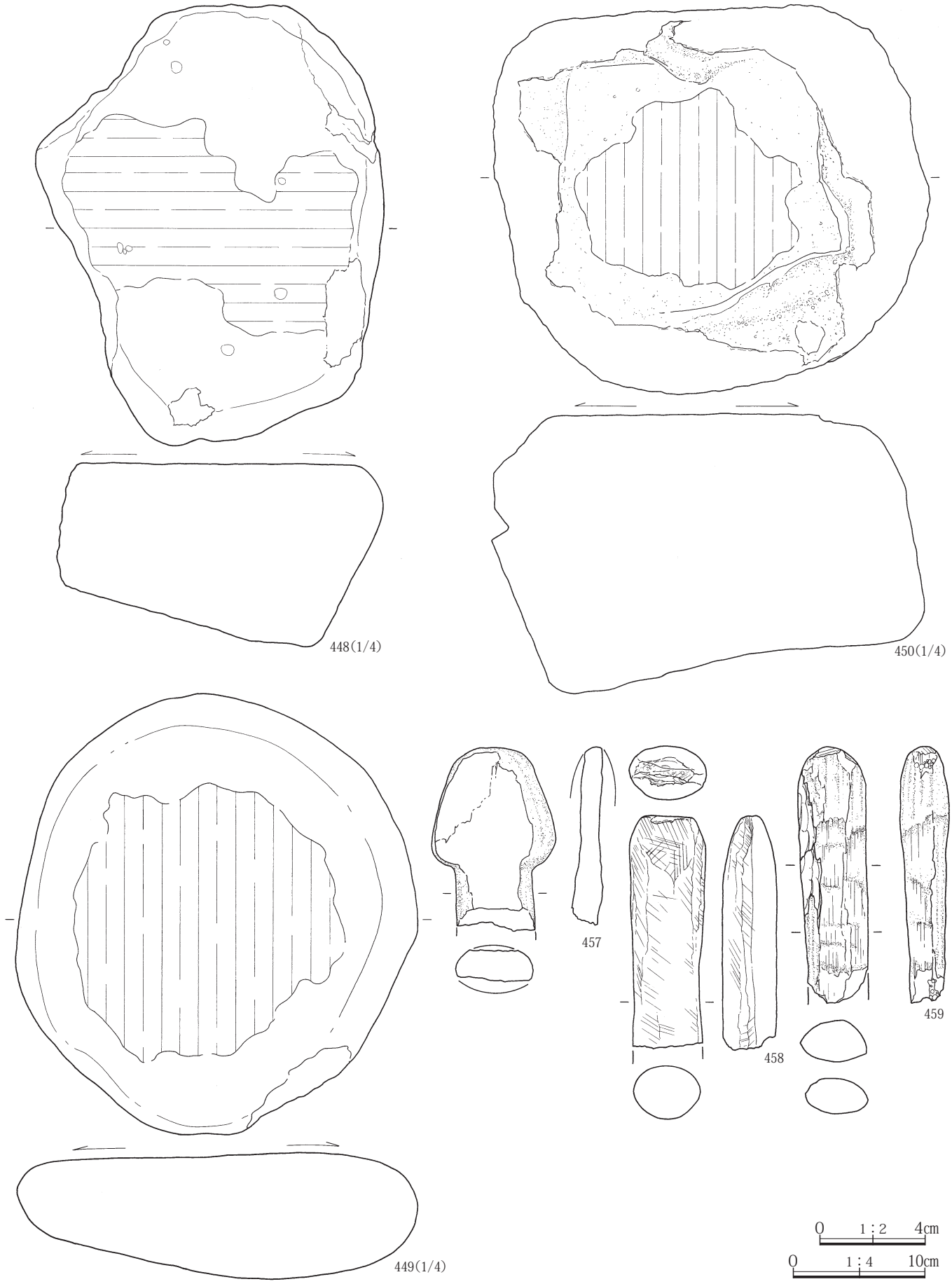


0　1：4　10cm

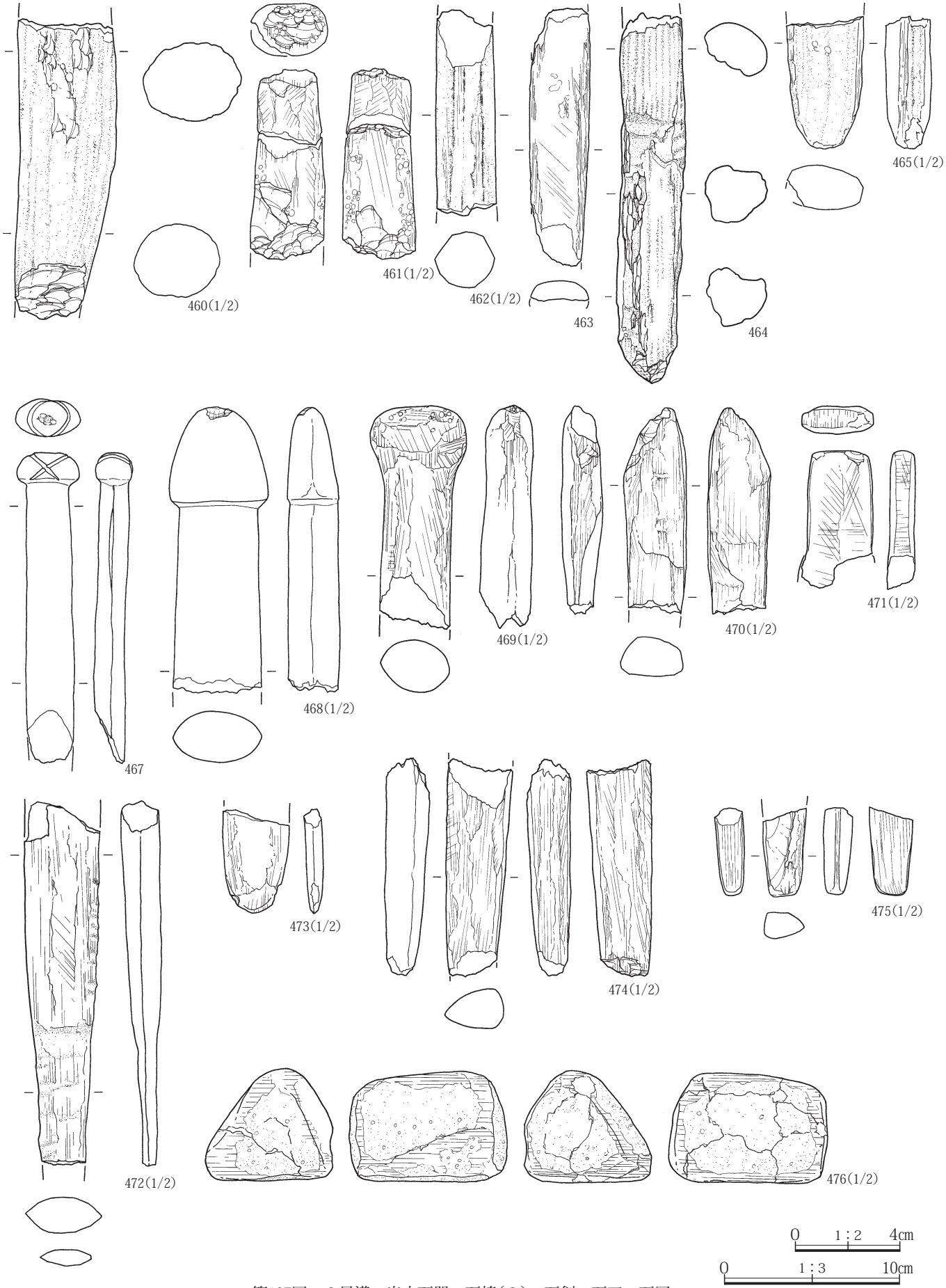
第104図　６号溝　出土石器　台石



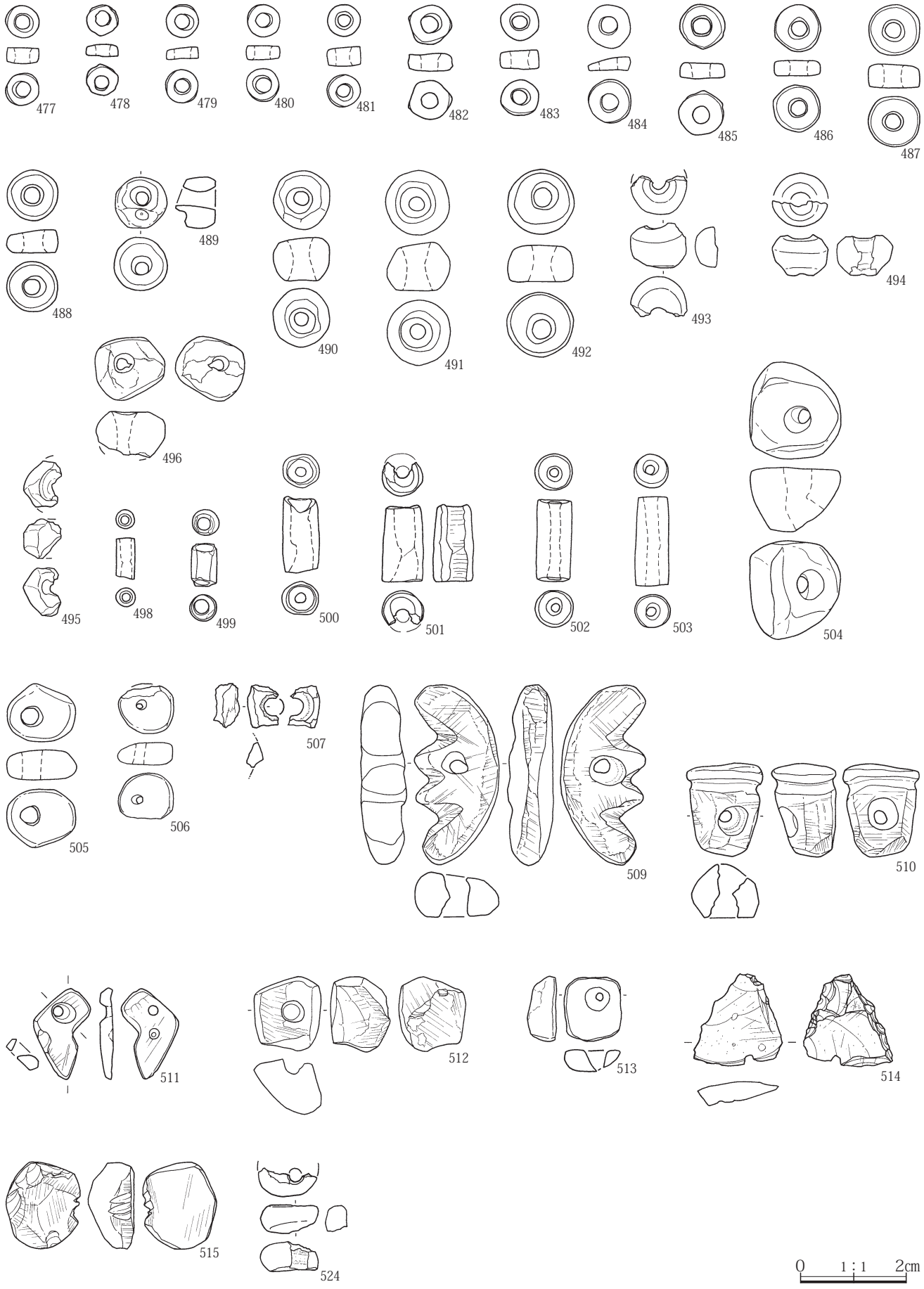
第105図　６号溝　出土石器　砥石（２）、石皿（１）



第106図　６号溝　出土石器　石皿（２）、石棒（１）



第107図　６号溝　出土石器　石棒（２）、石剣、石刀、石冠



第108図　６号溝　出土石器　玉類、未製品、その他

第17表　６号溝出土土器観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第36図 PL.41	1	縄文土器 甕・深鉢	1E5 口縁～体部1/4残存	口	(44.0)			粗:石英・片岩・白色粒/良好/橙色	波状突起を付す。波頂部に沿って斜位短沈線と縦位短沈線を施す。口縁部は横位沈線６条を配し、頸部は僅かな段差で画される。体部は縦位・斜位条痕文が施される。内面横位削り調整後弱い撫でを加える	縄文晩期末葉
第36図 PL.41	2	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部上半1/4残存	口	(18.4)			細:石英・輝石・雲母末・白色粒/良好/にぶい黄褐色	波状突起を付し頂部に短沈線を施す。頸部は無文で外反し僅かな段差を設けて口縁部と体部を画す。体部上半の内湾強く縦位条痕文を施す。内面弱い横位研磨を加える	縄文晩期末葉
第36図 PL.41	3	縄文土器 甕・深鉢	1E11 口縁～体部下半1/3残存	口	(15.0)			細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。単位不明。波頂部縦位刺突を加え、頸部は僅かな段差で画される。以下刺突文と横位短沈線が交互に横位沈線２条が施される。口縁部は横位ＬＲ、体部は斜位条痕文が施される。内面研磨を加える。外面体部煤付着	縄文晩期末葉
第36図 PL.41	4	縄文土器 甕・深鉢	1F7 口縁部突起一部欠損	口 高	16.4 18.3	底	7.9	細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	４単位双波状突起を付す。口縁部に横位沈線３条を設け、頸部は無文。体部は僅かな段差で画し上半に横位沈線と三叉文が連接した変形工字文が交互に配される。体部下半は斜位・縦位条痕文が施される。内面平滑な撫で調整。内外面煤付着	縄文晩期末葉
第36図 PL.41	5	縄文土器 甕・深鉢	1E10 口縁～体部1/3残存	口	(14.0)			細:石英・輝石・白色粒/良好/橙色	小波状突起を付し頂部及び口唇部に刺突文を重ねる。口縁部は横位沈線３条を設けるが施文されない箇所もある。体部は太い斜位条痕文を施す。工具は不明。内面研磨	縄文晩期末葉
第37図 PL.41	6	弥生土器 甕・深鉢	1F11 口縁～体部下半11/2残存 底部残存	口	28.4	底	12.0	細:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部小波状突起を付す。単位は不明。幅狭の口縁部は横位沈線で画され、波頂部の縦位短沈線と連接する。口唇部に沿って横位弧状沈線を施す。体部は横位沈線で画され以下太い条痕文が縦位・斜位に施される。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第37図 PL.41	7	縄文土器 甕・深鉢	1E7 口縁～体部上半1/3残存	口	(14.0)			細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状突起を付す。単位は不明。口縁部と体部上半に横位沈線２条を設ける。体部は縦位条痕を地文とする。内面は輪積み痕を明瞭に残す	縄文晩期末葉
第37図 PL.41	8	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～頸部破片	口	(18.0)			細:石英・片岩粒少・白色粒/良好/黒褐色	口縁部に横位沈線２条を設け刺突を１箇所加えるが施文意図は見られない。頸部は無文で丁寧な研磨。体部境は僅かな段差を設ける。体部は縦位・斜位条痕文を施す。内面研磨。№100と同一個体か	縄文晩期末葉
第38図 PL.42	9	縄文・弥生 甕・深鉢	1D12 口縁部と体部の一部欠損	口 高	22.5 31.0	底	8.0	細:石英・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	刺突を重ねた波状突起を付す。おそらく５単位。口縁部に横位沈線５条を設け、体部は横位・斜位条痕文が覆う。被熱の溜め器面磨滅。内面は横位削り調整後弱い撫で調整を加える。体部下半内外面とも被熱のため変色	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第38図 PL.42	10	縄文土器 甕・深鉢	1F9 口縁～体部上半1/8欠損	口 高	18.3 19.2	底	7.8	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい赤褐色	波状突起を付す。おそらく８単位。頸部は無文で体部は僅かな段差で画し上半に横位短沈線３条を配す。地文は縦位条痕文を施す。内面横位研磨。外面体部上半に煤付着	縄文晩期末葉
第38図 PL.42	11	縄文土器 甕・深鉢	１F7 口縁～体部下半1/4残存	口	(27.8)			細:石英・輝石・チャート・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部に小波状突起を付す。単位は不明。幅広の横位沈線３条を口縁部に設ける。頸部は外反し無文。体部は僅かな段差を設け以下斜位条痕文が覆う。内面弱い横位研磨	縄文晩期末葉
第38図 PL.42	12	弥生土器 甕・深鉢	1F5 口縁～体部1/4残存	口	(26.0)			細:石英・輝石・雲母末・白色粒/良好/褐色	平縁。口縁部に横位沈線５条を設け、体部は僅かな屈曲で画し横位・斜位条痕文を施す。工具は貝殻腹縁か。内面弱い研磨を加える	弥生前期併行 東海系
第38図 PL.42	13	縄文土器 甕・深鉢	1F7 口縁部破片	口	(14.0)			細:石英・片岩・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。単位は不明。波頂部に縦位短沈線を施し口唇部に沈線が沿う。以下横位沈線群が配される。内面平滑な撫で	縄文晩期末葉
第38図 PL.42	14	縄文土器 甕・深鉢	1E4 口縁～上半1/3残存	口	(17.6)			粗:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	波状縁を呈す。単位は不明。口縁部沿って横位沈線３条を設ける。頸部は無文。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第39図 PL.42	15	縄文土器 甕・深鉢	１F7 口縁～底部1/4残存	口 高	(12.4) 19.5	底	(7.2)	細:石英・輝石・雲母末・白色粒/やや軟質/明褐色	口唇部は小波状か。口縁部２条、体部屈曲部３条の横位沈線を設ける。体部には瘤状小突起を加えるが単位・間隔は不明。内面撫で調整。体部下半は被熱による変色か	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第39図 PL.42	16	縄文土器 甕・深鉢	1F9 口縁～体部上半 1/2残存	口	17.8			細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	口唇部に瘤状小突起を付し刺突文を加え、横位短沈線と交互に配される。以下横位沈線５条が施される。体部は無文で丁寧な研磨を加える。内面は弱い研磨	縄文晩期末葉
第39図 PL.42	17	縄文土器 甕・深鉢	1F7・8 口縁～体部上半 1/2残存	口	14.0			細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	波状突起を付す。やや不規則な配置。口縁部に横位沈線４条を配す。内面弱い研磨	縄文晩期末葉
第39図 PL.43	18	弥生土器 甕・深鉢	1E6 口縁～体部1/3 残存	口	(31.8)			細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい橙色	小波状口縁。口縁部及び体部は僅かな段差で画される。頸部は無文。体部上半はＬＲ、下半は斜位条痕文が施される。内面口縁部は研磨、体部は平滑な撫で調整	弥生前期併行
第39図 PL.43	19	縄文土器 甕・深鉢	１F4～6 口縁部2/3～体部1/2残存	口	19.2			細:輝石・白色粒/良好/黒褐色	口縁部に双波状突起を配す。４単位か。口縁部に幅広の横位沈線を設け体部は斜位条痕文が覆う。内面弱い撫で調整	縄文晩期末葉
第39図 PL.43	20	縄文土器 甕・深鉢	1E10 口縁～体部下半 1/3残存	口	(33.0)			細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/灰黄褐色	大型深鉢で口縁部波状突起を連続する。不等間隔で単位は不明。頸部で屈曲し体部上半で強く内湾する。屈曲部及び体部中位で３・４条の横位沈線を設ける。地文は縦位・斜位条痕文を施す。内面弱い横位研磨を加える	縄文晩期末葉
第39図 PL.43	21	縄文土器 甕・深鉢	1E6 口縁～体部下半 1/3残存	口	(16.8)			細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい黄褐色	波状縁。単位は不明。口縁部は外反し無文。肩部は僅かな段差を持ち横位沈線に切り取り状の陰刻が加わる。地文はＬＬＲ。内面は弱い研磨を加える。外面煤付着	縄文晩期末葉
第40図 PL.43	22	縄文土器 甕・深鉢	1E10 口縁～体部下半 1/3残存	口	(30.0)			細:石英・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状突起を付す。単位は不明。体部上半が内湾し横位沈線を設け、以下条痕文を横位・斜位に施す。内面口縁部は研磨、体部は平滑な撫で調整。外面体部に被熱による変色	縄文晩期末葉
第40図 PL.43	23	縄文土器 甕・深鉢	1E4 口縁～体部中位 1/3残存	口	(17.6)			細:石英・片岩・白色粒/良好/灰黄褐色	連続する波状口縁。単位は不明。口唇端部の一部に細かな刻みを加える。外面は横位ＬＲ施文後平滑な撫で調整を重ねる。内面は横位撫で調整	縄文晩期末葉
第40図 PL.43	24	縄文・弥生 甕・深鉢	1E10 口縁～体部1/4 残存	口	(16.0)			細:石英・輝石・白色粒/良好/暗褐色	口縁～頸部緩やかに外反し無文。研磨を加える。体部は斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整。外面少量の煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第40図 PL.43	25	縄文・弥生 甕・深鉢	1D12 頸部1/4～底部 残存			底	7.2	細:石英・白色粒/良好/黒褐色	頸部外反し無文。僅かな段差で体部上半を画し横位沈線２条を設ける。地文は条痕文を縦位・斜位に施す。頸部及び内面研磨を加える。底面に木葉痕。内外面煤が付着する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第40図 PL.44	26	縄文土器 甕・深鉢	1F5 口縁～体部下半 残存	口	16.4			細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	小波状縁。10単位を数える。口縁部外反し体部上半で強く屈曲する。頸部屈曲部に僅かな段差を設け体部と画す。体部はＬＲが覆い、体部屈曲部の横位沈線より斜位沈線が対向した意匠を３単位配す。内面研磨を加え煤が付着する	縄文晩期末葉
第40図 PL.44	27	弥生土器 甕・深鉢	1E・F4・5 口縁～体部1/3 残存 口縁部破片１点	口	(26.8)			細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/にぶい橙色	波状突起を付す。単位は不明。口縁部は無文で僅かな段差で体部と画す。以下横位・斜位条痕文が覆う。工具は貝殻腹縁か。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第41図 PL.44	28	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部下半 1/3残存	口	16.2			細:石英・輝石・白色粒/良好/明赤褐色	双波状突起を付す。４単位か。口縁部は無文で極僅かな段差で体部と画す。体部は斜位・縦位条痕文が覆う。内面平滑な撫で調整。口縁部内外面に煤付着	縄文晩期末葉
第41図 PL.44	29	弥生土器 甕・深鉢	1F7 口縁部1/4～体部1/2残存	口	(17.0)			細:石英・片岩粒・白色粒/良好/暗褐色	波状縁。単位は不明。口縁部は外反し無文。体部はＬＲが覆う。結節部の施文も見られる。口縁部内外面研磨を加える。体部内面は平滑な撫で。外面体部上半に煤付着。下半は加熱のため変色(にぶい黄橙色)	弥生前期併行
第41図 PL.44	30	弥生土器 甕・深鉢	1D4 口縁1/3～体部上半残存	口	(21.0)			細:石英・褐色粒・白色粒/良好/浅黄橙色	波状突起を付す。口縁部は外反し、頸部の横位沈線で体部と画す。体部は太い横位・斜位条痕文が覆う。工具は貝殻腹縁か。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行 東海系
第41図 PL.44	31	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部1/2 残存	口	22.0			細:石英・輝石・白色粒/良好/褐灰色	波状突起を付す。あるいは６単位か。口縁～体部縦位斜位条痕が覆う。内面研磨。外面体部中位に煤付着。下半は被熱のため変色	縄文晩期末葉
第41図 PL.45	32	弥生土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部上半 1/3残存	口	(20.0)			細:石英・片岩・白色粒/良好/黄灰色	口唇部に斜位刻みを連続する。以下斜位条痕文が覆う。工具は貝殻腹縁か。内面平滑な横位撫で調整	弥生前期併行 東海系

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第41図 PL.45	33	縄文土器 甕・深鉢	1F9 口縁～体部下半 1/4残存	口	(19.8)			細:石英・雲母少・ 白色粒/良好/暗赤 褐色	頂部に狭小な面を持つ波状縁。頸部で括れ体部は内湾する。口縁～体部は縦位条痕文が覆う。内面横位研磨を加える。外面煤付着	縄文晩期末葉
第42図 PL.45	34	縄文土器 甕・深鉢	1F6 口縁～体部上半 1/3残存	口	(30.0)			細:石英・輝石・白 色粒/良好/灰黄褐 色	波頂部に縦位刺突文を加えた突起を付す。体部上半で緩やかに括れ、口縁～体部は横位・斜位条痕文を施す。波頂部刺突文工具は貝殻腹縁か。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第42図 PL.45	35	縄文土器 甕・深鉢	1F4 口縁～体部1/3 残存	口	(21.4)			細:石英・片岩・白 色粒/良好/橙色	頂部に狭小な面を持つ波状突起を付す。単位は不明。条痕文に覆われるが口縁部は斜位、体部中位は横位、下半は縦位に施される。内面は弱い横位研磨を加える。口縁部の一部被熱のため灰色に変色する	縄文晩期末葉
第42図 PL.45	36	縄文土器 甕・深鉢	１F7 口縁～体部下半 1/3残存	口	(21.0)			細:石英・輝石・白 色粒/良好/灰黄褐 色	小波状口縁。頸部で緩やかに括れる。口縁部より横位・斜位条痕文が覆う。内面研磨。外面少量の煤付着	縄文晩期末葉
第42図 PL.45	37	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部1/2 ～底部残存	口 高	14.2 12.6	底	5.4	細:石英・雲母・ チャート・白色粒/ 良好/にぶい黄橙 色	波状突起を付す。単位は不明。口縁～体部は縦位弧状の条痕文が覆う。施文具はやや軟質か。底面に網代痕残る。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第42図 PL.45	38	縄文土器 甕・深鉢	1F8 口縁～体部上半 1/3残存	口	(10.0)			細:石英・白色粒/ 良好/灰黄褐色	小型深鉢で波状突起を付す。口縁～体部は一体化し無節Ｌが覆う。内面弱い研磨を加える。被熱のため体部下半は変色を見る	縄文晩期末葉
第42図 PL.45	39	縄文・弥生 甕・深鉢	1F5 口縁部1/4・体 部～底部残存	口 高	(14.0) 12.0	底	6.0	細:石英・輝石・片 岩粒・白色粒/良好 /暗褐色	口縁部形状不明。口唇部に強い横位押圧を加える。体部はＬＲが覆う。底面網代痕。内面斜位削り調整後弱い撫で。外面底部上は被熱のため変色	縄文晩期末葉 ～弥生前期併 行
第42図 PL.45	40	縄文土器 甕・深鉢	1F8 口縁～体部1/4 残存	口	(22.0)			粗:石英・褐色粒/ 良好/黒褐色	体部上半に緩やかな括れを持つ。外面は無文内面は横位撫で調整。外面に煤付着	縄文晩期末 葉？
第43図 PL.45	41	縄文土器 深鉢	1D11 口縁～体部上半 1/4残存	口	(20.0)			細:石英・輝石多・ 白色粒/良好/黒褐 色	波状縁。単位不明。口縁部に沿って沈線３条を設ける。体部は横位沈線で画され上半に横位沈線３条を配し棒状突起を加える。突起には縦位短沈線を重ねる。体部は２・３条の沈線による意匠文が配される。内面平滑な撫で調整	縄文後期後半
第43図 PL.45	42	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁部1/4～底 部1/2残存	口 高	(14.6) 13.9	底	3.6	細:石英・輝石・白 色粒/良好/褐灰色	小型深鉢。口縁部は横位沈線２条で画され浮線による交互三角区画文が配される。体部は瘤状小突起と横位細沈線を交互に連続し、以下横位沈線と三角陰刻文による網目状意匠が多段に配される。底部は小径で突出する。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第43図 PL.46	43	縄文土器 甕・深鉢	1D12・1E5 口縁1/4～体部 1/2残存	口	(14.8)			細:石英・輝石・白 色粒/良好/黄褐色	口縁～頸部は開き体部上半は内湾する。頸部の無文部と横位沈線で口縁部と体部を画す。口縁部は幅広沈線による意匠文の連続。変形工字文の変化か。体部は２条の沈線による波状文が配される。地文は無節Ｌを施す。内面平滑な撫で調整。全体に被熱のため変色する	縄文晩期末葉
第43図 PL.46	44	縄文土器 甕・深鉢	1F7 体部破片					粗:石英・輝石・ チャート・白色粒/ 良好/黄灰色	頸部外反し無文。体部上半は横位沈線と三叉文の連接による変形工字文が配され、下半は横位ＬＲが施される。内面弱い研磨が加わり、多量の煤が付着する	縄文晩期末葉
第43図 PL.46	45	縄文土器 甕・深鉢	1D12・1E10 口縁～体部1/4 残存 体部破片１点	口	(39.2)			細:石英・雲母・褐 色粒・白色粒/良好 /にぶい黄橙色	小波状突起を連続する。波頂部に縦位短沈線を施し以下横位沈線３条を設ける。頸部は無文で僅かな段差で口縁部と体部を画す。体部も横位沈線数条を設ける。地文は縦位ＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第43図 PL.46	46	縄文土器 甕・深鉢	1E7 口縁～頸部破片					細:石英・雲母少・ 褐色粒・白色粒/や や軟質/にぶい黄 橙色	波状突起を付す。頂部より縦位刺突文が垂下し口縁下の横位沈線に接す。頸部は外反し無文で僅かな段差で体部と画す。地文は縦位条痕文。内面横位研磨	縄文晩期末葉
第43図 PL.46	47	縄文土器 甕・深鉢	1C12 口縁部破片					細:石英・輝石・白 色粒/良好/灰黄褐 色	波状突起を付す。波頂部に縦位短沈線を施し口縁部は横位沈線４条を配す。施文は深い。縄文は横位ＬＲ。内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第43図 PL.46	48	縄文土器 甕・深鉢	1F8 口縁部破片					細:石英・輝石・白 色粒/良好/黒褐色	縦位刺突を加えた波状突起を付す。口縁部横位沈線３条を設け、頸部は僅かな段差で画す。内面弱い研磨	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第43図 PL.46	49	縄文土器 甕・深鉢	1F8 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	縦位刺突を加えた波状突起を付し以下横位沈線２条を設ける。頸部は僅かな段差で画す。内面弱い横位研磨	縄文晩期末葉
第43図 PL.46	50	縄文土器 甕・深鉢	1C11 口縁～体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。波頂部に縦位刺突文を加え口縁部下は横位沈線３条を設ける。頸部は無文で僅かな段差を持って口縁部と体部を画す。口縁部地文はＬＲ。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第43図 PL.46	51	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。口縁部下に横位沈線群を配す。地文は横位ＬＲ。内面は斜位撫で調整	縄文晩期末葉
第43図 PL.46	52	縄文土器 甕・深鉢	1E10 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	薄手の器厚。双波状突起か。口唇部端部に条痕文を見る。口縁部に地文の横位ＬＲ、口縁部下は横位沈線群を配す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第43図 PL.46	53	縄文土器 甕・深鉢	1E6 口縁～体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄色	波状突起を付す。口唇部に沿って沈線を設け波頂部に縦位刺突文を施す。頸部は僅かな段差で画され体部上半に横位沈線２条を配す。口縁部、体部の地文は横位ＬＲ。内面平滑な撫で。器面摩滅	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	54	縄文土器 甕・深鉢	1E11 口縁部破片					細:石英・雲母末・白色粒/良好/にぶい黄褐色	双波状突起を付し頂部は凹む。口唇部に沿って沈線３条を施し、以下２・３条の横位沈線が多段に配される。地文は斜位条痕文。内面研磨。外面煤付着	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	55	縄文土器 甕・深鉢	1C12 口縁部破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/黒褐色	欠損するが波状突起を付す。口縁部横位沈線を設け横位弧状沈線２条を配す。体部上半は横位沈線１条が設けられ２条の横位沈線と陰刻文が施される。地文は無節Ｌ。小孔は焼成前穿孔。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	56	縄文土器 甕・深鉢	1E10 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	小波状突起を付す。口縁部にＬＲを施し以下６条の横位沈線を設ける。頸部と僅かな段差で画す。頸部は無文。口縁部内面に横位沈線。以下平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	57	縄文土器 甕・深鉢	1C11 口縁部破片					粗:石英・チャート・雲母/良好/褐色	双波状突起を付す。波頂部に縦位短沈線を加え、口縁部に斜位短沈線を施す。以下横位沈線群が配される。地文は横位ＬＲ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	58	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・白色粒/良好/にぶい黄褐色	波状突起を付す。あるいは双波状か。口縁部横位沈線７条を配し斜位ＬＲを施す。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	59	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部上半破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい黄褐色	欠損するが波状突起を付す。口縁部に横位ＬＲを施し以下横位沈線９条を配す。頸部との境は僅かな段差で画される。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	60	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/暗褐色	波状小突起を付す。口縁部横位沈線６条を配し僅かな段差で頸部と画す。頸部は無文。内面口縁部沈線を施す。横位条痕を施し撫でを加える	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	61	縄文土器 甕・深鉢	1D・E11 口縁～体部上半破片					細:石英・白色粒/良好/黒褐色	双波状突起を付す。口唇部に沿って沈線２条を施し頂部下も弧状沈線を配す。以下横位沈線５条を配す。体部境にも１条巡らす。地文は横位ＬＲ。内面平滑な撫で調整。内外面に煤付着	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	62	縄文土器 甕・深鉢	1F6 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/灰黄褐色	波状突起を付す。口縁部に横位沈線５条を配す。以下頸部は僅かな段差で画され無文。内面平滑な横位撫で調整	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	63	縄文土器 甕・深鉢	1F5 口縁～頸部破片					粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/灰褐色	波状突起を付す。欠損するため双波状と推定される。横位ＬＲを施す。以下横位沈線５条を配し頸部は無文である。内面口縁部に横位沈線１条を設け、平滑な撫で調整を施す	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	64	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。あるいは双波状か。波頂部に縦位刺突文を施し口縁部横位沈線４条を配す。体部上半にも横位沈線を設ける。地文は斜位条痕文。内面平滑な撫で調整。外面煤付着。	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	65	縄文土器 甕・深鉢	1E5 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	細かな波状縁。波頂部に沿って沈線を施し。口縁部下に横位沈線２条を設ける。頸部は無文で体部上半に横位沈線４条を配す。地文に斜位条痕文を施すが外器面摩滅する。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第44図 PL.46	66	縄文土器 甕・深鉢	1F9 口縁～体部破片					細:石英・雲母末・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状突起を付し波頂部に縦位短沈線を加える。僅かな段差で２条の低位帯を設け中位に横位沈線を重ねる。擬縄文を施す。原体は植物由来か。内面研磨	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	67	縄文土器 甕・深鉢	1E10 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	双波状突起を付す。頂部に縦位刺突文を施し、以下幅広の横位沈線を３条設ける。地文に擬縄文を見るが原体は不明。植物由来か。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第44図 PL.46	68	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁部破片					細:石英・片岩・チャート/良好/にぶい黄褐色	刺突文を加えた瘤状小突起を付し口唇端部に沈線と刻みを施す。口縁部は横位沈線６条を配し、体部は斜位条痕文を施す。内面横位研磨	縄文晩期末葉
第44図 PL.47	69	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁～体部1/4 残存	口	(26.4)			粗:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/浅黄色	平縁。波状突起を付すか。口縁部は２条の横位沈線を設け、体部は横位沈線１条で画される。縄文は横位ＬＲ。内面口縁部は平滑な撫で、体部は横位削り調整に止まる。体部外面に少量の煤付着	縄文晩期末葉
第44図 PL.47	70	縄文土器 甕・深鉢	1F5 口縁部破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/黒褐色	口縁～頸部外反する。口縁部に横位沈線８条を配し体部境も沈線を施す。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第44図 PL.47	71	縄文土器 甕・深鉢	1E5 口縁部破片					粗:石英・雲母・白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	波状突起を付す。口縁部下に横位沈線2条を設ける。地文に横位ＬＲを施す。内外器面摩滅	縄文晩期末葉
第44図 PL.47	72	縄文土器 甕・深鉢	1E5 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/黒褐色	双波状小突起を付す。口縁部に８条の横位沈線を配す。口縁部地文はＬＲ。頸部は無文で体部境は２条の横位沈線を設け刺突文１箇所を加える。以下斜位短沈線による横位矢羽状意匠が配される。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第44図 PL.47	73	縄文土器 甕・深鉢	1F10 口縁～体部上半 破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。口縁部に横位沈線４条を設ける。頸部は無文で体部境は僅かな段差で画される。体部は横位沈線と斜位沈線が施される。地文は口縁部は縦位ＬＲ、体部は条痕文。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第44図 PL.47	74	縄文・弥生 甕・深鉢	1F5 口縁部破片					粗:石英・輝石・片岩粒/良好/暗褐色	口唇端部に押圧を連続する。口縁部は横位沈線６条を配し頸部は無文。内面器面摩滅	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第45図 PL.47	75	縄文土器 甕・深鉢	1F4 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/赤褐色	双波状突起を付す。口縁部に横位沈線３条を設け頸部は僅かな段差で画す。体部上半に２条の横位沈線を設け以下縦位沈線で区画する。区画内は斜位沈線２条や末端渦巻状意匠が配される。地文は横位ＬＲで一部斜位条痕も見る。内面研磨を加える。赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第45図 PL.47	76	縄文土器 甕・深鉢	1E4 口縁部破片					細:石英・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。波頂部に縦位短沈線を施し以下横位沈線２条を設ける。頸部とは僅かな段差で画す。頸部は無文。内面波頂部も縦位短沈線を施し横位沈線１条を配す。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第45図 PL.47	77	縄文土器 甕・深鉢	1F9 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	口縁部に横位沈線４条を配し縦位刺突文を加える。地文は斜位ＬＲを施す。内面は研磨を加える	縄文晩期末葉
第45図 PL.47	78	縄文土器 甕・深鉢	1C11 口縁部破片					細:石英・片岩・雲母・白色粒/良好/黒褐色	口縁部下に横位沈線９条を配す。地文は横位ＬＲ。内面は研磨を加える	縄文晩期末葉
第45図 PL.47	79	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁部破片					細:石英・輝石・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	小波状突起を付す。口縁部に横位沈線群を配す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第45図 PL.47	80	縄文土器 甕・深鉢	1C11 口縁部破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/明黄褐色	波状突起を付す。波頂部欠損。以下横位沈線４条を配し頸部は僅かな段差で画される。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第45図 PL.47	81	縄文土器 甕・深鉢	1E4 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部沈線４条を設け、頸部は僅かな段差で画し研磨を施す。口縁部内面に横位沈線を施し弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第45図 PL.47	82	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・輝石・雲母少・白色粒/良好/黒褐色	欠損する波状突起。波頂部に縦位刺突文を施す。以下口縁部横位沈線５条を配す。頸部は無文。内面研磨を加える	縄文晩期末葉

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第45図 PL.47	83	縄文土器 甕・深鉢	1C11 口縁～頸部破片					粗:石英・片岩・白色粒/良好/橙色	半円状突起を付す。口縁部下に凹線を巡らせ以下横位沈線２条を設ける。体部上半で外反する。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第45図 PL.47	84	縄文土器 深鉢	1D11 口縁部～体部破片４点					細:石英・輝石・雲母・褐色粒・白色粒/良好/灰白色	双波状突起を付す。口縁部に７・８条の横位沈線群と三叉状の陰刻文を配す。頸部は研磨を加え体部境に僅かな段差を設ける。体部は太い条痕文を縦位・斜位に施す。内面弱い研磨	縄文晩期末葉
第45図 PL.47	85	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/にぶい褐色	波状突起を付す。頂部に刺突文を加える。口縁部横位沈線５条を配す。頸部との境には僅かな段差を設ける。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第45図 PL.48	86	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	双波状突起を付す。以下幅広の口縁部横位沈線を４条配す。頸部は無文で内外面とも平滑な撫で	縄文晩期末葉
第45図 PL.48	87	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁部破片					細:石英・輝石・雲母・褐色粒・白色粒/やや軟質/灰黄褐色	双波状突起を付す。片方を欠損。口縁部に幅広の横位沈線３条を設ける。頸部は無文。内外面器面摩滅	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	88	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部上半破片					粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	双波状突起を付す。口唇端部の一部に沈線を施す。口縁部に横位沈線２条を設け幅広頸部に段差で口縁部と体部を画す。口縁部は斜位、体部は縦位条痕文を施す。内面は平滑な撫で調整で煤が付着する	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	89	縄文土器 甕・深鉢	1F7 口縁部破片					細:石英・雲母少・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。口縁部に５条の横位沈線を設ける。頸部は無文。体部に僅かな屈曲を持たせ横位条痕文を施す。内面横位研磨。外面煤付着。№93と同一個体か	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	90	縄文土器 甕・深鉢	1F7 口縁部破片					細:石英・チャート・白色粒/良好/にぶい黄橙色	双波状突起を付す。口縁部に幅広の横位沈線３条を設ける。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	91	縄文土器 甕・深鉢	1F9 口縁部破片					粗:石英・輝石・褐色粒・白色粒/やや軟質/橙色	薄手の器厚を呈す。欠損するが波状突起を付す。口縁部に横位平行沈線４条を配す。内外器面摩滅	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	92	縄文土器 甕・深鉢	1E5 口縁～頸部破片					粗:石英・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状突起を付す。口唇端部に沈線を重ね波頂部に三角陰刻文を配す。口縁部に沿って沈線２・３条を設け以下縦位連続刺突文と横位沈線で口縁部とする。頸部は無文で下端に横位沈線を見る。内面研磨	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	93	縄文土器 甕・深鉢	1F7 口縁～頸部破片					細:石英・雲母少・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。口縁部に５条の横位沈線を設ける。頸部は無文。内面平滑な撫で調整。外面煤付着。№89と同一個体か	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	94	縄文土器 甕・深鉢	1E10 口縁～頸部破片					粗:石英・雲母少・褐色粒・白色粒/やや軟質/淡黄色	薄手で平縁を呈す。口縁部に横位沈線６条を配し、頸部境は僅かな段差で画す。頸部及び内面は平滑な撫で。器面摩滅する	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	95	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁部破片					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/やや軟質/褐色	薄手の器厚を呈す。口縁部にやや幅広の横位沈線４条を設ける。頸部及び内面は弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	96	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい褐色	頸部外反。口縁部と体部上半に横位沈線２条を設ける。斜位条痕文を地文とし撫で調整が重なる。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	97	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/橙色	口縁部横位沈線５条を配す。外器面摩滅。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	98	縄文土器 甕・深鉢	1C12 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/にぶい黄褐色	口縁部横位沈線３条を設け、僅かな段差で頸部と画す。頸部に斜位条痕文の痕跡を見る。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	99	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・輝石・雲母末・白色粒/やや軟質/橙色	口縁部肥厚し横位沈線３条が施される。頸部は外反し無文。内面横位研磨を加える	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	100	縄文土器 甕・深鉢	1D・E11 口縁～頸部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	口唇部に刻みを１箇所付すが意図的とは判断できない。口縁部沈線２条を設け、幅広の頸部は無文で体部境は僅かな段差。体部は縦位条痕文を施す。頸部及び内面は丁寧な研磨を加える	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第46図 PL.48	101	縄文・弥生 甕・深鉢	1E10 口縁～頸部破片					細:石英粒・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	波状突起を付す。口縁部に横位沈線４条を設ける。頸部は無文で弱い研磨。体部は横位条痕文を施す。外面に赤彩痕。内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第46図 PL.48	102	縄文土器 甕・深鉢	1F5 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい橙色	口縁部横位沈線を４条配す。頸部は平滑な撫で調整。内面は横位研磨を加える	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	103	縄文土器 甕・深鉢	1F7 口縁～頸部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	口唇部僅かに残り端部に深い沈線を加える。口縁部横位沈線５条を設ける。頸部は外反し体部上半に屈曲を見る。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	104	縄文土器 甕・深鉢	1E6 口縁～体部破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口唇部に沈線を重ねる。口縁部は横位細沈線を数条設け、体部上半に横位沈線群と弧状沈線群が配される。体部下半は浅い斜位条痕文を施す。内面横位撫で調整。外器面摩滅、煤付着する	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	105	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部破片					細:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/黒褐色	双波状突起を付し頂部に横位短沈線を重ねる。口縁部横位沈線２条を設け頸部は無文で僅かな段差で口縁と体部を画す。口縁部地文と体部は縦位条痕文を施す。内面研磨を加える。	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	106	縄文・弥生 甕・深鉢	1E5 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	緩やかな波状突起を付す。口縁部に幅広の横位沈線３条を配し、頸部は無文、体部は横位・斜位条痕文を施す。内面弱い研磨を加える。体部外面に煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第46図 PL.48	107	縄文土器 甕・深鉢	1D11・1F8 口縁～体部上半1/4残存	口	(23.0)			細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	平縁。口縁部に横位短沈線を２段に配す。頸部の僅かな段差で口縁部と体部を画し体部上半も横位短沈線を多段に配す。口縁と体部地文に斜位条痕文を施す。内面弱い撫で調整	縄文晩期末葉
第46図 PL.48	108	縄文・弥生 甕・深鉢	1D・E11 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	薄手の器厚で波状小突起を付す。口縁部に横位沈線３条を設け、頸部は外反し無文、僅かな段差で口縁と体部上半を画し、体部は横位条痕文を施す。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第47図 PL.48	109	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁～頸部1/3残存	口	(22.0)			細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	小波状口縁。頸部外反し無文。口縁部下と体部上半に幅広の横位沈線を設ける。内面横位削り調整に止まる	縄文晩期末葉
第47図 PL.48	110	縄文土器 甕・深鉢	1E7 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	口縁～頸部一体化し直線的に開く。口縁部に幅広の横位沈線を設け撚糸Ｒを横位に充填する。体部も撚糸Ｒを施す。外面煤付着。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第47図 PL.49	111	縄文土器 甕・深鉢	1F8 口縁～体部上半破片					細:石英・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	頸部外反強い。口縁部は横位ＬＲを施す。頸部は無文で僅かな段差で口縁と体部を画す。内面平滑な撫で	縄文晩期末葉
第47図 PL.49	112	縄文土器 甕・深鉢	1E5・6 口縁～体部破片２点	口	(20.6)			粗:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状突起を付す。口縁部横位沈線１条を設け頸部は無文。体部上半に３条の横位沈線２段で画しその間を斜位短沈線３条による横位鋸歯文が配される。地文及び体部下半はＬＲを施す。内面口縁部と頸部に横位沈線、波頂部に刺突文を施す。口縁部内面は研磨、体部上半は平滑な撫で下半は縦位削り調整後弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第47図 PL.49	113	縄文土器 甕・深鉢	1F7 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状突起を付す。頂部に狭小な面を持ち外面に縦位短沈線を施す。幅広の口縁部沈線１条を設け、僅かな段差で頸部と画す。地文は斜位条痕文。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第47図 PL.49	114	縄文土器 甕・深鉢	1F8 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/暗灰黄色	波状口縁。口縁部ＬＲを施し、頸部は僅かな段差で口縁と体部を画す。頸部に焼成前小孔を穿つ。体部上半に横位沈線と三叉状の陰刻文で変形工字文を配す。以下地文ＬＲに縦位沈線を施す。内面研磨を加える。赤彩を見る	縄文晩期末葉
第47図 PL.49	115	弥生土器 甕・深鉢	1F8 口縁～頸部破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/暗灰黄色	双波状突起を付し条痕文を施文する。頸部は無文で体部上半に太い横位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第47図 PL.49	116	弥生土器 甕・深鉢	1F8 口縁～体部破片２点					粗:石英・褐色粒・白色粒/やや軟質/橙色	三山の波状突起を付し条痕文を施文する。以下浅い凹線を巡らし頸部は幅広で無文。体部は内湾し太い条痕文を横位・斜位に施す。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第47図 PL.49	117	縄文土器 甕・深鉢	1F10 口縁～体部破片 ２点	口	(35.0)			細:石英・片岩粒・雲母末・白色粒/良好/にぶい黄橙色	頂部に狭小な面を持つ小波状突起を付す。頸部に僅かな段差を設け口縁部と体部を画す。頸部は無文で研磨を加える。体部及び口縁部は縦位・斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整。口縁部内外面に煤付着	縄文晩期末葉
第47図 PL.49	118	縄文土器 甕・深鉢	1G8 口縁部破片					粗:石英・片岩・白色粒/良好/灰褐色	口縁部僅かに肥厚し、頸部は無文。体部境は極僅かな段差と横位沈線で画す。口縁部及び体部に斜位条痕文を施す。頸部は横位研磨、内面は弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第47図 PL.49	119	縄文土器 甕・深鉢	1F10 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/灰黄色	波状突起を付す。頸部の僅かな段差で口縁部と体部を画す。地文は斜位条痕文。器面摩滅する。内面平滑な撫で	縄文晩期末葉
第47図 PL.49	120	縄文土器 甕・深鉢	1E4 口縁～体部上半破片					細:石英・白色粒/良好/灰褐色	幅広の無文の頸部は僅かな段差で口縁部と体部を画す。口縁部は斜位、体部は縦位の条痕文を施す。体部に浅い横位沈線を見るが詳細は不明。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉
第47図 PL.49	121	縄文土器 甕・深鉢	1F8 口縁～体部上半破片					細:石英粒・雲母末・白色粒/良好/にぶい黄橙色	小波状口縁。頸部の僅かな段差で口縁と体部を画す。口縁部・体部上半に斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第48図 PL.49	122	縄文・弥生 甕・深鉢	1E11 口縁～体部破片					粗:石英・片岩・白色粒/良好/灰褐色	口唇端部に押圧を連続する。頸部は僅かな段差で画され無文。体部境一部に横位沈線を施す。口縁部は横位、体部は斜位条痕文を施す。内面横位撫で調整。外面に煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第48図 PL.49	123	縄文土器 甕・深鉢	1E7 口縁～体部上半破片					細:石英多・輝石・白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	波状突起を付す。口縁部下に浅い横位沈線を設け頸部は外反する。僅かな段差を設け体部と画し、体部は横位浮線文２条と横位沈線文２条が配される。浮線文には小突起と縦位刺突文が重なる。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第48図 PL.49	124	縄文土器 甕・深鉢	1F9 口縁部破片					粗:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/明赤褐色	口縁部横位沈線１条を設ける。頸部は外反し無文。体部境は僅かな段差を設け上半は横位沈線数条を配し縦位刺突文を加える。内面横位研磨を加える	縄文晩期末葉
第48図 PL.49	125	縄文土器 甕・深鉢	1C11 口縁部破片					粗:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	薄手の器厚を呈し外反する口縁部。頸部との境に僅かな段差を設け頸部は研磨を加える。口縁部はＬＲを施す。内面丁寧な研磨	縄文晩期末葉
第48図 PL.49	126	縄文土器 甕・深鉢	1C11 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。口縁部は区画線を設けず横位ＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第48図 PL.49	127	縄文土器 甕・深鉢	1E10 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口唇部は強い押圧を加え小波状縁となす。口縁部は横位ＬＲを施し僅かな段差で画される。頸部は横位研磨。内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第48図 PL.50	128	縄文土器 甕・深鉢	1E5 口縁～体部上半破片					細:石英・片岩粒・雲母・白色粒/良好/暗赤褐色	波状突起を付す。口縁部は外反し頸部は僅かな段差で画される。口縁部、体部ともＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第48図 PL.50	129	縄文土器 甕・深鉢	1F4 口縁～体部上半破片					粗:石英・雲母・白色粒/良好/にぶい黄褐色	波状突起を付す。おそらく双波状か。口縁部は僅かに肥厚し横位沈線を施す。頸部は研磨を加え体部境は僅かな段差で画す。口縁部及び体部の施文原体は不明。植物由来とすればオオバコか。内面弱い研磨	縄文晩期末葉
第48図 PL.50	130	縄文土器 甕・深鉢	1F4 口縁～体部上半破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/灰黄褐色	双波状突起を付す。口縁部は肥厚し頸部は無文。体部境は僅かな段差で画される。口縁及び体部は横位ＬＲを施す。頸部は研磨を加える。内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第48図 PL.50	131	縄文土器 甕・深鉢	1E6 口縁～頸部破片					細:石英・褐色粒・白色粒/良好/明黄褐色	波状突起を付す。頸部は外反し僅かな段差で口縁部と体部を画す。口縁部、体部の地文は横位ＬＲ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第48図 PL.50	132	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい赤褐色	波状突起を付し頂部に縦位刺突文を加える。頸部は無文で僅かな段差で口縁部と画す。口縁部地文は横位ＬＲ。内面平滑な撫で調整で煤が付着する	縄文晩期末葉
第48図 PL.50	133	縄文土器 甕・深鉢	1F6 口縁～体部上半破片					細:石英・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。頸部の僅かな段差で口縁部と体部を画し地文に横位ＬＲを施す。内面平滑な横位撫で調整	縄文晩期末葉
第48図 PL.50	134	縄文土器 甕・深鉢	1E6 口縁部～体部上半破片					細:石英・雲母・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状突起を付し口縁～頸部外反、体部は内湾する。口縁部と体部に斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第48図 PL.50	135	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁～体部1/4 残存	口	(43.0)			粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/褐色	小波状口縁。口縁部外反し無文。僅かな段差で体部を画し上半には６・７条の横位沈線を設ける。地文は縦位・斜位条痕文を施す。内面口縁部弱い研磨、体部平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第48図 PL.50	136	縄文土器 甕・深鉢	1F6 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	口縁～頸部外反し体部境は僅かな段差で画す。体部上半は横位沈線３条と縦位刺突文が配される。地文は無節Ｌ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第48図 PL.50	137	縄文土器 甕・深鉢	1F4 口縁～体部上半 破片					細:石英粒・白色粒/良好/にぶい褐色	緩やかな波状縁。口縁～頸部は無文で僅かな段差で体部と画す。体部上半に横位沈線２条を配す。体部地文は斜位条痕文を施す	縄文晩期末葉
第48図 PL.50	138	縄文土器 甕・深鉢	1F6 口縁～体部上半 破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部中位に横位沈線１条を設け頸部は僅かな段差で口縁部と体部を画す。体部上半に横位沈線２条を配す。地文は横位ＬＲ。内面口縁部は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第49図 PL.50	139	縄文・弥生 甕・深鉢	1E10 口縁～体部1/4 残存	口	(32.2)			粗:石英・雲母・褐色粒・白色粒/良好/明褐色	小波状突起を付す。口縁～頸部は外反し無文。体部境は横位沈線１条を設ける。体部上半は横位、中位は斜位条痕文を施す。内面平滑な横位撫で調整。外面上半煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第49図 PL.50	140	縄文土器 甕・深鉢	1F10 口縁～体部上半 破片					細:石英・片岩粒・雲母・白色粒/良好/褐色	薄手の器厚で波状突起を付す。口縁～頸部は無文で体部境は横位沈線で画す。体部は横位ＬＲを施す。内面弱い研磨	縄文晩期末葉
第49図 PL.50	141	縄文土器 甕・深鉢	1F8 口縁～体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	波状縁小型深鉢。口縁～頸部外反し無文。僅かな段差を設け体部と画す。体部は横位ＬＲを施す。内面研磨	縄文晩期末葉
第49図 PL.50	142	縄文土器 甕・深鉢	1F8 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	口縁部外反し無文。体部境は横位細沈線１条を設ける。体部はＬＲを施す、内面研磨。赤彩を見る	縄文晩期末葉
第49図 PL.50	143	縄文土器 甕・深鉢	1F6 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	口縁部外傾し無文。僅かな段差で体部と画し体部は横位ＬＲを施す。内面横位研磨を加える	縄文晩期末葉
第49図 PL.50	144	縄文土器 甕・深鉢	1G8 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	双波状突起を付す。口縁部は外反し無文。頸部に横位細沈線１条を設け体部に横位ＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第49図 PL.50	145	縄文土器 甕・深鉢	1F4 口縁～体部上半 破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい黄褐色	波状突起を付す。おそらく双波状か。口縁～頸部は外反し無文。僅かな段差で体部と画し、体部は斜位条痕文を施す。口縁部は研磨、内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第49図 PL.50	146	縄文土器 甕・深鉢	1E7 口縁～体部破片 ２点					細:石英・片岩・白色粒/良好/黒褐色	口縁～頸部外反し無文。体部は横位沈線で画され以下２条の沈線による横位波状文が配される。地文は無節Ｌを施すが一部充填施文する。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第49図 PL.50	147	縄文土器 甕・深鉢	1E11 口縁～体部上半 破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/橙色	緩やかな波状縁。口縁部は外反し無文、体部境は僅かな段差を設ける。体部は斜位条痕文。内面研磨	縄文晩期末葉
第49図 PL.51	148	縄文土器 甕・深鉢	1E5 口縁～体部上半 1/4残存	口	(35.6)			細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。口縁～頸部は無文で僅かな段差で体部と画す。体部は横位・斜位条痕文を施す。内面弱い横位研磨。外面に煤付着	縄文晩期末葉
第49図 PL.51	149	弥生土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部上半 1/3残存	口	(26.0)			細:石英・褐色粒・白色粒/良好/橙色	口唇部に押圧を連続する。頸部は外反し無文。体部は太い条痕文縦位に施す。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第49図 PL.51	150	縄文土器 甕・深鉢	1F4 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	波状突起を付す。口縁～頸部は無文で僅かな段差で体部と画す。体部は斜位条痕文を施す。内面横位研磨	縄文晩期末葉
第50図 PL.51	151	縄文・弥生 甕・深鉢	1E・F4 口縁～体部破片					細:石英・輝石・雲母・褐色粒・白色粒/良好/黒褐色	小波状突起を付す。口縁～頸部緩やかに外反し無文。体部は横位・斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整。外面体部下半に被熱による変色を見る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第50図 PL.51	152	弥生土器 甕・深鉢	1F5 口縁部～体部上半破片					粗:石英・片岩・白色粒/良好/橙色	口縁部は無文で緩やかな屈曲部以下斜位条痕文が施される。口縁部に補修孔外面より穿つ。内面削り調整に止まる。内外面に赤彩痕を見る	弥生前期併行
第50図 PL.51	153	弥生土器 甕・深鉢	1F5 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい褐色	波状小突起を付す。頸部は外反し無文で内湾する体部に横位条痕文を施す。施文具は貝殻腹縁か。内面弱い研磨を加える	弥生前期併行 東海系

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第50図 PL.51	154	縄文土器 甕・深鉢	1F5 口縁～体部上半 破片					細:石英・雲母・褐色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	波状突起を付す。口縁～頸部は外反し無文で平滑な撫で調整。体部は細縄文ＬＲを不定方向に施文する。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第50図 PL.51	155	弥生土器 甕・深鉢	1E・F5 口縁部～体部上半破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/褐灰色	口縁～頸部外反し無文。体部は太い条痕文が横位・斜位に施される。工具は貝殻腹縁か。内面撫で	弥生前期併行 東海系
第50図 PL.51	156	縄文土器 鉢	1E4 体部破片					細:石英粒・雲母末・白色粒/良好/灰黄褐色	横位沈線数条と隆起を伴う縦位刺突文を施す。内外面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第50図 PL.51	157	縄文・弥生 甕・深鉢	1F6 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	口唇部丸味を帯び無文の頸部は僅かな段差で体部と画す。体部は２条の深い沈線による弧状意匠を配す。地文は横位条痕文。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第50図 PL.51	158	縄文・弥生 甕・深鉢	1E5 口縁部破片					細:輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口唇端部に刻みを連続する。内外面とも横位撫で調整を施す。頸部は強く外反する	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第50図 PL.51	159	縄文・弥生 甕・深鉢	1F8 口縁部破片					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/暗褐色	口唇部に強い刺突を連続し小波状口縁となす。以下頸部は無文で内外面とも平滑な撫で。外面煤付着	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第50図 PL.51	160	縄文・弥生 甕・深鉢	1D12 口縁部破片					細:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口唇端部に押圧を連続する。口縁～体部外反し無文。体部上半に斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第50図 PL.51	161	縄文土器 甕・深鉢	1F7 口縁～頸部破片					粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。頂部は狭小な面を持ち突起外面に陰刻を加える。幅広の頸部は外反し無文。体部は斜位条痕文を施す。内面削り調整後弱い撫で。外面煤付着	縄文晩期末葉
第50図 PL.52	162	縄文・弥生 甕・深鉢	1E4 口縁部破片					粗:石英・片岩・白色粒/良好/灰黄色	連続する波状突起が横位に強く突出する。無文で内外面は弱い横位研磨を加える	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第50図 PL.52	163	縄文土器 甕・深鉢	1F6 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	頂部に狭小な面を持つ波状突起を付す。口縁～頸部は強く外反する。頸部は斜位、体部は横位条痕文が施される。内面平滑な撫で調整。外面に煤付着	縄文晩期末葉
第50図 PL.52	164	縄文・弥生 甕・深鉢	1D12 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁～頸部外反し無文。内外面とも丁寧な研磨を加える	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第50図 PL.52	165	縄文土器 甕・深鉢	1F5 口縁～体部上半 破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/灰黄褐色	波状縁。口縁～頸部は外反し無文。内外面とも弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第51図 PL.52	166	縄文土器 甕・深鉢	1E5 口縁～体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/灰黄褐色	口縁～頸部短く横位沈線１条を設ける。体部上半は横位沈線と隆起を伴う陰刻文による変形工字文が多段に配される。体部下半は縦位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整。器面全体が荒れ被熱痕跡を見る	縄文晩期末葉
第51図 PL.52	167	縄文土器 甕・深鉢	1C12 口縁～体部上半 破片					粗:石英・褐色粒多・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部横位沈線を設ける。頸部は無文で横位沈線と印刻文による変形工字文を配す。地文に浅い条痕文を横位・斜位に施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第51図 PL.52	168	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁部破片					細:石英・雲母・白色粒/やや軟質/灰黄色	波状突起を付す。口縁部は横位沈線３条で画しその間を斜位短沈線による交互三角文が配される。口縁部及び体部は横位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第51図 PL.52	169	縄文土器 甕・深鉢	1C11 口縁部破片					粗:石英・片岩多/良好/黒褐色	口縁部下に小型の横位把手を設ける。把手下より刻みを付す縦位沈線４条が垂下し、両脇より２条一組の斜位沈線が派生する。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第51図 PL.52	170	縄文土器 甕・深鉢	1F6 口縁～体部上半 破片					細:石英粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁～体部一体化して緩やかに内湾する。口縁部横位沈線４条、体部も数条の横位沈線群を配す。地文は無節Ｌを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第51図 PL.52	171	縄文・弥生 甕・深鉢	1F10 口縁部破片					粗:石英・片岩・雲母・白色粒/やや軟質/にぶい黄褐色	小径で口縁部外反する筒状の器形。４条の条痕文が縦位・斜位に配され単位文化する。内面弱い撫で調整	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第51図 PL.52	172	縄文土器 甕・深鉢	1E4 口縁～体部下半	口	(14.5)			細:石英・白色粒/良好/褐灰色	口縁部に横位沈線を設け、体部上半は縦位撚糸Ｒを疎らに施す。体部下半は無文で撫で調整。内面丁寧な研磨を加える。外面体部中位に煤付着する	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第51図 PL.52	173	縄文土器 甕・深鉢	1E11 口縁～体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状突起を付す。口縁～頸部は横位ＬＲを施し体部は斜位条痕文が重なる。内面は弱い横位研磨を加える	縄文晩期末葉
第51図 PL.52	174	縄文土器 甕・深鉢	1E7 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/暗褐色	波状突起を付す。頂部に面を持ち凹む。口縁～体部は一体化し横位・斜位ＬＲを施す。内面弱い研磨	縄文晩期末葉
第51図 PL.52	175	縄文土器 甕・深鉢	1E4 口縁部破片 体部破片					細:石英・片岩少・白色粒/良好/黒褐色	体部上半に緩やかな内湾を持たせる。口縁部沈線を設け以下不明原体による施文。あるいはオオバコか。内面研磨	縄文晩期末葉
第51図 PL.52	176	縄文土器 甕・深鉢	1F10 口縁部破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/灰黄橙色	波状突起を付す。口縁～体部ＬＲが覆う。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第51図 PL.52	177	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/淡黄色	波状突起を付す。頸部は外反し体部内湾する。口縁～体部は縦位・斜位条痕文が覆う。内面横位研磨を加える。外面煤付着	縄文晩期末葉
第51図 PL.52	178	縄文・弥生 甕・深鉢	1E11 口縁～体部破片					粗:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/にぶい褐色	口唇端部に押圧を連続する。口縁～体部は縦位・斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第52図 PL.53	179	縄文土器 甕・深鉢	1F9 口縁～体部破片					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	波頂部欠損する波状縁。体部は緩やかに内湾し細縄文ＬＲを施し撫でを加える。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第52図 PL.53	180	縄文・弥生 甕・深鉢	1F7 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	口唇端部に押圧を連続する。頸部は外反しＬＲを横位・斜位に施し、体部は斜位条痕文を重ねる。内面平滑な横位撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第52図 PL.53	181	縄文土器 甕・深鉢	1E11 口縁～体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	大型深鉢。双波状突起を付し折返し状の口縁部を呈す。以下条痕文を斜位に施す。内面研磨を加える。内外面少量の煤が付着する	縄文晩期末葉
第52図 PL.53	182	弥生土器 甕・深鉢	1F6 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	頂部に面を持つ波状突起を付す。口縁部器面剥落。直下より縦位・斜位条痕文が施される。内面器壁剥落	弥生前期併行
第52図 PL.53	183	縄文土器 甕・深鉢	1E6 口縁部～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/褐灰色	薄手で小波状突起を付す。突起頂部は狭小な面を持つ。口縁～体部外反し斜位条痕文を施す。口縁部下に焼成前の小孔を穿つ	縄文晩期末葉
第52図 PL.53	184	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部破片					粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/やや軟質/橙色	波状突起付す。外器面摩滅するため判然としないが、斜位条痕文を施すか。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第52図 PL.53	185	弥生土器 甕・深鉢	1E4 口縁～体部破片					細:石英多・白色粒/良好/暗褐色	極小波状突起付す。口唇端部に沈線を乗せ、口縁～体部は横位・斜位条痕文が施される。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第52図 PL.53	186	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁～体部上半破片	口	(28.0)			細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/橙色	口縁～体部一体化し緩やかに内湾気味に開く。縦位斜位条痕文を施し煤が付着する。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第52図 PL.53	187	弥生土器 甕・深鉢	1E6 口縁部～体部上半破片					粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	厚手で波状縁を呈す。外面は無文で乱雑な斜位削り調整、内面口縁部は撫で体部は斜位削り調整を施す	弥生前期併行
第52図 PL.53	188	弥生土器 甕・深鉢	1F7 口縁～体部下半1/5残存	口	(17.0)			細:石英・輝石・片岩・褐色粒・白色粒/良好/橙色	粗製深鉢。乱雑な作り。条痕文も口縁部は斜位、体部中位は横位、下半は縦位に施し統一性を保たない。内面強い横位撫で調整	弥生前期併行？
第52図 PL.53	189	弥生土器 甕・深鉢	1F8 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	内傾気味に一体化する口縁～頸部。太い条痕文を横位・斜位に施す。内面弱い研磨。外面に煤付着	弥生前期併行 東海系
第52図 PL.53	190	縄文土器 甕・深鉢	1E11 口縁～体部破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/褐色	瘤状突起を口縁部上に連続する。横位沈線で口縁部は画され斜位条痕文が施される。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第53図 PL.53	191	縄文・弥生 甕・深鉢	1E4 口縁部破片	口	(22.0)			細:石英・白色粒/良好/灰色	口唇部は丸頭状で口縁～体部は直立気味に開き斜位条痕文が覆う。内面撫で。水流の影響か器面摩滅する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第53図 PL.53	192	縄文・弥生 甕・深鉢	1E5・6 口縁～体部破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/灰褐色	外反する口縁部より縦位条痕文が施される。工具はやや軟質な印象。条痕文は口縁部内面にも見る	縄文晩期末葉～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第53図 PL.53	193	縄文・弥生 甕・深鉢	1E11 口縁～体部上半 破片					細:石英・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	薄手の器厚を呈す。口縁部圧延による凹凸を見る。口縁～体部縦位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第53図 PL.53	194	縄文土器 甕・深鉢	1F8 口縁～体部破片					粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/やや軟質/橙色	口唇部僅かに残る。波状縁であろう。体部は僅かな段差で画され下半に縦位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整。外器面摩滅	縄文晩期末葉
第53図 PL.53	195	縄文土器 甕・深鉢	1F4 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	小波状突起を付す。口縁～体部一体化し浅い斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第53図 PL.53	196	縄文土器 甕・深鉢	1F8 口縁部破片					細:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口唇端部より条痕文が覆う。外面に煤付着。内面横位削り調整後撫でを加える	縄文晩期末葉
第53図 PL.53	197	弥生土器 甕・深鉢	1F1 口縁部破片					粗:石英・片岩・雲母/良好/褐灰色	極めて薄手の器厚を呈す。太い条痕文を口縁部横位、体部斜位弧状に施す。内面撫で調整ながら器面凹凸顕著	弥生前期併行 東海系
第53図 PL.54	198	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					粗:石英・褐色粒・白色粒/良好/明赤褐色	平縁ながら不揃いな口唇部。条痕文を斜位に施し口唇端部にまで及ぶ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第53図 PL.54	199	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 口縁～体部上半 破片					粗:石英・輝石・チャート・白色粒/良好/明赤褐色	緩やかな波状縁か。軟質工具の条痕文が横位・斜位に施される。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第53図 PL.54	200	縄文土器 甕・深鉢	1E6 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/褐灰色	やや薄手の器厚で口縁部に波状小突起を付す。斜位条痕文が施される。内面研磨を加える。	縄文晩期末葉
第53図 PL.54	201	縄文・弥生 甕・深鉢	1E4 口縁～体部上半 破片					細:石英粒・片岩粒・チャート・褐色粒/良好/灰黄褐色	口唇部薄手で尖る。口縁～体部一体化し相向かう斜位沈線群が施される。内外面撫で調整で被熱痕跡を見る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第53図 PL.54	202	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁～体部上半 1/3残存	口	(22.0)			細:石英・雲母・白色粒/良好/黒褐色	口唇部に横位短沈線と小隆起が交互に配される。頸部外反し体部内湾する。斜位条痕文が覆う。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第53図 PL.54	203	縄文・弥生 甕・深鉢	1D12 口縁～体部上半 破片					細:石英粒・輝石少・白色粒/良好/黒褐色	口唇端部に押圧を連続する。口縁～体部一体化し外面は斜位弧状の条痕文を施し、内面は平滑な横位撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第53図 PL.54	204	縄文・弥生 甕・深鉢	1D12 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/暗褐色	口縁～体部一体化して内湾する。口唇端部に押圧を連続する。外面は斜位条痕文を施し、内面は削り調整後弱い研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第53図 PL.54	205	弥生土器 甕・深鉢	1E5 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒多/良好/黒褐色	口唇端部に押圧を連続し小波状となす。一部強く刻みを施した箇所もある。口縁部横位撫で、以下太い斜位条痕文を施す。工具は貝殻腹縁か。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行 東海系
第53図 PL.54	206	弥生土器 甕・深鉢	1F5 口縁部破片					粗:石英・輝石・白色粒/良好/暗褐色	口唇端部に押圧を連続し小波状縁をなす。以下横位条痕文を施す。内面平滑な横位撫で調整	弥生前期併行
第54図 PL.54	207	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 口縁～体部上半 破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	薄手の器厚で波状小突起を付す。突起頂部に横位刻みを加える。口縁～体部は無文で平滑な撫で、内面は研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第54図 PL.54	208	縄文・弥生 甕・深鉢	1E6 口縁～体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/褐色	口縁部に波状突起を横位に付す。口縁～体部は一体化し内湾する。無文で縦位撫で調整。内面横位撫で。被熱のため器面は荒れる。	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第54図 PL.54	209	縄文・弥生 甕・深鉢	1E6 口縁～体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰色	口縁部に波状突起を横位に付す。口縁～体部は一体化し内湾する。無文で縦位撫で調整。内面横位撫で。被熱のため器面は荒れる。	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第54図 PL.54	210	縄文土器 甕・深鉢	1F6 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/橙色	口縁～頸部一体化し外反する。外面は無文で口縁部は横位撫で体部は縦位削り調整。内面は横位撫で調整を施す	土師器か？
第54図 PL.54	211	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	口唇端部に押圧を連続させ小波状となす。以下無文で内外面とも横位撫で調整。被熱のため外器壁剥落	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第54図 PL.54	212	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・白色粒/良好/暗褐色	口唇端部に細かな押圧を連続させ小波状となす。以下無文で内外面とも平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第54図 PL.54	213	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・輝石・チャート・白色粒/良好/暗褐色	口唇端部に押圧を連続させ小波状となす。以下無文で外反し内外面とも横位撫で調整を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第54図 PL.54	214	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英粒・片岩粒・白色粒/良好/褐色	口唇端部に連続刺突文を施し鋸歯状となす。以下無文で内外面とも平滑な撫で調整。外面に煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第54図 PL.55	215	縄文土器 甕・深鉢	1F8 体部上半破片２点					細:石英・輝石・白色粒/良好/褐灰色	体部上半に僅かな段差を設ける。横位沈線３条で上半を画し、その間を斜位沈線と縦位沈線による菱形連繋文が配す。地文は体部上半はＬＲ、下半は斜位条痕文が施される。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第54図 PL.55	216	縄文土器 甕？	1E6 体部上半破片					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	３条の横位沈線で下半と画す。上半は縦位・斜位沈線による菱形連繋文が配される。地文はＬＲ。下半は条痕文が施される。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第54図 PL.55	217	縄文土器 甕・深鉢	1G8 体部破片					粗:石英・輝石少・片岩/やや軟質/にぶい黄橙色	体部上半か。横位沈線で多段に画され縦位短沈線で小区画し２条の斜位沈線を充填する。菱形連繋文か。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第54図 PL.55	218	縄文土器 甕	1D11 体部破片					粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	体部上半か。横位沈線２条で画され、縦位短沈線や菱形状意匠が配される。地文は斜位条痕文。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第54図 PL.55	219	縄文土器 甕・深鉢	1C11 頸部～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	頸部外反し無文。体部境は僅かな段差を設ける。体部上半は２条の横位沈線を上下に配しその間を斜位短沈線による横位矢羽状意匠が充填される。体部下半は浅い縦位条痕文を施す。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第54図 PL.55	220	縄文土器 甕・深鉢	1E6 体部破片					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/褐灰色	体部上半は横位沈線で画され、斜位短沈線や横位短沈線を充填する。稲妻状沈線文に近いか。地文は縦位条痕文を施す。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第55図 PL.55	221	縄文土器 甕・深鉢	1C11 体部破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/やや軟質/浅黄橙色	横位沈線や斜位沈線による変形工字文か。一部隆起を伴う刺突文を施す。地文は横位ＬＲ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第55図 PL.55	222	縄文土器 甕・深鉢	1C11 体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/浅黄色	体部中位か。横位沈線で画し上位は斜位短沈線による横位矢羽状意匠が配される。下位は浅い縦位条痕文を施す。内面削り調整に止まる	縄文晩期末葉
第55図 PL.55	223	縄文土器 甕・深鉢	1C11 体部破片					細:石英多・雲母・褐色粒・白色粒/やや軟質/明黄褐色	器面摩滅。数条の平行沈線による縦位波状文。稲妻状沈線文か。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第55図 PL.55	224	縄文土器 甕・深鉢	1C11 体部破片					細:石英粒・雲母少・褐色粒・白色粒/良好/橙色	数条の平行沈線による縦位波状文。稲妻状沈線文か。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第55図 PL.55	225	弥生土器 甕・深鉢	1F10 体部破片					粗:石英・雲母・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	４条一組の縦位条痕文による縦位区画か。区画内は横位条痕や斜位条痕文による縦位矢羽状意匠が配される。内面弱い撫で調整	弥生前期併行
第55図 PL.55	226	縄文土器 深鉢	1F8 体部破片					粗:石英・輝石・白色粒/良好/橙色	体部中位か。２条の横位沈線で画す。上位は縦位沈線１条で小区画され相向かう弧状意匠や横位短沈線が配される。地文にＬＲ施文後撫でを加える。内面斜位撫で調整。内外面に煤付着	縄文晩期後半？
第55図 PL.55	227	縄文・弥生 鉢	1E6 体部中位～下半破片					細:石英多・輝石・白色粒/良好/褐色	内湾する体部。数条の沈線による連弧状意匠が横位に配される。下半は無文。内面は弱い撫で調整で輪積み痕を見る。外面少量の煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第55図 PL.55	228	縄文土器 甕・深鉢	1D12 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	体部上半か。沈線により横位長楕円状意匠が配される。地文はＬＲを施す。内面横位撫で調整。煤が付着する	縄文晩期末葉
第55図 PL.55	229	縄文土器 甕・深鉢	1E10 体部上半破片					粗:石英・片岩・白色粒/良好/明褐色	体部上半に横位沈線４条を設け縦位刺突文を重ねる。地文は結節縄文ＬＲだが乱雑な施文である。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉
第55図 PL.55	230	縄文土器 甕・深鉢	1D12 体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	内湾する体部。３・４条の横位沈線を多段に配す。地文に斜位条痕文が施される。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第55図 PL.55	231	縄文土器 甕・深鉢	1E11 体部破片					細:石英粒・雲母末・白色粒/良好/にぶい黄橙色	内湾する体部中位。上半は横位沈線４条を配す。地文及び下半は横位・斜位ＬＲを施す。内面撫で調整	縄文晩期末葉
第55図 PL.55	232	縄文土器 甕・深鉢	1F5・6 体部破片					細:石英・褐色粒・白色粒/やや軟質/橙色	内湾する体部。横位沈線２・３条を多段に配す。地文に横位ＬＲを施す。内外面とも器面摩滅する。	縄文晩期末葉
第55図 PL.55	233	縄文土器 甕・深鉢	1D12 体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/灰黄褐色	体部上半。頸部は無文。横位沈線４条を多段に配す。地文は横位条痕文を施す。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉
第55図 PL.56	234	縄文土器 甕・深鉢	1D11 体部破片					細:石英・白色粒/良好/にぶい黄褐色	横位沈線５条を配す。地文は条痕文を斜位に施す。内面平滑な撫で調整。外面に赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第55図 PL.56	235	弥生土器 甕・深鉢	1F5 体部破片					粗:石英・片岩・雲母/良好/灰黄褐色	体部上半か。横位沈線を２・３条施し、３・４条単位の太い条痕文を弧状に重ねる。内面も横位条痕文を施す	弥生前期併行 東海系
第55図 PL.56	236	縄文土器 甕・深鉢	1F4 頸部～体部上半破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい黄橙色	頸部外反し体部境は僅かな段差で画される。体部は横位ＬＲを施し斜位条痕文が重なる。内面平滑な撫で調整。強い被熱のため、頸部内面灰色に変色する	縄文晩期末葉
第55図 PL.56	237	縄文土器 甕・深鉢	1E5 頸部～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	頸部外反し体部境に僅かな段差を設ける。体部上半は横位ＬＲを施す。内面平滑な撫で	縄文晩期末葉
第55図 PL.56	238	縄文土器 甕・深鉢	1D11 頸部～体部破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/やや軟質/浅黄橙色	頸部外反し体部上半が内湾する。体部は上半に横位ＬＲ、下半は斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第55図 PL.56	239	縄文土器 甕・深鉢	1E11 頸部～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/浅黄橙色	口頸部に横位沈線、頸部は無文で体部境に僅かな段差を設ける。体部は撚糸Ｌを施す。内面平滑な撫で調整。外面に僅かに赤彩が残る	縄文晩期末葉
第55図 PL.56	240	縄文土器 甕・深鉢	1D11 頸部～体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	頸部は外反し無文。体部と僅かな段差で画し体部は横位ＬＲが覆う。内面削り調整後弱い斜位撫で	縄文晩期末葉
第56図 PL.56	241	縄文土器 甕・深鉢	1D11 頸部～体部破片					細:石英・雲母末・白色粒/良好/浅黄橙色	体部内湾する。頸部は無文で研磨を加え、僅かな段差で体部を画す。体部は無節Ｌを上半に集める。内面弱い研磨。外面頸部に赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第56図 PL.56	242	縄文土器 甕・深鉢	1C11 体部破片					細:石英・白色粒/良好/黒褐色	体部上半。頸部外反し体部境に僅かな段差を設ける。体部は横位ＬＲが覆う。内面弱い研磨を加え少量の煤が付着	縄文晩期末葉
第56図 PL.56	243	縄文土器 甕・深鉢	1D12 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	体部中位か。横位・斜位ＬＲが覆う。内面は弱い撫で調整を施し煤が付着する	縄文晩期末葉
第56図 PL.56	244	縄文土器 甕・深鉢	1E4 口縁部破片 体部破片					細:石英・片岩少・白色粒/良好/黒褐色	体部上半に緩やかな内湾を持たせる。口縁部沈線を設け以下不明原体による施文。あるいはオオバコか。内面研磨	縄文晩期末葉
第56図 PL.56	245	縄文土器 甕・深鉢	1C11 体部破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/明褐色	薄手の器厚を呈す。体部下半か。横位ＬＲが覆う。内面削り調整後撫で調整	縄文晩期末葉
第56図 PL.56	246	縄文・弥生 甕・深鉢	1D12 体部上半破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい褐色	頸部外反し無文。体部は横位ＬＲを施し斜位条痕文が重なる。内面平滑な撫で調整。内外面少量の煤が付着する。	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第56図 PL.56	247	縄文・弥生 甕・深鉢	1F5 体部破片					粗:石英・片岩・雲母/良好/橙色	体部中位。上半は横位ＬＲ下半は斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整で、煤が多段帯状に付着する	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第56図 PL.56	248	縄文・弥生 甕・深鉢	1F10 体部破片					粗:石英・雲母・白色粒/良好/灰黄褐色	やや薄手の器厚を呈す。内湾する体部上半～下半か。上半は横位ＬＲが下半は斜位条痕文が施される。内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第56図 PL.56	249	縄文土器 甕・深鉢	1E・F4・5 体部1/4残存					粗:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	体部上半は内湾し横位ＬＲを施す。下半は縦位条痕文が覆う。内面平滑な撫で調整。体部下半に被熱による変色を見る	縄文晩期末葉
第57図 PL.56	250	縄文・弥生 甕・深鉢	1C11 頸部～体部上半破片					粗:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/暗褐色	頸部外反し無文。体部境は僅かな段差を設け体部は縦位弧状条痕文を施し横位条痕文を重ねる。内面平滑な横位撫で調整	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第57図 PL.56	251	縄文・弥生 甕・深鉢	1E11 体部破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/橙色	頸部～体部上半か。頸部は無文で体部境に画線を設けない。体部は横位・斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整。被熱のため変色する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第57図 PL.57	252	縄文土器 甕・深鉢	1F6 頸部～体部破片					粗:石英・輝石・褐色粒・白色粒/やや軟質/明黄褐色	頸部外反し無文。極僅かな段差で体部と画し体部は縦位条痕を施す。内面平滑な撫で調整。外器面摩滅	縄文晩期末葉
第57図 PL.57	253	縄文・弥生 甕・深鉢	1F6 頸部～体部破片					粗:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/明黄褐色	頸部は無文で体部境は僅かな段差で画す。体部は横位・斜位条痕文が施される。内面横位削り調整後撫で	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第57図 PL.57	254	縄文土器 甕・深鉢	1C11 体部破片					粗:石英・角安・白色粒/良好/にぶい褐色	頸部は無文で研磨を加える。僅かな段差で体部と画し体部は縦位条痕文が覆う。内面研磨を施す	縄文晩期末葉
第57図 PL.57	255	弥生土器 甕・深鉢	1F8 口縁～体部破片２点					粗:石英・褐色粒・白色粒/やや軟質/橙色	三山の波状突起を付し条痕文を施文する。以下浅い凹線を巡らし頸部は幅広で無文。体部は内湾し太い条痕文を横位・斜位に施す。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第57図 PL.57	256	縄文・弥生 甕・深鉢	1F4 体部1/3残存					粗:石英・片岩/良好/赤褐色	体部上半は内湾する。縦位・斜位条痕文が覆う。内面弱い研磨を加える。外面少量の煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第57図 PL.57	257	縄文・弥生 甕・深鉢	1E11 体部破片					粗:石英・片岩・白色粒/良好/橙色	体部中位～下半か。縦位条痕文が覆う。内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第58図 PL.57	258	縄文土器 甕・深鉢	1F8・9 体部破片					粗:石英・片岩・白色粒/良好/明黄褐色	直線的に開く体部下半か。縦位条痕文が覆う。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第58図 PL.57	259	縄文土器 甕・深鉢	1D12 体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/やや軟質/灰白色	体部中位～下半か。縦位・斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整。器面摩滅する	縄文晩期末葉
第58図 PL.57	260	弥生土器 甕・深鉢	1F7 体部中位～下半 破片２点					細:石英・輝石・チャート・白色粒/良好/橙色	大型深鉢。太い条痕文を中位は斜位、下半は縦位に施す。工具は貝殻腹縁か。内面平滑な撫で調整。体部中位に帯状に煤が付着する	弥生前期併行 東海系
第58図 PL.57	261	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11・12 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい褐色	体部中位か。内湾する器形を呈しやや太い斜位条痕文が覆う。内面横位撫で調整。外面煤付着する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第58図 PL.57	262	縄文土器 甕・深鉢	１C・D11・12 体部中位～下半 1/4残存					粗:石英・輝石・白色粒/良好/橙色	内湾気味に開く体部。中位は横位、下位は斜位条痕文が覆う。内面は削り調整後弱い撫でを施し煤が付着する。下半は被熱のため変色する	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	263	縄文土器 鉢？	1F9 口縁～体部1/2 残存	口	25.2			細:石英・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状突起を付す。単位は不明、８単位か。波頂部は三叉状に陰刻し横位沈線が繋ぐ。以下横位沈線に画された斜位短沈線４条による横位三角文が交互に配され内縁が陰刻される箇所もある。体部下半に横位沈線を施す。口縁部内面に横位沈線。内外面とも赤彩を見る	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	264	縄文土器 深鉢	1E6 口縁～体部上半 1/2残存	口	9.2			細:石英・白色粒/良好/にぶい褐色	薄手の器厚を呈す。波状口縁に小波状突起を付すが単位は不明。口縁部は細沈線による横位弧状意匠が配される。頸部は外反し無文。体部上半に横位沈線４条を設け縦位刺突文を施す。地文は無節Ｌ。内面研磨。	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	265	縄文土器 鉢	1D12 口縁～体部中位 1/3残存	口	(12.0)			細:石英・雲母末・白色粒/良好/黒褐色	双波状突起を付す。単位は不明。口縁部は肥厚し頸部は外反する。体部上半は僅かな段差で画され、横位沈線３条を設ける。体部下半及び口縁肥厚部に横ＬＲ施す。内外面に煤付着	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	266	縄文土器 鉢	1D12・1E11 口縁～体部下半 1/3残存	口	(12.5)			細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	小波状突起を付す。単位は不明。口縁部下に横位沈線２条を設け、頸部は外反し無文。体部上半に横位沈線によるレンズ状意匠と陰刻による変形工字文が多段に配される。口縁部内面研磨。内外面に煤付着	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	267	縄文・弥生 鉢	1D12 体部残存					細:石英・雲母少・白色粒/良好/にぶい黄橙色	体部上半に横位沈線と陰刻文による変形工字文が配される。下半は無節Ｌが施される。内面平滑な撫で調整。外面体部上半に煤付着、下半は被熱のため器面磨滅	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第59図 PL.58	268	縄文土器 鉢	1E5 口縁～体部上半 1/4残存	口	(10.6)			細:石英・片岩・雲母・白色粒/良好/黒褐色	双波状口縁か。口縁部に浅い横位沈線を設ける。頸部は無文で体部境は僅かな段差を設ける。地文は浅い条痕文を斜位に施す。内面も横位条痕文が残る	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第59図 PL.58	269	縄文土器 鉢	1D12 口縁～体部1/3 残存	口	(12.4)			細:石英・輝石・白色粒/良好/暗灰黄色	波状突起を付す。単位は不明。口縁～頸部は外反し無文。体部は内湾し条痕文を斜位に施す。内面弱い撫で。体部下半は被熱のため変色(にぶい橙色)	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	270	縄文土器 鉢	1E6 口縁部破片	口	(13.0)			細:石英・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	頸部は僅かな段差で画され横位沈線と三叉文が連接した変形工字文が上下交互に配される。地文は横位ＬＲ。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	271	縄文土器 鉢	1D11 口縁～体部上半 1/3残存	口	(14.0)			細:石英・白色粒/良好/にぶい黄橙色	薄手の器厚を呈す。幅広の無文口縁部で体部屈曲部上に沈線と三角陰刻文による扁平な変形工字文が配され、細刺突文が埋められる。体部下半はＬＲが施される。内外面研磨	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	272	縄文土器 鉢	1D11 口縁～体部上半 破片	口	(13.5)			細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	薄手の器厚。口縁～頸部幅広で外反し無文。体部は横位沈線と三叉状陰刻文による変形工字文が配される。沈線間は細かな刺突文を充填する。内面研磨	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	273	縄文土器 鉢	1E6 口縁部1/4～体部1/2残存	口	18.0			細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部は強く開き無文。口縁部内面に横位沈線を施す。頸部屈曲部と体部中位屈曲部に横位沈線と三叉文の連接による変形工字文を設ける。体部上半は沈線による斜位蕨手状意匠文が配される。下半は横位ＬＲを施す。内面研磨。内外面赤彩を施す。	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	274	縄文土器 鉢	1G8 口縁～底部1/2 残存	口 高	16.2 13.1	底	5.0	細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/赤褐色	口縁部は広くやや内湾気味で無文。頸部屈曲部の横位沈線で画し体部上半は幅広沈線と陰刻文による匹字文が配され下半はＬＲが覆う。底面に木葉痕。内面平滑な撫で調整。	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	275	縄文土器 鉢	1D11 口縁～体部上半 1/3残存	口	(13.0)			細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい褐色	薄手の器厚を呈す。幅広の無文口縁部。体部屈曲部は僅かな段差で画され横位沈線２条と刺突文を交互に配す。体部はＬＲを施す。口縁部内面に横位沈線１条が巡る、内外面研磨、赤彩を加える	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	276	縄文土器 鉢	1E10 体部～底部1/2 残存			底	3.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	体部上半に強い屈曲を持つ。上位の狭い施文域に横位沈線と三叉文が連接した変形工字文が交互に配される。地文はＬＲが施される。底面は短沈線２条が交差する。内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第59図 PL.58	277	縄文土器 鉢	1E5・1E11 ほぼ完形	口 高	9.1 10.4	底	3.8	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/明褐色	距離を置いた接合関係。小型品で整った器形と施文。口縁部は外傾し無文。体部上半は僅かな段差で画され、横位細沈線と三叉文を連接した工字文が交互に設けられ、多段に配される。屈曲部以下の下半は底面より延長した沈線が交差し十字文が配される。細縄文ＬＲを地文とする。口縁部内外面丁寧な研磨を加える。赤彩痕も残る	晩期中葉～末葉
第60図 PL.59	278	弥生土器 鉢	1F7 口縁～体部下半 残存	口	22.4			細:石英・褐色粒・白色粒/やや難/にぶい橙色	口縁部は強く外傾し頸部で屈曲する。体部上半に内湾を持たせる。口縁部は下端を横位沈線２条で画し、棒状小突起と沈線で画された楕円状意匠を７単位配す。下端には２個１対の焼成前小孔を穿つ。口縁部内面も４条の横位沈線を施す。体部上半は横位沈線で瘤状小突起７単位が設けられ斜位刻みが埋められる。小突起より縦位沈線３条が垂下し斜位短沈線を矢羽状に充填した区画線を設ける。区画内は三叉文より垂下した沈線と縦位沈線群が充填される。体部下半は被熱のため器面磨滅する。内面は平滑な撫で調整	弥生前期併行異系統か
第60図 PL.59	279	縄文土器 鉢	1F8・9 口縁～体部1/2 残存	口	16.6			細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	口唇端部に沈線。口縁部に小突起と横位沈線を交互に配す。単位は不明。下位に沈線が巡る。頸部は無文で体部上半に横位沈線と陰刻による楕円状意匠が配され横位短沈線を充填する。陰刻端部は僅かに隆起する。体部下半は無文で研磨を加える。内面は弱い研磨。外面に赤彩を見る	縄文晩期末葉
第60図 PL.59	280	縄文土器 鉢	1F9・10 口縁～体部1/3 残存	口	(14.0)			細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	口縁部は僅かに内湾し横位沈線と陰刻文による変形工字文が配される。体部に屈曲部を設け上位は横位沈線によるクランク文が充てられ下位は横位ＬＲを施す。内面横位研磨。外面赤彩痕を見る	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第60図 PL.59	281	縄文土器 鉢？	1E6 口縁～体部1/4 残存	口	(16.0)			細:石英・輝石・チャート・白色粒/良好/灰黄褐色	形態差のある双波状突起を付す。頸部で括れ体部は内湾し口頸部と体部に沈線による横位意匠文が多段に配される。体部下半は浅い条痕文を施す。内面研磨。煤付着	縄文晩期末葉
第60図 PL.59	282	縄文土器 鉢	1E・F4 口縁～体部下半1/3残存	口	(17.0)			細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/橙色	双波状突起を付す波状縁。体部との境は僅かな段差。体部上半に２・３条の横位沈線を配す。地文は横位ＬＲ。内面平滑な撫で調整。外面下半に被熱による変色	縄文晩期末葉
第60図 PL.59	283	縄文土器 鉢	1E・F4・5・1G8 口縁～体部上半破片	口	(14.0)			細:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/黒褐色	口縁～頸部は外反し無文。体部は横位沈線２条で画され、体部中位にも２条の横位沈線が強く施文される。地文は横位ＬＲ。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第60図 PL.59	284	縄文土器 鉢	1F7 口縁～体部1/4 残存	口	(23.2)			細:石英・白色粒/良好/褐灰色	波状縁。単位は不明。頸部屈曲し沈線による工字文や三角文が配される。沈線接点が隆起する箇所もある。地文は横位条痕文。外面煤付着。内面弱い横位研磨	縄文晩期末葉
第60図 PL.59	285	縄文土器 鉢	1C12・1D8 口縁一部～体部上半1/3残存	口	(15.0)			細:石英・片岩粒・白色粒/良好/褐灰色	波状突起を付す。口縁部は無文で体部境に僅かな段差を設ける。体部上半は横位沈線と弧状沈線、三叉状の陰刻文による変形工字文が配される。体部下半は横位ＬＲを施す。内面研磨	縄文晩期末葉
第60図 PL.59	286	縄文土器 鉢	1F8 口縁部1/4～底部残存	口 高	(12.4) 11.2	底	5.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/黄灰色	大小の波状突起を付す。単位は不明。波頂部に縦位短沈線を施し下端を横位沈線が巡る。頸部屈曲部に横位沈線を設け内湾する体部上半に沈線と三叉文を連接した変形工字文が配される。沈線接点は僅かな隆起を見る。体部下半は横位ＬＲを施す。内外面研磨を加え赤彩を施す。	縄文晩期末葉
第60図 PL.59	287	縄文土器 鉢	1F4 口縁～体部1/4 残存	口	(11.0)			粗:石英・褐色粒・白色粒/良好/橙色	口縁部は外反し体部境は横位沈線１条を設ける。体部上半は横位沈線と隆起を伴う陰刻文による変形工字文を多段に配す。内外面とも被熱により器面摩滅	縄文晩期末葉
第60図 PL.59	288	縄文土器 鉢	1F5 口縁部1/2残存	口	9.6			細:石英・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁～頸部は外反し無文。体部は僅かな段差で画し横位沈線を設ける。内面も横位沈線１条を施し研磨を加える	縄文晩期末葉
第61図 PL.59	289	縄文土器 鉢	1D12 口縁～体部下半1/3残存	口	(16.5)			細:石英・輝石・白色粒/良好/オリーブ褐色	双波状突起を付す。単位は不明。体部上半に横位沈線と三角陰刻文による変形工字文が配され下位２条がクランク状に上下が繋がる。体部下半は横位無節Ｌを地文とし沈線による斜位蕨手状意匠を配す。破片下端に横位沈線の痕跡を見る。内面弱い研磨と赤彩を加える	縄文晩期末葉
第61図 PL.59	290	縄文土器 鉢	1E5 口縁～体部破片	口	(15.4)			細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい黄色	波状縁。単位は不明。頸部下端に僅かな段差と横位沈線を設け体部と画す。体部は地文ＬＲに斜位沈線を配す。内面口縁部は研磨、体部は平滑な撫で調整。赤彩痕残る	縄文晩期末葉
第61図 PL.59	291	縄文土器 鉢	1E11 口縁～底部1/3 残存	口 高	(10.0) 7.1	底	(1.6)	細:石英・白色粒/良好/明黄褐色	口縁部に小波状突起を付す。単位は不明。横位沈線２条に画された口縁部に縦位刺突文と弧状短沈線３条を横位に連続する。体部下半及び内面は丁寧な研磨。赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第61図 PL.59	292	縄文土器 鉢	1F8 口縁～体部破片	口	(14.5)			細:石英・輝石・雲母・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	双波状突起を付す。単位不明。薄手の器厚を呈す。口唇部に沈線を設ける。体部上半に横位沈線２条に画された間を沈線による変形工字文が配される。内面平滑な撫で調整。外面に赤彩痕残る	縄文晩期末葉
第61図 PL.59	293	縄文土器 鉢	1C11 口縁～底部1/3 残存	口 高	(10.0) 6.8			細:石英・チャート・白色粒/良好/灰褐色	小波状口縁。間隔は短く単位は不明。口縁部は外反し体部は内湾する。頸部の僅かな段差で体部と画す。口縁部は無節Ｒ、体部上半はＬＲを施し下半は平滑な撫で。内面は弱い研磨を加える。赤彩を施す	縄文晩期末葉
第61図 PL.59	294	縄文土器 鉢	1F6 体部～底部1/3 残存			底	(3.0)	細:石英・白色粒/良好/黒褐色	瘤状貼付を付した横位浮線文と横位沈線で画された間を沈線描出による矢羽状浮線文が配される。体部は条痕文を横位に施す。内面研磨。内外面赤彩。底面歪みを見る	縄文晩期末葉
第61図 PL.59	295	縄文土器 鉢	1E11 体部～底部3/4 残存			底	3.8	細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	小型品。口縁部は外反。屈曲する体部上半は横位沈線３条による入組み状意匠を配す。体部下半は細縄文ＬＲを施す。内面研磨。内外面赤彩	縄文晩期末葉
第61図 PL.59	296	縄文土器 鉢	1E11 体部1/3残存					細:石英・白色粒/良好/黒褐色	小型品。内湾する体部。横位刺突列に画された施文域に三叉文と横位沈線が連接した変形工字文が交互に配される。内外面とも研磨・赤彩を施す	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第61図 PL.59	297	縄文土器 鉢	1F5 口縁部1/3・体部～底部残存	口	(18.2)	底	8.4	細:石英・輝石・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/橙色	口縁部は内湾し強く開き体部高は低い。口唇端部に沈線を重ね、口縁部及び頸部屈曲部、底部上に幅広の横位沈線を設ける。地文は横位・縦位ＬＲ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
				高	9.8					
第61図 PL.60	298	縄文土器 鉢	1F7 口縁部1/2～底部残存	口	14.8	底	8.8	細:石英・輝石・白色粒/良好/褐灰色	小波状口縁。単位不明だが等間隔。体部上半が強く内湾し下半は直立気味に開く。底径は広く安定感ある器形。口縁部下に横位沈線に挟まれた楕円状沈線を配し、体部と底部上に２条の横位沈線を設ける。地文は横位・斜位ＬＲ。内面弱い研磨。内外面少量の煤が付着する。	縄文晩期末葉
				高	15.0					
第61図 PL.60	299	縄文土器 鉢	1F5 体部1/2～底部1/5残存			底	(7.0)	細：石英粒・白色粒/良好/黒褐色	体部上半は内湾し体部中位で僅かな段差で画される。下半は直立気味に開く。体部中位に無文部を設け他はＬＲが覆う。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第61図 PL.60	300	縄文土器 鉢	1F4 口縁部1/4～底部残存	口	(15.0)	底	4.6	細:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/褐色	やや厚手で量感がある。口縁部に横位沈線を設け以下ＬＲが覆う。内面丁寧な研磨	縄文晩期末葉
				高	8.5					
第61図 PL.60	301	縄文土器 鉢	1E11 口縁～体部1/3残存	口	(14.0)			細:石英・白色粒/良好/黒褐色	内湾する口縁部に横位沈線２条を配し、その間を短沈線と刺突文を交互に配す。内外面研磨を加える	縄文晩期末葉
第61図 PL.60	302	縄文土器 鉢	1D12 口縁～体部１部欠損	口	15.2	底	9.2	細:石英・チャート・白色粒/良好/にぶい褐色	口縁～体部強く開き底径やや広い。口縁部に焼成前小孔２個１対を穿つ。口縁部～体部は沈線と三叉状陰刻文による菱形状意匠が配される。５単位を数える。底部上にも沈線を設ける。口縁部内面も横位沈線を施す。底部は僅かに上げ底状。内外面とも丁寧な研磨を加え赤彩を施す	縄文晩期末葉
				高	7.8					
第61図 PL.60	303	縄文・弥生 壺	1D12 頸部～体部1/2残存					細:石英・雲母末・白色粒/良好/灰黄褐色	頸部は強く外反し体部内湾も強い。頸部上端の横位沈線で口縁部と画す。口縁部と体部に無節Ｒを施す。内面弱い撫で調整。外面に赤彩を見る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第61図 PL.60	304	縄文土器 台付鉢	1F9 口縁～体部1/2～脚部残存	口	12.9	底	7.1	細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/暗褐色	脚部は短い。口縁部は外反し無文。体部上半に縦位刺突文と横位沈線２条を交互に配す。脚部下端に３条の横位沈線を施す。脚部内面端部に沈線が巡る。内面研磨。	縄文晩期末葉
				高	9.2					
第62図 PL.60	305	縄文土器 鉢	1F6 口縁部1/3～底部残存	口	(13.6)	底	7.8	細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	双波状突起を付す。単位は不明。口縁部は外反し体部上半が内湾する。体部は横位・斜位ＬＲが覆う。内面弱い研磨	縄文晩期末葉
				高	12.8					
第62図 PL.60	306	縄文土器 鉢	1F7 肩部1/3～底部残存			底	7.5	細:石英多・雲母少・白色粒/良好/にぶい黄橙色	肩部内湾しＬＲを施し一部に条痕文が残る。体部は斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整。外面被熱のため器面剥落著しい。内外面に煤付着	縄文晩期末葉
第62図 PL.60	307～309	弥生土器 鉢	1E9・1F8 2L16 口縁部～体部破片３点	口	(11.5)			細:石英・白色粒/良好/黒褐色 赤褐色	双波状突起を付す。単位は不明。口唇部に細かな刺突文を埋め、口縁部は横位沈線４条を配す。縦位沈線と縦位矢羽状短沈線も配される。体部上半に環状突起を付し外縁を刺突文に施し、沈線に画された小区画内を短沈線を充填する。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行異系統か
第62図 PL.60	310	縄文土器 鉢	1F7 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/にぶい黄褐色	口唇端部に沈線、口唇部に浅い刻みと横位沈線を設ける。頸部は無文で体部上半に横位沈線で画された文様帯を設け斜位沈線群による鋸歯文が配される。三角区画内は刺突文を充填する。内面平滑な撫で。外器面摩滅する	縄文晩期末葉
第62図 PL.60	311	縄文土器 鉢	1F7 口縁～頸部破片					細:石英・輝石・雲母・白色粒/良好/にぶい黄橙色	幅狭の横位平行沈線で口縁部を画す。沈線による三角形状の意匠文などが配されるが乱雑な施文。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第62図 PL.60	312	縄文土器 鉢	1E11 口縁部破片					細:石英・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部横位沈線２条を幅狭に設け刺突文を充填する。以下斜位沈線群を施す。口縁部内面横位沈線を施す。内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第62図 PL.60	313	縄文土器 鉢	1E4 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	口唇端部に沈線を加える。口縁部に細かな矢羽状刻みを施し以下横位沈線３条を設ける。頸部は無文で体部上半に設けた２条沈線間に細かな刻みを施す。体部は縦位条痕文を施す。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第62図 PL.60	314	縄文土器 鉢	1F9 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	小径で小波状縁を呈す。口縁部に横位沈線３条を設け、頸部は無文。体部は斜位条痕文を施す。内面弱い研磨	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第62図 PL.60	315	縄文土器 鉢	1C12･1F10 口縁部破片					細:石英･片岩粒･白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部横位沈線を設け、頸部屈曲部の横位沈線より斜位沈線が体部に派生する。口縁部内面に沈線を施す。内外面丁寧な研磨を加える	縄文晩期末葉
第62図 PL.60	316	縄文･弥生 鉢	1E10 口縁部破片					細:石英･片岩･白色粒/良好/橙色	口縁部内湾し横位沈線で画す。２条の短沈線を縦位・横位に配す。地文はＬＲ。頸部は研磨を加える。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第62図 PL.60	317	縄文土器 鉢	1D11 口縁～頸部破片					細:石英･輝石･雲母･白色粒/やや軟質/にぶい褐色	口縁部に横位沈線を設け以下３条の沈線による交互意匠を連続する。施文は平行沈線内皮か。内面平滑な撫で調整。外面に僅かに赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第62図 PL.60	318	縄文土器 鉢	1E11 口縁～体部破片					細:石英･片岩粒･褐色粒･白色粒/良好/灰黄色	口縁部内湾。横位沈線と弧状沈線及び陰刻文による変形工字文が配される。体部上半外反し無文。口縁部内面横位沈線を施す。外面研磨	縄文晩期末葉
第62図 PL.61	319	縄文土器 鉢	1E11 口縁～体部上半破片					細:輝石･白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。あるいは双波状か。頸部外反し僅かな段差で口縁部と体部を画す。体部上半に横位沈線４条と三角陰刻文を配し、下半は横位ＬＲを施す。内面研磨を加える。外面煤付着	縄文晩期末葉
第62図 PL.61	320	縄文土器 鉢	1D11･1E10 口縁～体部上半破片					細:石英･輝石･白色粒/良好/灰黄褐色	双波状突起を付す。口縁～頸部外反し無文。体部上半は横位沈線と三叉状陰刻文による変形工字文が多段に配される。体部下半及び地文は無節Ｌが横位に施される。内面弱い研磨を加える。内外面とも赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第62図 PL.61	321	縄文土器 鉢	1E11 口縁部破片					細:石英･チャート･片岩･白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。口縁部は無文で体部境は僅かな段差で画され体部は横位沈線４条と縦位刺突文による変形工字文が配される。内面弱い研磨を加え煤が付着する	縄文晩期末葉
第62図 PL.61	322	縄文土器 鉢	1E11 口縁～体部上半破片					細:石英･片岩･白色粒/良好/灰黄褐色	波状突起を付し僅かな段差で体部と画す。体部上半は横位沈線３条を配し陰刻状の刺突文を加える。下半はＬＲを施す。内面平滑な撫で調整。外面に赤彩痕	縄文晩期末葉
第62図 PL.61	323	縄文土器 鉢	1F5 口縁～体部上半破片					細:石英･白色粒/良好/黒褐色	波状口縁。口縁～頸部は外反し無文。体部境に僅かな段差を設け以下横位沈線数条と刺突文が配される。赤彩痕を見る。内面研磨、少量の煤を付着する	縄文晩期末葉
第62図 PL.61	324	縄文土器 鉢	1F9 口縁～体部破片					細:石英･片岩･白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付し頸部は外反し無文。体部上半に横位沈線３条を配し、クランク状の刺突文を重ねる。地文は横位･斜位ＬＲ。内面平滑な撫で調整。外面口縁部に煤付着	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	325	縄文土器 浅鉢	1D12 口縁～体部破片					細:石英･雲母･白色粒/良好/黒色	口縁部外反し体部中位で屈曲する。口唇部と頸部、体部屈曲部に横位沈線を設け、頸部下に横位沈線と陰刻文による変形工字文を配す。内面弱い研磨	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	326	縄文土器 鉢	1F9 口縁～体部上半破片					細:石英･輝石･雲母･白色粒/良好/にぶい褐色	波状突起を付す。おそらく波状突起。口唇部に沿って沈線を施し、頸部は外反する。体部は僅かな段差で画し上半は横位沈線と陰刻文による変形工字文を配す。下半に横位沈線を設ける。外面研磨、内面横位撫で調整を加える	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	327	縄文土器 鉢	1F4 口縁～体部上半破片					細:石英･片岩粒･白色粒/良好/褐灰色	器厚薄手。波状突起を付し口縁部下と体部上半に横位沈線を設ける。体部上半は横位弧状沈線と陰刻による変形工字文が配される。陰刻には隆起が伴う。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	328	縄文土器 甕･深鉢	1F7 口縁～体部上半破片					細:石英･輝石･白色粒/良好/にぶい黄褐色	波状突起を付す。口縁～頸部は外反し無文。体部は２条の横位沈線と斜位沈線による扁平な交互三角区画文が配される。地文は斜位条痕文。内面口縁部は弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	329	縄文土器 鉢	1F10 口縁～体部上半破片４点					細:石英･輝石･片岩粒･白色粒/良好/黒褐色	波状縁。口縁部は無文で体部境は僅かな段差で画す。体部上半は横位沈線と斜位沈線、三叉状の陰刻文による変形工字文が多段に配される。内面研磨。口縁部外面に煤付着	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	330	縄文土器 鉢	1F9 口縁部破片					細:石英粒･チャート少･白色粒/良好/にぶい黄橙色	口唇部に縦位刺突を加えた小突起を付す。体部は浮線と沈線による網目状意匠が配される。交点に小突起を設ける。外面赤彩痕。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	331	縄文土器 鉢	1F5 口頸部破片					粗:石英･片岩･白色粒/良好/にぶい黄褐色	口唇部欠損。横位沈線と刺突文による変形工字文を配す。内面削り調整に止まる	縄文晩期末葉

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第63図 PL.61	332	縄文土器 甕・深鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・輝石・チャート・白色粒/良好/褐灰色	口縁部肥厚し縦位刺突文と横位短沈線を交互に配す。頸部は無文で外反し体部は浮線による網目状文が配される。内面平滑な撫で調整。外面に赤彩が残る	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	333	縄文土器 鉢	1D12 口縁～体部上半 破片					細:輝石少・白色粒/良好/黄灰色	口唇部に刺突を加えた小突起を付し横位沈線を施す。頸部は外反し無文。体部は浮線による網目状意匠が配される。口縁部地文はＬＲか。外面に赤彩痕残る。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	334	縄文土器 鉢	1C11 口縁～体部上半 破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/暗褐色	口唇部に刺突を加えた小突起を付す。体部上半に浮線による網目状意匠を配す。内面丁寧な研磨。外面赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	335	縄文土器 鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部は無文で外反する。体部は浮線による網目状意匠が配される。口縁部に補修孔。外面より穿つ。内面は研磨を加える	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	336	縄文土器 鉢	1C11 口縁～体部上半 破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/暗褐色	体部上半に浮線による網目状意匠が配される。内面平滑な撫で。外面に煤付着。内外面被熱のため器面摩滅。外面に赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	337	縄文土器 鉢	1C11 口縁部破片					細:石英粒・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部に横位沈線に画された間を斜位沈線や陰刻文が配される。交点は刺突文を加える。内面器面摩滅	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	338	縄文土器 鉢	1D11 口縁部破片					粗:石英・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状突起及び双小波状突起２種を付す。体部中位で外反する。波状突起及び縦位刺突文、双小波状突起頂部に刺突文を加える。体部は沈線による菱形連繋文を配す。外面に赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	339	縄文土器 鉢	1C11 口縁部破片					細:石英・雲母末・白色粒/良好/黒褐色	小双波状突起を付す。突起内外面に施文。口頸部2個１対の小孔は焼成前穿孔。体部上半に横位浮線と沈線及び刺突文を施す。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	340	縄文土器 鉢	1C11 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/褐色	口唇部に刺突を加えた小突起と横位短沈線を交互に配す。以下２条の横位沈線を設ける。体部及び内面は研磨を加える。外面に赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	341	縄文・弥生 鉢？	1D12 口縁部破片					細:石英・雲母・白色粒/やや軟質/淡黄色	外反する波状縁。波頂下より細沈線３条が垂下し、沈線４・５条が口縁に沿う。内面研磨。外面赤彩が残る	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第63図 PL.61	342	縄文土器 鉢	1E11 口縁部破片					細:石英・雲母・白色粒/やや軟質/灰白色	波状突起を付す。波頂部に刺突文を施し、５条の横位弧状沈線を口縁部に配す。内外面赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	343	縄文土器 鉢	1C11 口縁～体部破片					細:石英・白色粒/良好/黒褐色	薄手の器厚を呈す。口縁～頸部外反し無文。体部は強く内湾し上半はＬＲを施し下半は無文で赤彩を加える。内面研磨を施す	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	344	縄文・弥生 鉢	1D12 口縁部破片					細:石英粒・褐色粒・白色粒/良好/にぶい橙色	小径の波状縁。口縁部は外反し無文。赤彩痕を見る。体部は無節Ｌを施す。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉 ～弥生前期併行
第63図 PL.61	345	縄文土器 鉢	1D11 口縁部破片					粗:石英多・片岩粒・白色粒/良好/暗褐色	口縁部波状突起を付す。あるいは双波状か。突起頂部に刺突文を重ね片側に沈線を加える。体部は横位ＲＬ。内面研磨を加える。口唇部に赤彩を見る	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	346	縄文土器 鉢	1E10 口縁～体部1/3 残存	口	(12.0)			細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部は僅かに外反し焼成前小孔を２個１対穿つ。体部は無文で弱い撫で、内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第63図 PL.61	347	縄文土器 鉢	1E10 口縁一部～体部 1/2残存					粗:石英大・白色粒・/良好/暗灰黄色	口縁部外反し体部強く内湾する。口唇端部に沈線を施す。頸部は無文で体部境に僅かな段差を設け体部は縦位条痕文を施す。体部内面に横位条痕文が残る	縄文晩期末葉
第64図 PL.61	348	縄文土器 鉢	1D11 頸部～体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	口縁部下は横位沈線群を配し頸部は無文。体部上半は横位沈線で画され斜位沈線や横位沈線による菱形連繋文が配される。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第64図 PL.61	349	縄文土器 鉢	1C11 体部破片					細:石英粒・褐色粒・白色粒/良好/明黄褐色	体部上半か。横位沈線２条に挟まれた間を横位矢羽状短沈線を充填する。体部下半は浅い縦位条痕文を施す。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第64図 PL.61	350	縄文土器 鉢	1D12 体部破片					細:石英・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	体部屈曲部に横位沈線と三叉状の陰刻文を配す。頸部には斜位沈線を施す。内面平滑な横位撫で調整	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第64図 PL.61	351	縄文土器 鉢	1E5 頸部～体部上半 破片					細:石英・片岩粒・雲母・白色粒/良好/黒色	僅かな段差で体部と画す。体部上半に横位沈線と陰刻文による変形工字文を配す。施文は深い。地文は細縄文横位ＬＲ。頸部及び内面に丁寧な研磨を加える	縄文晩期末葉
第64図 PL.61	352	縄文土器 鉢	1D12 体部破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/黒褐色	頸部外反し無文。体部上半に横位沈線と刺突文を配す。下半は斜位条痕文を施す。外面に赤彩痕。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉
第64図 PL.61	353	縄文土器 浅鉢	1G7 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	体部屈曲する。上半は横位沈線と陰刻文による変形工字文が配され下半はＬＲを施す。内面平滑な撫で調整。赤彩痕が僅かに残る	縄文晩期末葉
第64図 PL.61	354	縄文土器 鉢	1D12 体部破片					細:石英粒・白色粒/良好/黒褐色	体部屈曲する。横位沈線と三叉状陰刻文による変形工字文が多段委配される。体部下半はＬＲを施す。外面に赤彩痕残る。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	355	縄文土器 鉢	1F9 体部破片					細:石英・チャート少・白色粒/良好/にぶい赤褐色	内湾する体部。上半は横位沈線と三叉状陰刻文による変形工字文を多段に配す。下半及び地文は横位ＬＲ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	356	縄文土器 鉢	1F9 体部破片					粗:石英・雲母末・褐色粒・白色粒/やや軟質/にぶい橙色	内湾する体部。上半は横位沈線群が配され縦位刺突文が重なる。下半は横位ＬＲを施す。内面弱い撫で調整	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	357	縄文土器 鉢	0 体部破片					細:石英・輝石多/良好/黄灰色	体部上半。横位沈線で画され、弧状沈線を充填する。不整形な陰刻文も施される。内面無調整	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	358	縄文土器 鉢	1D12 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰褐色	体部中位か。上位は縦位沈線で画され、沈線による横位楕円状意匠が配される。下位はＬＲを施す。外面に赤彩痕が残る。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	359	縄文土器 鉢	1E11 体部破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	横位沈線と斜位沈線による交互三角区画文を配す横位区画交点には小隆起を伴う刺突文が加わる。地文に横位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	360	縄文土器 浅鉢	1G5 体部破片					細:石英・輝石・チャート/良好/にぶい黄橙色	体部上半はやや太い横位沈線による変形工字文を多段に配す。下半は横位ＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	361	縄文土器 鉢	1E7 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	横位沈線と三叉状の陰刻文による変形工字文を多段に配す。陰刻文は隆起を伴う。地文は横位ＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	362	縄文土器 鉢	1E10 体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/暗灰黄色	体部内湾する。上半には横位・斜位沈線と陰刻文による変形工字文が配される。下半は横位ＬＲを施す。内外面とも丁寧な研磨を加え煤が付着する	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	363	縄文土器 鉢	1F6 体部破片					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/にぶい橙色	内傾する体部上半か。横位・弧状沈線と三叉状陰刻文及び隆起を伴う縦位刺突文による変形工字文が多段に配される。内面弱い撫で調整	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	364	縄文土器 鉢	1F4 体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/灰黄褐色	体部上半に横位弧状沈線と陰刻文による変形工字文を多段に配し、下半は細縄文ＬＲを施す。内面研磨	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	365	縄文土器 浅鉢	1D11 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	体部中位で内湾。上半は横位沈線で画され沈線による交互三角状意匠が配される。下半はＬＲを施す。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	366	縄文土器 鉢	1F5 体部破片					粗:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	体部上半は横位沈線と陰刻文による変形工字文が配される。下半は斜位ＬＲを施す。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	367	縄文土器 鉢	1E11 体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	体部上半か。頸部無文下に浮線による網目状意匠が配される。外面に赤彩痕が残る。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	368	縄文土器 鉢	1C11 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	頸部外反し体部上半に２条の横位浮線と瘤状小突起を設ける。以下横位沈線群が配される。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	369	縄文土器 鉢	1D12 体部破片					細:石英・雲母・白色粒/良好/にぶい黄橙色	上半には横位浮線による網目状文が配される。下位は斜位沈線による矢羽状意匠か。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第64図 PL.62	370	縄文土器 鉢	1E5 体部破片					細:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/浅黄色	内傾する体部上半か。上位に横位沈線２条を設け斜位沈線末端が小渦巻文意匠が配される。体部屈曲部に横位沈線と三叉状陰刻文が施される。変形工字文か。内面平滑な撫で	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	371	縄文土器 鉢	1E5 頸部～体部上半 破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/褐灰色	強い屈曲部上位に横位沈線群と三叉状陰刻文による変形工字文が配され、下位はＬＲを施す。内外面に赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	372	縄文土器 鉢	1F8 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	あるいはミニチュアか。体部内湾し横位沈線２条に画された間を横位短沈線が配される。地文は横位ＬＲ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	373	縄文土器 鉢	1E7 体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	体部上半か。上位に横位隆線を設け、下半に横位沈線を施す。外面研磨を加え赤彩を施す。内面弱い撫で	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	374	縄文土器 鉢	1F5 体部破片					細:石英・雲母末・白色粒/良好/にぶい黄橙色	体部上半か。横位沈線間に沈線による楕円状意匠や斜位沈線が配される。内外面とも研磨を加える	縄文晩期末葉
第64図 PL.62	375	縄文土器 鉢	1E11 体部破片					粗:輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	頸部に横位平行沈線を設け屈曲下は沈線で画された方形区画文が配され斜位短沈線を充填する。区画隅は三叉文を陰刻する。内面平滑な撫で調整	縄文中期中葉
第64図 PL.62	376	縄文土器 鉢	1E4 体部破片					細:石英粒・雲母末・白色粒/良好/灰黄褐色	横位沈線数条と隆起を伴う縦位刺突文を施す。内外面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第65図 PL.62	377	縄文土器 浅鉢	1F8 口縁～体部下半 1/3残存	口	(21.0)			細:石英・雲母・片岩・褐色粒・白色粒/良好/浅黄橙色	口縁～体部強く開く身浅の浅鉢。口縁部に横位沈線１条を設け以下横位沈線と縦位短沈線による変形工字文が配される。体部下半は無文。内面平滑な撫で調整。外面赤彩残る	縄文晩期末葉
第65図 PL.62	378	縄文土器 浅鉢	1E4 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	口縁部に横位沈線と三叉状の陰刻文などによる変形工字文を多段に配す。体部はＬＲを施す。内面平滑な撫で調整。外面赤彩痕残る	縄文晩期末葉
第65図 PL.62	379	縄文土器 浅鉢	1F4 口縁部破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/褐灰色	口縁部～体部上半に横位沈線と陰刻文による変形工字文が配され、下位に横位沈線を数条施す。内外面研磨	縄文晩期末葉
第65図 PL.62	380	縄文土器 浅鉢	1F4 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい褐色	口縁部～体部上半に横位沈線と三叉状の陰刻文による変形工字文が多段に配される。内外面研磨を加え外面赤彩を施す	縄文晩期末葉
第65図 PL.62	381	縄文土器 浅鉢	1F6 口縁部～体部破片	口	(20.0)			細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい赤褐色	横位沈線群による変形工字文。接点部分の一部が浮線化する。体部は横位ＬＲ。内面平滑な撫で。外面に赤彩	縄文晩期末葉
第65図 PL.62	382	縄文土器 浅鉢	1E4 口縁～体部破片					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	口縁部に横位沈線群と三叉状の陰刻文による変形工字文を多段に配す。体部はＬＲを施す。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第65図 PL.62	383	縄文土器 浅鉢	1D12 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	口縁部内湾。口縁部に横位沈線と三叉状陰刻文による変形工字文を配す。体部は無文で平滑な撫で調整。内面研磨を加える。外面赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第65図 PL.62	384	縄文土器 浅鉢	1D12 口縁～体部1/5 残存	口	(20.0)			細:石英・片岩粒・白色粒/良好/褐灰色	内湾する口縁部に横位沈線と隆起する陰刻による変形工字文が多段に配される。体部は細縄文ＬＲを横位に施す。内面平滑な撫で調整。外面赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第65図 PL.62	385	縄文土器 浅鉢	1F6 口縁部～体部破片					細:石英粒・輝石・白色粒/良好/黒褐色	口縁部に横位沈線群と三叉状の陰刻文による変形工字文を多段に配す。体部は縦位沈線２条が垂下する。口唇部と体部境の沈線間には刺突文を充填する。口縁部内面横位沈線を設ける。内外面研磨、外面に赤彩痕残る	縄文晩期末葉
第65図 PL.62	386	縄文土器 浅鉢	1E4 口縁～体部1/3 残存	口	(24.2)			細:石英・輝石・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/褐色	やや大型の浅鉢。口縁部に小突起と横位沈線を交互に配し、幅狭の無文部を設け体部は僅かな段差で画される。上半に浮線文による網目状文が配される。起点に刺突文を加える。外面に赤彩、内面は研磨を加える	縄文晩期末葉
第65図 PL.63	387	縄文土器 台付鉢	1E10 口縁～体部3/4 ～脚部1/4残存	口 高	16.2 13.5	底	7.0	細:石英・輝石・片岩・雲母・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁～体部は大きく内湾し脚部はやや直立気味に開く。口縁部に横位沈線を４条設け、縦位刺突文を等間隔に重ねる。内外面とも研磨を加える。	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第65図 PL.63	388	縄文土器 浅鉢	1F7 口縁1/2～底部残存	口	20.4	底	7.0	細:石英・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部に沈線による網目状文を配す。沈線交点に強い刺突による隆起を見る。体部は横位ＬＲを施す。内面口縁部は肥厚し体部は弱い研磨を加える。	縄文晩期末葉
第65図 PL.63	389	縄文土器 浅鉢	1F10 口縁～体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	口縁～体部一体化して内湾。口縁部は横位沈線と陰刻文による変形工字文を多段に配す。体部は横位ＬＲ。内面丁寧な研磨を加える。内外面赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第65図 PL.63	390	縄文土器 浅鉢	1F6 口縁部破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/浅黄色	口縁部に横位・弧状沈線と三叉状陰刻文、縦位刺突文による変形工字文が配される。内面研磨	縄文晩期末葉
第65図 PL.63	391	縄文土器 浅鉢	1C12 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部横位沈線を設け小隆起を伴う刺突文より斜位弧状沈線が派生する。変形工字文か。地文は横位ＬＲ。内面研磨。赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第65図 PL.63	392	縄文土器 浅鉢	1F8 口縁部破片					細:石英・輝石・雲母・白色粒/良好/灰褐色	口縁部内湾し横位沈線を基調とした変形工字文を配す。内外面研磨。外面赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第65図 PL.63	393	縄文土器 浅鉢	1F8 口縁部破片					細:石英・輝石・雲母・白色粒/良好/黒褐色	口縁部に２条の横位・斜位沈線による変形工字文を配す。口縁部内面にも横位沈線１条を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第65図 PL.63	394	縄文土器 浅鉢	1F8 体部破片					細:石英・白色粒/良好/にぶい黄橙色	体部上半は横位沈線と斜位沈線などによる変形工字文か。下半は横位ＬＲを施す。内面研磨、外面に赤彩痕	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	395	縄文土器 浅鉢	1C11 口縁～体部1/4残存	口	(20.0)			細:石英・輝石・白色粒/良好/褐灰色	口唇部に刺突を加えた小突起を付す。頸部は外反し体部は浮線による網目状意匠が配される。交点には刺突文を置く。内面研磨。外面赤彩が残る	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	396	縄文土器 浅鉢	1D11 口縁～体部1/5残存	口	(24.0)			細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部に横位沈線と小突起を設け頸部は外反し無文。体部は浮線による網目状意匠を配す。交点には刺突を加えた小突起を付す。内外面に赤彩を見る	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	397	縄文土器 浅鉢	1E11 口縁～体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	小波状突起を付す。口縁部に横位沈線を配し波頂部に縦位刺突文を加える。地文はＬＲ。頸部は外反し無文。体部は浮線による網目状意匠を多段に配す。交点には縦位刺突文を施す。外面赤彩。内面丁寧な研磨を加える	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	398	縄文土器 浅鉢	1D12 口縁～体部破片					細:輝石・白色粒/良好/黒褐色	口唇部に刺突を加えた小突起と横位短沈線を施す。頸部は外反し体部上半は浮線による網目状意匠を配す。内面丁寧な研磨を加える	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	399	縄文土器 浅鉢	1E11 口縁部破片					細:石英・白色粒/良好/暗灰黄色	口縁部に浮線による網目状意匠を配す。外面赤彩痕が残る。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	400	縄文土器 浅鉢	1E10 口縁～体部1/3残存	口	(27.2)			細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい褐色	僅かに肥厚する口縁部に縦位刺突文を施す。以下凹線が巡り体部は横位・斜位沈線による網目状文が配される。交点には縦位刺突文を配す。内面研磨、外面赤彩を加える	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	401	縄文土器 浅鉢	1E10 口縁部破片					細:石英・褐色粒・白色粒/良好/橙色	口縁部下に凹線を設け体部は浮線による網目状文を配す。交点に小突起を付し刺突文を重ねる。内面研磨。内外面に赤彩を施す	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	402	縄文土器 浅鉢	1C・D11 口縁～体部1/4残存	口	(25.0)			細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/浅黄色	平縁。口縁部に円形刺突を加え両脇を隆起させる。頸部の僅かな段差で口縁部と体部を画し、体部上半は浮線による細かな網目状文が配される。やや雑な施文。内面平滑な撫で。赤彩を加える	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	403	縄文土器 浅鉢	1D12 口縁～体部破片	口	(19.8)			細:石英・輝石・白色粒/良好/暗灰黄色	緩やかな小波状縁を呈す。単位は不明。浮線による網目状文を配す。浮線の基点は小瘤状とし刻みを付す。内外面研磨。赤彩僅かに残る	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	404	縄文土器 浅鉢	1E10 口縁～体部下半1/3残存	口	(24.0)			細:石英粒・雲母末・白色粒/良好/黒褐色	口縁部に小波状突起を付し縦位刺突文を重ねる。凹線を巡らし体部は浮線による網目状意匠が配される。内面研磨を加える。体部器面の剥落著しい。	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	405	縄文土器 浅鉢	1F5 口縁部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	口縁部に横位沈線と三叉状陰刻文による網目状意匠が配される。口縁部内面にも横位沈線を設け丁寧な研磨を加える。内外面に赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	406	縄文土器 甕・深鉢	1E6 口縁～体部破片					細:石英・片岩・雲母・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部小波状突起に縦位刺突文を加える。体部は浮線による網目状文が配される。内外面研磨。赤彩残る	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第66図 PL.63	407	縄文土器 浅鉢	1E5 口縁部破片					細:輝石・雲母少・白色粒/良好/褐灰色	僅かに内湾する口縁部。浮線による網目状意匠が配される。内面研磨。外面赤彩痕残る	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	408	縄文土器 浅鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部緩やかに内湾し横位沈線と三叉状陰刻文による変形工字文が多段に配される。施文は浅い。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	409	縄文土器 浅鉢	1E10 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部下に凹線を設け体部は浮線による網目状文を配す。内面研磨。内外面に赤彩を施す	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	410	縄文土器 浅鉢	1E5 口縁～体部破片					粗:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	緩やかな波状縁。波頂下に三叉状陰刻文を縦位に３段設け横位沈線群が繋ぐ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	411	縄文土器 浅鉢	1D11 体部破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/黒褐色	体部上半は浮線による網目状意匠が配される。下半は無文で内外面とも研磨を加える。赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	412	縄文土器 浅鉢	1E11 口縁～体部破片					細:石英・片岩・白色粒/良好/灰黄色	口縁部に横位沈線１条を設け頸部は僅かな段差で画される。体部は浮線と沈線による網目状意匠が配される。外面赤彩痕が残る。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	413	縄文土器 浅鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい赤褐色	口縁部に刺突を加えた小突起を配す。以下浮線による網目状意匠が配される。交点には刺突を加えた小突起を付す。内面研磨。外面に赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第66図 PL.63	414	縄文土器 鉢	0 口縁～体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	口縁部に環状小突起を付す。以下強い段差を設け体部は浮線によるレンズ状意匠や網目状意匠が配される。外面赤彩残る。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第66図 PL.64	415	縄文土器 鉢	1E6 口縁～体部1/3残存	口	(26.0)			細:石英・輝石・片岩粒少/良好/褐灰色	口縁部に横位凹線と浮線による波状意匠と浮線によるレンズ状意匠を配す。体部は無文。内外面平滑な撫で調整で赤彩を加える。外面に煤付着　遺構外№25と同一個体か	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	416	縄文土器 浅鉢	1E5 口縁一部～底部残存	口 高	(17.0) 6.1	底	3.8	細:石英・輝石・雲母末・白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部下外反し体部上半は横位浮線を基調とした網目状意匠が配される。交点に縦位刺突文を施す。内外面とも研磨を加え赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	417	縄文土器 浅鉢	1D11 口縁部1/4残存	口	(16.0)			細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	緩やかな波状縁だが正円ではない可能性もある。円形刺突を加えた浮線で弧状意匠を描き、内縁を浮線文で半円状意匠を配す。内外面丁寧な研磨を加える	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	418	縄文土器 浅鉢	1C12 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/灰白色	口縁部横位浮線と体部中位の横位浮線で体部を画し浮線による重弧状意匠が配される。交点に刺突も加えた小突起を付す。内外面研磨、赤彩を施す	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	419	縄文土器 浅鉢	1F5 口縁～体部1/3残存	口 高	(20.2) 9.5	底	6.0	細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/橙色	口縁部波状突起。６単位か。口縁部に２条の横位沈線を設け以下体部は横位ＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	420	縄文土器 浅鉢	1F10 口縁～体部上半破片					細:石英・褐色粒・白色粒/良好/黒褐色	口縁部下に僅かな段差を設け体部と画し、体部上半に横位沈線３条を配す。地文及び下半は横位ＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	421	縄文土器 浅鉢	1D11 口縁部破片					細:石英粒・白色粒/良好/にぶい褐色	口縁部に横位沈線３条を設け地文に横位ＬＲを施す。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	422	縄文土器 浅鉢	1D11 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	口縁部に凹線を設け以下横位沈線３条を配す。内外面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	423	縄文土器 浅鉢	1E11 口縁～体部上半破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	内湾する口縁部。２条の横位沈線間に縦位刺突文と横位短沈線を交互に配す。内外面研磨。外面赤彩痕残る	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	424	縄文土器 浅鉢	１F5･7 体部～底部破片					細:石英・片岩・雲母末・白色粒/良好/黄褐色	底面摩滅。体部上半に横位沈線３条を配す。施文は深い。下半はＬＲを施す。内面研磨。内外面赤彩	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	425	縄文土器 浅鉢	1E10 口縁部1/3～底部残存	口 高	(18.6) 6.2	底	6.0	細:石英・白色粒/良好/灰黄褐色	口縁部外傾し体部～底部は直線的に開く。口縁部に１条と体部屈曲部に２条の横位沈線を設ける。口縁部内面も横位沈線を施す。他は無文で内外面とも平滑な撫で調整	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第67図 PL.64	426	縄文土器 浅鉢	1C12 口縁～体部破片					細:石英･輝石･白色粒/良好/灰褐色	口縁～体部内湾し口縁部に弧状小突起を付す。突起下端より幅広の横位沈線が派生する。体部は無文。内外面とも弱い研磨を加える	縄文後期後半
第67図 PL.64	427	縄文土器 浅鉢	1D11 口縁～体部破片					細:石英･白色粒/良好/褐灰色	緩やかな波状縁を呈す。口縁部横位細隆線を設け凹線を側線とする。体部は無文で内外面とも丁寧な研磨	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	428	縄文土器 浅鉢	1D12 口縁～体部破片					細:石英･雲母･白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁～体部一体化し強く開く。口縁部横位沈線を設ける。体部は無文。内外面丁寧な研磨を加え赤彩を施す	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	429	縄文土器 浅鉢	1E11 口縁～体部上半破片					細:石英･片岩粒･白色粒/良好/暗褐色	内湾する口縁部。三叉状の陰刻文と短沈線を交互に配す。内外面丁寧な研磨を加え外面に赤彩が残る	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	430	縄文土器 浅鉢	1E10 口縁～体部破片					細:石英･輝石･白色粒/良好/にぶい黄褐色	波状縁。波頂部小突起に刺突文を施す。口縁部は横位結節沈線２条を設ける。口縁部内面も横位沈線を施す。体部は無文で内外面研磨	縄文晩期末葉
第67図 PL.64	431	縄文土器 浅鉢	1F7 口縁～体部破片					細:石英･輝石･褐色粒･白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部横位沈線１条を設ける。体部は無文で平滑な撫で調整。内面は弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第68図 PL.64	432	縄文土器 浅鉢	1F4 口縁～体部1/3残存	口	(13.0)			細:石英･片岩･白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁～体部内湾し口縁部に横位沈線１条を設ける。体部はＬＲを施す。内面横位撫で調整。外器面摩滅	縄文晩期末葉
第68図 PL.64	433	縄文土器 浅鉢	1F9 口縁～体部上半1/3残存	口	(27.4)			細:石英粒･白色粒/良好/黒褐色	口縁部横位沈線を設ける。以下細縄文ＬＲを施す。内面横位研磨。内外面赤彩痕が残る。内面に漆あるいは油煙状の付着物を見る	縄文晩期末葉
第68図 PL.65	434	縄文土器 浅鉢	1F7 口縁1/4～底部残存	口 高	(29.6) 10.5	底	4.6	細:石英･片岩･褐色粒･白色粒/良好/明黄褐色	大型の浅鉢。口縁部に横位沈線１条を設け内湾する体部は細い撚糸Ｌが覆う。底面に木葉痕。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第68図 PL.65	435	縄文土器 浅鉢	1F4 口縁～体部1/4残存	口	(17.8)			細:石英･片岩粒･白色粒/良好/暗灰黄色	器厚薄手。口縁～体部内湾する。口縁部に横位沈線1条を設ける。体部は無節Ｒを縦位･斜位施文し撫でを重ねる。内面平滑な撫で調整。外器面は被熱痕跡を見る	縄文晩期末葉
第68図 PL.65	436	縄文土器 浅鉢	1D11 口縁～体部1/3残存	口	(18.0)			細:石英･輝石･片岩粒･白色粒/良好/褐色	丸底を呈す。口縁部横位沈線を設け、体部は細縄文ＬＲを施す。内面研磨を加える。内外面赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第68図 PL.65	437	縄文土器 浅鉢	1D11 口縁～体部1/4残存	口	(27.8)			細:石英粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部横位沈線を設ける。以下体部は細縄文ＬＲが覆う。内面横位研磨。外面に赤彩、煤付着。内面に油煙あるいは漆状の付着物を見る	縄文晩期末葉
第68図 PL.65	438	縄文土器 浅鉢	1D11 口縁～体部1/4残存	口	(19.0)			細:石英･片岩粒･雲母･白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部横位沈線を設け体部は横位･斜位ＬＲを施す。内面丁寧な研磨。外面に赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第68図 PL.65	439	縄文土器 浅鉢	1F4 口縁～体部1/4残存	口	(21.0)			細:石英･輝石･片岩粒･白色粒/良好/浅黄色	口縁部に幅広の横位沈線１条を設ける。体部は横位･斜位ＬＲが覆う。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第68図 PL.65	440	縄文土器 浅鉢	1E5 口縁～体部1/3残存	口	(24.8)			細:石英･片岩粒･白色粒/良好/浅黄橙色	やや幅広の口縁部横位沈線を設け以下体部はＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第68図 PL.65	441	縄文土器 浅鉢	1E10･11 口縁部1/3～底部残存	口 高	(36.3) (19.7)	底	8.0	粗:石英･輝石･白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	大型の浅鉢。口縁部横位沈線を設け、体部は細縄文ＬＲが覆う。内面は平滑な撫で調整。口縁～体部の歪みが大きいため口径と高さは推定値となった	縄文晩期末葉
第69図 PL.65	442	縄文土器 浅鉢	1D7 口縁～体部破片					細:石英･片岩･白色粒/良好/にぶい黄褐色	波状突起を付す。頂部に狭小な面を持ち短沈線を施す。口縁部横位沈線２条を設け、体部は細縄文ＬＲが覆う。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第69図 PL.65	443	縄文土器 浅鉢	1E11 口縁～体部破片					細:石英･白色粒/良好/橙色	口縁部にやや幅広の横位沈線１条を設け体部はＬＲが覆う。内面研磨。外面に赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第69図 PL.65	444	縄文土器 浅鉢	1F7 口縁～体部1/4残存	口	(28.6)			細:石英･片岩･白色粒/良好/にぶい黄色	口縁部横位沈線を設け体部は斜位ＬＲが覆う。内面研磨を加える。内面に黒褐色付着物を見る。漆か	縄文晩期末葉
第69図 PL.65	445	縄文土器 浅鉢	1F6 口縁～体部破片					細:石英･片岩粒･白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部に幅広の横位沈線を設ける。以下細縄文ＬＲが覆う。内面研磨を加え、油煙あるいは漆状の付着物を見る	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第69図 PL.65	446	縄文土器 浅鉢	1E4･5 口縁～体部破片					細:石英･輝石･褐色粒･白色粒/良好/灰褐色	口縁部横位沈線１条を設け以下体部は細縄文ＬＲを施す。内面研磨を加える。内外面赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第69図 PL.65	447	縄文土器 浅鉢	1F5 口縁部破片					細:石英･片岩粒･白色粒/良好/黒褐色	口縁部に横位沈線１条を設ける。体部は横位･斜位ＬＲが覆う。内面平滑な撫で調整。外面に赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第69図 PL.65	448	縄文土器 浅鉢	1F6 口縁部破片					細:石英･輝石･褐色粒･白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部横位沈線を設ける。以下体部は横位無節Ｌが施される。内面弱い研磨。外面に赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第69図 PL.66	449	縄文土器 浅鉢	1F6 口縁～体部破片					細:石英･輝石･片岩粒･白色粒/良好/黒褐色	口縁部に幅広の横位沈線を設ける。以下細縄文ＬＲが覆う。内面研磨を加える。外面に赤彩痕を見る	縄文晩期末葉
第69図 PL.66	450	縄文土器 浅鉢	1E11 口縁～体部破片					細:石英･輝石･白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部横位沈線を１条設け、体部は横位ＬＲを施す。外面赤彩痕。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第69図 PL.66	451	縄文土器 浅鉢	1E4 口縁部破片					細:石英･片岩粒･白色粒/やや軟質/浅黄橙色	口縁部横位沈線を設け体部は細縄文ＬＲを施す。内面は弱い研磨を加える。補修孔を穿つ。内面からの穿孔である	縄文晩期末葉
第69図 PL.66	452	縄文土器 浅鉢	1F5 口縁部破片					細:石英･輝石･片岩粒･白色粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部横位沈線を設け、以下横位ＬＲが覆う。内面平滑な撫で調整。内外面に赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第69図 PL.66	453	縄文土器 浅鉢	1D11 口縁部破片					粗:石英･雲母末･チャート･褐色粒/良好/暗褐色	口縁～体部一体化し薄手。撚糸Ｌが横位･斜位施文される。内面弱い研磨を加える。外面口縁部に赤彩を見る。	縄文晩期末葉
第69図 PL.66	454	縄文土器 浅鉢	1E5 口縁～体部破片					細:石英･白色粒/良好/黒褐色	双波状突起を付す。口縁～体部一体化し無節Ｌが覆う。内面横位研磨を加える	縄文晩期末葉
第69図 PL.66	455	縄文土器 浅鉢	1F8 口縁～底部1/3残存	口	(15.0)			細:石英･輝石･片岩粒･白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁～底部内湾し丸底を呈す。無文で内外面に研磨を加え赤彩を施す	縄文晩期末葉
第69図 PL.66	456	縄文土器 浅鉢	1F7 口縁～体部1/4残存	口	(22.4)			細:石英･輝石･白色粒/やや軟質/黒褐色	小波状縁。口縁部外反し体部内湾する。無文で口縁部は研磨体部は弱い研磨を加える。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第69図 PL.66	457	縄文･弥生 浅鉢	1E4 口縁～体部破片					細:石英･輝石･白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁～体部一体化して内湾気味に開く。内外面とも平滑な撫で調整を施し、外面は赤彩が残る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第69図 PL.66	458	縄文土器 浅鉢	1E11 口縁～体部上半破片					細:石英･片岩粒･雲母末･白色粒/良好/灰黄褐色	口縁部内湾。無文で内外面とも研磨を加える。口縁部内面に横位沈線を施す	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	459	縄文土器 壺	1F6 口縁～体部1/2残存	口	9.8			粗:石英･輝石･白色粒/良好/灰黄褐色	口縁部に刺突を重ねる小突起を付す。単位は不明。肩部は浮線による網目状文が配され焼成前単孔を穿つ。体部は無文か。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	460	縄文土器 壺	1E6 口縁～体部破片					粗:石英･片岩粒･白色粒/良好/灰黄褐色	欠損部あるいは波状突起か。頸部で強く屈曲し体部上半に横位沈線２条を設ける。以下斜位短沈線や弧状沈線を配す。地文は斜位条痕文。口縁部内面に２条の横位沈線を施す。弱い撫で調整	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	461	縄文土器 壺	1F6 口縁部破片					細:石英･片岩粒･白色粒/良好/褐色	口縁部に焼成前小孔を穿つ。肩部は僅かな段差で画され沈線による方形小区画文が配され横位短沈線を充填する。外面研磨、内面平滑な撫で調整を施す	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	462	弥生土器 壺	1F7 口縁～体部破片２点	口	(6.8)			細:石英･片岩･白色粒/やや軟質/褐色	口縁～体部は直立気味で無文。僅かな段差で体部と画し、体部はＬＲが覆う。内面平滑な撫で。赤彩	弥生前期併行？
第70図 PL.66	463	縄文土器 壺	1D11 口縁～体部上半破片					細:石英･片岩粒･白色粒/良好/にぶい黄橙色	小波状突起を付す。頸部は外反し僅かな段差で口縁部と体部を画す。無文で内外面とも研磨を加える。外縁に赤彩を見る	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	464	縄文土器 壺	1F4 口縁～体部上半1/3残存	口	(7.8)			細:石英･白色粒/良好/橙色	波状突起を付すか。口縁部は外傾し横位隆線を設ける。頸部は僅かな段差で画す。体部は無文。外面及び口縁部内面研磨、体部内面は弱い撫でのため輪積み痕が残る。赤彩	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第70図 PL.66	465	縄文土器 壺	1F5 口縁～頸部破片					細:石英・白色粒/良好/黒褐色	口唇端部に刺突文を連続し口縁～頸部はＬＲが覆う。内面斜位削り調整後弱い撫で	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	466	縄文土器 壺	1D11・12 口縁～体部上半残存	口	12.6			細:石英・雲母・白色粒/良好/灰黄褐色	やや厚手の器厚。波状突起５単位を配す。口縁～頸部は無文で幅広の横位沈線で体部と画す。体部は縦位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	467	縄文・弥生 壺	1E4 口縁～頸部1/3残存	口	(5.7)			細:石英・輝石・白色粒/良好/明褐色	口縁～頸部緩やかに外反し無文。内外面とも平滑な撫で調整を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第70図 PL.66	468	縄文土器 壺	1F4 口縁～体部上半1/4残存	口	(8.5)			細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/やや軟質/橙色	小波状口縁。頸部は外反し肩部に横位沈線を主とした楕円状の工字文を配す。口縁部内外面は研磨、体部内面は弱い撫で調整のため輪積み痕が残る	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	469	縄文土器 壺	1E5 口縁部1/3残存	口	(7.8)			細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状口縁。おそらく４単位。口縁部に横位沈線１条を設ける。頸部は外反し体部上半に途切れ気味の沈線を施す。内外面研磨	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	470	縄文土器 壺？	1E6 口縁～頸部1/3残存	口	(10.0)			細:石英・白色粒/良好/褐色	薄手の波状口縁を呈し頸部屈曲する。無文で内外面とも研磨を加え赤彩を施す。	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	471	縄文土器 壺	1E7 口縁～体部1/3残存	口	(11.0)			細:石英・輝石・雲母少・白色粒/良好/灰色	広口壺か。直立気味の口縁部で肩部は張る。口縁部に円形刺突文と横位短沈線を交互に配す。単位は不明。内面撫で調整	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	472	縄文土器 甕・深鉢	1D12 口縁～頸部破片					細:石英・輝石・雲母末・白色粒/良好/にぶい赤褐色	口唇端部に沈線、口唇部に波状小突起と横位沈線を配し口縁部には横位沈線と横位刺突文が配される。頸部は無文。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	473	縄文土器 壺	1F5 口縁～頸部1/4残存	口	(10.2)			細:輝石・白色粒/良好/橙色	緩やかな波状縁。口唇端部にＬＲを施す。頸部は無文で肩部に横位沈線や横位短沈線を設ける。内面撫で調整	縄文晩期末葉
第70図 PL.66	474	縄文・弥生 壺？	1F10 口縁～体部破片	口	(5.1)			細:石英・雲母・白色粒/良好/にぶい褐色	緩やかな波状縁。口縁～体部に外反部を多段に設ける。無文で外面に赤彩痕を見る。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第70図 PL.66	475	弥生土器 壺	1F7 口縁部～体部1/4残存	口	(7.8)			細:石英・輝石・チャート・白色粒/良好/黄灰色	小径で長胴形の壺。口縁～頸部は無文で僅かな段差で体部と画す。体部は縦位・斜位条痕文を施す。内面弱い研磨。外面口縁部に赤彩。体部に少量の煤付着	弥生前期併行
第70図 PL.67	476	弥生土器 壺	1C11 口縁部1/4～体部1/2残存	口	(8.0)			細:石英・輝石・白色粒/良好/暗灰黄色	長胴形の異形の壺。現存高で約30cmを測る。口縁部は横位沈線で画され斜位ＬＲを施す。頸部は外反し無文。体部は僅かな段差で画され２・３条の横位沈線が多段に配される。地文はＬＲ。内面横位削り調整後肩部は撫で口縁部は研磨を施す。被熱痕跡は下半に見る	弥生前期併行 異系統か
第71図 PL.67	477	縄文・弥生 壺	1D12 口縁部・体部破片２点					粗:石英・雲母多・白色粒/良好/褐色	口唇端部に浅い押圧を加え小波状となす。口縁部は外反し縦位条痕文を施す。体部は２条の横位沈線に画された間を沈線による交互三角区画文が配される。区画中位は陰刻文を充てる。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第71図 PL.67	478	弥生土器 壺	1D11・12・1E10 口縁～頸部1/4残存・頸部破片	口	(9.8)			細:石英粒・白色粒/良好/明赤褐色	小径の頸部。口唇部に刻み、口縁部に横位沈線３条を設ける。頸部は縦位沈線３条による幅狭区画を設け斜位短沈線と縦位沈線１条による意匠文を配す。また幅広区画内は横位沈線４条を多段に施す。外面赤彩。内外面研磨を加える	弥生前期併行 異系統か
第71図 PL.67	479	縄文・弥生 壺？	1D12 口縁部破片					細:石英粒・白色粒/良好/黒色	波状縁か。波頂部に面を持ち口唇端部に沈線を加える。突起両下端より派生した沈線による区画文が配され、区画内は横位沈線を充填する。地文は斜位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第71図 PL.67	480	縄文土器 壺	1E4 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	小径の口縁部。口縁部に棒状小突起を付し刺突文を重ねる。口縁部は沈線で画された楕円区画文と下位に横位沈線を設ける。体部は縦位沈線間を斜位交互短沈線が施される。内面平滑な撫で調整	縄文後期後半
第71図 PL.67	481	縄文土器 壺	1E5 口縁部破片					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	小波状突起を付し口縁～頸部は直立する。口唇端部にＬＲを施す。口縁部に横位沈線３条を設け頸部下端は横位沈線で画す。内外面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第71図 PL.67	482	縄文土器 壺	1F9 口縁部破片					細:石英粒・褐色粒・白色粒/良好/暗赤褐色	小径で口縁～頸部外反する。口縁部に横位細沈線３条を設ける。頸部及び内面には研磨を加える。外面に赤彩を施す	縄文晩期末葉
第71図 PL.67	483	縄文・弥生 壺	1E10 口縁部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/橙色	口縁部は強く外傾し棒状貼付を付す。頂部に縦位刺突文を加える。体部は無文。内面器面摩滅	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第71図 PL.67	484	弥生土器 壺	1E4 頸部～体部1/3残存					細:石英・雲母末・白色粒/良好/黄褐色	頸部は長く外反気味に開き体部は内湾する。頸部は沈線による縦位楕円状意匠を配す。体部は３条の沈線による大柄のクランク文や渦巻状意匠が配される。頸部内面は弱く体部は横位撫で調整。輪積み痕が残る	弥生前期併行か
第71図 PL.67	485	縄文土器 壺	1F7 肩部～体部下半1/3残存					細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄橙色	肩部は横位沈線を多段に配した変形工字文。横位沈線２条を充填する。体部中位は斜位撚糸Ｒ、下半は横位沈線４条を施す。内面は弱い撫で及び無調整で肩部に輪積み痕残る	縄文晩期末葉
第71図 PL.67	486	縄文・弥生 壺	1F7 肩部～底部1/3残存			底	(3.6)	細:石英・白色粒/良好/黄灰色	頸部外反。体部上半に幅広の隆帯、下半に横位沈線２条を設ける。底面に沈線による重楕円状意匠が配される。外面及び頸部内面は丁寧な研磨、体部は撫で調整。外面赤彩	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第71図 PL.67	487	縄文・弥生 壺	1E11 体部上半破片					細:石英・雲母・白色粒/良好/橙色	頸部下端に横位沈線を設け以下沈線による弧状意匠が配される。意匠の隅部には三叉状の陰刻文が施される。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第71図 PL.67	488	縄文・弥生 壺	1E4 体部破片					細:石英・白色粒/良好/灰黄褐色	肩部か。２条の沈線による縦位渦巻き状意匠が配される。内面弱い撫で調整。外面に赤彩を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第71図 PL.67	489	縄文土器 壺？	1F8 体部破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/やや軟質/淡黄色	体部上半に横位沈線４条を設ける。途切れ部の片側に２条短沈線の小弧線が連接する。体部下半は縦位条痕文が施される。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉
第71図 PL.67	490	弥生土器 壺？	1E5 体部破片					粗:石英・輝石・雲母・白色粒/良好/赤褐色	大型壺体部上半か。厚手の器厚を呈し内湾する体部。上半に細沈線による弧線文を重ねレンズ状意匠を横位連ねる。意匠内は格子目文も充填される。地文は斜位条痕文。下半は器面摩滅する。内面横位撫で調整、下半に煤が帯状に付着する。	弥生前期併行
第72図 PL.67	491	縄文土器 壺	1E10 頸部～体部破片					細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/黄褐色	頸部外反し無文。肩部は横位沈線２条で画され横位矢羽状短沈線を充填する。地文は斜位条痕文を密に施す。内面弱い横位研磨を加える	縄文晩期末葉
第72図 PL.68	492	縄文・弥生 壺	1D11 頸部～体部下半1/3残存					細:石英・褐色粒・白色粒/やや軟質/橙色	強く内湾する体部。肩部に横位沈線群を多段に配し体部は縦位条痕文を施す。内面弱い撫で調整で輪積み痕残る。外面肩部に煤付着。外器面磨滅	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第72図 PL.68	493	弥生土器 壺？	1E6 頸部～体部下半1/3残存					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	頸部は無文で平滑な撫で。体部上半が内湾し太い条痕文を斜位・縦位に施す。煤が付着する。内面頸部は研磨、体部は撫で調整	弥生前期併行 東海系
第72図 PL.68	494	縄文・弥生 壺	1D12 頸部～底部1/2残存			底	6.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	頸部外反し肩部は強く張る。頸部は無文で肩部に横位沈線1条を設ける。体部はＬＲが覆う。底面木葉痕が残る。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第72図 PL.68	495	縄文土器 壺	1D11 体部破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/橙色	体部上半に緩やかな屈曲を持たせ横位沈線３条を設ける。地文は細縄文ＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第72図 PL.68	496	縄文・弥生 壺	1E11 頸部～体部上半破片					粗:石英・片岩・白色粒/良好/灰黄褐色	体部上半に横位沈線が巡り上位に横位短沈線と刺突文を交互に配す。体部は平滑な撫で調整。内面は横位撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第72図 PL.68	497	縄文土器 壺	1E10 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい褐色	内湾する体部上半。横位ＬＲを施す。下半は無文で平滑な撫で調整。外面煤付着。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第73図 PL.68	498	縄文・弥生 壺	1F4・5 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	体部上半に横位ＬＲを施し下半は弱い研磨を加える。内面弱い横位研磨	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第73図 PL.68	499	縄文・弥生 壺	1E10 体部1/3残存					細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/にぶい褐色	体部中位が内湾する。横位・斜位ＬＲが覆う。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第73図 PL.68	500	弥生土器 壺	1F8 体部破片					粗:石英・片岩・褐色粒・チャート/良好/橙色	体部上半～中位か。上半は外反し中位は強く内湾する。太い条痕文が縦位・斜位に施される。工具は貝殻腹縁か。内面は平滑な撫で調整だが屈曲部に横位条痕文が残る	弥生前期併行 東海系
第73図 PL.68	501	縄文土器 壺	1D11・12 体部破片					細:石英・雲母・白色粒/良好/にぶい黄橙色	やや厚手の器厚。体部上半か。条痕文を縦位・斜位に施す。内面横位撫で調整。	縄文晩期末葉
第73図 PL.69	502	縄文・弥生 壺	1E11 体部1/4残存					細:石英・白色粒/良好/浅黄橙色	内湾する体部。外面は平滑な撫で、内面は横位撫で調整。外面下半に煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第74図 PL.69	503	弥生土器 壺	1G9 口縁～頸部1/4 残存	口	(17.2)			細:石英・輝石・白色粒/良好/明赤褐色	口縁～頸部強く外反する。口唇部に横位細沈線と細かな縦位刻み目を施す。頸部に横位隆線４条を配す。頸部及び体部はハケ目調整と横位撫で調整を施す。内面口縁部下にも横位隆線を付し平滑な撫で調整を施す	弥生前期
第74図 PL.69	504	弥生土器 壺	1E4・1F8 口縁～体部上半 1/3破片２点	口	(12.8)			粗:石英大・雲母/良好/にぶい橙色	口縁部に押圧を加えた突帯を設け、体部は横位幅広条痕が覆う。工具は貝殻腹縁か。頸部無文部は縦位撫で調整。内面弱い撫で調整で輪積み痕が残る	弥生前期併行 東海系
第74図 PL.69	505	弥生土器 壺	1E5・1F7～10 口縁～肩部1/4・肩部～体部破片・体部下半～底部破片 破片5点	口	(14.0)	底	(5.6)	粗:石英多・雲母/やや軟質/にぶい黄橙色	５点からなる。口縁部に強い押圧を加えた幅狭突帯を設け、頸部は斜位条痕文による縦位矢羽状文を配す。肩部は横位波状条痕文を２段設け、体部上半は横位条痕文が巡る。体部中位～下半は斜位条痕文が施される。条痕文は太く幅約2.0㎝５・６条単位で貝殻腹縁を工具とする。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行 東海系
第74図 PL.69	506	弥生土器 壺	1D10・11 口縁～頸部2/3 残存　破片3点	口	16.2			粗:石英多・雲母・白色粒/良好/橙色	口唇部に複列の連続刺突文、口縁部に押圧を加えた突帯を設ける。頸部は１条の沈線による波状文を配す。地文は斜位条痕文。口唇部刺突文及び条痕文の工具は貝殻腹縁か。内面横位撫で調整	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.69	507	弥生土器 壺	1F6 口縁～頸部1/2 残存	口	16.4			粗:石英多・雲母・白色粒/良好/橙色	口縁部に横位隆線と押圧を加えた突帯を設ける。以下頸部は貝殻腹縁による太い条痕文を横位に施す。内面弱い撫で調整で凹凸が残る	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.69	508	弥生土器 壺	1F8 口縁部破片					粗:石英大多・片岩粒・白色粒/良好/浅黄橙色	口唇部に貝殻腹縁による連続刺突文を加え、口縁部に押圧を加えた突帯を設ける。体部は横位幅広条痕を施す。内面横位撫で調整	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.69	509	弥生土器 壺	1F9 口縁部破片					粗:石英大多・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口唇部に複列の連続刺突文を加え、口縁部に押圧を加えた突帯を設ける。体部は横位幅広条痕を施す。工具は貝殻腹縁か。内面横位撫で調整	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.69	510	弥生土器 壺	1F6 口縁部破片					粗:石英多・片岩粒・白色粒/やや軟質/浅黄橙色	口唇端部に刺突文、口縁部に強い縦位刺突を加えた突帯を設ける。頸部は太い条痕文を横位に施す。内面は平滑な撫で調整。刺突文及び条痕文の工具は貝殻腹縁	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.69	511	弥生土器 壺	1F5 口縁部破片					粗:石英多・片岩・白色粒/やや軟質/浅黄色	口縁部に強い押圧を加えた突帯を設け以下横位条痕文を施す。工具は貝殻腹縁であろう。内面撫で調整を施すが凹凸が残る	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.69	512	弥生土器 壺	1F5 口縁部破片					粗:石英多・片岩粒・白色粒/やや軟質/明黄褐色	口唇端部に刺突文、口縁部に強い刺突を加えた突帯を設ける。頸部は太い条痕文を横位に施す。内面は撫で調整。刺突文及び条痕文の工具は貝殻腹縁	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.69	513	弥生土器 壺	1E5 口縁～頸部残存	口	8.0			細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口唇部に押圧を連続させ直下の突帯にもやや大型の押圧が加わる。頸部は縦位条痕文が施される。工具は貝殻腹縁か。内面研磨を施す	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.70	514	縄文・弥生 甕・深鉢	1D12 口縁部破片					細:石英・雲母・白色粒/やや軟質/明褐色	口縁部に円形刺突文と横位楕円状短沈線を施し頸部は浮線による横位連続楕円状文を多段に配す。体部は太い縦位条痕文を施す。口縁部内面には横位条痕文を僅かに見る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第75図 PL.70	515	弥生土器 壺？	1G11・12 口縁部1/3残存	口	(27.0)			細:石英・雲母少・白色粒/良好/橙色	口縁部に幅狭の突帯を設け押圧を連続する。頸部は外反し太い縦位条痕文を施す。工具は貝殻腹縁か。内面弱い横位研磨	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.70	516	弥生土器 壺	1D11 口縁部破片					粗:石英多・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口唇部に刺突、口縁部に強い押圧を加えた突帯を設ける。以下縦位条痕文を施す。内面は横位条痕文が明瞭に見られる。条痕文施文工具は貝殻腹縁	弥生前期併行 東海系

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第75図 PL.70	517	弥生土器 壺	1D10～12 口縁～頸部1/3残存 体部破片２点	口	(14.0)			粗:石英多・雲母・白色粒/良好/橙色	口縁～頸部外反する。口縁部強い刺突を加えた突帯を設ける。頸部地文は斜位条痕文。工具は貝殻腹縁か。内面平滑な横位撫で調整	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.70	518	弥生土器 壺	1F6 口縁部破片					粗:石英多・雲母・白色粒/やや軟質/橙色	口縁部に押圧を加えた突帯を配す。口唇端部には細かな刺突文を施す。頸部は外反し無文。内面弱い撫で	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.70	519	弥生土器 甕・深鉢	1E4 頸部破片					粗:石英・輝石少・雲母・白色粒/良好/にぶい黄橙色	薄手の器厚を呈す。強い押圧を加えた突帯を横位に設け、上位は斜位、下位は横位の太い条痕文を施す。原体は貝殻腹縁か。内面弱い撫で調整	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.70	520	弥生土器 壺	1F7・8 口縁～肩部1/3残存	口	(15.6)			粗:石英大多・片岩粒・白色粒/良好/橙色	広口壺か。口縁部強く外反し肩部は張る。貝殻腹縁による条痕文が横位・斜位に覆う。内面弱い撫で調整	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.70	521	弥生土器 壺	1F8 口縁～体部上半1/3残存	口	(21.0)			細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/浅黄橙色	口縁～頸部直立する広口の壺。口唇端部に面を持つ。口縁部に２条の横位隆帯を設け幅狭の横位区画文を配す頸部～体部及び口唇端部に太い条痕文を施す。工具は貝殻腹縁か。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行 東海系
第75図 PL.70	522	弥生土器 壺	1E7 口縁部～肩部1/2残存	口	6.5			細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/橙色	口縁部は外傾し頸部屈曲する。口縁～肩部はやや太い条痕文が斜位・横位に施される。内面弱い撫で調整	弥生前期併行 東海系
第76図 PL.70	523	弥生土器 壺	1E・F4・5 体部破片					粗:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/明褐色	大型壺。体部中位で強く内湾する。極めて太い条痕文を横位・斜位に施す。工具は貝殻腹縁か。内面横位撫で調整	弥生前期併行 東海系
第76図 PL.70	524	弥生土器 壺	1E5・1F4・5 体部破片					粗:石英・片岩・雲母・白色粒/良好/黒褐色	内湾する体部。太い条痕文が横位に施される。工具は貝殻腹縁か。内面平滑な横位撫で調整	弥生前期併行 東海系
第76図 PL.70	525	弥生土器 壺	1D12 体部破片					粗:石英・片岩粒・雲母・白色粒/良好/淡黄色	外面太い条痕文を横位に施す。工具は貝殻腹縁か。内面は撫で調整で赤彩痕が広がる。破片二次利用か	弥生前期併行 東海系
第76図 PL.70	526	弥生土器 壺	1E・F5・6 体部破片					粗:石英多・片岩・白色粒/良好/にぶい黄橙色	大型壺。極めて太い条痕文を斜位に施す。工具は貝殻腹縁か。被熱のため内面器壁剥落箇所多い	弥生前期併行 東海系
第76図 PL.70	527	弥生土器 壺	1E4 体部破片					粗:石英多・片岩・白色粒/良好/浅黄色	内湾する体部。太い条痕文が横位・斜位に施される。工具は貝殻腹縁か。内面は平滑な横位・斜位撫で調整	弥生前期併行 東海系
第76図 PL.71	528	弥生土器 壺	1D11 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	上半で外反し中位は強く内湾、下半は再度外反する特異な器形。検討を要する。太い条痕文が斜位に施される。工具は貝殻腹縁か。内面研磨。内湾部は被熱により帯状に変色する	弥生前期併行 東海系
第76図 PL.71	529	弥生土器 壺	1C11 体部下半～底部残存			底	8.4	粗:石英大多/良好/にぶい黄橙色	内湾気味に強く開く体部下半。太い条痕文が斜位に施される・工具は貝殻腹縁か。内面撫で調整だが、内器面は被熱のため器壁剥落を見る	弥生前期併行 東海系
第77図 PL.71	530	縄文土器 甕・深鉢	１F5 体部下半～底部残存			底	7.8	細:石英・白色粒/良好/にぶい赤褐色	筒状の体部下半。薄手の器厚。底部上に４条の横位沈線を設け、体部下半に斜位沈線３条を配す。地文に斜位撚糸Ｒを施す。内面弱い撫で	縄文晩期末葉
第77図 PL.71	531	縄文土器 鉢	1E5・6 体部下半～底部1/2残存			底	9.4	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	体部下半は直立した筒状の器形を呈す。底部下端に横位沈線１条と短沈線が不等間隔に配される。地文は細縄文縦位ＬＲを施す。内面横位研磨を加える	縄文晩期末葉
第77図 PL.71	532	縄文・弥生 鉢	1F10 体部1/2残存					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	体部上半は内湾し下半は直立気味に外反する。体部中位の括れ部に横位沈線２条を設け、地文にＬＲを施す。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第77図 PL.71	533	縄文・弥生 甕・深鉢	1F7 体部下半～底部1/3残存			底	(6.4)	細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい黄橙色	薄手の器厚で筒状の体部下半。横位沈線３条を底部上に設ける。体部は条痕文施文か。内面弱い撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第77図 PL.71	534	縄文土器 深鉢	1F4 体部下半～底部残存			底	8.2	細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/にぶい橙色	強く開く体部下半。底部端部は張出す。体部は横位・斜位ＬＲを地文とし細沈線が不規則に重なる。底部上は横位沈線４条を設け縦位短沈線が重なる。７単位を数える。内面平滑な撫で調整。底面網代痕	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第77図 PL.71	535	縄文土器 鉢	1F6 体部下半～底部 残存			底	7.1	細:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/橙色	外反する体部下半。底面は上げ底気味。体部中位に２条、底部上に１条の横位沈線を配す。底面に木葉痕。内外面に研磨を加える	縄文晩期末葉
第77図 PL.71	536	縄文・弥生 甕・深鉢	1F8 体部下半～底部 残存			底	6.2	細:石英・白色粒/良好/にぶい黄橙色	垂下沈線に画された間を縦位矢羽状短沈線が充填された意匠文。６単位。意匠間は縦位条痕文を施す。底面は木葉痕。内面横位研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第77図 PL.71	537	縄文・弥生 鉢か	1F9 底部のみ残存			底	7.3	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/橙色	直立気味の体部下半。浮線による幅狭の網目状文が配される。底面はやや上げ底で沈線による同心円状意匠と十字文が描かれる。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第77図 PL.71	538	縄文土器 鉢	1C11・1D12 体部中位～底部 破片３点			底	(17.2)	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/橙色	体部中位で外反し下半は内傾する。底部は強く張り出す。体部及び底部上に３条の横位沈線を設ける。地文は横位ＬＲを施す。内面弱い研磨を加える。外面に赤彩残る	縄文晩期末葉
第77図 PL.71	539	縄文土器 甕・深鉢	1E10・11 体部1/2～底部 一部残存			底	(8.0)	細:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/褐色	体部上半に幅広の横位沈線を設ける。以下ＬＲが横位・斜位に施される。内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第77図 PL.71	540	縄文土器 甕・深鉢	1F7 体部下半のみ残存					細:石英・白色粒/良好/黒褐色	内湾気味に開く体部下半。斜位ＬＲが覆う。内面研磨を加える。内外面とも煤が付着する	縄文晩期末葉
第77図 PL.71	541	縄文・弥生 甕・深鉢	１F5 底部のみ残存			底	6.0	細:石英・白色粒/良好/黒褐色	薄手の器厚で体部下半は外反気味に開く。横位ＬＲが覆う。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第77図 PL.71	542	縄文土器 甕・深鉢	１F5 体部下半～底部 残存			底	6.6	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	薄手の器厚。直立気味の体部下半。無節Ｌを施す。底面に僅かに木葉痕を見る。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第77図 PL.71	543	縄文土器 鉢	1E10 体部下半～底部 残存			底	7.4	細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい黄褐色	強く開く体部下半。外面は横位ＬＲが覆う。内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第77図 PL.71	544	縄文土器 甕・深鉢	1F4 体部下半～底部 1/4残存			底	(9.4)	細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	直線的に開く体部下半。細縄文ＬＲを斜位に施す。底面に網代痕。内面平滑な撫で調整。	縄文晩期末葉
第77図 PL.71	545	縄文土器 甕・深鉢	1F6 体部下半1/2～ 底部残存			底	7.6	細:石英・輝石・白色粒/良好/暗褐色	体部器厚薄手。底端部張り出す。体部は細縄文ＬＲを施し端部に指頭押圧を加える。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第77図 PL.71	546	縄文・弥生 甕・深鉢	1F8 体部下半～底部 残存			底	4.4	細:石英・白色粒/良好/褐色	あるいはミニチュアか。器厚薄手。無節Ｌを縦位・斜位に施す。底面に擦痕。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第78図 PL.71	547	縄文・弥生 甕・深鉢	1E5 体部下半～底部 3/4残存			底	7.9	粗:石英・輝石・白色粒/良好/橙色	外反気味に開く体部下半。横位・斜位ＬＲを施す。底面は網代痕。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第78図 PL.71	548	縄文・弥生 甕・深鉢	1F7 体部下半～底部 1/3残存			底	(9.2)	細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	体部下半は強く開く。外面にＬＲを施す。底面に網代痕が僅かに残る。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第78図 PL.71	549	縄文・弥生 鉢	1E11 体部下端～底部 残存			底 底	9.0 8.5	細:石英・雲母・白色粒/良好/灰黄褐色	底面平面形が僅かに楕円状を示す。外面は細縄文ＬＲを施す。底面網代痕に1/2撫でを施す。内面弱い研磨を加える。赤彩痕を見る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第78図 PL.71	550	縄文土器 深鉢	1D12 体部下半～底部 残存			底	7.0	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄褐色	直線的に開く体部下半。無節Ｌを施す。内面及び底面研磨を加える。内面煤付着	縄文晩期末葉
第78図 PL.71	551	縄文・弥生 甕・深鉢	1C11 体部下半～底部 残存			底	4.4	細:石英・輝石・白色粒/良好/明赤褐色	小径で筒状の器形。撚糸Ｒを縦位・斜位に施す。乱雑な施文。底面に木葉痕。内面細かな横位研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第78図 PL.71	552	縄文・弥生 甕・深鉢	1F4 体部下半～底部 1/2残存			底	8.2	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黄褐色	外反気味に開く体部下半。縦位無節Ｌを施し撫でを重ねる。底面木葉痕。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第78図 PL.72	553	縄文・弥生 甕・深鉢	1F9 体部下半1/4～ 底部残存			底	6.0	細:石英多・片岩粒・白色粒/良好/橙色	内湾気味に開く体部下半。器面摩滅するが縦位条痕文を見る。底面も網代痕が看取される。内面研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第78図 PL.72	554	縄文土器 甕・深鉢	1F7 体部下半～底部 1/3残存			底	(9.5)	細:石英・片岩多・白色粒/良好/にぶい黄橙色	直線的に開く体部下半。横位ＬＲ施文後縦位条痕文を重ねる。底面に木葉痕。内面削り調整後弱い撫でを加える。内面煤が付着する	縄文晩期末葉
第78図 PL.72	555	弥生土器 甕・深鉢	1F5 体部～底部1/4 残存			底	11.0	細:石英・輝石・雲母/良好/にぶい橙色	大型深鉢。薄手の器厚を呈し直線的に開く体部。太い条痕文を縦位・斜位に施す。工具は貝殻腹縁か。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行 東海系
第79図 PL.72	556	縄文土器 甕・深鉢	1F5 体部下半～底部 残存			底	10.6	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい褐色	直線的に開く体部下半。縦位・斜位条痕が覆う。内面平滑な撫で。被熱による器壁剥落を見る	縄文晩期末葉
第79図 PL.72	557	縄文土器 甕・深鉢	1E6 体部下半～底部 1/4残存			底	(10.8)	細:石英・白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	体部下半は直線的に開く。縦位条痕文が施される。内面削り調整後撫で。煤が付着する。外器面摩滅	縄文晩期末葉
第79図 PL.72	558	縄文土器 甕・深鉢	1E7 体部下半1/2～ 底部1/4残存			底	(8.0)	細:石英・片岩・白色粒/良好/にぶい褐色	直線的に開く体部下半。縦位条痕文が覆う。底面網代痕。内面横位削り後撫で調整。内外面に煤付着	縄文晩期末葉
第79図 PL.72	559	縄文土器 甕・深鉢	1E5 体部下半～底部 残存			底	(8.0)	粗:石英・輝石・白色粒/良好/浅黄色	直線的に開く体部下半。縦位・斜位条痕文が覆う。外面は被熱のため変色、器面摩滅。内面は斜位削り調整後撫で	縄文晩期末葉
第79図 PL.72	560	縄文土器 甕・深鉢	1D11 体部下半～底部 1/2残存			底	6.6	細:石英・輝石・白色粒/良好/明赤褐色	体部下半は直線的に開く。縦位・斜位条痕文が施される。内面弱い縦位研磨を加える。被熱痕跡を見ない	縄文晩期末葉
第79図 PL.72	561	縄文土器 甕・深鉢	1D11 体部下半1/2～ 底部残存			底	8.6	細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/にぶい褐色	やや外反気味に開く体部下半。縦位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整で煤が付着し底面は被熱のため変色	縄文晩期末葉
第79図 PL.72	562	縄文土器 甕・深鉢	1F10 体部下半～底部 1/2残存			底	8.0	粗:石英・雲母・白色粒/良好/橙色	やや細身で外反する体部下半。縦位・斜位条痕文を施し、底部上に削り調整を加える。内面削り調整後撫で、煤付着	縄文晩期末葉
第79図 PL.72	563	縄文・弥生 甕・深鉢	1F5 体部下半～底部 残存			底	7.7	粗:石英・片岩・チャート・褐色粒/良好/灰黄褐色	内湾気味に開く体部下半。縦位条痕文を施し底部上は削り調整が重なる。内面弱い研磨	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第79図 PL.73	564	縄文・弥生 甕・深鉢	1E11 底部のみ残存			底	(10.0)	粗:石英・輝石・チャート・白色粒/良好/灰黄褐色	大型深鉢か。外反気味に開く体部下半。縦位条痕文下端部を見る。外面被熱痕跡により変色。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第79図 PL.73	565	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 体部下半～底部 2/3残存			底	5.0	細:石英・輝石・白色粒・黒色粒/良好/にぶい黄橙色	小型深鉢か。縦位条痕文を施し少量の煤が付着する。底面には木葉痕残る。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第79図 PL.73	566	縄文土器 甕・深鉢	1D12 体部下半～底部 1/4残存			底	(6.0)	細:石英・片岩粒・雲母少・白色粒/良好/明赤褐色	器厚薄手で直線的に開く体部下半。斜位条痕文を施し底部上は削り調整を加える。内面黒色を呈し撫で調整を加える	縄文晩期末葉
第79図 PL.73	567	弥生土器 甕・深鉢	1E4 体部下半～底部 残存・底面欠損			底	7.2	粗:石英・雲母・褐色粒/やや軟質/橙色	体部下半は強く開く。太い条痕文が横位・斜位に施される。工具は貝殻腹縁か。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行 東海系
第80図 PL.73	568	縄文土器 甕・深鉢	1F5 体部下半1/2～ 底部残存			底	10.0	細:石英・褐色粒・白色粒/良好/橙色	底端部張り出す。外反気味に開く体部下半。縦位条痕文を施す。底面には網代痕。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第80図 PL.73	569	弥生土器 甕・深鉢	1F7 体部下半1/4～ 底部残存			底	10.2	細:石英・輝石・白色粒/良好/黄褐色	直線的に開く体部下半。太い縦位条痕文が覆う。強い施文。底面に網代痕。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第80図 PL.73	570	縄文土器 甕・深鉢	1E5 体部下半～底部 残存			底	9.0	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黄褐色	緩やかに外反気味に開く体部下半。外面は縦位条痕文を施す。内面は平滑な撫で調整。少量の煤が付着する	縄文晩期末葉
第80図 PL.73	571	縄文土器 甕・深鉢	1F10 体部下半～底部 残存			底	9.6	粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/浅黄色	直線的に開く体部下半。底部端部張り出す。縦位条痕文が覆う。内面削り調整後撫で調整・全体に被熱し変色。内面に帯状に煤が付着する	縄文晩期末葉
第80図 PL.73	572	縄文土器 甕・深鉢	1E6 底部残存			底	9.4	細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	外反気味に開く体部下半。縦位条痕文が施される。底面網代痕。内面撫で調整	縄文晩期末葉

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第80図 PL.73	573	弥生土器 甕・深鉢	1D12 体部下半～底部 残存			底	8.2	粗:石英・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	厚手の器厚を呈す。外面は太い条痕文が縦位・斜位に施される。工具は貝殻腹縁か。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行 東海系
第80図 PL.73	574	縄文土器 甕・深鉢	1F9・10 体部下半～底部 残存			底	9.0	粗:石英・片岩粒・雲母・白色粒/やや軟質/灰白色	直線的に開く体部下半。縦位条痕文を施し弱い横位撫でを加える。底面網代痕。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉
第80図 PL.73	575	弥生土器 甕・深鉢	1F11 口縁～体部下半 11/2残存 底部残存	口	28.4	底	12.0	細:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部小波状突起を付す。単位は不明。幅狭の口縁部は横位沈線で画され、波頂部の縦位短沈線と連接する。口唇部に沿って横位弧状沈線を施す。体部は横位沈線で画され以下太い条痕文が縦位・斜位に施される。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第80図 PL.73	576	縄文・弥生 甕・深鉢	1E5 底部のみ残存			底	10.0	粗:石英・雲母・褐色粒/良好/淡黄色	大型深鉢。体部下端は強く開き縦位条痕文を見る。底面は網代痕。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第81図 PL.73	577	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 体部下半～底部 残存			底	9.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/淡黄色	外反する体部下半。底部端部は張り出す。縦位条痕文を施し底面に網代痕が残る。内面弱い撫で、煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第81図 PL.73	578	縄文・弥生 甕・深鉢	1F4 体部下半～底部 残存			底	7.6	細:石英・片岩・白色粒/良好/明黄褐色	外反気味に開く体部下半。縦位条痕文を施す。底面に網代痕。内面は弱い研磨が加わる	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第81図 PL.73	579	縄文・弥生 甕・深鉢	1F5 体部下半～底部 残存			底	8.4	細:石英・輝石・チャート・白色粒/良好/にぶい黄橙色	強く外反する体部下半。縦位条痕文が覆う。底面網代痕を残す。内面研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第81図 PL.73	580	縄文・弥生 甕・深鉢	1F9 体部下半～底部 残存			底	6.0	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/明褐色	外反気味に開く体部下半。縦位条痕文を施し斜位沈線を乱雑に加える。底面網代痕、内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第81図 PL.73	581	縄文・弥生 甕・深鉢	1F4 底部のみ残存			底	6.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	外面に縦位条痕文下端部を看取する。底面に網代痕残る。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第81図 PL.73	582	縄文土器 甕・深鉢	1E6 底部残存			底	6.4	粗:石英・輝石・褐色粒・白色粒/良好/明黄褐色	小径。外反気味に開く体部下半。浅い縦位条痕文を施す。底面に網代痕。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第81図 PL.73	583	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 体部下半～底部 残存			底	8.2	粗:石英・輝石・白色粒/良好/褐色	直立気味に開く体部下半。斜位条痕文を施し、底面に網代痕が残る。内面は平滑な撫で調整。外面は比較的乱雑な成整形を呈す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第81図 PL.73	584	弥生土器 甕・深鉢	1F10 体部下半～底部 1/2残存			底	11.6	粗:石英・片岩・雲母・褐色粒・白色粒/良好/橙色	大型深鉢。直線的に開く体部下半。やや太い縦位条痕文を施す。底面網代痕。内面横位削り調整後撫で	弥生前期併行 東海系
第81図 PL.73	585	縄文土器 甕・深鉢	1C11 体部下半～底部 1/2残存			底	8.6	粗:石英・片岩・雲母・白色粒/良好/橙色	直線的に開く体部下半。縦位条痕文が覆う。底面に網代痕。内面縦位削り調整後弱い撫で、煤が帯状に付着する	縄文晩期末葉
第81図 PL.73	586	縄文土器 甕・深鉢	1F7 体部下半～底部 1/3残存			底	(10.8)	細:石英・片岩・白色粒/良好/橙色	大型深鉢か。直線的に開く体部下半。体部は縦位条痕文が覆う。底面に網代痕が残る。内面平滑な撫で調整。内外面に帯状に煤が付着する	縄文晩期末葉
第81図 PL.74	587	縄文・弥生 深鉢	1F8 体部下半～底部 1/2残存			底	8.6	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい褐色	薄手の器厚で直立気味に開く体部下半。縦位条痕文を施し底部上は横位撫で調整を加える。底面網代痕。内面平滑な撫で調整、少量の煤が付着する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第81図 PL.74	588	縄文・弥生 甕・深鉢	1F10 体部下半～底部 1/2残存			底	(5.0)	粗:輝石・褐色粒・白色粒/良好/明黄褐色	外反気味に開く体部下半。縦位条痕文を施す。内面は平滑な撫で調整、煤付着する。全体に被熱痕跡を見る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第82図 PL.74	589	縄文土器 甕・深鉢	1D12 体部下半～底部 残存			底	11.0	細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/にぶい橙色	縦位条痕文が覆う。内面削り調整後弱い撫でを加える。内面下半に煤付着。底面に木葉痕	縄文晩期末葉
第82図 PL.74	590	縄文・弥生 甕・深鉢	1D1 体部下半～底部 1/2残存			底	9.0	粗:石英多・片岩少/良好/黒褐色	内湾気味に開く体部下半。条痕文を斜位に施す。底面木葉痕。内面斜位撫で調整。横位条痕文も見られる	縄文晩期末葉～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第82図 PL.74	591	縄文・弥生 甕・深鉢	1C・D11・1E10 体部下半～底部 1/3残存			底	(11.0)	粗:輝石・褐色粒・チャート・白色粒/良好/浅黄橙色	大型深鉢。直線的に開く体部下半。全体に被熱のため器面摩滅。外面縦位条痕文、底面に木葉痕。内面平滑な撫で調整で帯状に煤が付着する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第82図 PL.74	592	縄文土器 甕・深鉢	1D11 体部下半～底部 1/2残存			底	8.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/淡黄色	外反気味に開く体部下半。縦位条痕文が覆う。底面は木葉痕。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第82図 PL.74	593	縄文土器 甕・深鉢	1D12 体部下半1/4～底部残存			底	12.0	細:石英・輝石・チャート・白色粒/良好/にぶい黄褐色	直立気味に開く体部下半。縦位条痕文を施す。底面に木葉痕。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第82図 PL.74	594	縄文・弥生 甕・深鉢	1E5 底部のみ残存			底	6.7	粗:石英・雲母・白色粒/やや軟質/灰黄褐色	小型深鉢か。直立気味に開く体部下半。縦位条痕文の下端部を見る。底面に木葉痕。内面撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第82図 PL.74	595	縄文・弥生 甕・深鉢	1E6 体部下半1/2～底部残存			底	5.6	細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/にぶい黄褐色	小径で薄手の器厚。体部下半は外反気味に開き斜位条痕文を施す。底面に木葉痕。内面は弱い撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第82図 PL.74	596	縄文土器 甕・深鉢	1C11・1D12 体部下半～底部 3/4残存			底	26.0	粗:石英・褐色粒・白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	大型深鉢。全体に被熱し内底面は器面剥落する。外面は縦位条痕文が施される。内面は平滑な撫で。底面は木葉痕を見るが不鮮明	縄文晩期末葉
第82図 PL.74	597	弥生土器 壺	1E・F4・5 体部破片					粗:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/明褐色	大型壺。体部中位で強く内湾する。極めて太い条痕文を横位・斜位に施す。工具は貝殻腹縁か。内面横位撫で調整	弥生前期併行 東海系
第83図 PL.74	598	縄文・弥生 甕・深鉢	1E6 体部下半～底部 残存			底	8.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	外反気味に開く体部下半。内外面とも平滑な撫で調整。全体に被熱のため変色する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	599	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 体部下半～底部 残存			底	9.2	細:石英・輝石・白色粒/良好/橙色	体部下半は薄手の器厚を呈し直立気味に開く。斜位条痕文の下端部を見るが摩滅する。内面横位撫で調整で少量の煤が付着する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	600	縄文・弥生 甕・深鉢	1F7 体部下半～底部 残存			底	(7.0)	粗:石英・片岩・白色粒/良好/橙色	直立気味の体部下半。底面に網代痕。内面平滑な撫で調整。内底面剥落箇所多い	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	601	縄文・弥生 甕・深鉢	1E4 底部のみ残存			底	4.3	細:石英・輝石・白色粒/良好/褐色	小型深鉢か。内湾気味に開く体部下半。平滑な撫で調整。内面は削り調整に止まる	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	602	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 体部下半～底部 残存			底	4.7	細:石英・白色粒/良好/灰白色	あるいはミニチュアか。体部下半は強く外反する。内外面とも摩滅する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	603	弥生土器 鉢	1D12 底部のみ残存			底	7.0	細:石英少・片岩粒少/良好/褐色	底面が強く突出し体部下半は外反気味に開く。内外面は平滑な撫で調整、底面は研磨を加える	弥生前期
第83図 PL.74	604	縄文・弥生 鉢	1E11 体部～底部1/2 残存			底	3.0	細:石英粒・片岩粒・白色粒/良好/灰黄褐色	体部～底部一体化し底部は丸底に近い。体部無文で平滑な撫で調整。内面横位撫で調整。内面に多量の煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	605	縄文・弥生 壺？	1E6 体部下半～底部 1/4残存			底	(7.6)	細:石英・雲母多・白色粒/良好/にぶい褐色	体部は内湾し無文。外面は平滑な撫で調整を施し、内面は横位撫で調整に止まる	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	606	縄文・弥生 浅鉢	1D12 体部下半～底部 残存			底	7.0	細:石英・片岩粒・雲母末・白色粒/良好/にぶい橙色	体部下半は強く開く。外面は無文で縦位研磨を加える。内面は平滑な撫で調整を施す。外面一部に煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	607	縄文・弥生 甕・深鉢	1F6 底部3/4残存			底	11.6	粗:石英・輝石・白色粒/やや軟質/浅黄色	大型深鉢。外反気味に開く体部下半。縦位条痕文下端部を見る。全体に被熱のため器面摩滅する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	608	縄文・弥生 甕・深鉢	1E5 底部3/4残存			底	9.6	粗:石英・白色粒/良好/にぶい黄橙色	直立気味の体部下半。外面は撫で調整で凹凸を見る。底面に網代痕。内面は弱い撫で。被熱を受けるが痕跡は破断面にまで及ぶ	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	609	縄文・弥生 甕・深鉢	1F5 体部下半～底部 1/2残存			底	6.2	細:石英・輝石多・白色粒/良好/にぶい黄橙色	体部下半は無文。底面は網代痕を残す。外面平滑な撫で調整、内面は横位撫で調整。	縄文晩期末葉～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第83図 PL.74	610	縄文・弥生 甕・深鉢	1F9 底部のみ残存			底	7.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/褐色	外反気味に開く体部下半。底面に網代痕。内面平滑な撫で調整で煤が付着する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	611	縄文・弥生 甕・深鉢	1E5 体部下半1/3～底部残存			底	7.4	粗:石英・片岩・白色粒/良好/橙色	体部器厚薄手で底部は厚い。外面は縦位削り調整後撫で。内面は平滑な撫で調整。底面に網代痕	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.74	612	縄文・弥生 甕・深鉢	1F10 体部下半～底部1/2残存			底	9.0	細:石英・白色粒/良好/明赤褐色	外反気味に開く体部下半。無文で平滑な撫で調整。底面網代痕。内面弱い研磨を加え、少量の煤が付着する。	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.75	613	縄文土器 甕・深鉢	1C12 体部下半～底部4/5残存			底	10.0	粗:石英多・雲母・白色粒/良好/橙色	直線的に開く体部下半。無文で内外面とも撫で調整。底面に網代痕を残す	縄文晩期末葉
第83図 PL.75	614	縄文・弥生 甕・深鉢	1F10 体部下半～底部残存			底	5.4	粗:石英・チャート・白色粒/良好/オリーブ黒色	小型深鉢で歪みある器形。底面網代痕。無文で平滑な撫で調整。内面研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.75	615	縄文・弥生 甕・深鉢	1F7 体部下半～底部残存			底	7.0	細:石英・白色粒/良好/にぶい黄橙色	外反気味に開く体部下半。削り調整後弱い研磨。内面も弱い研磨を加える。底面網代痕、剥落多い	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第83図 PL.75	616	縄文・弥生 甕・深鉢	1F6 底部のみ残存			底	7.2	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	外反気味に強く開く体部下半。内外面とも平滑な撫で調整。底面に網代痕	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第84図 PL.75	617	縄文・弥生 甕・深鉢	1F4 体部下半～底部1/2残存			底	11.0	細:石英・褐色粒・白色粒/やや軟質/明褐色	体部下半は外反気味に開く。縦位条痕文を施す。底面に木葉痕。内面撫で調整。内外器面摩滅	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第84図 PL.75	618	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 体部下半～底部2/3残存			底	7.6	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい橙色	直立気味の体部下半。底部端部はやや張り出す。底部上は圧延のため凹凸顕著。底面は木葉痕残る。内面は弱い撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第84図 PL.75	619	縄文・弥生 甕・深鉢	1F9 体部下半1/3～底部残存			底	7.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/橙色	体部下半は外反気味に開く。無文で底部端部に指頭圧痕を見る。底面木葉痕。内面撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第84図 PL.75	620	縄文・弥生 甕・深鉢	1E10 体部下半～底部残存			底	7.6	細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/橙色	外反気味に開く体部下半。無文で撫で調整。底面木葉痕。内面器面摩滅	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第84図 PL.75	621	縄文・弥生 甕・深鉢	1F9 底部のみ残存			底	7.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	底面に木葉痕が残る。内外器面摩滅する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第84図 PL.75	622	縄文・弥生 甕・深鉢	1D11 体部下半～底部残存			底	4.2	細:輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	あるいはミニチュアか。体部器厚は薄く無文で撫でを施す。底面に木葉痕。内面は撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第84図 PL.75	623	縄文・弥生 甕・深鉢	1E6 底部残存			底	5.6	細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/暗灰黄色	小径で薄手の器厚。直立気味に開く体部下半は無文で撫で調整。底面に木葉痕。内面は弱い撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第84図 PL.75	624	縄文・弥生 甕・深鉢	1E5 体部下半～底部残存			底	4.0	細:輝石・白色粒/良好/灰褐色	あるいはミニチュアか。薄手の器厚を呈し外反気味に開く体部下半。無文で研磨を加える。底面に木葉痕。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第84図 PL.75	625	縄文・弥生 甕・深鉢	1E5 体部下半～底部1/2残存			底	11.0	粗:石英・褐色粒・白色粒/良好/橙色	外反気味に開く体部下半。底部端部は張り出す。外面に縦位条痕文を見るが全体に被熱のため変色、器面摩滅する。内面に煤付着。底面木葉痕	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	626	縄文・弥生 台付鉢？	1D11 脚部のみ残存			底	10.0	細:石英・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	接合部及び裾部に横位沈線３条を設ける。体部内面は弱い研磨、脚部内縁は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	627	縄文・弥生 台付鉢？	1E10 脚部のみ残存			底	13.0	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	脚部は強く貼る。僅かな段差で画され、下位は横位沈線２条が多段に配される。地文は横位ＬＲ。底面・脚部とも内面は弱い研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	628	縄文・弥生 台付土器	1D11 底面～脚部1/4残存			底	(9.4)	細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/橙色	体部は強く開き脚部は直立気味。脚部上端に横位沈線５条を配す。内底面平滑な撫で。外器面摩滅	縄文晩期末葉～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第85図 PL.75	629	縄文・弥生 台付鉢？	1F10 体部下半～脚部 残存			底	7.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	脚部接合部に凹部を設け僅かな段差で画される。外面無文で平滑な撫で調整。内面研磨。赤彩痕が残る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	630	縄文・弥生 台付鉢？	1D11 脚部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい褐色	あるいは壺口縁部か。４条の横位沈線を設け､外面は研磨、内面は平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	631	縄文・弥生 台付鉢？	1F5 脚部のみ残存			底	7.6	細:石英・輝石・白色粒/良好/褐色	内湾する小型脚部。上位接合部と裾部に横位沈線２条を配す。内外面研磨。外面に赤彩	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	632	縄文・弥生 台付土器	1G8 脚部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/褐色	体部は強く開く。接合部に幅広の横位沈線を設け、体部・脚部とも平滑な撫でを施す。体部内面は研磨、脚部内面は弱い撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	633	弥生土器 台付土器	1G9 底面～脚部残存			底	7.4	細:石英・輝石・雲母末・片岩粒/良好/にぶい橙色	外反する脚部。無文で平滑な撫で調整。底面は丁寧な研磨を加える	弥生前期併行
第85図 PL.75	634	縄文・弥生 台付土器	1F9 脚部1/3残存			底	7.0	細:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/橙色	脚部外反し縦位条痕を施す。底内面は弱い研磨、脚部内面は研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	635	縄文・弥生 台付土器	1F9 脚部破片					粗:石英・片岩・チャート・白色粒/良好/赤褐色	小型でミニチュアの可能性もある。脚部に細縄文ＬＲを施し内面弱い撫で調整を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	636	縄文・弥生 台付土器	1E6 脚部のみ残存					粗:石英大・片岩・白色粒/良好/にぶい褐色	小径で外反する脚部。横位沈線４・５条を乱雑に施文する。地文は縦位条痕文。両側縁に剥落痕を見る。貼付文であろうか。内面は撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	637	弥生土器 台付鉢？	1C11 脚部のみ残存			底	8.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	細身で外反する脚部。端部平坦面は広い。外面はＬＲを施す。内面器面摩滅	弥生後期か
第85図 PL.75	638	弥生土器 高坏	1C11 体部下半～脚部 破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/橙色	脚裾部欠損。やや細身の脚部。外面体部下半～脚部縦位研磨。体部内面は丁寧な研磨。脚部内面は斜位撫で調整	弥生後期
第85図 PL.75	639	縄文・弥生 台付鉢？	1D11 脚部上半のみ残存					粗:石英・片岩・白色粒/良好/黄橙色	接合部は強く外反する。脚部境は僅かな段差で画され、脚部は大型の透かし孔が４単位配され周縁に沈線を施す。刺突文が充填される。底部内面は平滑な撫で、脚部内面は弱い撫で調整に止まる	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	640	縄文・弥生 台付鉢？	1D11 脚部1/3残存			底	(12.2)	細:石英・角安・チャート・白色粒/良好/にぶい黄褐色	接合部と裾部に横位沈線を設け、脚部中位に径3.0～3.5㎝の透かし円孔を配す。４単位か。円孔周縁に沈線や刺突文が沿い、円孔間は縦位沈線などが施される。底部内面及び脚部内面弱い撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	641	縄文・弥生 台付鉢	1F7 脚部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	脚部下端部に横位沈線１条を設ける。中位に円孔を設け、縦位沈線や刺突文が施される。内面弱い撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	642	縄文・弥生 台付土器	1E11 脚部破片			底	(9.6)	細:石英粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	小破片のため径及び器形は不明点が多い。脚端部に横位沈線２条を設け体部に透かし孔を設ける。地文は縦位Ｌ Ｒ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.75	643	縄文・弥生 台付土器	1E6 脚部破片			底	(13.8)	細:石英・雲母・白色粒/良好/にぶい黄橙色	薄手の器厚。規模は不明ながら大型の円孔を上下交互に配す。内外面とも丁寧な研磨。外面赤彩を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第85図 PL.76	644	縄文土器 異形台付き土器	1D11 脚部のみ残存			底	8.8	粗:石英・白色粒/良好/黄灰色	裾部が広がり脚部中位が内湾する。中位に径1.0㎝程の円孔を３単位設け、周縁を入り組み状沈線文や浅い陰刻文が施される。無節Ｌを充填施文する。脚部内面平滑な撫で調整	縄文晩期前葉
第85図 PL.76	645	縄文土器 角底形土器	１F5 体部下半～底部 破片			底	9.4	細:石英・輝石・白色粒/良好/暗赤褐色	長方形状の角底で体部は直立気味に開く。体部隅に縦位短沈線を施し２条沈線による横位弧状意匠を各面に配す。底面は２条沈線による放射状の意匠が配される	縄文晩期末葉
第86図 PL.76	646	弥生土器 蓋	1E4 蓋摘み破片	摘	(4.8)			細:石英・輝石・白色粒/良好/明褐色	あるいは台付土器脚部か。摘み部上位に横位細沈線４条を配し、以下縦位条痕文を施す。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第86図 PL.76	647	弥生土器 土製品 蓋	1E10 破片					細:輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	土製品としたが、蓋摘みの可能性もある。横断面は楕円状を呈し、横位・縦位沈線を格子目状に施す。内面弱い研磨を加える	弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第86図 PL.76	648	弥生土器 蓋	1E6 摘部～体部上半 残存	摘	3.8			粗:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/橙色	摘部は強く突出し頂部は円形を呈す。頂部に短沈線状の刻みを見るが施文意識は不明である。全面にＬＲを施す。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第86図 PL.76	649	弥生土器 蓋	１F7・1F8 口縁～底部1/3 残存	口 高	(18.0) 6.8	底	(3.9)	細:石英・片岩・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	無文の蓋。口縁部に２個１対の焼成前小孔を穿つ。内外面とも弱い研磨を加える	弥生前期併行
第86図 PL.76	650	弥生土器 蓋？	1E11 口縁～体部一部欠損	口 高	13.6 6.0			粗:石英少・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	底部は丸底で不安定のため蓋と判断した。口縁部に横位沈線を設けるが全周しない。２個１対の焼成前小孔を穿つ。他は無文で内外面とも横位・斜位削り調整に止まる	弥生前期併行
第86図 PL.76	651	縄文・弥生 ミニチュア 蓋？	1D11 口縁部破片	口	(9.8)			細:輝石・褐色粒・白色粒/良好/橙色	あるいは鉢か。全体に乱雑な成整形。内外面とも撫で調整。口縁部に焼成前小孔を２個１対配す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第87図 PL.76	652	縄文・弥生 ミニチュア 壺	1F5 口縁部1/3残存	口	(5.8)			細:石英・白色粒/良好/橙色	薄手の器厚を呈す。口唇端部に浅い刻み。口縁部に横位沈線３条を設け細かな円形刺突文を充填する。以下斜位沈線３条による鋸歯文が配される。内面平滑な撫で調整。赤彩痕が残る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第87図 PL.76	653	縄文土器 ミニチュア 鉢	1D12 口縁～体部下半 残存	口	9.4			細:石英・輝石・白色粒/良好/褐灰色	あるいは台付きか。波状突起を付す。１単位か。口縁部と体部上端に横位沈線を設ける。突起下端に焼成前小孔を２個１対配す。口縁部及び体部下半はＬＲを施す。内面は研磨を加え赤彩が残る	縄文晩期末葉
第87図 PL.76	654	縄文土器 ミニチュア 鉢	1F8 体部下半～底部 破片					細:石英・白色粒/良好/暗褐色	体部内湾し底部は丸底を呈す。体部に横位沈線群を配し下位に刺突文が沿う。下半は丁寧な研磨。内面は平滑な撫で調整。外面赤彩痕が残る	縄文晩期末葉
第87図 PL.76	655	縄文土器 ミニチュア 鉢	1E10 頸部～底部残存			底	4.0	細:石英・雲母・白色粒/良好/にぶい黄褐色	頸部外反し体部は内湾する。底部は丸底に近い。体部上半に横位結節沈線を設け、横位短沈線を連続する。長短の差で３単位を数える。地文は横位・縦位ＬＲ。内面研磨	縄文晩期末葉
第87図 PL.76	656	弥生土器 ミニチュア 甕？	1E5 体部1/2～底部 一部残存					細:石英・白色粒/良好/にぶい橙色	頸部屈曲部に波状沈線下端部を見る。体部は縦位撫で調整。内面は横位撫で調整	弥生後期 樽式
第87図 PL.76	657	弥生土器 ミニチュア 浅鉢	1E4 体部1/3～底部 残存			底	3.4×4.2	細:石英・白色粒/やや軟質/明黄褐色	長軸形状が楕円状を呈する。舟形土器であろうか。体部の開きが強く皿と判断した。体部は横位沈線が多段に施される。施文は深い。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第87図 PL.76	658	縄文・弥生 ミニチュア 鉢	1F8 口縁部～体部破片					細:白色粒/良好/黒褐色	体部で屈曲する。細縄文ＬＲを施す。外面赤彩痕を見る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第87図 PL.76	659	縄文・弥生 ミニチュア 鉢	1F8 体部下半～底部 破片					細:石英・白色粒/良好/浅黄橙色	体部上半が内湾し中位で僅かに括れる。上半に横位沈線を見るが判然としない。体部は斜位、底部は横位ＬＲを施し底面にまで及ぶ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第87図 PL.76	660	縄文・弥生 ミニチュア 鉢	1F10 口縁～底部1/2 残存	口 高	(6.0) 4.9	底	3.8	細:石英・褐色粒多・白色粒/良好/にぶい黄橙色	波状縁を呈す。無文で内外面平滑な撫で調整を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第87図 PL.76	661	縄文・弥生 ミニチュア 壺	1E5 頸部～体部上半 のみ残存					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/にぶい黄橙色	頸部は指押さえによる整形か、凹凸が顕著。体部は無文で弱い撫で調整。肩部内面は無調整で輪積み痕が顕著	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第87図 PL.76	662	縄文・弥生 ミニチュア 鉢	1E10 口縁～底部破片	口 高	(2.8) 3.5	底	(2.6)	細:石英・白色粒/良好/にぶい褐色	僅かに内湾する器形。無文で指頭撫でによる整形と思われる。内面撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第87図 PL.76	663	弥生土器 ミニチュア 蓋	1E10 1/2残存	摘 高	2.2 3.4	口	5.4	細:白色粒/良好/灰黄褐色	口縁は緩やかな波状を呈し２条の沈線による横位弧状意匠が繋ぐ。体部は横位、摘み部は波状沈線が施される。内面平滑な撫で調整	弥生前期併行
第87図 PL.76	664	縄文・弥生 ミニチュア 鉢	1F8 体部下半～底部 残存					細:褐色粒・白色粒/やや軟質/橙色	体部内湾し底部は丸底を呈す。底部器厚薄手の箇所がある。内面横位撫で調整。内外面器面摩滅	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第87図 PL.76	665	縄文・弥生 ミニチュア 壺？	1F7 底部のみ残存			底	3.8	細:石英・白色粒/良好/にぶい黄橙色	外反気味に強く開く体部下半。内外面とも平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第87図 PL.76	666	縄文・弥生 台付鉢？	1F10 脚部のみ残存			底	5.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/明黄褐色	あるいはミニチュアか。直立気味の脚部で横位沈線を螺旋状に施す。やや乱雑な施文。赤彩痕が残る。内面撫で	縄文晩期末葉～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第87図 PL.76	667	縄文・弥生 ミニチュア 台付土器	1F8 体部下半～脚部 残存			底	3.0	粗:輝石・白色粒/ 良好/にぶい黄橙色	小径で脚部～体部は外反する。無文で内外面とも弱い撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行

第18表　6号溝出土土偶観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第88図 PL.77	1	縄文・弥生 土製品 土偶	1F10 頭部のみ残存	長 幅	(7.4) (6.6)	厚	3.9	細:石英・白色粒/ 良好/にぶい橙色	中実。卵型の平面形で眉と鼻は貼付文、目は浅い刺突、口は浅い沈線で表現する。鼻孔も浅い刺突を充てる。耳は顔面後ろ側で弧状の貼付に小孔を穿つ。表面顔面両脇に細かな刺突文を配す。黥面か。刺突文は裏面中央にも縦位に施される。頭頂部には隆線を巻き何等かの装飾を付すが欠損する。全体に丁寧に研磨され赤彩を施す。整形手法は円柱状の芯材を設けている	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第88図 PL.77	2	縄文・弥生 土製品 土偶	1E4 頭部及び左腕部 欠損	長 幅	(13.1) (6.3)	厚	2.2	細:輝石・白色粒/ 良好/浅黄橙色	中実。細身で腕部・脚部とも短い。頭部顔面は凹みのみの表現か。腕部・脚部とも指撫で調整のみの整形。体部表面中央に逆Ｙ字状の沈線文を配す。正中線であろうか。裏面は肩部に横位弧状沈線文を施す。全体に縦位撫で調整を主とする	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第88図 PL.77	3	縄文・弥生 土製品 土偶	1D11 体部及び上腕部 のみ残存	長 幅	(12.2) 8.7	厚	2.7	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	中実土偶。肩部及び肘部、腰部を肥厚させ細かな刺突文を充填する。各部位の強調、衣服・装具の表現であろうか。体部両側縁は凹みを設け、表裏面とも体部中央に幅広の沈線文が正中線状に配される。全体に研磨を加え赤彩を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第89図 PL.78	4	縄文・弥生 土製品 土偶	1C11 頭部及び脚端部 欠損	長 幅	(7.9) (6.3)	厚	1.7	細:石英・白色粒/ 良好/暗灰黄色	小型の中実土偶。肩部が小突起と横位短隆線により強調され、棒状工具により刺突文が重なる。表裏面とも体部中央に縦位刺突文が施される。背面肩部に刺突文が集中するが肩甲骨の表現か。刺突文は腰部～脚部にも集まる。全体に平滑な撫で調整を施し赤彩を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第89図 PL.78	5	縄文・弥生 土製品 土偶	1C11 腰部破片	長 幅	(3.1) 4.5	厚	2.2	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	中実の小型土偶。体部は小径で直立し表裏面とも中位に縦位沈線文を配す。腰部は横位に広がり、裏面がやや膨らむため臀部と判断した。表裏側面とも細かな刺突文を充填する。赤彩痕が残る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第89図 PL.78	6	縄文・弥生 土製品 土偶	1F9 腕部破片	長 幅	(2.5) 2.2	厚	1.5	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	内湾する右側腕部先端か。波状の形態で指表現として浅い刻みを施す。丁寧な撫で調整で仕上げる	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第89図 PL.78	7	縄文・弥生 土製品 土偶	1F9 体部～脚部破片	長 幅	(9.3) (7.9)	厚	4.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/鈍い橙色	体部下半～右脚残存か。表裏面とも体部中位に正中線状の縦位沈線を設ける。沈線下端は横位に派生する。縦位沈線両脇に細かな刺突文が施される。腰部及び膝部が強く突出し強調される。側部底面は平滑だが不安定である。全体に丁寧な研磨を施し赤彩を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第89図 PL.78	8	縄文・弥生 土製品 土偶	1D11 腕部破片	長 幅	(5.8) (3.3)	厚	2.6	細:片岩粒・白色粒/良好/灰黄褐色	中実。短い右腕部か。やや広げ気味の腕形態。肩部と肘部分が突出し細かな刺突文を充填する。他は無文で丁寧な撫で調整を施す。赤彩痕が残る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第89図 PL.78	9	縄文・弥生 土製品 土偶	1D10 体部～脚部破片	長 幅	(6.6) (6.7)	厚	2.5	細:石英・片岩粒・雲母・白色粒/良好/にぶい黄橙色	中実。右脚部残存か。体部側面及び脚部側面は大きく凹む。膝部分が突出し細かな刺突文を充填する。体部は表裏面とも中央部に幅広沈線による三叉状意匠が配される。裏面に横位条痕文が施される。底面は平坦	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第89図 PL.78	10	縄文・弥生 土製品 土偶	1E4 右脚部破片	長 幅	(10.7) (5.0)	厚	3.4	細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	外側は大きく外反し、内側表面は剥落する。くるぶし表現部は帯状に突出し刺突文を施す。つま先部は僅かに外反し底面は面を持たない。自立しないか。全面に赤彩を施す。長方形の芯材を設け外周を巻く手法か。	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第89図 PL.78	11	縄文・弥生 土製品 土偶	1F7 脚部破片	長 幅	(3.0) (1.6)	厚	2.8	細:石英・白色粒/良好/褐色	側縁が外反する左足か。裏面が僅かに残存し、やや扁平な断面形と思われる。底面は平坦だがやや不安定な印象。全体に平滑な撫で調整で仕上げる	縄文晩期末葉～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第89図 PL.78	12	縄文・弥生 土製品 土偶	1F6 脚部破片？	長	(3.9)	厚	(1.7)	細:石英多・白色粒/やや軟質/橙色	破片上端が面を持ちあるいは台付土器か。扁平な脚部で中央に性格不明の小孔を穿つ。底面は平坦面を保つ。撫で調整で仕上げる。器面摩滅	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	4.7					
第89図 PL.78	13	縄文・弥生 土製品 土偶	1E5 右脚部破片	長	(3.2)	厚	3.4	細:石英・輝石・白色粒/良好/暗褐色	中実で短脚。撫で調整で仕上げられ、底面は平坦面を保つ。自立する例か	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	3.0					
第89図 PL.78	14	縄文・弥生 土製品 土偶	1E11 破片	長	(1.7)	厚	1.1	細:石英・白色粒/良好/にぶい黄橙色	おそらく土偶腕部や脚部の肘・膝などの関節部肥厚装飾か。中位が僅かに凹み、細かな刺突文が覆う	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(3.0)					
第90図 PL.79	15	縄文・弥生 土製品 土偶	1D12 肩部破片	長	(7.5)	厚	1.2	細:石英・輝石・白色粒/良好/灰黄褐色	大型の中空状土偶左肩部か。頸部接合部と上腕部が肥厚し竹管状工具による円形刺突文を充填する。各部位の誇張表現、衣服・装着具などの表現か。腕部下の体部に幅広の縦位沈線を施す。外面は赤彩を加える。内面は弱い撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	6.4					
第90図 PL.79	16	縄文・弥生 土製品 土偶	1D11・12 腕部破片	長	(10.7)	厚	1.0	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/明赤褐色	大型の中空状土偶左腕か。頸部接合部と上腕部が肥厚し手掌部が内湾する。各箇所に竹管状工具による円形刺突文を充填する。各部位の強調、衣服などの表現が想起される。外面は赤彩を加える。内面は弱い撫で調整を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(6.6)					
第90図 PL.79	17	縄文・弥生 土製品 土偶	1F9 肩部破片	長	(5.7)	厚	1.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	大型の中空状土偶左肩か。上位の頸部境は横位沈線を設け腕部境は縦位矢印状意匠を配す。外面平滑な撫で調整で赤彩を加える。内面は弱い撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(6.2)					
第90図 PL.79	18	縄文・弥生 土製品 土偶	1E10 肩部破片	長	(4.1)	厚	0.8	細:石英・輝石・白色粒/良好/褐灰色	肩部と頸部の接合点か。頸部が直立気味に立ち上がる。肩部に幅広の横位沈線を施す。外面平滑な撫で長調整で赤彩を加える。内面弱い撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(5.8)					
第90図 PL.79	19	縄文・弥生 土製品 土偶	1E7 体部破片	長	(5.9)	厚	0.6	細:石英・輝石・白色粒/良好/暗褐色	あるいは腕部下半か。円形竹管状工具による刺突文が施され、下端より縦位沈線文が派生する。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(4.8)					
第90図 PL.79	20	縄文・弥生 土製品 土偶	1F10 肩部破片？	長	(2.0)	厚	0.4	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい褐色	中空状土偶肩部破片か。詳細な部位は不明。小型の刺突文を施す。工具は棒状工具。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(2.2)					

第19表　6号溝出土鯨面土偶観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第91図 PL.80	1	縄文・弥生 土製品 土偶	1F5 頭部破片	長	(5.9)	厚	(3.4)	細:石英・輝石・片岩粒少・白色粒/良好/褐灰色	土偶頭部右側面。中実で球形を呈する。顔面には斜位沈線３条を施す。顳面であろうか。側面には耳表現が突起でなされ小孔が穿たれる。頭部全体に竹管状工具による円形刺突文が充填する。頭部上位に横位短沈線と貼付を加える。頭頂部はやや突出し、無文部を縦位帯状に設ける。赤彩を施す。鯨面土偶№2と近似する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(6.9)					
第91図 PL.80	2	縄文・弥生 土製品 土偶	1C12 頭部破片	長	(4.8)	厚	(2.3)	細:石英・輝石少・片岩粒・白色粒/良好/黄橙色	土偶頭部左側面。中実で球形を呈する。顔面には斜位沈線を施す。側面には耳表現として小突起が付され小孔が穿たれる。下位は横位隆線が配される。顎表現か。頭部全体に円形刺突文が覆う。頭部上位に横位短沈線を施す。赤彩を施す。鯨面土偶№1と近似する	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(5.6)					
第91図 PL.80	3	縄文・弥生 鯨面土器	1D12 顔面部破片	長	(3.0)	厚	0.4	細:石英粒・白色粒・チャート/良好/にぶい黄橙色	中空状の顔面部左側縁か。斜位細沈線群を施す。内面無調整に近い。外面赤彩を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(1.1)					
第91図 PL.80	4	縄文・弥生 土偶か	1F5 耳部破片	長	(3.4)	厚	1.3	緻密:夾雑物僅少//にぶい黄褐色	左耳か。楕円状の粘土塊に横位沈線２条と反対側に小孔を穿つ。上端に条線を見る。	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(2.3)					
第91図 PL.80	5	縄文・弥生 土製品 土偶	1E4 肩部破片	長	(2.2)	厚	(1.4)	細:石英・輝石・白色粒/良好/明黄褐色	中空状土偶左肩部か。幅広の横位沈線を多段に施す。内面に体部との剥落痕跡を見る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(2.6)					

第20表　6号溝出土人面(鯨面)付き土器観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第92図 PL.80	1	縄文・弥生 鯨面土器	1E5 体部破片	長 幅	(4.3) (4.0)	厚	1.1 (鼻) 0.7 (土器)	細:石英・雲母末・白色粒/やや軟質/灰褐色	径約3.3㎝の低円板を顔面とし中央上位の瘤状小貼付で鼻を表現する。鼻両脇に目､下位に口を刺突により表現する。顔面内側は沈線が菱形状に口の周囲、耳に相当する箇所を囲み、細沈線が充填される。顔面外側も細沈線を見る。頭部は太い沈線んで画され、小弧状に派生する。内面弱い撫で調整。外面赤彩を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第92図 PL.80	2	縄文・弥生 鯨面土器	1E5 体部破片	長 幅	(3.2) (4.4)	厚	1.2 (鼻) 0.5 (土器)	細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/橙色	径約3.0㎝の低円板を顔面とし中央やや上位に瘤状小貼付で鼻を表現する。鼻両脇に目を、下位に口を刺突により表現する。顔面内縁は対向する斜位細沈線群を施し、口周辺は菱形を描く。顔面外縁は縦位･斜位細沈線を施す。内面は黒色を呈し弱い撫で調整で器面摩滅する。外面赤彩を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第92図 PL.80	3	縄文・弥生 鯨面土器	1E5 体部破片	長 幅	(3.3) (3.6)	厚	1.5 (鼻) 0.6 (土器)	細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/明褐色	径約3.0㎝の低円盤を顔面とし小突起を鼻、目と口は刺突で表現する。顔面内側は対抗する斜位細沈線群で口周辺は菱形を描く。顔面外側は細沈線による斜格子文が充填される。内面器壁剥落著しい	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第92図 PL.80	4	縄文・弥生 鯨面土器	1E5 体部破片	長 幅	(5.2) (3.7)	厚	1.5	細:石英・輝石多・白色粒/良好/赤褐色	浅い押圧を加えた縦位隆線を顎側縁と判断した。小孔を貫通させ、顔面側は細沈線を斜格子状に充填する。反対面は浅い条痕文を横位に施す。内面撫で調整､黒色を呈す。外面赤彩を施す。あるいは顎下端の可能性もある	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第92図 PL.80	5	縄文・弥生 鯨面土器	1E5 体部破片	長 幅	(3.7) (4.0)	厚	1.4	細:石英・輝石・白色粒/良好/橙色	浅い押圧を加えた縦位隆線を顎側縁と判断した。上位で深い刺突により途切れる。顔面側下端を弧状沈線で画し斜格子状細沈線を充填する。内面横位撫で調整で黒色を呈す。外面赤彩を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第92図 PL.80	6	縄文・弥生 鯨面土器	1E5 体部破片	長 幅	(3.5) (4.0)	厚	1.4	細:石英・輝石・白色粒/良好/暗褐色	浅い押圧を加えた縦位隆線を顎側縁と判断した。浅い横位条痕文を施す。内面は弱い撫で調整に止まる。外面赤彩を施す。あるいは顎下端の可能性もある。	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第92図 PL.80	7	縄文・弥生 鯨面土器	1E11 体部破片	長 幅	(3.2) (1.8)	厚	0.9	細:石英・輝石・白色粒/良好/赤褐色	縦位隆線による顎側縁か。残存度は悪く､内面は剥落する。外面赤彩を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第92図 PL.80	8	縄文・弥生 人面土器	1E10 突起破片	長 幅	(2.5) 3.1	厚	1.2 (鼻) 0.5 (土器)	細:輝石・白色粒/良好/明黄褐色	波状突起に人面を配した例か。頂部が凹み双波状を呈す。あるいは髪型か。瘤状小突起の鼻を中心に刺突による目と口が表現される。両側縁の括れは耳表現か。左頬相当に僅かな刻みを見るが鯨面の可能性がある。内面縁辺に沈線が沿い、平滑な撫で調整を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行

第21表　6号溝出土土製品、不明遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第93図 PL.81	1	縄文・弥生 土製品 耳飾り	1E9 破片	径 高	(5.4) 2.0			細:白色粒/良好/にぶい黄褐色	環状で内側内傾部に横位沈線と斜位沈線を配し細かな刻みを施す。薄手に仕上げられるが器壁剥落多い	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第93図 PL.81	2	縄文・弥生 土製品 腕輪	1F9 破片	長 幅	(3.7) 3.2	厚	1.0	細:石英・白色粒/良好/浅黄橙色	湾曲は比較的強く、対象は小児か。無文で撫で調整が施されるが凹凸を見る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第93図 PL.81	3	縄文・弥生 土製品 小玉	1D11 ほぼ完形	長径 短径	0.63 0.50	厚 重	0.43 1.33	細:白色粒/良好/にぶい黄褐色	臼玉状の小玉。径0.25ほどの中央孔を設ける。周縁は弱い撫で調整に止まる	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第93図 PL.81	4	縄文・弥生 土製品 垂飾？	1E5 ほぼ完形	長 短	1.50 0.95	厚 重	0.4 0.55	細:石英・輝石/良好/にぶい橙色	垂飾ミニチュアか。上半中央に径0.3ほどの小孔を設ける。表面のみからの貫孔。周縁は弱い撫で調整に止まる	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第93図 PL.81	5	縄文・弥生 土製品 平玉	1E5 完形	長 幅	1.7 1.7	厚 重	0.4 1.5	細:片岩粒/良好/にぶい褐色	径1.8㎝程の扁平な円板。表面中位に不整形な刺突を施す。他は平滑な撫で調整が覆う	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第93図 PL.81	6	縄文・弥生 土製品	1F5 上位のみ残存	長	(2.7)	厚	0.6	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい褐色	上面形状が楕円状を呈し器形は外傾する。無文で内外面とも丁寧な研磨を加える。ミニチュア壺口縁部の可能性もある	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	5.2					
第93図 PL.81	7	縄文・弥生 土製品 小玉	1E5 完形	長	1.6	厚	1.5	細:石英粒少・白色粒/良好/暗灰黄色	水洗別調査で検出。楕円状の断面形で中央長軸方向に小孔を穿つ。器面全体に細かな刺突文を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	1.3	重	3.1			
第93図 PL.81	8	縄文・弥生 土製品 小玉	1F8 ほぼ完形	長	2.0	厚	1.2	細:石英・白色粒/良好/灰黄褐色	上端部僅かに欠損。楕円状の断面形を呈し中央長軸方向に小孔を穿つ。器面全体に細かな刺突文を施す	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	1.8	重	5.5			
第93図 PL.81	9	縄文・弥生 土製品	1F9 破片	径	(6.1)	厚	0.6	細:石英多・白色粒/良好/にぶい黄橙色	上面形態は五角形か。各隅に小孔を設け、上面器厚は薄い。体部は外傾し横位沈線を設ける。地文は無節Ｌ。内面弱い撫で調整。ミニチュア蓋か	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				高	(3.1)					
第93図 PL.81	10	縄文・弥生 土製品	1E10 破片	長	(8.0)	厚	2.4	細:石英・片岩粒・白色粒/良好/黒褐色	不明土製品。体部中位に小孔を穿つ。欠損部分裏面は外反する兆しを見せる。全面無節Ｌが覆う	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(5.2)					
第93図 PL.81	11	縄文・弥生 土製品	1D11 破片	長	(5.3)	厚	0.8	細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄褐色	不明土製品。粘土板を強く折り曲げ、全体形状は環状あるいは弧状と思われる。細かな刺突を加えた小型の橋状把手が付される。外面研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行
				幅	(10.0)					

第22表　６号溝石器・石製品観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第95図 PL.82	1	剥片石器 石鏃	完形	長	1.4	厚	0.4	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。側縁は弧状に近く、基部はU字状に大きく開く。	Ⅰa
				幅	1.5	重	0.48			
第95図 PL.82	2	剥片石器 石鏃	完形	長	1.6	厚	0.4	チャート	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。形状作出は雑だが、基部をU字状に大きく抉り、棒状の返し部を付ける。	Ⅰa
				幅	1.4	重	0.52			
第95図 PL.82	3	剥片石器 石鏃	完形	長	1.8	厚	0.4	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。基部はU字状に大きく抉り、側縁は弧状を呈す。完成度の高い優品。	Ⅰa
				幅	1.5	重	0.58			
第95図 PL.82	4	剥片石器 石鏃	完形	長	2.2	厚	0.3	流紋岩	未製品。表面側は全面を押圧剥離、裏面側は部分的に素材面を残しているが、押圧剥離様の薄い剥離。両側縁を欠損、使用可能だが未製品と見た。	Ⅰa
				幅	(1.8)	重	0.92			
PL.82	5	剥片石器 石鏃	完形	長	1.0	厚	0.2	黒曜石	未製品。基部側に残る側縁から細身長身の石鏃を志向したことは明らか。破損後、短身の石鏃を製作しようとしたもの。	Ⅰa
				幅	1.0	重	0.36			
PL.82	6	剥片石器 石鏃	完形	長	1.4	厚	0.3	黒曜石	未製品。周縁加工。調整加工は刃潰し様であり、側縁形状は左右非対称。基部も抉り込んでいるだけで、果して石鏃基部とするのが妥当か疑問。	Ⅰa
				幅	0.9	重	0.28			
PL.82	7	剥片石器 石鏃	完形	長	2.3	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表面側は押圧剥離が並行、丁寧な作り。裏面側は周縁加工して仕上げる。	Ⅰa
				幅	1.3	重	0.63			
PL.82	8	剥片石器 石鏃	完形	長	2.3	厚	0.4	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面剥離。先端部は表裏面に剥離面の新旧がある。新しい剥離面に比べ、古い剥離面の稜が摩耗、段階差が生じている。	Ⅰa
				幅	1.4	重	1.15			
PL.82	9	剥片石器 石鏃	完形	長	2.4	厚	0.4	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。返し部は小さく鋭い。先端部は絞り気味で最終段階に剥離、先端破損時の対応か。	Ⅰa
				幅	0.7	重	0.80			
第95図 PL.82	10	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.4)	厚	0.3	黒曜石	未製品。表裏面とも全面剥離面が覆う。器体の形状は整わず、バランスが悪い。側縁加工は厚く、形状修正的である。	Ⅰb
				幅	0.8	重	0.25			
第95図 PL.82	11	剥片石器 石鏃	完形	長	(2.1)	厚	0.4	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。側縁は直線的で、そのまま先端部に至る。基部はU字状に大きく開く。	Ⅰb
				幅	(1.5)	重	0.68			
第95図 PL.82	12	剥片石器 石鏃	完形	長	2.4	厚	0.5	チャート	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。U字状に大きく抉り込んで基部を作出する。	Ⅰb
				幅	1.4	重	1.03			
第95図 PL.82	13	剥片石器 石鏃	完形	長	2.7	厚	0.5	流紋岩	凹基無茎鏃。丁寧な押圧剥離による両面加工。裏面に素材剥片の一部を残す。	Ⅰb
				幅	1.4	重	1.34			
第95図 PL.82	14	剥片石器 石鏃	完形	長	4.1	厚	0.7	黒色頁岩	完成状態。概して厚く打ち欠き、加工は形状修正的。基部側に近い両側縁にノッチを入れ、大きな返し部を作出している。	Ⅰb
				幅	1.8	重	3.58			
第95図 PL.82	15	剥片石器 石鏃	完形	長	1.0	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも周縁を浅く剥離する。表面側に礫面、裏面側に素材面を残す。極小タイプ。	Ⅱa
				幅	0.8	重	0.18			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第95図 PL.82	16	剥片石器 石鏃	完形	長	1.8	厚	0.7	黒色頁岩	未製品。表面側は階段状剥離となり、最後まで礫面を除去することができなかったようである。裏面側は全面を押圧剥離が覆う。	Ⅱa
				幅	1.7	重	1.38			
PL.82	17	剥片石器 石鏃	完形	長	1.3	厚	0.2	黒曜石	略完成状態。小形剥片を周縁加工したもので加工は粗い。石鏃として機能したものだが、完成度は低い。	Ⅱa
				幅	1.0	重	0.27			
PL.82	18	剥片石器 石鏃	完形	長	1.4	厚	0.2	黒曜石	未製品。小形剥片に周辺を粗く加工したものだが、概形を整えた時点で製作を放棄している。	Ⅱa
				幅	0.9	重	0.41			
第95図 PL.82	19	剥片石器 石鏃	完形	長	1.8	厚	0.5	珪質頁岩	完成状態。表裏面とも全面加工。厚味があり、裏面側基部は階段状剥離になっている。側縁は直線的。	Ⅱb
				幅	(1.1)	重	0.66			
第95図 PL.82	20	剥片石器 石鏃	完形	長	2.2	厚	0.4	黒色頁岩	完成状態？表裏面とも全面押圧剥離。比較的丁寧に加工しているが、左辺加工は粗い。破損した先端部の稜が摩耗する。返し部の作出は不充分。	Ⅱb
				幅	1.4	重	0.89			
第95図 PL.82	21	剥片石器 石鏃	完形	長	1.2	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面を面的剥離。極小タイプで薄く仕上がっているが、加工は粗く、雑な作り。	Ⅲa1
				幅	1.2	重	0.18			
第95図 PL.82	22	剥片石器 石鏃	完形	長	1.3	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。極小タイプで、形状も整いバランスよく仕上がっている。優品。	Ⅲa1
				幅	1.0	重	0.22			
第95図 PL.82	23	剥片石器 石鏃	完形	長	1.4	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面に押圧剥離する。加工は丁寧で、バランスよく仕上がっている。	Ⅲa1
				幅	1.1	重	0.28			
PL.82	24	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.4)	厚	0.4	流紋岩	ほぼ完成状態。器肉は厚い。表裏面とも押圧剥離。先端部は未完成、基部を破損する。製作最終段階で破損か。	Ⅲa1
				幅	1.1	重	0.49			
PL.82	25	剥片石器 石鏃	完形	長	1.4	厚	0.2	褐色碧玉	平基有茎鏃。押圧剥離による両面加工で小型。裏面に素材剥片の一部を残す。	Ⅲa1
				幅	1.1	重	0.24			
PL.82	26	剥片石器 石鏃	完形	長	1.4	厚	0.2	黒曜石	完成状態。表裏面とも周縁加工、素材面を大きく残す。極所サイズの石鏃で、返し部は対称性を欠いているが、使用上の問題はないだろう。	Ⅲa1
				幅	0.9	重	0.16			
PL.82	27	剥片石器 石鏃	完形?	長	0.8	厚	0.2	黒曜石	完成状態？最小の部類に入る石鏃で、表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。返し部と茎を欠損、製作最終段階で欠損したものか。	Ⅲa1
				幅	0.9	重	0.11			
PL.82	28	剥片石器 石鏃	完形	長	0.9	厚	0.2	黒曜石	完成状態。返し部は三角形状を呈し小さく鋭い。茎を欠損。先端部形状は絞り気味で最終剥離が先端部に集中する。製作最終段階の破損か不明。	Ⅲa1
				幅	0.9	重	0.14			
PL.82	29	剥片石器 石鏃	完形	長	1.0	厚	0.2	黒曜石	完成状態。表面側は押圧剥離が全面を覆う。裏面側は周縁加工。茎は両側を深く抉るタイプ。ノッチを入れる段階で、茎を破損したもの。	Ⅲa1
				幅	1.1	重	0.23			
PL.82	30	剥片石器 石鏃	完形	長	-1.1	厚	0.2	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離。極小サイズの石鏃で先端部を欠く。茎の両側をノッチ状に抉り返し部を作出する。	Ⅲa1
				幅	0.9	重	0.16			
PL.82	31	剥片石器 石鏃	完形	長	1.1	厚	0.3	黒曜石	完成状態。やや角度を付けた加工を施し、形状を整える。表面側に素材面を小さく残す。極小サイズの石鏃で、小さく返し部を作出する。	Ⅲa1
				幅	1.1	重	0.20			
PL.82	32	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.2)	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面と押圧剥離が全面を覆う。茎の両側を抉り、三角形状を呈する返し部が付く。茎は根元から破損、完成直前で破損？	Ⅲa1
				幅	1.1	重	0.29			
PL.82	33	剥片石器 石鏃	完形	長	1.3	厚	0.3	黒曜石	未製品？表裏面とも押圧剥離。返し部は三角形状を呈し、小さく鋭い。片側の返し部は製作時の破損の可能性が大。先端部作出も不充分。	Ⅲa1
				幅	0.9	重	0.22			
PL.82	34	剥片石器 石鏃	完形	長	1.3	厚	0.2	黒曜石	未製品。表裏面とも押圧剥離、素材面を部分的に残す。茎の両側をノッチ状に抉るタイプ。左辺側の返し部の作出に失敗、製作を放棄。	Ⅲa1
				幅	1.0	重	0.19			
PL.82	35	剥片石器 石鏃	完形	長	1.3	厚	0.4	黒曜石	未製品。表裏面とも全面加工。剥離は粗く、形状はバランスを欠く。茎・返し部の作出には失敗している。製作途上製作を放棄。	Ⅲa1
				幅	1.1	重	0.43			
PL.82	36	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.3)	厚	0.2	黒曜石	完成状態。表面側は押圧剥離が全面を覆う。裏面側は周縁加工、素材面が大きく残る。茎の両側を抉り、三角形状の返し部を作出する。	Ⅲa1
				幅	1.1	重	0.20			
PL.82	37	剥片石器 石鏃	完形	長	1.4	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも周辺加工を施す。平面形はバランスよく仕上がっているが、側面形状は対称性に欠ける。	Ⅲa1
				幅	1.1	重	0.32			

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
PL.82	38	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.4 1.0	厚 重	0.3 0.30	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離を前面に施す。茎の両側をノッチ状に抉り、三角形状の小さな返し部を作出する。茎は小さく破損。	Ⅲa1
PL.82	39	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.4 1.0	厚 重	0.3 0.23	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。返し部は平縁気味だが三角形状を呈す。片側の返し部は側縁から破損。最終段階で製作を放棄。	Ⅲa1
PL.82	40	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.4 1.0	厚 重	0.3 0.28	黒曜石	完成状態。正三角形状の身に茎は付く極小サイズの石鏃。やや素材が厚く、加工は粗く見える。形状はバランスよく作出されている。	Ⅲa1
PL.82	41	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.5 1.0	厚 重	0.2 0.28	黒曜石	完成状態。器軸方向に剥片稜線を据え周縁加工。素材面を大きく残す。極小サイズの石鏃で形状は五角形状に近い。	Ⅲa1
PL.82	42	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.0 1.0	厚 重	0.3 0.16	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面を剥離面が覆う。極小サイズの石鏃で、返し部は小さく、三角形状を呈す。	Ⅲa1
PL.82	43	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.3 1.2	厚 重	0.3 0.31	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。平縁気味の返し部は左右の形状が異なり、バランスを欠く。	Ⅲa1
PL.82	44	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(1.2) 1.0	厚 重	0.3 0.26	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離。返し部は三角形状を呈し、小さく鋭い。極小サイズの石鏃。優品。	Ⅲa1
PL.82	45	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.6 1.3	厚 重	0.4 0.57	黒曜石	未製品。表面側は全面が押圧剥離で覆われているが、裏面側は大きく素材面を残す。先端部は五角形状、左右のバランスを欠く。基部欠損。	Ⅲa1
PL.82	46	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.7 1.2	厚 重	0.3 0.60	黒曜石	未製品。表裏面とも加工は粗く、周縁加工に止まる。返し部を明確に意識しているが、形状はバランスを欠く。	Ⅲa1
PL.82	47	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.7 (1.2)	厚 重	0.3 0.46	黒曜石	未製品。表裏面とも粗く周縁加工する。返し部は小さく三悪形状を呈するタイプだが左右のバランスを大きく欠く。	Ⅲa1
PL.82	48	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長 幅	(1.8) 1.3	厚 重	0.2 0.47	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離、部分的に素材面が残る。茎をノッチ状に抉り三角形状の返し部を作出しようとしたもの。先端・返し部を欠損。	Ⅲa1
PL.82	49	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(1.5) (1.4)	厚 重	0.3 0.45	赤碧玉	完成状態。表裏面とも押圧剥離。三角形状を呈す体部に小さな茎が付く。右辺側が平基鏃、左辺側が凹基鏃に近く三角形状の返し部となる。側縁は左辺が直線的、右辺が内湾気味。	Ⅲa1
第95図 PL.82	50	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.1 (0.9)	厚 重	0.2 0.13	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。先端は側縁を絞り突出気味に作出。左辺の返し部を欠く。極小タイプだが丁寧な作り。	Ⅲa2
第95図 PL.82	51	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.2 1.0	厚 重	0.3 0.12	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面を面的剥離。極小タイプで薄く仕上がっているが、側縁加工など雑。	Ⅲa2
第95図 PL.82	52	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(1.0) 1.1	厚 重	0.2 0.14	黒曜石	完成状態。表裏面とも素材面を大きく残す。粗く周縁加工して形状を作出しているが、先端のみ表裏面から加工、鋭く尖る先端部を作出する。	Ⅲa2
第95図 PL.82	53	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.1 0.9	厚 重	0.3 0.14	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面を押圧剥離。出土した石鏃の中でも最小の部類に属す。	Ⅲa2
第95図 PL.82	54	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(1.1) (1.2)	厚 重	0.3 0.24	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面を押圧剥離。茎、側縁の順に加工。右辺側の返し部を欠損する。極小タイプ。	Ⅲa2
第95図 PL.82	55	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.3 (1.0)	厚 重	0.4 0.22	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。剥離の最終段階で右辺剥離が内側に入り過ぎ、左右側縁はバランスを欠いている。	Ⅲa2
第95図 PL.82	56	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(1.2) 1.1	厚 重	0.3 0.18	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。極小タイプで、三角形状の返し部が付く。茎を欠損する。	Ⅲa2
第95図 PL.82	57	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(1.2) 1.3	厚 重	0.4 0.33	赤碧玉	完成状態。表裏面とも全面加工する。器体は厚く、加工は粗い。茎の両側をノッチ状に抉り、小さく鋭い返し部を作出する。	Ⅲa2
第95図 PL.82	58	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.3 (1.1)	厚 重	0.3 0.25	黒曜石	完成状態？表裏面とも周縁加工して形状作出。先端部および返し部に剥片稜部を巧く取り込んで、加工を最小限に止めている。	Ⅲa2
第95図 PL.82	59	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(1.4) 1.2	厚 重	0.3 0.44	流紋岩	完成状態。表面側は厚く、裏面側は薄く剥離。三角形状の身に太い茎が付く。返し部は左右のバランスを欠く。剥離面がギラつき、被熱の可能性。	Ⅲa2

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第95図 PL.82	60	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.4)	厚	0.2	黒曜石	未製品。表裏面とも周縁加工、素材面を大きく残す。途中製作を放棄したのでだうが、側縁を絞り先端を作出しようとする意図が左辺に見られる。	Ⅲa2
				幅	1.2	重	0.24			
第95図 PL.82	61	剥片石器 石鏃	完形	長	1.7	厚	0.4	珪質頁岩	未製品。表裏面とも面的加工、極わずか素材面が残り、一部が階段状剥離になっている。左辺側の返し部を欠く。	Ⅲa2
				幅	1.2	重	0.49			
第95図 PL.82	62	剥片石器 石鏃	完形	長	1.8	厚	0.3	黒曜石	完成状態。剥片稜部を器軸に並行させ、表裏面とも周縁加工。側縁を絞り込んで、先端部を作出する。	Ⅲa2
				幅	1.2	重	0.44			
第95図 PL.82	63	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.4)	厚	0.4	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。茎の両側をノッチ状に抉り三角形状の返し部を作出する。先端部は側縁を絞り気味に作出。優品。	Ⅲa2
				幅	1.5	重	0.51			
第95図 PL.82	64	剥片石器 石鏃	完形	長	1.7	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。茎の両側をノッチ状に抉り鋭く返し部を作出する。側縁は弧状を呈し先端部に続く。優品。	Ⅲa2
				幅	1.4	重	0.47			
第95図 PL.82	65	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.5)	厚	0.2	赤碧玉	完成状態？表裏面とも周縁加工、素材面を大きく残す。加工は雑だが、先端および茎の作出は表裏面から加工され、丁寧な作り。	Ⅲa2
				幅	1.2	重	0.37			
第95図 PL.82	66	剥片石器 石鏃	完形	長	1.7	厚	0.3	珪質頁岩	完成状態。表面側剥離は左辺側で階段状剥離になっており、全体的に加工は粗い。裏面側剥離は薄く丁寧。茎の両側を深く抉り、返し部は鋭い。	Ⅲa2
				幅	1.2	重	0.43			
第95図 PL.82	67	剥片石器 石鏃	完形	長	1.7	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。先端側両側縁をノッチ状に抉る。茎を部分欠損。	Ⅲa2
				幅	1.4	重	0.44			
第95図 PL.82	68	剥片石器 石鏃	完形	長	1.8	厚	0.5	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。裏面側先端のみ古い縦位剥離面が残り、被熱したように剥離面が荒れる。やや厚い作り。	Ⅲa2
				幅	1.3	重	0.72			
第95図 PL.82	69	剥片石器 石鏃	完形	長	1.7	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも周縁加工、素材面を残す。極小タイプの石鏃で、返し部は左右のバランスを欠く。	Ⅲb1
				幅	0.8	重	0.19			
第95図 PL.82	70	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.5)	厚	0.3	黒曜石	未製品？表裏面とも剥離面で覆われる。先端形状は棒状を呈し、側縁形状は途中まで直線的だが、これを絞り先端に続く。左辺の返し部を欠損。	Ⅲb1
				幅	(0.6)	重	0.19			
第95図 PL.82	71	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.4)	厚	0.3	黒曜石	未製品。表裏面とも加工は粗く、素材面を残す。加工は形状作出するだけのもので、トリミング程度。	Ⅲb1
				幅	0.8	重	0.19			
第95図 PL.82	72	剥片石器 石鏃	完形	長	1.5	厚	0.3	黒曜石	完成状態？表面側は厚く、裏面側は薄く剥離。加工状態は粗い。右側縁は内湾気味に、左側縁は外湾気味に作出。左辺の返し部を欠く。	Ⅲb1
				幅	0.8	重	0.23			
第95図 PL.82	73	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(1.5)	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。先端部の作出は不充分、茎を欠損。製作最終段階の破損か。	Ⅲb1
				幅	1.0	重	0.29			
第95図 PL.82	74	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.8)	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。右辺の返し部を欠損。	Ⅲb1
				幅	0.8	重	0.32			
第95図 PL.82	75	剥片石器 石鏃	完形	長	1.8	厚	0.3	褐色碧玉	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。極小タイプだが、茎は長い。	Ⅲb1
				幅	0.9	重	0.30			
第95図 PL.82	76	剥片石器 石鏃	完形	長	2.0	厚	0.4	玉髄	完成状態？先端は表裏面から剥離、側面・茎は形状を整えるだけの加工。裏面とも素材面を残し側縁形状は反り気味。	Ⅲb1
				幅	0.8	重	0.40			
第95図 PL.82	77	剥片石器 石鏃	完形	長	2.2	厚	0.4	黒色頁岩	完成状態。やや厚く表面側を剥離する。裏面側剥離は薄く、基部側に素材面を残す。	Ⅲb1
				幅	1.2	重	0.74			
第95図 PL.82	78	剥片石器 石鏃	完形	長	2.1	厚	0.5	チャート	完成状態？表裏面とも全面剥離。剥離は大部分で階段状剥離となり、仕上がり具合は全体に厚い。茎の作出段階で破損したものか。	Ⅲb1
				幅	1.2	重	0.83			
第95図 PL.83	79	剥片石器 石鏃	完形	長	(2.4)	厚	0.4	チャート	完成状態。剥片稜部を器軸に並行させ、主に表面側をトリミングして、形状を整えている。	Ⅲb1
				幅	1.3	重	0.92			
第95図 PL.83	80	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.7)	厚	0.4	黒曜石	未製品？表面側は厚く剥離。裏面側は薄く剥離、素材面を大きく残す。右辺の返し部を破損、左辺形状は微妙。	Ⅲb1
				幅	(1.0)	重	0.42			
第95図 PL.83	81	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(2.2)	厚	0.3	黒曜石	未製品。表裏面とも全面押圧剥離。左辺側は破損して不明だが、右辺側は側縁形状が途中変換する部分があり、意図的か。茎を欠損する。	Ⅲb1
				幅	0.9	重	0.44			
第95図 PL.83	82	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(2.3)	厚	0.5	黒曜石	完成状態？表面側は厚く、裏面側は薄く剥離。加工状態は粗く、側縁形状も不安定。右辺の返し部はノッチ状を呈し、分類が難しい。	Ⅲb1
				幅	1.0	重	0.72			

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第95図 PL.83	83	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(2.8) 1.4	厚 重	0.6 1.65	玉髄	未製品？器体下半は押圧剥離、器体中程から先端は厚く剥離し、側縁を絞る。先端部は破損後に微細剥離、形状修正する。左右のバランスを欠く。	Ⅲb1
PL.83	84	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.5 0.9	厚 重	0.3 0.26	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎は太く三角形状を呈している。左辺側の返し部は欠損。	Ⅲb1
PL.83	85	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.5 0.8	厚 重	0.3 0.32	黒曜石	未製品。表裏面ともやや粗い加工を全面に施す。茎および左側縁を製作時に欠損する。返し部は上がり気味だが、平基鏃の範疇で捉えた。	Ⅲb1
PL.83	86	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.4 0.9	厚 重	0.3 0.32	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面加工しているが、先端側は荒々しく角度ある加工が目立つ。	Ⅲb1
PL.83	87	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.7 0.8	厚 重	0.3 0.32	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。細身で、三悪形状を呈す太い茎が付く。	Ⅲb1
PL.83	88	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(1.8) (1.0)	厚 重	0.4 0.39	珪質頁岩	完成状態。表面側は周辺加工、裏面側は基部側に素材面を残す。身の加工が基部作出に先行。	Ⅲb1
PL.83	89	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.8 0.9	厚 重	0.3 0.33	黒曜石	未製品。表面先端側に素材面を残す他は全面加工。裏面側加工は形状を修正する程度で、素材面を大きく残す。返し部の作出も不充分。	Ⅲb1
PL.83	90	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	2.0 1.0	厚 重	0.5 0.72	黒曜石	やや粗い剥離で全面が覆われる。右辺側の返し部は欠損して形状は不明。先端部には衝撃剥離痕に似た剥離。やや厚く未完成の可能性がある。	Ⅲb1
PL.83	91	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	2.0 1.0	厚 重	0.5 0.78	黒曜石	完成状態。表面側は角度ある剥離、裏面側は押圧剥離による。概して粗い作り。表面側には被熱した平坦面が残る。	Ⅲb1
PL.83	92	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長 幅	2.0 (1.0)	厚 重	0.5 0.59	黒曜石	完成状態？表裏面ともやや粗い剥離が全面を覆う。左右両辺の返し部は両辺とも破損する。石器先端部は破損後の再加工で尖り気味。	Ⅲb1
第96図 PL.83	93	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.6 1.0	厚 重	0.3 0.27	黒曜石	完成状態。裏面側基部付近は素材面を残しているが、表裏面とも全面押圧剥離。細身･極小タイプで側縁は鋸歯状。	Ⅲb2
第96図 PL.83	94	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(1.5) (1.0)	厚 重	0.3 0.29	黒色頁岩	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。茎の両側を抉り、小さく返し部を作出する。茎は破損して短い。	Ⅲb2
第96図 PL.83	95	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.6 0.8	厚 重	0.4 0.33	黒曜石	表裏面とも全面押圧剥離。茎の両側を抉り、鋭い返し部を持つタイプ。茎および返し部を欠く。側縁は鋸歯状に近い。製作途上の破損か。	Ⅲb2
第96図 PL.83	96	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(1.4) 1.0	厚 重	0.2 0.17	黒曜石	完成状態。剥片稜線を器軸に並行させ、表裏面とも周辺加工して形状を整える。	Ⅲb2
第96図 PL.83	97	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.5 0.8	厚 重	0.2 0.16	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。細身・極小タイプの優品。	Ⅲb2
第96図 PL.83	98	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.6 0.8	厚 重	0.3 0.39	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。茎の両側をノッチ状に抉り、小さく鋭い返し部を作出。先端部は側縁を絞り気味に尖らせる。極小タイプ。	Ⅲb2
第96図 PL.83	99	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.6 0.9	厚 重	0.2 0.21	黒曜石	完成状態。表裏面とも周辺加工、素材面が大きく残る。	Ⅲb2
第96図 PL.83	100	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.6 0.9	厚 重	0.3 0.18	黒曜石	完成状態。裏面側基部に素材面が残る他、全面押圧剥離。被熱して全面が濁る。	Ⅲb2
第96図 PL.83	101	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.6 1.0	厚 重	0.3 0.37	黒曜石	完成状態？表裏面とも全面押圧剥離。茎両側を大きく抉り込んだ剥離が残る。茎の作出後、側縁加工か。側縁は左右のバランスを欠く。	Ⅲb2
第96図 PL.83	102	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(1.6) 1.1	厚 重	0.4 0.51	流紋岩	完成状態。表裏面ともやや粗い剥離が全面を覆う。やや厚手、返し部は左右のバランスを欠く等の特徴がある。	Ⅲb2
第96図 PL.83	103	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.6 1.1	厚 重	0.3 0.31	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。茎は途中破損したようだが、破損部を加工する。この程度の茎でも装着可能ということであろうか。	Ⅲb2
第96図 PL.83	104	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.9 1.1	厚 重	0.3 0.49	黒曜石	完成状態。裏面側に素材面を残しているが、表裏両面とも押圧剥離で覆う。返し部を部分的に破損する。	Ⅲb2
第96図 PL.83	105	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.8 (1.1)	厚 重	0.3 0.35	流紋岩	完成状態。表裏面とも押圧剥離、裏面基部側に素材面を大きく残す。左辺の返し部は上がり気味だが、本来的には凹基鏃を目指したのであろう。	Ⅲb2
第96図 PL.83	106	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(2.0) 1.0	厚 重	0.4 0.40	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。右辺側の返し部は直線的だが、返し部は小さく三角形状を呈し、凹基鏃の範疇で捉えた。	Ⅲb2(s)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第96図 PL.83	107	剥片石器 石鏃	完形	長 (1.8) 幅 1.2	厚 0.3 重 0.31			黒曜石	完成状態。裏面側に素材面が部分的に残されているが、これを除き表裏面は全面押圧剥離。側縁は鋸歯状に近い。	Ⅲb2
第96図 PL.83	108	剥片石器 石鏃	完形	長 2.1 幅 1.0	厚 0.2 重 0.31			黒曜石	完成状態。表面側は全面押圧剥離、裏面側は周辺加工。厚さ1㎜ばかり、極薄の作り。	Ⅲb2
第96図 PL.83	109	剥片石器 石鏃	完形	長 (1.8) 幅 1.1	厚 0.3 重 0.51			黒色頁岩	完成状態。表裏面とも全面加工。左辺側は階段状剥離となり、加工は粗い。返し部は左右のバランスを欠く。製作最終段階の破損か。	Ⅲb2
第96図 PL.83	110	剥片石器 石鏃	完形	長 (1.8) 幅 (1.1)	厚 0.3 重 0.35			黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。側縁は直線的、鋸歯状を呈する。	Ⅲb2
第96図 PL.83	111	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長 (2.2) 幅 1.2	厚 0.3 重 0.51			珪質頁岩	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。茎の両側をノッチ状に抉り、小さな返し部を作出する。茎を欠損。	Ⅲb2
第96図 PL.83	112	剥片石器 石鏃	完形	長 (2.1) 幅 1.2	厚 0.2 重 0.47			黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎の両側をノッチ状に抉り、茎を作出する。	Ⅲb2
第96図 PL.83	113	剥片石器 石鏃	完形	長 (2.1) 幅 1.4	厚 0.4 重 0.77			黒曜石	完成状態。表裏面とも全面を押圧剥離が覆う。側縁は鋸歯状を呈す。茎を欠いているが、茎の両側を深く抉り、返し部は大きい。	Ⅲb2
第96図 PL.83	114	剥片石器 石鏃	完形	長 2.0 幅 1.3	厚 0.4 重 0.58			黒曜石	凹基有茎鏃。丁寧な押圧剥離による両面加工。	Ⅲb2
第96図 PL.83	115	剥片石器 石鏃	完形	長 2.5 幅 (1.4)	厚 0.4 重 0.86			玉髄	表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。左辺側はノッチ状に抉れ、側縁形状も乱れる。良質石材を用いた優品だが、製作最終段階の破損か。	Ⅲb2
第96図 PL.83	116	剥片石器 石鏃	完形	長 (2.4) 幅 1.7	厚 0.4 重 1.01			珪質頁岩	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。側縁は鋸歯状を呈し、返し部は外反気味。茎を欠損する。	Ⅲb2
第96図 PL.83	117	剥片石器 石鏃	完形	長 (2.4) 幅 1.2	厚 0.4 重 0.64			黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。側縁は直線的で、完成度は高い。茎の両側を深く抉り、小さく鋭い返し部を作出する。	Ⅲb2
第96図 PL.83	118	剥片石器 石鏃	完形	長 2.1 幅 (0.9)	厚 0.4 重 0.53			黒曜石	完成状態。表裏面とも丁寧な押圧剥離が全面を覆う。茎は両側をノッチ状に抉り作出、右辺側の返し部は欠損する。	Ⅲb2(s)
第96図 PL.83	119	剥片石器 石鏃	完形	長 (2.2) 幅 1.1	厚 0.3 重 0.49			黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。茎を大きく欠損するほか、左辺側の返し部を欠く。	Ⅲb2(s)
第96図 PL.83	120	剥片石器 石鏃	完形	長 (2.4) 幅 1.1	厚 0.5 重 0.66			黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。表面側は甲高。返し部は茎の両側をノッチ状に抉り作出、左右でバランスが異なる。	Ⅲb2(s)
第96図 PL.83	121	剥片石器 石鏃	完形	長 3.2 幅 1.2	厚 0.4 重 0.87			赤碧玉	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。茎の両側をのち以上に抉り小さく鋭い返し部を作出する。完成度の高い優品。	Ⅲb2
第96図 PL.83	122	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長 (2.8) 幅 1.3	厚 0.5 重 0.90			黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。側縁は鋸歯状を呈す。茎を欠損する。完成度の高い優品。	Ⅲb2(s)
第96図 PL.83	123	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長 (3.5) 幅 1.5	厚 0.4 重 1.39			珪質頁岩	完成状態。表裏面とも素材面を残しているが、周辺を押圧剥離して器体を整える。先端部は側縁を絞り気味に作出。茎を破損する。	Ⅲb2
第96図 PL.83	124	剥片石器 石鏃	完形	長 2.4 幅 1.2	厚 0.3 重 0.73			黒色頁岩	完成状態。表裏面とも浅く周辺加工、素材面を大きく残す。側縁を極端に絞り、突出した先端部を作出する。	Ⅲb2
第96図 PL.83	125	剥片石器 石鏃	完形	長 2.3 幅 (1.2)	厚 0.4 重 0.87			赤碧玉	未製品？表裏面とも全面押圧剥離。先端を突出気味に作出、側縁下半が張り出す。先端左辺剥離が大きく、側縁形状も乱れ、完成状態には遠い。	Ⅲb2
第96図 PL.83	126	剥片石器 石鏃	完形	長 (2.3) 幅 1.0	厚 0.4 重 0.53			黒曜石	完成状態。表面側は厚い、裏面側は薄い剥離で覆われる。裏面側に素材面が残る。裏面側先端に対辺に抜ける長い剥離、衝撃剥離痕とは考え難い。側縁形状は先端が絞り気味で、返し部は張り出し気味。	Ⅲb2(s)
第96図 PL.83	127	剥片石器 石鏃	完形	長 2.5 幅 (1.1)	厚 0.4 重 0.59			黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。表面側を厚く、裏面側を薄く剥離。先端部は細く棒状、返し部は小さく三角形状、左辺側の返し部を欠く。	Ⅲb2(s)
第96図 PL.83	128	剥片石器 石鏃	完形	長 (2.2) 幅 0.9	厚 0.4 重 0.45			黒曜石	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。茎の両側をノッチ状に抉り、小さく鋭い返し部を作出。先端は絞り気味に作出、側縁下半は反り気味。	Ⅲb2(s)
第96図 PL.83	129	剥片石器 石鏃	完形	長 2.2 幅 1.2	厚 0.6 重 0.79			流紋岩	表面側下端部は階段状剥離となってしまったが、剥離は比較的丁寧。先端は側縁を絞り込んで作出。側縁は左右のバランスを欠く。	Ⅲb2

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第96図 PL.83	130	剥片石器 石鏃	完形	長	(2.6)	厚	0.4	珪質頁岩	完成状態。表裏面とも押圧剥離、裏面側に素材面が部分的に残る。裏面側の先端には衝撃剥離痕。茎破損。良質石材を用いた飛行機鏃。	Ⅲb2
				幅	1.6	重	1.17			
PL.83	131	剥片石器 石鏃	完形	長	1.5	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。返し部は平縁気味で小さく茎が付く。先端部は絞り気味。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.32			
PL.83	132	剥片石器 石鏃	完形	長	1.5	厚	0.2	黒曜石	未製品。表裏面とも周縁加工、素材面を大きく残す。エッジをトリミングしただけで、機能的効果は疑問。	Ⅲb2
				幅	0.8	重	0.19			
PL.83	133	剥片石器 石鏃	完形	長	1.5	厚	0.2	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎の両側をノッチ状に抉り、鋭く小さな三角形状の返し部を作出する。	Ⅲb2
				幅	0.9	重	0.17			
PL.83	134	剥片石器 石鏃	完形	長	1.5	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも丁寧な押圧剥離で全面が覆われる。小形・短身で、三角形状を呈す。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.28			
PL.83	135	剥片石器 石鏃	完形	長	1.6	厚	0.2	黒曜石	完成状態。表面側は押圧剥離が全面を覆う。裏面側は周縁加工、素材面を大きく残す。茎は器体直交軸から押され破損する。	Ⅲb2
				幅	0.9	重	0.27			
PL.83	136	剥片石器 石鏃	完形	長	1.7	厚	0.4	黒曜石	未製品。両面加工。表裏面とも加工が粗く、部分的に階段状剥離となっている。返し部は小さく三角形状を呈しているが、先端部の作出は不充分。	Ⅲb2
				幅	1.1	重	0.50			
PL.83	137	剥片石器 石鏃	完形	長	1.3	厚	0.2	黒曜石	完成状態。表裏面とも周縁加工して石器を仕上げる。加工は粗く、作りは雑。茎は小さく、痕跡程度に見えるだけである。	Ⅲb2
				幅	0.9	重	0.15			
PL.83	138	剥片石器 石鏃	完形	長	1.3	厚	0.1	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。返し部は小さく、三角形状を呈する。右辺の返し部を欠損。製作時の欠損か。	Ⅲb2
				幅	0.9	重	0.14			
PL.83	139	剥片石器 石鏃	完形	長	1.4	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎の両側をノッチ状に抉り、三角形状の返し部を作出する。小形だが優品の部類に入る。	Ⅲb2
				幅	0.9	重	0.23			
PL.83	140	剥片石器 石鏃	完形	長	1.4	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも丁寧な押圧剥離。返し部は小さく三角形状。右辺側の返し部を欠損する。先端部は絞り気味に尖る。	Ⅲb2
				幅	0.8	重	0.25			
PL.83	141	剥片石器 石鏃	完形	長	1.5	厚	0.2	黒曜石	完成状態。表裏面とも周縁を粗く加工する。茎の両側を深く抉り返し部を作出。作りは雑だが、充分機能したのであろう。	Ⅲb2
				幅	0.9	重	0.20			
PL.83	142	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(1.5)	厚	0.3	黒曜石	未製品。茎の両側を深く抉り込んで鋭い返し部を作出したもの。左辺側の加工に失敗し製作を放棄したもの。	Ⅲb2
				幅	(0.9)	重	0.26			
PL.83	143	剥片石器 石鏃	完形	長	1.5	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面を押圧剥離が覆う。茎の両側を抉り、三悪形状の返し部を作出。右辺側の返し部を欠損、概して基部側の加工が粗い。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.29			
PL.83	144	剥片石器 石鏃	完形	長	1.5	厚	0.2	黒曜石	表裏面とも周縁加工。加工はチッピング状で形状を整える程度。茎の両側をノッチ状に抉り小さな返し部を作出する。	Ⅲb2
				幅	0.8	重	0.25			
PL.83	145	剥片石器 石鏃	完形	長	1.6	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。返し部は小さく三角形状を呈するタイプだが、右辺側の返し部を欠損する。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.26			
PL.83	146	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(1.6)	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表面側は押圧剥離が全面を覆う。裏面側は周縁加工。茎の両側を深くノッチ状に抉り鋭い返し部を作出。茎と右辺の返し部を欠損。	Ⅲb2
				幅	1.1	重	0.34			
PL.83	147	剥片石器 石鏃	完形	長	1.8	厚	0.3	流紋岩	完成状態。側縁は鋸歯状を呈しているが、加工は雑で周縁加工に止まる。素材面を大きく残す。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.40			
PL.83	148	剥片石器 石鏃	完形	長	1.8	厚	0.3	黒曜石	完成状態。背面側は剥離面が全面を覆い、裏面側は周縁加工を施す。茎の両側を抉り、返し部を作出する。側縁方向に反り返り、仕上がり不良。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.36			
PL.83	149	剥片石器 石鏃	完形	長	1.9	厚	0.3	黒曜石	完成状態。両面とも押圧剥離、裏面側のみ素材面を残す。返し部は右辺側が平縁、左辺側が三角形状を呈す。	Ⅲb2
				幅	1.2	重	0.58			
PL.83	150	剥片石器 石鏃	完形	長	1.9	厚	0.3	黒色頁岩	完成状態。やや粗い押圧剥離が全面を覆う。茎の両側をノッチ状に抉り返し部を作出する。返し部の形状は甘い。	Ⅲb2
				幅	1.2	重	0.61			
PL.83	151	剥片石器 石鏃	完形	長	1.9	厚	0.2	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎は小さく、三角形状を呈す。返し部は鈍い。	Ⅲb2
				幅	1.2	重	0.35			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.83	152	剥片石器 石鏃	完形	長	1.9	厚	0.4	黒曜石	未製品。表面側剥離は平坦剥離に近く、裏面側は角度を付けた剥離。両面とも素材面を残す。茎を残し返し部を作出しようとしたが失敗。	Ⅲb2
				幅	1.2	重	0.91			
PL.83	153	剥片石器 石鏃	完形	長	1.6	厚	0.4	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎の両側を抉り三角形状の返し部を作出する。	Ⅲb2
				幅	1.1	重	0.42			
PL.83	154	剥片石器 石鏃	完形	長	1.6	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎の両側を深くノッチ状に抉り、小さな三角形状の返し部を作出する。茎の欠損は製作時か。	Ⅲb2
				幅	0.9	重	0.26			
PL.83	155	剥片石器 石鏃	完形	長	1.7	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。細身長身に石鏃で、技術的に優れている。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.29			
PL.83	156	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(1.7)	厚	0.5	黒曜石	未製品。表裏面とも粗く周縁加工を施し、器体を作出する。素材が厚く、これを巧く加工することができず製作を放棄した可能性が大。	Ⅲb2
				幅	1.1	重	0.64			
PL.83	157	剥片石器 石鏃	完形	長	1.7	厚	0.2	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎は両側を深く抉り、三角形状の返し部を作出する。	Ⅲb2(s)
				幅	0.7	重	0.21			
PL.83	158	剥片石器 石鏃	完形	長	1.7	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表面側は押圧剥離が全面を覆う。裏面側は周縁加工、素材面を大きく残す。返し部は小さく、三角形状を呈す。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.38			
PL.83	159	剥片石器 石鏃	完形	長	(1.8)	厚	0.4	流紋岩	完成状態。押圧剥離が全面を覆う。先端側裏面に衝撃剥離痕、茎は裏面側から破損。返し部は鋭く、三角形状に作出されている。	Ⅲb2
				幅	(1.4)	重	0.73			
PL.83	160	剥片石器 石鏃	完形	長	1.9	厚	0.3	黒曜石	完成状態？表面側には薄い剥離、素材面が大きく残る。裏面側は粗く全面剥離。茎の両側をノッチ状に抉り小さな返し部を作出。	Ⅲb2
				幅	1.3	重	0.49			
PL.84	161	剥片石器 石鏃	完形	長	1.9	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面を押圧剥離が覆う。茎の両側を抉り小さな三角形状の返し部を作出する。優品。	Ⅲb2
				幅	1.1	重	0.38			
PL.84	162	剥片石器 石鏃	完形	長	1.9	厚	0.4	流紋岩	完成状態。やや粗い押圧剥離が全面を覆う。茎の両側をの地上に抉り、返し部を作出する。左辺側側縁が内側に入り込む。	Ⅲb2
				幅	1.2	重	0.46			
PL.84	163	剥片石器 石鏃	完形	長	1.9	厚	0.3	黒色頁岩	完成状態。押圧剥離が全面を覆う。茎の両側をノッチ状に抉り、鋭い返し部を作出する。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.44			
PL.84	164	剥片石器 石鏃	完形	長	1.9	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面ともほぼ完ぺきな押圧剥離。茎の両側を抉り三角形状の返し部を作出する。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.39			
PL.84	165	剥片石器 石鏃	完形	長	1.9	厚	0.3	黒曜石	完成状態。押圧剥離が全面を覆う。茎は棒状を呈し、返し部の作出は鈍く、非対称。	Ⅲb2(s)
				幅	0.8	重	0.34			
PL.84	166	剥片石器 石鏃	完形	長	1.9	厚	0.3	チャート	完成状態？表裏面とも素材面を大きく残す。右辺側の返し部は作出されていないが、これ以上の加工は難しい。遺跡内製作の石鏃。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.49			
PL.84	167	剥片石器 石鏃	完形	長	(2.0)	厚	0.3	黒曜石	表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。左辺側の粗い加工を踏まえるならば茎を破損した時点で石器製作を諦めたものか。	Ⅲb2(s)
				幅	1.1	重	0.52			
PL.84	168	剥片石器 石鏃	完形	長	2.0	厚	0.4	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。身のサイズに比べて茎は小さく返し部は左右で大きくバランスを欠く。	Ⅲb2
				幅	1.3	重	0.75			
PL.84	169	剥片石器 石鏃	完形	長	(2.0)	厚	0.4	流紋岩	完成状態。押圧剥離が全面を覆う。先端は先端側から、茎は裏面側から破損する。返し部は茎の脇を抉り作出する。欠損時不明。	Ⅲb2
				幅	(1.2)	重	0.74			
PL.84	170	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(2.0)	厚	0.4	黒色頁岩	完成状態。茎の近い側縁をノッチ状に抉り、鋭い返し部を作出する。先端部は摩耗して石錐様に使われたものと見られる。飛行機鏃に似る。	Ⅲb2
				幅	1.2	重	0.66			
PL.84	171	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(2.1)	厚	0.4	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎の両側を深くノッチ状に抉り鋭い返し部を作出する。茎は側縁から加撃した際に破損。	Ⅲb2(s)
				幅	1.2	重	0.68			
PL.84	172	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	2.1	厚	0.3	黒曜石	未製品。周縁加工して形状を整えているが、左右側縁のバランスが悪い。茎を意識しているが、あまりにも小さく、茎として機能するのは難しい。	Ⅲb2(s)
				幅	1.1	重	0.59			
PL.84	173	剥片石器 石鏃	完形	長	2.1	厚	0.4	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎の両側にノッチを入れ、小さく尖る返し部を作出。茎を破損する。	Ⅲb2
				幅	1.0	重	0.51			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.84	174	剥片石器 石鏃	完形	長	2.1	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎の両側を抉り、返し部を作出する。返し部より上半を細身に仕上げている。茎を欠損。	Ⅲb2(s)
				幅	1.1	重	0.46			
PL.84	175	剥片石器 石鏃	完形	長	(2.2)	厚	0.5	流紋岩	完成状態。茎の両端を抉り「返し部」を明らかに意識している。茎の破損は側縁からで、製作時に破損か？	Ⅲb2
				幅	1.4	重	0.82			
PL.84	176	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(2.2)	厚	0.4	珪質頁岩	完成状態。表面側は丁寧な押圧剥離、裏面側は周縁加工のみ。茎はエッジから破損。「返し部」は三角形状を呈す。	Ⅲb2
				幅	1.3	重	0.65			
PL.84	177	剥片石器 石鏃	完形	長	2.2	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎の両側を抉り返し部を作出する。側縁形状は整わず鋸歯状に近い。	Ⅲb2(s)
				幅	1.1	重	0.42			
PL.84	178	剥片石器 石鏃	完形	長	2.2	厚	0.2	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離を施す。茎の両側を深く抉り、鋭い返し部を作出する。茎を石器製作の最終段階で欠損する。	Ⅲb2(s)
				幅	1.0	重	0.38			
PL.84	179	剥片石器 石鏃	完形	長	2.3	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離が全面を覆う。茎の両脇を深く抉り、鋭い返し部を作出する。優品。	Ⅲb2(s)
				幅	1.1	重	0.51			
PL.84	180	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	2.4	厚	0.3	黒色頁岩	完成状態。薄い剥離で全面が覆われているが、剥離は雑で、形状を整える程度。結果的に側縁は鋸歯状を呈す。茎の両脇を抉り返し部を作出する。	Ⅲb2
				幅	(1.2)	重	0.67			
PL.84	181	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(2.6)	厚	0.4	黒色頁岩	完成状態。先端部および左辺側の返し部を欠損する。茎はエッジ方向から破損。側縁は弧状を呈し、長い。	Ⅲb2
				幅	(1.5)	重	0.95			
PL.84	182	剥片石器 石鏃	完形	長	(2.5)	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも全面を押圧剥離が覆う。茎の両側を深く抉り鋭い返し部を作出する。側縁は鋸歯状に近い。茎は裏面側から押され破損。	Ⅲb2(s)
				幅	1.2	重	0.76			
PL.84	183	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(2.7)	厚	0.4	珪質頁岩	完成状態。押圧剥離が全面を覆う。茎に近い身の下半部に最大厚を有す。先端が細く延びるのは長身であるからか再加工であるからか、不明。	Ⅲb2
				幅	1.4	重	0.90			
第96図 PL.84	184	剥片石器 石鏃	完形	長	2.1	厚	0.3	黒色頁岩	完成状態。表裏面とも周縁加工、素材面を大きく残す。加工量の割に形状は安定、左右のバランスが取れている。	Ⅲb3
				幅	1.2	重	0.67			
第96図 PL.84	185	剥片石器 石鏃	完形	長	1.8	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表裏面とも押圧剥離、裏面側のみ素材面を残す。基部側両側縁には茎作出を意図したような小剥離痕があるものの、断定できない。尖基鏃の可能性も否定できない。	Ⅲb3
				幅	0.9	重	0.41			
第96図 PL.84	186	剥片石器 石鏃	完形	長	3.0	厚	0.6	黒色頁岩	完成状態。表裏面とも剥離は全面に及ぶ。側縁は先端部ぬ向け絞り気味。茎は小さく、舌状に延びる。	Ⅲb3
				幅	1.6	重	1.61			
第96図 PL.84	187	剥片石器 石鏃	0 完形	長	(2.6)	厚	0.5	流紋岩	完成状態？表裏面とも全面を押圧剥離。側縁形状は粗く、鋸歯状を呈す。基部は粗く加工されているだけで、平基鏃か凸基鏃か、判断は難しい。	Ⅲb3
				幅	1.3	重	1.14			
第96図 PL.84	188	剥片石器 石鏃	完形	長	(3.3)	厚	0.6	流紋岩	完成状態。表裏面とも押圧剥離。やや粗い剥離で、裏面側は部分的に階段状剥離。表面側に素材面が残る。茎を欠損する。	Ⅲb3
				幅	1.6	重	2.44			
第96図 PL.84	189	剥片石器 石鏃	完形	長	(3.4)	厚	0.4	珪質頁岩	完成状態。表裏面とも素材面を残しているが、それ以外器体は押圧剥離で覆われる。最大幅は器体中央にあり、先端部は尖り気味、側縁下半は直線的に、側縁を抉り込んで茎を作出する。飛行機鏃。	Ⅲb3
				幅	1.4	重	2.02			
第96図 PL.84	190	剥片石器 石鏃	完形	長	(4.3)	厚	0.5	黒色頁岩	完成状態。表裏面とも全面押圧剥離。側縁は直線的で、わずか鋸歯状。茎を欠損。大型品の部類。	Ⅲb3
				幅	1.8	重	3.08			
PL.84	191	剥片石器 石鏃	ほぼ完形	長	(1.5)	厚	0.3	黒曜石	完成状態？加工は丁寧で、全面を覆う。茎を欠損するほか、返し部の作出にも失敗している。遺跡内製作。	Ⅲb3
				幅	0.9	重	0.27			
PL.84	192	剥片石器 石鏃	完形	長	1.5	厚	0.3	黒曜石	完成状態。表面側は全面加工、裏面側は周縁加工に止まる。基軸は反り返り、機能的には問題がある。返し部は上がり気味で、凸基鏃と見た。	Ⅲb3
				幅	0.8	重	0.27			
第97図 PL.84	193	剥片石器 石鏃	完形	長	1.8	厚	0.6	チャート	完成状態。表裏面とも粗く全面加工。先端部は絞り気味に尖る。やや雑な作り。	Ⅳ
				幅	1.4	重	1.34			
第97図 PL.84	194	剥片石器 石鏃	完形	長	2.3	厚	0.5	黒曜石	完成状態。表面側は全面押圧剥離。裏面側は基部側を押圧剥離、側縁は浅く加工。裏面側には素材面が大きく残る。断面形状は大きく反り返る。	Ⅳ
				幅	1.3	重	0.89			
第97図 PL.84	195	剥片石器 石鏃	完形	長	2.3	厚	0.6	黒曜石	完成状態。表裏面ともやや粗い加工が全面を覆う。器体が厚く、側縁加工は錯向剥離気味。先端部は左右非対称。	Ⅳ
				幅	1.3	重	1.15			
第97図 PL.84	196	剥片石器 石鏃	完形	長	2.5	厚	0.7	赤碧玉	表面側は全面加工、裏面側は右辺素材面を除き浅い剥離する。概ね器体は完成しているが、先端部加工は概形作出に止まっている。	Ⅳ
				幅	1.6	重	2.59			

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第97図 PL.84	197	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	2.3 1.9	厚 重	0.6 2.4	珪質頁岩	未加工？表面側は浅い押圧剥離、左辺側は未加工のエッジ、裏面側は基部側を除いて周辺加工。木端部は丸味を帯びる。	Ⅳ
PL.84	198	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.9 1.2	厚 重	0.6 1.11	珪質頁岩	完成状態？表裏面とも粗い剥離が全面を覆う。素材は厚く、背面側に素材面が残る。素材面が除去できないため、製作を放棄したとも思える。	Ⅳ
PL.84	199	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.6 1.3	厚 重	0.3 0.48	黒曜石	未製品。表面側右辺および裏面側右辺下部を薄く剥離するほか、右辺上部を微細剥離する。表裏面とも素材面を大きく残す。製作初期に破損。現状では円基鏃とするしかないが、判断に苦しむ。	Ⅳ
PL.84	200	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.9 1.1	厚 重	0.3 0.71	珪質頁岩	表裏面とも周辺加工、租税面を大きく残す。形状は整っており、完成状態とすることができるかもしれないが、判断は難しい。	Ⅳ
PL.84	201	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.7 1.2	厚 重	0.3 0.53	黒曜石	完成状態。表裏面とも周縁加工、素材面を残す。	Ⅳ
PL.84	202	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.7 1.2	厚 重	0.3 0.74	黒曜石	未製品。表裏面とも押圧剥離、裏面側は素材面を残す。加工初期段階で製作を放棄したものであり、茎の製作まで届いていない可能性がある。	Ⅳ
PL.84	203	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.9 1.2	厚 重	0.4 0.79	珪質頁岩	表裏面とも周縁加工、素材面を大きく残す。裏面側素材面は大きく反り、これ以上剥離を奥に入れることはできない。形状のみ整えたものか。	Ⅳ
PL.84	204	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	1.8 1.5	厚 重	0.4 0.93	流紋岩	未製品？表裏面とも薄い剥離に覆われているが、加工は概して粗く、充分ではない。形状は涙滴状を呈し、製作しようとする形状は分かる。	Ⅳ
PL.84	205	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(2.3) 1.6	厚 重	0.5 1.81	褐色碧玉	未製品。表面側は粗く薄い剥離が全面を覆う。裏面側は基部側に薄い剥離が施され、先端側は未加工。形状は涙滴状。製作都城に製作を放棄。	Ⅳ
PL.84	206	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	2.2 1.1	厚 重	0.4 0.95	黒色頁岩	未製品。表面側は稜線とも薄い剥離、裏面側は浅く周縁加工、表裏面とも素材面を大きく残す。	Ⅳ
PL.84	207	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	2.8 1.8	厚 重	0.7 3.05	流紋岩	未製品。表裏面とも粗い剥離、素材面を残す。先端部は尖り、また、基部も尖り気味で、石錐としての可能性も否定できない。	Ⅳ？
第97図 PL.84	208	剥片石器 石匙		長 幅	5.9 2.6	厚 重	0.9 10.8	チャート	縦長剥片を縦位に用い両側縁を加工。上端右辺はノッチ状に加工、摘み部が作出されているが、左辺は直線的で不明瞭。形状は縦型石匙に近い。	
第97図 PL.84	209	剥片石器 石匙		長 幅	3.8 3.1	厚 重	0.7 8.0	黒色頁岩	小形幅広剥片を横位に用い、上端側に摘み部が作出されている。刃部は弧状を呈する。	
第97図 PL.84	210	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	(2.4) 1.7	厚 重	0.6 1.71	珪質頁岩	剥片稜部を器軸に据え両側縁を加工して機能部を作出したもの。器体基部を折断、摘み部としたものかもしれないが、先端部破損の時期は不明。	2
第97図 PL.84	211	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	5.0 2.0	厚 重	0.8 4.88	黒色頁岩	端部がヒンジ状に捲れた不良剥片の形状を利して長い尖頭部と、摘み部を作出する。先端部摩耗痕は確認できない。	2
第97図 PL.84	212	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)		長 幅	1.8 0.7	厚 重	0.4 0.47	黒曜石	棒状を呈す。断面三角形状を呈し、先端部両縁が摩耗する。両側縁間5㎜、径5㎜程度の孔が穿てる。機能部は頻繁に更新されたのであろう。	3
第97図 PL.84	213	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	1.8 0.7	厚 重	0.5 0.45	黒曜石	剥離が全面を覆う。上下両端の先端部は再生され変形しているが、部分的に著しい摩耗痕が広がる。	3
第97図 PL.84	214	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	2.0 0.7	厚 重	0.4 0.54	黒曜石	略ひし形状を呈し、両端に機能部を持つ。断面三角形状の機能部側縁には明瞭な摩耗痕が残る。摩耗した両側縁間4㎜を測る。	3
第97図 PL.84	215	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	1.9 0.7	厚 重	0.6 0.69	黒曜石	棒状を呈す。下端側の機能部両側縁に摩耗が見られる。断面三角形状を呈し、摩耗側縁間は4㎜前後を測る。	3
第97図 PL.84	216	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	(2.5) 1.0	厚 重	0.6 1.28	黒曜石	小形剥片を用いる。表面側加工は面的だが、裏面側は周辺加工、横断角は先端側で厚い。側縁摩耗は見られず、再生途中製作を放棄したものか。	3
第97図 PL.84	217	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	2.3 0.8	厚 重	0.5 0.80	黒曜石	棒状を呈す。上下両端とも側縁・先端部が激しく摩耗する。上端側に比べ下端側機能部の形状が整う。	3
第97図 PL.84	218	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	2.5 0.9	厚 重	0.5 0.96	黒色頁岩	略棒状を呈す。剥片稜部を基軸に据え、機能部を作出する。下端側機能部先端が著しく摩耗、上端側にも同等の機能部が作出されたのだろう。	3

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第97図 PL.84	219	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	3.0 1.0	厚 重	0.6 1.74	黒曜石	表面側にはやや角度ある剥離、裏面側には薄い平坦剥離、断面三角形状の器体を作出。下端側を鉤状に抉り、機能部とする。機能部に摩耗痕なし。	3
第98図 PL.84	220	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	2.8 1.0	厚 重	0.6 1.49	珪質頁岩	素材剥離面が中央付近に残されているのみで、上下両端に機能部を持つ。機能部は上下両端とも著しく摩耗、稜が丸味を帯びる。	3
第98図 PL.84	221	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	3.4 0.8	厚 重	0.4 1.04	珪質頁岩	棒状を呈す。表面側を厚く、裏面側を薄く剥離して器体を作出する。上下両端の機能部には摩耗が見られず未使用の可能性。	3
第98図 PL.84	222	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	3.4 0.8	厚 重	0.5 1.02	珪質頁岩	棒状を呈す。機能部は尖り方が鋭い。形状が良く整い、完成後まもない製品といえるだろう。	3
第98図 PL.84	223	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	3.4 1.3	厚 重	0.9 3.41	黒曜石	表面側を厚く、裏面側を薄く剥離。機能部は先端側に想定可能だが、石錐先端部とするには断面角が薄過ぎる。被熱して透明感に欠ける。	3
第98図 PL.85	224	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	4.4 1.0	厚 重	0.6 2.66	黒色頁岩	柳葉形状を呈す。表面側は面的加工、裏面側は浅く周辺加工。器体の中央付近が甲高で、両端はドリル先端にしては薄過ぎる。未使用？	3
第98図 PL.85	225	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	4.3 1.0	厚 重	0.7 2.43	珪質頁岩	棒状を呈す。剥片を側縁加工して機能部を作出。機能部先端は薄く機能的に不安だが、弱く摩耗が広がる。摩耗度は低く、完成まもない製品か。	3
第98図 PL.85	226	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	4.0 1.3	厚 重	0.8 3.93	黒色頁岩	茎の長い有茎鏃に見える。実際石鏃にも使用可能だが、先端部が微妙に摩耗すること、先端摩耗した同形の石錐があることを踏まえ器種認定した。	3
第98図 PL.85	227	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	5.0 1.0	厚 重	0.7 3.63	黒色頁岩	棒状を呈す。表面側を面的に、裏面側を周辺加工して器体を作出。機能部の断面は菱形状。下端側先端部は弱く摩耗するように見える。	3
第98図 PL.85	228	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	4.2 1.5	厚 重	1.0 5.32	黒色頁岩	中央付近に最大幅を有し、錯交剥離して尖頭状に器体を作出する。機能部は鉤状を呈した下端側にあり、両側縁が摩耗する。	3
第98図 PL.85	229	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	4.0 1.3	厚 重	1.1 3.72	黒曜石	剥片の先端を粗く加工して、断面三角形状を呈す機能部を作出する。機能部は、先端部分が弱く摩耗する。	3
第99図 PL.85	230	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	1.8 1.5	厚 重	0.5 0.95	黒曜石	剥片稜部を器軸に据え、表裏面とも側縁加工、先端部は錯向剥離して三角形状の厚い刃部を作出。石器上端部はトリミングされ丸味がある。	4
第99図 PL.85	231	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	(2.8) 1.1	厚 重	0.5 1.31	黒色頁岩	選択的に選ばれた剥片を用い、形状を利して断面三角形状を呈する機能部を作出したもの。先端部が弱く摩耗、エッジが丸味を帯びる。	4
第99図 PL.85	232	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	2.9 1.8	厚 重	1.0 3.92	赤碧玉	剥片稜部を器軸に据え、両側縁加工して機能部を作出したもの。被熱して剥離面が剥落、機能部の摩耗等は確認できない。	4
第99図 PL.85	233	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	(2.5) (1.4)	厚 重	(0.9) 2.12	黒曜石	小形板状剥片の両側縁に機能部を作出。現状で機能部には明らかな摩耗痕は見られないが、先端が細くなる機能部を評価して器種認定した。	4
第99図 PL.85	234	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	3.2 1.0	厚 重	0.9 2.28	黒曜石	小形剥片先端を加工して機能部を作出。現状で機能部に摩耗痕は確認できない。先端部は、製作途中破損した可能性が大。	4
PL.85	235	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	1.6 0.6	厚 重	0.3 0.30	黒曜石	表面側を厚く、裏面側を薄く全面剥離する。関井形状は棒状を呈し､断面三角形状を呈する。側縁等に摩耗はない。属性的に器種認定した。	3
PL.85	236	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	1.5 0.6	厚 重	0.4 0.35	黒曜石	全体的には棒状を呈しているが、下端側は尖り気味。上下両端ともエッジが明瞭に摩耗している状態が分かる。	3
PL.85	237	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	1.8 0.8	厚 重	0.4 0.61	黒曜石	表面側に面的加工、裏面側に周縁加工。表裏面とも素材面を残す。下端側エッジに明確な摩耗痕が生じている。	3
PL.85	238	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	1.7 0.9	厚 重	0.5 0.74	黒曜石	表裏面とも全面加工を施す。側縁に摩耗痕は確認できないが、素材の厚さ、加工状況から石錐と判断した。	3
PL.85	239	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 幅	(1.2) 0.6	厚 重	0.2 0.19	黒曜石	表裏面とも押圧剥離が施されているが、端部のみ剥離方向が異なり、器軸方向に剥離を加えている。凹基無茎鏃の返し部の可能性も否定できない。	3

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.85	240	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 1.6 幅 0.8		厚 0.4 重 0.51		黒曜石	剥片端部の両側縁を表裏面から加工、機能部を作出する。先端およびこれに接した両側縁が摩耗する。上端部は平坦面、小型だがこれで完形。	4
PL.85	241	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 1.8 幅 0.8		厚 0.6 重 0.94		黒曜石	断面三角形状を呈す。先端部や両側縁には著しい摩耗痕が面的に広がる。石器先端部は変形して、使い込んでいるように見える。	3
PL.85	242	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 1.5 幅 0.7		厚 0.5 重 0.53		黒曜石	断面三角形状を呈する小形剥片の両側縁を厚く加工する。製作中破損したものか。厚い刃部角を有する先端形状から石錐と捉えた。	4
PL.85	243	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 1.8 幅 0.6		厚 0.6 重 0.62		黒曜石	両端が尖り、その先端と側縁が著しく摩耗する。断面形状は菱形に近い。小形で着柄して使用する以外ない。	3
PL.85	244	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 1.7 幅 0.6		厚 0.5 重 0.54		黒曜石	表面側を阿久津、裏面側を薄剥離して断面三角形状の機能部を作出する。先端側両側縁に摩耗痕。	3
PL.85	245	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 1.6 幅 1.0		厚 0.5 重 0.43		黒曜石	上下両端の機能部があり、中位に突出部を持つタイプ。機能部は断面三角形状を呈す。現状で側縁摩耗は確認できない。上端側機能部を欠く。	4
PL.85	246	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 (2.0) 幅 1.3		厚 0.6 重 1.17		黒曜石	剥片端部を薄く剥離して、断面三角形状を呈す機能部を作出したもの。先端は潰れているが、現状で機能部に横位線条痕や摩耗面は確認できない。	4
PL.85	247	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 3.0 幅 0.8		厚 0.8 重 2.59		黒曜石	小形剥片の未加工部分は全面が擦れて来歴が複雑。機能部は左辺側に集中､右辺側は未加工。断面三角形状を呈す。側縁摩耗は未確認。	4
PL.85	248	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 2.5 幅 1.2		厚 0.5 重 1.19		黒曜石	小形剥片のエッジを加工して機能部を作出する。石器先端部および両側縁に摩耗痕が見られる。	4
PL.85	249	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 2.5 幅 1.0		厚 0.7 重 1.34		黒曜石	表裏面とも剥離で全面が覆われる。先端側の剥離が歪み変形している。側縁の摩耗は見られないが、器軸に直交方向の線条痕が特徴的。	3
PL.85	250	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 2.3 幅 1.0		厚 0.6 重 1.26		黒曜石	表裏面とも平坦面に横位線条痕がある。これを切り側縁剥離がある。上面は元々内包したヒビか、古い剥離面。風化したように見える。	4
PL.85	251	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 2.3 幅 1.1		厚 0.4 重 1.12		黒曜石	表裏面とも丁寧な押圧剥離。断面が薄く、石鏃左辺「返し部」の可能性も否定できないが、裏面側先端に素材面が残る点で石鏃とは見なし難い。	4
PL.85	252	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 3.0 幅 0.9		厚 0.6 重 1.29		黒曜石	左辺側を主体に加工、右辺側は球果が原因した大きな剥離面と素材面を残す。裏面側は薄く平坦剥離。断面の厚い剥片形状から石錐と捉えた。	4
PL.85	253	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 2.8 幅 1.0		厚 0.6 重 1.69		黒曜石	完成状態。表裏面とも全面が押圧剥離で覆われ、鋭い先端部が作出されている。左辺上半部未加工部分が残る。先端に摩耗痕は確認できない。	3
PL.85	254	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 3.2 幅 1.1		厚 0.8 重 2.29		黒曜石	断面三角形状を呈する小形剥片先端を加工して機能部とする。先端部が激しく摩耗する。基部側1cmの稜が摩耗、装着されたものとみられる。	4
PL.85	255	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 3.8 幅 1.2		厚 0.7 重 2.05		黒曜石	表面側左辺を厚く剥離、石錐様エッジと作出。右辺側は未加工で、剥離面の稜も新鮮、未使用だが、便宜的石器としたのかもしれない。	4
PL.85	256	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 3.6 幅 1.6		厚 0.8 重 3.96		黒曜石	尖頭器様の先端に明瞭な摩耗痕が広がる。側縁摩耗は見られない。	3
PL.85	257	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 2.0 幅 0.8		厚 0.3 重 0.55		珪質頁岩	小形剥片の両端をトリミングするよう加工、鋭い先端部を作出する。先端部は弱く摩耗する。	4
PL.85	258	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 2.7 幅 0.9		厚 0.4 重 0.96		不明	表面側に剥離面の稜を器軸に並行して取り込み、側縁加工して鋭い先端部を作出する。微妙だが、先端部摩耗は明らか。	4
PL.85	259	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 (2.2) 幅 1.0		厚 0.7 重 1.31		赤碧玉	表裏面とも錯向状に剥離、厚く細い先端部を作出する。先端部および側縁の摩耗は見られない。基部側を被熱破損する。	4
PL.85	260	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 3.0 幅 0.9		厚 0.4 重 1.31		黒色頁岩	薄い板状剥片の側縁を折り取り、錯向剥離して器体を作出する。機能部は厚く、石錐先端部として充分な強度があるだろう。	3
PL.85	261	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 (3.2) 幅 0.8		厚 0.6 重 1.88		珪質頁岩	断面三角形状を呈す剥片を巧く石錐先端に取り込み機能部としたもの。先端は著しく摩耗、稜が丸味を帯びる。	4

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
PL.85	262	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 3.2 幅 0.8	厚 0.5 重 1.40			黒色頁岩	柳葉形状を呈す。先端部の断面形状は菱形状。先端および両側縁に著しい摩耗痕が見られる。	3
PL.85	263	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 3.1 幅 1.2	厚 0.7 重 2.74			変質安山岩	小形剥片の両側縁を加工、先端部を作出する。先端部は再加工され、変形しているが、左辺側エッジに摩耗痕がある。	4
PL.85	264	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 3.2 幅 1.2	厚 0.6 重 2.49			黒色頁岩	完成状態？上端側に比べ、下端側側縁は絞り気味である。先端部側縁の摩耗は見られないが、素材の厚さや加工状態から石錐と見た。	3
PL.85	265	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 3.6 幅 1.0	厚 0.5 重 1.79			珪質頁岩	下端側は側縁を薄く剥離、削器様刃部を整える。上端側は右辺側から厚く剥離、石錐様の先端部を作出する。器種認定は難しい。	4
PL.85	266	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 3.7 幅 1.1	厚 0.7 重 3.05			黒色頁岩	完成状態。剥片稜線を器軸に並行させ、側縁加工して器体を作出。先端部両側縁が著しく摩耗する。	3
PL.85	267	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 4.9 幅 1.0	厚 0.6 重 3.73			黒色頁岩	上端側機能部は薄く、下端側機能部の刃部角は厚い。先端側5～8㎜付近に摩耗痕が広がる。	4
PL.85	268	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 5.0 幅 1.2	厚 0.7 重 3.72			黒色頁岩	両側縁加工して柳葉形状に形状を整える。上端側は両辺とも裏面側から、先端側は表面側から加工。上限反転し石鏃様に使われた可能性もある。	3
PL.85	269	剥片石器 石錐(ﾄﾞﾘﾙ)	完形	長 5.0 幅 1.2	厚 0.7 重 4.36			黒色頁岩	剥離面は風化しているが、エッジを見る限り剥離面の稜は新鮮で、摩耗痕は確認できない。石器先端部を欠く。	3
第99図 PL.85	270	剥片石器 楔形石器		長 3.4 幅 2.2	厚 0.8 重 7.88			黒色頁岩	表裏面には縦位の長い剥離痕が並ぶ。上下両端は潰れた状態で、表裏面に小剥離痕が連続、両極剥離されていることが分かる。断面紡錘形。	
第99図 PL.85	271	剥片石器 打製石斧		長 11.5 幅 4.9	厚 1.5 重 82.6			変質安山岩	完成状態。両側縁を浅く薄く剥離する。刃部加工は見られない。刃部摩耗は見られず、未使用の可能性。	短冊形
第99図 PL.85	272	剥片石器 打製石斧		長 6.3 幅 3.1	厚 1.2 重 26.9			黒色頁岩	完成状態。両側縁は錯向剥離して作出。石斧特有の刃部摩耗、側縁敲打等は見られず異質。サイズも小さく、実用品とは思われない。	短冊形
第99図 PL.85	273	剥片石器 打製石斧		長 (8.9) 幅 3.8	厚 1.5 重 66.6			細粒輝石安山岩	完成状態。刃部摩耗。器体上半を欠損後、右側縁上半を再生。この再生で右側縁は変形。	短冊形
第99図 PL.85	274	剥片石器 打製石斧		長 (7.4) 幅 4.4	厚 2.3 重 79.0			細粒輝石安山岩	完成状態。石斧胴部破片で、頭部側上半と刃部側下半を欠損。側縁摩耗が残り、完成状態にあることは確実。	短冊形
第99図 PL.85	275	剥片石器 打製石斧		長 (8.3) 幅 5.0	厚 1.8 重 79.3			細粒輝石安山岩	右側縁は潰れて摩耗した状態にあり、完成状態。刃部摩耗を明確。刃部右・左側縁はリダクションされ、変形している。	撥形
第99図 PL.85	276	剥片石器 打製石斧		長 (7.2) 幅 5.4	厚 2.0 重 96.1			粗粒輝石安山岩	完成状態。刃部摩耗。上半部欠損。裏面の刃部摩耗を切る剥離は使用中の破損と見られる。右側縁には破損後の敲打痕が付く。	撥形？
第99図 PL.85	277	剥片石器 打製石斧		長 (9.4) 幅 4.9	厚 1.9 重 97.9			黒色頁岩	完成状態。両側縁とも潰れた状態､使用されたことは確実。刃部摩耗は見られないのは、再生されたため。頭部破損。	短冊形
第99図 PL.85	278	剥片石器 打製石斧		長 (10.5) 幅 4.7	厚 2.1 重 110.0			細粒輝石安山岩	完成状態。右側縁は敲打され潰れているが、左側縁および刃部には摩耗痕等は見られないことから、再生加工されたものと思われる。	短冊形
第99図 PL.86	279	剥片石器 打製石斧		長 10.5 幅 6.6	厚 1.6 重 134.0			細粒輝石安山岩	完成状態。左辺側刃部が著しく摩耗。右辺側は再加工され、変形していることが明らか。	撥形
第99図 PL.86	280	剥片石器 打製石斧		長 (12.5) 幅 5.9	厚 2.7 重 178.7			変質安山岩	未製品。両側縁を加工するのみで、上半部を欠損する。刃部は未加工で、摩耗痕はない。製作途上破損した可能性が高い。	短冊形
第99図 PL.86	281	剥片石器 打製石斧		長 11.0 幅 5.4	厚 2.5 重 155.2			黒色頁岩	完成状態。石材が粗く摩耗痕は不明瞭だが、刃部摩耗は確実。刃部左辺側で刃部再生が行われている。	短冊形
第99図 PL.86	282	剥片石器 打製石斧		長 10.3 幅 6.0	厚 1.7 重 115.9			黒色頁岩	完成状態。刃部は下端側を想定しているが、上端側エッジも摩耗、両端に刃部が想定されるかもしれない。やや幅広な形態が特徴的。	短冊形
第99図 PL.86	283	剥片石器 打製石斧		長 (14.5) 幅 7.4	厚 2.6 重 319.0			細粒輝石安山岩	完成状態。わずか｢ハ｣字状に側縁が開く直刃様刃部。表面側中央右に古い剥離面と摩耗痕。左右両側縁・裏面側刃部加工は再生段階の剥離。	短冊形
第100図 PL.86	284	剥片石器 打製石斧		長 9.2 幅 5.6	厚 1.3 重 54.8			珪質頁岩	完成状態。側縁加工は薄く、側縁が潰れるようなことはない。刃部も形状を整える程度の加工、刃部摩耗等は見られない。未使用？	撥形

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第100図 PL.86	285	剥片石器 打製石斧		長	9.2	厚	2.1	細粒輝石安山岩	完成状態。刃部は偏り気味。刃部摩耗は表面側で広く、裏面側は刃縁のみ摩耗。側縁加工も形状を整える程度で、倦縛痕は確認できない。	撥形
				幅	4.8	重	96.3			
第100図 PL.86	286	剥片石器 打製石斧		長	10.1	厚	2.2	細粒輝石安山岩	完成状態。刃部摩耗。側縁は「ハ」字状に開く。刃部は形状を整える程度の剥離。裏面側は大部分が礫面で、製作初期の状態を保つ。	杓文字
				幅	(6.5)	重	142.9			
第100図 PL.86	287	剥片石器 打製石斧		長	8.2	厚	1.8	黒色頁岩	完成状態。刃部摩耗、右側縁摩耗。裏面側刃部に刃部再生に伴う剥離痕が集中する。	杓文字
				幅	5.2	重	69.1			
第100図 PL.86	288	剥片石器 打製石斧		長	8.6	厚	2.1	黒色頁岩	完成状態。刃部摩耗。器体中央付近の倦縛痕も明瞭。器体上半部を欠損。左辺側刃部は再生され大きく変形している。	杓文字
				幅	5.7	重	83.8			
第100図 PL.86	289	剥片石器 打製石斧		長	16.4	厚	3.4	粗粒輝石安山岩	完成状態。側縁を敲打するなどしているが、刃部摩耗は見られない。剥離面はシャープで、未使用の可能性が高い。	石鍬
				幅	9.5	重	485.5			
第100図 PL.86	290	剥片石器 打製石斧		長	11.5	厚	2.9	細粒輝石安山岩	完成状態。刃部摩耗が著しい。左辺側に比べ、右辺側剥離は新鮮で、側縁も内側に入り込み、再加工されている可能性がある。	杓文字
				幅	6.3	重	217.4			
PL.86	291	剥片石器 打製石斧		長	(7.8)	厚	2.5	黒色頁岩	完成状態。側縁摩耗あり。器体下半部を大きく欠く。器体頭部の再加工は明らか。側縁加工の段階で大きく破損、再生を放棄したもの。	杓文字？
				幅	5.5	重	115.9			
PL.86	292	剥片石器 打製石斧		長	(8.2)	厚	2.1	細粒輝石安山岩	完成状態。左辺刃部に弱い摩耗が残る。刃部再生時に上半部を大きく欠損する。	短冊形
				幅	6.4	重	120.1			
PL.86	293	剥片石器 打製石斧		長	(8.2)	厚	2.6	粗粒輝石安山岩	完成状態。器体上半部を欠損。側縁摩耗は弱く、それほど使い込んだ状態ではない。刃部再生を試みたものだが、再生できていない。	短冊形
				幅	6.3	重	186.0			
PL.86	294	剥片石器 打製石斧		長	10.2	厚	2.0	黒色頁岩	完成状態。表裏面とも刃部摩耗が著しく、激しく使い込まれている。裏面側を大きく被熱破損。	短冊形
				幅	5.6	重	128.6			
PL.86	295	剥片石器 打製石斧		長	(9.1)	厚	2.0	珪質頁岩	完成状態。刃部摩耗。器体上半部を欠損。表面側の右辺上半、裏面側刃部から上半を再生加工、再生段階に破損。	杓文字？
				幅	6.8	重	134.6			
PL.86	296	剥片石器 打製石斧		長	9.6	厚	2.2	黒色頁岩	完成状態。表裏面とも刃部摩耗が激しい。刃部は後退できなくなるまで再生されている。刃部は潰れる。	撥形
				幅	5.7	重	128.7			
PL.86	297	剥片石器 打製石斧		長	12.3	厚	1.8	細粒輝石安山岩	完成状態。刃部摩耗は弱い。上半部に敲打痕あり、破損後に転用か。表裏面とも被熱剥離？	杓文字
				幅	6.5	重	134.8			
第100図 PL.86	298	剥片石器 石鍬		長	28.3	厚	4.6	細粒輝石安山岩	完成状態。棒状の着柄部に「ハ」字状に開いた機能部を接続させたもの。杓文字に近い形状。刃部摩耗等は見られず、剥離面は新鮮。未使用。	
				幅	12.8	重	1297.4			
PL.86	299	剥片石器 打製石斧		長	(6.7)	厚	(1.7)	デイサイト	上半部を欠き、石鍬様の刃部破片に見える。残存部に明確な刃部はなく、表面側の平滑面を機能部と見れば砥石ということになろう。	石鍬
				幅	8.9	重	133.3			
第100図 PL.87	300	剥片石器 磨製石斧		長	(3.6)	厚	0.5	変質蛇紋岩	表面刃部側は刃部並行に研磨、横位稜線形成。中央付近は斜め縦位方向に研磨。裏面側は斜め横位方向に研磨。未研磨部分も多い。石斧頭部破損。	
				幅	1.9	重	4.65			
第100図 PL.87	301	剥片石器 磨製石斧		長	13.4	厚	3.3	変玄武岩	未製品。敲打後、表裏面とも刃部、体部を研磨。途中方針を変え器体全面を敲打。頭部には敲打・剥離痕が集中、最終的に敲石とした可能性あり。	
				幅	5.6	重	383.4			
第100図 PL.87	302	剥片石器 磨製石斧		長	(9.8)	厚	3.7	変質蛇紋岩	完成状態。断面形状は四角形状を呈し、全面丁寧に研磨する。器体下半部を欠く。	
				幅	5.5	重	280.1			
第100図 PL.87	303	剥片石器 磨製石斧		長	17.7	厚	3.6	変輝緑岩	完成状態。右辺側刃部の破損後、刃部研磨して再生使用したもの。表面側中央右辺・裏面側は比較的新鮮な打痕に覆われる。	
				幅	6.5	重	666.2			
第100図 PL.87	304	剥片石器 磨製石斧		長	6.4	厚	1.2	粗粒輝石安山岩	完成状態。全面研磨されているが、被熱して表皮が剥落して残存状況は悪い。小形磨製石斧だが、明確な側面は確認できない。	
				幅	4.2	重	46.6			
第100図 PL.87	305	剥片石器 磨製石斧		長	(8.2)	厚	2.8	変玄武岩	完成状態。刃部は刃先が潰れている。被熱して上半部を欠損、ヒビ割れている。被熱後、側縁稜上に打痕が生じている。	
				幅	4.8	重	184.7			
第100図 PL.87	306	剥片石器 磨製石斧		長	(9.4)	厚	3.8	変質安山岩	完成状態。刃部側を除き敲打痕が広く残る。器体中央卑近で破損。破損面は広く摩耗、転用されているが、使用法など詳細は不明。	
				幅	5.3	重	267.8			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第100図 PL.87	307	剥片石器 磨製石斧		長	(10.2)	厚	(4.2)	変玄武岩	完成状態。刃部付近は摩耗痕で覆われているが、これより上位では敲打痕が勝る。破損部エッジには敲打痕があり、再生利用されたものだろう。	
				幅	(7.0)	重	356.9			
PL.87	308	剥片石器 磨製石斧		長	(6.6)	厚	(2.6)	変質安山岩	完成状態。表裏面とも被熱して石斧研磨面が剥落する。石斧破損面もに被熱して破損した可能性が高い。	
				幅	6.0	重	176.9			
PL.87	309	剥片石器 磨製石斧		長	(10.6)	厚	2.2	変玄武岩	完成状態。石斧再生品で、裏面側には側縁加工が施される。左辺の側縁や石斧研磨面には多数の敲打痕が残る。	
				幅	4.7	重	146.7			
PL.87	310	剥片石器 磨製石斧		長	15.4	厚	3.2	変はんれい岩	全面敲打が残り、研磨した様子は見られない。敲打中に破損して再生を試みたようであるが、途中製作を放棄した可能性を想定しておきたい。	
				幅	5.8	重	500.1			
PL.87	311	礫石器 礫器		長	16.5	厚	5.8	ひん岩	大形の棒状楕円礫。礫端部を加工、機能部作出の意図は明らかだが、加工部には敲打痕が連続するだけである。	
				幅	9.8	重	1315.0			
PL.87	312	石核		長	2.7	厚	1.7	黒曜石	盤状剥片素材。右側面は風化破断面、上下両端は著しく擦れた古い剥離面。正面と左側面が作業面、小形剥片を剥離している。	
				幅	2.9	重	13.5			
PL.87	313	石核		長	2.6	厚	1.7	黒曜石	盤状剥片素材。表裏面を作業面として、小形剥片を剥離する。石核の上下両端は擦れた破断面。	
				幅	3.5	重	13.2			
PL.87	314	石核		長	3.0	厚	2.3	黒曜石	賽子状石核。作業面を固定、上下両端・右辺側から小形剥片を剥離する。裏面・下面に擦れた古い大きな剥離面が残る。	
				幅	3.1	重	19.7			
PL.87	315	石核		長	2.8	厚	1.7	黒曜石	盤状石核の小口部を作業面として、小形・幅広剥片を剥離する。	
				幅	4.7	重	18.6			
PL.87	316	石核		長	5.4	厚	2.9	赤碧玉	上端側の平坦打面および右辺側打面より小形剥片を剥離する。裏面側には礫面が大きく残る。	
				幅	4.5	重	78.9			
PL.87	317	石核		長	4.9	厚	2.4	褐色碧玉	賽子状石核。裏面側にも作業面があり、最終作業面を表面側に固定、小形剥片を剥離する。油光沢の強い良質石材。	
				幅	5.0	重	48.6			
PL.87	318	石核		長	3.9	厚	2.2	褐色碧玉	厚板状石核。左右両辺は礫面、表裏面および下面で剥片剥離作業を行い、小形剥片を剥離する。	
				幅	6.0	重	55.2			
PL.87	319	石核		長	4.4	厚	4.7	チャート	盤状礫を用いた石核、上端側打面から表裏面・左右の側面で小形剥片を剥離する。油光沢がある点で良質だが、脈が発達する。	
				幅	3.3	重	116.2			
PL.87	320	石核		長	4.8	厚	6.5	赤碧玉	子供の拳程度の原礫を用いる。恐らく被熱破損しており、石核サイズ・形状・剥離状況は明確には判断できない。	
				幅	6.6	重	197.0			
PL.87	321	石核		長	4.5	厚	4.5	黒色頁岩	賽子状石核。上端の平坦面を打面に、表裏面・左右の側面・石核下端面で小形剥片を剥離する。	
				幅	6.6	重	163.8			
PL.87	322	石核		長	6.6	厚	3.1	流紋岩	大形剥片石核。作業面を固定させ、小形剥片を剥離。石核には節理面が残る。裏面側は礫面。	
				幅	6.0	重	113.2			
PL.87	323	石核		長	7.9	厚	5.4	黒色頁岩	厚さ5cm程度に礫を分割した石核で、分割面側の作業面は求心的に剥離、礫面の残る裏面側は幅広剥片を剥離するように見える。	
				幅	8.0	重	338.2			
PL.87	324	石核		長	9.4	厚	4.7	細粒輝石安山岩	厚い盤状石核の表裏面で幅広剥片を剥離したもの。剥片剥離は交互剥離的で、石核下端側に礫面が大きく残る。	
				幅	8.9	重	486.1			
PL.87	325	石核		長	6.8	厚	4.7	細粒輝石安山岩	分割礫素材の石核。上面尾平坦面を打面い表裏面で小形剥片を剥離する。石核下端側に礫面を大きく残す。	
				幅	10.3	重	265.5			
PL.87	326	石核		長	5.0	厚	5.5	黒色頁岩	大形盤状剥片素材。表面側と左辺では作業面を固定、打面を移動させ小形剥片を剥離、裏面側は上端の平坦剥離面からのみ小形剥片を剥離。	
				幅	8.6	重	239.9			
第101図 PL.87	327	礫石器 凹石		長	6.5	厚	3.7	粗粒輝石安山岩	掌サイズより小さい小形楕円礫。表面側は漏斗状の窪み穴１・摩耗痕。裏面側はアバタ状の打痕・摩耗痕。側縁には敲打痕が広がる。	
				幅	5.1	重	174.1			
第101図 PL.87	328	礫石器 凹石		長	7.9	厚	3.5	粗粒輝石安山岩	小形の楕円礫。表裏面とも摩耗、表面側に浅い漏斗状の窪み穴１、裏面側にアバタ状の打痕がある。小口部両端に敲打痕。	
				幅	6.0	重	243.6			
第101図 PL.87	329	礫石器 凹石		長	12.4	厚	6.1	粗粒輝石安山岩	掌サイズより大型の楕円礫。表面側は極浅い漏斗状の窪み穴１、裏面側はアバタ状の敲打痕、表裏面とも摩耗が著しい。被熱剥落痕がある。	
				幅	10.3	重	1205.7			
第101図 PL.87	330	礫石器 凹石		長	8.8	厚	6.0	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面に漏斗状の窪み穴２がある。両側縁にも同様な窪み穴２があるほか、敲打・摩耗痕が広がる。	その他
				幅	7.6	重	360.3			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第101図 PL.87	331	礫石器 凹石		長	9.9	厚	6.5	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表面側に大きな漏斗状の窪み穴１がある。全体的に礫面が荒れ、摩耗痕は不明瞭。	その他
				幅	8.8	重	516.3			
第101図 PL.88	332	礫石器 凹石		長	10.2	厚	3.7	粗粒輝石安山岩	掌サイズの偏平楕円礫。表裏面とも浅い漏斗状の窪み穴１、小口部・側縁に敲打痕がある。窪み穴の内面は極めて平滑で意図的に見える。	
				幅	7.7	重	442.5			
第101図 PL.88	333	礫石器 凹石		長	11.0	厚	6.3	粗粒輝石安山岩	掌サイズよりやや大型の楕円礫。表面側にアバタ状の敲打痕と摩耗痕。裏面側に漏斗状の窪み穴１とアバタ状の敲打痕、摩耗痕。側縁敲打痕。	
				幅	10.0	重	858.4			
第101図 PL.88	334	礫石器 凹石		長	11.2	厚	5.3	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。やや細身で、表面側にアバタ状の敲打痕１・摩耗痕、裏面側に摩耗痕が広がる。右側縁の摩耗は窪んだ部分であることに注意。	
				幅	6.6	重	592.0			
第101図 PL.88	335	礫石器 凹石		長	10.1	厚	4.8	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表面側にアバタ状の敲打痕２、裏面側に同様な打痕１がある。表裏面とも摩耗、小口部打痕。	
				幅	8.3	重	545.8			
第101図 PL.88	336	礫石器 凹石		長	14.2	厚	5.1	粗粒輝石安山岩	掌サイズよりやや大型の楕円礫。表面側の中央付近に敲打痕、摩耗痕。裏面側は著しく摩耗、弱い稜が形成されるほど。小口部上端は敲打・剥離痕、下端側は敲打痕。	
				幅	8.6	重	942.9			
第101図 PL.88	337	礫石器 凹石		長	11.2	厚	4.6	粗粒輝石安山岩	掌サイズの偏平楕円礫。表裏面とも漏斗状の窪み穴２、摩耗痕。礫の小口部・側縁には敲打痕がある。下端側小口部は敲打して破損したもの。	
				幅	8.2	重	593.0			
第101図 PL.88	338	礫石器 凹石		長	11.4	厚	4.8	粗粒輝石安山岩	掌サイズよりやや大型の楕円礫。表裏面とも略漏斗状の窪み穴２がある。このほか側縁に敲打痕、裏面側にアバタ状の敲打痕がある。	その他
				幅	8.9	重	666.8			
第101図 PL.88	339	礫石器 凹石		長	11.0	厚	4.4	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも摩耗、漏斗状の窪み穴２がある。小口部に敲打痕。被熱してヒビ割れる。	
				幅	7.1	重	416.7			
第101図 PL.88	340	礫石器 凹石		長	11.2	厚	4.7	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも摩耗、浅い漏斗状の窪み穴２がある。側縁は敲打痕が優位。	
				幅	8.1	重	648.2			
第101図 PL.88	341	礫石器 凹石		長	12.1	厚	4.0	粗粒輝石安山岩	掌サイズの偏平楕円礫。やや細身で、表面側に漏斗状の窪み穴３、裏面側に漏斗状の窪み穴１・アバタ状の敲打痕１。表裏面とも摩耗。被熱剥落。	
				幅	6.9	重	476.7			
PL.88	342	礫石器 凹石		長	7.6	厚	5.3	粗粒輝石安山岩	やや小型の楕円礫。表面側に窪み穴１がある。石材感は粗く、摩耗痕は不明瞭だが、表裏面(側縁を含む)とも摩耗しているのは確実。	
				幅	6.7	重	323.4			
PL.88	343	礫石器 凹石		長	8.2	厚	3.9	デイサイト	掌サイズの偏平円礫。表裏面とも漏斗状の窪み穴１、礫面全面に摩耗が広がる。側面は敲打痕。被熱して側縁破損、ヒビ割れる。	
				幅	(7.6)	重	283.8			
PL.88	344	礫石器 凹石		長	8.8	厚	5.4	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも漏斗状の窪み穴１がある。礫面が剥れて不明だが、左右両側縁にも窪み穴に似た今世紀がある。	その他
				幅	7.6	重	319.9			
PL.88	345	礫石器 凹石		長	9.8	厚	5.6	粗粒輝石安山岩	掌サイズの円礫。表面側中央付近に敲打痕・摩耗痕、裏面側礫面に光沢を帯びた摩耗痕。側縁に敲打痕。	
				幅	9.1	重	770.1			
PL.88	346	礫石器 凹石		長	10.6	厚	6.6	粗粒輝石安山岩	拳大の円礫。表面側に漏斗状の窪み１・敲打痕、裏面側にアバタ状の敲打痕・摩耗痕が広がるほか、小口部両端に敲打痕。	
				幅	9.7	重	944.4			
PL.88	347	礫石器 凹石		長	7.9	厚	4.7	粗粒輝石安山岩	表面側に摩耗痕・摩耗したアバタ状の敲打痕、裏面側に著しい摩耗痕が広がるほか、小口部に敲打痕。	
				幅	6.7	重	369.6			
PL.88	348	礫石器 凹石		長	8.9	厚	2.7	粗粒輝石安山岩	偏平楕円礫。表裏面とも礫面中央にアバタ状の敲打痕、礫面全域に摩耗面が広がる。右側縁は敲打され、平坦化する。	
				幅	7	重	250.6			
PL.88	349	礫石器 凹石		長	9.5	厚	3.9	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表面側に漏斗状の窪み穴１、摩耗痕。裏面側にアバタ状の敲打痕、摩耗痕。このほか、左辺に敲打痕。	
				幅	7.2	重	399.3			
PL.88	350	礫石器 凹石		長	11.0	厚	7.1	粗粒輝石安山岩	断面三角形状を呈す楕円礫。表面側の稜上に窪み穴１があるほか、上端側小口部および側縁に敲打痕がある。石材感が粗く、摩耗痕は不明瞭。	その他
				幅	8.5	重	684.7			
PL.88	351	礫石器 凹石		長	10.4	厚	4.9	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも礫面中央にアバタ状の打痕、礫面摩耗痕が広がる。小渕部側縁には弱い敲打痕。	
				幅	6.8	重	514.7			
PL.88	352	礫石器 凹石		長	10.3	厚	4.2	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表面側は摩耗したアバタ状の打痕２、全面摩耗。裏面側は摩耗痕。側縁や小口部両端には敲打痕が集中する。	
				幅	6.2	重	388.7			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.88	353	礫石器 凹石		長	10.7	厚	3.1	粗粒輝石安山岩	小形の偏平楕円礫。表面側に漏斗状の窪み穴１、アバタ状の打痕１、摩耗痕。裏面側に漏斗状の窪み穴２、摩耗痕。小口部・側縁に敲打痕。	
				幅	5.4	重	241.7			
PL.88	354	礫石器 凹石		長	10.6	厚	5.8	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表面側中央に漏斗状の窪み穴１、全面に摩耗痕。裏面側はアバタ状の打痕１，摩耗痕。小口部も摩耗する。	
				幅	8.4	重	759.9			
PL.88	355	礫石器 凹石		長	11.2	厚	7.3	粗粒輝石安山岩	拳大の河床礫。表裏面とも漏斗状の窪み２がある。多孔質石材で明瞭ではないが、摩耗は確実。小口部には敲打痕がある。	その他
				幅	9.7	重	995.8			
PL.88	356	礫石器 凹石		長	12.6	厚	6.5	粗粒輝石安山岩	掌サイズより大型の楕円礫。表面側中央付近の稜上に敲打痕が集中、漏斗状の断面形状を呈す。裏面側平坦面の中央付近にもアバタ状の敲打痕。	その他
				幅	12.0	重	1342.2			
PL.89	357	礫石器 磨石		長	17.7	厚	10.5	粗粒輝石安山岩	目が粗く摩耗痕の認定が難しい石材だが、表裏面には目の潰れた平坦面があり、使用部分と捉えた。	
				幅	13.1	重	2606.8			
PL.89	358	礫石器 磨石		長	2.9	厚	2.4	粗粒輝石安山岩	丸石様だが、やや直線的な部分がある。遺跡に持ち込んだものであることは明らかであるが、判断は難しい。	
				幅	2.9	重	27.2			
PL.89	359	礫石器 磨石		長	3.1	厚	2.4	デイサイト	意図的に持ち込んだものだが、明瞭な摩耗痕は確認できていない。丸石様だが、詳細は不明。	
				幅	2.8	重	24.1			
PL.89	360	礫石器 磨石		長	4.0	厚	2.6	粗粒輝石安山岩	小形の楕円礫を用いたもの。小口部両端に打痕が見られるが、摩耗痕は明確ではなく、判断が難しい。	
				幅	3.0	重	43.9			
第102図 PL.89	361	礫石器 磨石		長	4.2	厚	2.4	粗粒輝石安山岩	小形楕円礫。表裏面とも摩耗痕。線条痕は確認できない。	
				幅	3.4	重	47.0			
PL.89	362	礫石器 磨石		長	4.5	厚	2.2	チャート	偏平楕円礫。摩耗痕は不明瞭、線条痕も確認できない。	
				幅	3.8	重	56.6			
第102図 PL.89	363	礫石器 磨石		長	4.9	厚	2.9	粗粒輝石安山岩	小形楕円礫で、断面形状は三角形状。表面側平坦面に弱い線条痕があり、裏面側も部分的に摩耗する。サイズ的には石製研磨具とされるものか。	
				幅	3.4	重	66.6			
PL.89	364	礫石器 磨石		長	4.9	厚	2.4	粗粒輝石安山岩	断面Ｄ字状を呈する河床礫。摩耗痕・敲打痕とも明瞭ではなく、判断が難しい。	その他
				幅	3.9	重	61.5			
第102図 PL.89	365	礫石器 磨石		長	5.4	厚	2.7	粗粒輝石安山岩	小形楕円礫。表裏面とも摩耗痕。表面側上端小口部には敲打・摩耗痕が広がる。サイズ的には石製研磨具とされるものに近い。	
				幅	3.8	重	76.0			
第102図 PL.89	366	礫石器 磨石		長	8.8	厚	4.2	粗粒輝石安山岩	掌サイズの偏平楕円礫。表裏面とも摩耗する。裏面側の中央付近にアバタ状の打痕、小口部両端に敲打痕が集中する。	
				幅	6.8	重	347.9			
第102図 PL.89	367	礫石器 磨石		長	4.1	厚	2.1	粗粒輝石安山岩	偏平楕円礫。表裏面とも摩耗、表面側は摩耗が激しい。小形過ぎるため、石製研磨具に類する用途が想定されよう。	
				幅	3.9	重	52.7			
第102図 PL.89	368	礫石器 磨石		長	6.8	厚	5.4	粗粒輝石安山岩	掌サイズよりやや小型の楕円礫。全面摩耗。表面側の礫中央付近の摩耗が著しい。側縁部分には敲打痕が残る。	
				幅	6.4	重	321.0			
第102図 PL.89	369	礫石器 磨石		長	4.6	厚	4.0	粗粒輝石安山岩	小形楕円礫。線条痕は明確ではないが、礫面全体が摩耗しているように見える。サイズ的には石製研磨具とされるものか。	
				幅	4.3	重	108.8			
PL.89	370	礫石器 磨石		長	5.7	厚	4.9	粗粒輝石安山岩	小形円礫素材。2ヵ所に敲打痕が集中、敲石として使用されたことは確実。摩耗痕については不明瞭だが、複数の機能を果したのは確実。	
				幅	5.5	重	209.5			
PL.89	371	礫石器 磨石		長	5.8	厚	2.6	粗粒輝石安山岩	小形偏平礫を用いる。表裏面とも摩耗痕が広がる。片面が煤けたように黒色に変色しており、光沢を帯びる。	
				幅	5.2	重	121.2			
第102図 PL.89	372	礫石器 磨石		長	5.3	厚	2.4	粗粒輝石安山岩	偏平楕円礫。表裏面とも摩耗痕、側縁に打痕。サイズ的には石製研磨具とされるものか。	
				幅	4.9	重	93.4			
第102図 PL.89	373	礫石器 磨石		長	8.3	厚	4.8	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも摩耗、小口部両端に敲打痕が集中する。被熱してススが付着、小口部上端は大きく剥落する。	
				幅	7.3	重	412.3			
PL.89	374	礫石器 磨石		長	6.0	厚	2.4	粗粒輝石安山岩	小形偏平礫を用いる。表裏面に摩耗痕が広がる。研磨具として用いたものか。	
				幅	4.9	重	102.2			
第102図 PL.89	375	礫石器 磨石		長	5.4	厚	4.4	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗痕が明瞭。掌サイズとするには小さ過ぎる。線条痕は明確に確認できないが、石製研磨具様の使用法を想定しておこう。	
				幅	5.4	重	172.9			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第102図 PL.89	376	礫石器 磨石		長	9.5	厚	6.5	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。ほぼ全面摩耗、礫外縁には摩耗して、結果的に弱い稜が生じている部分もある。摩耗面位は敲打痕も伴う。細粒石材を使用。	
				幅	8.0	重	750.2			
第102図 PL.89	377	礫石器 磨石		長	9.9	厚	5.3	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面や左側縁が摩耗して目が潰れるほか、右側縁と下端側小口部に敲打痕が集中する。	
				幅	7.8	重	628.4			
第102図 PL.89	378	礫石器 磨石		長	9.9	厚	6.5	粗粒輝石安山岩	掌サイズよりやや大型の楕円礫。全面摩耗。礫面表面側にアバタ状の敲打痕、側縁に敲打痕が広がる。	
				幅	8.6	重	773.0			
PL.89	379	礫石器 磨石		長	6.9	厚	4.4	粗粒輝石安山岩	小形楕円礫。表裏両面とも摩耗。上端側小口部には敲打痕。縁辺部に赤色顔料に似た付着物が付く。	
				幅	5.4	重	247.8			
PL.89	380	礫石器 磨石		長	7.5	厚	6.9	粗粒輝石安山岩	礫形状は略円形。複数個所に摩耗面が広がる。鉱物粒が抜けた多孔質石材だが、目が潰れるほど使い込まれて目が詰んで見える。	
				幅	7	重	498.0			
PL.89	381	礫石器 磨石		長	7.6	厚	5.5	粗粒輝石安山岩	掌サイズの円礫。石材が多孔質で粗く、摩耗痕等は見極め難い。礫中央や側縁の敲打痕は明確。	
				幅	7.1	重	296.1			
PL.89	382	礫石器 磨石		長	7.7	厚	3.8	変質安山岩	やや小型の偏平楕円礫。裏面側に比べて表面側の摩耗が著しい。側縁に広く敲打痕が見られる。	
				幅	6.6	重	276.9			
PL.89	383	礫石器 磨石		長	8.1	厚	4.9	粗粒輝石安山岩	やや小型だが掌サイズの楕円礫。表裏面とも著しく摩耗する。裏面側のみ礫面中央に摩耗したアバタ状の打痕が広がる。	
				幅	6.7	重	399.9			
PL.89	384	礫石器 磨石		長	7.9	厚	4.4	粗粒輝石安山岩	小形楕円礫。裏面側は不明瞭だが、表面側には弱く摩耗する。被熱して剥落、ヒビ割れている。	
				幅	6.6	重	307.1			
第102図 PL.89	385	礫石器 磨石		長	7.7	厚	4.5	石英閃緑岩	掌サイズよりやや小形。礫形状からみて直径８㎝程度の円礫が想定可能。表面側が平坦に擦れており、かなり激しく使い込んでいるように思う。	その他
				幅	5.5	重	272.0			
第102図 PL.89	386	礫石器 磨石		長	12.1	厚	4.9	粗粒輝石安山岩	掌サイズより大型の偏平楕円礫。表裏面とも摩耗する。特に中央付近の摩耗が著しく、光沢を帯びる。側縁は敲打・摩耗痕。	
				幅	11.3	重	1078.0			
PL.89	387	礫石器 磨石		長	8.5	厚	6.2	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面に敲打・摩耗痕が広がる。礫面が煤けており、被熱した可能性あり。	
				幅	7.3	重	567.9			
第103図 PL.89	388	礫石器 磨石		長	11.9	厚	4.1	粗粒輝石安山岩	掌サイズより大型の偏平楕円礫。表裏面とも摩耗、裏面側は浅く窪み、摩耗は弱い。側縁は敲打痕が優る。	
				幅	10.8	重	828.0			
PL.90	389	礫石器 磨石		長	8.9	厚	6.3	溶結凝灰岩	掌サイズの楕円礫。小口部上端に敲打痕がある。礫面の摩耗は目が粗く不明瞭。	
				幅	7.5	重	473.7			
第103図 PL.90	390	礫石器 磨石		長	13.2	厚	6.7	粗粒輝石安山岩	大形の偏平円礫。表裏面とも摩耗、特に中央付近の摩耗が激しい。側面は敲打痕が優る。表面側が被熱して赤化、部分的に礫面が剝れている。	
				幅	11.8	重	1585.4			
PL.90	391	礫石器 磨石		長	10.8	厚	5.9	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも礫中央に敲打痕・摩耗痕、小口部両端と側縁に敲打痕が広がる。	
				幅	9.9	重	888.6			
第102図 PL.90	392	礫石器 石製研磨具		長	5.2	厚	1.3	変質安山岩	小形偏平礫。礫の下端側に線条痕を伴い摩耗痕が広がる。上半部には剥落痕が点在する。	
				幅	2.1	重	24.2			
第102図 PL.90	393	礫石器 磨石		長	6.5	厚	3.7	デイサイト	棒状礫。下端部側を欠く。礫面全面に線条痕を伴い、上端側小口も打痕、摩耗痕が著しい。下端部は折れ面が敲打・摩耗する。断面形は右辺側が厚く、左辺側が薄い。	その他
				幅	3.8	重	128.8			
PL.90	394	礫石器 磨石		長	8.0	厚	2.7	粗粒輝石安山岩	断面Ｄ字状を呈する棒状礫を用いる。礫稜部には弱い線条痕があるほか、稜が摩耗して弱い稜が生じている。	
				幅	2.8	重	86.3			
第103図 PL.90	395	礫石器 磨石		長	(11.3)	厚	4.7	粗粒輝石安山岩	掌大の偏平楕円礫。表裏面とも全面摩耗、アバタ状の打痕。小口部両端が激しく敲打されているが、被熱剥離痕が重なり、判別が難しい。	
				幅	8.4	重	678.0			
第103図 PL.90	396	礫石器 磨石		長	13.0	厚	4.5	粗粒輝石安山岩	掌サイズの偏平楕円礫。表裏面に摩耗痕、小口部両端に敲打痕。礫面が荒れて詳細は不明。	
				幅	8.2	重	614.6			
第103図 PL.90	397	礫石器 磨石		長	13.0	厚	6.2	粗粒輝石安山岩	掌サイズより大型の楕円礫。表裏面とも摩耗、側縁敲打痕。	
				幅	9.4	重	1136.1			
第103図 PL.90	398	礫石器 磨石		長	14.9	厚	6.8	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。やや細身で、表面側礫面には敲打痕、若干平坦な裏面側には敲打尾・摩耗痕が広がる。被熱してヒビ割れる。	
				幅	6.9	重	994.7			
PL.90	399	礫石器 磨石		長	12	厚	4.8	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表面側は激しく摩耗して礫面が平坦化。裏面側摩耗痕は不明瞭。小口部も部分的に摩耗、目が潰れるほど。	
				幅	7.5	重	616.4			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.90	400	礫石器 磨石		長	12.5	厚	5.1	粗粒輝石安山岩	掌サイズより少し大きな楕円礫。礫面中央にアバタ状の敲打痕、小口部に打痕がある。被熱して全面がヒビ割れ、煤けている。	
				幅	8.8	重	723.5			
PL.90	401	礫石器 磨石		長	12.5	厚	4.5	粗粒輝石安山岩	掌サイズの偏平棒状礫。表裏面とも摩耗、とうに表面側の摩耗は著しく、光沢を帯びるほど。	
				幅	6.5	重	483.4			
PL.90	402	礫石器 磨石		長	13.3	厚	5.3	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも弱い摩耗痕が広がる。小口部両端に敲打痕がある。	
				幅	10.1	重	998.9			
PL.90	403	礫石器 磨石		長	14.5	厚	6.0	粗粒輝石安山岩	掌サイズよりやや大型の楕円礫。表面側に敲打・摩耗痕、裏面側には弱い摩耗痕。小口部両端に敲打痕。裏面側側縁は被熱破損。	
				幅	9.9	重	1216.8			
PL.90	404	礫石器 磨石		長	16.0	厚	4.8	粗粒輝石安山岩	棒状礫。表面側に弱い摩耗痕が広がる。棒状礫だが、よく見られる小口部両端の敲打痕は確認できない。	
				幅	5.8	重	633.5			
PL.90	405	礫石器 磨石		長	14.8	厚	9.9	石英閃緑岩	断面三角形状を呈する。下端側小口部には敲打、摩耗痕が著しい。その他礫稜部の敲打は明らかだが、摩耗痕は各面とも同様で、判断が難しい。礫重量も２kgを超え、製粉具としての磨石とは異なるのではないか。	その他
				幅	10.9	重	2333.9			
PL.90	406	礫石器 磨石		長	14.9	厚	7.0	粗粒輝石安山岩	礫形状は角柱状。各面に摩耗面が広がり、摩耗には強弱がある。礫端部は敲打、摩耗している様子が窺われる。	
				幅	7.9	重	1435.1			
PL.90	407	礫石器 磨石		長	15.8	厚	5.1	粗粒輝石安山岩	掌サイズよりやや大型の楕円礫。表裏面とも摩耗痕。右辺側側縁は敲打・摩耗して平坦となり、稜が形成されている。裏面側に大きな被熱剥離痕。	
				幅	9	重	993.4			
PL.90	408	礫石器 敲石		長	(4.0)	厚	(1.1)	砂岩	礫形状は偏平棒状礫、側縁に明瞭な打痕があり、打痕から破損したのは確実であり、ここでは敲石と捉えた。	
				幅	(2.8)	重	15.0			
PL.90	409	礫石器 敲石		長	4.4	厚	3.2	粗粒輝石安山岩	小形円礫。小口部両端に敲打痕が集中する。	
				幅	4.1	重	75.0			
第103図 PL.91	410	礫石器 磨石		長	8.4	厚	5.7	粗粒輝石安山岩	掌サイズよりやや小型の楕円礫。表裏面とも著しく摩耗、側縁・小口部に敲打痕。抗議粒には敲打・摩耗痕が広がる。	
				幅	7.3	重	505.4			
第103図 PL.91	411	礫石器 磨石		長	6.0	厚	4.3	粗粒輝石安山岩	小形楕円礫。表面側は摩耗痕、裏面側は敲打痕が勝る。上端側小口部には敲打痕が広がる。	
				幅	4.7	重	171.0			
第103図 PL.91	412	礫石器 敲石		長	12.0	厚	3.3	粗粒輝石安山岩	右辺側は直線的だが、左辺側は弧状に形状を整える程度の剥離に止まる。右辺中央は敲打、激しく潰れており、主たる機能部を示唆している。	
				幅	7.3	重	276.6			
第103図 PL.91	413	礫石器 敲石		長	8.1	厚	2.7	粗粒輝石安山岩	棒状礫。表裏面とも小口部両端に敲打、摩耗痕が広がる。どちらかといえば、摩耗痕より敲打痕が勝る。	
				幅	3.4	重	127.7			
第103図 PL.91	414	礫石器 敲石		長	12.4	厚	3.4	変質安山岩	掌サイズの棒状礫。上下両端に敲打・剥離痕がある。荒れて敲打痕は不明瞭だが、側縁には弱い稜があり、磨石的に使用した可能性もある。	
				幅	5.8	重	386.2			
第103図 PL.91	415	礫石器 敲石		長	13.1	厚	3.5	粗粒輝石安山岩	掌サイズの偏平棒状礫。表裏面とも摩耗、側縁・小口部に敲打痕。小口部打痕は摩耗痕と重なり、敲く・擦る機能を果したことが分かる。	
				幅	6.4	重	497.0			
PL.91	416	礫石器 敲石		長	9.5	厚	3.6	石英閃緑岩	小形棒状礫。小口部両端に敲打痕、特に下端側の敲打痕が明瞭で、よく使い込まれている。	
				幅	4.4	重	235.7			
第103図 PL.91	417	礫石器 敲石		長	9.9	厚	2.7	細粒輝石安山岩	偏平棒状礫。下端側小口部に敲打痕がある。上端部は平坦化、線条痕等は見られないが、光沢が異なる点では摩耗面ということだろう。	
				幅	4.8	重	184.7			
PL.91	418	礫石器 敲石		長	10.8	厚	3.9	粗粒輝石安山岩	棒状礫。小口部両端および側縁に明確な敲打痕がある。側縁の敲打痕周辺は摩耗するよう見える。被熱して煤ける。	
				幅	4.5	重	283.1			
PL.91	419	礫石器 磨石		長	9.9	厚	4.6	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも摩耗、特に表面側の摩耗は著しい。小口部両端には敲打痕が付く。	
				幅	7.6	重	543.0			
PL.91	420	礫石器 磨石		長	10.1	厚	6.6	粗粒輝石安山岩	掌サイズの楕円礫。表裏面とも摩耗痕、特に裏面側の摩耗が激しく、光沢を帯びるほど。小口部上端および側縁に敲打痕がある。	その他
				幅	8.5	重	838.3			
PL.91	421	礫石器 凹石		長	12.5	厚	7.8	粗粒輝石安山岩	掌サイズよりやや大きな楕円礫。表裏面ともアバタ状の敲打痕、摩耗痕が広がる。小口部下端の敲打痕も著しい。	その他
				幅	9.3	重	1297.7			
PL.91	422	礫石器 敲石		長	13.3	厚	5.6	粗粒輝石安山岩	掌サイズの棒状礫で、角柱状を呈する。小口部両端および側縁に敲打痕がある。	
				幅	6.7	重	592.4			
PL.91	423	礫石器 敲石		長	14.6	厚	5.4	粗粒輝石安山岩	棒状礫。小口部両端および側縁に明確な敲打痕を残す。	
				幅	6.9	重	735.2			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第103図 PL.91	424	礫石器 砥石		長	(9.9)	厚	(2.6)	細粒輝石安山岩	盤状礫を用いる。全面に著しい研磨痕が広がる。砥石は意図的に破損、廃棄されたものと思われる。	
				幅	(8.7)	重	351.6			
第104図 PL.91	425	礫石器 台石		長	25.8	厚	16.4	粗粒輝石安山岩	表面側の平坦な礫面に敲打痕。敲打痕はアバタ状に見える部分、列点状に見える部分の両者がある。上端側側面は被熱剥落する。断面台形状を呈し、そのままでは安定感に欠ける。	
				幅	27.6	重	15800.0			
第104図 PL.91	426	礫石器 台石		長	27.0	厚	15.5	粗粒輝石安山岩	六角形状を呈する角礫。表面側平坦面が摩耗、光沢を帯びる。裏面側形状は安定感に欠け、地面に埋めて使用したものとみられる。	
				幅	25.2	重	14900.0			
第104図 PL.92	427	礫石器 台石		長	(28.6)	厚	8.2	粗粒輝石安山岩	厚い盤状礫を用いたもので、表面側に敲打痕、摩耗痕が広がる。礫下端側は調査時に破損した可能性。	
				幅	(24.2)	重	8680.0			
第104図 PL.92	428	礫石器 台石		長	40.2	厚	10.2	粗粒輝石安山岩	大形の偏平楕円礫を用いたもので、表面側に摩耗痕が広がる。裏面側も擦れているが、使用時に地面に接して擦れたものとみられる。	
				幅	32.4	重	17520.0			
PL.92	429	礫石器 台石		長	23.4	厚	9.4	粗粒輝石安山岩	表裏面とも弱い摩耗痕が広がる。左辺側の敲打・剥離痕は連続性に欠け、使用痕としての認定は難しい。	
				幅	16.7	重	5071.9			
PL.92	430	礫石器 台石		長	57.2	厚	19.8	粗粒輝石安山岩	大形礫、礫形状は棒状に近く、表裏面とも平坦。礫面の敲打・摩耗痕は不明瞭だが、持ち込まれていることは明らかである。	
				幅	26.7	重	42220.0			
PL.92	431	礫石器 台石		長	20.6	厚	9.1	粗粒輝石安山岩	大形の楕円礫。表面側に敲打･摩耗痕が広がる。このほか、上下両端小口部・側縁に敲打痕がある。	
				幅	17.7	重	3649.3			
PL.92	432	礫石器 台石		長	29.21	厚	9.2	粗粒輝石安山岩	楕円礫。表面側礫面が弱く摩耗。被熱して部分的に礫面が剝れるほか、破損も被熱によるものだろう。	
				幅	20.1	重	7000.0			
PL.92	433	礫石器 台石		長	24.2	厚	9.6	粗粒輝石安山岩	断面三角形状の楕円礫。表面側平坦面は強く摩耗、光沢面が広がる。裏面側の礫稜線には打痕が目立つ。	
				幅	15.2	重	4646.2			
PL.92	434	礫石器 台石		長	24.3	厚	11.7	粗粒輝石安山岩	楕円礫。表面側は平坦で、敲打・摩耗痕が広がる。敲打痕は集中せず分散的、摩耗痕は部分的に強い光沢を帯びる。被熱破損して煤ける。	
				幅	10.4	重	7980			
PL.93	435	礫石器 台石		長	20.9	厚	7.8	粗粒輝石安山岩	表面側中央付近に弱い敲打痕。摩耗痕は表裏面とも不明瞭であり、判断が難しい。下端側が破損、上端側のヒビも被熱によるものか断定できない。	
				幅	20.4	重	5265.1			
PL.93	436	礫石器 台石		長	33.9	厚	13.6	粗粒輝石安山岩	厚手の楕円礫。表面側平坦面に著しい摩耗面が広がる。摩耗痕は光沢が強く、使い込んでいることが明らか。被熱してヒビ割れる。	
				幅	21.0	重	14600.0			
PL.93	437	礫石器 台石		長	46.1	厚	12.1	粗粒輝石安山岩	大形楕円礫。表面側平坦面に摩耗面が広がる。礫の外縁には窪んだ部分があり平坦面より平滑で、摩耗面に伴う敲打痕も明確でなはい。	
				幅	25.9	重	23460.0			
第105図 PL.93	438	礫石器 砥石		長	(4.9)	厚	0.7	牛伏砂岩	細粒石材を使用。側面・下端部は表裏面ともエッジが研ぎ減り、形状を整えるため研磨しているように見える。細部研磨に適した仕上げ砥か。	
				幅	4.5	重	20.5			
第105図 PL.93	439	礫石器 砥石?		長	(13.9)	厚	2.3	珪質変質岩	略長方形場を呈す。表裏面とも被熱ヒビ割れる。裏面側は被熱剥落した部分が多い。広い表裏面が主たる砥面で、狭い両側面も砥面として利用。	
				幅	(7.2)	重	229.4			
第105図 PL.93	440	礫石器 砥石		長	(9.3)	厚	2.7	粗粒輝石安山岩	礫面中央より左に研磨・摩耗面が広がる。溝状に図化しておいたが、実際の面構成は複雑で、継続研磨されたものと思われる。手持ち使用。	
				幅	8.0	重	235.8			
第105図 PL.93	441	礫石器 砥石		長	(10.9)	厚	1.9	細粒輝石安山岩	盤状礫素材。表面側は著しく摩耗する。摩耗面は光沢面となって、線条痕も肉眼で観察可能。意図的に壊されて、本来形状は不明。	
				幅	(10.4)	重	323.4			
第105図 PL.93	442	礫石器 砥石		長	(6.1)	厚	1.3	牛伏砂岩	盤状の粗粒石材を使用。表裏面に研磨面。研磨面には微妙な凹凸があり、繰り返し使用したことが明らか。破損理由は不明。	
				幅	9.5	重	70.2			
第105図 PL.93	443	礫石器 砥石		長	22.4	厚	7.7	粗粒輝石安山岩	表面側に浅く溝状に窪んだ研磨痕がある。礫稜部には打痕があり、多機能に使われた可能性がある。裏面側に被熱剥落痕。	
				幅	17.0	重	4540.0			
第105図 PL.93	444	礫石器 砥石		長	23.5	厚	9.3	粗粒輝石安山岩	表面側中央に浅い溝状の砥面が特徴的。砥面は裏面側中央右にもあり、回転させ使用したものとみられる。裏面中央の稜には打痕集中。置き砥石。	
				幅	12.4	重	3698.1			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.93	445	礫石器 砥石?		長	25.1	厚	20.1	粗粒輝石安山岩	大形の楕円礫で、本来の礫面は上端側のみ残る。表面側は砥石様の平滑面で、裏面側も似た礫面になっているが、平滑具合が明らかに異なる。平滑面はヒビ割れ下に潜り、研磨面とするのは難しい。岩脈から落ちた石塊？	
				幅	24.2	重	17180			
第105図 PL.93	446	礫石器 石皿		長	33.2	厚	9.5	粗粒輝石安山岩	大形の偏平楕円礫を用いる。表面側平坦面に摩耗痕が広がる。摩耗痕は光沢を帯び、使い込まれた状態にある。	
				幅	30.4	重	14240.0			
第105図 PL.94	447	礫石器 石皿		長	28.8	厚	11.9	粗粒輝石安山岩	大形楕円礫の表面側が浅く窪み摩耗、摩耗面は光沢を帯びる。石皿的に使用されたものとみられる。使用時は右辺を地面に埋め使用する必要あり。	
				幅	23.1	重	11440.0			
第106図 PL.94	448	礫石器 石皿		長	26.3	厚	14.7	粗粒輝石安山岩	厚い盤状礫を用いる。表面側平坦面が著しく摩耗、光沢面を形成する。被熱してヒビ割れ、礫面が剥落する。	
				幅	33.2	重	18580.0			
第106図 PL.94	449	礫石器 石皿		長	(20.4)	厚	6.8	粗粒輝石安山岩	厚い盤状礫を用いる。礫面中央が著しく摩耗、光沢面を形成する。右辺側欠損面は調査時の欠損。	
				幅	(27.7)	重	5798.0			
第106図 PL.94	450	礫石器 石皿		長	29.4	厚	21.2	粗粒輝石安山岩	大形の亜円礫。表面側は平坦で、著しく摩耗する。礫周縁は被熱して剥落する。	
				幅	33.0	重	31960.0			
PL.94	451	礫石器 石皿		長	28.4	厚	12.1	粗粒輝石安山岩	大形の楕円礫。概形が五角形状を呈し、礫面が浅く窪み、礫外縁が掻出口様に傾斜する。窪み部は若干の凹凸があり、目の潰れ方は弱い。	
				幅	29.1	重	12200.0			
PL.94	452	礫石器 石皿		長	(20.8)	厚	8.9	粗粒輝石安山岩	表裏面は本来の礫面、側面は風化した破損面。表面側は外縁が高く石皿様だが、摩耗痕は不明瞭。表面側外縁は被熱剥落。	
				幅	(17.3)	重	4426.4			
PL.94	453	礫石器 石皿		長	(20.0)	厚	3.2	粗粒輝石安山岩	背面側が石皿状に窪んでいるが、石材が粗く摩耗の有無は判断できない。右辺側は直線的で、裏面側は湾曲する。	
				幅	(16.7)	重	1304.0			
PL.95	454	礫石器 台石		長	22.2	厚	7.8	粗粒輝石安山岩	背面側が部分的に淡く赤変、摩耗しているように見える。部分的に剥落があり、被熱剥離したもの。摩耗状態は使用痕として不明瞭。	
				幅	20.9	重	5838.2			
PL.95	455	礫石器 石皿		長	(23.0)	厚	13.8	粗粒輝石安山岩	厚手の盤状礫。表面側平坦面が摩耗、目が潰れるほど強く摩耗する部分もある。被熱して破損する。	
				幅	(23.7)	重	9680			
PL.95	456	礫石器 多孔石		長	19.5	厚	8.8	粗粒輝石安山岩	表面側中央に孔５、同じく側縁に孔２、裏面側に孔６がある。いずれも孔は漏斗状を呈す。石材が粗く敲打痕や摩耗痕は不明瞭だが、表面側中央が大きく窪んでおり、意図的であるのは確実。	
				幅	16.7	重	1924.1			
第106図 PL.95	457	石製品 石棒		長	(6.9)	厚	(1.2)	変玄武岩	頭部破片で、表裏面とも被熱して剝れたもの。薄板状を呈す。	
				幅	(4.7)	重	48.3			
第106図 PL.95	458	石製品 石棒		長	(8.8)	厚	(2.1)	頁岩	上端側断面はレンズ状を、やや括れる下端側断面は円形に近い。全面研磨され研磨境が明瞭だが、側縁が刃づけされるようなことはない。	
				幅	(2.9)	重	89.3			
第106図 PL.95	459	石製品 石棒		長	(9.7)	厚	1.9	黒色片岩	上端側左辺が薄く剝れ、上端側右辺が弱く括れ、側縁にも量があり、意図的な加工と見たい。側縁形状を評価して石剣未製品とすることも可。	
				幅	2.7	重	67.0			
第107図 PL.95	460	石製品 石棒		長	(11.4)	厚	(3.2)	黒色片岩	表裏面とも礫中央付近に剥離痕が残される。剥離痕は部分的に敲打されているが、残る礫面が研磨されているか不明。加工初期の状態か。	
				幅	3.9	重	202.9			
第107図 PL.95	461	石製品 石棒		長	(7.2)	厚	(2.0)	変玄武岩	表裏面とも研磨され、平坦面が広がる。側縁や両端にも打痕が残っているが、打痕は敲打具として転用したときのものか。	
				幅	(2.8)	重	65.3			
第107図 PL.95	462	石製品 石棒		長	(7.8)	厚	(2.1)	緑色片岩	表面側は研磨され稜２条が形成、裏面側は研磨で丸味を帯びる。両端を破損する。	
				幅	(2.3)	重	61.9			
第107図 PL.95	463	石製品 石棒		長	(14.5)	厚	(1.3)	変玄武岩	石棒類破片。礫面中央付近は斜め線条痕、側縁は縦位線条痕となる。断面形状から見る限り、その形状は偏平・左右対称形になる。	
				幅	(3.5)	重	106.9			
第107図 PL.95	464	石製品 石棒		長	(21.0)	厚	3.8	黒色片岩	表面中央以下や左右両辺、裏面は風化剥離面に似て摩耗する。これに対し表面上半は平滑で、これが石棒の本来面かもしれない。詳細不明。	
				幅	(4.0)	重	411.3			
第107図 PL.95	465	石製品 石棒		長	(5.0)	厚	(1.8)	緑色片岩	表裏面とも丁寧に研磨するほか、両側縁を研磨することで棒状に形状を整えている。やや偏平で、破損部断面が円形になることはないように思う。	
				幅	(3.0)	重	41.8			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.95	466	石製品 石棒		長	(6.0)	厚	1.5	黒色片岩	偏平棒状礫の端部破片。外部から明らかに持ちこまれたものであり、この点を踏まえれば石棒破片の可能性も否定できない。	
				幅	(2.9)	重	36.0			
第107図 PL.95	467	石製品 石剣		長	(17.6)	厚	2.1	変玄武岩	亀頭状に膨らむ端部にＸ字状に沈線を刻む。両側縁には稜があり、これが刃部となる。断面は薄型レンズ状で、体部下半を欠く。	
				幅	3.6	重	157.3			
第107図 PL.95	468	石製品 石剣		長	(10.8)	厚	2.0	変玄武岩	上端部は括れ亀頭状に整形、研磨。体部断面は楕円形状を呈し全面研磨、側縁は弱い稜を持つ。上端部に敲打、剥離痕あり。	
				幅	3.8	重	137.9			
第107図 PL.95	469	石製品 石棒		長	(8.5)	厚	(2.0)	変玄武岩	表裏面とも全面研磨。頭部側研磨は弱く、打痕が残る。体部研磨痕は線条痕を伴い、光沢は乏しい。上端部破片。	
				幅	3.7	重	92.0			
第107図 PL.95	470	石製品 石剣		長	(7.9)	厚	1.6	緑色片岩	器体全面が研磨されているが、やや粗い研磨。両側縁の刃部は器軸に対し斜向、やや歪んだ印象を受ける。表面上端側左辺に剥離痕が残る。	
				幅	2.4	重	43.2			
第107図 PL.95	471	石製品 石剣		長	(5.2)	厚	(1.1)	層状珪質岩	上端部は薄板状、下端部左辺に瘤状の突起、右側縁の加工状況からみて、右辺側にも同等な突起が付く可能性がある。石剣柄頭部分の破片か。	
				幅	(2.7)	重	25.0			
第107図 PL.95	472	石製品 石剣		長	(13.8)	厚	(1.6)	緑色片岩	表裏面とも全面研磨。両側縁は明瞭な刃部が作出され、断面レンズ状を呈す。上下両端を欠損、先端側は先細る。	
				幅	(2.9)	重	74.9			
第107図 PL.95	473	石製品 石剣		長	(3.9)	厚	0.7	変玄武岩	細形、先端部破片。表裏面とも全面研磨、両側縁に刃部を作出する。先端部に上下２ヵ所に破損部がある。	
				幅	2.5	重	10.6			
第107図 PL.95	474	石製品 石刀		長	(8.3)	厚	(1.7)	緑色片岩	全面研磨。体部破片で、断面形状は楔状を呈す。上端側欠損部の破損面は新鮮だが、下端側欠損部は摩耗して、両者には明らかに時間差がある。	
				幅	(2.5)	重	52.0			
第107図 PL.95	475	石製品 石刀		長	(3.4)	厚	(1.1)	珪質準片岩	全面研磨。先端部破片で、断面形状は楔状。表面側は薄く剝れているが、その剥落面は風化摩耗して、破損面とは時間差がある。	
				幅	(1.7)	重	8.6			
第107図 PL.95	476	石製品 石冠		長	4.2	厚	4.9	粗粒輝石安山岩	三角柱状を呈す。礫面と加工面が判然とせず不明だが、いずれも稜線は摩耗する。正面を除いた各面が被熱してヒビ割れる。	
				幅	6.0	重	182.1			
第108図 PL.96	477	石製品 玉		長	0.6	厚	0.3	蛇紋岩	平玉。褐色ベースの黒色斑模様。上下面・体部は摩耗。孔径は3㎜弱、両側穿孔。体部にタール状の物質付着。№479・481は同一個体？	平玉
				幅	0.6	重	0.18			
第108図 PL.96	478	石製品 玉		長	0.6	厚	0.3	蛇紋岩	平玉。褐色ベースの黒色斑模様。上下面・体部には研磨痕が残り、光沢は乏しい。孔径は2㎜、両側穿孔。石材感は№481に似る。	平玉
				幅	0.6	重	0.10			
第108図 PL.96	479	石製品 玉		長	0.6	厚	0.2	蛇紋岩	平玉。褐色ベースの黒色斑模様。上下面・体部には多少研磨痕が残る。孔径は2.5㎜、両側穿孔。№477・481は同一個体？	平玉
				幅	0.6	重	0.14			
第108図 PL.96	480	石製品 玉		長	0.6	厚	0.3	蛇紋岩	平玉。褐色ベースの黒色斑模様。上下面・体部は摩耗。孔径は2㎜強、両側穿孔。体部にタール状の物質付着。№477・479・481は同一個体？	平玉
				幅	0.6	重	0.18			
第108図 PL.96	481	石製品 玉		長	0.6	厚	0.4	蛇紋岩	平玉。褐色ベースの黒色斑模様。上下面・体部には研磨痕が残り、光沢は乏しい。孔径は2.5㎜、両側穿孔。孔内面の紐擦れ痕なし。	平玉
				幅	0.6	重	0.23			
第108図 PL.96	482	石製品 玉		長	0.8	厚	0.4	蛇紋岩	平玉。孔径3㎜、両側穿孔。石材感、研磨痕等は汚れて不明瞭。	平玉
				幅	0.8	重	0.31			
第108図 PL.96	483	石製品 玉		長	0.7	厚	0.4	蛇紋岩	平玉。径2㎜強の孔を穿つ。暗緑色ベースで黒色斑模様、光沢に富む。石材感は、№479・481・478に似る。	平玉
				幅	0.7	重	0.31			
第108図 PL.96	484	石製品 玉		長	0.8	厚	0.3	蛇紋岩	平玉。黒色斑模様だが、やや明るい。上面孔周辺や体部研磨痕が良好に残る。断面形は片傾斜、玉を二分した可能性。孔径2.5㎜、穿孔状態不明。	平玉
				幅	0.8	重	0.22			
第108図 PL.96	485	石製品 玉		長	0.9	厚	0.3	蛇紋岩	平玉。上下面・体部は摩耗。表側の孔径は2㎜強、裏側6㎜で、両側穿孔。	平玉
				幅	0.9	重	0.34			
第108図 PL.96	486	石製品 玉		長	0.9	厚	0.3	蛇紋岩	平玉。径3㎜の孔を穿つ。体部線条痕より、上下面の線条痕が鮮明。暗緑色ベースで、光沢に富む。黒色鉱物を含む。	平玉
				幅	0.9	重	0.41			
第108図 PL.96	487	石製品 玉		長	1.0	厚	0.5	蛇紋岩	平玉。径3㎜強の孔を穿つ。暗緑色ベースで、光沢に富む。黒色鉱物を含む。サイズや石材感は、№486に良く似た個体。	平玉
				幅	1.0	重	0.73			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第108図 PL.96	488	石製品 玉		長	1.0	厚	0.5	蛇紋岩	平玉。孔径3㎜強、両側穿孔。研磨痕等は汚れて不明瞭だが、孔内面は光沢がある。	平玉
				幅	1.0	重	0.70			
第108図 PL.96	489	石製品 玉		長	1.0	厚	0.8	蛇紋岩	形状は丸玉状。良く研磨されている。径3㎜強の孔を両側穿孔するほか、径2㎜孔(未穿孔)がある。あめ色に近い褐色で、濃淡がある。	丸玉？
				幅	1.0	重	1.03			
第108図 PL.96	490	石製品 玉		長	1.1	厚	0.8	蛇紋岩	形状は丸玉状。研磨が不充分で、表面には白く打痕様の痕跡が残る。孔は径4㎜ほど、両側穿孔。明緑～黒緑、灰白色の帯が斑状に含まれる。	丸玉？
				幅	1.1	重	0.09			
第108図 PL.96	491	石製品 玉		長	1.2	厚	0.9	蛇紋岩	形状は丸玉状。研磨が不十分で、表面には白く打痕様の痕跡が残る。孔は5㎜ほどで、両側穿孔。黒味強く、光沢は極めて弱い。	丸玉？
				幅	1.2	重	1.76			
第108図 PL.96	492	石製品 玉		長	1.3	厚	0.7	蛇紋岩	平玉状。体部より上下両端は光沢がある。孔は4㎜強で、両側穿孔。孔内面は紐擦れて光沢がある。 淡緑色を呈す。	平玉？
				幅	1.3	重	1.58			
第108図 PL.96	493	石製品 玉		長	(0.7)	厚	0.8	葉ろう石	丸玉状。上下面は平坦、体部研磨。孔は径4㎜弱で、両側穿孔。色調は暗緑色、透明感はない。	丸玉？
				幅	1.1	重	0.76			
第108図 PL.96	494	石製品 玉		長	(1.0)	厚	(0.8)	葉ろう石	丸玉様。孔径4㎜強。色調は緑色で、濃淡が混じる。石材の透明感はない。	丸玉？
				幅	(1.1)	重	0.46			
第108図 PL.96	495	石製品 玉		長	(0.9)	厚	0.8	葉ろう石	形状は整わず形状不明。体部は研磨の初期段階、面取り痕が残る。孔径は5㎜前後か。	
				幅	(0.7)	重	0.49			
第108図 PL.96	496	石製品 玉		長	1.1	厚	0.9	葉ろう石	やや厚い不定形装身具。3㎜強の孔を穿つ。色調は玉類に多い緑色～淡緑色、透明感はない。	
				幅	1.3	重	1.5			
PL.96	497	石製品 玉		長	(0.7)	厚	(0.4)	碧玉	高さ7㎜前後の小玉破片。残存率は1/5程度。両側穿孔。孔径は4㎜程度。	
				幅	(0.7)	重	0.19			
第108図 PL.96	498	石製品 玉		長	0.8	厚	0.4	碧玉	下端側を欠損、欠損面は光沢を帯びる。最も細い部類の管玉で、径2㎜弱の孔を穿つ。色調は淡い緑色、全面光沢に富む。	管玉
				幅	0.4	重	0.11			
第108図 PL.96	499	石製品 玉		長	0.8	厚	0.5	碧玉	上下両端を欠損。この欠損面を含めて体部光沢痕が著しい。径6㎜強の孔を穿つ。緑色・光沢が強く、良質石材を使用。	管玉
				幅	0.5	重	0.21			
第108図 PL.96	500	石製品 玉		長	1.5	厚	0.6	変質流紋岩	上下両端を欠損、欠損面は摩耗して光沢がある。径4㎜強の孔を両側穿孔、孔は激しく捩れる。色調は濃淡の混じる緑色で、光沢は乏しい。	管玉
				幅	0.7	重	0.70			
第108図 PL.96	501	石製品 玉		長	1.5	厚	(0.7)	葉ろう石	1/2を縦位破損、孔内面の状態が良く分かる。径5㎜程度の孔を両側穿孔。色調は淡い緑色だが、濃い緑色部分も含まれる。	管玉
				幅	0.8	重	0.79			
第108図 PL.96	502	石製品 玉		長	1.6	厚	0.7	蛇紋岩	体部には打痕が残り、光沢は弱い。上下両端の孔は径2㎜程度、穿孔内壁にはらせん状の線条痕が明瞭。上・下孔面ともレンズ状に浅く窪む。	管玉
				幅	0.7	重	1.33			
第108図 PL.96	503	石製品 玉		長	1.7	厚	0.6	蛇紋岩	上下両端に径5㎜の孔を両側穿孔。体部線条痕は比較的容易に観察が可能。色調は黒味を帯びた緑色、光沢に富む良質石材を使用。	管玉
				幅	0.6	重	1.12			
第108図 PL.96	504	石製品 玉		長	1.9	厚	1.2	葉ろう石	形状は略三角。体部には粗い研磨痕が残る。孔径は6㎜弱、両側穿孔する。玉は灰白色ベースで、斑模様。	丸玉？
				幅	1.7	重	4.88			
第108図 PL.96	505	石製品 玉		長	1.3	厚	0.6	不明	平玉様。石材感は軟質で、透明感はない。孔は径4㎜ほど。	平玉？
				幅	1.3	重	0.51			
第108図 PL.96	506	石製品 玉		長	(0.9)	厚	0.4	不明	平玉様。石材感は軟質で、透明感はない。孔径1㎜弱。	平玉？
				幅	1.0	重	0.30			
第108図 PL.96	507	石製品 玉		長	(0.7)	厚	(0.4)	碧玉	高さ7㎜前後の小玉破片。残存率は1/5程度。両側穿孔。孔径は4㎜程度。	
				幅	(0.7)	重	0.19			
PL.96	508	石製品 玉		長	1.1	厚	0.5	ひすい？	角礫稜部が欠けたような小片。断面三角形を呈する二辺に孔が穿たれる。孔は両側穿孔(孔径3㎜)で極めて不安定な位置にある。透明感あり。	
				幅	0.7	重	0.47			
第108図 PL.96	509	石製品 玉		長	3.4	厚	0.9	変質蛇紋岩	「C」字状を呈す彫刻勾玉。刻みが3ヵ所、上下両端の刻みは深く、中央の刻みは浅い。径6㎜強の孔を両側穿孔、裏面側の孔先端は未貫通で、穿孔具は先端が1㎜ほどになる。孔は著しく紐擦れる。	
				幅	1.6	重	6.16			
第108図 PL.96	510	石製品 玉		長	1.8	厚	1.2	葉ろう石	上端側に括れ部があり、形状は広口瓶に似る。裏面側は平坦面、表面側は多面構成になる。径5㎜強の孔は中央より下にあり、重心は図と逆転。	
				幅	1.5	重	3.70			

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第108図 PL.96	511	石製品		長	1.7	厚	0.3	葉ろう石	「く」字状を呈す。上端側は略方形状を呈し、下端側は先端が尖り気味。径4㎜の孔を片側穿孔するほか、裏面側に径1㎜強の孔(未穿孔)がある。	未製品
				幅	1.1	重	0.53			
第108図 PL.96	512	石製品		長	1.4	厚	1.1	葉ろう石	略方形状。各面の研磨痕は面を整える程度。孔は径4㎜強、途中穿孔を放棄している。淡緑色、石材の透明感はない。石材は46に似る。	未製品
				幅	1.3	重	2.48			
第108図 PL.96	513	石製品		長	1.3	厚	0.5	ひすい	略方形状。上端側に径4㎜の孔を片側穿孔。左辺側が厚く、断面は三角形状を呈す。透明感ある緑で、濃淡がある。	未製品
				幅	1.1	重	1.09			
第108図 PL.96	514	剥片石器 加工痕ある剥片?		長	1.8	厚	0.4	流紋岩	裏面側に比べ表面側の線条痕が著しい。表面側線条痕は右辺に直交、キズは深い。線条痕は左辺加工部とは連動せず散漫。詳細は不明。	
				幅	1.7	重	1.07			
第108図 PL.96	515	石製品		長	1.6	厚	0.9	葉ろう石	外縁は研磨され、概形は六角形状を呈す。右辺側に３本の刻み。表面側は多面構成だが、裏面側は平坦。断面は三角形状で、左辺側が厚い。淡緑色、石材の透明感はない。	未製品
				幅	1.4	重	2.46			
PL.96	516	石製品		長	1.7	厚	0.7	葉ろう石	下端側を欠損している可能性があり、本来的サイズは不明。色調は乳白色に近く、やや青味を帯びる。玉素材として規格的に見える。	玉素材
				幅	1.0	重	2.00			
PL.96	517	石製品		長	2.1	厚	1.0	葉ろう石	色調は乳白色に近く、やや青味を帯びる。鉱物粒が抜けた孔はなく、斑状の模様が見える。板状を呈する素材の破片か。	玉素材
				幅	1.3	重	3.64			
PL.96	518	石製品		長	1.9	厚	1.1	葉ろう石	色調は乳白色に近く、やや青味を帯びる。原礫の外縁で鉄分が付く。光沢は充分だが、鉱物粒が点々と見える。	玉素材
				幅	1.7	重	4.03			
PL.96	519	石製品		長	2.3	厚	0.9	葉ろう石	色調は乳白色に近く、やや青味を帯びる。鉱物が抜け落ちた小孔が点々とある。	玉素材
				幅	1.3	重	3.30			
PL.96	520	石製品		長	2.8	厚	0.8	雲母石英片岩	断面三角形状を呈す。各面とも若干風化しており、単純な破断面ではないが、詳細は不明。	玉素材
				幅	0.8	重	2.34			
PL.96	521	石製品		長	3.8	厚	0.9	葉ろう石	色調は乳白色に近く青味を帯びているが、剥片端部は鉄分を多く含み、質は粗悪になる。	玉素材
				幅	2.3	重	6.48			
PL.96	522	石製品		長	3.3	厚	1.7	葉ろう石	色調は乳白色に近く、やや青味を帯びる。原礫の外縁で鉄分が付き、光沢に欠ける。	玉素材
				幅	2.6	重	14.16			
PL.96	523	石製品		長	2.2	厚	0.4	葉ろう石	乳白色、やや青味を帯びる。薄過ぎて製作意図は不明。	未製品
				幅	1.2	重	1.28			
第108図 PL.96	524	石製品 玉		長	(0.5)	厚	0.6	不明	平玉様。やや軟質石材で、透明感はない。孔径不明。	平玉？
				幅	(1.1)	重	0.16			
PL.96	525	石製品		長	(1.9)	厚	1.2	変質蛇紋岩	見た目は単なる河床礫だが、礫面には明瞭な線条痕が残されている。研磨痕を重視するならば、石製研磨具等も想定可能かもしれない。	
				幅	1.7	重	7.1			
PL.96	526	石製品		長	10.9	厚	1.9	黒色片岩	棒状礫。小口部両端に複数の摩耗面が形成されている。多面構成される先端は磨製石斧製作に伴う敲打具に似る。	
				幅	2.9	重	88.4			
PL.96	527	石製品		長	1.4	厚	0.4	水晶	六角柱状を呈する結晶が破断したもの。破断面下端に打痕があり両極剥離も想定可能だが、詳細は不明。結晶は不純物で白く濁る。	破片
				幅	0.6	重	0.55			
PL.96	528	石製品		長	1.2	厚	0.5	水晶	六角柱状を呈する結晶が中央付近で破断したもの。破断理由は不明。結晶は不純物で白く濁る。	破片
				幅	0.7	重	0.51			
PL.96	529	石製品		長		厚		珪質変質岩		未製品
				幅		重	4.94			
PL.96	530	不明		長		厚		葉ろう石		
				幅		重	0.88			
PL.96	531	石製品		長		厚		珪質頁岩		
				幅		重	3.1			

第６項　遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物として、縄文時代から弥生時代までの各時期の土器および石器が出土している。その代表的な遺物について記す。なお、時期の異なる遺構から出土した遺物についても、本項で扱っている。

〈**土器**〉（第109・110図　第23表　PL.97・98）

出土した土器量は少ないが、縄文時代早期から晩期終末・弥生時代前期、そして弥生時代後期と、時間幅はかなり広い。ここでは、縄文時代早期から晩期終末・弥生時代前期と、弥生時代後期に分けて記すこととする。

１．縄文時代早期から晩期終末・弥生時代前期

（第109・110図１～31　PL.97・98）

早期の土器としては、１の押型文土器の胴部片が１点ある。本調査で出土した遺物の中では最も古い土器で、山形押型文が横位・縦位に施文されている。

前期中葉の土器として、胎土に繊維含有の２～５がある。２は大波状口縁となる深鉢形土器の口縁部で、波頂下の口縁部文様に幅広な連続爪形刺突をもつ平行沈線で菱状の文様を描き、その下位に同様な施文法で横位の文様帯区画を行う。３も２と同様な文様を描く口縁部片である。４は胴部下半に０段多条のＬＲとＲＬによる羽状縄文を施し、５は同様な羽状縄文を施したやや上げ底様となる底部である。

前期後葉の土器として、６～９がある。６は内反する口縁部片で、口縁直下に刻みをもつ細い浮線文を３条巡らせ、その下に同様の浮線文で斜位ないし弧状の文様を描く。７は口縁部文様に６と同様な浮線文で文様を描き、地文にＲＬの斜縄文を施す。８は浅鉢形土器の体部片で、体部に爪形刺突をもつ細い平行沈線で木の葉門を描く。９は胴部下端に矢羽根状の集合沈線を施し、ボタン状貼付文を加えた底部片である。

中期前葉の土器には、10がある。波頂部下に橋状把手をもち、口縁下にLRの縄文を施し、５・６条の平行沈線を巡らせて区画する。

晩期終末から弥生時代前期にかかる土器として、11～31がある。11～16は甕の口縁部片で、11・12の口縁部には小突起が連続し、口縁下に斜縄文を施し、さらに数条の沈線を巡らせて文様帯を区画する。13は平口縁下に太い沈線を数条巡らせ、14では平口縁の口唇部に刻みをもち、口縁下に縄文帯をもつ。15は平口縁下が無文となり、口縁下端を数条の沈線を巡らせて文様帯を区画する。また、口端裏面にも１条の沈線が巡る。16は直立ぎみな口縁下に幅広な太い条痕を斜位に施す。17～20は甕の胴部片で、細密条線を施した17～19、無文の20である。21・22は鉢で、口縁に波状突起を有する21は口縁部無文帯下に段差をもち、胴部に三叉状陰刻を伴う変形工字文が多段に描かれ、赤彩を施す。22は体部に横位沈線と陰刻による変形工字文を多段描く。23～26は浅鉢で、23は口縁部が僅かに外反し、体部上半に刺突と４条の横位弧状沈線を組み合わせた文様を描く。24は波状口縁に小突起をもち、口縁部下に細沈線４条を巡らせ、体部は無文で外面は赤彩。25は口縁部に太い凹線を巡らせ、体部は無文で内外面は赤彩。26は口縁下に3条の沈線を巡らせる。27・28は底部で、28の底面には木葉痕が付く。29は台付鉢の底部。30は小型浅鉢で、波頂部に刻みをもつ緩い波状口縁の口縁下に小孔を有し、体部上半に縦位の短沈線と３条の沈線を交互に巡らせる。31は無文の小型壺の体部である。

２.弥生時代後期（第110図32～35　PL.98）

この時期の土器は僅かであるが、第３面調査でも諸段階のかなり上位層から出土した土器である。

32～34は甕で、32は口縁直下から頸部にかけて４ないし５歯の櫛描波状文を多段に施し、体部は無文で研磨を施す。33も口縁以下に同様の櫛描波状文を施す。34は口縁部を欠くが、頸部に４ないし５歯の櫛描波状文を多段に施し、体部は無文で研磨を施す。35は壺で、頸部が窄まり、口縁が大きく開く。頸部は無文で、肩部に横位波状文と簾状文が施される。

〈**石器**〉（第111図　第23表　PL.98）

出土した石器量は多くはないが、石鏃をはじめとし、打製石斧、磨製石斧、石核、凹石、磨石、敲石、台石、砥石、多孔石、そして石棒といった各種類がある。

なお、石器の掲載にあたっては、代表的なものの図掲載にとどめた。

１.石鏃(第111図36　PL.98)

出土したのは、２点である。36は黒曜石製で、石鏃分類のⅢb2類とした凹基有茎の長身鏃である。もう１点は珪質頁岩製で、Ⅲa1類とした平基有茎の三角鏃である。

２.打製石斧(第111図38　PL.98)

出土したのは５点で、38の１点を図掲載した。黒色頁岩製で、表裏面とも剥離後の研磨面が大きく広がり、直刃様の刃部は裏面側からの剥離となる。他に珪質頁岩製、黒色頁岩製、細粒輝石安山岩製、粗粒輝石安山岩製がそれぞれ１点ずつある。

３.磨製石斧(第111図37　PL.98)

出土したのは２点で、37の１点を図掲載した。変玄武岩製で、全面を丁寧に研磨し、刃部の刃こぼれを再生研磨している。もう１点は変質安山岩製で、刃部を欠損する。

４.石核

９点出土しているが、掲載はしていない。それらの石材をみると、粗粒輝石安山岩が３点、細粒輝石安山岩２点、赤碧玉２点、変質安山岩１点、黒色頁岩１点である。

５.凹石

16点出土しているが、掲載はしていない。それらの石材をみると、全て粗粒輝石安山岩である。

６.磨石

計68点出土しているが、掲載はしていない。それらの石材をみると、粗粒輝石安山岩が67点とほとんどで、僅かに溶結凝灰岩が１点ある。因みに、各区に跨り、古墳時代以降の竪穴建物や集石からも多く出土している。

７.敲石

５点出土しているが、掲載はしていない。それらの石材をみると、全て粗粒輝石安山岩である。

８.台石

11点出土しているが、掲載はしていない。それらの石材をみると、石英閃緑岩の１点を除き、他は全て粗粒輝石安山岩である。

９.砥石

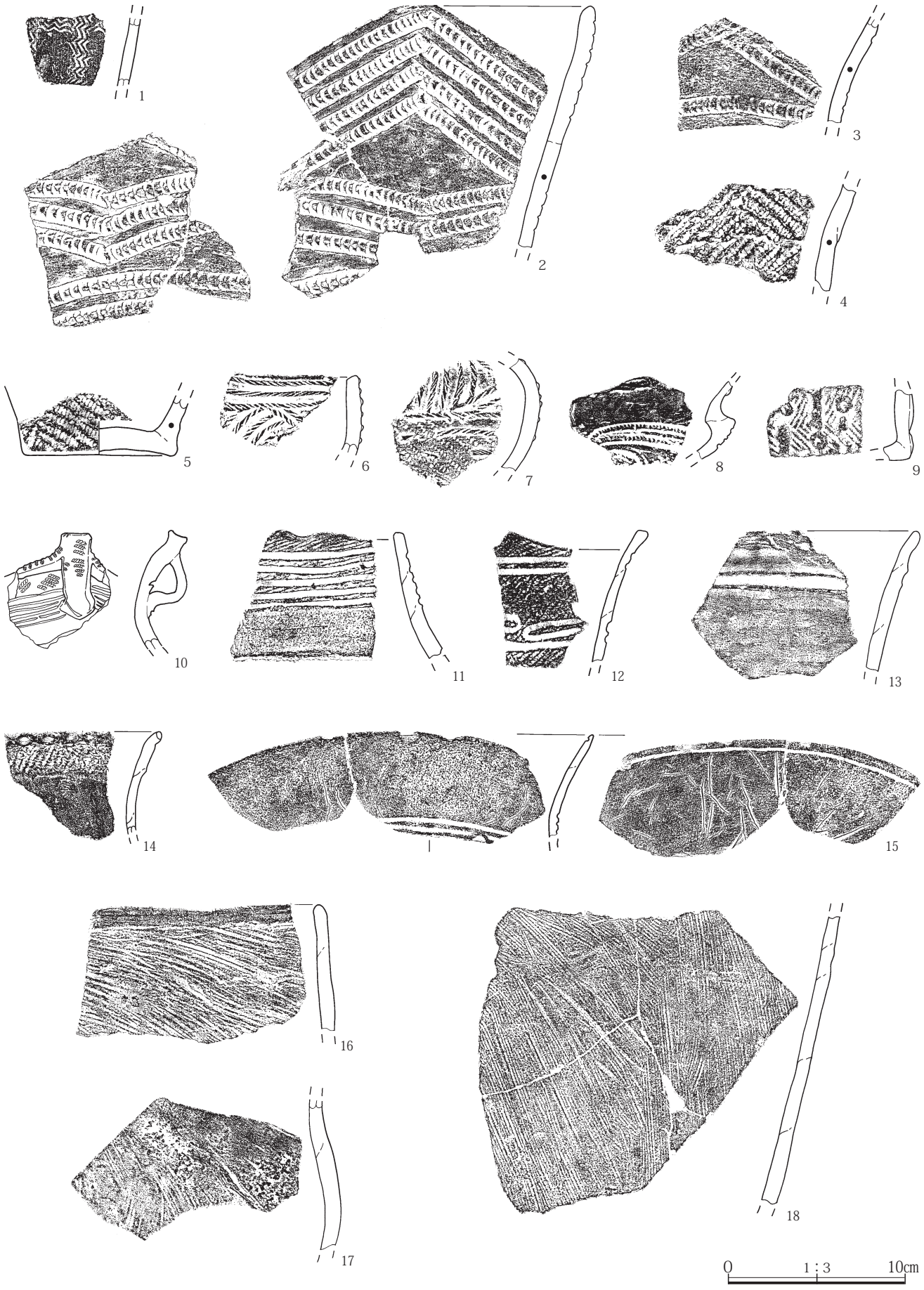
１点出土しているが、掲載はしていない。石材は、粗粒輝石安山岩である。

10.多孔石

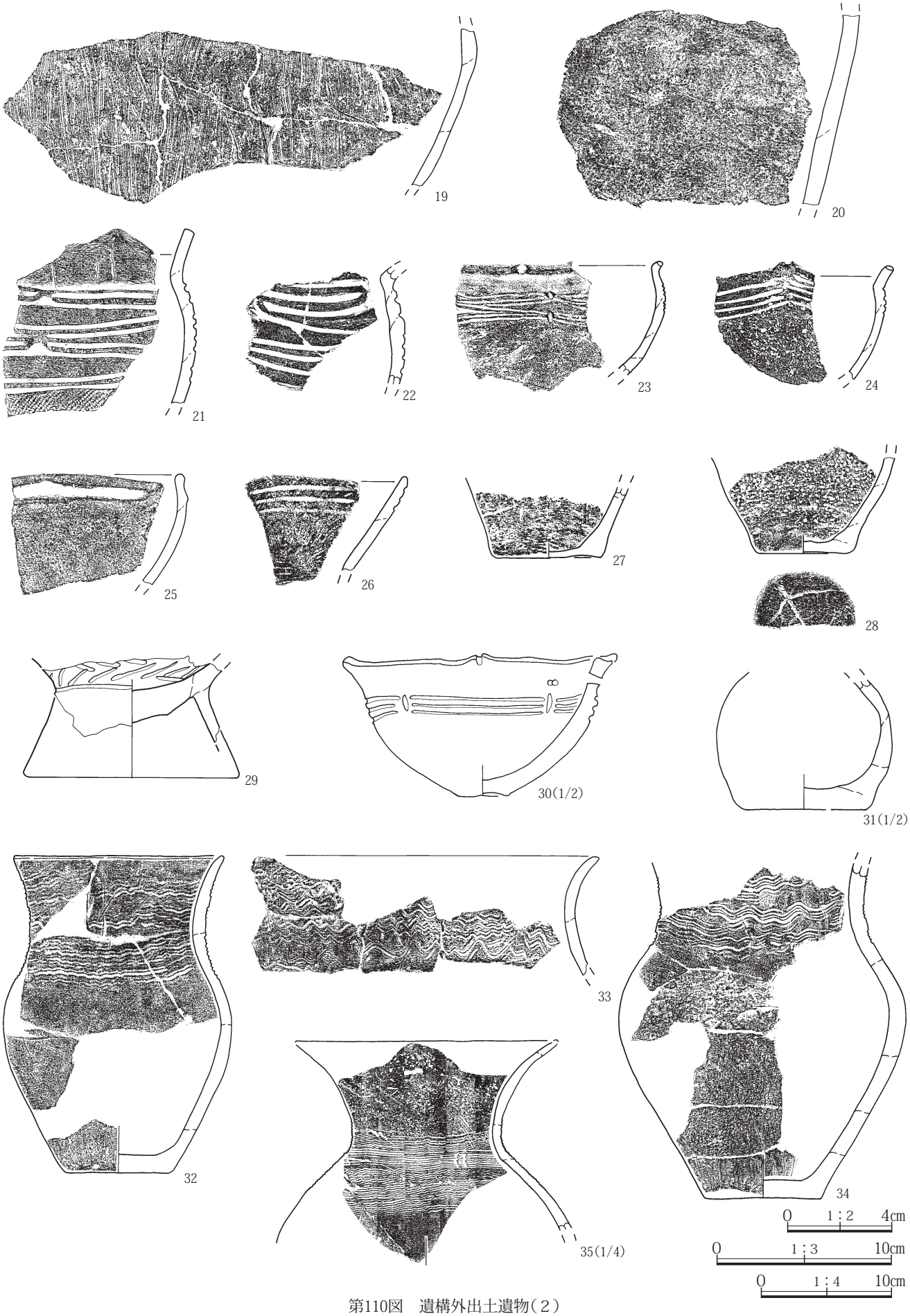
１点出土しているが、掲載はしていない。石材は、粗粒輝石安山岩である。

11.石棒

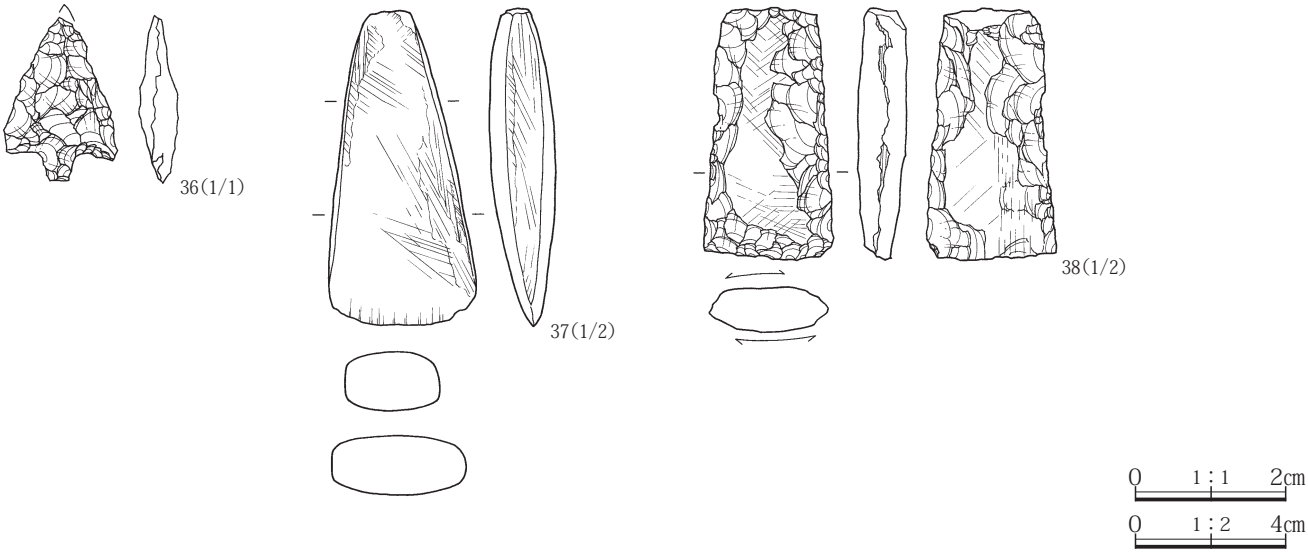
１点出土しているが、掲載はしていない。石材は、緑色片岩である。



第109図　遺構外出土遺物（１）



第110図　遺構外出土遺物（２）



第111図　遺構外出土遺物（３）

第23表　遺構外出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第109図 PL.97	1	縄文土器 深鉢	遺構外 体部破片					細:石英･白色粒/良好/明褐色	３・４条の山形押型文を縦位･横位に施す。内面弱い撫で調整に止まる	縄文早期前葉
第109図 PL.97	2	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部破片２点					細:繊維･輝石･チャート･白色粒/良好/褐灰色	波状縁。波頂部僅かに湾曲。口縁部は幅広連続爪型文による大型菱形文を配す。内面丁寧な研磨を加える	縄文前期中葉
第109図 PL.97	3	縄文土器 深鉢	遺構外 口頸部破片					細:繊維･石英･白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部外反。幅広の連続爪型文による大型菱形文が配される。内面研磨	縄文前期中葉
第109図 PL.97	4・5	縄文土器 深鉢	遺構外 体部破片・底部破片各１点			底	(8.6)	粗:繊維･石英･片岩/良好/にぶい黄橙色	僅かに上げ底を呈す。体部は０段多条ＬＲと０段多条ＲＬによる横位羽状縄文構成。追加整形施文の痕跡が顕著。内面平滑な撫で調整	縄文前期中葉
第109図 PL.97	6	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部破片					細:石英･輝石･角安/良好/赤褐色	口縁部内傾する波状縁。刻みを付す浮線文を施す。内面横位削り調整に止まる	縄文前期後葉
第109図 PL.97	7	縄文土器 深鉢	遺構外 体部上半破片					細:石英･輝石･角安/良好/赤褐色	内湾して強く開く。斜位刻みを重ねた浮線文を施す。地文は横位ＲＬ。内面横位研磨	縄文前期後葉
第109図 PL.97	8	縄文土器 浅鉢	遺構外 体部破片					細:輝石･白色粒多/良好/灰黄褐色	横位浮線文以下無文外反部を経て屈曲体部に小型の連続刺突文による木の葉状意匠が配される。内面研磨	縄文前期後葉
第109図 PL.97	9	縄文土器 深鉢	遺構外 底部破片					粗:石英･輝石･角安･白色粒/やや軟質/明褐色	底部端部僅かに張り出し棒状貼付文とボタン状貼付文を付す。地文は幅狭斜位平行沈線による横位矢羽状文を施す。内面平滑な撫で	縄文前期後葉
第109図 PL.97	10	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部破片					細:石英･片岩粒･白色粒/良好/黒褐色	波頂部下に小型の橋状把手を設け、屈曲部に５・６条の横位平行沈線を設ける。縄文はＬＲ。内面丁寧な研磨を加える	縄文中期前葉異系統か
第109図 PL.97	11	縄文土器 甕･深鉢	遺構外 口縁部～頸部破片					細:石英･輝石･白色粒/良好/灰黄褐色	双波状突起を付す。口縁部に横位沈線５条を配し地文に横位ＬＲを施す。体部境は僅かな段差と横位沈線を設ける。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第109図 PL.97	12	縄文土器 甕･深鉢	遺構外 口縁～体部上半破片					細:石英･輝石･白色粒/良好/黒褐色	波状突起を付す。口縁部に横位沈線２条を設け、体部上半に沈線による横長弧線意匠を配す。地文は横位ＬＲ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉
第109図 PL.97	13	縄文土器 甕･深鉢	遺構外 口縁部破片					粗:石英多･輝石･白色粒/良好/灰黄褐色	口縁部突起を付すが剥落のため形状不明。口縁部は肥厚し斜位無節Ｌを施す。以下横位隆線２条が配される。内面平滑な撫で帖背字	縄文晩期末葉
第109図 PL.97	14	縄文･弥生 壺？	遺構外 口縁部破片					細:石英･雲母少･褐色粒/良好/にぶい黄褐色	口唇部に弱い凹凸を加え。口縁部は横位ＬＲを施す。僅かな段差で頸部と画し頸部及び内面は研磨を加える	縄文晩期末葉～弥生前期併行

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第109図 PL.97	15	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁～頸部1/4残存	口	(18.4)			細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/にぶい黄橙色	口縁部は幅広で無文。頸部に横位沈線と小型の三角陰刻文を施す。変形工字文か。内面口縁部に横位沈線文を設ける。外面平滑な撫で、内面研磨を加える	縄文晩期末葉
第109図 PL.97	16	縄文・弥生 甕・深鉢	遺構外 口縁部破片					細:石英・輝石・片岩・白色粒/良好/にぶい黄褐色	内傾する口縁部。太い条痕文を横位・斜位に施す。内面平滑な撫で調整。外面に煤が付着する	弥生前期併行 東海系
第109図 PL.97	17	縄文・弥生 甕・深鉢	遺構外 体部破片					細:石英・雲母・白色粒/良好/明赤褐色	体部上半か。頸部は無文で外反する。体部は斜位条痕文を施す。内面横位撫で調整。内外面煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第109図 PL.97	18	縄文土器 甕・深鉢	遺構外 体部破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/灰白色	体部中位～下半か。縦位・斜位条痕文が覆う。内面平滑な横位撫で調整	縄文晩期末葉
第110図 PL.97	19	縄文土器 甕・深鉢	遺構外 体部破片					細:石英・片岩粒・褐色粒・白色粒/良好/灰黄褐色	屈曲する体部上半か。縦位条痕文が覆う。内面弱い研磨を加える	縄文晩期末葉
第110図 PL.97	20	縄文・弥生 甕・深鉢	遺構外 体部破片					粗:石英・片岩多/良好/赤褐色	大型深鉢体部破片。無文で内外面とも平滑な撫で調整。内面煤付着	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第110図 PL.97	21	縄文土器 鉢	遺構外 口縁～体部上半破片					細:石英・片岩粒・白色粒/良好/暗褐色	波状突起を付す。口縁～頸部は無文で体部境に僅かな段差を設ける。体部上半は横位沈線と三叉状陰刻文による変形工字文が多段に配される。下半は横位沈線２条に画され横位ＬＲが施される。内外面丁寧な研磨を加え赤彩を施す	縄文晩期末葉
第110図 PL.97	22	縄文土器 浅鉢	遺構外 体部破片					細:石英・輝石多・白色粒/良好/黒褐色	頸部屈曲。体部上半はやや太い横位沈線と陰刻文による変形工字文が多段に配される。内面横位撫で調整	縄文晩期末葉
第110図 PL.97	23	縄文土器 甕・深鉢	遺構外 口縁～体部破片					細:石英・輝石・褐色粒・白色粒/やや軟質/橙色	口唇部外反し刺突文を加える。口縁部外反し体部上半は刺突を加えた薄い突起を中核に４条の横位弧状沈線を繋ぐ。内面平滑な撫で調整。外器面摩滅	縄文晩期末葉
第110図 PL.98	24	縄文土器 甕・深鉢	遺構外 口縁～体部破片					細:石英粒・白色粒/良好/褐灰色	波状小突起を付す。頂部に縦位刺突文を重ね、口縁部に沿って細沈線４条を施す。内外面研磨。外面赤彩	縄文晩期末葉
第110図 PL.98	25	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部破片					細:石英・輝石・片岩粒少/良好/黒褐色	口縁部に横位凹線と浮線により波状意匠を配す。内外面平滑な撫で調整。内外面に赤彩痕を見る。外面に少量の煤付着。6号溝№415と同一個体か	縄文晩期末葉
第110図 PL.98	26	縄文・弥生 甕・深鉢	遺構外 口縁部破片					細:石英・片岩・白色粒/やや軟質/黒褐色	口縁部横位沈線３条を設ける。下位に数条の沈線による横位波状文を配すが摩滅のため判然としない。地文は横位ＬＲ。内面平滑な撫で調整	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第110図 PL.98	27	縄文・弥生 甕・深鉢	遺構外 体部下半～底部残存			底	6.0	細:石英・輝石・片岩粒・白色粒/良好/橙色	小型深鉢か。縦位条痕文下端を見る。内面平滑な撫で調整。内外面に赤彩痕を見る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第110図 PL.98	28	縄文土器 甕・深鉢	遺構外 体部破片					細:石英・輝石・白色粒/やや軟質/にぶい黄褐色	内湾気味に開く体部下半。擬縄文を施す。施文具は植物由来(ハンノキ)か。底面に木葉痕。内面斜位撫で調整	縄文晩期末葉
第110図 PL.98	29	縄文土器 台付鉢？	遺構外 脚部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/褐色	脚部接合部のみの残存。接合部に横位沈線１条を設け、体部は横位矢羽状短沈線を施す。脚部は丁寧な研磨。体部内面は研磨、脚部内面は撫で調整。底部部分が突出する	縄文後期中葉
第110図 PL.98	30	縄文土器 ミニチュア鉢	遺構外 口縁部1/3欠損	口 高	9.8 5.3	底	2.3	細:石英・雲母末・白色粒/良好/赤褐色	口縁部に小波状突起を付す。不等間隔で単位は不明。口縁部下に2個１対の焼成前小孔を穿つ。体部上半に縦位刺突文と横位沈線文３条を交互に配す。６単位か。底面は上げ底状をなす。内外面とも弱い研磨。赤彩を見る	縄文晩期末葉
第110図 PL.98	31	縄文・弥生 ミニチュア壺	遺構外 体部～底部残存			底	4.6	細:石英・雲母少・白色粒/良好/にぶい黄橙色	内湾する体部。無文で外面平滑な撫で調整、内面は弱い撫で止まる。赤彩痕が僅かに残る	縄文晩期末葉～弥生前期併行
第110図 PL.98	32	弥生土器 甕	遺構外 口縁～体部1/2～底部残存	口 高	(12.0) 18.0	底	6.0	細:石英・輝石・白色粒/良好/黒褐色	口縁～頸部外反し体部上半内湾する。口縁～頸部に４・５条単位の櫛描波状文を多段に配す。体部上半は斜位、下半は弱い縦位研磨を加える。内面は横位研磨を施す。被熱のため口縁～体部上半が変色(黄橙色)	弥生後期
第110図 PL.98	33	弥生土器 甕？	遺構外 口縁～頸部破片					細:石英・輝石・白色粒/良好/にぶい黄橙色	外反する口縁部。櫛描き波状文が横位多段に配される。内面横位研磨	弥生後期

挿　図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第110図 PL.98	34	弥生土器 甕	遺構外 口唇部欠損･口縁1/2～体部上半残存	口	(20.0)			細:石英･輝石･白色粒/良好/橙色	口縁～頸部一体化し外反する。肩部に横位波状文と簾状文が配される。内外面研磨を加える	弥生後期
第110図 PL.98	35	弥生土器 甕	遺構外 頸部～体部残存			底	6.6	細:石英･輝石･白色粒/良好/橙色	頸部外反し体部上半内湾する。頸部に４・５条単位の横位櫛描波状文を多段に配す。体部は上半が横位、下半が縦位研磨を加える。内面は頸部～体部上半は横位、下半は弱い縦位研磨を施す	弥生後期
第111図 PL.98	36	剥片石器 石鏃	完形	長 幅	(2.2) 1.5	厚 重	0.5 1.19	珪質頁岩//	完成状態。表裏面とも押圧剥離。先端は絞り気味。破損後、形状修正した可能性。茎の両側をノッチ状に抉る。加工は粗く完成直前の状態か。	Ⅲa2
第111図 PL.98	37	剥片石器 磨製石斧		長 幅	8.3 3.9	厚 重	1.7 86.5	変玄武岩//	完成状態。器体全面が丁寧に研磨されている。刃部には刃こぼれがあり、これを再生研磨する。	
第111図 PL.98	38	剥片石器 打製石斧		長 幅	6.7 3.5	厚 重	1.3 38.1	黒色頁岩//	完成状態。表裏面とも剥離後の研磨面が大きく広がる。表面側側縁加工は裏面側剥離に後出､刃部は裏面側から剥離、直刃様。上半部欠損。	短冊形

第３節　古墳時代から古代の遺構と遺物

第１項　概要

本調査で検出された古墳時代から古代の遺構は、１～４区の調査範囲全体に広がりを見せている。第１面調査時に検出されたAs-Kk下の古代畠は、調査範囲のほぼ全面に広がり、万木沢川を挟んだ東側に位置する四戸遺跡でも同時期の古代畠が検出されている。転じて、西側の唐堀遺跡においても同様である。さらに、第２面調査時においては、古墳時代から古代の竪穴建物や掘立柱建物といった遺構を主とした集落跡が検出された。集落は２・３区にやや纏まりをみせる様な形成のあり方を呈し、主な遺構として竪穴建物13軒、掘立柱建物３棟、集石５基、溝１条からなる。東側の四戸遺跡での集落は古墳時代初頭から10世紀中葉頃まで、四戸古墳群を要しながら連綿と続くことが調査によって明らかとなっている。その西隣りに位置する本遺跡においては、四戸遺跡と時期を重ねながら、四戸遺跡以後となる11世紀代の集落の存在が明らかとなった。

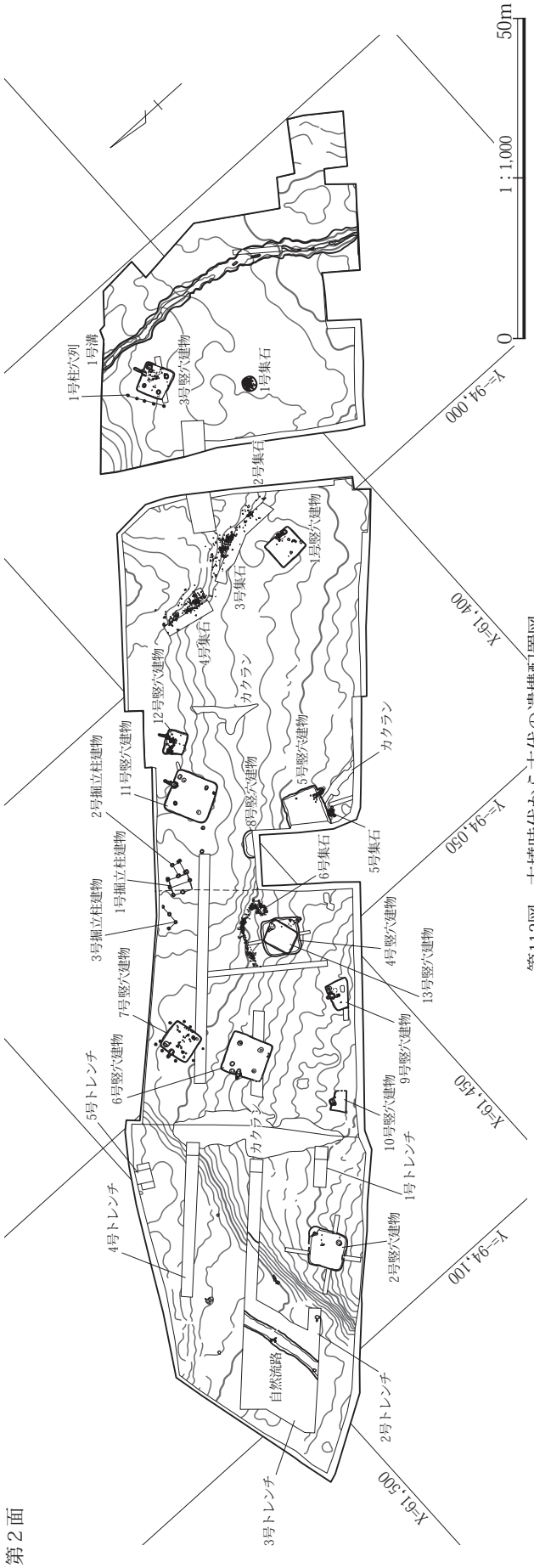
第２項　竪穴建物

本調査で検出された古墳時代から古代の竪穴建物は、第２面調査において１区に１軒、２区に５軒、３区に６軒、４区に１軒の計13軒の建物が検出された。これら竪穴建物に関して、第１面調査でのAs-Kk下畠調査の際にその存在が確認されていた建物が数棟ある。それは、As-Kkで埋没した畠の畝間が方形に途切れ、しかもその内側に方形なドーナツ状にAs-Kkが検出されるという共通性がある。その火山堆積物の堆積状況は、検出された竪穴建物の中でも最も新しい、依り火山堆積物に近い時期に廃絶された竪穴建物であることが解り、出土遺物もそのことを裏付けている。

以下、各建物ごとに記述する。（第40表　竪穴建物一覧を参照）

１号竪穴建物（第113・114図、第24・40表、PL．４・99）

位置：２区の南東隅付近に位置し、約６ｍほど離れた東側から北側にかけて２～４号集石が列状に並ぶ。最も



第112図　古墳時代から古代の遺構配置図

近い竪穴建物は、東側30mに３号竪穴建物、北西側30～35mに５・11・12号竪穴建物が点在する。

グリッド：１Ｌ・１Ｍ－12・13

座標値：X=61,413～61,418　Y=-93,996～-94,001

形状：長方形

規模：長軸5.03m　短軸4.46m　壁高20～34cm

長軸方向：Ｎ－０°－Ｅ　　床面積：20.20㎡

埋没土：１・２層とした黒褐色土を主体とし、建物の南側床面下に３層の硬化した褐灰色土を薄く分層できる。埋没土中にローム粒をあまり含まないことから、自然堆積の可能性が高い。

床面・壁：床面は基本層序Ⅵ層下位にあり、ほぼ平坦で、カマド前から中央および南側にかけて硬化する。建物半々の床面上には、扁平な中・大型礫が点在するように検出された。なお、壁高は20～34cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：東壁中央のやや南寄りに位置し、カマドの主軸方位はＮ－４°－Ｅを向く。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部が外側に僅かに突出し、規模は全長0.7m、幅1.25mを測る。袖は壁から40cmほど突き出るように残存し、両袖の先端には袖石２石ずつと、袖石に架かっていたであろう焚口部天井石が崩落した状態で検出された。焚き口部から燃焼部にかけての底面は、ほぼ平坦で建物床面と同じ。燃焼部奥は建物壁面となり、煙道部は急角度に立ち上がる。焚き口部の袖石の内幅は、55cmを測り、燃焼部の内壁は被熱して焼土化が著しい。なお、袖の構築土には、４層の黒褐色土と５層の暗赤褐色土を主に、６・７層の鈍い黄褐色土・暗褐色土が用いられている。

貯蔵穴：カマドの右袖脇となる南東隅付近に位置し、規模は長軸78cm、短軸64cm、深さ20cmを測り、楕円形を呈する。埋土は暗褐色土を主体とする。貯蔵穴内からは、３の土師器の甕が出土している。

床面下：明確な掘り込みは、確認されなかった。

遺物：出土遺物はあまり多くなく、土器はカマド周辺に散見できる。カマド左袖前で扁平な大型礫下となる床面上には、２の土師器甕の胴部上半、３の土師器甕が貯蔵穴内から出土し、他の土師器甕の底部や須恵器の杯片もカマド周囲の床近くから出土している。

出土遺物として、土器６点を図示した。須恵器の杯に１があり、他は土師器の甕である。この内の２・３の甕の口縁部から頸部は、コの字状に近い形状を呈している。

未掲載遺物には、同時期の土師器の甕片や須恵器の杯片が多くある。

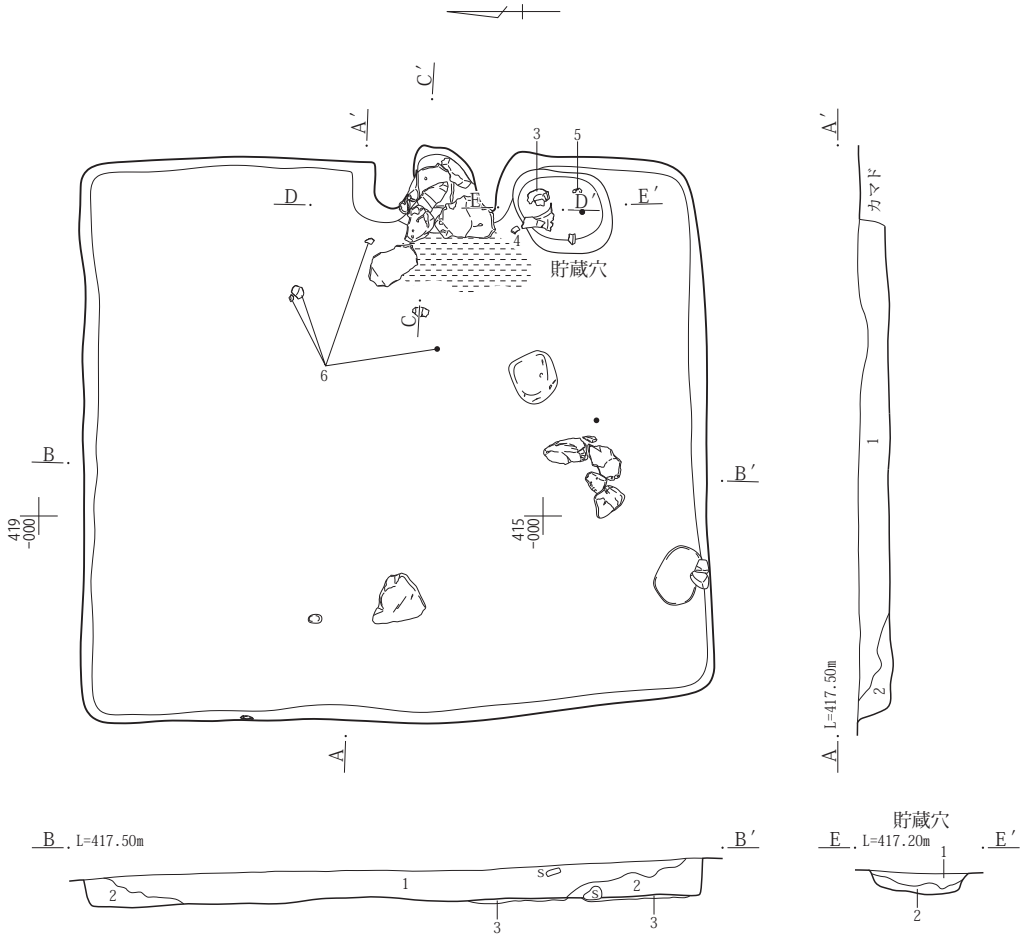
所見・時期：建物の時期は、出土土器から９世紀第２四半期と考えられる。

２号竪穴建物（第115・116図、第40表、PL.４・５・99）

本竪穴建物は、第１面調査でのAs-Kk下畠調査の際にその存在が確認されていた。それは、As-Kkで埋没した畠の畝間が方形に途切れる形をなし、しかもその内側に方形なドーナツ状にAs-Kkが検出されたことが物語っていた。こうした埋没事例は、県内各所で確認されており、Hr-FAやHr-FPで埋没した竪穴建物の例は周知されているところである。なお、84・85号土坑と重複する。

第24表　１号竪穴建物遺物観察表

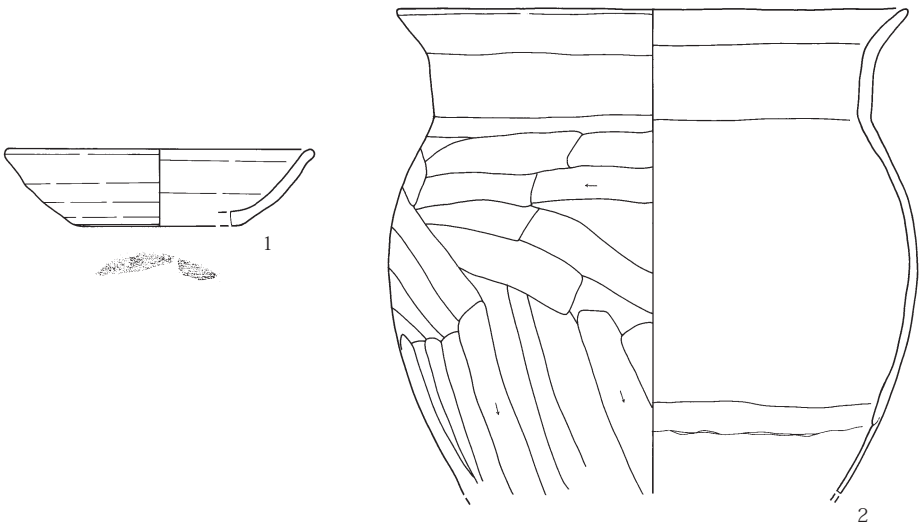
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第113図 PL.99	1	須恵器 坏	床面 口縁部～底部片	口 底	12.2 6.7	高	3.0	細砂粒/還元焔/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	器面摩滅
第113図 PL.99	2	土師器 甕	床面 口縁部～胴部上半片	口 胴	20.1 20.8			細砂粒/良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第114図 PL.99	3	土師器 甕	貯蔵穴 口縁部～胴部上半片	口 胴	20.1 22.3			細砂粒/良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第114図 PL.99	4	土師器 甕	貯蔵穴 胴部下位片					細砂粒/良好/にぶい黄褐	外面は斜め方向のヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第114図 PL.99	5	土師器 甕	貯蔵穴 底部～胴部下位	底	4.9× 5.1			細砂粒/良好/にぶい黄褐	底部平面は楕円形を呈す。底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	
第114図 PL.99	6	土師器 甕	床面 底部～胴部下位	底	3.9			細砂粒/良好/にぶい褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	



1号竪穴建物
1　黒褐色土　ローム粒、炭化物粒を僅かに含む。
2　黒褐色土　1層と近似するが、ローム粒や炭化物粒は含まない。
3　褐灰色土　褐灰色粘土を主体とした硬化土。

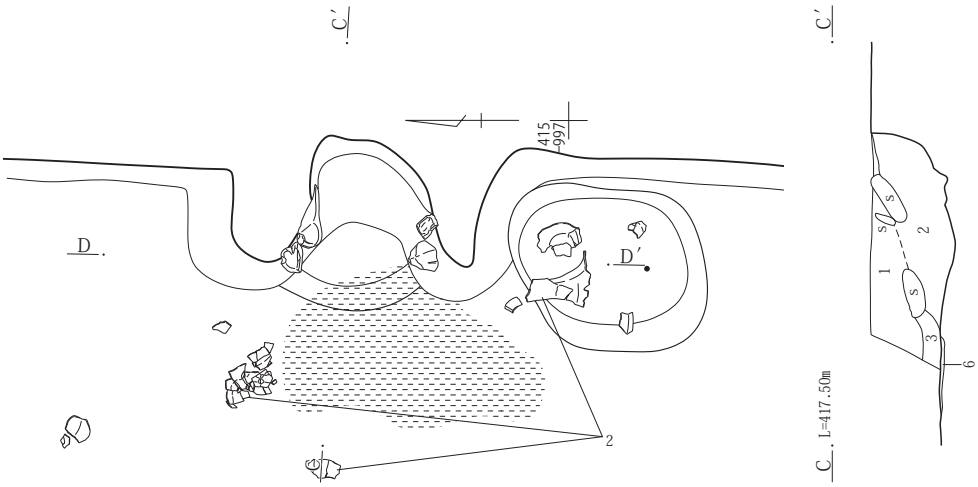
1号竪穴建物貯蔵穴
1　暗褐色土　ローム小ブロック、焼土粒を僅かに含む。
2　暗褐色土　ローム粒を僅かに含む。

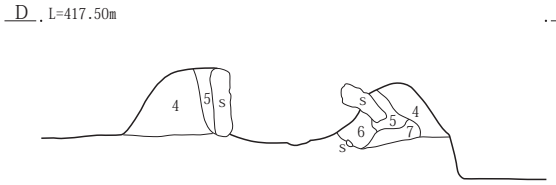
0　1：60　2m



0　1：3　10cm

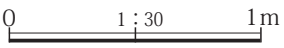
第113図　1号竪穴建物　平・断面図、出土遺物（1）

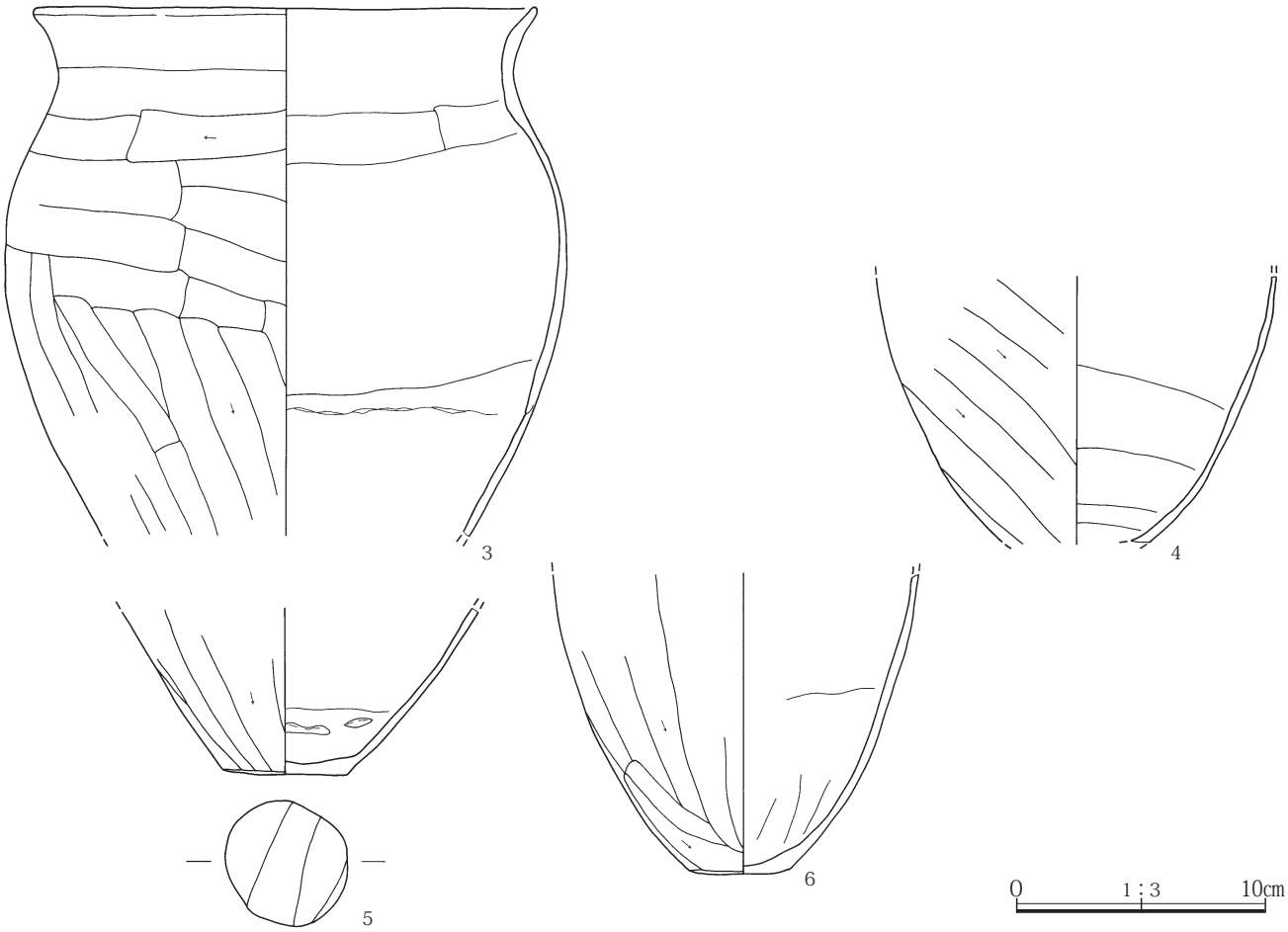




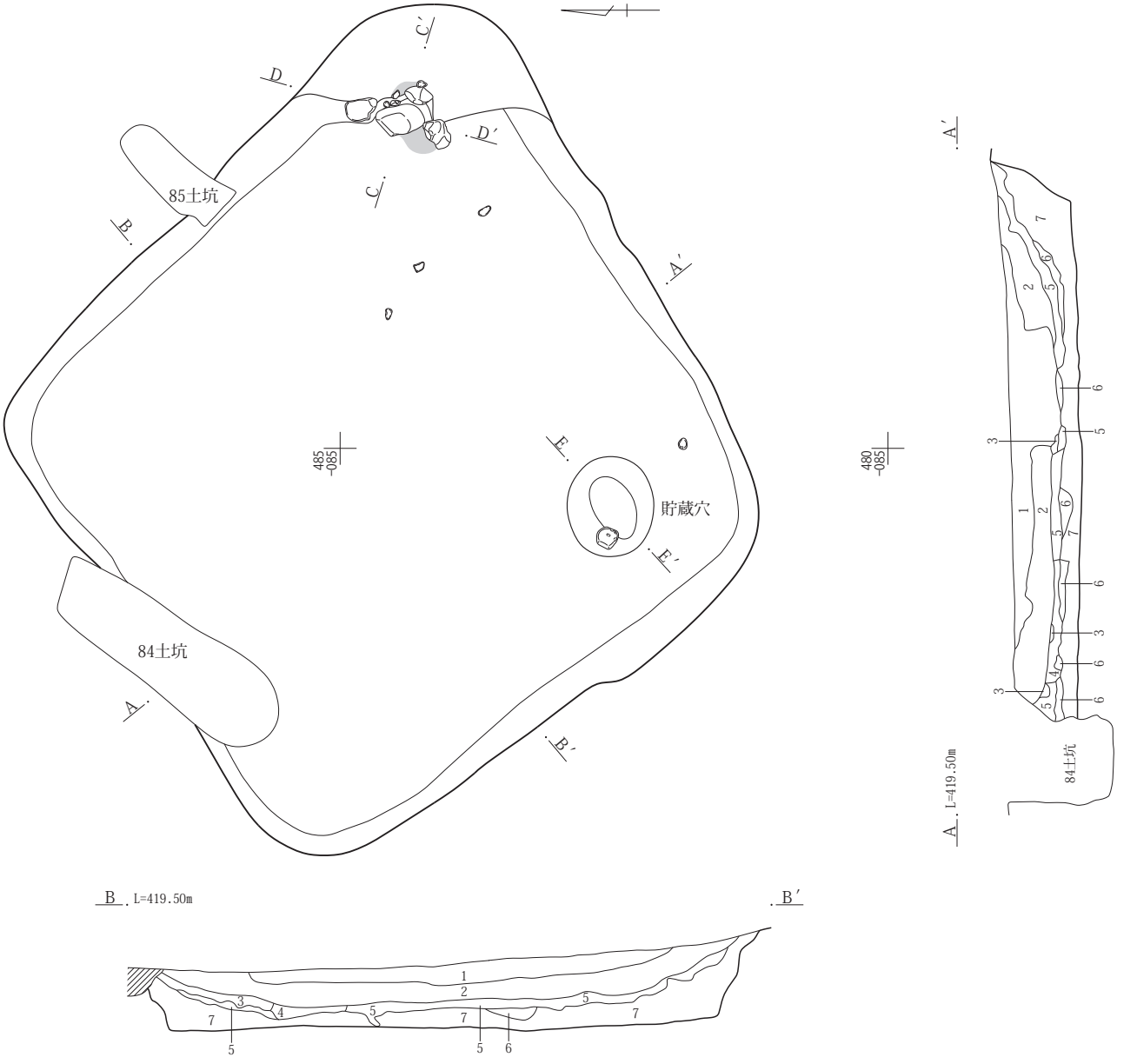
1号竪穴建物カマド

1　黒褐色土　竪穴建物の埋土１層に同じ。
2　暗褐色土　焼土粒、白色粘土粒を僅かに含む。
3　暗褐色土　炭化物を僅かに含む。
4　黒褐色土　１層と同じ。（カマド左袖の一部）
5　暗赤褐色土　焼土小ブロックを少量含む。
6　鈍い黄褐色土　ローム小ブロック、粘土粒、炭化物を少量含む。
7　暗褐色土　焼土粒を僅かに含む。



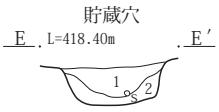


第114図　１号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物（２）



２号竪穴建物

1　黒褐色土　As-Kkを主体とする。（基本層序Ｄ地点Ⅲ層に同じ）
2　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。（基本層序Ｄ地点Ⅳ層に同じ）
3　黒褐色土　１層よりやや明るく、締まりあり。
4　黒褐色土　As-Bのブロックとその崩壊土が混土し、やや締まりあり。
5　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。（基本層序Ｄ地点Ⅴ層に同じ）
6　黒色土　炭化物粒と焼土粒が僅かに含まれ、やや柔らかく、弱い粘性あり。
7　黒褐色土　ローム粒や炭化物粒が含まれ、締まり弱い。

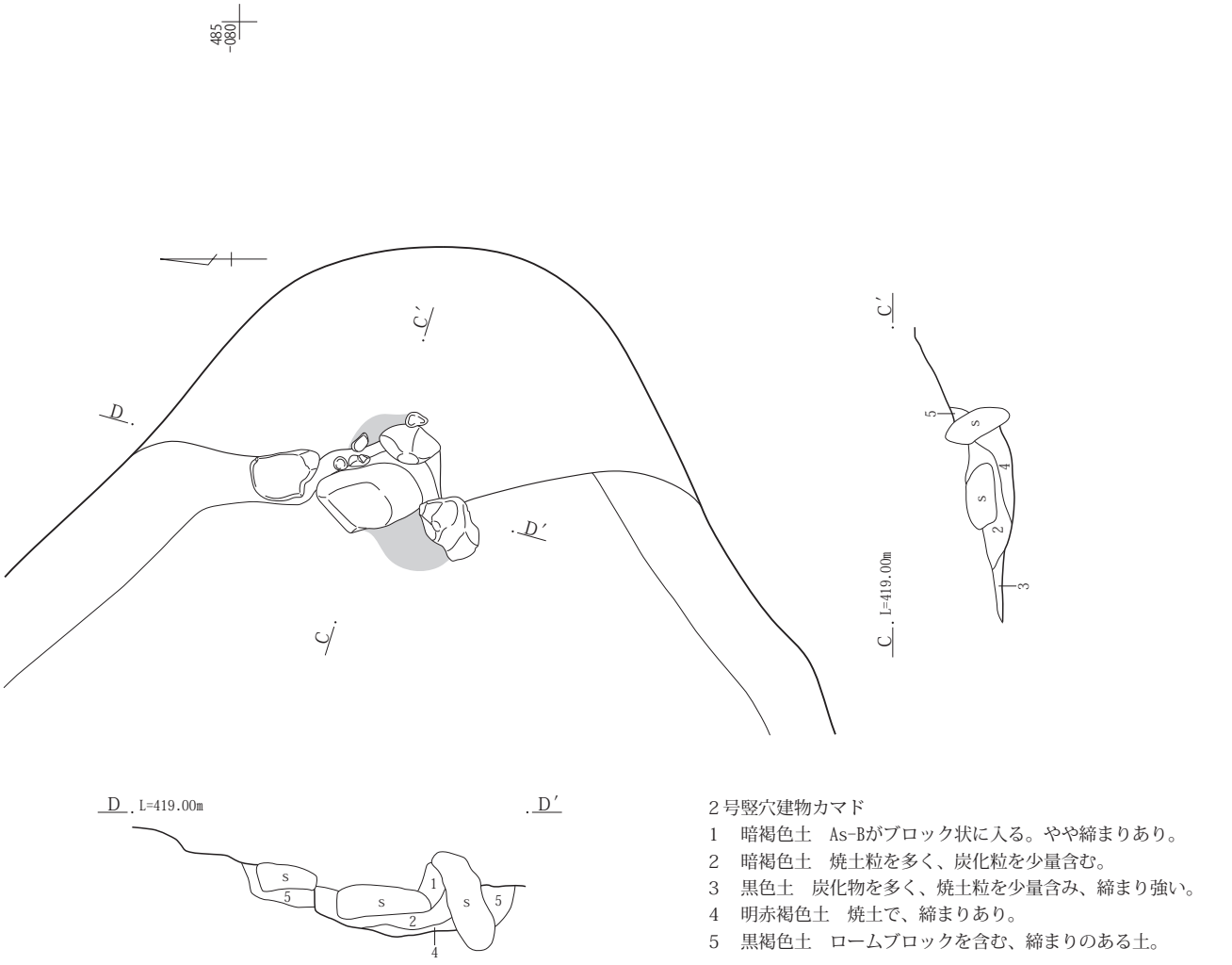


２号竪穴建物　貯蔵穴

1　黒色土　炭化粒を僅かに含み、粘性弱い。
2　黒褐色土　ローム微粒と、地山の暗褐色土を僅かに含み、やや粘質。

0　1：60　2m

第115図　２号竪穴建物　平・断面図



２号竪穴建物カマド
1　暗褐色土　As-Bがブロック状に入る。やや締まりあり。
2　暗褐色土　焼土粒を多く、炭化粒を少量含む。
3　黒色土　炭化物を多く、焼土粒を少量含み、締まり強い。
4　明赤褐色土　焼土で、締まりあり。
5　黒褐色土　ロームブロックを含む、締まりのある土。

0　1：30　1m

第116図　２号竪穴建物　カマド平・断面図

位置：４区の南西壁中央付近に位置し、第２面調査確認面が一段低くなる段差際近くにある。本竪穴建物より西側は、唐堀Ｂ遺跡までの間に遺構は検出されていない。一方、本竪穴建物の南東側20mほどには10号竪穴建物、25mほど東側には６号竪穴建物や７号竪穴建物が点在する。

グリッド：２Ｃ・２Ｄ－26・27

座標値：X=61,481～61,488　Y=-94,980～94,088

重複：本建物の北西壁中央に重複する84号土坑および北東壁中央に重複する85号土坑との新旧は、遺構確認により明らかに本建物の方が旧く、土層断面の観察からも旧いことが確認できている。

形状：長方形

規模：長軸6.03m　短軸5.69m　壁高43～80㎝

長軸方向：Ｎ－56°－Ｅ　　床面積：(22.62)㎡

埋没土：１層とした黒褐色土、２層および５層のAs-KkとAs-Bの火山堆積物が一次堆積し、その下位に６層の黒色土が薄く部分的に、そして７層の黒褐色土が主となる状況が確認できた。この埋没土中に２種類の火山堆積物が一次堆積していることから、本竪穴建物は自然堆積と考えられ、後述の4号竪穴建物と同様な廃絶後の過程をたどったものと推測できる。

床面・壁：床面は基本層序Ⅶ層下位にあり、概ね平坦であるが、重複する土坑により一部が壊されている。壁高は43～80㎝を測り、やや傾斜に立ち上がる。

カマド：東隅に位置するが、崩落した石を確認するも残存状況は悪い。カマドの主軸方位はＮ－94°－Ｅを向き、燃焼部は壁の内側にあるものの、煙道部の詳細は不明。規模は全長0.65m、幅(0.48)mを測る。袖も詳細は不明であるが、右袖の端部に袖石が残存する。燃焼部は僅かに窪み、底面には焼土を確認した。

貯蔵穴：カマドから離れた建物南隅付近に位置し、規模は長軸91㎝、短軸79㎝、深さ34㎝を測り、円形を呈する。埋土は黒色土と黒褐色土に分層できる。貯蔵穴内からの出土遺物はない。

遺物：出土した遺物は極めて少なく、埋土中から土師器と須恵器の杯や甕の小・細片がある。

所見・時期：出土土器からの建物の時期は不明であるが、埋没土の状況からすると４号竪穴建物と概ね同様な時期と考えられる。

３号竪穴建物(第117・118図、第25・40表、PL.５・６・99)

本竪穴建物は、第２面調査の遺構確認時に検出された最も東側に位置し、カマド煙道部が良好に残存。また、竪穴建物の外側に付属構造と考えられる柱穴列を有する建物で、７号竪穴建物と同様な構造の建物である。なお、28号土坑と重複する。

位置：１区の北側に位置し、調査範囲の最も東側にある。南西側10mには１号集石がある。

グリッド：１Ｅ・１Ｆ－12・13

座標値：X=61,411～61,417　Y=-93,962～93,969

重複：本建物の南東壁中央から西隅にかけて斜めに重複する28号土坑との新旧は、遺構確認により明らかに本建物の方が旧く、土層断面の観察からも旧いことが確認できている。

形状：正方形

規模：長軸4.89m　短軸4.86m　壁高40～80㎝

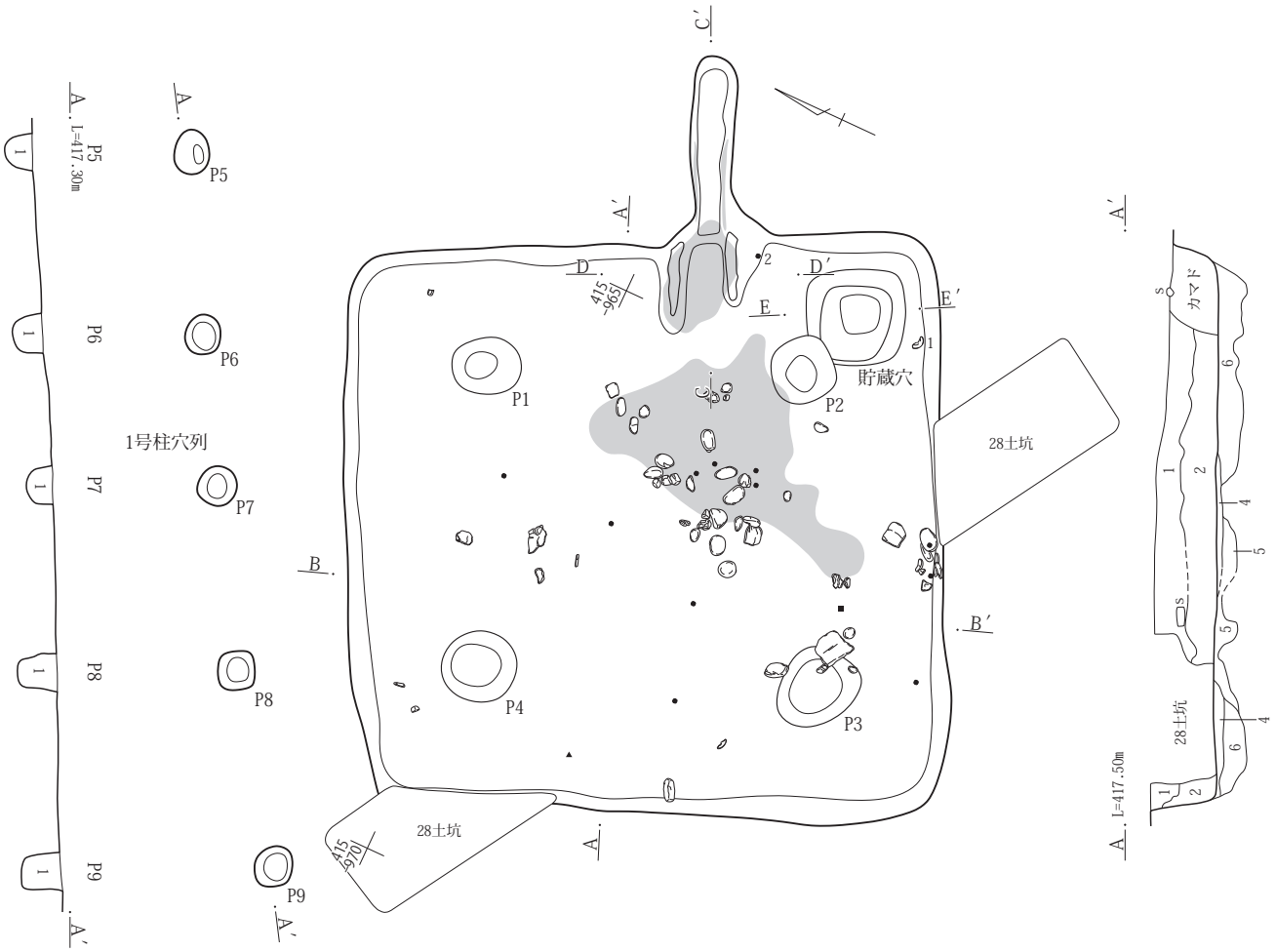
長軸方向：Ｎ－25°－Ｗ　　床面積：20.02㎡

埋没土：１・２層の灰黄褐色土を主とし、３層の暗褐色土とに分層できる。なお、２層中には多くの中・大型礫が含まれることから、人為的堆積の可能性が高い。

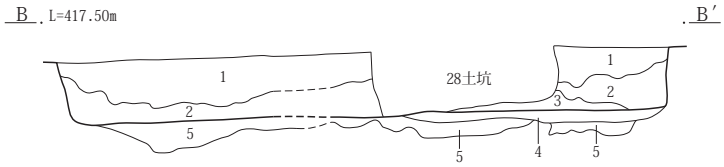
床面・壁：床面は基本層序Ａ地点２層となるローム土中にあり、ほぼ平坦で、カマド前から建物中央にかけて硬化し、床面上に焼土が薄く散在する。壁高は40～86㎝を測り、やや垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：北東壁中央の東寄りに位置し、主軸方位はＮ－65°－Ｅを向く。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部が外側に長く突出する。残存する規模は、全長2.14m、幅0.75mを測る。右袖は壁から52㎝、左袖は60㎝ほど突き出るように残存し、袖先端には袖石をもたない。焚口部から燃焼部の底面にかけては建物床面とほぼ平坦で、燃焼部奥は壁面となり、奥壁の一段高い位置から煙道が長く延びる。また、煙道上部には天井が残存し、煙道部底面は水平に進んだのちに直立ぎみに立ち上がる。なお、袖の構築土には、９層の明黄褐色土を内側に、７層の暗褐色土と８層の灰黄褐色土が用いられている。

貯蔵穴：カマドの右側となる東隅に位置する。上面は一辺80㎝ほどの正方形を呈し、底面は狭く、深さ63㎝を測る。遺物の出土はない。



３号竪穴建物外側１号柱穴列
Ｐ１～Ｐ５
1　黒褐色土　微細なローム粒を僅かに含む。

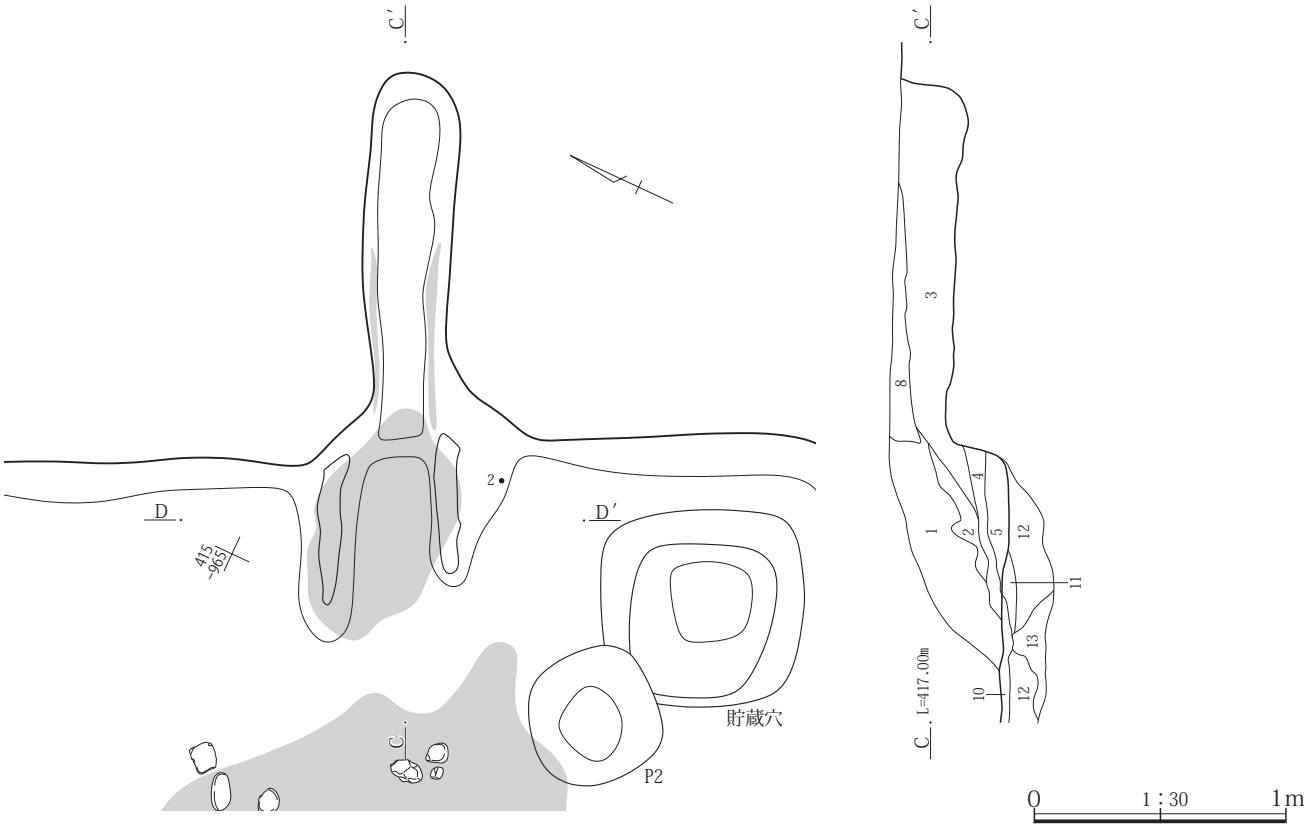


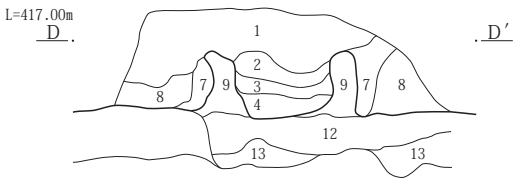
３号竪穴建物
1　灰黄褐色土　ローム粒と炭化物を僅かに含む。
2　灰黄褐色土　１層と近似するが、ローム粒・炭化物は少ない。
3　暗褐色土　ローム粒と炭化物を少量含む。
4　灰黄褐色土　固く締まり、上面が床面となる。
5　褐灰色土　ロームブロックをやや多く含む。
6　鈍い黄褐色土　ロームブロックを多量に含む。

３号竪穴建物貯蔵穴
1　暗褐色土　微細なローム粒を僅かに含む。
2　鈍い黄褐色土　小粒のローム粒を僅かに含む。
3　鈍い黄褐色土　ロームブロックを含む。

0　1：60　2m

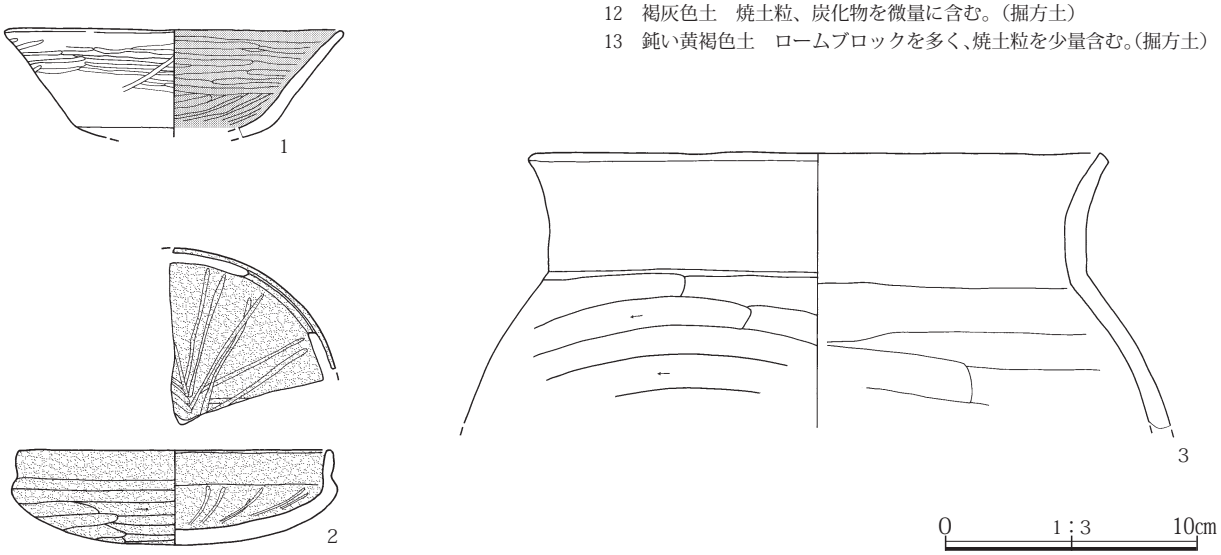
第117図　３号竪穴建物　平・断面図





３号竪穴建物カマド

1　灰黄褐色土　竪穴建物１層に同じ。
2　鈍い黄橙色土　ローム主体で、焼土、灰黄褐色土の混土。
3　鈍い黄褐色土　燃焼部側ほど大粒の焼土粒を含み、小粒のローム粒を少量含む。
4　赤褐色土　小粒の焼土粒を主体とし、ローム粒を含む。
5　褐灰色土　粘土を主体にローム粒を含む。
6　鈍い黄褐色土　ロームブロックを主に、焼土粒を含み、硬く締まる。（煙道部天井土）
7　暗褐色土　ローム粒を僅かに含む。（袖部構築土）
8　灰黄褐色土　ロームブロックを斑状に含む。（袖部構築土）
9　明黄褐色土　ロームを主体とする。（袖部構築土）
10　鈍い赤褐色土　やや大粒の焼土粒を少量含む。（掘方土）
11　灰黄褐色土　灰色粘土粒を主体にローム粒を含む。（掘方土）
12　褐灰色土　焼土粒、炭化物を微量に含む。（掘方土）
13　鈍い黄褐色土　ロームブロックを多く、焼土粒を少量含む。（掘方土）



第118図　３号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物

第25表　３号竪穴建物遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第118図 PL.99	1	土師器 高杯	埋土 杯部片	口	13.2			細砂粒/良好/にぶい黄橙	杯部内面は黒色処理。口縁部上半は横方向のヘラミガキ、下半から底部は器面摩滅のため不明。内面は底部が斜め、口縁部が横方向のヘラミガキ。	
				稜	7.8					
第118図 PL.99	2	土師器 杯(身模倣)	床下 1/4	口	12.2	高	3.7	細砂粒/良好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部中央から体部に放射状ヘラミガキ。口唇端部は内傾する平坦面を作る。内外面とも燻し焼成か、状態不鮮明。	
				稜	12.8					
第118図 PL.99	3	土師器 甕	埋土 口縁部～胴部上位片	口	22.4			細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

柱穴：主柱穴と考えられる、対角線上に位置するＰ１～４の４基を検出した。柱穴上面は円形ないし楕円形を呈し、長軸70cm、短軸45cm、深さ52～64cmを測る。

床面下：床面下の掘り込みを確認した。床面下には４層とした灰黄褐色土が薄く硬く締まり、上面が床面となる。また、５層の褐灰色土および６層の鈍い黄褐色土が床下土となり、その底面は全体に凹凸をもつ。遺物の出土が僅かにある。

付属構造：竪穴部の北西壁の外側約1.0mほどの位置に、壁と並行してＰ５～９の５基の柱穴が直線状に並ぶ。各柱穴は径30cmほどの円形で、深さ20～30cmを測り、黒褐色土を埋土とする。なお、柱穴列の両端の柱穴Ｐ５とＰ９の位置は竪穴部の外側にあり(但し、Ｐ５の北東端部はカマドの煙道先端部よりやや短い位置)、柱穴列の中央となる柱穴Ｐ７の位置は竪穴部の中央付近に並行し、柱穴列のＰ６とＰ８の位置は竪穴部主柱穴Ｐ１・２とＰ３・４の併行した位置にそれぞれある。依って、この位置関係から竪穴部に付属する建物構造の一部と考えた。

遺物：埋土中からの遺物の出土はあるものの、床直遺物は少なく、カマド内からの出土もない。２の杯が床下土から出土している。

出土遺物として、土器３点を図示した。１・２は土師器の杯であり、２は身模倣で内面に放射状のヘラミガキきをもつ。１の内面は黒色処理が施され、口縁部に横位ヘラミガキがみられる。３は土師器の甕である。

未掲載遺物には、同時期の土師器の杯・甕片が中量ある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から６世紀代と考えられる。

４号竪穴建物(第119・120図、第26・40表、PL.６・99)

本竪穴建物は、第１面調査でのAs-Kk下畠調査の際にその存在が確認されていた。それは、As-Kkで埋没した畠の畝間が方形に途切れる形をなし、その内側に方形なドーナツ状にAs-Kkが検出されたことで物語っていた。同様な事例として、先述の２号竪穴建物がある。また、竪穴建物の北東側から北側に、列状に石が集積されている。なお、13号竪穴建物と重複する。

位置：３区の南東寄りに位置し、周囲には西側7.5mに９号竪穴建物、北西側13mに６号竪穴建物、北側17mに７号竪穴建物、東側19mに11号竪穴建物、南東14mに５号竪穴建物、そして北東側13mほどに1・２号掘立柱建物がある。

グリッド：１Ｕ・１Ｖ－20～22

座標値：X=61,453～61,460　Y=-94,040～94,047

重複：本竪穴建物の床面下に確認された13号竪穴建物との新旧は、本建物の埋没土にAs-KkとAs-Bが一次堆積している状態等から、本建物の方が新しい。

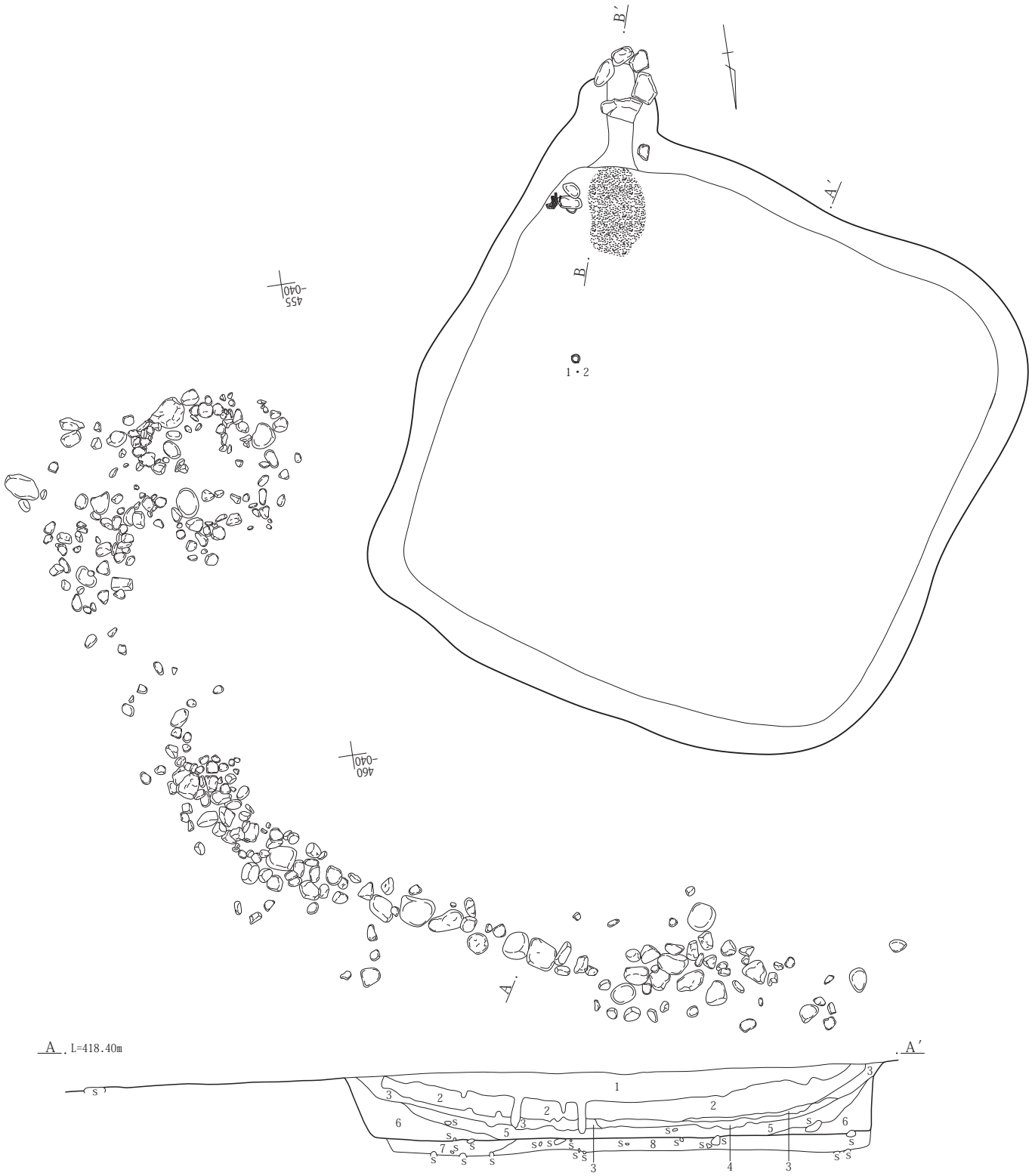
形状：正方形

規模：長軸5.88m　短軸5.82m　壁高55～85cm

長軸方向：Ｎ－58°－Ｗ　　床面積：(24.90)㎡

埋没土：１層とした黒褐色土、２層および４層はAs-Kk・As-Bの火山堆積物が一次堆積し、その下位に５層の黒色土が、そして６層の黒褐色土が壁際に三角堆積している状況が確認できた。先述の２号竪穴建物と同様に、埋没土中に一次堆積した火山堆積物の状況からして、本竪穴建物の廃絶後は自然堆積と考えられる。

床面・壁：床面は基本層序Ｄ地点Ⅶ層ないしⅧ層中にあり、概ね平坦。北東壁の壁面下位には、自然礫層面がみられる。壁高は55～85cmを測り、やや直立ぎみに立ち上がる。

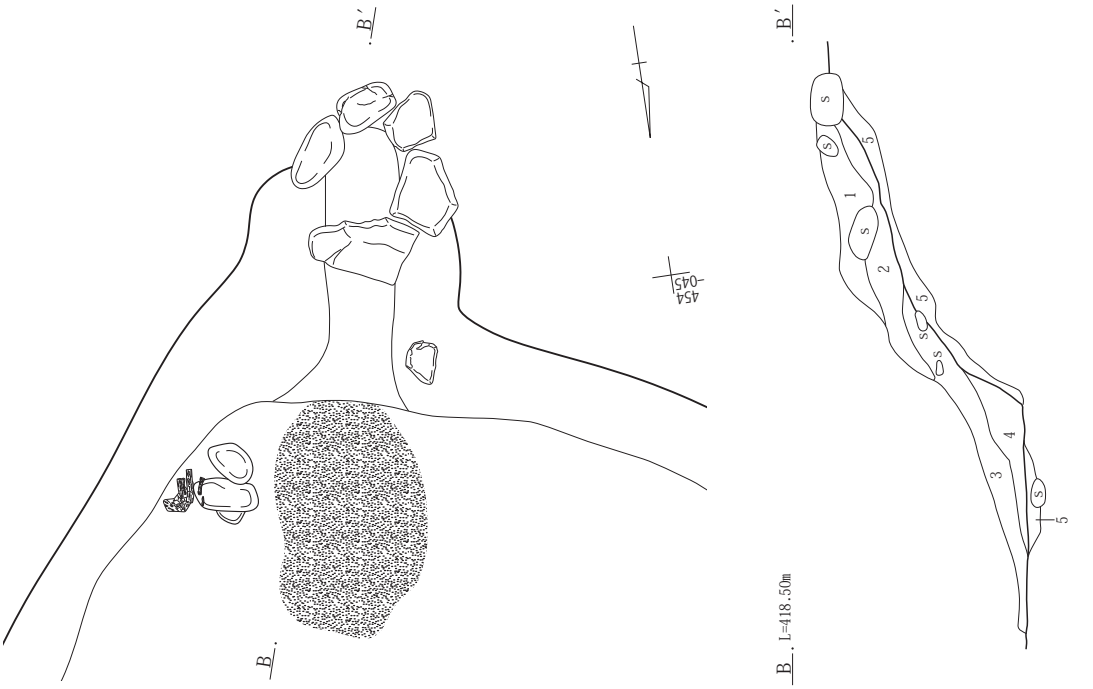


４号竪穴建物

1　黒褐色土　As-Kkを多量に混在する。（基本層序Ｄ地点Ⅲ層に同じ）
2　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。（基本層序Ｄ地点Ⅳ層に同じ）
3　黒褐色土　As-Bが多く含まれ、やや粘性あり。
4　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。（基本層序Ｄ地点Ⅴ層に同じ）
5　黒色土　ローム粒と焼土粒を僅かに含み、締まりと粘性あり。
6　黒褐色土　６層よりやや明るく、粘性あり。下面が４号竪穴建物の床面となる。
7　黒褐色土　ローム小ブロックを少量含み、粘質で締まりが強い。（13号竪穴建物の埋没土）
8　黒褐色土　ローム・焼土の小ブロックや炭化物を多く含み、かなり粘質。（13号竪穴建物の埋没土）

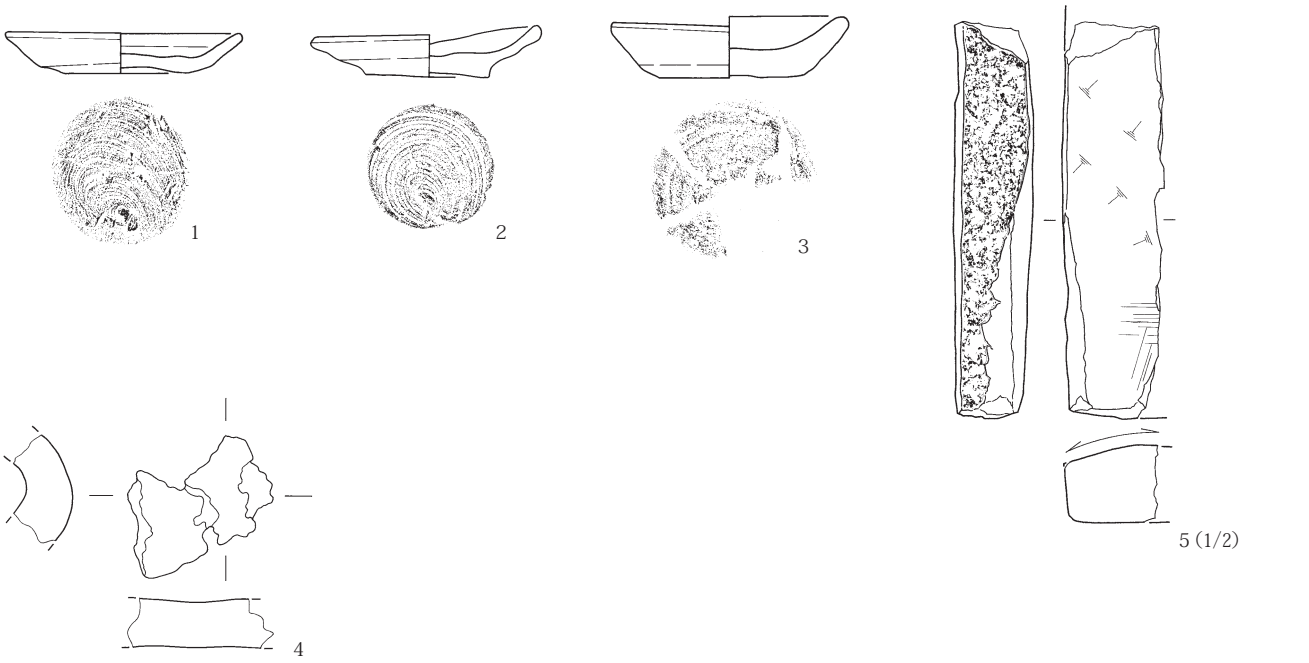
0　1：60　2m

第119図　４号竪穴建物　平・断面図



４号竪穴建物カマド
1　黒褐色土　As-Bを大量に含み、粘性あり。
2　黒色土　シルト粒を少し含み、粘性あり。
3　黒色土　焼土粒を少し含み、粘性あり。
4　灰黄褐色土　シルト質粘土を主体とし、焼土粒を若干含む。粘質で硬く締まる。
5　黒褐色土　混入物なく、粘質で締まりが強い。（掘方土）

0　1：30　1m



0　1：2　4cm
0　1：3　10cm

第120図　４号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物

第26表　４号竪穴建物遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第120図 PL.99	1	須恵器 皿	床直 完形	口 9.8 底 4.8	高	1.6		細砂粒/酸化焔/にぶい黄褐	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第120図 PL.99	2	須恵器 皿	床直 ほぼ完形	口 9.0 底 4.8	高	2.0		細砂粒/酸化焔/にぶい橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第120図 PL.99	3	須恵器 皿	埋土 3/4	口 8.9 底 5.7	高	2.4		細砂粒/酸化焔/にぶい橙	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整か。	
第120図 PL.99	4	土製品 鞴羽口	埋土 破片					細砂粒/良好/にぶい赤褐	外面はナデ整形か。先端付近はやや還元。残存半位での径は５～６㎝を測る。	
第120図 PL.99	5	石製品 砥石	埋土 一部欠	長 (10.5) 幅 2.7	厚	2.1 重 95.4		変質デイサイト/ /	背面側のみ砥面として使用、著しく研ぎ減る。左辺・裏面は切断後、粗く磨き整形。砥面は被熱して剥落。	

カマド：南隅に位置し、カマドの主軸方位はＮ－16°－Ｗを向く。燃焼部は南隅の壁部分にあり、煙道部が外側に突出し、規模は全長(1.30)ｍ、幅(0.70)ｍほどを測るが袖等は残存せず、不明な点が多い。焚口部付近には焼土が散らばり、焚口部から燃焼部の底面は建物床面と同じ高さにあり、煙道部は斜めに立ち上がる。煙道部は石組となり、天井石も１石残存する。

不随施設：竪穴建物本体の北東側から北側に、中・大型礫が列状に集積された状態で、本建物の北東壁の外側に建物を取り巻くように弧状に延びる。その東先端には、円形となる集石部が付く。建物の壁からの距離は2.0～2.4ｍほどを測り、弧は建物中央を起点に半径5.5ｍほどを測る。この集石列は、上面となる第１面調査時には確認されておらず、また地山下層からの礫層の盛り上がりとも異なることから、第２面の古墳時代から古代に伴う人為的な所作による遺構である。なおかつ、竪穴建物との位置的な関係から、本竪穴建物に付随する可能性が極めて高い。

遺物：出土した遺物量は少ない。カマド前からやや離れた床面直上に、完形となる１・２の須恵器の皿が重なって出土している。また、埋土中ではあるが、羽口片が出土している。

出土遺物として、土器３点と羽口１点、砥石１点を図示した。１～３は須恵器の皿で、４は羽口の先端部片である。５は変質デイサイト製の砥石で、背面が砥面となり、著しく研ぎ減る。

未掲載遺物には、同時期の細片が少量ある。

所見・時期：建物の時期は、埋没土の状況および出土土器から11世紀と考えられる。

５号竪穴建物（第121～124図、第27・40表、PL.７・100）

建物西側となる西壁は､農道のため調査できなかった。また、南壁外側には５号集石が接するように位置し、本竪穴建物に付随する可能性もある。

位置：２区の西側に位置し、北側に８号竪穴建物が近接し、北西側に４・13号竪穴建物が、北東側に11号竪穴建物や12号竪穴建物がある。

グリッド：１Ｒ～１Ｔ－17～19

座標値：X=61,437～61,445　Y=-94,028～94,036

形状：不明

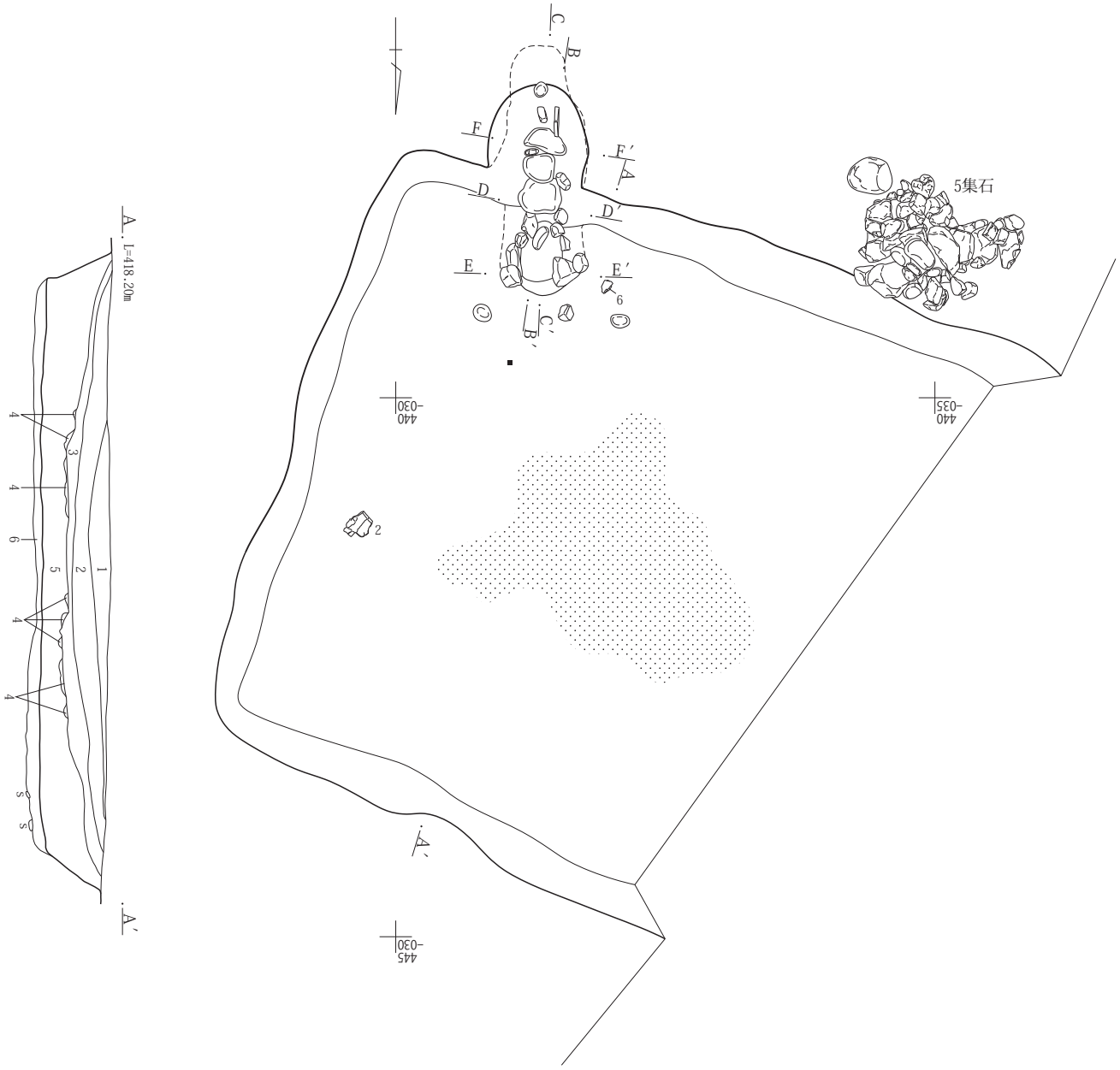
規模：長軸(6.63)ｍ　短軸6.44ｍ　壁高59～73㎝

長軸方向：Ｎ－71°－Ｗ　　床面積：(26.65)㎡

埋没土：１層とした黒褐色土、２層および４層はAs-Kk・As-Bの火山堆積物が一次堆積し、その下位に５層の黒色土が堆積状況を確認した。先述の２・４号竪穴建物と同様に、埋没土中に一次堆積した火山堆積物の状況からして、本竪穴建物の廃絶後は自然堆積と考えられる。

床面・壁：床面は基本層序Ｄ地点Ⅶ層ないしⅧ層中にあり、概ね平坦。壁高は59～73㎝を測り、やや斜位に立ち上がる。なお、北隅から北西壁の詳細は不明。

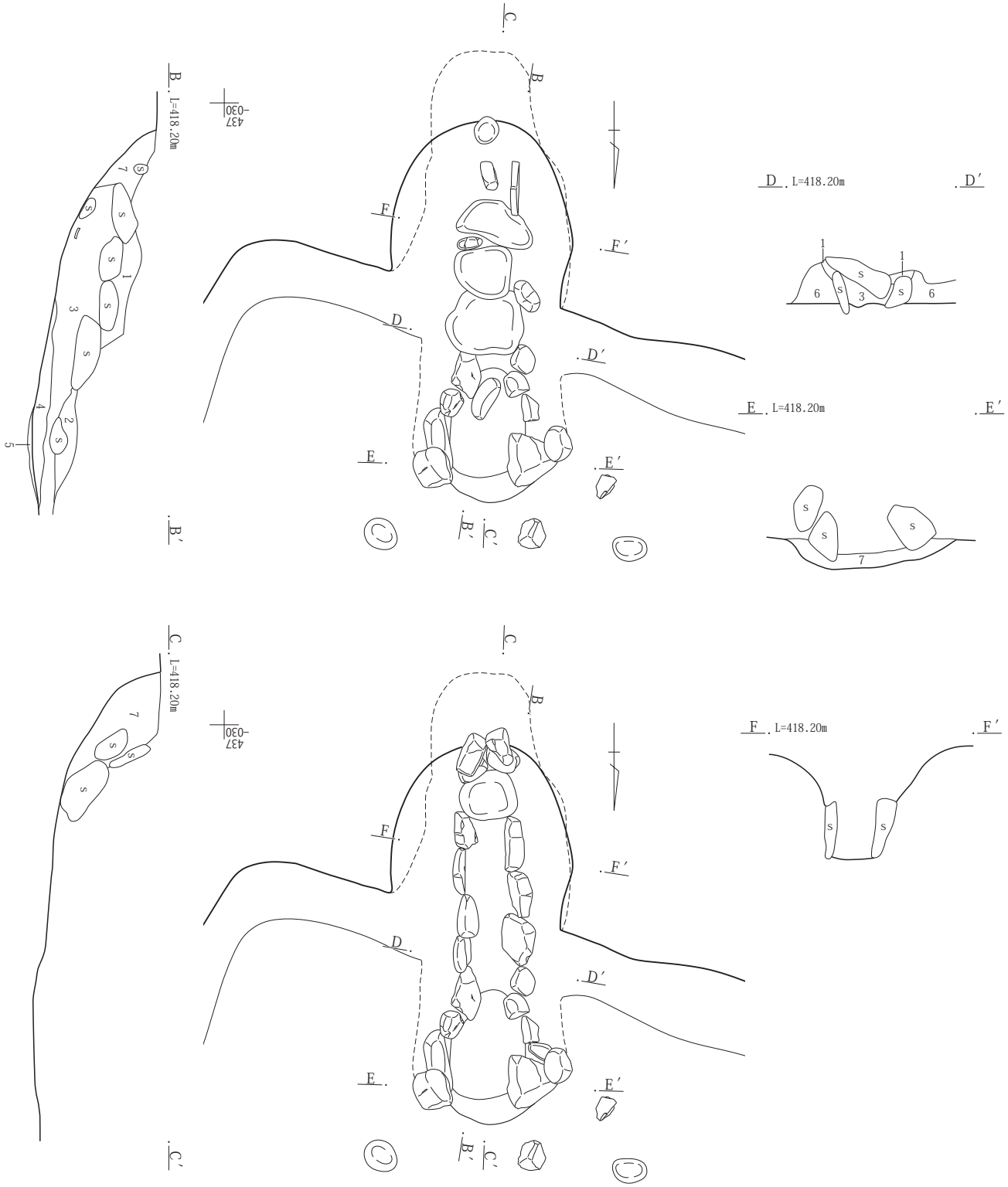
カマド：南隅の西脇となる南西壁のかなり東寄りに位置し、カマドの主軸方位はＮ－３°－Ｗを向く。規模は全長2.00ｍ、幅0.85ｍを測り、残存状態の良好な石組カマド。カマド全体を石組で構築し、煙道部には天井石も残存するが、焚口部天井石は検出されていない。焚口部となる両袖の端部は袖石によるが、右袖の石はやや内側にずれ落ちている。袖の長さは壁から65～70㎝が想定され、焚口部から燃焼部にかけては床面より若干低くなる。燃焼部の両壁にも片側３～４石が用



５号竪穴建物
1　黒褐色土　As-Kkを多量に混在する。（基本層序Ｄ地点Ⅲ層に同じ）
2　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。（基本層序Ｄ地点Ⅳ層に同じ）
3　黒褐色土　As-Bが多く含まれ、やや粘性あり。
4　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。（基本層序Ｄ地点Ⅴ層に同じ）
5　黒色土　ローム粒と焼土粒を僅かに含み、粘性が強く締まりあり。
6　黒褐色土　ロームブロック粒を少し含み、非常に固く締まる。（床下土）

0　1：60　2m

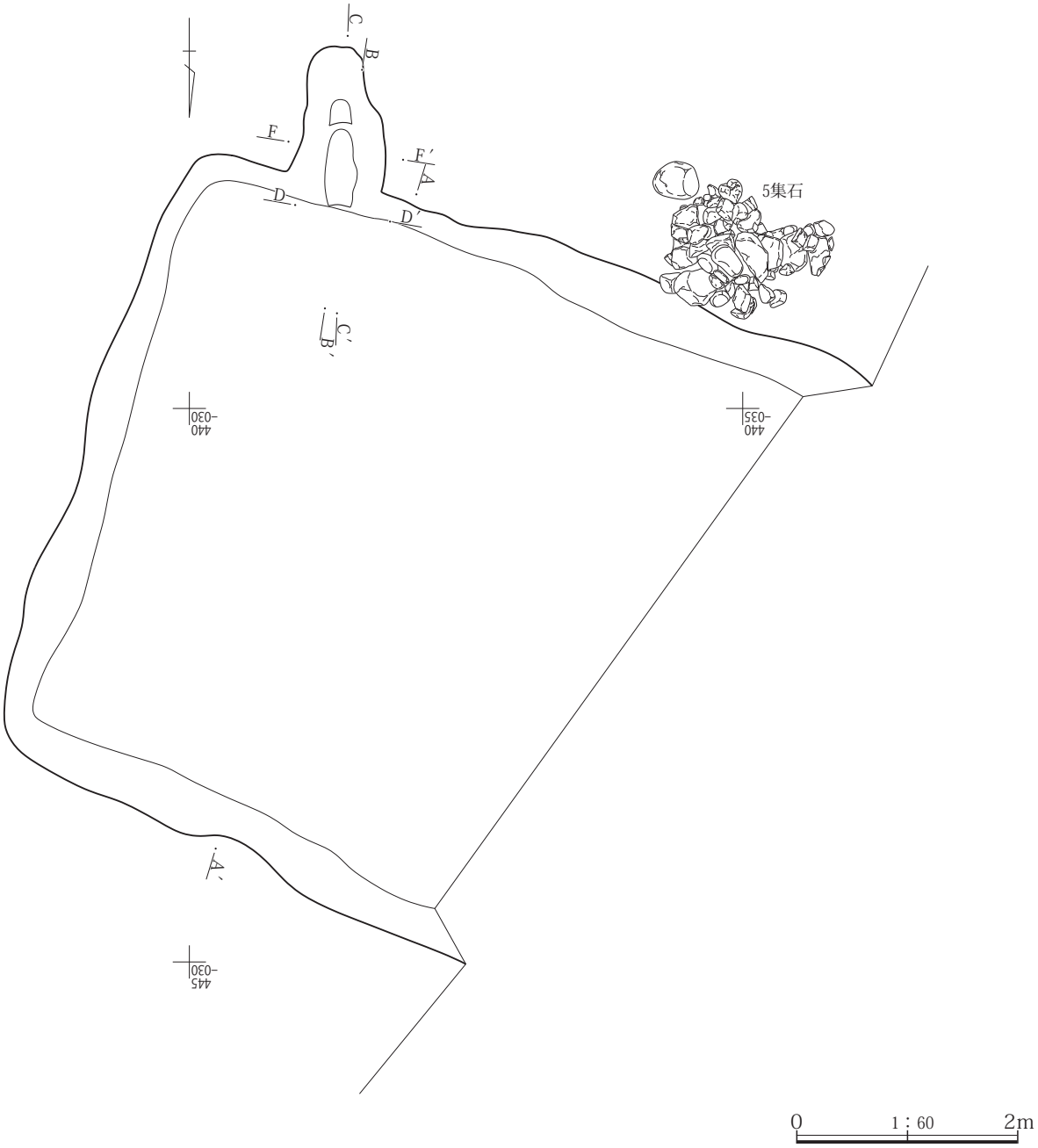
第121図　５号竪穴建物　平・断面図



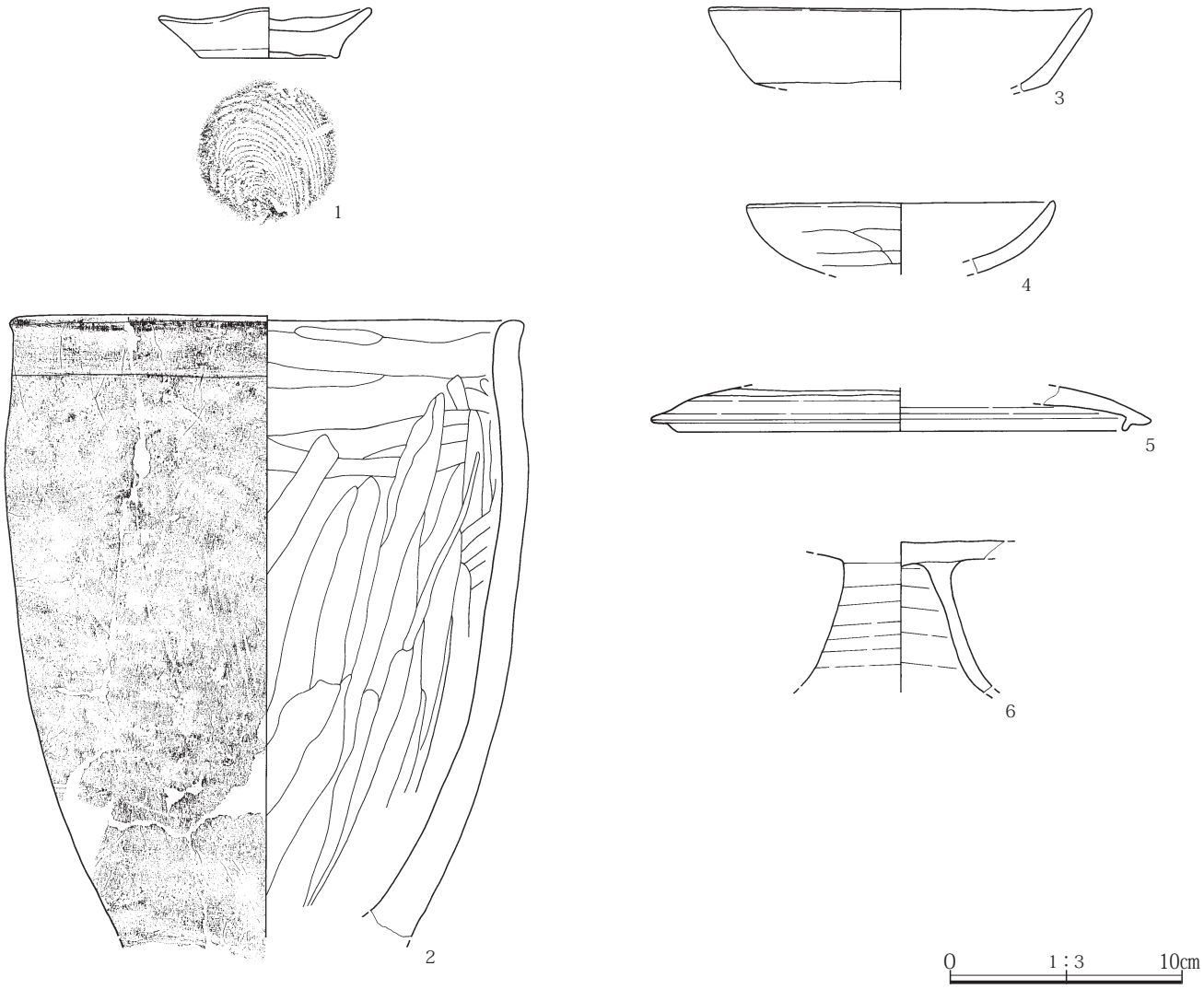
5号竪穴建物カマド煙道
1　灰褐色粘土　粘質土を主としたカマド構築土。
2　黒褐色土　焼土粒を大量に含む。
3　黒褐色土　焼土粒と灰褐色粘土粒を含み、煙道部ほど締まり弱い。
4　灰黄褐色土　焼土ブロックと灰褐色粘土小ブロックを主とし､粘質で締まりあり。
5　赤褐色土　焼土を主とし、締まり弱い。
6　黒色土　堆積物粘性有。
7　黒褐色土　灰褐色粘土小ブロックを多く含み、硬く締まる。(煙道部裏込め土)

0　1：30　1m

第122図　５号竪穴建物　カマド平・断面図



第123図　５号竪穴建物　床面下平面図



第124図　５号竪穴建物　出土遺物

第27表　５号竪穴建物遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第124図 PL.100	1	須恵器 皿	埋土 ほぼ完形	口 底	9.1 5.9	高	2.2	細砂粒・粗砂粒/酸化焔/明黄褐	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第124図 PL.100	2	土師器 鉢	床直 口縁部～体部下位片	口 高	21.9 26.6			細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り後ヘラナデ、器面摩滅のため単位不明。内面は口唇部が横ナデ、口縁部は横方向、体部は縦方向のヘラナデ。	
第124図 PL.100	3	土師器 杯	埋土 口縁部～底部片	口 底	16.4 12.5			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削りか、器面剥落のため不鮮明。	
第124図	4	土師器 杯	埋土 口縁部～体部片	口	13.1			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第124図	5	須恵器 杯蓋	埋土 口縁部片	口 カ	21.4 19.0			細砂粒/還元焔/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り。内面にカエリが設けられている。	
第124図 PL.100	6	須恵器 高盤	埋土 脚部～盤部底部片					細砂粒/還元焔/灰	盤部と脚部は貼付。盤部・脚部ともロクロ整形、回転は右回り。	

いられ、石の壁面は被熱している。煙道部の壁面および天井にも石が用いられ、その長さは1.20mを測る。煙道部天井石は大型扁平礫３石を用い、燃焼部寄りから順に寄せ掛ける様に配石し、その上に粘質土を主とした灰褐色土を載せている。煙道部壁面は片側４石を横長に用い、先端となる奥壁に２石を立て掛ける。煙道部底面は燃焼部から斜めに長く立ち上がり、先端の奥壁手前から石敷き様となる。

床面下：床面下に５～10cm前後の掘り込みをもち、底面は北半がやや深く若干の凹凸をもつ。また、底面には礫層床の一部が露出している。床面下の埋土は、６層とした黒褐色土で非常に固く締まり、上面は硬い床面を構築している。

不随施設：本建物の南西壁西寄りの外側に、５号集石とした集積が接する。建物の壁からの距離は2.0～2.4mほどを測り、弧は建物中央を起点に半径5.5mほどを測る。この集石列は、上面となる第１面調査時には確認されておらず、また地山下層からの礫層の盛り上がりとも異なることから、第２面の古墳時代から古代に伴う人為的な所作による遺構である。なおかつ、竪穴た獲物との位置的な関係から、本竪穴建物に付随する可能性が極めて高い。

遺物：出土した遺物量は中量ほどと多くはないが、そのほとんどは埋土中からである。そのため、異なる時期の土器の混入も多い。唯一、床面直上から出土したのは２の土釜で、南東壁中央付近からである。

出土遺物として、土器６点を図示した。１と２の２点が本建物に伴う遺物で、１は須恵器の皿、２は土師器の土釜である。他は混入遺物と考えられ、５は須恵器の蓋、６は須恵器の高盤、３・４は土師器の杯である。

未掲載遺物には、土師器や須恵器の杯・甕細片がある。

所見・時期：建物の時期は、埋没土の状況および出土土器から11世紀と考えられる。

６号竪穴建物（第125・126図、第28・40表、PL.８・100）

本竪穴建物は、トレンチにより遺構の存在は予測され、第２面調査時に検出された。

位置：３区中央の北西付近に位置し、北東側約５mほどに７号竪穴建物、南東側13mに４号竪穴建物、南側12mに９号竪穴建物、南西側12mに10号竪穴建物が点在する。

グリッド：１W・１X－23～25

座標値：X=61,469～61,478　Y=-94,050～94,058

形状：正方形

規模：長軸6.67m　短軸6.50m　壁高７～34cm

長軸方向：N－62°－E　　**床面積**：39.35㎡

埋没土：１層とした大型円礫を多く含む黒褐色土を主体とし、壁際に２層の黒褐色土、カマド前に３層のロームブロックを含む黒褐色土が堆積する。

床面・壁：床面は基本層序Ｄ地点Ⅷ層中にあり、概ね平坦ではあるが、床面には小・中型礫が露出する。壁高は７～34cmを測り、北東壁ほど低くやや斜位に立ち上がるが、他は垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：北西壁中央のやや北寄りに位置し、カマドの主軸方位はN－28°－Wを向き、残存状態は極めて悪い。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ突出する。残存する規模は、全長1.30m、幅0.90mを測り、両袖は僅かに残存する。袖石等はない。焚口部から燃焼部の底面は建物床面より僅かに低くなり、煙道部は燃焼部奥から斜位に立ち上がる。なお、燃焼部中央には支脚石が残存する。

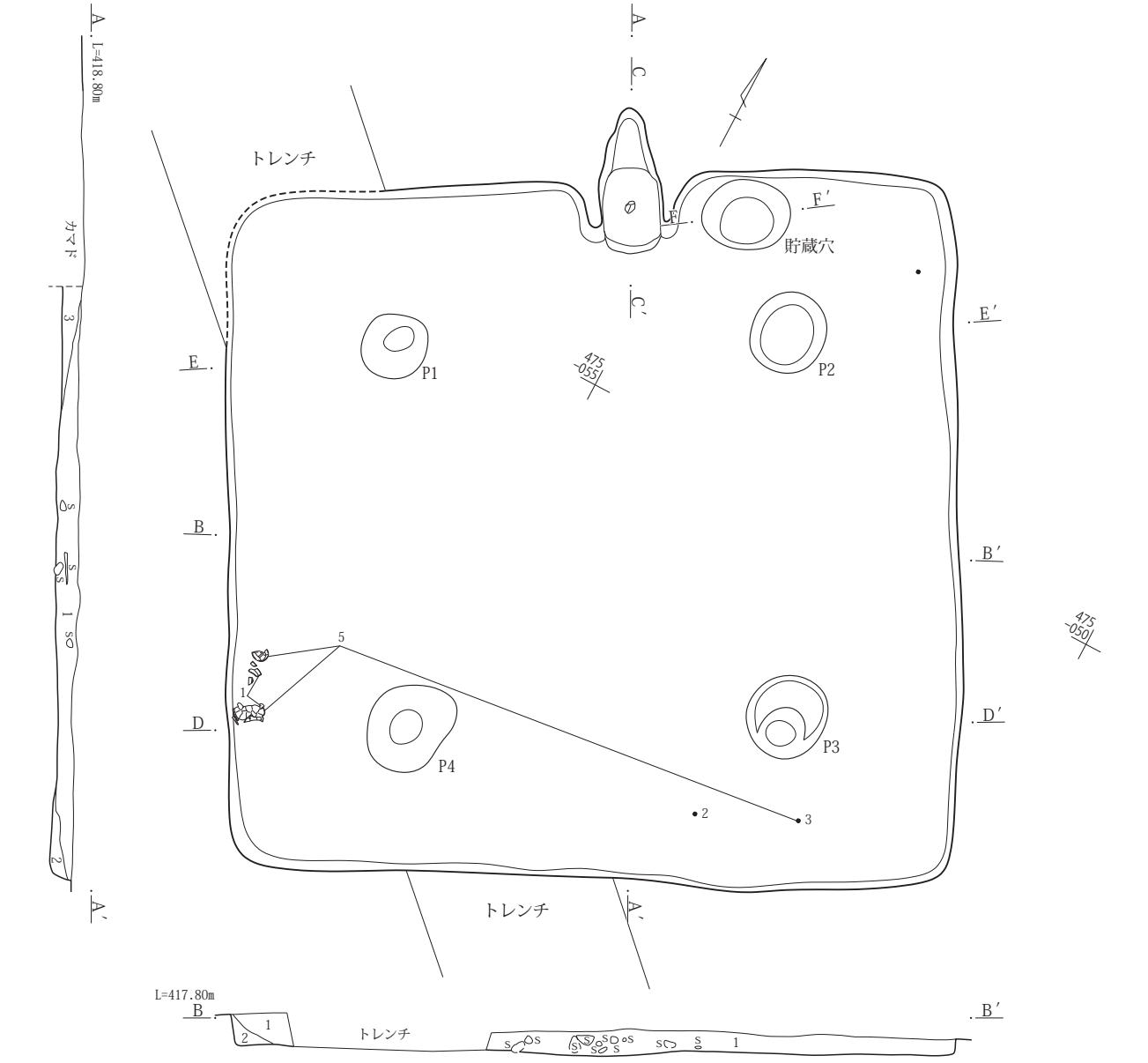
貯蔵穴：カマドの右側となる右袖脇に位置し、楕円形を呈する。長軸80cm、短軸62cm、深さ36cmを測り、黒褐色土を埋土とする。遺物の出土はない。

柱穴：主柱穴と考えられる、対角線上に位置するＰ１～４の４基を検出した。柱穴上面は円形ないし楕円形を呈し、長軸33～45cm、短軸30～36cm、深さ36～45cmを測り、暗褐色土ないし黒褐色土を埋土とする。内部に礫を多く含む柱穴もある。

遺物：出土遺物は極めて少なく、１は南隅付近の南西壁際床面直上に出土した土師器の杯で、その脇に同じく床面直上で出土した５の土師器甕の大型片がある。他は埋土中からであるが、床直遺物を含め、異なる時期の土器が混入している可能性が高い。

出土遺物として、土器５点を図示した。全て土師器で、１・２は杯、３は椀、４は坩、５は甕である。なお、３の椀と５の甕にはハケメ整形が施されていることから混入遺物と考えられる。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から６世紀末から７世紀前半の可能性が高い。



6号竪穴建物

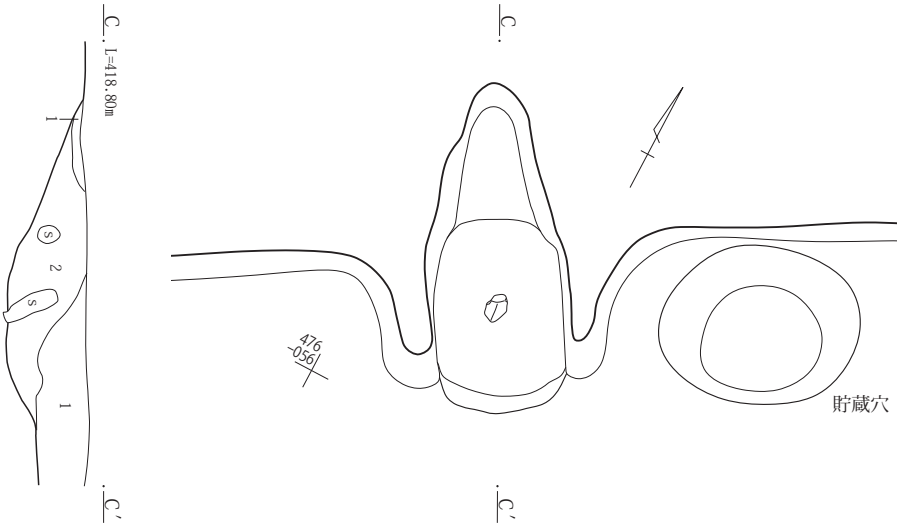
1　黒褐色土　円礫を含み、焼土粒とロームブロックを僅かに含む。
2　黒褐色土　ローム小ブロックを含み、粘性あり。
3　黒褐色土　ロームブロックとローム粒を多く、焼土粒を僅かに含む。

6号竪穴建物貯蔵穴

1　黒褐色土　鈍い黄橙色土粒と焼土粒を含み、締まりと粘性あり。
2　黒褐色土　1層より黒く、締まりも強い。

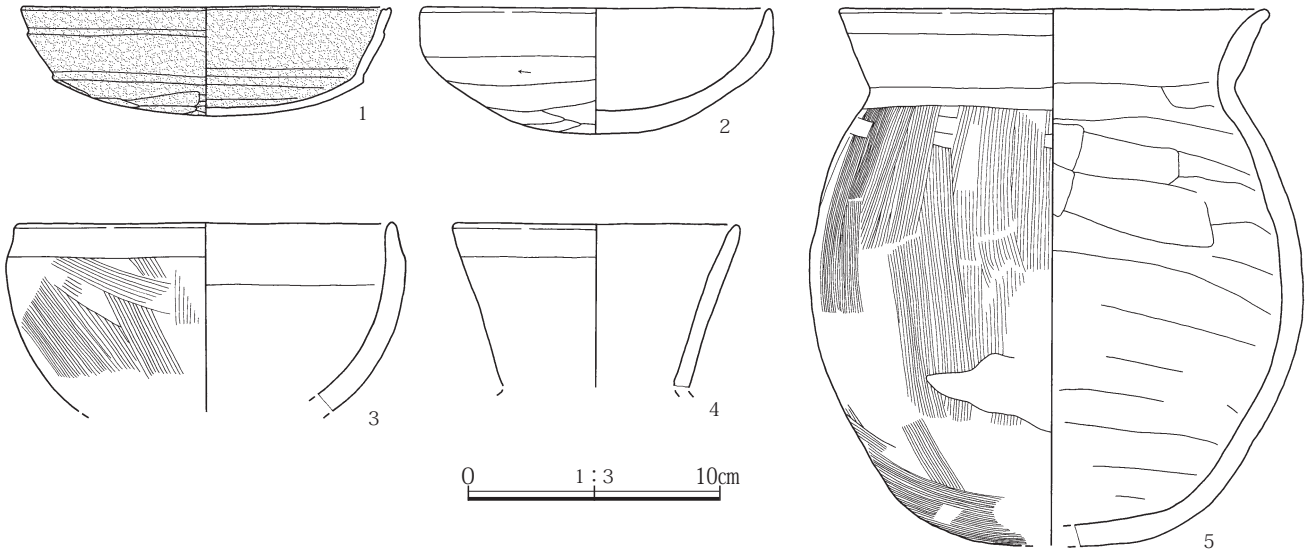
0　1：60　2m

第125図　6号竪穴建物　平・断面図



６号竪穴建物カマド
1　暗褐色土　ロームブロック・粒を多く、焼土粒を含む。竪穴建物３層と同じ。
2　鈍い黄褐色土　ロームブロックを主体に、焼土ブロック・黒色土との混在土。

0　1：30　1m



第126図　６号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物

第28表　６号竪穴建物遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第126図 PL.100	1	土師器 杯(有段口縁)	床直 完形	口 14.4 稜 12.2	高	4.3		細砂粒/良好・燻し/灰黄褐	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。口唇端部は内傾する平坦面を作り、凹線が巡る。口縁部中位に段を作る。	
第126図 PL.100	2	土師器 杯	埋土 1/2	口 13.6 高 5.0				細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第126図 PL.100	3	土師器 椀	埋土 口縁部～体部片	口 14.8 稜 15.8				細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、稜下体部はハケメ。内面は器面が荒れており整形不鮮明であるが、ヘラナデか。	
第126図 PL.100	4	土師器 坩	埋土 口縁部片	口 11.0				細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は内外面とも横ナデ、外面には斜め方向のヘラナデ痕が残る。	
第126図 PL.100	5	土師器 甕	床直 1/2	口 16.7 胴 19.4	底 高	10前後 21.1		細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はハケメ(１㎝当たり８～９本)。内面は底部から胴部にヘラナデ。	

７号竪穴建物(第127～129図、第29・40表、PL.８・110)

本竪穴建物は、第２面の遺構確認時に検出された。その遺構確認の際に、方形となる竪穴部の外側に柱穴列が確認され、先述の３号竪穴建物と同様な様子を伺わせていた。竪穴建物の外側に付属構造と考えられる柱穴列を有する建物ということになる。

位置：３区の北側に位置し、南西側約５mほどに６号竪穴建物、南東側14mに１・２号掘立柱建物、南側17mに４号竪穴建物が点在する。

グリッド：１Ｕ・１Ｖ－25・26

座標値：X=61,477～61,482　Y=-94,042～94,048

形状：正方形

規模：長軸5.15m　短軸4.93m　壁高46～60cm

長軸方向：Ｎ－77°－Ｅ　　床面積：22.15㎡

埋没土：１・２層とした褐色土、３・４層とした暗褐色土に分層できる。埋土中には中・大型の円礫を多量に含むことから、人為的埋没と考えられる。

床面・壁：床面は基本層序Ｅ地点３・４層中にあり、ほぼ平坦で、カマド前から建物中央にかけて硬化が著しい。壁高は48～57cmを測り、やや垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：北西(北)壁中央の僅か北(東)寄りに位置し、カマドの主軸方位はＮ－16°－Ｗを向き、燃焼部は良好であるが燃焼部の残存状態は悪い。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ短く突出する。規模は全長1.53m、幅0.90mを測り、袖石はもたず、石組カマドでもない。明確な袖は残存していない。袖の長さは壁から60cmほどを測り、燃焼部壁は被熱して著しく焼土化する。焚口部から燃焼部の底面にかけて、建物床面より僅かに低くなり、煙道部天井は崩落せずに残存する。煙道部は地山を掘りぬいた構造で、天井は地山であるシルト質な灰褐色ローム土である。煙道先端は直立するように立ち上がるが、この先端部分は遺構確認時に竪穴建物の外側をめぐる柱穴として扱ったＰ６であり、煙道の詳細に不明な点を残す。

貯蔵穴：カマドの右側となる北東隅付近に位置し、上面は径85cmほどの不整円形を呈するが、中段以下は長軸60cm、短軸37cm、深さ58cmを測る長方形を呈する。埋土は、黒褐色土を主体とする２層に分層される。

柱穴：主柱穴と考えられるＰ１～４を検出した。柱穴上面は円形ないし楕円形で、長軸35～82cm、短軸28～72cm、深さ35～51cmを測る。なお、主柱穴以外に、竪穴部の外側に巡る柱穴列が検出されており、付属構造として扱う。

床面下：床面下に３～16cm前後の掘り込みをもつが、掘り込みは中央が浅く、壁際よりとなる周囲が深くなる。底面は若干の凹凸をもつ。床面下の埋土は、５層としたロームブロックを多量に含む暗褐色土で、上面は硬い床面を構築している。

付属構造：竪穴部の各辺の壁の外側には、計10基の柱穴が検出された。まず、カマドを有する北西壁の外側約0.35m前後の位置に、壁と並行してＰ５～８の４基の柱穴が並ぶが、Ｐ６はカマドの煙道穴であることが後に判明した。同様に、北東壁外側にはＰ８～10(Ｐ８は北東角となる)、南東壁外側にはＰ11・12、そして南西壁外側にはＰ13・14が配置となる。検出できなかった柱穴もあるが、その配置の様子からも、竪穴部に付随する構造の建物と考えられる。各柱穴は径25～30cmほどの円形で、ローム粒や焼土粒を含む暗褐色土を埋土とする。

遺物：出土遺物は少なく、その多くは埋土中からである。

出土した土器４点を図示した。土師器の杯に１・２があり、３は須恵器の杯、４は土師器の有孔鉢である。

未掲載遺物には、土師器や須恵器の細片が僅かにある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から６世紀後半と考えられる。

８号竪穴建物(第130図、第40表、PL.９・101)

建物南側の大半は農道のため調査区外となり、カマド等も未検出で不明な点が多い。

位置：２区の西側中央に位置し、南側に５号竪穴建物が近接し、東側６mに11号竪穴建物や12号竪穴建物、西側９mほどに４・13号竪穴建物がある。また、北側には１・２号掘立柱建物がある。

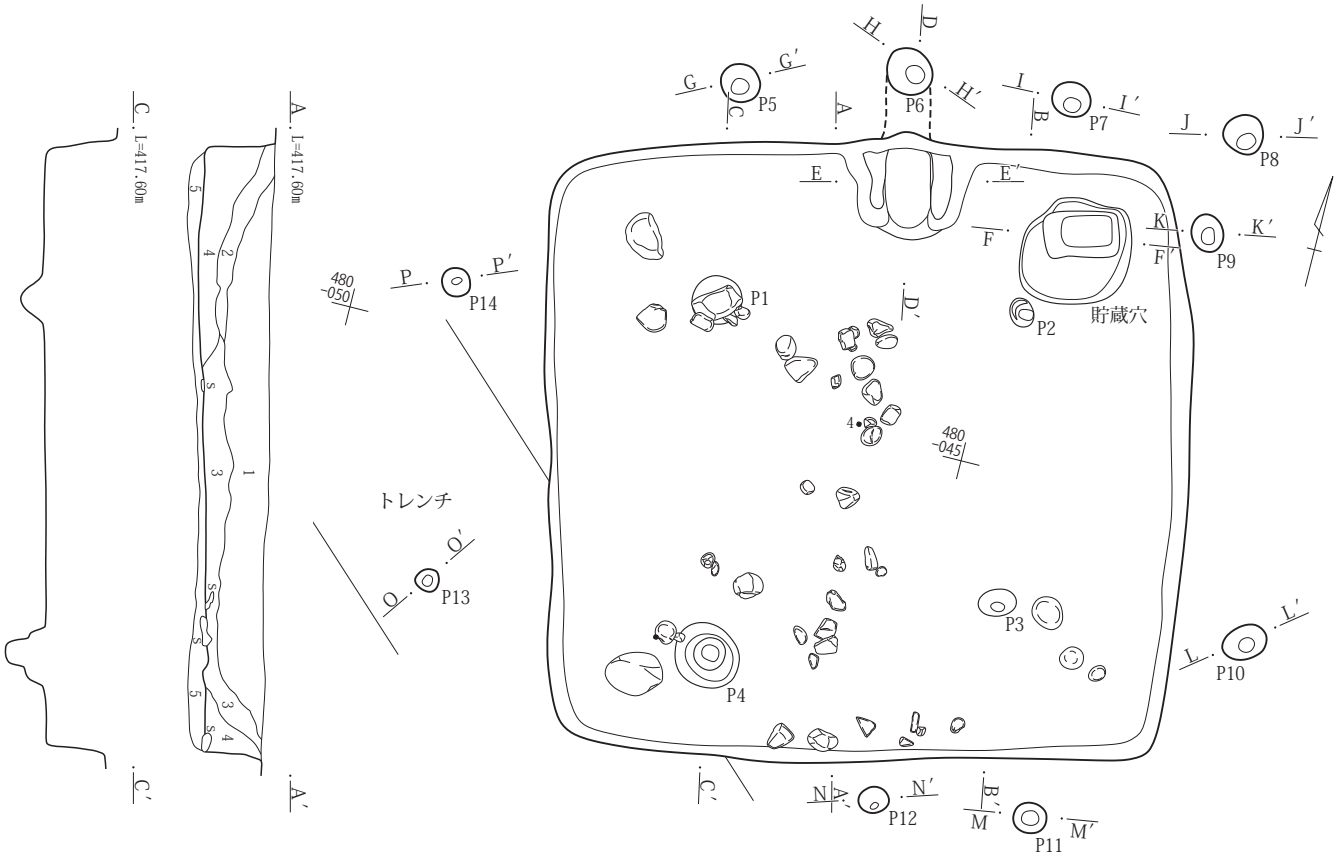
グリッド：１Ｒ・１Ｓ－19・20

座標値：X=61,449～61,452　Y=-94,028～94,032

形状：不明

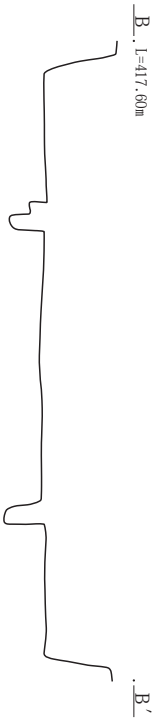
規模：長軸4.24m　短軸(1.55)m　壁高54～62cm

長軸方向：Ｎ－53°－Ｗ　　床面積：(3.60)㎡



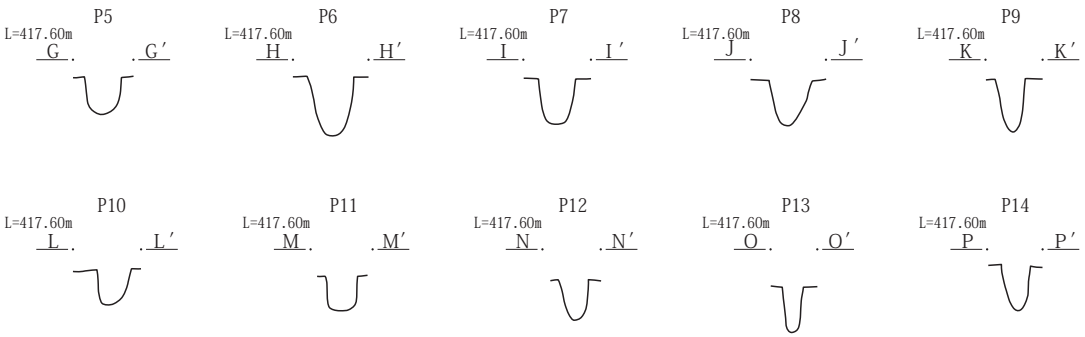
7 号竪穴建物

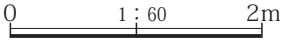
1　褐色土　ローム小ブロックを多く、焼土粒や炭化物を含み、粘性があり締まる。
2　褐色土　1 層よりやや明るく、ローム大ブロックを含み、非常に固い。
3　黒褐色土　ローム大ブロックを僅かに含み、粘性が強く締まりあり。
4　黒褐色土　ローム粒を僅かに含み、粘性が強く締まりあり。
5　暗褐色土　ローム大ブロックを多量に含み、上面の床面はかなり固く締まる。（床下土）



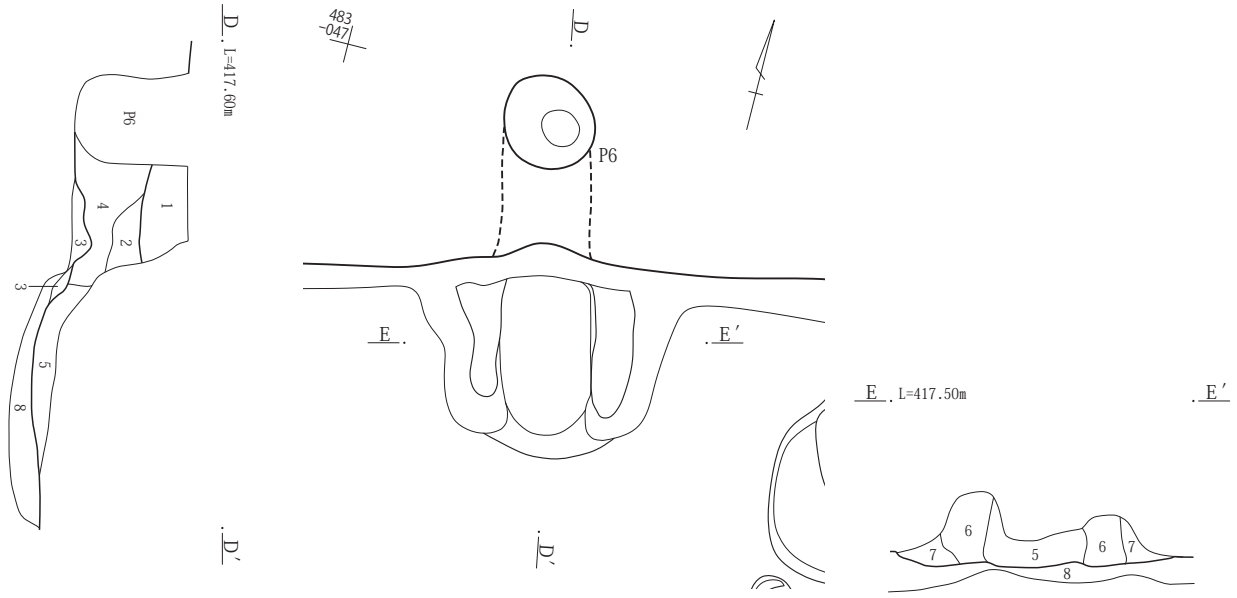
7 号竪穴建物貯蔵穴

1　黒褐色土　ローム粒を極僅かに含み、粘性が強い。
2　黒褐色土　ロームブロックをやや多く含み、締まり弱い。





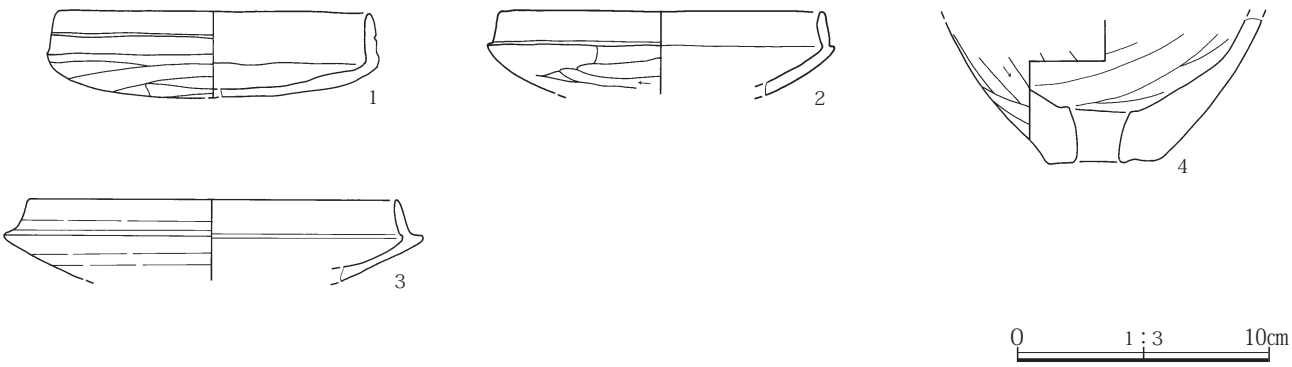
第127図　7 号竪穴建物　平・断面図



７号竪穴建物カマド

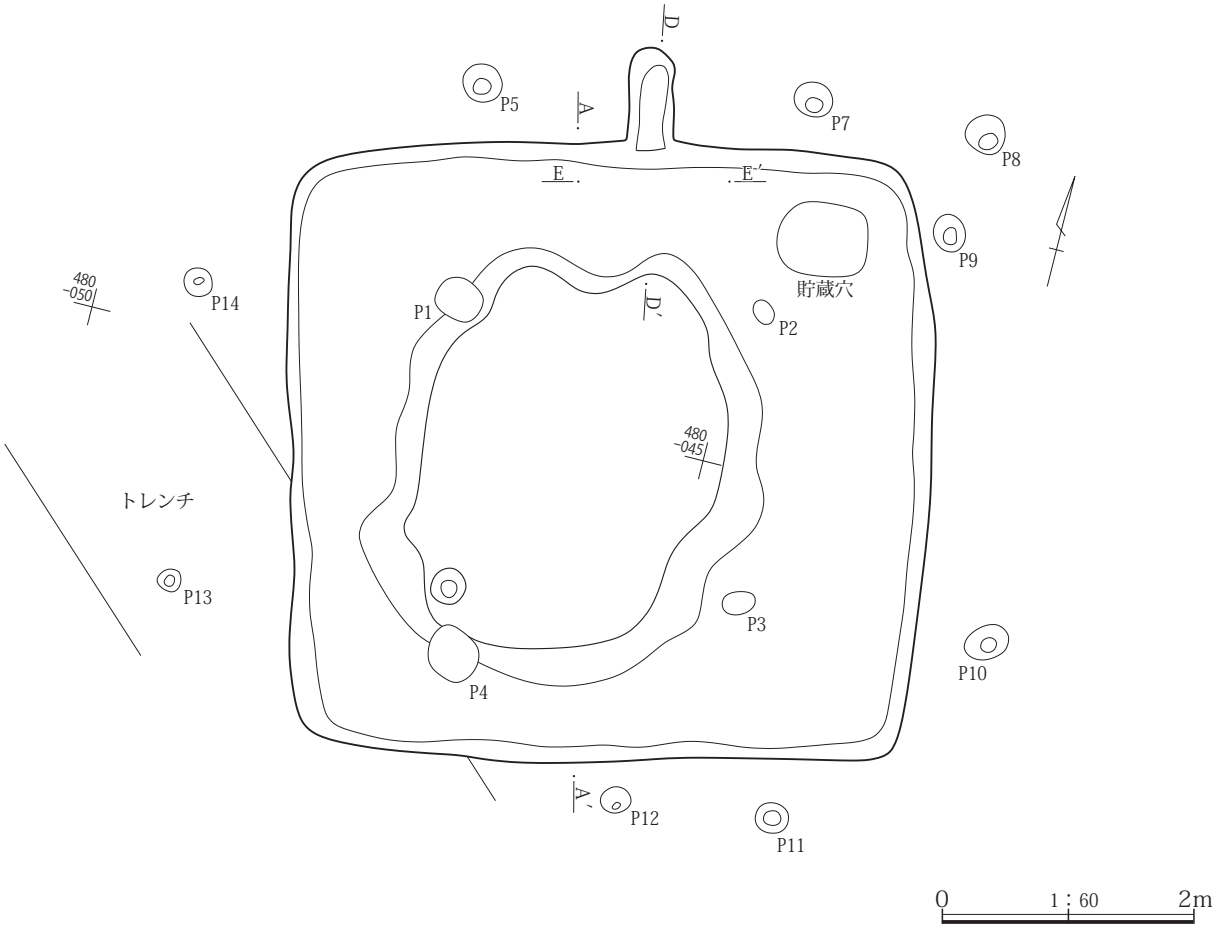
1　灰黄褐色土　地山となるシルト質な灰褐色ローム土で、非常に固く硬化する。（煙道部天井）
2　赤褐色土　焼土ブロックを主とした崩落土。
3　暗赤褐色土　２層よりブロックが細かく暗い。
4　暗褐色土　焼土粒が多く、ロームブロックも若干含む。
5　鈍い赤褐色土　焼土ブロックや鈍い黄橙色シルト質土ブロックを多量に含み、粘性も弱い。
6　鈍い黄褐色土　かなり固く焼き締まり、燃焼部壁面は被熱により焼土化が著しい。（袖部構築土）
7　暗褐色土　ロームブロックと黒色土のブロックが主体。締まりが強く粘性もある。（袖部構築土）
8　暗褐色土　建物５層の床下土と同じ。

0　1：30　1m



0　1：3　10cm

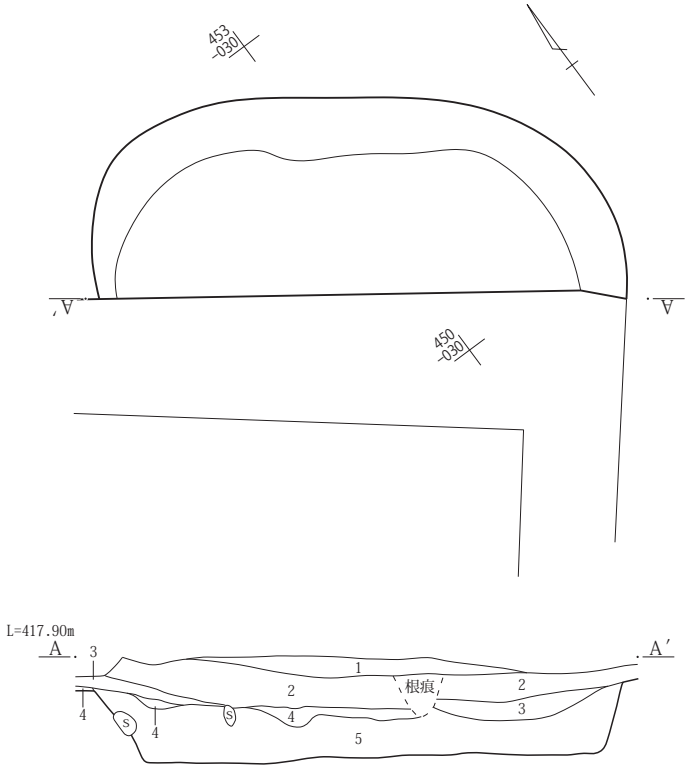
第128図　７号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物



第129図　７号竪穴建物　床面下平面図

第29表　７号竪穴建物遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第128図 PL.100	1	土師器 杯	埋土 1/4	口	12.4	高	3.3	細砂粒/良好/にぶい褐	杯身模倣。口縁部中位に細い凹線が巡る。口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。	
				稜	13.0					
第128図 PL.100	2	土師器 杯	埋土 口縁部～体部片	口	12.8			細砂粒/良好/褐	杯身模倣。口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。	
				稜	13.6					
第128図 PL.100	3	須恵器 杯身	埋土 口縁部～底部片	口	14.6			細砂粒/還元焔/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。	
				稜	16.8					
第128図 PL.100	4	土師器 有孔鉢	埋土 底部～体部	底	4.4			細砂粒/良好/にぶい黄褐	底部中央に穿孔。底部と体部はヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。	
				孔	1.9					



８号竪穴建物
1　黒褐色土　As-Kkアッシュが主体となる。
2　黒褐色土　As-Kkの一次堆積層。基本層序Ⅳ層に同じ。
3　黒褐色土　As-Bが多く含まれ、弱い粘性が有りややソフト。
4　黒褐色土　As-B純層の一次堆積層。基本層序Ⅴ層に同じ。
5　黒色土　ローム粒と焼土粒を僅かに含み、粘性が強く締まりあり。

0　1：60　2m

第130図　８号竪穴建物　平・断面図

埋没土：先述の２・４・５号竪穴建物と同様に、２層および４層はAs-Kk・As-Bの一次堆積層であり、その下に５層の黒色土が堆積する。埋没土中に一次堆積した火山堆積物の状況からして、本竪穴建物の廃絶後は自然堆積と考えられる。

床面・壁：床面は基本層序Ｂ地点でのⅨ層(鈍い黄褐色土)中にあり、ほぼ平坦。壁高は54～62cmを測り、東壁は斜位に、西壁は垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：検出されていない。調査していない部分にある可能性が高い。

遺物：遺物は出土していない。

所見・時期：遺物の出土がなく不明な点も多いが、埋没土の堆積状況から、建物の時期は11世紀の可能性が極めて高い。

９号竪穴建物(第131・132図、第30・40表、PL.９・101)

本竪穴建物は、第２面調査でも遺構確認面を一段下げて検出した。結果、残存状態はあまり良くない。調査範囲の壁際にあり、南西側の一部は調査できない。なお、67号土坑と重複する。

位置：３区南西壁中央の壁際に位置し、東側7.5mほどに４号竪穴建物、北側12mに６号竪穴建物、北西側13mに10号竪穴建物が点在する。

グリッド：１Ｗ・１Ｘ－20・21

座標値：X=61,454～61,458　Y=-94,054～94,059

重複：本建物の南に重複する67号土坑との新旧は、遺構確認により明らかに本建物の方が旧く、土層断面の観察からも旧いことが確認できている。

形状：長方形

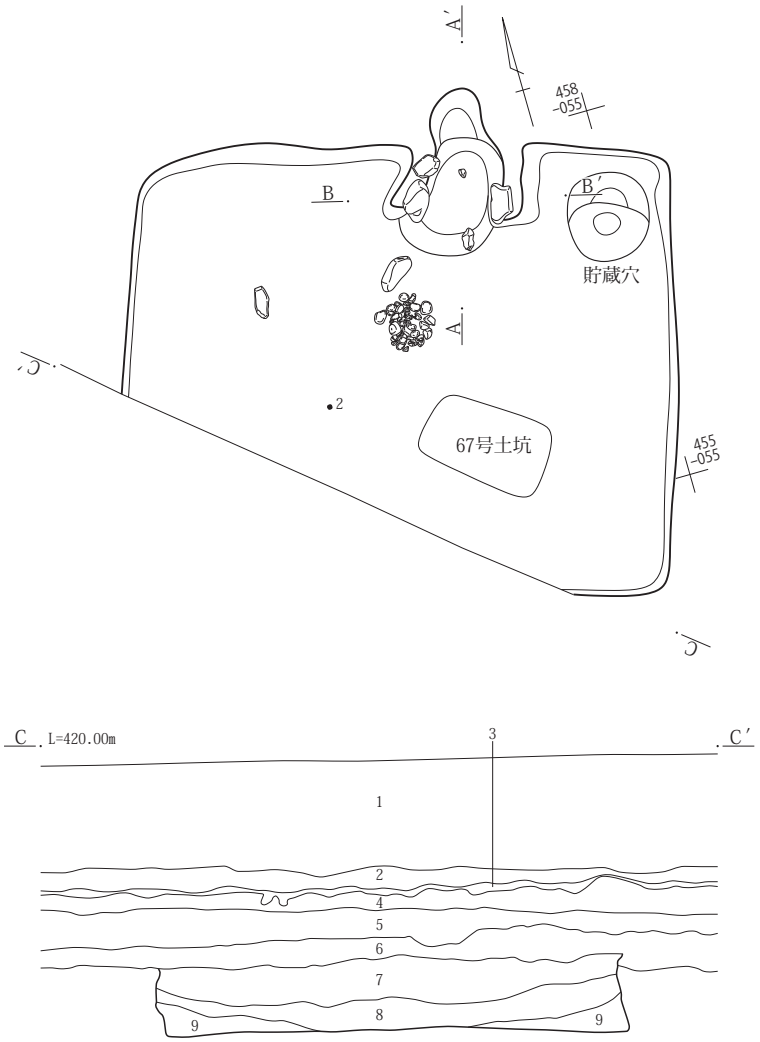
規模：長軸4.43m　短軸3.61m　壁高54～62cm

長軸方向：Ｎ－76°－Ｗ

床面積：(11.71)㎡

埋没土：１調査区境南側の壁面での土層断面で基本層序Ｄ地点と比較すると、１層は表土を含むＤ地点Ⅰ～Ⅲ層、２・３層はⅣ・Ⅴ層のAs-Kk・As-Bの一次堆積、４～６層の黒褐色土はⅥ層を分層した状態にあり、その下位がⅦ層の暗褐色土となる。竪穴建物内の埋没土は、7～９層に分層した暗褐色土となり、焼土粒やローム粒の混入がⅦ層とは異なる。人為的埋没かは不明。

床面・壁：床面は基本層序Ｄ地点Ⅸ層中にあり、概ね平



９号竪穴建物

1　黒褐色土　上位は表土で、下位ほどAs-Kkを多く含む。（基本層序Ｄ地点Ⅰ～Ⅲ層に同じ）
2　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。（基本層序Ｄ地点Ⅳ層に同じ）
3　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。（基本層序Ｄ地点Ⅴ層に同じ）
4　黒褐色土　強い粘性と弱い締まりあり。（基本層序Ｄ地点Ⅵ層に同じ）
5　黒褐色土　上層に近似するが、やや明るい。（基本層序Ｄ地点Ⅵ層に同じ）
6　黒褐色土　上層に近似するが、締まりやや強い。（基本層序Ｄ地点Ⅵ層に同じ）
7　黒褐色土　焼土粒とローム粒を僅かに含み、締まりと粘性あり
8　黒褐色土　７層よりやや明るく、ローム粒や焼土粒、炭化物を僅かに含む。
9　黒褐色土　大粒の焼土粒を僅かに、砂質ロームブロックを少量混在し、粘性が強い。

0　1：60　2m

第131図　９号竪穴建物　平・断面図

坦であるが、重複する67号土坑により一部は壊される。また、カマド前となる床面には、小・中型の円礫からなる径45㎝ほどの円形を呈する集石が検出された。遺構確認面が低かったために壁の残存は悪いが、査区境の壁面にみる壁高は54～62㎝を測る。

カマド：北東壁の中央やや東寄りに位置し、主軸方位はＮ－16°－Ｅを向き、残存状態は比較的に良い。燃焼部の主体は壁の内側にあるが、僅かに外側にかかり、煙道部は外側に短く突出する。残存する規模は、全長1.33m、幅1.20mを測る。両袖の先端には袖石が据えられ、袖は壁から50～55㎝ほどを測り、燃焼部左壁には左袖石に接して被熱した壁石が残存するがそれ以外の壁石はない。しかし、カマド前に転石する大型礫から、燃焼部が石組であった可能性が高い。焚口部から燃焼部底面は建物床面より僅かに低くなり、燃焼部奥壁の一段高い位置から煙道部が緩く斜めに立ち上がる。なお、燃焼部中央には支脚石が残存する。

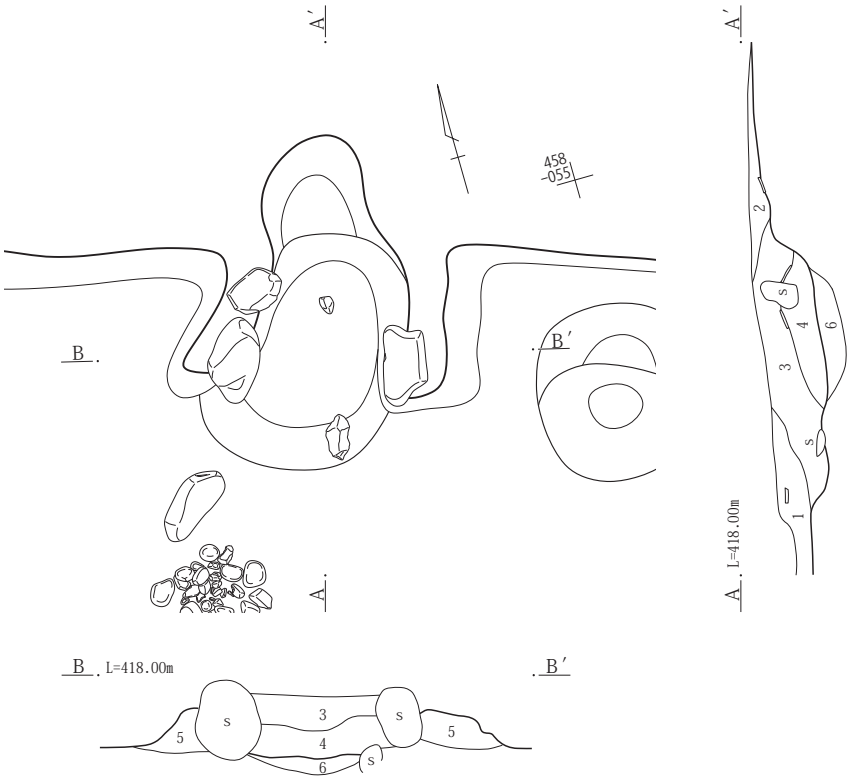
貯蔵穴：カマドの右側となる東隅に位置し、上面は長軸71㎝、短軸65㎝の楕円形を呈し、深さ18㎝を測る。埋土は黒褐色土を主体とし、土師器片が出土している。

遺物：出土遺物は少なく、その多くは埋土中からで、僅かに貯蔵穴内からの出土もある。

出土した土器４点を図示した。全て土師器で、杯には１～３の３点があり、４は甕の底部である。

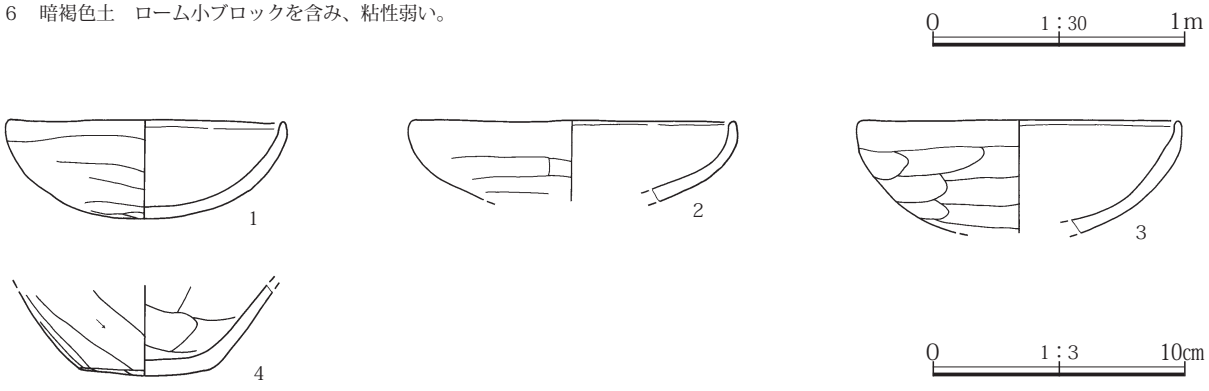
未掲載遺物には、土師器の甕片が多い。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から７世紀第３四半期と考えられる。



９号竪穴建物カマド

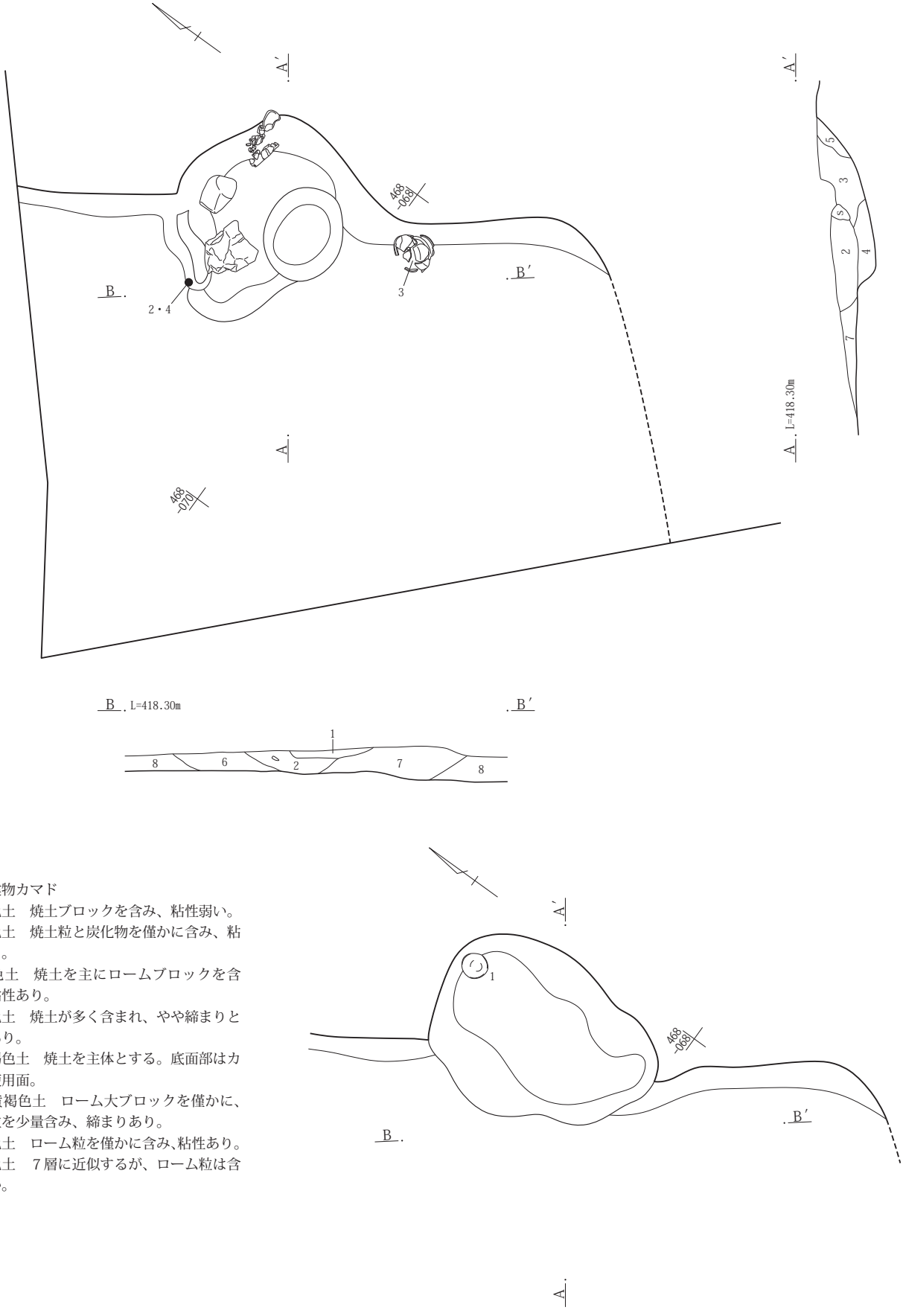
1　黒褐色土　大粒の焼土粒とロームブロック混在する。竪穴建物９層と同じ。
2　黒褐色土　ローム粒を多く含み、粘性は弱い。
3　黒褐色土　鈍い黄褐色砂質粘土ブロックを僅かに、焼土粒をやや多く含み、粘性あり。
4　赤褐色土　崩落焼土を主とし、粘性弱い。
5　鈍い黄褐色土　黄褐色ローム土を主とし、硬く締まり強い。（袖部構築土）
6　暗褐色土　ローム小ブロックを含み、粘性弱い。



第132図　９号竪穴建物　カマド平・断面図、出土遺物

第30表　９号竪穴建物遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第132図	1	土師器 杯	埋土 口縁部～底部片	口 最	11.0 11.1	高	3.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第132図	2	土師器 杯	埋土 口縁部～底部片	口 最	12.6 13.1			細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第132図 PL.101	3	土師器 杯	埋土 1/3	口 最	12.6 12.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第132図	4	土師器 甕	埋土 底部～胴部下位片	底	5.0			細砂粒/良好/明赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	

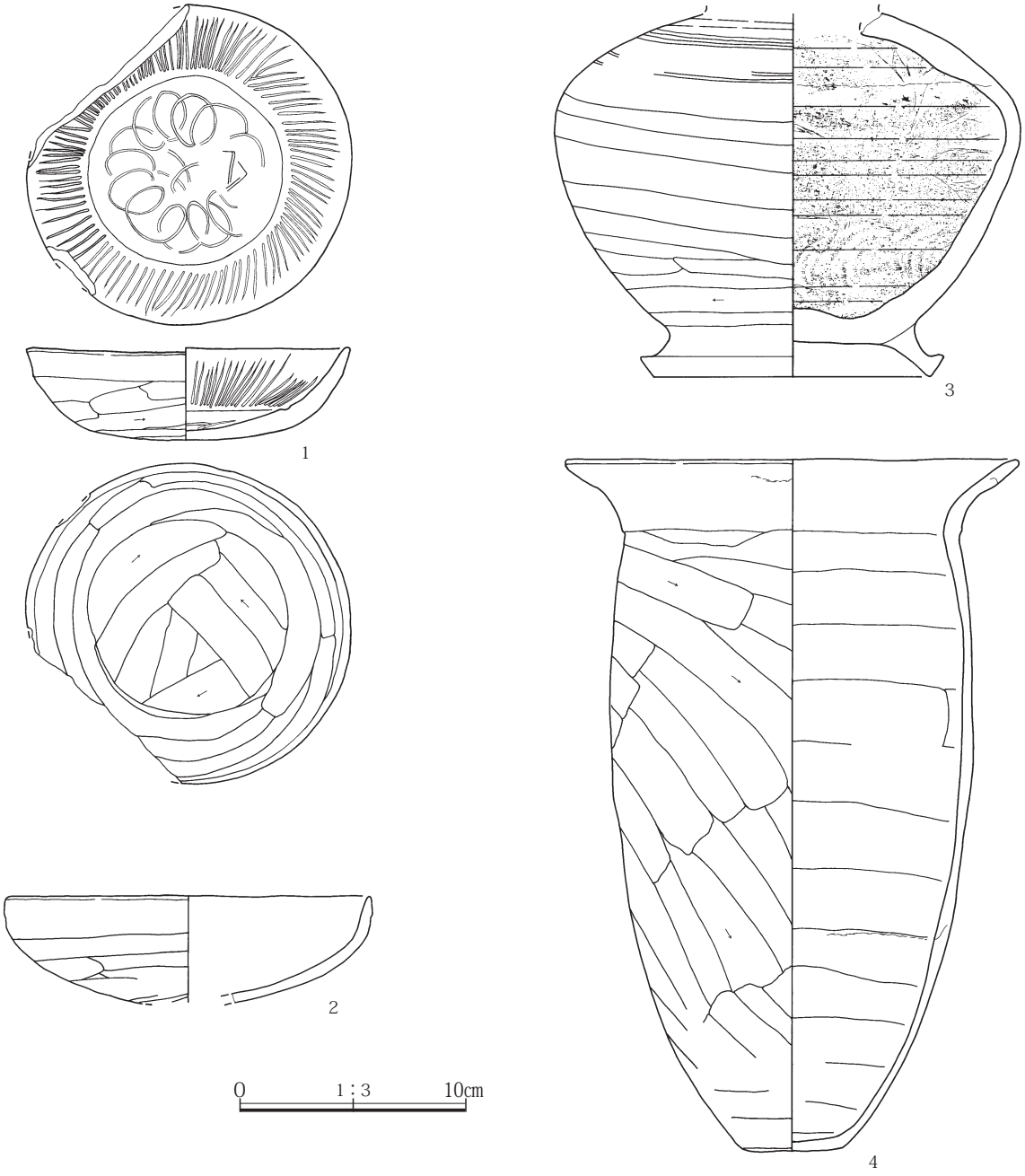


10号竪穴建物カマド

1　黒褐色土　焼土ブロックを含み、粘性弱い。
2　黒褐色土　焼土粒と炭化物を僅かに含み、粘性あり。
3　暗褐色土　焼土を主にロームブロックを含み、粘性あり。
4　暗褐色土　焼土が多く含まれ、やや締まりと粘性あり。
5　明赤褐色土　焼土を主体とする。底面部はカマド使用面。
6　鈍い黄褐色土　ローム大ブロックを僅かに、焼土粒を少量含み、締まりあり。
7　黒褐色土　ローム粒を僅かに含み､粘性あり。
8　黒褐色土　７層に近似するが、ローム粒は含まない。

0　1：30　1m

第133図　10号竪穴建物　カマド平・断面図



第134図　10号竪穴建物　出土遺物

第31表　10号竪穴建物遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第134図 PL.101	1	土師器 杯	カマド掘方内 4/5	口	14.2	高	4.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は口縁部に放射状、底部に螺旋状暗文が施されている。	
				底	8.6					
第134図 PL.101	2	土師器 杯	カマド周辺床直 1/2	口	15.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第134図 PL.101	3	須恵器 長頸壺	カマド周辺床直 底部～頸部	胴	19.2			細砂粒(長石)/還元焔/灰	胴部は粘土紐巻き上げ、叩き締めにて整形、内面にアテ具痕が残る。成形後ロクロ整形、胴部は下位にヘラ削りが残るが、大部分はヘラナデ、上半に二序１単位の凹線を２段に巡らす。高台は貼付。	
				台	11.4					
第134図 PL.101	4	土師器 甕	カマド内 2/3	口	19.6	高	30.6	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
				底	4.4					

10号竪穴建物（第133・134図、第31・40表、PL.９・101）

本竪穴建物は、９号竪穴建物と同様に遺構確認面を一段下げて検出した。結果、残存状態はあまり良くない。調査範囲および調査区境の壁際にあり、検出されたのはカマド周辺のみで、建物としての全体像は把握しきれず不明な点が多い。

位置：３区西端隅の壁際に位置し、北東側12mほどに６号竪穴建物、南東側13mに９号竪穴建物、さらに最も西端に位置する２号竪穴建物は北西側約20mほどにある。

グリッド：１Ｚ・２Ａ－23

座標値：X=61,465～61,469　Y=-94,067～94,071

形状：不明

規模：長軸(3.41)m　短軸(2.50)m　壁高12～20㎝

長軸方向：Ｎ－46°－Ｅ　　床面積：(6.13)㎡

埋没土：カマドの土層断面からすると、７・８層とした黒褐色土が埋没土であろうか。詳細は不明。

床面・壁：床面は概ね平坦と思われるが、建物の形状把握はしづらい。カマド脇に壁の一部が残存する。

カマド：カマド脇に残存する壁からすれば、北東壁に位置するようで、主軸方位はＮ－59°－Ｅを向き、残存状態は極めて悪い。焼土を多く含む部分が燃焼部と思われ、中央に４の土師器の甕が出土し、その甕の周囲に被熱した大型礫３石が検出されている。石組カマドを思われるが、石の配置は不明。

さらに、このカマド部分の下位には土坑上の掘方をもち、掘方内からは１の土師器杯が出土している。

遺物：出土遺物は少ないが、４の土師器甕はカマド内から、１の土師器杯はカマドの掘方内、２と３はカマド周辺の床直付近から出土している。

出土した土器４点を図示した。土師器の杯には１・２があり、１の内面には放射状および螺旋状の暗文が施される。３は頸部を欠く須恵器の長頸壺で、胴部上半に凹線を二段巡らせ、底部には高台が付く。４は土師器の甕である。

未掲載遺物には、土師器の細片が僅かにある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から７世紀第４四半期から８世紀第１四半期と考えられる。

11号竪穴建物（第135～138図、第32・40表、PL.10・101）

位置：２区の北西側に位置し、東側に12号竪穴建物が近接し、西側６mに８号竪穴建物、南西側10mに５号竪穴建物が、さらに北西側７mほどに１・２号掘立柱建物がある。また、建物中央と東隅に47・48・50号土坑が重複する。

グリッド：１Ｏ～１Ｑ－19～21

座標値：X=61,448～61,457　Y=-94,014～94,022

重複：重複する本建物中央の50号土坑および東隅の47・48号土坑との新旧は、遺構確認により明らかに本建物の方が旧く、土層断面の観察からも旧いことが確認できている。

形状：正方形

規模：長軸7.04m　短軸6.78m　壁高28～35㎝

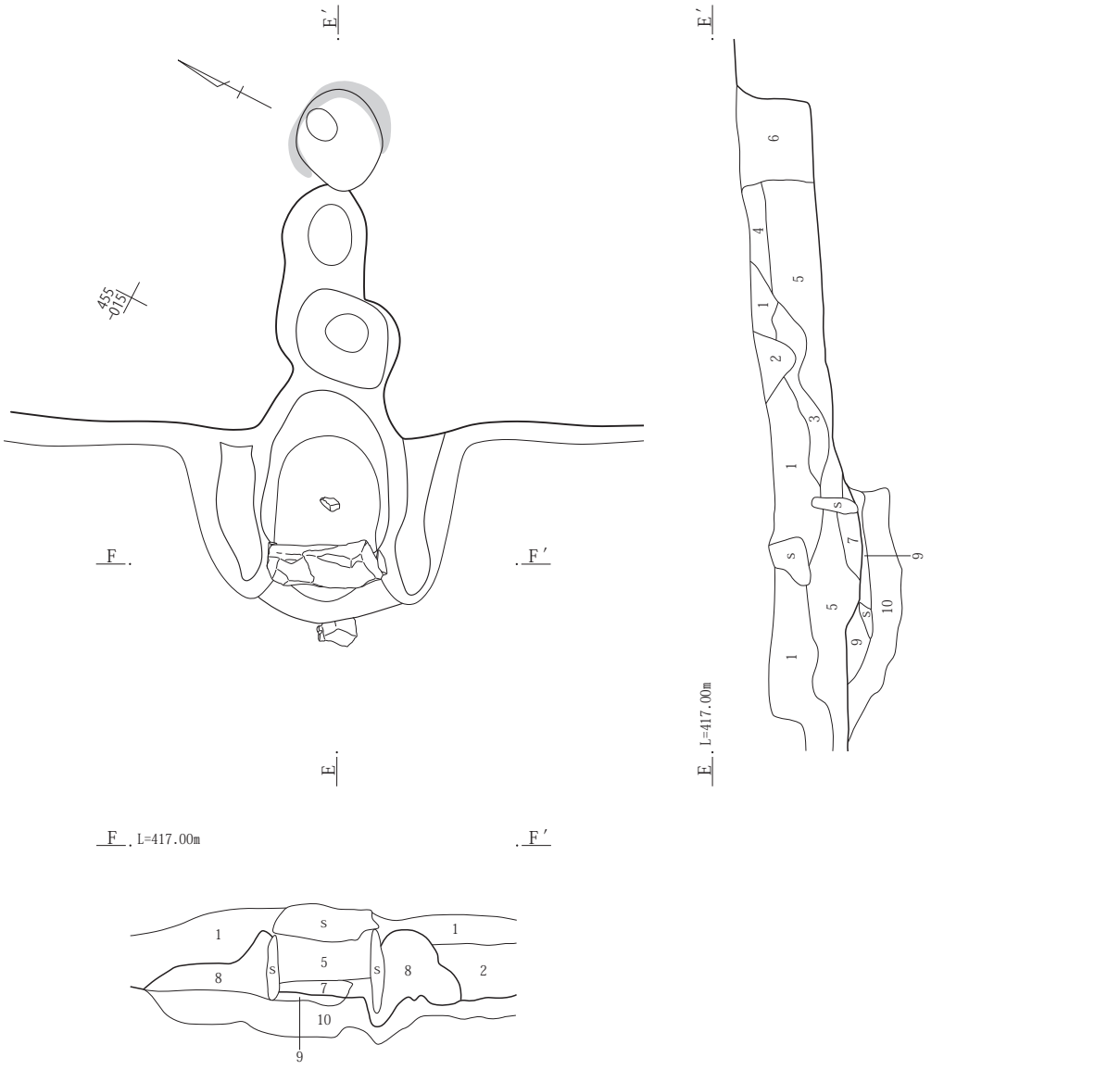
長軸方向：Ｎ－63°－Ｅ　　床面積：43.17㎡

埋没土：１層とした灰黄褐色土を主体とし、一部ではあるが２層の赤黄褐色土とに分層できる。他の竪穴建物埋没土にみられない、灰黄褐色土を主体としたほぼ一層による堆積であることから、人為的埋没の可能性が極めて高い。

床面・壁：床面は基本層序Ｃ地点２層中にあり、ほぼ平坦で、カマド前から建物中央にかけて硬化が著しい。壁高は28～35㎝を測り、垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：北東壁中央のやや東寄りに位置し、主軸方位はＮ－63°－Ｅを向き、残存状態は極めて良好で、焚口部天井石や煙道部天井が残存する。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側に長く突出する。残存する規模は、全長2.28m、幅1.10mを測る。袖は壁から65㎝ほど突き出るような形で、両先端内側に袖石を有し、焚口天井石が袖石に架かる状態で残存していた。袖石間となる焚口部の間口は39㎝を測る。焚口部から燃焼部の底面にかけては建物床面よりやや低く、煙道部は緩やかに延び、煙道先端は垂直に立ち上がる。また、煙道上部には４層とした暗褐色土(漸移層)が天井として残存しており、煙道は掘り抜き状となっていたことを窺わせる。なお、煙道先端は竪穴部の周囲および壁面には、被熱による焼土を確認している。さらに、燃焼部の底面中央には、支脚石を検出している。一方、袖部の断面からは、袖石は厚みのない石を縦長に用い、その外側にロームを主体とした暗黄褐色土を構築土と

第135図　11号竪穴建物　平・断面図

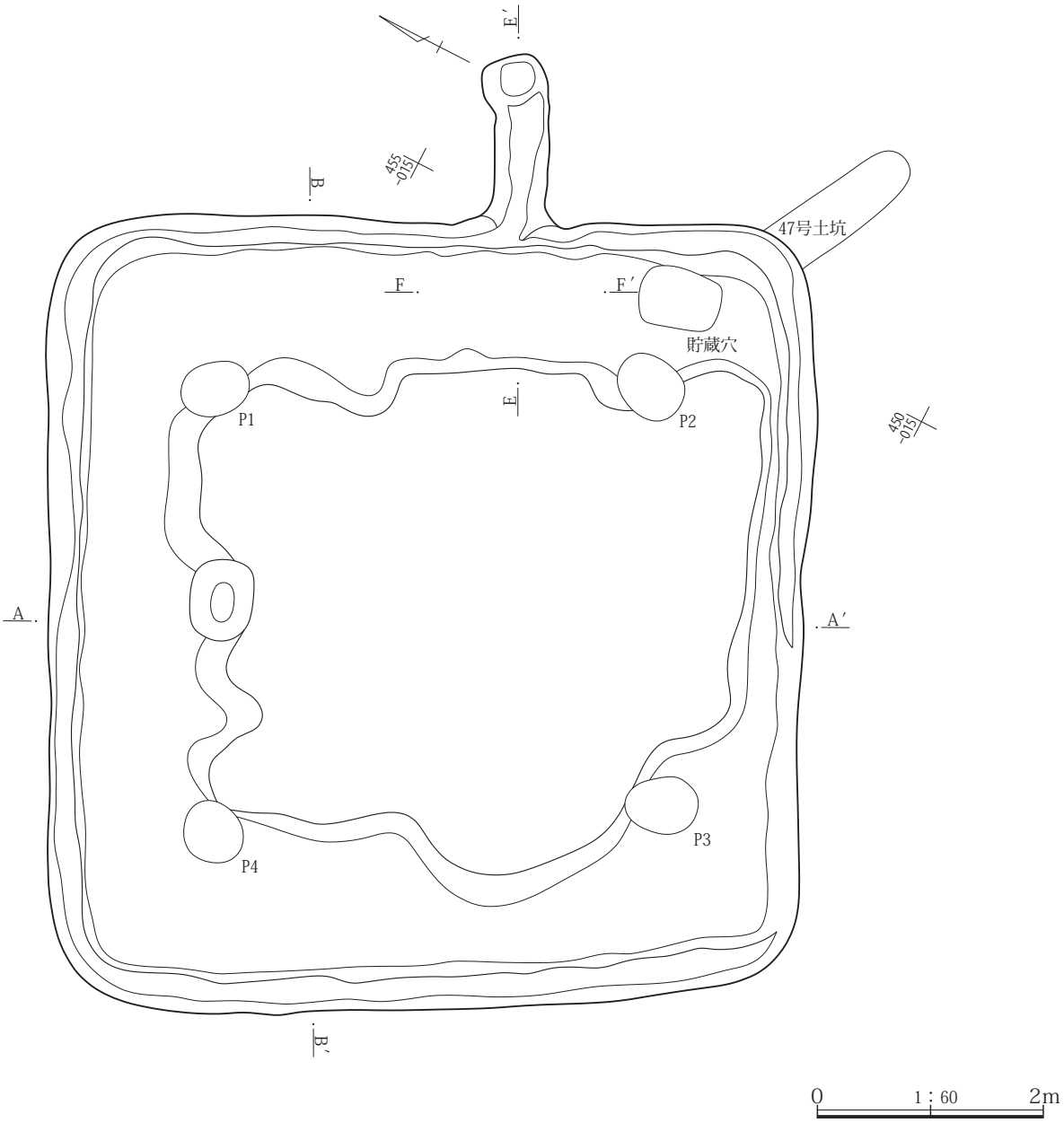


11号竪穴建物カマド

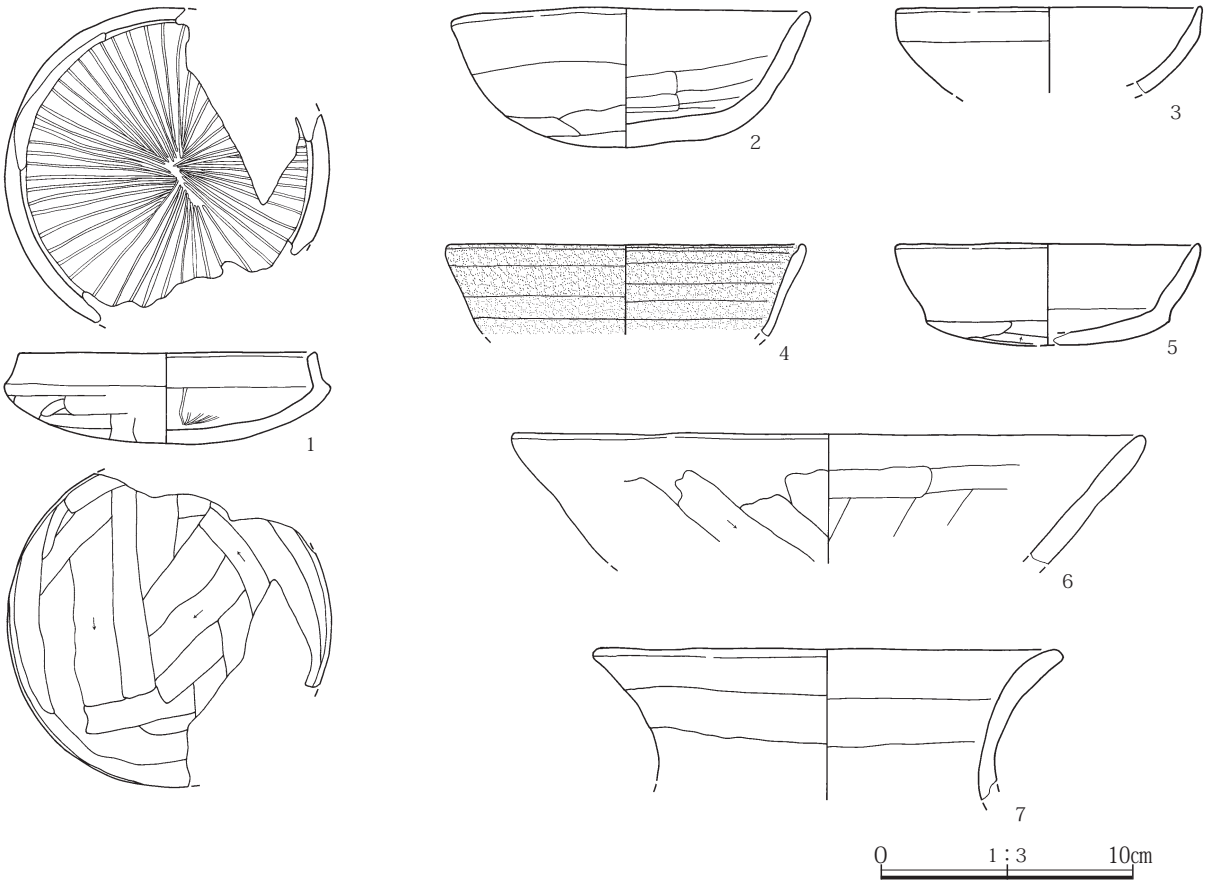
1　暗褐色土　黒褐色土小ブロックを僅かに、焼土粒を含む。竪穴建物１層と同じ。
2　黒褐色土　大量の焼土を含む。
3　黄褐色土　ロームの粘質土を主体とし、下面が焼土化する。崩落した天井部か。
4　暗褐色土　漸移層。（基本層序Ｃ地点１層に同じ）
5　黒褐色土　焼土粒・ブロックを含み、粘性あり。
6　暗褐色土　ローム・黒褐色土の小ブロックの混土。煙道先端の立ち上がり
7　鈍い赤褐色土　焼土粒を多く含み、非常に粘性が強い。
8　暗黄褐色土　ロームを主体とし、褐色土を少し含む。（袖部構築土）
9　暗褐色土　焼土とロームブロックとの混土で、非常に締まり強い。
10　暗褐色土　ロームブロックを含む。竪穴建物４層と同じ。

0　1：30　1m

第136図　11号竪穴建物　カマド平・断面図



第137図　11号竪穴建物　床面下平面図



第138図　11号竪穴建物　出土遺物

第32表　11号竪穴建物遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第138図 PL.101	1	土師器 杯	床直 3/4	口	11.6	高	3.6	細砂粒/良好/橙	杯身模倣。口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部中央から体部にかけて放射状ヘラミガキ。	
				稜	12.8					
第138図 PL.101	2	土師器 杯	埋土 3/4	口	14.0			細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、体部上半は器面摩滅のため単位不明。内面は底部から体部下半にヘラナデ。	
				高	5.5					
第138図 PL.101	3	土師器 杯	埋土 口縁部~体部片	口	12.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削りか，器面が荒れており詳細不明。	
第138図 PL.101	4	土師器 杯	カマド内 口縁片	口	14.0			細砂粒/良好・燻し/黒褐	口縁部は横ナデ、稜下の底部は手持ちヘラ削り。	
				稜	11.9					
第138図 PL.101	5	土師器 杯	貯蔵穴 1/3	口	12.0	高	4.0	細砂粒/良好/にぶい褐	口縁部は横ナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
				稜	9.6					
第138図	6	土師器 鉢	床直 口縁部～体部上位片	口	24.8			細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。内面は体部にヘラナデ。	
第138図	7	土師器 甕	カマド内 口縁部～頸部片	口	18.0			細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ。	

して覆い固めていることが確認された。

貯蔵穴：カマドの右側となる東隅付近に位置し、上面は長軸74cm、短軸53cmの長方形を呈し、深さは59cmを測る。遺物の出土はない。

柱穴：対角線上に位置する主柱穴と考えられるＰ１～４を検出した。柱穴上面は円形ないし楕円形で、長軸64～72cm、短軸52～60cm深さ62～72cmを測る。

床面下：床面下に３～15cm前後の掘り込みをもつが、掘り込みは中央が浅く､壁際よりとなる周囲が深くなり、壁際は一段高くなる。底面は若干の凹凸をもつ。床面下の埋土は３～５層となるが、４層としたローム大ブロックを多く含む暗褐色土が主体をなし、上面は硬い床面を構築している。先述した７号竪穴建物の床面下と同様な状態である。

遺物：出土遺物はあまり多くない。１の杯は貯蔵穴脇床直からの出土でカマド内出土と接合し、６の杯は建物中央の床面直上に出土している。４の杯および７の甕はカマド内からの出土である｡他は埋土中に出土した。

出土した土器６点を図示した。全て土師器で、杯には１・２・４・５があり、５は稜下が浅く、他の杯とやや異なる。６は鉢で、７は甕である。

未掲載遺物には、土師器の杯・甕類の破片が多く、須恵器片の細片が２点ある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から６世紀後半から７世紀初頭の可能性がある。

12号竪穴建物（第139～142図、第33・40表、PL.10・11・101～103）

二方向の壁に、異なる構造のカマドをもつ特異な竪穴建物である。

位置：２区の北西側に位置し、西側に11号竪穴建物が近接し、南西側17mに５号竪穴建物がある。

グリッド：１Ｎ・１Ｏ－19・20

座標値：X=61,447～61,451　Y=-94,007～94,012

形状：方形

規模：長軸3.98m　短軸3.32m　壁高24～33cm

長軸方向：Ｎ－33°－Ｅ　　**床面積**：9.71㎡

埋没土：１層とした黒褐色土のみを埋没土とし、分層はできなかった。人為的埋没かは不明。

床面・壁：床面は基本層序Ｃ地点２層中にあり、ほぼ平坦で、カマド前から建物中央にかけて硬く締まる。また、カマド前の床面上には、大型礫や多くの土器が出土している。壁高は30cm前後を測るが、北東壁ほどやや緩く、他は斜めに立ち上がる。

カマド：２基のカマドを検出した。カマド１は、北東壁中央の東寄りに位置し、カマドの主軸方位はＮ－54°－Ｅを向き、燃焼部付近の残存状態は悪い。袖は残存しないが燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ長く突出する。燃焼部位置やカマド前に散乱する被熱した大型礫の存在から、焚口部および燃焼部に石を用いた石組カマドであった可能性が高い。全長2.12m、幅(0.70)ｍの規模を推定する。焚口部から燃焼部の底面は床面より僅かに低くなり、煙道部は燃焼部奥の一段高い位置から緩やかに長く延びる。

カマド２は、北西壁中央のやや北寄りに位置し、カマドの主軸方位はＮ－39°－Ｗを向き、残存状態は比較的良好。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は検出されていない。調査時に確認されていた燃焼部に落ち込む扁平な大型礫の１石は、焚口部天井石であること考えられ、それ以外の扁平な中型礫５石はずり落ちた状態にあった。カマドの規模は、全長0.65m、幅0.60mを測る。袖は壁から40cmほど突き出るような形で、両袖の先端に袖石を有し、袖石間となる焚口部の間口は40cmを測る。焚口部から燃焼部の底面にかけては、床面より僅かに低くなる。燃焼部の奥壁は、被熱による焼土が著しい状態でそのまま立ち上がり、煙道は検出できなかった。

貯蔵穴：両カマドに伴う２基の貯蔵穴を検出した。貯蔵穴１はカマド１に伴い、カマド１の右側となる東隅に位置し、上面は長軸118cm、短軸93cmの楕円状を呈し、深さは20cmを測る。貯蔵穴２はカマド２に伴い、カマド２の右側となる北隅に位置し、上面は長軸88cm、短軸65cmの楕円状を呈し、深さは18cmを測る。いずれからも遺物の出土はない。なお、両貯蔵穴の上面にはカマドに使用されたであろう石の転石や土器の出土から、竪穴建物廃絶時には埋まっていたと考えられる。

周溝：床面下の調査で、カマドと貯蔵穴を除く壁際に就航と考えられる溝を検出した。幅15～20cm、深さ10cm前後を測り、埋土は黒褐色土を主体とする。

遺物：出土した遺物量は､検出した竪穴建物で最も多い。

甕のほとんどが両カマド前に集中し、10～13はカマド２の前に、14・15はカマド１の前から大型礫と共に出土している。この密集した甕の出土状態からすると、10の内側に11が重なった状況が窺えた。また、７の須恵器杯の底部はカマド２の左袖左脇の床直に、16の台付甕の脚部はカマド２の右袖右脇の貯蔵穴２上面に出土している。勿論、埋土中からの出土も多い。

出土遺物として、土器17点を図示した。１～６は土師器の杯、７～９は須恵器の杯で高台をもつ。16は土師器の台付甕、10～14は土師器の甕で、17は須恵器の甕胴部片である。

未掲載遺物には、土師器の杯・甕片が多量に、須恵器の甕片が少量ある。

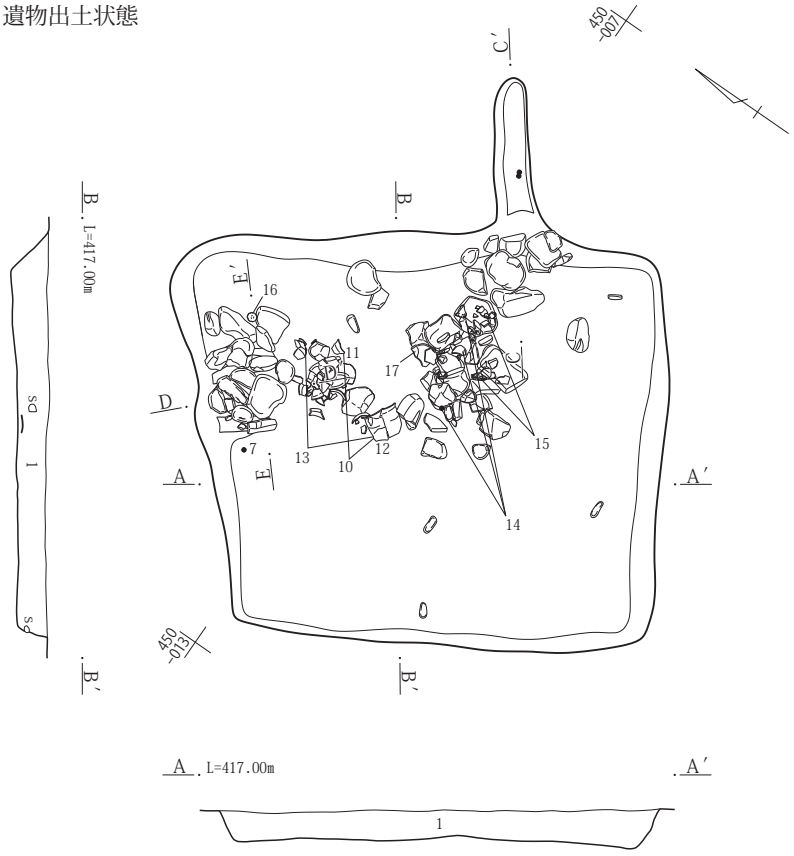
所見・時期：２基のカマドを検出した竪穴建物であるが、カマド１のカマド前に被熱した多くの大型礫が散乱し、カマド２では大型礫の散乱と共にカマド内に落ち込んだ状態での礫のあり方は、建物廃絶時の状況を如実に示している。これは、両カマド共に壊した状態であり、共に使用されていたカマドであることが窺える。また、煙道のあり方はカマド１とカマド２で異なり、カマド２は極端に短いか煙道をもたない構造のようで、カマドの使用法の違いを窺い知れよう。

なお、建物の時期であるが、出土土器からは７世紀第３四半期から８世紀第１四半期と、やや年代幅がみられる。

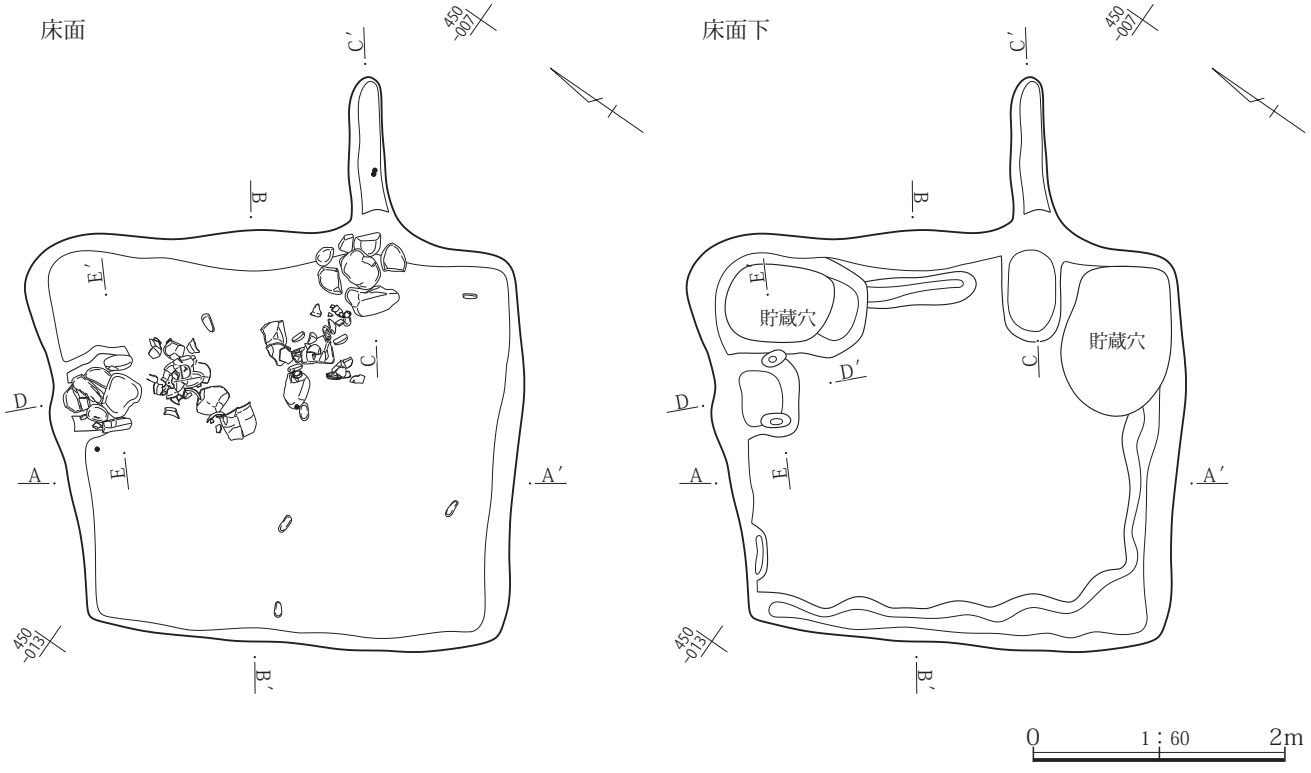
第33表　12号竪穴建物遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第141図 PL.101	1	土師器 杯	埋土 口縁部~底部片	口 最	11.0 11.3			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第141図 PL.101	2	土師器 杯	埋土 口縁部～体部片	口 最	19.0 19.3			細砂粒/良好/灰褐	口縁部は上半が横ナデ、下半はナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第141図	3	土師器 杯	埋土 口縁部～底部片	口 高	12.0 3.1			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第141図	4	土師器 杯	埋土 口縁部～底部片	口	12.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第141図	5	土師器 杯	埋土 口縁部～体部片	口	14.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。器面摩滅のため単位不明。	
第141図	6	土師器 杯	埋土 口縁部～底部片	口 底	15.0 9.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。	
第141図 PL.101	7	須恵器 有台杯	床直 底部片	底 台	12.2 12.0			細砂粒/還元焔/褐灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラ削り、高台は貼付。	
第141図	8	須恵器 有台杯	埋土 底部片					細砂粒/還元焔/浅黄	ロクロ整形、回転は右回りか。底部は回転ヘラ削り、高台は貼付。	
第141図	9	須恵器 有台杯	埋土 底部片	底 台	11.0 10.4			細砂粒/還元焔/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラ削り、高台は削り出し。	
第141図 PL.102	10	土師器 甕	カマド２の前 口縁部～胴部	口 胴	22.8 30.3			細砂粒・粗砂粒/良好/明褐	胴部内面に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第141図 PL.102	11	土師器 甕	カマド２の前 口縁部～胴部下位	口	24.4			細砂粒・粗砂粒/良好/明褐	外面に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は上半が縦方向、下半は斜め方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第142図 PL.103	12	土師器 甕	カマド２の前 口縁部～胴部上半	口	23.6			細砂粒・粗砂粒・礫/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部は上位が縦方向、中位が横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第142図 PL.103	13	土師器 甕	カマド２の前 口縁部～胴部上半片	口	22.6			細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第142図 PL.103	14	土師器 甕	カマド１の前 口縁部～胴部上位片	口	23.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第142図 PL.103	15	土師器 甕	カマド１の前 口縁部～胴部上位片	口	21.6			細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第142図 PL.103	16	土師器 台付甕	貯蔵穴２ 台部～胴部下位					細砂粒/良好/褐	胴部と台部は貼付か､台部端部は周囲を打ち欠いて再調整。胴部はヘラ削り、台部は横ナデ。内面は胴部と台部上半にヘラナデ。	
第142図 PL.103	17	須恵器 甕	埋土 胴部片					細砂粒・粗砂粒/還元焔/灰白	外面は平行叩き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	

遺物出土状態

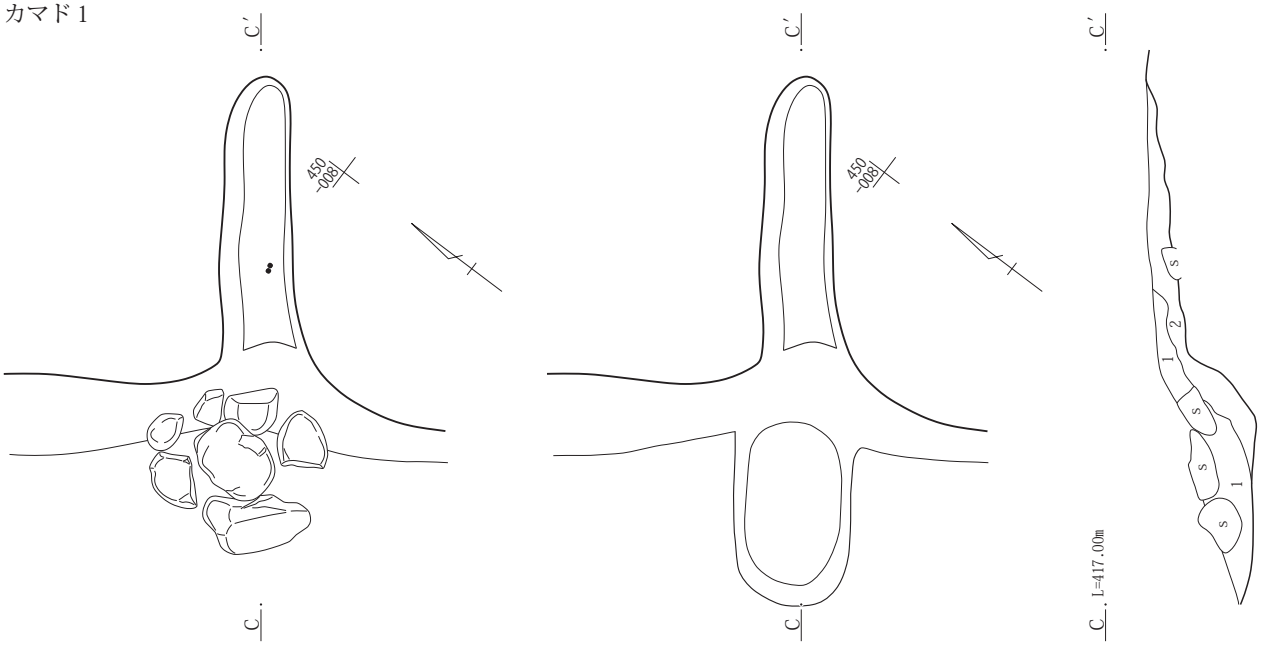


12号竪穴建物
1　黒褐色土　ローム粒と焼土粒を僅かに含み、粘性あり。



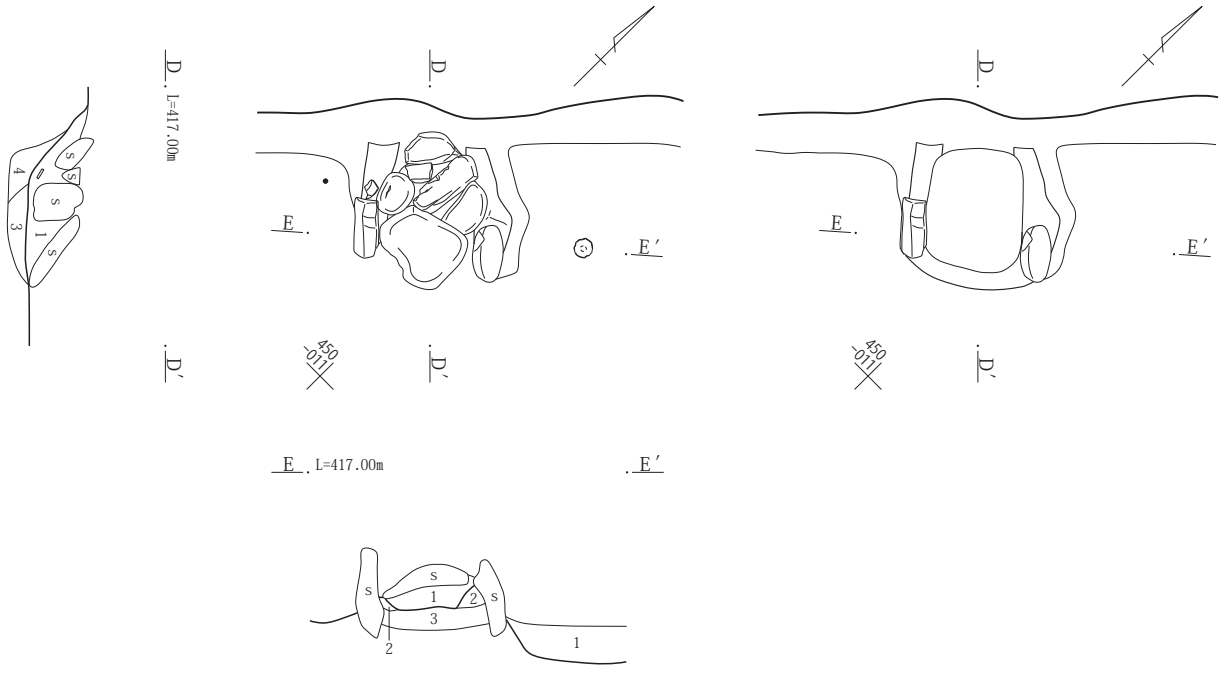
第139図　12号竪穴建物　遺物出土状態・床面・床面下　平・断面図

カマド１

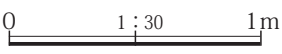


12号竪穴建物カマド１
1　黒褐色土　ローム粒と焼土粒を僅かに含む。竪穴建物１層と同じ。
2　黒褐色土　焼土粒・小ブロックを多く含み、粘性あり。

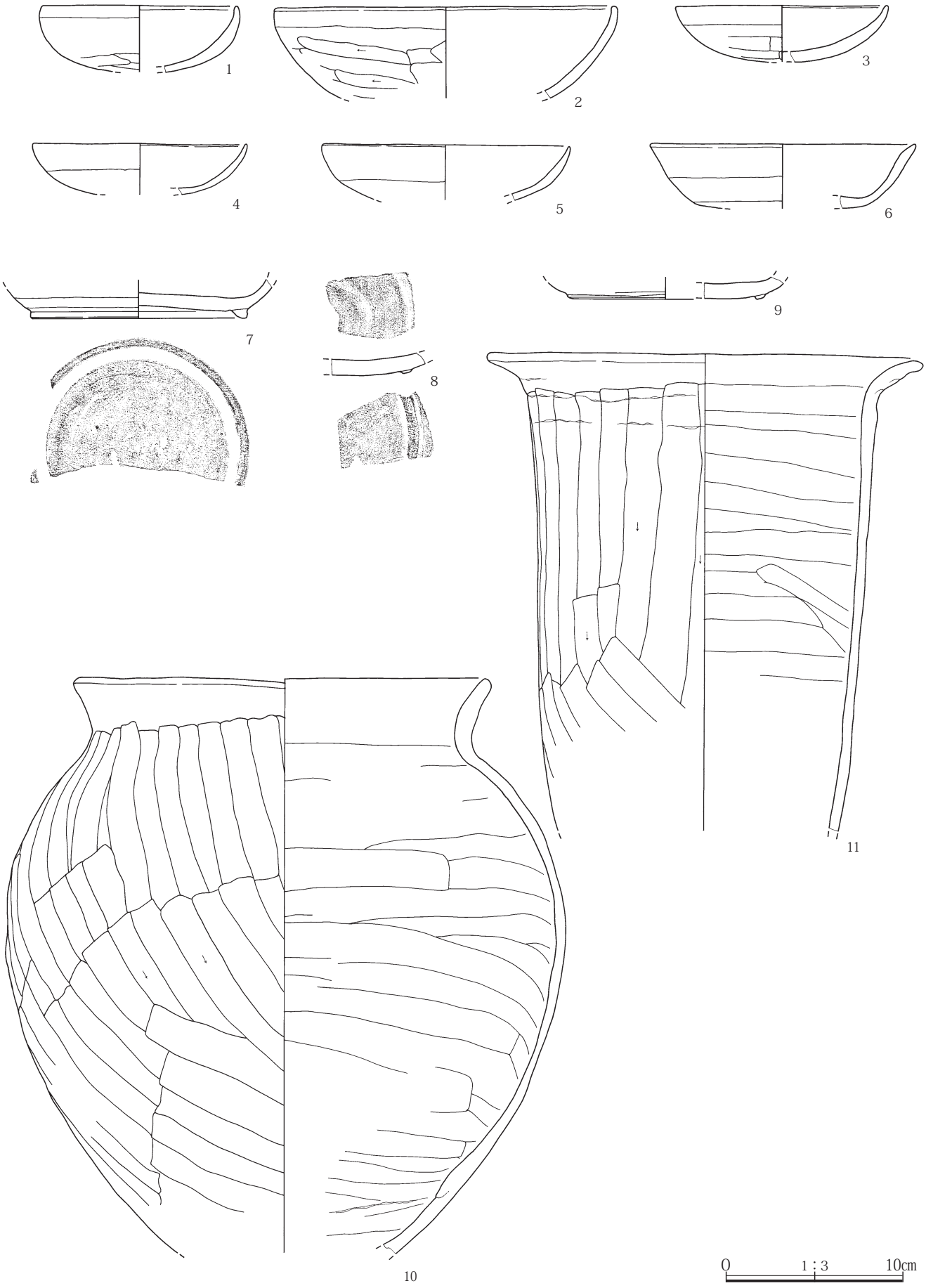
カマド２



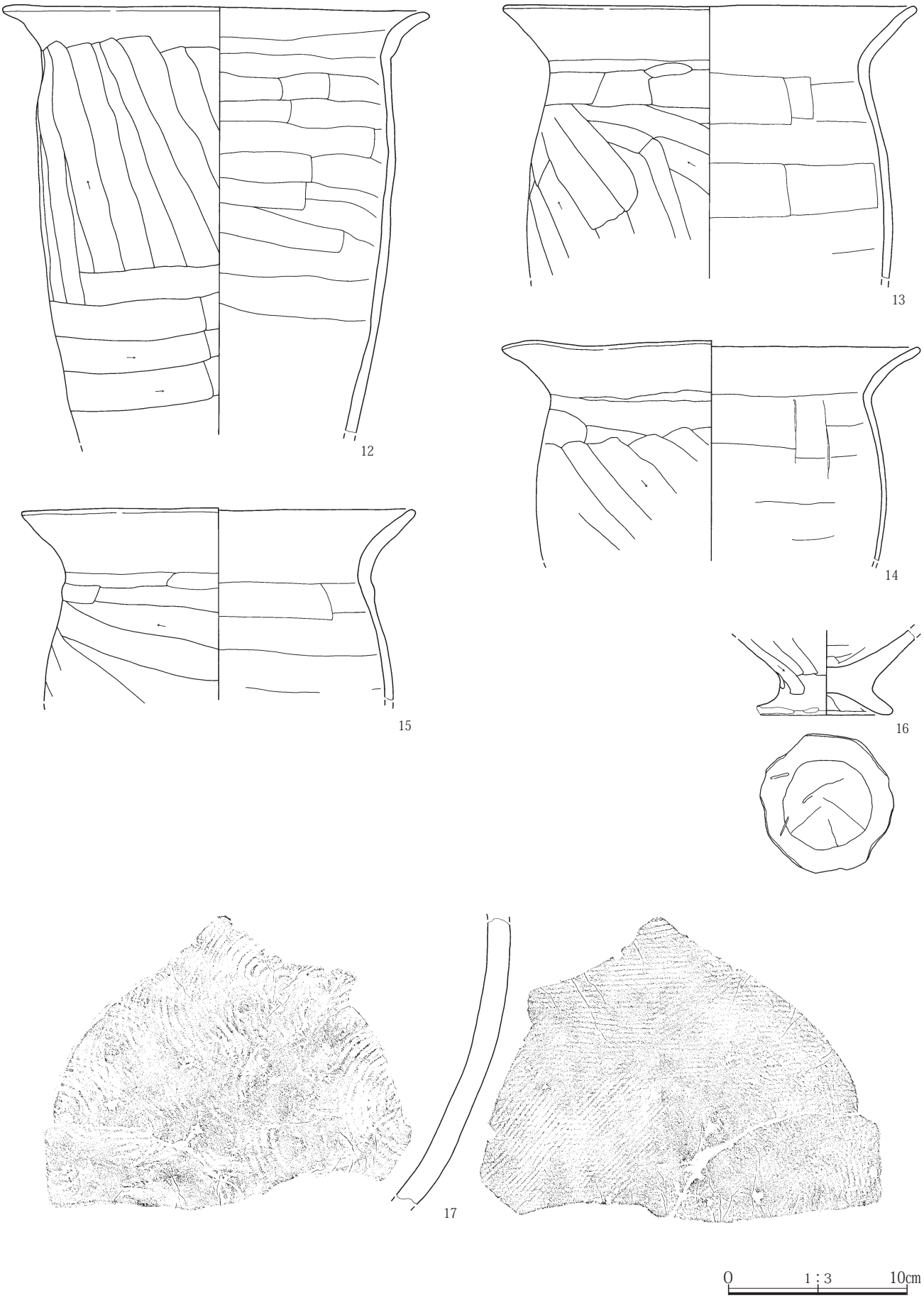
12号竪穴建物カマド２
1　黒褐色土　黄色砂粒と焼土粒を少々含み、粘質。
2　灰黄褐色土　焼土ブロック・砂粒を少量含み、粘質。
3　暗赤褐色土　焼土・砂粒を少量含む。
4　灰黄褐色土　砂粒・粘質粒を少量含み、粘質。



第140図　12号竪穴建物　カマド１・２平・断面図



第141図　12号竪穴建物　出土遺物１



第142図　12号竪穴建物　出土遺物２

13号竪穴建物（第143図、第34・40表、PL.11・104）

本竪穴建物は、４号竪穴建物調査時に重複する別な竪穴建物として確認された。その重複の状態は、４号竪穴建物内の床面下に長軸方向を違えた状態で、僅かな掘り込みが残存する程度であった。

位置：３区の南東寄りに位置し、４号竪穴建物内の直下にある。

グリッド：１Ｕ・1Ｖ－21

座標値：X=61,455～61,459　Y=-94,041～94,046

重複：先述したように４号竪穴建物との新旧は、４号竪穴建物の床面下に確認されたことからも、本建物の方が明らかに旧い。

形状：方形

規模：長軸4.75m　短軸4.28m　壁高６～44㎝

長軸方向：Ｎ－63°－Ｅ　　**床面積**：15.87㎡

埋没土：上位層は重複する４号竪穴建物であり、本竪穴建物の埋没土には７・８層とした黒褐色土を確認した。なお、自然堆積かどうかは不明。

床面・壁：床面は基本層序Ｄ地点Ⅸ層中にあり、概ね平坦であるが、部分的に礫層の礫が露出する。壁は僅かに残存し、６～44cmほどを測る。

カマド：北東壁中央の東寄りに位置し、燃焼部底面が被熱して焼土化しているのみで、残存状態は極めて悪く詳細は不明。

遺物：出土遺物は比較的多い中で、カマドの左脇から１の土師器鉢、３の土師器小型甕、さらに２の土師器の甑が床面直上に出土している。

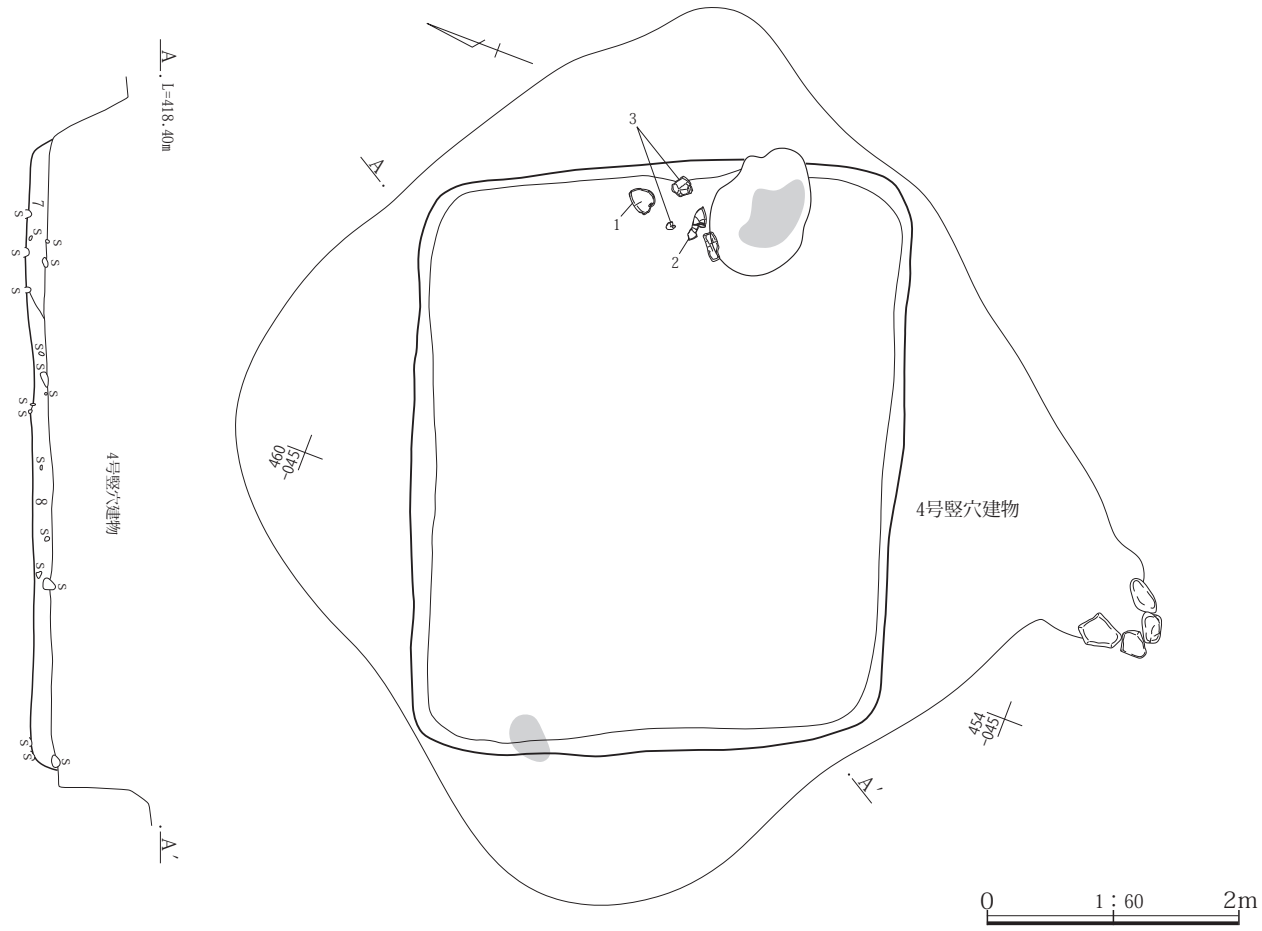
出土遺物として、土器４点を図示した。全て土師器で、１の鉢、３の小型甕と４の甕胴部、２の甑である。

未掲載遺物には、同時期の土師器細片が多くある。

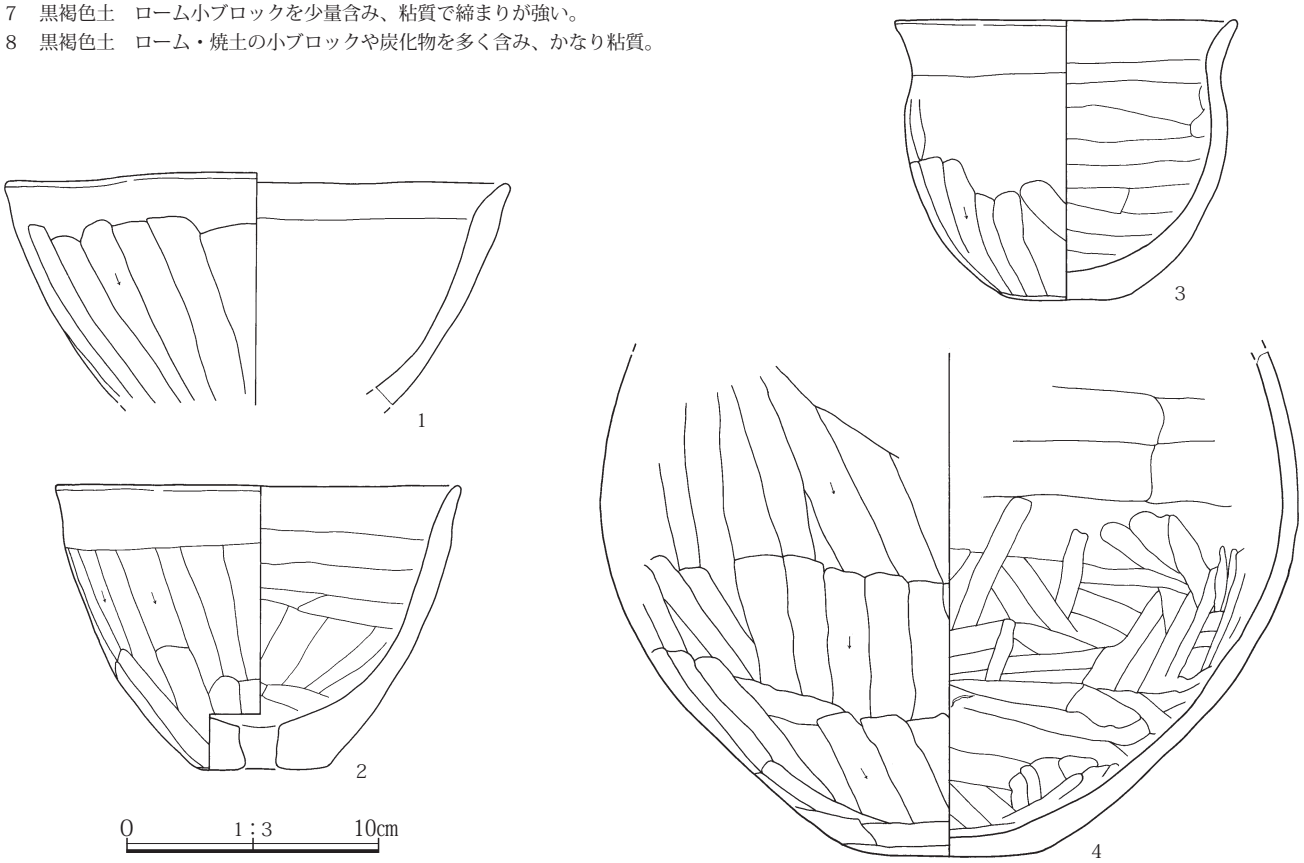
所見・時期：建物の時期は、出土土器から６世紀後半と考えられる。

第34表　13号竪穴建物遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第143図 PL.104	1	土師器 鉢	カマド左 口縁部～体部下位片	口	19.6			細砂粒/良好/明黄褐	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面は体部にヘラナデか、器面摩滅のため単位不明。	
第143図 PL.104	2	土師器 有孔鉢	床直 2/3	口 底	15.8 4.9	孔 高	1.7×1.2 11.2	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部はヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。	
第143図 PL.104	3	土師器 小型甕	カマド左 1/2	口 底	13.4 5.0	高	11.0	細砂粒/良好/暗褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り、胴部上半は器面摩滅のため単位不鮮明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第143図 PL.104	4	土師器 甕	埋土 底部～胴部片	底 胴	8.6 27.4			細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	



13号竪穴建物
7　黒褐色土　ローム小ブロックを少量含み、粘質で締まりが強い。
8　黒褐色土　ローム・焼土の小ブロックや炭化物を多く含み、かなり粘質。



第143図　13号竪穴建物　平・断面図、出土遺物

第３項　掘立柱建物

本調査で検出された古墳時代から古代の掘立柱建物は、第２面調査において２区と３区の堺に３棟を確認した。但し､この２棟は整理時の認定であることから､個々の写真はない。

以下、各建物ごとに記載する。(第41表　掘立柱建物一覧を参照)

１号掘立柱建物(第144図、第41表)

本掘立柱建物は規模が小さく、西辺を重複する２号掘立柱建物東辺と重なる。

位置：２区の北西隅付近の壁際に位置し、西側を２号掘立柱建物と重複し、北西側5.0mに３号掘立柱建物、南東側7.0mに11号竪穴建物がある。

グリッド：１Ｑ・１Ｒ-22

座標値：X=61,461～61,462　Y=-94,024～94,026

重複：重複する２号掘立柱建物との新旧は、重複する柱穴の土層断面の確認から本掘立柱建物の方が旧い。

形状：長方形

規模：桁行方向1.94m　梁行方向1.20m

長軸方向：Ｎ－77°－Ｗ

検出状況・埋没土：検出された柱穴はＰ１～４の４基で、桁行１間、梁行１間の掘立柱建物となる。各柱間の距離は、桁行方向で1.94m、梁行方向で1.18～1.20mを測る。各柱穴は概ね方形に近い楕円形ないし円形を呈し、その規模は長軸46～55㎝、短軸33～43㎝、深さ19～27㎝を測る。埋土は暗褐色土を主体とする。

所見・時期：検出面が第２面であることから、本建物の時期は古代である可能性が高い。

２号掘立柱建物(第144図、第41表)

本掘立柱建物の東辺の一部を、１号掘立柱建物西辺と重複する。

位置：２・３区境の北西壁際に位置し、東辺の一部を１号掘立柱建物と重複し、北西側2.0mに３号掘立柱建物、南東側8.0mに11号竪穴建物、南側10.0mに８号竪穴建物がある。

グリッド：１Ｒ-22・23

座標値：X=61,461～61,465　Y=-94,025～94,029

重複：重複する１号掘立柱建物との新旧は、重複する柱穴の土層断面の確認から本掘立柱建物の方が新しい。

形状：六角形

規模：桁行方向3.0m　梁行方向2.51m

長軸方向：Ｎ－23°－Ｅ

検出状況・埋没土：検出された柱穴はＰ１～７の７基で、南東隅の柱穴は未検出。桁行２間、梁行２間の計８基の柱穴からなる掘立柱建物で、梁行方向の側柱の中間はやや外側に張り出す形となり、その形状は六角形を呈する。各柱間の距離は、桁行方向で1.44～1.48m、梁行方向で1.18～1.28mを測る。各柱穴は概ね長方形ないし楕円形を呈し、その規模は長軸48～66㎝、短軸39～53㎝、深さ17～27㎝を測る。埋土は暗褐色土を主体とする。

所見・時期：検出面が第２面であることから、本建物の時期は古代である可能性が高い。

３号掘立柱建物(第144図、第41表)

本掘立柱建物の北半は調査範囲外となるため、南半のみの調査となった。

位置：３区北東隅の壁際に位置し、建物の北半は調査範囲外となる。南東側2.0mに２号掘立柱建物、そして１号掘立柱建物がある。

グリッド：１Ｒ・１Ｓ-23

座標値：X=61,467～61,469　Y=-94,028～94,031

形状：長方形か

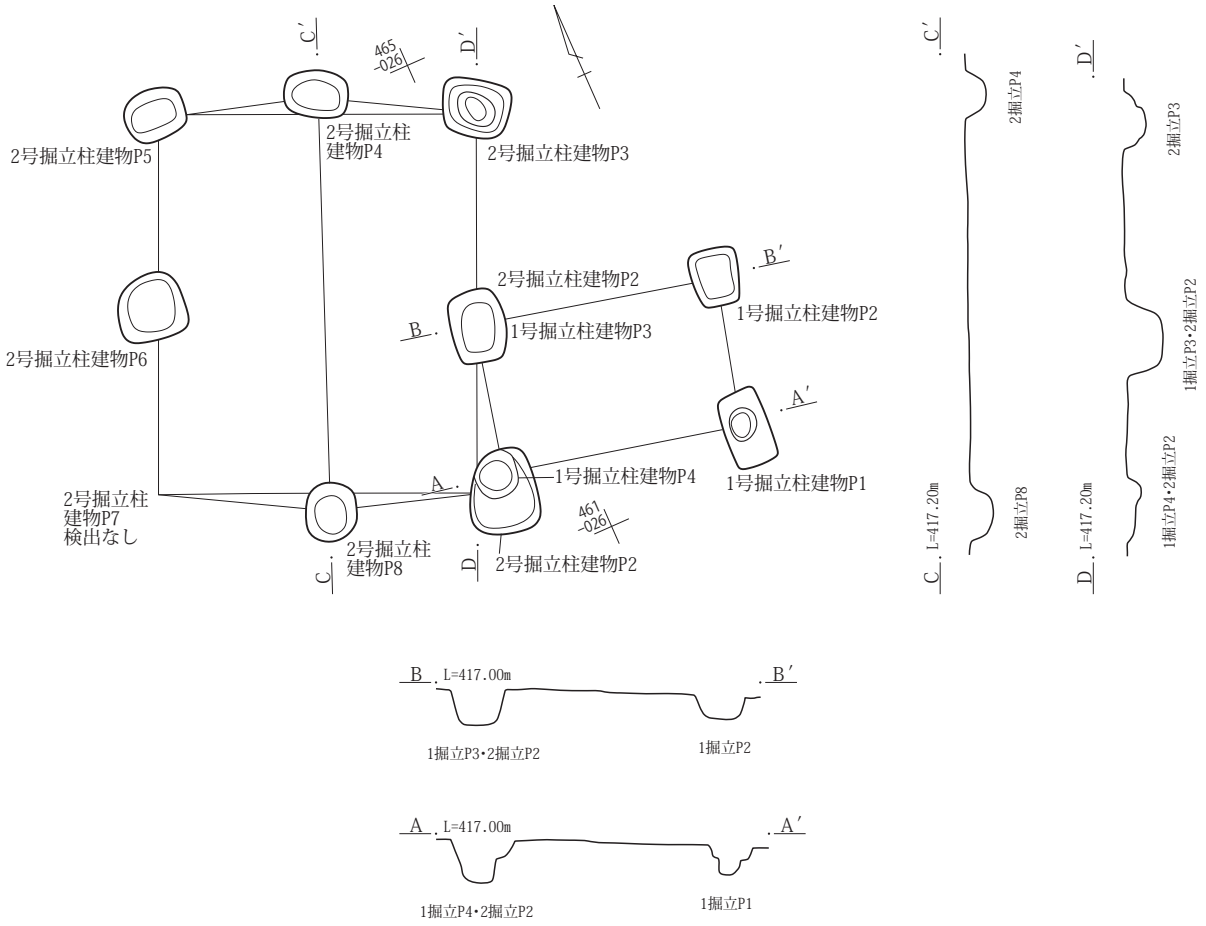
規模：桁行方向(3.18)m　梁行方向(1.46)m

長軸方向：Ｎ－90°－Ｅ

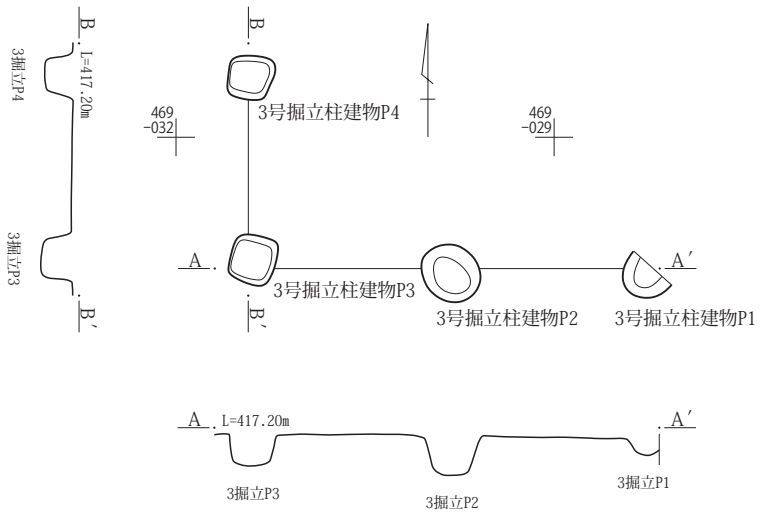
検出状況・埋没土：検出された柱穴はＰ１～４の計４基で、桁行２間、梁行１間であるが、規模の不明な掘立柱建物である。現状の柱間の距離は、桁行方向で1.58～1.60m、梁行方向で1.46mを測る。各柱穴は概ね方形ないし楕円形を呈し、その規模は長軸36～50㎝、短軸35～43㎝、深さ14～29㎝を測る。埋土は暗褐色土を主体とする。

所見・時期：検出面が第２面であることから、本建物の時期は古代である可能性が高い。

１・２号掘立柱建物



３号掘立柱建物



0　1：60　2m

第144図　１～３号掘立柱建物　平・断面図

第４項　柱穴列

１区において１号柱穴列を検出したが、３号竪穴建物に付属する柱穴列である可能性があることから、記述は先述の３号竪穴建物の項を参照。

第５項　ピット

２区の北西側となる11号竪穴建物西側に、２基の柱穴を検出したのみである。径45～50cmほどの円形で、深さ11～15cmと浅い。暗褐色土を埋土とする。

第６項　集石

本調査で検出された古墳時代から古代の集石は、第２面調査において１～５号の５基に番号を付し、４号竪穴建物北側に位置する集石列については整理時に６号集石として番号を付した。なお、５号集石と６号集石については、それぞれが竪穴建物の付属施設としての可能性があることから、各竪穴建物の項を参照。

以下､集石ごとに記載する｡(第46表　集石一覧を参照)

１号集石(第145図、第35・46表、PL.18・104)

位置：１区中央の西寄りに位置し、北東側に３号竪穴建物がある。

グリッド：１Ｈ－10

座標値：X=61,402～61,404　Y=-93,975～93,977

検出状況：１区の第２面調査時に検出された。浅い掘り込み内に、多くの大型・中型礫が径2.27mほどの円形に集石されている。出土した遺物の大多数が縄文時代の遺物であり、本集石に伴うものはない。

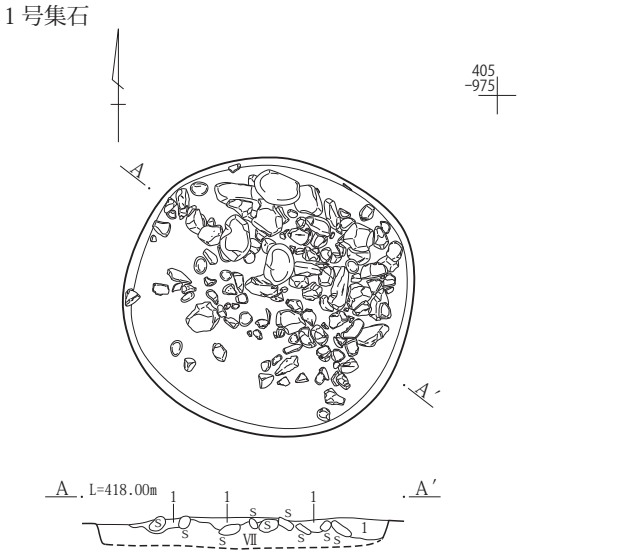
形状：円形

規模：長軸2.27m　短軸2.22m　深さ11～17cm

埋没土：褐灰色土層を主体とする。As-Bと黒色土との混土で、基本層序Ｂ地点Ⅵa層と同じ土である。

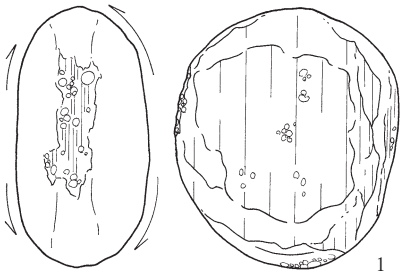
遺物：集石内には、時期の異なる縄文時代の石器がかなり含まれ、打製石斧１点、礫器１点、石核４点、敲石１点、凹石３点、磨石13点、台石１点が確認できた。また、縄文土器が少量出土している。

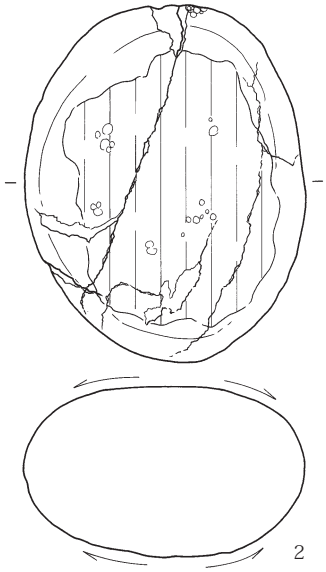
図示した１・２は縄文時代の粗粒輝石安山岩製の磨



１号集石
1　褐灰色土　As-Bと黒色土の混土。(基本層序Ｂ地点Ⅵa層と同じ)
Ⅶ　暗褐色土　基本層序Ｂ地点Ⅶ層。

0　1：60　2m





0　1：3　10cm

第145図　１号集石　平・断面図、出土遺物

石であるが、他に凹石２点、磨石２点、台石１点を写真のみで掲載とした。

所見・時期：埋没土の状況から、時期はAs-B降下以前と考えられる。

２号集石(第146図、第36・46表、PL.18・105)

位置：２区東半の南東壁際付近に位置し、北側に３号集石が連なるようにある。また、西側4.5mには１号竪穴建物がある。

グリッド：１Ｋ－12・13

座標値：X=61,413～61,420　Y=-93,990～93,993

検出状況：２区東半の第２面調査時に検出された。本集石は基本層序Ｂ地点Ⅵ層(黒褐色土)中にあり、扁平な大型礫を中心に、周囲に中型礫が散乱する。その範囲は長軸6.5m、短軸3.15mとなる。出土した遺物の大多数が縄文時代の遺物で本集石に伴わないが、僅かに古墳時代の土器が出土している。

形状：不整形

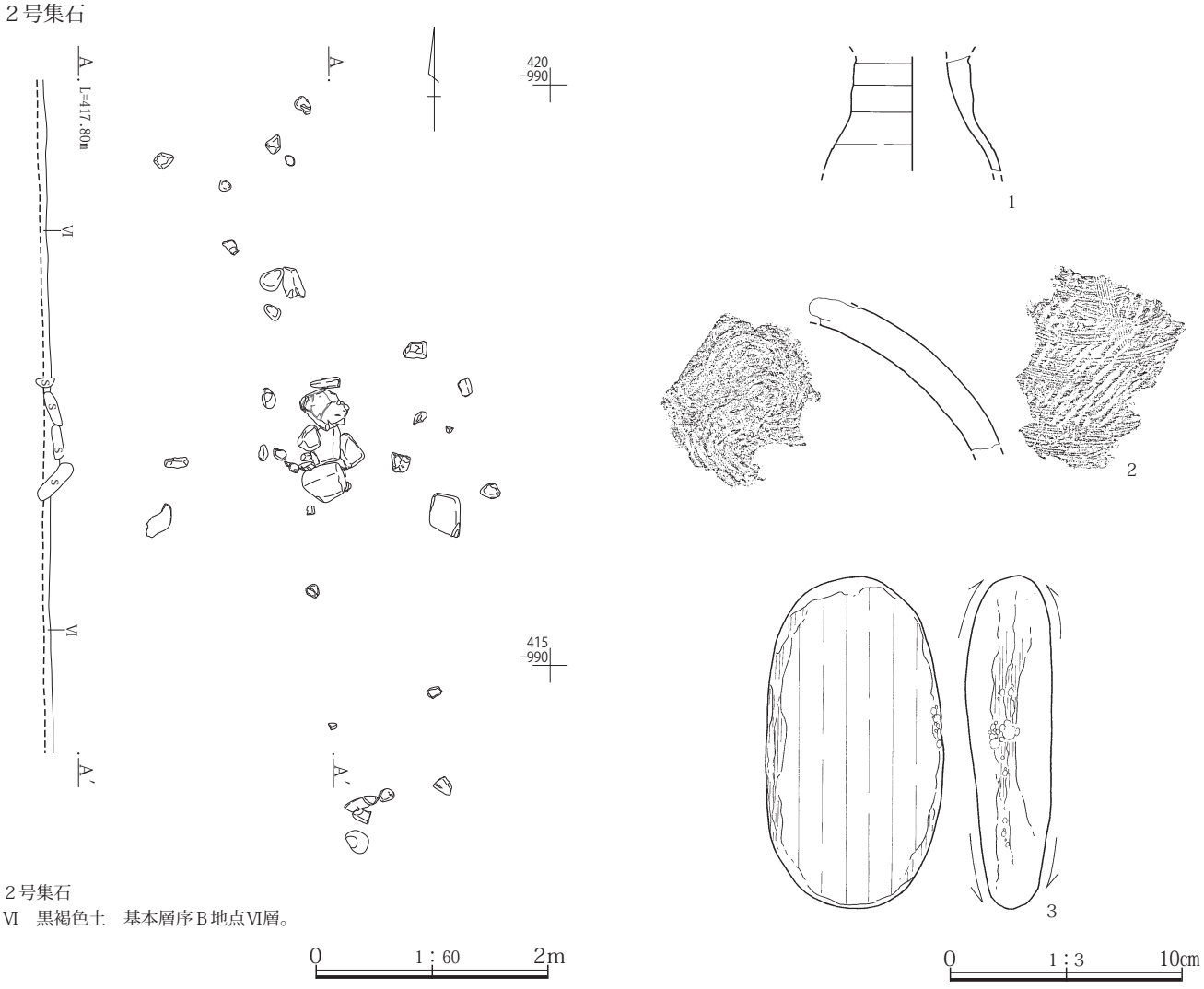
規模：長軸6.5m　短軸3.15m

長軸方向：Ｎ－20°－Ｗ

遺物：集石内には、時期の異なる縄文時代の石器(礫器１点、石核２点、凹石２点、磨石３点、台石１点)が含まれていたが、古墳時代の土器も僅かに出土している。

図示したのは、１の須恵器の高杯脚部、２の須恵器の壺の胴部片である。また、縄文時代の石器として３の粗粒輝石安山岩製の磨石を図示し、他に礫器、凹石、台石の各１点を写真のみの掲載とした。

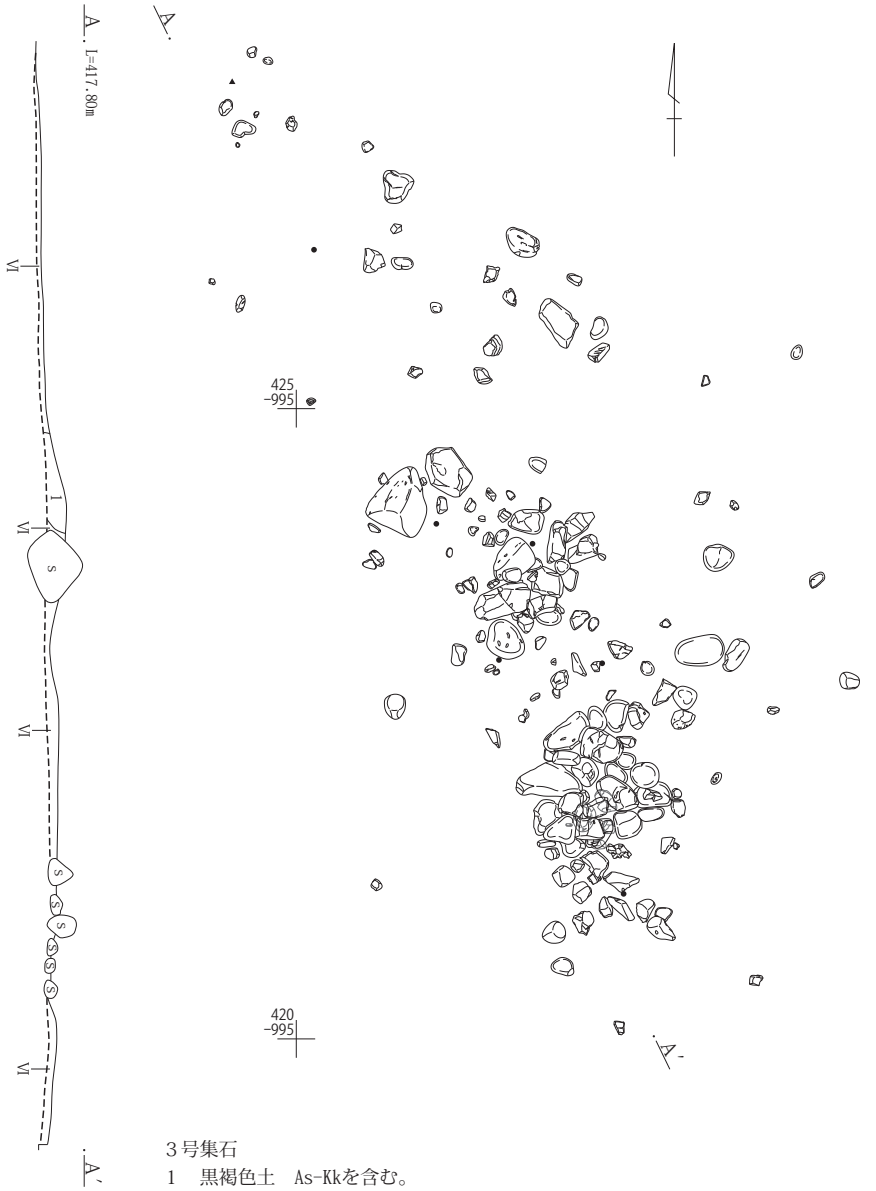
所見・時期：埋没土の状況から、時期はAs-B降下以前と考えられる。



２号集石
Ⅵ　黒褐色土　基本層序Ｂ地点Ⅵ層。

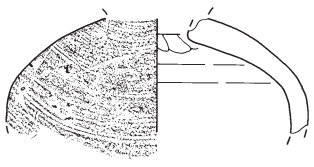
第146図　２号集石　平・断面図、出土遺物

３号集石



３号集石
1　黒褐色土　As-Kkを含む。
Ⅵ　黒褐色土　基本層序Ｂ地点Ⅵ層。

0　1：60　2m



0　1：3　10cm

第147図　３号集石　平・断面図、出土遺物

４号集石

４号集石
1　褐灰色土　As-BとⅥ層の混土でAs-Kk下畠の耕土。（基本層序Ｂ地点Ⅵa層と同じ）
Ⅵ　黒褐色土　基本層序Ｂ地点Ⅵ層。

第148図　４号集石　平・断面図、出土遺物

第35表　１号集石遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第145図 PL.104	1	楕円形 磨石	床直 完形	長 幅		厚 重	715.5	粗粒輝石安山岩	中型礫を利用し、全体に丁寧な研磨が施され、表面は滑らかである。	
第145図 PL.104	2	長形 磨石	床直 完形	長 幅		厚 重	1552.4	粗粒輝石安山岩	扁平な中型礫を利用し、全体に丁寧な研磨が施され滑らかとなる。被熱し、ひび割れる。	
PL.104	3	礫石器 凹石	床直 完形	長 幅		厚 重	844.9	粗粒輝石安山岩	中型礫を利用し、全体に研磨が施され、表裏面の中央に凹みをもつ。	
PL.104	4	楕円形 凹石	床直 完形	長 幅		厚 重	531.7	粗粒輝石安山岩	中型礫を利用し、全体に丁寧な研磨が施され、表裏面の中央に浅い凹みをもつ。	
PL.104	5	楕円形 磨石	床直 完形	長 幅		厚 重	221.5	粗粒輝石安山岩	扁平な小型礫を利用し、全体に丁寧な研磨が施される。被熱し、ひび割れる。	
PL.104	6	長形 磨石	床直 完形	長 幅		厚 重	627.1	粗粒輝石安山岩	中型礫を利用し、全体に丁寧な研磨が施され、表面は滑らかとなる。端部に敲打痕をもつ。	
PL.104	7	礫石器 台石？	床直 1/3	長 幅		厚 重	2552.3	粗粒輝石安山岩	扁平な大型礫を利用し、表裏面には丁寧な研磨が施され、表面は砥面状に滑らかとなる。周縁の一部は剥離が繰り返され、大きくは分割されている。	

第36表　２号集石遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第146図	1	須恵器 高杯	埋土 脚部片					細砂粒/還元焔/灰	脚部は２方の透孔があけられている。ロクロ整形、回転は右回りか。	
第146図 PL.105	2	須恵器 壺	床直 胴部片					細砂粒/還元焔/灰 オリーブ	外面は平行叩きが残るが、間隔をあけたカキメが施されている。内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第146図 PL.105	3	長形 磨石	床直 完形	長 幅		厚 重	582.6	粗粒輝石安山岩	扁平な中型礫を利用し、全体に丁寧な研磨が施される。	
PL.105	4	礫石器 礫器	床直 完形	長 幅		厚 重	731.4	細粒輝石安山岩	表面に自然礫面を大きく残し、裏面は剥離面となる。下端の刃部は、両面からの加工が粗く施される。	
PL.105	5	楕円形 磨石	床直 完形	長 幅		厚 重	361.0	粗粒輝石安山岩	小型礫を利用し、全体に研磨が施され、表裏面の中央に浅い凹みをもつ。	
PL.105	6	礫石器 台石?	床直 完形	長 幅		厚 重	15600.0	粗粒輝石安山岩	平坦な面をもつ大型礫を使用し、表裏面は広く丁寧な研磨が施される。石皿の可能性もある。	

第37表　３号集石遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第147図 PL.105	1	須恵器 甕	床直 胴部上半片	胴	12.0			細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転は右回り。胴部はカキメが施されている。内面の頸部付近は絞り込まれて頸部に移行する。	
PL.105	2	礫石器 多孔石	床直 完形	長 幅		厚 重	1040.9	石英閃緑岩	分割礫を使用し、表裏面に凹みをもつ。	
PL.105	3	長形 磨石	床直 完形	長 幅		厚 重	627.7	粗粒輝石安山岩	中型礫を使用し、全体に丁寧な研磨を施している。	
PL.105	4	礫石器 台石？	床直 1/2	長 幅		厚 重	7600.0	粗粒輝石安山岩	平坦な面をもつ大型礫を使用し、表裏面は広く丁寧な研磨が施される。表面は中央がやや凹み、石皿の可能性もある。被熱によりひび割れる。	

第38表　４号集石遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第148図 PL.105	1	土師器 杯	床直 口縁部～体部片	口	15.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。	
第148図 PL.105	2	石製品 管玉	埋土 完形	長 幅	2.5 1.1	厚 重	1.1 5.53	碧玉	丁寧に研磨され、光沢に富む。上面孔および下面孔には孔周辺凹部を除き線条痕が残る。孔は片側穿孔による。色調は緑黒色。	
第148図 PL.105	3	石製品 石棒	床直 不明	長 幅		厚 重	4025.8	緑色片岩	大型石棒で、全体に丁寧な研磨が及ぶ。両端部は欠損。	

３号集石(第147図、第37・46表、PL.18・105)

位置：２区東半の南東壁際付近に位置し、南側に２号集石、北側に４号集石が連なるようにある。

グリッド：１Ｋ・１Ｌ－14・15

座標値：X=61,420～61,427　Y=-93,991～93,995

検出状況：２区東半の第２面調査時に検出された。本集石は基本層序Ｂ地点Ⅵ層(黒褐色土)中にあり、その中心を円形ないし楕円状に二分することができる。それぞれ中・大型礫を中心に纏まりをもち、周囲にまで礫が散乱する。その範囲は長軸7.9m、短軸3.0mとなる。

出土した遺物の大多数が縄文時代の遺物であり、本集石に伴うものはない。

形状：不整形

規模：長軸7.9m　短軸3.0m

長軸方向：Ｎ－18°－Ｗ

遺物：集石内には、時期の異なる縄文時代の石器(石核１点、凹石１点、磨石３点、砥石１点、台石１点)が含まれていたが、古墳時代の土器も僅かに出土している。

図示した遺物は、1の須恵器の甕の胴部上半である。また、縄文時代の凹石、磨石、台石の各１点を写真のみの掲載とした。

所見・時期：埋没土の状況から、時期はAs-B降下以前と考えられる。

４号集石(第148図、第38・46表、PL.18・105)

位置：２区東半の北東壁際付近に位置し、南側に２号集石が連なるようにある。

グリッド：１Ｋ・１Ｌ－16・17

座標値：X=61,429～61,438　Y=-93,994～93,997

検出状況：２区東半の第２面調査時に検出された。本集石は基本層序Ｂ地点Ⅵ層(黒褐色土)中にあり、集石上面には僅かに基本層序Ｂ地点Ⅵa層(褐灰色土)が確認できる。集石は長さ９m、幅４mの範囲に広がり、礫の密な南側と、粗な北側とに二分することができる。それぞれ中・大型礫を中心に纏まりをもつが、礫の密集度が大きく異なる。また、それぞれ周囲にまで礫が散乱する。その範囲は長軸9.0m、短軸4.0mとなる。出土した遺物の大多数が縄文時代の遺物であるが、僅かに古墳時代の遺物が出土している。

形状：不整形

規模：長軸9.0m　短軸4.0m

長軸方向：Ｎ－11°－Ｅ

遺物：集石内には、時期の異なる縄文時代の石器(石核１点、凹石１点、磨石４点、台石２点、石棒１点)が含まれていたが、古墳時代の土器や石製品も出土している。

図示した遺物は、１とした古墳時代の土師器の杯、２は緑黒色をなす碧玉製の管玉で、長さ2.5cm、径1.1cm、上面孔径１mm、下面孔径３mmを測り、片側穿孔である。また、３として縄文時代の緑色片岩製の石棒(両端を欠く)も併せて図示した。

所見・時期：埋没土の状況と出土遺物から、時期は古墳時代以降からAs-B降下以前と考えられる。

５号集石(PL.18)

５号竪穴建物に付属する集石と考えられる。記述は先述の５号竪穴建物の項を参照。

６号集石

整理時において、４号竪穴建物北側の集石列を６号集石として番号を付した。４号竪穴建物に付属する集石と考えられる。記述は先述の４号竪穴建物の項を参照。

第７項　溝

本調査で検出された古墳時代から古代の溝は、第１面調査において古代畠と共に１条検出した。(第47表　溝一覧を参照)

１区１号溝(第149図、第47表)

位置：１区の中央やや東寄りに位置し、南側から北側へ緩やかに蛇行するように延びる。この溝位置は、先述した６号溝と似た上位に位置し、６号溝に比べると蛇行は緩く、同じ位置をトレースした状態にはない。

グリッド：１Ｄ～１Ｇ－４～13

座標値：X=61,374～61,419　Y=-93,958・93,971

検出状況：第１面調査時に検出された。緩く蛇行しながら南北方向に延びる溝で、底面は北側ほど低くなる。基本土層Ⅳ層となるAs-Kkに覆われた古代畠の２号畠と３号畠を画するように、両畠の間に検出された。この２号畠と３号畠の畝間方向は、本溝を境に両畝間方向が直行するように方向を違える。

遺物等の出土はない。

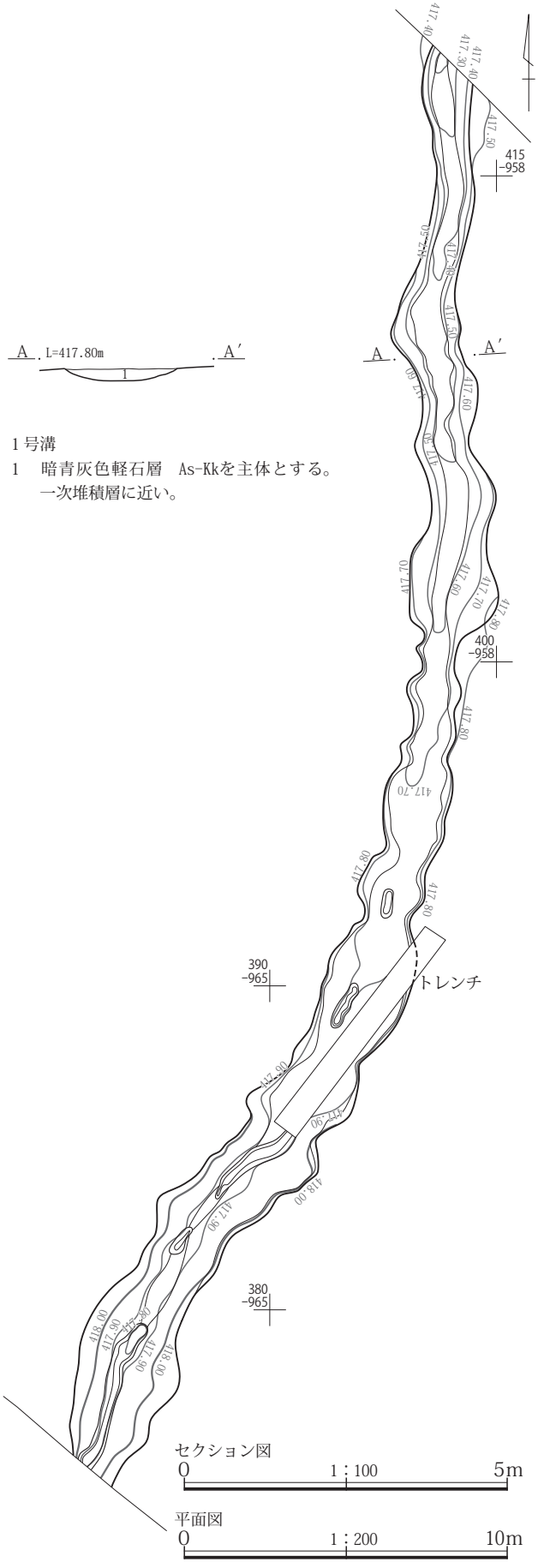
規模：長さ45.0m　上面幅1.1～2.6m

深さ12～24cm

延伸方向：Ｎ－18°－Ｅ

埋没土：一次堆積に近いAs-Kkで、暗青灰色の軽石を主体とする。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を主体とすることや、古代畠の区画を規制(区画)する溝であることから、時期は古代畠と同時期と考えられる。



第149図　１号溝　平・断面図

第８項　畠

本調査で検出された古墳時代から古代の畠は、第１面調査において基本層序Ⅳ層となるAs-Kk下面に、調査範囲のほぼ全域に検出された。このAs-Kkに覆われた古代畠は、先述の１号溝を境に畝方向を変え、それ以前に堆積したAs-Bを含む基本層序Ⅴ層を耕作土としている。

以下、畠ごとに記載する。（第48表　畠一覧を参照）

２号畠（第151図、第48表、PL.1・3・34・35）

整理時に遺構番号を付した。

位置：１区東半の１号溝より西側の調査範囲ほぼ全域に広がる。

グリッド：１Ｅ～２Ｃ－７～30

座標値：X=61,388～61,502　Y=-93,960～94,084

検出状況：第１面調査において、浅間山を給源とするAs-Kkの一次堆積層下面に検出された。１号溝の西側の調査範囲ほぼ全域に広がる。As-Kkを除去した第１面調査での遺構確認で、畠の畝間にAs-Kkが溜まった状態で、As-Kkが帯状に長く幾筋も連続して連なる状況が明らかとなった。周辺遺跡での古代畠の検出状況からしても、古代畠の畝間と同じ状態にあり、As-Kkに覆われた古代畠であることは明らかであった。調査区ごとの検出ではあったが、どの調査区においても、As-Kkで帯状となる畝間の間隔や延びる方向はほぼ同じであった。調査範囲最西端となる４区西半では、一段低くなる地点に検出されていないが、同じ地点の一部では畦・畝間を検出されている。同様な状況は、後述の３号畠も一段低い面での検出である。検出された本畠の畦・畝間は、As-Kkを除去した状態での畝間の間隔は71.5cm、畝の高さは５cmほどを測る。確認できた畝の長さは37.05mを測り、畝の数は183条を数える。また、その走向は、僅かに蛇行するものの、概ね等高線に直行するように北東方向を向く。これは、土地の緩い傾斜方向とも一致する。東側に隣接する四戸遺跡での古代畠においても、かなり広い面積に同一方向に走向する畦・畝間が検出されているが、状況は近いもののAs-Kk直下の畠ではない。

一方、先述した竪穴建物の項にもあったように、As-Kkで埋没した畝間が方形に検出できなかった箇所

が数ヵ所ある。その検出できなかった箇所は竪穴建物であり、実際の竪穴部よりも一回り広い範囲で検出できていなかった状況が解った。それは、竪穴部の外側に周堤帯が存在していたことを想起させ、盛り上がった部分での検出の困難さ、さらには竪穴部内部へのAs-Kkの堆積は第１面の遺構確認で検出できないのが道理であろう。

区画規模：長さ－m　幅(4.6)m
　　畝長(37.05)m　畝間間隔71.5cm
　　畝高５cm　　畝数(183)条
畝方向：Ｎ－43°－Ｅ
所見・時期：As-Kk直下に検出された畠であることから、時期はAs-Kk降下直前の古代で、３号畠と同時期と考えられる。

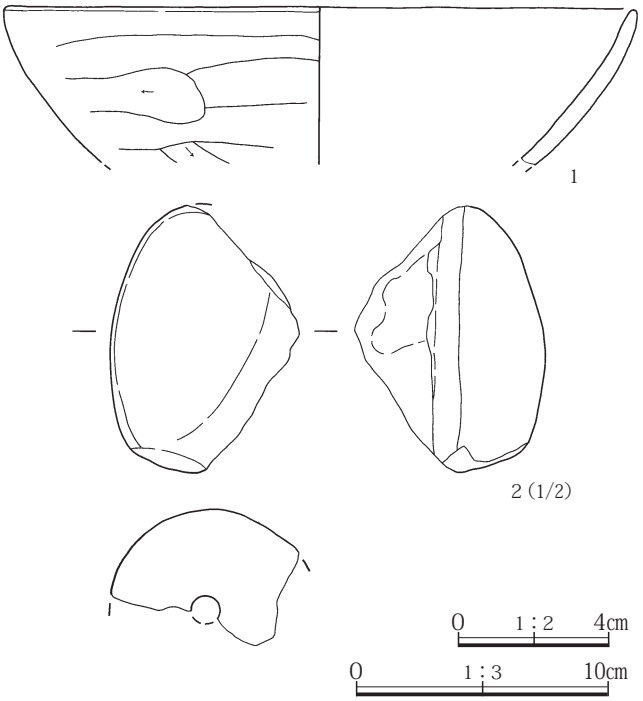
３号畠(第151図、第48表、PL.36)
位置：１区の東半に位置し、１号溝の東側にある。
グリッド：１Ｃ～１Ｅ－５～13
座標値：X=61,378～61,415　Y=-93,950～93,962
検出状況：第１面調査において、浅間山を給源とするAs-Kkの一次堆積層下面に検出された。１号溝の東側に面し、東側の万木沢川方向へと延びる。As-Kkを除去した第１面調査での遺構確認で、畠の畝間にAs-Kkが溜まった状態で、As-Kkが帯状に長く幾筋も連続して連なる状況が確認された。同じ１区でも東半と西半では段差があり、東半が低い面となる。検出された本畠の畦・畝間は、As-Kkを除去した状態の畝間の間隔は70.7cm、畝の高さは４cmほどを測る。確認できた畝の長さは9.08mを測り、畝の数は52条を数える。また、その走向は２号畠とは異なり、東方向を向く。

区画規模：長さ(38.0)m　幅(8.30)m
　　畝長(9.08)m　畝間間隔70.7cm
　　畝高４cm　　畝数(52)条
畝方向：Ｎ－90°－Ｅ
所見・時期：As-Kk直下に検出された畠であることから、時期はAs-Kk降下直前の古代で、２号畠と共存すると考えられる。

第９項　遺構外出土遺物

古墳時代から古代の遺構外出土遺物は、土師器や須恵器の小破片は多いものの、図示できるものは極めて少ない。

土器と土製品(土錘)の２点を図示した。１は須恵器の鉢であり、２は土錘で中心に孔を有する。



第150図　遺構外出土遺物

第39表　遺構外出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第150図 PL.105	1	須恵器 鉢	埋土 口縁部～体部片	口	24.9			細砂粒/良好/にぶい褐	口縁部は横ナデ、体部は上位にナデ、中位以下は手持ちヘラ削り。	
第150図 PL.105	2	土製品 土錘	遺構外 1/2欠損	長 幅	(7.0) (4.9)	厚	(3.2)	細:石英少・褐色粒・白色粒/良好/明黄褐色	楕円状を呈し長軸方向に欠損。孔は棒状製品による穿孔か。外面撫で調整	
PL.105	3	剥片石器 磨製石斧		長 幅	(4.9) 4.4	厚 重	(1.3) 40.3	変質安山岩	完成状態。刃部破片。表面側に被熱剥離痕、磨製石斧の破損も被熱の可能性が大。	
PL.105	4	剥片石器 打製石斧		長 幅	(9.9) 5.7	厚 重	1.7 97.0	細粒輝石安山岩	完成状態。上下両端を欠損。表裏面に摩耗痕が広がり、位置的に倦縛痕と捉えた。上端の欠損面は意図的に研磨されている。	撥形
PL.105	5	礫石器 磨石		長 幅	7.3 5.7	厚 重	4.1 253.8	細粒輝石安山岩	小形楕円礫。表裏面とも著しく摩耗、強い光沢がある。下端側小口部に敲打痕が集中する。	

第151図　2・3号畠平面図

第４節　中世以降の遺構と遺物

第１項　概要

中世以降の遺構は、基本層序Ⅲ層の浅間-粕川テフラ(As-Kk)混土層下面ないし基本層序Ⅳ層(As-Kkの一次堆積層)下面を確認面とした第１面調査において、土坑や溝、畠といった遺構が検出された。これらの遺構は、調査対象地内全体に広がりを見せ、土坑61基、溝３条、畠１区画を数える。この中世以降の状況は、万木沢川を挟んだ東側の四戸遺跡においても同様で、四戸遺跡では中世の掘立柱建物や鍛冶遺構､土壙墓等も検出されている。

第２項　土坑

検出された中世以降の土坑は、第１面調査において各調査区から検出され、１区に７基、２区に28基、３区に10基、４区に16基の計61基を数える。しかし、調査時には遺構番号を付していなかったため、整理段階に番号を付与した。古代畠と重複する多くの土坑の新旧は、埋土中にAs-Kkを混在することが特徴で、土坑の方が新しい。なお、個々の土坑については完掘していないことから、詳細については不明な点がある。

以下､各土坑ごとに記載する｡(第43表　土坑一覧を参照)

25号土坑

位置：１区の南東端に位置する。南西側に近接して26号土坑、北西側に27号土坑がある。

グリッド：１Ｃ－３・１Ｄ－３

座標値：X= 61,366～61,368　Y=- 93,953～93,955

検出状況：第１面調査時に検出された。

形状：楕円形

規模：長軸1.76m　短軸1.48m

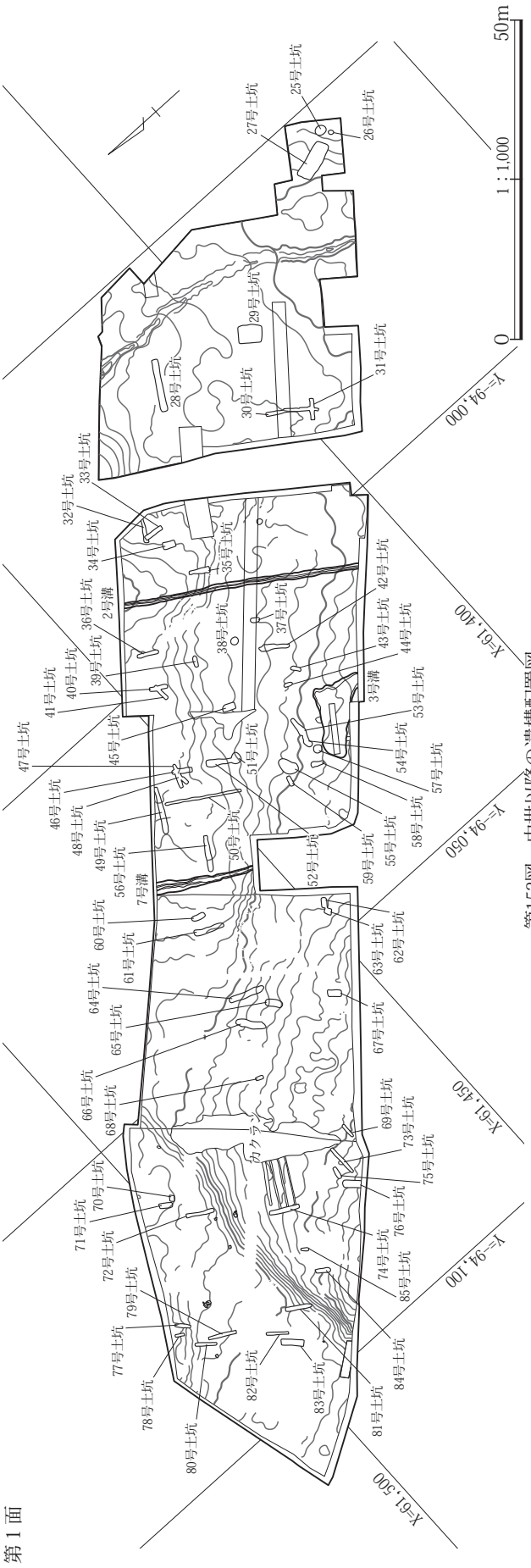
長軸方向：Ｎ－５°－Ｅ

埋没土：As-Kkを混在する。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

26号土坑

位置：１区の南東端に位置する。北東側に近接して25号



第152図　中世以降の遺構配置図

土坑、北西側に27号土坑がある。
グリッド：１Ｄ－３
検出状況：第１面調査時に検出された。
座標値：X=61,366・61,367　Y=-93,955～93,957
形状：楕円形
規模：長軸0.83m　短軸0.68m
長軸方向：Ｎ－36°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

27号土坑
位置：１区の南東端に位置する。南東側に25・26号土坑がある。
グリッド：１Ｄ－３・４
座標値：X=61,368～61,375　Y=-93,955～93,958
検出状況：第１面調査時に検出された。
形状：隅丸長方形
規模：長軸6.22m　短軸2.49m
長軸方向：Ｎ－18°－Ｗ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

28号土坑
位置：１区の北側に位置し、２号畠(古代)の一部と重複する。
グリッド：１Ｅ・１Ｆ－12
座標値：X=61,640～61,415　Y=-93,963～93,970
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸8.27m　短軸0.98m
長軸方向：Ｎ－59°－Ｗ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

29号土坑
位置：１区のほぼ中央に位置する。
グリッド：１Ｆ・１Ｇ－9
座標値：X=61,395～61,399　Y=-93,968～93,972
検出状況：第１面調査時に検出された。
形状：長方形
規模：長軸3.71m　短軸2.90m
長軸方向：Ｎ－38°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

30号土坑
位置：１区の東側中央に位置し、２号畠(古代)と重複する。南西側に31号土坑がある。
グリッド：１Ｉ・１Ｊ－９・10
座標値：X=61,397～61,403　Y=-93,981～93,986
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸8.28m　短軸5.83m
長軸方向：Ｎ－36°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

31号土坑
位置：１区の西隅付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。北東側に31号土坑がある。
グリッド：１Ｉ・１Ｊ－9
座標値：X=61,396～61,399　Y=-93,984～93,987
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸3.34m　短軸0.85m
長軸方向：Ｎ－54°－Ｗ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

32号土坑
位置:２区の北東隅に位置し、33号土坑および２号畠(古

代)と重複する。西側に34号土坑がある。
グリッド：１Ｉ－15・16
座標値：X=61,428～61,431　Y=-93,980～93,984
検出状況：第１面調査時に検出された。重複する33号土坑との新旧は不明であるが、いずれの土坑も２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸(3.66)m　短軸0.58m
長軸方向：Ｎ－59°－W
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

33号土坑

位置:２区の北東隅に位置し、32号土坑および２号畠(古代)と重複する。西側に34号土坑がある。
グリッド：１Ｉ－15・16
座標値：X=61,427～61,430　Y=-93,983・93,984
検出状況：第１面調査時に検出された。重複する32号土坑との新旧は不明であるが、いずれの土坑も２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸3.07m　短軸0.71m
長軸方向：Ｎ－７°－E
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

34号土坑

位置：２区の北東隅付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。東側に32・33号土坑、西側に35号土坑がある。
グリッド：１Ｊ－15
座標値：X=61,427～61,429　Y=-93,985～93,987
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長方形
規模：長軸1.99m　短軸1.06m
長軸方向：Ｎ－26°－E
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

35号土坑

位置：２区東側の中央付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。東側に34号土坑、西側に２号溝がある。
グリッド：１Ｋ－15
座標値：X=61,426～61,429　Y=-93,991～93,994
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長方形
規模：長軸3.27m　短軸1.01m
長軸方向：Ｎ－22°－E
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

36号土坑

位置：２区東側の北壁付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。南西側に39号土坑、北西側に40・41号土坑がある。
グリッド：１Ｌ－18
座標値：X=61,440～61,444　Y=-93,996・93,997
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸3.41m　短軸0.68m
長軸方向：Ｎ－29°－E
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

37号土坑

位置：２区中央の東寄り付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。北側に38号土坑、西側に42号土坑がある。
グリッド：１Ｍ－15
座標値：X=61,425～61,427　Y=-94,003・94,004
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：楕円形
規模：長軸1.46m　短軸0.74m

長軸方向：Ｎ－22°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

38号土坑
位置：２区中央の東寄り付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。南側に37号土坑､南西側に42号土坑がある。
グリッド：１Ｍ・１Ｎ－16
座標値：X=61,430・61,431　Y=-94,004・94,005
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：楕円形
規模：長軸1.25m　短軸1.17m
長軸方向：Ｎ－33°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

39号土坑
位置：２区中央のやや北寄りに位置し、２号畠(古代)と重複する。北側に40・41号土坑、北東側に36号土坑、南側に38号土坑がある。
グリッド：１Ｍ－17
座標値：X=61,437・61,438　Y=-94,002・94,003
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：楕円形
規模：長軸1.77m　短軸0.68m
長軸方向：Ｎ－63°－Ｗ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

40号土坑
位置：２区中央の北壁寄りに位置し、41号土坑および２号畠(古代)と重複する。南東側に36号土坑、南側に39号土坑がある。
グリッド：１Ｍ－18・19
座標値：X=61,443～61,446　Y=-94,001～94,003
検出状況：第１面調査時に検出された。重複する41号土坑との新旧は不明であるが、いずれの土坑も２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸2.88m　短軸0.68m
長軸方向：Ｎ－31°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

41号土坑
位置：２区中央の北壁寄りに位置し、40号土坑および２号畠(古代)と重複する。南東側に36号土坑、南側に39号土坑がある。
グリッド：１Ｍ－18・19
座標値：X=61,444・61,445　Y=-94,001～94,004
検出状況：第１面調査時に検出された。重複する40号土坑との新旧は不明であるが、いずれの土坑も２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸2.79m　短軸0.60m
長軸方向：Ｎ－86°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

42号土坑
位置：２区中央のやや南東寄りに位置し、２号畠(古代)と重複する。北東側に38号土坑、東側に37号土坑、西側に43号土坑がある。
グリッド：１Ｎ・１Ｏ－15
座標値：X=61,425～61,429　Y=-94,007～94,010
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形か
規模：長軸4.78m　短軸1.12m
長軸方向：Ｎ－35°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

43号土坑

位置：２区中央のやや南寄りに位置し、２号畠(古代)と重複する。北東側に38号土坑、東側に42号土坑、北西側に44号土坑がある。

グリッド：１Ｏ－15

座標値：X=61,426・61,427　Y=-94,013・94,014

検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。

形状：楕円形

規模：長軸1.64m　短軸0.65m

長軸方向：Ｎ－52°－Ｅ

埋没土：As-Kkを混在する。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

44号土坑

位置：２区中央のやや南寄りに位置し、南東側に43号土坑がある。

グリッド：１Ｏ・１Ｐ－15・16

座標値：X=61,428～61,430　Y=-94,014・94,015

検出状況：第１面調査時に検出された。

形状：楕円形

規模：長軸1.38m　短軸0.58m

長軸方向：Ｎ－23°－Ｅ

埋没土：As-Kkを混在する。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

45号土坑

位置：２区のほぼ中央付近に位置し、２号畠（古代）と重複する。

グリッド：１Ｏ－17

座標値：X=61,437～61,439　Y=-94,010～94,012

検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。

形状：長方形か

規模：長軸2.08m　短軸1.07m

長軸方向：Ｎ－21°－Ｅ

埋没土：As-Kkを混在する。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

46号土坑

位置：２区西側の北壁付近に位置し、47号土坑および２号畠(古代)と重複する。西側に近接して48号土坑がある。

グリッド：１Ｏ・１Ｐ－19・20

座標値：X=61,449～61,452　Y=-94,013～94,015

検出状況：第１面調査時に検出された。重複する47号土坑との新旧は不明であるが、いずれの土坑も２号畠より新しい。

形状：長楕円形

規模：長軸3.21m　短軸0.77m

長軸方向：Ｎ－33°－Ｅ

埋没土：As-Kkを混在する。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

47号土坑

位置：２区西側の北壁付近に位置し、46・48号土坑および２号畠(古代)と重複する。

グリッド：１Ｏ・１Ｐ－20

座標値：X=61,450・61,451　Y=-94,012～94,016

検出状況：第１面調査時に検出された。重複する46・48号土坑との新旧は不明であるが、いずれの土坑も２号畠より新しい。

形状：長楕円形

規模：長軸3.84m　短軸0.91m

長軸方向：Ｎ－68°－Ｗ

埋没土：As-Kkを混在する。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

48号土坑

位置：２区西側の北壁付近に位置し、47号土坑および２号畠(古代)と重複する。

グリッド：１Ｏ・１Ｐ－20

座標値：X=61,451　Y=-94,014～94,016

検出状況：第１面調査時に検出された。重複する47号土坑との新旧は不明であるが、いずれの土坑も２号畠より新しい。

形状：楕円形
規模：長軸(1.26)ｍ　短軸0.62m
長軸方向：Ｎ－83°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

49号土坑

位置：２区西側の北壁際に位置し、２号畠(古代)と重複する。南側に50号土坑がある。
グリッド：１Ｏ・１Ｐ－21
座標値：X=61,455～61,459　Y=-94,013～94,019
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸7.47m　短軸0.86m
長軸方向：Ｎ－62°－Ｗ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

50号土坑

位置：２区西側に位置し、２号畠(古代)と重複する。北側に49号土坑がある。
グリッド：１Ｐ・１Ｑ－19～21
座標値：X=61,445～61,456　Y=-94,016～94,022
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸12.06m　短軸0.45m
長軸方向：Ｎ－31°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

51号土坑

位置：２区中央のやや西寄りに位置し、52号土坑および２号畠(古代)と重複する。
グリッド：１Ｐ－18
座標値：X=61,442～61,444　Y=-94,017～94,019
検出状況：第１面調査時に検出された。重複する52号土坑との新旧は不明であるが、いずれの土坑も２号畠より新しい。
形状：楕円形
規模：長軸1.75m　短軸(1.56)ｍ
長軸方向：Ｎ－46°－Ｗ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

52号土坑

位置：２区中央のやや西寄りに位置し、51号土坑および２号畠(古代)と重複する。
グリッド：１Ｔ－18・19
座標値：X=61,443～61,447　Y=-94,015～94,018
検出状況：第１面調査時に検出された。重複する51号土坑との新旧は不明であるが、いずれの土坑も２号畠より新しい。
形状：長楕円形か
規模：長軸(4.05)ｍ　短軸1.11m
長軸方向：Ｎ－33°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

53号土坑

位置：２区中央の南寄りに位置し、54号土坑および２号畠(古代)と重複する。
グリッド：１Ｐ・１Ｑ－16
座標値：X=61,432・61,433　Y=-94,019～94,022
検出状況：第１面調査時に検出された。重複する54号土坑との新旧は不明であるが、いずれの土坑も２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸(3.10)ｍ　短軸1.17m
長軸方向：不明
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

54号土坑

位置：２区中央の南寄りに位置し、53号土坑および２号畠(古代)と重複する。

グリッド：１Ｑ－16

座標値：X=61,432・61,433　Y=-94,022～94,024

検出状況：第１面調査時に検出された。重複する53号土坑との新旧は不明であるが、いずれの土坑も２号畠より新しい。

形状：長楕円形

規模：長軸(2.18)ｍ　短軸0.94ｍ

長軸方向：不明

埋没土：As-Kkを混在する。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

55号土坑

位置：２区中央の西寄りに位置し、２号畠(古代)と重複する。南側に58号土坑、西側に59号土坑が近接する。

グリッド：１Ｑ・１Ｒ－17

座標値：X=61,431～61,439　Y=-94,023～94,026

検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。

形状：楕円形か

規模：長軸3.29ｍ　短軸1.91ｍ

長軸方向：Ｎ－65°－Ｅ

埋没土：As-Kkを混在する。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

56号土坑

位置:２区の西端に位置し、２号畠（古代）と重複する。西側に７号溝が近接する。

グリッド：１Ｑ・１Ｒ－20・21

座標値：X=61,454～61,458　Y=-94,024～94,028

検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。

形状：長楕円形

規模：長軸5.67ｍ　短軸0.88ｍ

長軸方向：Ｎ－56°－Ｗ

埋没土：As-Kkを混在する。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

57号土坑

位置：２区中央の南寄りに位置し、２号畠(古代)と重複する。東側に53・54号土坑が近接し、北西側に58号土坑がある。

グリッド：１Ｒ－16

座標値：X=61,431～61,433　Y=-94,025・94,026

検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。

形状：円形

規模：長軸1.37ｍ　短軸1.32ｍ

長軸方向：Ｎ－17°－Ｗ

埋没土：As-Kkを混在する。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

58号土坑

位置：２区中央の南寄りに位置し、２号畠(古代)と重複する。北側および北東側に55・59号土坑、南東側に57号土坑がある。

グリッド：１Ｒ－16・17

座標値：X=61,433～61,435　Y=-94,026～94,028

検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。

形状：楕円形

規模：長軸2.01ｍ　短軸0.90ｍ

長軸方向：Ｎ－31°－Ｅ

埋没土：As-Kkを混在する。

所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

59号土坑

位置：２区中央の西寄りに位置し、２号畠(古代)と重複する。東側に55号土坑が近接する。

グリッド：１Ｒ－17

座標値：X=61,438・61,439　Y=-94,025～94,027

検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。

形状：楕円形
規模：長軸1.65m　短軸0.71m
長軸方向：Ｎ－72°－Ｗ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

60号土坑
位置：３区の東側に位置し、２号畠(古代)と重複する。西側に61号土坑がある。
グリッド：１Ｓ－22・23
座標値：X=61,463～61,465　Y=-94,032・94,033
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：楕円形
規模：長軸2.20m　短軸0.85m
長軸方向：Ｎ－18°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

61号土坑
位置：３区の東側に位置し、２号畠(古代)と重複する。東側に60号土坑がある。
グリッド：１Ｓ・１Ｔ－22・23
座標値：X=61,461～61,466　Y=-94,033～94,036
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸4.79m　短軸0.85m
長軸方向：Ｎ－25°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

62号土坑
位置：３区の南隅に位置し、２号畠(古代)と重複する。西側に63号土坑が近接する。
グリッド：１Ｕ・１Ｖ－19
座標値：X=61,447・61,448　Y=-94,043～94,045
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長方形
規模：長軸1.63m　短軸0.85m
長軸方向：Ｎ－52°－Ｗ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

63号土坑
位置：３区の南隅に位置し、２号畠(古代)と重複する。東側に62号土坑が近接する。
グリッド：１Ｖ－19
座標値：X=61,447～61,449　Y=-94,045・94,046
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長方形
規模：長軸1.12m　短軸0.96m
長軸方向：Ｎ－58°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

64号土坑
位置：３区のほぼ中央に位置し、２号畠(古代)と重複する。西側に65号土坑、北西側に66号土坑がある。
グリッド：１Ｖ－22・23
座標値：X=61,463～61,469　Y=-94,045～94,048
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸5.76m　短軸0.94m
長軸方向：Ｎ－19°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

65号土坑
位置：３区のほぼ中央に位置し、２号畠(古代)と重複する。東側に64号土坑、北側に66号土坑がある。

グリッド：１Ｖ・１Ｗ－22・23
座標値：X=61,463～61,465　Y=-94,049～94,051
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：楕円形
規模：長軸2.73m　短軸1.11m
長軸方向：Ｎ－48°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

66号土坑
位置：３区のほぼ中央に位置し、２号畠(古代)と重複する。南東側に64号土坑、南側に65号土坑がある。
グリッド：１Ｖ・１Ｗ－23・24
座標値：X=61,467～61,470　Y=-94,048～94,052
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形か
規模：長軸4.78m　短軸1.20m
長軸方向：Ｎ－52°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

67号土坑
位置：３区の南壁中央付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。
グリッド：１Ｗ・１Ｘ－21
座標値：X=61,455～61,457　Y=-94,054～94,056
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長方形
規模：長軸2.18m　短軸1.06m
長軸方向：Ｎ－42°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

68号土坑
位置：３区の西側中央に位置し、１号畠(中世)および２号畠(古代)と重複する。
グリッド：１Ｘ－24
座標値：X=61,473・61,474　Y=-94,057・94,058
検出状況：第１面調査時に検出された。重複する両畠より新しい。
形状：長方形
規模：長軸1.25m　短軸0.56m
長軸方向：Ｎ－23°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

69号土坑
位置：３区の西隅に位置し、２号畠(古代)と重複する。
グリッド：２Ａ－23
座標値：X=61,468・61,469　Y=-94,072～94,074
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸2.42m　短軸0.49m
長軸方向：Ｎ－89°－Ｗ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

70号土坑
位置：４区東側の北壁付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。北側に71号土坑が近接する。
グリッド：１Ｙ－29
座標値：X=61,496・61,497　Y=-94,062・94,063
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：方形
規模：長軸0.93m　短軸0.73m
長軸方向：Ｎ－49°－Ｗ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

71号土坑

位置：４区東側の北壁付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。南側に70号土坑が近接する。
グリッド：１Ｙ－29
座標値：X=61,497・61,498　Y=-94,062・94,063
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長方形
規模：長軸2.08m　短軸0.81m
長軸方向：Ｎ－33°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

72号土坑

位置：４区東側のやや北寄りに位置し、２号畠(古代)と重複する。
グリッド：１Ｚ－28・29
座標値：X=61,492～61,496　Y=-94,066～94,068
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸4.44m　短軸0.65m
長軸方向：Ｎ－30°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

73号土坑

位置：４区東側の南壁付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。北側に75号土坑、西側に76号土坑がある。
グリッド：２Ａ・２Ｂ－24
座標値：X=61,472・61,473　Y=-94,073～94,078
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸5.00m　短軸0.54m
長軸方向：Ｎ－39°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

74号土坑

位置：４区東側のやや南寄りに位置し、２号畠(古代)と重複する。
グリッド：２Ａ・２Ｂ－26・27
座標値：X=61,482～61,486　Y=-94,074～94,077
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸4.79m　短軸0.77m
長軸方向：Ｎ－27°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

75号土坑

位置：４区東側の南壁付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。南側に73号土坑、西側に76号土坑がある。
グリッド：２Ｂ－24・25
座標値：X=61,474・61,475　Y=-94,076～94,078
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：楕円形
規模：長軸1.96m　短軸0.69m
長軸方向：Ｎ－76°－Ｗ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

76号土坑

位置：４区東側の南壁付近に位置し、２号畠(古代)と重複する。東側に73・75号土坑がある。
グリッド：２Ｂ・２Ｃ－24・25
座標値：X=61,472～61,475　Y=-94,078～94,081
検出状況：第１面調査時に検出された。２号畠と重複するが、２号畠より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸(2.89)m　短軸1.18m
長軸方向：Ｎ－44°－Ｅ

埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

77号土坑
位置：４区西側の北壁付近に位置し、北西側に78号土坑が近接する。
グリッド：２Ｂ－31
座標値：X=61,507～61,509　Y=-94,077～94,079
検出状況：第１面調査時に検出された。
形状：長楕円形
規模：長軸2.47m　短軸0.62m
長軸方向：Ｎ－48°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

78号土坑
位置：４区西側の北壁付近に位置し、南東側に77号土坑が近接する。
グリッド：２Ｂ－31・32
座標値：X=61,509・61,510　Y=-94,078・94,079
検出状況：第１面調査時に検出された。
形状：楕円形
規模：長軸1.46m　短軸0.42m
長軸方向：Ｎ－32°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

79号土坑
位置：４区中央の北西寄りに位置し、北側に80号土坑が近接する。
グリッド：２Ｃ・２Ｄ－30・31
座標値：X=61,502～61,507　Y=-94,082～94,085
検出状況：第１面調査時に検出された。
形状：長楕円形
規模：長軸4.44m　短軸0.58m
長軸方向：Ｎ－28°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

80号土坑
位置：４区西側の北壁付近に位置し、南側に79号土坑が近接する。
グリッド：２Ｃ－31
座標値：X=61,507～61,509　Y=-94,082～94,084
検出状況：第１面調査時に検出された。
形状：長楕円形
規模：長軸3.43m　短軸0.40m
長軸方向：Ｎ－39°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

81号土坑
位置：４区中央のやや西寄りに位置し、北側に82号土坑がある。
グリッド：２Ｄ－28・29
座標値：X=61,491～61,495　Y=-94,087～94,089
検出状況：第１面調査時に検出された。
形状：長楕円形
規模：長軸4.14m　短軸0.70m
長軸方向：Ｎ－34°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

82号土坑
位置：４区中央の西寄りに位置し、西側に83号土坑が近接する。
グリッド：２Ｄ・２Ｅ－29
座標値：X=61,497～61,499　Y=-94,088～94,090
検出状況：第１面調査時に検出された。
形状：長楕円形
規模：長軸3.50m　短軸0.48m
長軸方向：Ｎ－39°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を

混在することから、時期は中世以降と考えられる。

83号土坑

位置：４区中央の西寄りに位置し、東側に82号土坑が近接する。
グリッド：２Ｅ－29
座標値：X=61,496～61,499　Y=-94,090～94,093
検出状況：第１面調査時に検出された。
形状：長方形
規模：長軸3.57m　短軸1.01m
長軸方向：Ｎ－45°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

84号土坑

位置：４区中央の南寄りに位置し、東側に85号土坑が近接し、２号竪穴建物と重複する。
グリッド：２Ｄ－27
座標値：X=61,485・61,486　Y=-94,086・94,087
検出状況：第１面調査時に検出された。２号竪穴建物と重複するが、竪穴建物より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸2.30m　短軸0.74m
長軸方向：Ｎ－35°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

85号土坑

位置：４区中央の南寄りに位置し、西側に84号土坑が近接し、２号竪穴建物と重複する。
グリッド：２Ｃ－27
座標値：X=61,485～61,499　Y=-94,082・94,083
検出状況：第１面調査時に検出された。２号竪穴建物と重複するが、竪穴建物より新しい。
形状：長楕円形
規模：長軸1.14m　短軸0.40m
長軸方向：Ｎ－42°－Ｅ
埋没土：As-Kkを混在する。
所見・時期：検出面が第１面で、埋土に軽石(As-Kk)を混在することから、時期は中世以降と考えられる。

第３項　溝

検出された中世以降の溝は、第１面調査において２・３・７号溝とした３条を検出した。いずれも、埋土中にAs-Kkを混在することが特徴である。

以下、各溝ごとに記載する。(第47表　溝一覧を参照)

２号溝(第153図、第47表、PL.19)

位置：２区の東側に位置し、南南西から北北東方向に直線的に延び、２号畠と重複する。
グリッド：１Ｊ～１Ｎ－11～18
座標値：X=61,408～61,440　Y=-93,988～94,009
検出状況：第１面調査時に検出された。直線的に北北東方向に延びる溝で、底面は北側ほど低くなる。基本土層Ⅳ層となるAs-Kk上面から掘り込まれ、２号畠を壊していることから、その重複の新旧は本溝のほうが新しい。遺物等の出土はあるが、縄文時代のものである。
規模：長軸37.7m　短軸1.15m　深さ44cm
延伸方向：Ｎ－32°－Ｅ
埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。
所見・時期：検出面が第１面で、２号畠より新しく、埋土に軽石(As-Kk)を多量に含むことから、時期は中世と考えられる。

３号溝(第153図、第47表、PL.19)

位置：２区中央の南西壁際に位置し、１Ｒ－16グリッド付近を先端に大きく湾曲しながら南進する。２号畠と重複する。
グリッド：１Ｐ～１Ｒ－14～16
座標値：X=61,420～61,431　Y=-94,018～94,029
検出状況：第１面調査時に検出された。１Ｒ－16グリッド付近を先端に大きく湾曲しながら南進する溝で、先端は幅広いものの、検出された部分は僅かで詳細は不明。基本土層Ⅱ層上面から掘り込まれ、２号畠を壊していることから、重複の新旧は本溝のほうが新しい。遺物等の出土はない。
規模：長軸13.7m　短軸2.3～3.6m　深さ40cm
延伸方向：Ｎ－55°－Ｗ

埋没土：As-Kkと小礫を含む暗褐色土と黒褐色土を埋土とし、下位ほど小礫が多い。
所見・時期：検出面が第１面で、２号畠より新しいこと。掘り込み面が基本土層Ⅱ層上面にあることから、時期は中世以降でもより新しいと考えられる。

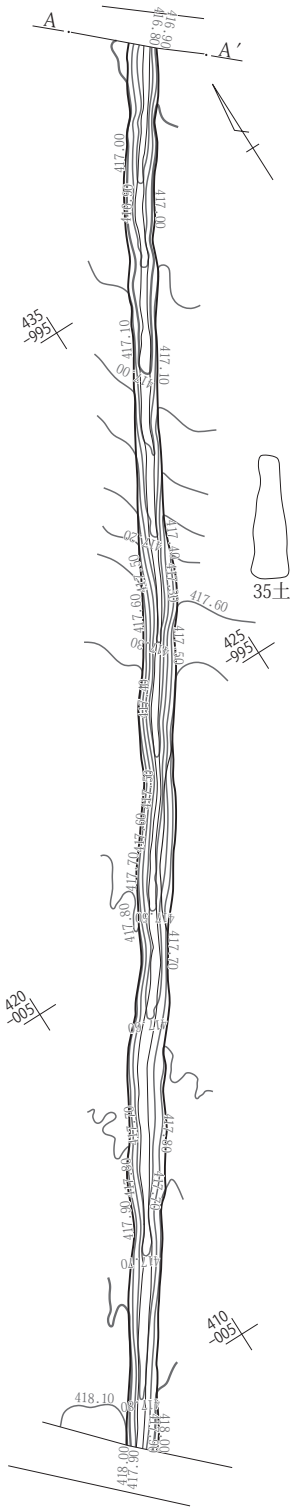
７号溝(第154図、第47表)
位置：２区と３区の区境に位置し、南南西から北北東方向に直線的に延び、２号畠と重複する。
グリッド：１Ｑ～１Ｓ－20～23
座標値：X=61,452～61,466　Y=-94,024～94,033
検出状況：第１面調査時に検出された。直線的に北北東方向に延びる溝で、底面は北側ほど低くなる。基本土層Ⅳ層となるAs-Kk上面から掘り込まれ、２号畠を壊していることから、その重複の新旧は本溝のほうが新しい。遺物等の出土はない。
規模：長軸15.6m　短軸1.0m　深さ42cm
延伸方向：Ｎ－35°－Ｅ
埋没土：小礫を含む黒褐色土を埋土とするが、下位には砂礫が多量。
所見・時期：検出面が第１面で、２号畠より新しいことから、時期は中世以降と考えられる。なお、先述の２号溝と平行する位置にあり、同時期の可能性もある。

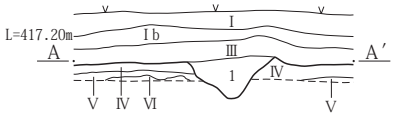
第４項　畠

検出された中世以降の畠は、第１面調査において３区に１区画を検出した。古代畠より新しく、埋土中にAs-Kkを混在することが特徴である。(第48表　畠一覧を参照)

１号畠(第155図、第48表、PL.34)
位置：３区西側の中央に位置し、本畠全体が古代の２号畠と重複し、本畠の中央付近に68号土坑が重複する。
グリッド：１Ｗ～１Ｙ－23～25
座標値：X=61,469～61,478　Y=-94,052～94,062
検出状況：第１面調査時に検出された。重複する２号畠とは畝間方向が大きく異なり、２号畠を壊していることから本畠のほうが新しい。本畠の区画は小さく、長さ9.28m、幅8.52mを測る長方形を呈し、溝状に併走する畝間は21条からなり、畝間の間隔も２号畠より狭く40.6cmを測る。As-Kkを混在する暗褐色土が、畝間の埋土となる。畝間の走行方向は西北西方向を向き、土地の傾斜方向に直行した向きと考えられる。また、重複する68号土坑との新旧は、遺構確認の際に本畠の方が旧いことが明らかであった。なお、遺物等の出土はない。
区画規模：長さ9.28m　幅8.52m
　　畝長8.40m　畝間間隔40.6cm前後
　　畝高４cm　　畝数22条
畝間方向：Ｎ－73°－Ｗ
所見・時期：検出面が第１面で、２号畠より新しく、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

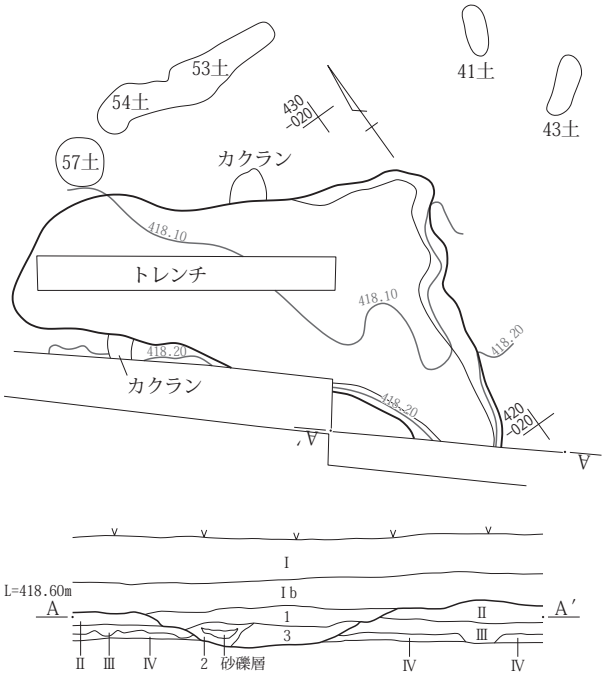
２号溝





２号溝
Ⅰ　黒褐色土　表土(耕作土)。As-Kkパミスを多量に含む。
Ⅰb　黒褐色土　Ⅰ層より明るい。
Ⅱ　暗赤褐色土　As-Kkパミスを多量に含み、やや赤味を帯びる。
Ⅲ　黒褐色土　As-Kk軽石を主体とする。
Ⅳ　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。
Ⅴ　褐灰色火山灰層　As-Bの一次堆積層。
1　黒褐色土　As-Kkパミスを主体とし、黒色土を含有する。

３号溝



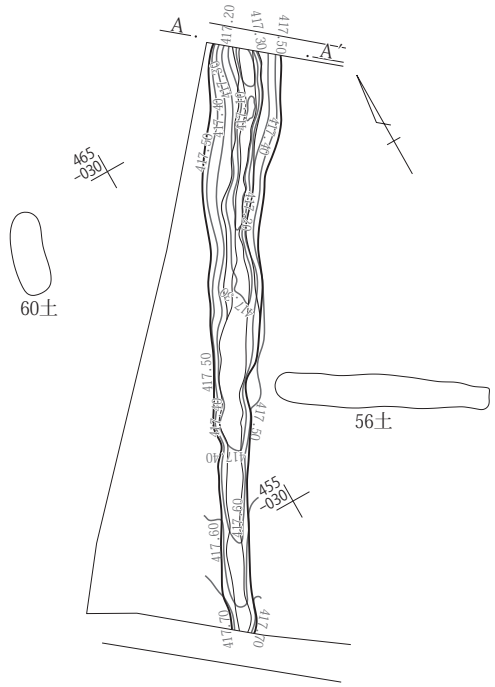
３号溝
Ⅰ　黒褐色土　表土(耕作土)。As-Kkパミスを多量に含む。
Ⅰb　黒褐色土　Ⅰ層より明るい。
Ⅱ　暗赤褐色土　As-Kkパミスを多量に含み、やや赤味を帯びる。
Ⅲ　黒褐色土　As-Kk軽石を主体とする。
Ⅳ　鈍い黄褐色軽石層　As-Kkの一次堆積層。
1　暗褐色土　As-Kkパミスや小礫を含み、砂粒をブロック状に含む。
2　暗褐色土　小礫を多く含み、中央部に砂礫層が見られる。
3　黒褐色土　２層より多く小礫を含む。

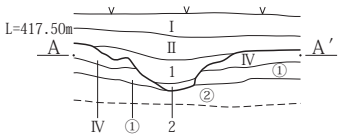
セクション図
0　1：100　5m

平面図
0　1：200　10m

第153図　２・３号溝　平・断面図

７号溝





７号溝
Ⅰ　黒褐色土　表土(耕作土)。As-Kkパミスを多量に含む。
Ⅱ　暗赤褐色土　As-Kkパミスを多量に含み、やや赤味を帯びる。
Ⅵ　黒褐色土　非常にきめ細かい土で、極僅かに小礫を含む。
1　黒褐色土　小石を多く含む。
2　黒褐色土　砂粒が多く、小石を極めて多く含む。

セクション図
0　1：100　5m

平面図
0　1：200　10m

第154図　７号溝　平・断面図

１号畠

0　1：100　5m

第155図　１号畠　平面図

第40表　竪穴建物一覧

遺構名	位置		平面形状	規模(m)				長軸方位	カマド					貯蔵穴	重複関係	時期/備考
	グリッド	座標値								位置/方位/規模(m)					長さ/幅/深さ(m)	(古→新)	
１号竪穴建物	1L・1M-12・13	X=61,413～61,418 Y=-93,996～94,001	長方形	長軸 短軸	5.03 4.46	深さ 床面積	0.20～0.34 20.20	N-０°-E		位置 長さ	東壁 0.70	方位 幅	N-４°-E 1.25		0.78/0.64/0.20		９世紀第２四半期
２号竪穴建物	2C・2D-26・27	X=61,481～61,488 Y=-94,980～94,088	長方形	長軸 短軸	6.03 5.69	深さ 床面積	0.43～0.80 (22.62)	N-56°-E		位置 長さ	東壁隅 0.65	方位 幅	N-94°-E (0.48)		0.91/0.79/0.34	84・85号土坑→２号竪穴建物	11世紀
３号竪穴建物	1E・1F-12・13	X=61,411～61,417 Y=-93,962～93,969	正方形	長軸 短軸	4.89 4.86	深さ 床面積	0.40～0.86 20.02	N-25°-W		位置 長さ	北東壁 2.14	方位 幅	N-65°-E 0.75		0.80/0.78/0.63	28号土坑→３号竪穴建物	６世紀
４号竪穴建物	1U・1V-20～22	X=61,453～61,460 Y=-94,040～94,047	正方形	長軸 短軸	5.88 5.82	深さ 床面積	0.55～0.85 (24.90)	N-58°-W		位置 長さ	南壁隅 (1.30)	方位 幅	N-16°-W (0.70)		－	４号竪穴建物→13号竪穴建物	11世紀
５号竪穴建物	1R～1T-17～19	X=61,437～61,445 Y=-94,028～94,036	不明	長軸 短軸	(6.63) 6.44	深さ 床面積	0.59～0.73 (26.65)	N-71°-W		位置 長さ	南西壁 2.00	方位 幅	N-３°-W 0.85		－		11世紀
６号竪穴建物	1W・1X-23～25	X=61,469～61,478 Y=-94,050～94,058	正方形	長軸 短軸	6.67 6.50	深さ 床面積	0.07～0.34 39.35	N-62°-E		位置 長さ	北西壁 1.30	方位 幅	N-28°-W 0.90		0.80/0.63/0.34		６世紀末～ ７世紀前半
７号竪穴建物	1U・1V-25・26	X=61,477～61,482 Y=-94,042～94,048	正方形	長軸 短軸	5.15 4.93	深さ 床面積	0.46～0.60 22.15	N-77°-E		位置 長さ	北西壁 1.53	方位 幅	N-16°-W 0.90		中段 0.60/0.37/0.58		６世紀後半
８号竪穴建物	1R・1S-19・20	X=61,449～61,452 Y=-94,028～94,032	不明	長軸 短軸	4.24 (1.55)	深さ 床面積	0.54～0.62 (3.60)	N-53°-W		位置 長さ	-	方位 幅	-		－		11世紀
９号竪穴建物	1W・1X-20・21	X=61,454～61,458 Y=-94,054～94,059	長方形	長軸 短軸	4.43 3.61	深さ 床面積	0.54～0.62 (11.71)	N-76°-W		位置 長さ	北東壁 1.33	方位 幅	N-16°-E 1.20		0.71/0.65/0.18	67号土坑→９号竪穴建物	７世紀第３四半期
10号竪穴建物	1Z・2A-23	X=61,465～61,469 Y=-94,067～94,071	不明	長軸 短軸	(3.41) (2.50)	深さ 床面積	0.12～0.20 (6.13)	N-46°-E		位置 長さ	北東壁 1.02	方位 幅	N-59°-E (0.96)		－		７世紀第４四半期～ ８世紀第１四半期
11号竪穴建物	1O～1Q-19～21	X=61,448～61,457 Y=-94,014～94,022	正方形	長軸 短軸	7.04 6.78	深さ 床面積	0.28～0.35 43.17	N-63°-E		位置 長さ	北東壁 2.28	方位 幅	N-63°-E 1.10		0.74/0.53/0.59		６世紀後半～ ７世紀初頭
12号竪穴建物	1N・1O-19・20	X=61,447～61,451 Y=-94,007～94,012	方形	長軸 短軸	3.98 3.32	深さ 床面積	0.24～0.33 9.71	N-33°-E	1	位置 長さ	北東壁 2.12	方位 幅	N-54°-E (0.70)	1	1.18/0.93/0.02		７世紀第３四半期～ ８世紀第１四半期
									2	位置 長さ	北西壁 0.65	方位 幅	N-39°-W 0.60	2	0.88/0.65/0.18		
13号竪穴建物	1U・1V-21	X=61,455～61,459 Y=-94,041～91,046	方形	長軸 短軸	4.75 4.28	深さ 床面積	0.06～0.44 15.87	N-63°-E		位置 長さ	北東壁 1.06	方位 幅	N-86°-W 0.75		－	４号竪穴建物→13号竪穴建物	６世紀後半

第41表　掘立柱建物一覧

遺構名	位置		平面形状	規模(m)				桁行方位	重複関係 (古→新)	時期/備考
	グリッド	座標値		桁行	梁行	床面積	柱間距離			
１号掘立柱建物	1Q-22・1R-22	X=61,461・61,462 Y=-94,024～94,026	長方形	１間 1.94	１間 1.20	2.29	桁行 1.94 梁行 1.18～1.20	N－77°－W	１号掘立柱建物 →２号掘立柱建物	古代
２号掘立柱建物	1R-22・23	X=61,461～61,465 Y=-94,025～94,029	六角形	２間 3.00	２間 2.51	7.94	桁行 1.44～1.48 梁行 1.18～1.28	N－23°－E	１号掘立柱建物 →２号掘立柱建物	古代
３号掘立柱建物	1R・1S-23	X=61,467～61,469 Y=-94,028～94,031	(長方形)	(２間) (3.18)	(１間) (1.46)	(4.96)	桁行 1.58～1.60 梁行 1.46	N－90°－E		古代

第42表　柱穴列一覧

遺構名	位置		規模(m)			列方位	時期	備考
	グリッド	座標値	長さ	柱間数	柱間距離			
１号柱穴列	1F・1G-13	X=61,415～61,418 Y=-93,965～93,970	5.81	４間	1.23～1.66	N－58°－E	６世紀代	３号竪穴建物に伴う付属構造

第43表　土坑一覧

遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係(古→新)	時期/備考
	グリッド	座標値		長軸(径)	短軸	深さ			
１号土坑	1L－17・18	X=61,437～61,440 Y=-93,995～93,998	楕円形	3.54	2.06	0.66	N－72°－W		縄文時代晩期末葉
２号土坑	1E－7	X=61,385・61,386 Y=-93,960・93,961	円形	1.35	1.30	0.52	－		縄文時代晩期末葉
３号土坑	1D－7	X=61,387・61,388 Y=-93,958・93,959	楕円形	1.08	1.00	0.42	N－19°－E		縄文時代晩期末葉
４号土坑	1D・1E－7	X=61,386～61,388 Y=-93,959・93,960	楕円形	1.20	0.82	0.26	N－41°－W		縄文時代晩期末葉
５号土坑	1G－8	X=61,391～61,393 Y=-93,971～93,973	楕円形か	(2.33)	2.09	0.99	N－19°－E	17・18土　新旧不明	縄文時代晩期末葉
６号土坑	1G－7	X=61,385・61,386 Y=-93,971～93,973	楕円形	1.37	0.90	0.32	N－68°－W		縄文時代
７号土坑	1D－8	X=61,391・61,392 Y=-93,957・93,958	楕円形	1.22	1.06	0.53	N－11°－E		縄文時代晩期末葉 ～弥生時代前期
８号土坑	1I－9	X=61,395～61,397 Y=-93,981・93.982	円形	1.45	1.42	0.29	－		縄文時代
９号土坑	1I－9	X=61,398・61,399 Y=-93,980～93,982	円形	1.38	1.31	0.35	－		縄文時代
10号土坑	1I－10	X=61,400～61,402 Y=-93,978～93,980	楕円形	1.58	1.43	0.56	N－51°－W		縄文時代晩期末葉
11号土坑	1I－8	X=61,393・61,394 Y=-93,981・93.982	円形	1.07	1.03	0.25	－		縄文時代
12号土坑	1D－9・10	X=61,398～61,400 Y=-93,958～93,960	円形	1.69	1.62	0.71	－		縄文時代晩期末葉
13号土坑	1C・1D－9	X=61,397・61,398 Y=-93,954～93,956	楕円形	1.76	1.10	0.34	N－62°－W		縄文時代
14号土坑	1C－9・10	X=61,399・61,400 Y=-93,954	不明	1.30	0.57	0.50	－		縄文時代
15号土坑	1E－8	X=61,392 Y=-93,963	楕円形	0.56	0.48	0.90	N－85°－W		縄文時代
16号土坑	1J－9・10	X=61,399・61,400 Y=-93,985・93,986	円形	1.12	1.12	0.20	－		縄文時代晩期末葉
17号土坑	1G－8	X=61,390・61,391 Y=-93,971～93,973	楕円形	1.42	1.07	0.75	N－77°－E	５土　新旧不明	縄文時代
18号土坑	1G－8	X=61,392・61,393 Y=-93,971・93,972	不明	1.07	(0.70)	0.79	N－62°－W	５土　新旧不明	縄文時代
19号土坑	1F－9	X=61,397～61,399 Y=-93,968・93,969	楕円形	1.80	1.11	0.65	N－16°－W		縄文時代晩期末葉
20号土坑	1F－10	X=61,401・61,402 Y=-93,966・93,967	楕円形	1.40	0.88	0.19	N－24°－W		縄文時代晩期末葉
21号土坑	1E－5	X=61,379 Y=-93,960・93,961	円形	0.68	0.64	0.42	－		縄文時代
22号土坑	1E－5	X=61,375・61,376 Y=-93,962・93,963	円形	1.00	0.97	0.83	－		縄文時代
23号土坑	1D・1E－5	X=61,376・61,377 Y=-93,959・93,960	楕円形	0.64	0.55	0.42	N－70°－W		縄文時代
24号土坑	1D・1E－4	X=61,371～61,373 Y=-93,958～93,960	楕円形	(2.46)	(1.99)	0.58	N－52°－W		縄文時代晩期末葉
25号土坑	1C－3・1D－3	X=61,366～61,368 Y=-93,953～93,955	楕円形	1.76	1.48	－	N－５°－E		中世以降
26号土坑	1D－3	X=61,366・61,367 Y=-93,955～93,957	楕円形	0.83	0.68	－	N－36°－E		中世以降
27号土坑	1D－3・4	X=61,368～61,375 Y=-93,955～93,958	隅丸長方形	6.22	2.49	－	N－18°－W		中世以降
28号土坑	1E・1F－12	X=61,640～61,415 Y=-93,963～93,970	長楕円形	8.27	0.98	－	N－59°－W		中世以降
29号土坑	1F・1G－9	X=61,395～61,399 Y=-93,968～93,972	長方形	3.71	2.90	－	N－38°－E		中世以降
30号土坑	1I・1J－9・10	X=61,397～61,403 Y=-93,981～93,986	長楕円形	8.28	5.83	－	N－36°－E	31土　新旧不明	中世以降
31号土坑	1I・1J－9	X=61,396～61,399 Y=-93,984～93,987	長楕円形	3.34	0.85	－	N－54°－W	30土　新旧不明	中世以降
32号土坑	1I－15・16	X=61,428～61,431 Y=-93,980～93,984	長楕円形	(3.66)	0.58	－	N－59°－W	32土→33土	中世以降
33号土坑	1I－15・16	X=61,427～61,430 Y=-93,983・93,984	長楕円形	3.07	0.71	－	N－７°－E	32土→33土	中世以降
34号土坑	1J－15	X=61,427～61,429 Y=-93,985～93,987	長方形	1.99	1.06	－	N－26°－E		中世以降

遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係(古→新)	時期/備考
	グリッド	座標値		長軸(径)	短軸	深さ			
35号土坑	1K－15	X=61,426～61,429 Y=-93,991～93,994	長方形	3.27	1.01	－	N－22°－E		中世以降
36号土坑	1L－18	X=61,440～61,444 Y=-93,996・93,997	長楕円形	3.41	0.68	－	N－29°－E		中世以降
37号土坑	1M－15	X=61,425～61,427 Y=-94,003・94,004	楕円形	1.46	0.74	－	N－22°－E		中世以降
38号土坑	1M・1N－16	X=61,430・61,431 Y=-94,004・94,005	楕円形	1.25	1.17	－	N－33°－E		中世以降
39号土坑	1M－17	X=61,437・61,438 Y=-94,002・94,003	楕円形	1.77	0.68	－	N－63°－W		中世以降
40号土坑	1M－18・19	X=61,443～61,446 Y=-94,001～94,003	長楕円形	2.88	0.68	－	N－31°－E	41土　新旧不明	中世以降
41号土坑	1M－18・19	X=61,444・61,445 Y=-94,001～94,004	長楕円形	2.79	0.60	－	N－86°－E	40土　新旧不明	中世以降
42号土坑	1N・1O－15	X=61,425～61,429 Y=-94,007～94,010	長楕円形か	4.78	1.12	－	N－35°－E		中世以降
43号土坑	1O－15	X=61,426・61,427 Y=-94,013・94,014	楕円形	1.64	0.65	－	N－52°－E		中世以降
44号土坑	1O・1P－15・16	X=61,428～61,430 Y=-94,014・94,015	楕円形	1.38	0.58	－	N－23°－E		中世以降
45号土坑	1O－17	X=61,437～61,439 Y=-94,010～94,012	長方形か	2.08	1.07	－	N－21°－E		中世以降
46号土坑	1O・1P－19・20	X=61,449～61,452 Y=-94,013～94,015	長楕円形	3.21	0.77	－	N－33°－E	47・48土　新旧不明	中世以降
47号土坑	1O・1P－20	X=61,450・61,451 Y=-94,012～94,016	長楕円形	3.84	0.91	－	N－68°－W	46・48土　新旧不明	中世以降
48号土坑	1O・1P－20	X=61,451 Y=-94,014～94,016	楕円形	(1.26)	0.62	－	N－83°－E	46・47土　新旧不明	中世以降
49号土坑	1O・1P－21	X=61,455～61,459 Y=-94,013～94,019	長楕円形	7.47	0.86	－	N－62°－W		中世以降
50号土坑	1P・1Q－19～21	X=61,445～61,456 Y=-94,016～94,022	長楕円形	12.06	0.45	－	N－31°－E		中世以降
51号土坑	1P－18	X=61,442～61,444 Y=-94,017～94,019	楕円形	1.75	(1.56)	－	N－46°－W	52土　新旧不明	中世以降
52号土坑	1T－18・19	X=61,443～61,447 Y=-94,015～94,018	長楕円形か	(4.05)	1.11	－	N－33°－E	51土　新旧不明	中世以降
53号土坑	1P・1Q－16	X=61,432・61,433 Y=-94,019～94,022	長楕円形	(3.10)	1.17	－	－	54土　新旧不明	中世以降
54号土坑	1Q－16	X=61,432・61,433 Y=-94,022～94,024	長楕円形	(2.18)	0.94	－	－	53土　新旧不明	中世以降
55号土坑	1Q・1R－17	X=61,431～61,439 Y=-94,023～94,026	楕円形か	3.29	1.91	－	N－65°－E		中世以降
56号土坑	1Q・1R－20・21	X=61,454～61,458 Y=-94,024～94,028	長楕円形	5.67	0.88	－	N－56°－W		中世以降
57号土坑	1R－16	X=61,431～61,433 Y=-94,025・94,026	円形	1.37	1.32	－	N－17°－W		中世以降
58号土坑	1R－16・17	X=61,433～61,435 Y=-94,026～94,028	楕円形	2.01	0.90	－	N－31°－E		中世以降
59号土坑	1R－17	X=61,438・61,439 Y=-94,025～94,027	楕円形	1.65	0.71	－	N－72°－W		中世以降
60号土坑	1S－22・23	X=61,463～61,465 Y=-94,032・94,033	楕円形	2.20	0.85	－	N－18°－E		中世以降
61号土坑	1S・1T－22・23	X=61,461～61,466 Y=-94,033～94,036	長楕円形	4.79	0.85	－	N－25°－E		中世以降
62号土坑	1U・1V－19	X=61,447・61,448 Y=-94,043～94,045	長方形	1.63	0.85	－	N－52°－W	63土　新旧不明	中世以降
63号土坑	1V－19	X=61,447～61,449 Y=-94,045・94,046	長方形	1.12	0.96	－	N－58°－E	62土　新旧不明	中世以降
64号土坑	1V－22・23	X=61,463～61,469 Y=-94,045～94,048	長楕円形	5.76	0.94	－	N－19°－E		中世以降
65号土坑	1V・1W－22・23	X=61,463～61,465 Y=-94,049～94,051	楕円形	2.73	1.11	－	N－48°－E		中世以降
66号土坑	1V・1W－23・24	X=61,467～61,470 Y=-94,048～94,052	長楕円形か	4.78	1.20	－	N－52°－E		中世以降
67号土坑	1W・1X－21	X=61,455～61,457 Y=-94,054～94,056	長方形	2.18	1.06	－	N－42°－E		中世以降
68号土坑	1X－24	X=61,473・61,474 Y=-94,057・94,058	長方形	1.25	0.56	－	N－23°－E		中世以降

遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係(古→新)	時期/備考
	グリッド	座標値		長軸(径)	短軸	深さ			
69号土坑	2A－23	X=61,468・61,469 Y=-94,072～94,074	長楕円形	2.42	0.49	－	N－39°－W		中世以降
70号土坑	1Y－29	X=61,496・61,497 Y=-94,062・94,063	方形	0.93	0.73	－	N－49°－W		中世以降
71号土坑	1Y－29	X=61,497・61,498 Y=-94,062・94,063	長方形	2.08	0.81	－	N－33°－E		中世以降
72号土坑	1Z－28・29	X=61,492～61,496 Y=-94,066～94,068	長楕円形	4.44	0.65	－	N－30°－E		中世以降
73号土坑	2A・2B－24	X=61,472・61,473 Y=-94,073～94,078	長楕円形	5.00	0.54	－	N－39°－E		中世以降
74号土坑	2A・2B－26・27	X=61,482～61,486 Y=-94,074～94,077	長楕円形	4.79	0.77	－	N－27°－E		中世以降
75号土坑	2B－24・25	X=61,474・61,475 Y=-94,076～94,078	楕円形	1.96	0.69	－	N－76°－W		中世以降
76号土坑	2B・2C－24・25	X=61,472～61,475 Y=-94,078～94,081	長楕円形	(2.89)	1.18	－	N－44°－E		中世以降
77号土坑	2B－31	X=61,507～61,509 Y=-94,077～94,079	長楕円形	2.47	0.62	－	N－48°－E		中世以降
78号土坑	2B－31・32	X=61,509・61,510 Y=-94,078・94,079	楕円形	1.46	0.42	－	N－32°－E		中世以降
79号土坑	2C・2D－30・31	X=61,502～61,507 Y=-94,082～94,085	長楕円形	4.44	0.58	－	N－28°－E		中世以降
80号土坑	2C－31	X=61,507～61,509 Y=-94,082～94,084	長楕円形	3.43	0.40	－	N－39°－E		中世以降
81号土坑	2D－28・29	X=61,491～61,495 Y=-94,087～94,089	長楕円形	4.14	0.70	－	N－34°－E		中世以降
82号土坑	2D・2E－29	X=61,497～61,499 Y=-94,088～94,090	長楕円形	3.50	0.48	－	N－39°－E		中世以降
83号土坑	2E－29	X=61,496～61,499 Y=-94,090～94,093	長方形	3.57	1.01	－	N－45°－E		中世以降
84号土坑	2D－27	X=61,485・61,486 Y=-94,086・94,087	長楕円形	2.30	0.74	－	N－35°－E	２住→84土	中世以降
85号土坑	2C－27	X=61,485～61,499 Y=-94,082～94,083	長楕円形	1.14	0.40	－	N－42°－E	２住→85土	中世以降

第44表　ピット一覧

遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	時期/備考
	グリッド	座標値		長軸(径)	短軸	深さ		
１号ピット	1R-22	X=61,461・61,462 Y=-94,027・94,028	楕円形	0.47	0.41	0.19	N－22°－E	２号掘立柱建物Ｐ８へ変更
２号ピット	1R-22	X=61,461 Y=-94,026	不整形	0.68	0.54	0.35	N－19°－E	１号掘立柱建物Ｐ４・２号掘立柱建物Ｐ１へ変更
３号ピット	1Q-22	X=61,460・61,461 Y=-94,024	隅丸方形	0.60	0.36	0.25	N－３°－E	１号掘立柱建物Ｐ１へ変更
４号ピット	1R-22	X=61,462・61,463 Y=-94,026	隅丸方形	0.58	0.44	0.28	N－18°－E	１号掘立柱建物Ｐ３・２号掘立柱建物Ｐ２へ変更
５号ピット	1Q-22	X=61,462 Y=94,024	隅丸方形	0.46	0.38	0.18	N－11°－E	１号掘立柱建物Ｐ２へ変更
６号ピット	1R-22	X=61,464 Y=-94,025	隅丸方形	0.53	0.45	0.26	N－58°－W	２号掘立柱建物Ｐ３へ変更
７号ピット	1R-22・1R-23	X=61,464・61,465 Y=-94,026・94,027	楕円形	0.51	0.37	0.20	N－60°－W	２号掘立柱建物Ｐ４へ変更
８号ピット	1R-23	X=61,465 Y=-94,027・94,028	楕円形	0.48	0.40	0.22	N－86°－W	２号掘立柱建物Ｐ５へ変更
９号ピット	1R-22	X=61,463・61,464 Y=-94,028	不整形	0.54	0.53	0.25	N－83°－W	２号掘立柱建物Ｐ６へ変更
10号ピット	1R-23	X=61,467・61,468 Y=-94,028	楕円形か	(0.27)	0.40	0.14	－	３号掘立柱建物Ｐ１へ変更
11号ピット	1R-23・1S-23	X=61,467・61,468 Y=-94,029・94,030	楕円形	0.49	0.43	0.33	N－51°－W	３号掘立柱建物Ｐ２へ変更
12号ピット	1S-23	X=61,467・61,468 Y=-94,031	隅丸方形	0.38	0.36	0.26	N－17°－E	３号掘立柱建物Ｐ３へ変更
13号ピット	1S-23	X=61,469 Y=-94,031	隅丸方形	0.37	0.35	0.24	N－87°－W	３号掘立柱建物Ｐ４へ変更

遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	時期/備考
	グリッド	座標値		長軸(径)	短軸	深さ		
14号ピット	1R-21	X=61,457 Y=-94,025・94,026	楕円形	0.52	0.46	0.14	N－14°－W	
15号ピット	1Q-20・1Q-21	X=61,454 Y=-94,023	不整形	0.45	0.42	0.08	N－49°－E	

第45表　配石一覧

遺構名	位置			規模(m)		長軸方位	時期	備考
	グリッド	座標値		長軸(径)	短軸			
1号配石	1D-11	X=61,406	Y=-93,957	－	－	－	縄文	埋設土器を伴う
2号配石	1D-11	X=61,407	Y=-93,958	－	－	－	縄文	
3号配石	1D-9	X=61,399	Y=-93,956	－	－	－	縄文	
4号配石	1E-8	X=61,394	Y=-93,960	－	－	－	縄文	
5号配石	1F-6	X=61,382	Y=-93,967	－	－	－	縄文	
6号配石	1F-6	X=61,383	Y=-93,968・93,969	－	－	－	縄文	
7号配石	1E-11	X=61,407	Y=-93,963・93,964	－	－	－	縄文	
8号配石	1G-9	X=61,399	Y=-93,970	－	－	－	縄文	
9号配石	1E-10	X=61,400～61,402	Y=-93,963・93,964	1.47	0.88	－	縄文	埋設土器を伴う
10号配石	1E-6	X=61,381・61,382	Y=-93,963～93,965	1.36	0.85	－	縄文	中央に立石
11号配石	1F-9	X=61.398・61,399	Y=-93,965	0.86	0.57	－	縄文	
12号配石	1D-11・12	X=61.409・61,410	Y=-93,957・93,958	－	－	－	縄文	立石
13号配石	1D-11	X=61.408・61,409	Y=-93,956・93,957	1.37	0.94	－	縄文	

第46表　集石一覧

遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	時期	備考
	グリッド	座標値		長軸(径)	短軸	深さ			
1号集石	1H-10	X=61,402～61,404 Y=-93,975～93,977	円形	2.27	2.22	0.11～0.17	－	古代	
2号集石	1K-12・13	X=61,413～61,420 Y=-93,990～93,993	不整形	6.5	3.15	－	N－20°－W	古代	
3号集石	1K・1L-14・15	X=61,420～61,427 Y=-93,991～93,995	不整形	7.9	3.0	－	N－18°－W	古代	
4号集石	1K・1L-16・17	X=61,429～61,438 Y=-93,994～93,997	不整形	9.0	4.0	－	N－11°－E	古代	
5号集石	1S・1T-17	X=61,437～61,439 Y=-94,034・94,035	台形状	2.33	1.05	－	－	古代	5号竪穴建物に付属する
6号集石	1T～1V-21・22	X=61,456～61,463 Y=-94,045・94,037	弧状	10.06	1.2	－	－	古代	4号竪穴建物に付属する

第47表　溝一覧

遺構名	位　置		規模(m)			走向方向	走向状態	時期/備考
	グリッド	座標値	長さ	上面幅	深さ			
1号溝	1D～1G-4～13	X=61,374～61,419 Y=-93,958～93,971	45.0	1.1～2.6	0.12～0.24	N－18°－E	緩く蛇行	古代
2号溝	1J～1N-11～18	X=61,408～61,440 Y=-93,988～94,009	37.7	1.15	0.44	N－32°－E	直線的	中世以降
3号溝	1P～1R-14～16	X=61,420～61,431 Y=-94,018～94,029	13.7	2.3～3.6	0.4	N－55°－W	屈曲	中世以降
4号溝	1I・1J-7～11	X=61,390～61,408 Y=-93,981～93,987	19.3	2.3～3.2	0.35	N－11°－E	蛇行	縄文/5号溝と同一溝
5号溝	1I～1L-12～17	X=61,412～61,439 Y=-93,986～93,997	16.0	1.6～3.4	0.49	北　N－45°－E 南　N－38°－W	蛇行	縄文/4号溝と同一溝
4・5号溝	1I～1L-7～17	X=61,390～61,439 Y=-93,981～93,997	46.30	1.6～7.7	0.35～0.49	北　N－45°－E 南　N－11°－W	蛇行	縄文
6号溝	1D～1G-4～13	X=61,371～61,415 Y=-93,955～93,971	38.5	4.8～7.6	0.45～0.6	北　N－35°－E 南　N－16°－W	蛇行	縄文
7号溝	1Q～1S-20～23	X=61,452～61,466 Y=-94,024～94,033	15.6	1.0	0.42	N－35°－E	直線的	中世以降

第48表　畠一覧

遺構名	位　置		平面形状	規模(m・㎡)			畝の状況					時期
	グリッド	座標値		長軸	短軸	面積	畝方向	畝長(m)	畝幅(cm)	畝高(cm)	畝数	
1号畠	1W～1Y-23～25	X=61,469～61,478 Y=-94,052～94,062	長方形	9.28	8.52	79.07	N－73°－W	8.40	40.6	4.0	22	中世
2号畠	1E～2C-7～30	X=61,388～61,502 Y=-93,960～94,084	不明	－	(4.6)	－	N－43°－E	(37.05)	71.5	5.0	(183)	古代
3号畠	1C～1E-5～13	X=61,378～61,415 Y=-93,950～93,962	不明	(38.0)	(8.30)	(362.49)	N－90°－E	(9.08)	70.7	4.0	(52)	古代

第５章　自然科学分析

第１節　分析の経緯と結果

本調査で出土した縄文時代の遺物の大半は、１区で検出された蛇行する６号溝からであることは先述した通りである。溝内には、埋設土器を伴う配石遺構や立石を伴う配石遺構が含まれ、それらが溝の上・下位に検出された状況から、整理作業を進める中で溝の埋没過程に時間差が想定された。また、出土土器は、縄文時代晩期終末に位置づけられる千網式ないし氷式から沖遺跡段階ぐらいまでと考えられ、遺跡は比較的時間幅の短い期間と推測することができる。しかし、群馬県内におけるこの時期の実態には不明な点が多く、土器型式として千網式が設定されているものの、本遺跡出土土器はその範疇とは異なる資料が多い。また、同時期の良好な資料・遺跡が、極めて少ないことも不明瞭な一因である。

そうした中、出土した土器の中でも煮沸具である甕や鉢類の器種の多くには、土器の表面に煤や炭化物を付着させている例が多く、年代測定を行うには良好な状態にあった。そこで、放射性炭素年代測定(AMS法)による分析で、溝の上位と下位に出土した土器の時間差を数値年代で示し、土器型式の変化・変遷との整合性を確認することを目的として業務委託を実施した。

測定試料８点を対象に行った年代測定(AMS法)の結果、第41図28(測定番号：IAAA-210473　試料名：取上No.1601)を除く７点の^{14}C年代は、2520±20yrBPから2460±20yrBPの間にまとまった。暦年較正年代で見ると、６号溝下位から出土した第36図４(測定番号：IAAA-210476　試料名：取上No.2299)が最も古く2,522±22yrBP、同下位出土の第39図18(測定番号：IAAA-210474　試料名：取上No.2037)が2,515±21yrBPで同様に古い年代の値を示している。逆に新しい年代を示した試料では、同溝上位から出土した第24図１(測定番号:IAAA-210471　試料名:取上No.330)の2,456±21yrBPと最も新しく、それと第40図26(測定番号：IAAA-210477　試料名：取上No.2476)が2,460±21yrBPとする極めて近い年代値を示している。これらの年代値は、縄文時代晩期末葉頃の年代観と矛盾せず、土器の特徴からする時期とも概ね一致する。このことから、６号溝の埋没過程には約60年ほどの時間差があることが確認され、土器型式の推移がその間に進行したことが明らかとなった。

因みに、最も新しい年代値を示した炭化物を付着させた第24図１は、先述した１号配石下に出土した埋設土器であり、その出土状況からも、６号溝がほぼ埋没した状態で埋設と配石がなされた最も新しい遺構であることが追認できた。

なお、第41図28(測定番号：IAAA-210473　試料名：取上No.1601)の暦年較正用^{14}C年代は、表２に示したように2,661±21yrBPの値を示し、土器の特徴からみた時期より古い年代値となった。他の７点に比べてδ^{13}Cが高く、胴部内面の炭化物が海洋由来炭素の食物コゲであった可能性も出てきており、その詳細は今分析では不明である。

以下、年代測定の報告を掲載する。

第２節　放射性炭素年代測定報告（AMS測定）

１　測定対象試料

測定の対象試料は、土器に付着した炭化物８点である(表１)。

※ 表１には、測定番号のほかに、試料名の欄に発掘調査時の遺物取上げNo、採取場所の欄には出土位置および遺構名と層位、()内に炭化物の採取部位を記した。

２　化学処理工程

(１)メス・ピンセットを使い、付着物、混入物を取り除く。
(２)アセトンで処理を行う(AC)。
(３)酸-アルカリ-酸(AAA：Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ(1M)の塩酸(HCl)を用いる。ア

ルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

(４)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO_2)を発生させる。

(５)真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(６)精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(７)グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度($^{13}C/^{12}C$)、^{14}C濃度($^{14}C/^{12}C$)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxⅡ)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

(１)$\delta^{13}C$は、試料炭素の^{13}C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表１)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(２)^{14}C年代(Libby Age：yrBP)は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。^{14}C年代は$\delta^{13}C$によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差(±1σ)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

(３)pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい(14Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も$\delta^{13}C$によって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

(４)暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差(1σ＝68.3％)あるいは２標準偏差(2σ＝95.4％)で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}C$補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線(Reimer et al. 2020)を用い、OxCalv4.4較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

５　測定結果

測定結果を表１、２に示す。

試料８点のうち、取上No.1601を除く７点の^{14}C年代は、2520±20yrBP（取上No.2037、取上No.2299)から2460±20yrBP（取上No.330、取上No.2476)の間にまとまる。暦年較正年代(1σ)は、７点の中で最も古い取上No.2299が775～572cal BCの間に４つの範囲、最も新しい取上No.330が748～484cal BCの間に４つの範囲で示される。縄文時代晩期後葉から末葉頃に相当し(小林編2008、小林2017)、土器の特徴から考えられる時期とおおむね一致する。

取上No.1601の^{14}C年代は2660±20yrBP、暦年較正年代(1σ)は826～802cal BCの範囲で示される。縄文時代晩期中葉頃に相当し(小林編2008、小林2017)、土器の特徴から考えられる時期よりやや古い年代値となった。この試料に関しては、他の７点に比べて$\delta^{13}C$が高いことが注意される。胴部内面の炭化物であるため、食物のコゲ

である可能性が高い。食物として海産物などが含まれれば、海洋由来炭素によりδ^{13}Cが高くなるとともに、本来より古い年代値が示される可能性がある。しかし、δ^{13}Cが他に比べてやや高い程度であり、AMSによるδ^{13}Cが試料の安定同位体比をあまり正確に示さないとされることも考慮すれば、海洋由来炭素の影響は明確ではない。

試料の炭素含有率は、取上No.325が43％、取上No.2299が30％、他の試料はすべて50％以上だった。取上No.2299の炭素含有率は炭化物としてやや低い値で、土の混入が避けられなかったことによると見られるため、測定された炭素の由来に若干注意を要する。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林謙一 2017 縄文時代の実年代　―土器型式編年と炭素14年代―, 同成社

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), 725-757

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表１　放射性炭素年代測定結果(δ^{13}C補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-210470	取上 No.325	1F-7 グリッド　上位（頸部外面）	土器付着炭化物	AC+AaA	**-25.09 ± 0.22**	**2,480 ± 20**	**73.45 ± 0.20**
IAAA-210471	取上 No.330	1D-11 グリッド　上位(1 号配石埋設土器)（胴部上位外面）	土器付着炭化物	AC+AAA	**-25.81 ± 0.20**	**2,460 ± 20**	**73.65 ± 0.20**
IAAA-210472	取上 No.336	1D-12 グリッド　上位（頸部外面）	土器付着炭化物	AC+AaA	**-26.33 ± 0.20**	**2,500 ± 20**	**73.29 ± 0.20**
IAAA-210473	取上 No.1601	1D-11 グリッド（胴部内面）	土器付着炭化物	AC+AAA	**-24.36 ± 0.18**	**2,660 ± 20**	**71.80 ± 0.20**
IAAA-210474	取上 No.2037	1F-6 グリッド　下位（口縁直下～頸部外面）	土器付着炭化物	AC+AaA	**-26.53 ± 0.26**	**2,520 ± 20**	**73.11 ± 0.20**
IAAA-210475	取上 No.2110	1F-8 グリッド（口縁～胴部外面）	土器付着炭化物	AC+AAA	**-26.44 ± 0.18**	**2,480 ± 20**	**73.40 ± 0.20**
IAAA-210476	取上 No.2299	1F-7 グリッド　下位（肩部内面）	土器付着炭化物	AC+AAA	**-28.81 ± 0.27**	**2,520 ± 20**	**73.05 ± 0.21**
IAAA-210477	取上 No.2476	1F-5 グリッド　下位（口縁部内面）	土器付着炭化物	AC+AaA	**-28.54 ± 0.19**	**2,460 ± 20**	**73.62 ± 0.20**

［IAA 登録番号：#A774］

表２　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-210470	2,480 ± 20	73.43 ± 0.20	2,478 ± 21	752calBC - 722calBC (15.8%) 707calBC - 684calBC (11.9%) 668calBC - 664calBC (2.2%) 652calBC - 633calBC (9.7%) 622calBC - 613calBC (4.4%) 591calBC - 545calBC (24.3%)	768calBC - 516calBC (95.4%)
IAAA-210471	2,470 ± 20	73.53 ± 0.20	2,456 ± 21	748calBC - 688calBC (30.4%) 665calBC - 643calBC (10.9%) 566calBC - 513calBC (21.1%) 503calBC - 484calBC (5.9%)	753calBC - 682calBC (32.9%) 669calBC - 631calBC (14.0%) 625calBC - 610calBC (2.4%) 594calBC - 456calBC (41.2%) 444calBC - 417calBC (4.9%)
IAAA-210472	2,520 ± 20	73.09 ± 0.20	2,495 ± 21	758calBC - 745calBC (7.3%) 691calBC - 678calBC (6.8%) 673calBC - 665calBC (4.0%) 645calBC - 551calBC (50.2%)	771calBC - 720calBC (19.0%) 708calBC - 662calBC (19.3%) 653calBC - 543calBC (57.1%)
IAAA-210473	2,650 ± 20	71.89 ± 0.19	2,661 ± 21	826calBC - 802calBC (68.3%)	895calBC - 875calBC (8.6%) 835calBC - 794calBC (86.9%)
IAAA-210474	2,540 ± 20	72.88 ± 0.19	2,515 ± 21	772calBC - 750calBC (17.0%) 685calBC - 667calBC (13.7%) 637calBC - 588calBC (33.1%) 579calBC - 571calBC (4.4%)	778calBC - 737calBC (22.1%) 695calBC - 662calBC (18.4%) 649calBC - 546calBC (55.0%)
IAAA-210475	2,510 ± 20	73.18 ± 0.20	2,484 ± 21	755calBC - 732calBC (11.2%) 699calBC - 681calBC (8.7%) 670calBC - 664calBC (2.8%) 650calBC - 608calBC (20.3%) 595calBC - 545calBC (25.2%)	769calBC - 539calBC (95.4%)
IAAA-210476	2,590 ± 20	72.48 ± 0.20	2,522 ± 22	775calBC - 750calBC (20.2%) 685calBC - 667calBC (13.7%) 636calBC - 588calBC (31.2%) 579calBC - 572calBC (3.2%)	781calBC - 740calBC (25.5%) 694calBC - 663calBC (18.1%) 648calBC - 547calBC (51.8%)
IAAA-210477	2,520 ± 20	73.08 ± 0.20	2,460 ± 21	749calBC - 686calBC (33.7%) 666calBC - 640calBC (12.6%) 570calBC - 515calBC (22.0%)	755calBC - 681calBC (34.4%) 670calBC - 607calBC (18.9%) 596calBC - 458calBC (38.8%) 441calBC - 419calBC (3.3%)

［参考値］

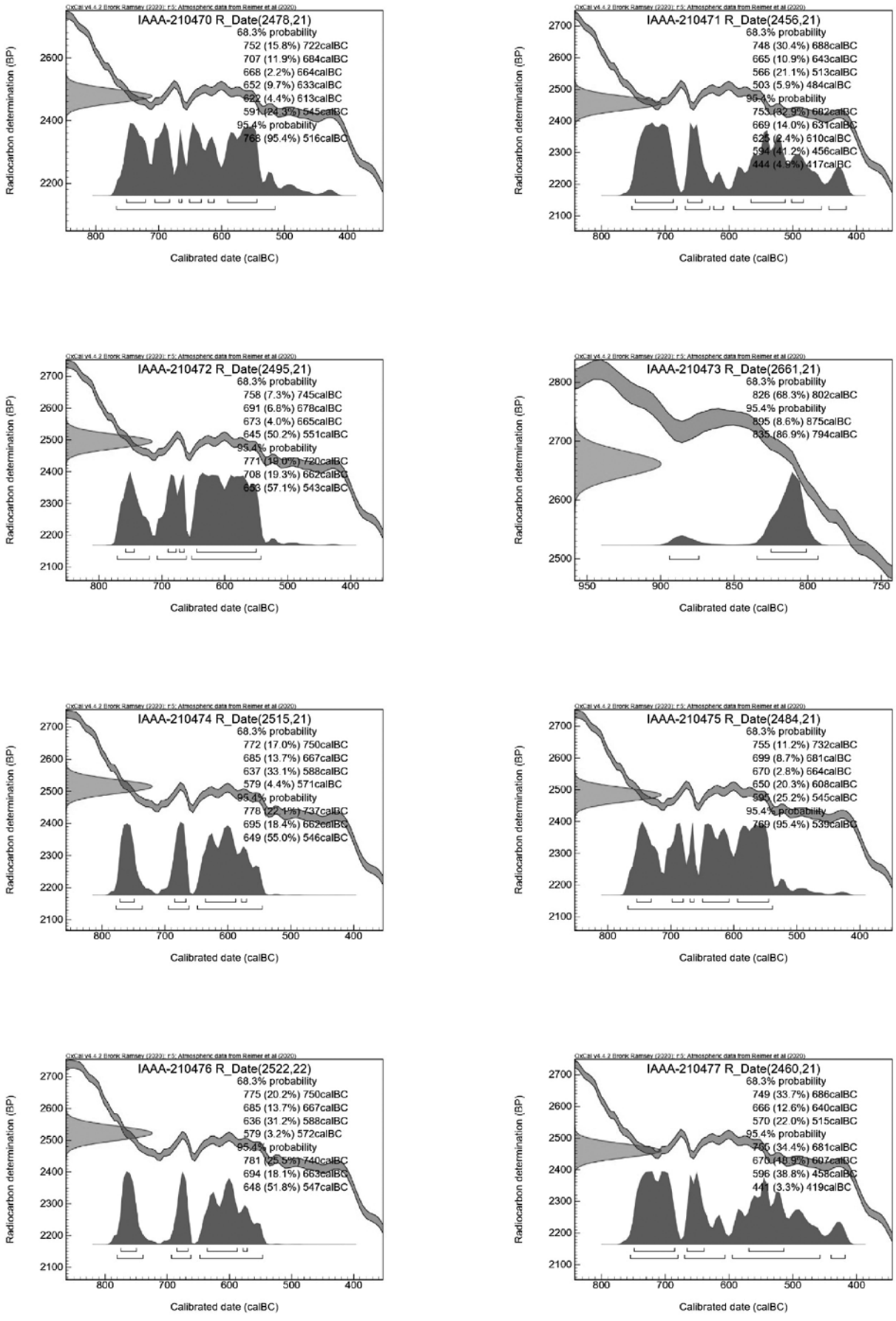


図１　暦年較正年代グラフ(参考)

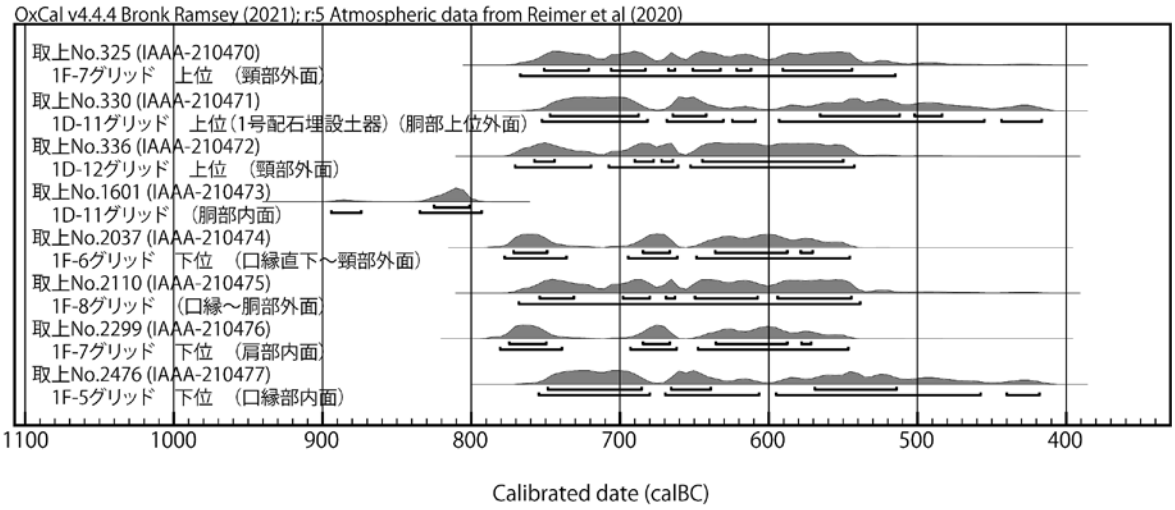


図２　暦年較正年代グラフ（マルチプロット図、参考）

第６章　調査の成果(総括)

第１節　縄文時代終末から弥生時代にかかる土器について

先述してきたように、６号溝から出土した土器は、浮線文系の文様や変形工字文、三角形連繋文、そして細密な条痕や縄文を施す在地的な甕・深鉢を主に、鉢・浅鉢・壺といった各器種からなり、縄文時代晩期終末から弥生時代前期にかかる土器群であることが明らかとなった。県内における当該期の良好な資料に、縄文時代晩期終末では高崎市倉渕町所在の三ノ倉落合遺跡、弥生時代前期の遺跡としては高崎市上ノ久保遺跡や藤岡市沖Ⅱ遺跡が知られている。沖Ⅱ遺跡は再葬墓として著名であるが、本遺跡の１号配石とは様相が異なる。しかも、沖Ⅱ遺跡の特徴的な壺形土器は確認されていない。また、本遺跡での特異な器形の深鉢ないし鉢器形と同様な土器群を出土させる遺跡は、県内に見当たらないのが現状である。ここでは、長野県はもとより、新潟県をも含めた広い地域にまで視野を広げ、土器への今後の検討課題を示しておきたい。

出土土器は、甕・深鉢が圧倒的に多く、それに鉢・浅鉢・壺といった各器種が加わるが、浅鉢の量も比較的多い(但し、全体量からの数量把握ではない)。また、壺には、太い貝殻条痕や波状文が施された東海地方の水神平式や遠賀川式が含まれ、水神平式の出土量も多い。そして、精製土器への赤彩や、煤・焦げといった炭化物の土器への付着が多いことも特筆できる。

では、出土土器の中でも特徴的な器形に注目すると、第61図298の短く外反した口縁下の頸部が括れ、頸部下となる胴部上半が膨らみ、屈曲して胴部下半となる２段構成の特異な器形は、正に鉢器形に胴下半が取り付いた器形で、筒形土器として東北地方中部に分布し、新潟県での緒立式にも見ることができる。また、同様な器形には第61図297・299も挙げられ、第40図26も類似器形を呈する。特に61図297は、浅鉢形土器Ｂ－２類とした第68図434に胴下半が取り付いた器形を呈する。他に、胴部下半を欠く第61図289・290についても(掲載した図は下半を復元しているが)、同様な器形である可能性は高い。

次に浅鉢形土器に注目してみたい。口縁下に１条の凹線を巡らせる一群とした浅鉢Ｂ－２類の多くは、体部に縄文を施しているのが特徴で、出土量もある。同様な浅鉢形土器は、長野県氷遺跡や沖Ⅱ遺跡でもあまり例はなく、浅鉢鉢形土器自体が少ない。

一方の緒立式は、変形工字文の定着と文様表出技法の沈線化、器種の増加、地文が条痕文から縄文主体へ転換するとされることから、本遺跡での浅鉢への縄文施文も緒立式の影響が考えられよう。

以上、出土土器は在地土器を主に、新潟・南東北系の緒立式や東海系の水神平式、遠賀川式が共伴することから、弥生時代前期に至っていることは明らかである。しかし、これらの土器に沖Ⅱにみられるような壺は伴っていないことも事実で、その要因は地域差あるいは時間差のどちらかであろう。そうした中での緒立式の存在・影響は、この地域での該期には、それまでの交渉地域とは異なる地域との交渉が起きたことになる。こうした状況を踏まえると、今後の該期の研究に新たな展開を期待される。

また、溝上位から出土した配石下の埋設土器は、土器棺とも考えられ、再葬墓を彷彿とさせる。これは、弥生時代中期の再葬墓・岩櫃山式土器で著名な岩櫃山鷹の巣遺跡よりも古い時期の例ということであり、同地域における墓制(再葬)形態を考える上でも重要と思われる。

他方､緒立式の存在から新潟方面との交渉は明らかで、土器以外にも大きく影響を与えていたことは想像に難い。この時期の新潟県内の御井戸遺跡や耳取遺跡、さらには青田遺跡においては、居住の建物が竪穴建物から掘立柱建物へと変遷している。つまり、こうした建物構造の変化を考えれば、本遺跡での建物も掘立柱建物であった可能性は極めて高い。

第２節　土偶について

県内における縄文時代晩期終末から弥生時代前期の土偶の出土例は、ほとんど知られていないのが現状で、その存在すら疑わしかった。そこで本項では、本遺跡出土

の土偶の特徴についてまとめておく。

出土した土偶には、この時期にあっても中実と中空の両者の土偶が存在する。しかも､中空土偶は大型である。先ず、中実土偶についてであるが、土偶の肩部と腕の付け根部および腰部と膝部に刺突を充填した大きな肥厚を設けた表現は、この時期の極めて特徴的な強調表現と言えよう。この肩部と腕の付け根部の表現は、後述の中空土偶にも同様である。また、顔面の表現では、円形の顔面中央に凹みが一つという、顔表現の簡略化されることが挙げられよう。

次に、中空土偶である。東北地方からの遮光器土偶以外に、関東地方の晩期には中空みみづく土偶が知られている。この中空みみづく土偶は、埼玉県赤城遺跡出土の土偶が著名で、群馬県では矢島遺跡が知られ、本遺跡の西隣の唐堀遺跡でも１片出土していることが近年知られた。しかし、本遺跡の中空土偶は、そうした中空みみづく土偶とは細部が異なる。しかも、時期的にも赤城遺跡等の例より新しい時期にあたる土偶である。全体像を知ることはできないが、その特徴は肩部と腕の付け根部に刺突を充填した肥厚部分を設けていることで、中実土偶と同様な表現がなされている点からも、両者が同時期の土偶であることが解る。つまり、中空みみづく土偶の系譜を引く、より新しい晩期終末・弥生前期にかかる時期の中空土偶ということになる。

こうした状況は、今回の調査で初めて解かったことである。さらには、鯨面土偶の出土もあった。頭部だけの出土であったが、中実の大型土偶であることが予測される。顔面の円形形状および顔面表現は、鯨面土器の顔面形状・表現とほぼ同様で、頭部が円形であることは第88図２にも共通する。

第３節　ま と め

本書で報告する万木沢Ｂ遺跡は、岩櫃山を北東に望む吾妻川右岸の段丘面に位置し、段丘東側に万木沢川を挟んで四戸遺跡と四戸の古墳群、西側には段丘面を違えて唐堀遺跡が隣接する。その段丘面を東西に貫くように発掘調査が行われ、これまで知られることの少なかった、多くの新たな資料が得られた。

縄文時代前期前葉には四戸遺跡に集落が知られ、唐堀遺跡では後期後葉から晩期後葉にかけて、そして本遺跡では晩期終末から弥生時代前期にかけての集落遺跡となる。しかし、この時期は掘立柱建物が主流と考えられることから、多くの縄文遺跡にみられる竪穴建物は検出されていない。また、出土土器からする本遺跡の時期は、唐堀遺跡に続く時期であり、むしろ唐堀遺跡に居住した縄文人が移り住んだ遺跡とも考えられる。出土遺構では、１号配石の埋設土器は土器棺とも考えられ、再葬墓を彷彿とさせる。岩櫃山山頂下の鷹の巣遺跡より古い段階の埋葬形態として、その変遷を考える上で重要となる。一方、土器については、先述してきたように、長野県の東信地域での氷式と群馬県での千網式とが混在する形で在地土器を形成し、そこに東北地方南部の影響を受けた新潟県の緒立式が加わり、さらに東海系の特徴的な貝殻条痕を施す水神平式、僅かではあるが遠賀川式土器が共伴することが明らかとなった。しかも、沖Ⅱ式が伴っていないことも解った。土偶についても、新たな展開を迎えた。それは、この時期にも中実土偶と中空土偶の両者があり、中空土偶は大型で、群馬県矢島遺跡や埼玉県赤城遺跡からの中空みみづく土偶とは細部が異なる。しかも、時期的に新しい土偶である。さらには、鯨面土偶の出土もあった。こうした状況は、今回の調査で初めて解かったことである。

古墳時代の６世紀から７世紀前半にかけての竪穴建物は５軒、律令期となる７世紀後半から８世紀にかけての竪穴建物は３軒、９世紀の竪穴建物は１軒、11世紀の竪穴建物は４軒と建物軒数は少ないが、これは西側の四戸遺跡に付随する遺跡の位置的な性格によるものと考えられる。ただ、四戸遺跡は10世紀の遺構を最後に11世紀の遺構は存在していないことからすると、本遺跡での11世紀の遺構は四戸遺跡に後続する集落の最後の姿ということが言えよう。一方、浅間山の火山灰に覆われた古代畠は、本遺跡を含めた周辺遺跡の調査で検出されており、１度目となる天仁元(1108)年のAs-Ｂ降下後は耕地復旧を試みるものの、２度目のAs-Kk(12世紀前半に降下とされる)の降下量は厚く、耕地復旧はされていない。